（公財） 大阪府文化財センター調査報告書　第 230 集

東大阪市・八尾市

池島・福万寺遺跡15

（福万寺Ⅱ期地区 09－2 調査区）

一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書

2012 年 9 月

公益財団法人　大阪府文化財センター

（公財） 大阪府文化財センター調査報告書　第 230 集

東大阪市・八尾市

池島・福万寺遺跡15

（福万寺Ⅱ期地区 09－2 調査区）

一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書

公益財団法人 大阪府文化財センター

１．第 13－２面東半

２．第 13－２面 1500 住居２

巻頭カラー

３．第 14－２面 1791 土器１

４．第 14－１面 1208 土器１

序　　文

本書は、当センターが平成元年から進めてまいりました、恩智川治水緑地建設に伴う池島・福万寺遺跡の発掘調査のうち、東大阪市側にあたる池島Ⅱ期地区で行った、平成21～23年度の発掘調査報告書です。

池島・福万寺遺跡は、現代の水田風景の中に、古代に区画された条里制地割りを良好に残す遺跡として知られていました。

そこに恩智川治水緑地建設の計画が持ち上がり、それに伴う調査が開始されて以降、縄文時代後期から近世に至る遺構面が20面以上、累々と重なっているのが確認され、広大な面積で長大な期間の土地利用の変遷が確かめられる遺跡として全国的に知られるようになりました。

中でも、弥生時代に水田稲作文化が波及して以来、連綿と作られ続けた水田の遺構が、その水利体系も含めた形で確かめられ、平安時代以降は、東西南北に整然と区画された条里制地割りの変遷が追え、中世以降、その地割り内に出現する島畠など、時代毎の発展の様子が明らかになってきました。

その調査は、それらの遺構面の積み重なりを埋没させてきた、洪水の繰り返しを遡るものでもあります。また、その間にも噴砂や層の変形などの地震の痕跡も幾つも発見されました。

この土地に暮らした人々が、どのような災害に遭い、そしてそれをどのように克服し、自らの生活の基盤を再建してきたかを示す成果が、この調査により蓄積されてきたとも言えます。

今回の調査では、平成20～22年度の調査で発見された弥生時代前期の集落に続き、弥生時代中期の集落が発見され、弥生時代に広大な水田という生産域を開いた人々の、居住域の一端が把握できるようになりました。当遺跡の弥生時代の社会像を、より深く理解していく端緒がつかめたと言えます。

長年、池島・福万寺遺跡の調査が継続的に行われ、その間多くの成果が見られてきましたが、恩智川治水緑地建設に伴う調査は、今回の調査をもって一旦中断する事と相成りました。

それでも、今までの成果が多くの人々の「学ぶ楽しさ」の糧となり、歴史の資料として活かされ、社会に還元して行く事を願ってやみません。

最後に、調査にあたり、大阪府寝屋川水系改修工営所、大阪府教育委員会、東大阪市教育委員会などの関係諸機関、ご指導・ご助言を賜った多くの方々、そしてご理解とご協力を賜った多くの地元の皆様に感謝申し上げるとともに、今後とも当センターの調査事業に、より一層のご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成24年 9 月

公益財団法人　大阪府文化財センター

理事長　田　邊　征　夫

例　　言

1　本書は、大阪府東大阪市池島町と八尾市福万寺町にまたがる地域に計画された恩智川治水緑地建設に伴う池島・福万寺遺跡Ⅱ期地区（09 － 2）調査区の発掘調査報告書である。

2　調査は、大阪府寝屋川水系改修工営所から財団法人（現：公益財団法人）大阪府文化財センターが一級河川恩智川治水緑地池島・福万寺遺跡Ⅱ発掘調査（その 12）として平成 21 年 6 月 1 日から平成 23 年 6 月 30 日までの間委託を受け、平成 21 年 8 月 24 日から平成 23 年 5 月 31 日まで現地調査を行った。その後、一級河川恩智川治水緑地池島・福万寺遺跡Ⅱ遺物整理（その 2）として、平成 23 年 7 月 1 日から平成 24 年 9 月 28 日までの間委託を受け遺物整理作業を行い、平成 24 年 9 月本書の刊行をもって完了した。

3　調査は以下の体制で実施した。

［調査］

平成 21 年 8 月 24 日～平成 22 年 3 月 31 日

調査部長兼調査課長　福田英人、調整グループ長　金光正裕、調査グループ長　寺川史郎、調査グループ主幹兼主査（池島総括）　小野久隆、副主査　三宮昌弘、専門調査員　入江正則

平成 22 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日

調査部長兼調査課長　福田英人、調整グループ長　江浦洋、調整グループ主幹（調整総括）　岡本茂史、調査グループ長　岡戸哲紀、調査グループ主幹（池島・福万寺総括）　金光正裕、副主査　三宮昌弘、専門調査員　入江正則

［調査・基礎整理］

平成 23 年 4 月 1 日～平成 23 年 6 月 30 日

調査課長　江浦洋、調整グループ長　岡本茂史、調査グループ長　岡戸哲紀、主査（池島・福万寺総括）　森屋美佐子、副主査　三宮昌弘、専門調査員　入江正則

［整理作業］

平成 23 年 7 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日

調査課長　江浦洋、調整グループ長　岡本茂史、調査グループ長　岡戸哲紀、主査（池島・福万寺総括）　森屋美佐子、副主査　三宮昌弘

平成 24 年 4 月 1 日～平成 24 年 6 月 30 日

調査部長　江浦洋、調整課長　岡本茂史、調査課長　岡戸哲紀、主査（池島・福万寺総括）　森屋美佐子、副主査　三宮昌弘

4　本書で用いた現場写真は調査担当者が撮影した。遺物写真撮影に関しては、調査課（南部）久禮孝志が担当した。

5　現地調査の実施及び遺物整理にあたっては、東大阪市教育委員会、大阪府教育委員会など関係諸機関、池島町自治会など地元関係各位をはじめ、多くの方々からご指導ならびにご協力を賜った。記して謝意を表したい。

6　調査の実施にあたっては、自然分野からの分析として、植物遺体同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。その結果は第 4 章に掲載した。

7　本書の編集・執筆は三宮昌弘が行った。

8　本調査に関わる資料は、公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されん事を希望する。

凡　　例

1　本書で用いる標高は全て東京湾平均海面（T.P. 値）を使用している。単位はmで表記している。

2　本書に掲載した全体図・遺構図などの座標は全て世界測地系に基づく平面直角座標系第Ⅵ系を使用している。単位は全て m で、表記は省略してある。

3　方位は全て座標北で表示する。真北は座標北より西に 6° 49′、磁北は東に 0° 12′振っている。

4　発掘調査及び遺物整理については当センターの『遺跡調査基本マニュアル』（暫定版）に準拠した。調査区は地区割りの第Ⅰ区画Ｈ６、第Ⅱ区画１・20N・O にかかる。

5　土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2004 年度版　農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人　日本色彩研究所色彩監修を使用した。土質の記載法に関しては第３章第１節末尾に述べる記載法に統一してある。

6　遺構番号は種類に関係なく通し番号で付け、現地調査時点から変更していない。種類名はその後変更したものもある。また、住居・建物・土器は種類名の後に、遺構面ごとにその種類で番号を付与したものもある。

7　挿図の縮尺は、全体図が 400 分の１、遺構平面図が 40 もしくは 80 分の１、遺構断面図が 20 分の１を基本とする。遺物は土器・陶磁器が３分の１、打製石器が実物大を基本とする。ただし、例外もあるので、図に付したスケールを参照されたい。

8　遺物実測図に関しては、強い屈曲は実線、弱い屈曲は開け幅１㎜以上の二つ開き破線で、調整境は、開け幅 0.5 ㎜で、異種調整境は一つ開き破線、同種調整境は二つ開き破線で示す。釉・煤などの範囲は点線で示す。推定ライン断面の粘土接合痕なども点線で示す。断面は須恵器が黒塗り、他は白空きとする。

9　層・面の呼称に関しては、今回の調査のものには冒頭に「第」を冠し、既往の調査のものはそれを略して区別している。

「生駒西麓産胎土」の認定に関しては、胎土の色調ではなく、胎土内砂粒に、石英・長石に匹敵するほどの量の角閃石があり、かつ、黒雲母も含まれ、チャートが含まれないものとした。

出土弥生土器の破片数の記載では、分類項目の数の次に、カッコ内に数字のみ記載するのは、その項目内の生駒西麓産胎土の破片数である。

時期区分では、初頭・前葉～末葉の五期区分と前半・後半の二期区分を併用している。ただし、弥生時代中期の前～後葉は土器編年のⅡ～Ⅳ様式に対応した三期区分である。

10　既往の調査の報告書からの引用は鍵カッコをつけて示し、適切でないと思われる語彙も、あえて変更していない。

11　写真図版の遺物は、図版内での大きさで揃え、縮尺は統一していない。

12　参考文献は第５章「まとめ」の末尾に記した。遺物の同定・編年観も主にそれらに拠る。

挿　図　目　次

図 1　池島・福万寺遺跡調査区位置図 …… 1
図 2　池島・福万寺遺跡の調査区配置図 …… 2
図 3　国土座標地区割図 …… 4
図 4　周辺遺跡分布図 …… 7
図 5　池島･福万寺遺跡 09-2　X=-149,900 ライン（西半）
断面図…… 12
図 6　池島･福万寺遺跡 09-2　X=-149,900 ライン（東半）
断面図 …… 13
図 7　十六ノ坪・十七ノ坪　坪境　断面図 …… 47
図 8　二十ノ坪・二十一ノ坪境　十六ノ坪・二十一ノ坪境
断面図 …… 50
図 9　十六ノ坪内　東落段差（近世 ~ 現代）
断面図 …… 52
図 10　第 1b 面溝状土坑（1b 土坑）出土遺物…… 54
図 11　第 1b 面　61 溝状土坑出土石器 …… 55
図 12　第 2-1 面　全体図 …… 57・58
図 13　第 2-1 面・第 2-3 面　遺構出土遺物 …… 59
図 14　第 2 層 ~ 第 5 層　包含遺物 …… 62
図 15　第 2-3 面（3-1 面検出）
229 溝出土木製品 …… 64
図 16　第 2-3 面　全体図 …… 65・66
図 17　第 2-3 面　149・172・174・175・176 島畠
断面図 …… 67
図 18　第 2-3 面　160 島畠・第 3 ～ 5 面　231 島畠・
第 6 面　315 島畠　断面図 …… 69
図 19　第 2-3 面　161 島畠・第 3 ～ 5 面　232 島畠・
第 6 面　318 島畠・第 3 面　234 段差・第 4 ～
5 面　255 島畠・第 6 面　310 島畠
断面図 …… 70
図 20　第 3-1 面　全体図 …… 75・76
図 21　第 3・5・6・8 面　遺構出土遺物…… 77
図 22　第 4 面　全体図 …… 81・82
図 23　第 5 面　全体図 …… 85・86
図 24　第 6 面　全体図 …… 91・92
図 25　第 6 層　包含遺物 …… 95
図 26　第 8 面　全体図 …… 99・100
図 27　第 8 面　遺構断面位置図 …… 104
図 28　第 8 面　溝　断面図 …… 105
図 29　第 8 面　350 土坑・351 溝　断面図
（Y=-34,000 ライン）…… 107
図 30　第 8・10-1 面　412 土坑・413 溝
断面図 …… 108
図 31　第 6・8 層　包含遺物 …… 110
図 32　第 10-1 面（8b 面重複）　全体図 … 113・114
図 33　第 10-1 面・第 10-2 面　遺構出土遺物 … 116
図 34　第 10-1 面　遺構断面位置図 …… 117
図 35　第 10-1 面　遺構断面図 …… 118
図 36　第 10-1 面　718 落込床面ピット
瓦器椀　出土状況 …… 119
図 37　第 8・10-1 層～第 12-2b 層　包含遺物 … 122
図 38　10-2 面　全体図 …… 125・126
図 39　第 11 面　全体図 …… 127・128
図 40　第 11 面　1094 土器 1　出土状況 …… 129
図 41　第 11 面　1094 土器 1 …… 130
図 42　第 11 面　耕地区画想定復元図 …… 131
図 43　第 12-1 面　全体図 …… 133・134
図 44　第 12-1・2 面　1145・1147 畦畔・
1146 溝（水路）　断面図 …… 136
図 45　第 12・13 層　微高地縁辺部大畦畔
断面図 …… 138
図 46　第 12-1 面　1136 溝　断面図 …… 139
図 47　第 12-2 面　1209 ピット
土器 1　出土状況 …… 140
図 48　第 12-2 面　全体図 …… 141・142
図 49　第 12-2 面　遺構出土遺物（その 1）…… 143
図 50　第 12-2 面　1200 溝埋土上面
木製鋤　出土状況…… 144
図 51　第 12-2 面　遺構出土遺物（その 2）…… 145
図 52　第 12-2b 層　包含石器 …… 146
図 53　第 13-1 面　全体図 …… 149・150
図 54　第 13-1 面　1322・1334 畦畔・
1333 溝・1380 土坑　断面図 …… 151
図 55　第 13-1 面　遺構出土遺物（その 1）…… 152
図 56　第 13-1 面　遺構出土遺物（その 2）…… 153

図 57　第 13-1 層　包含遺物（その 1）……156
図 58　第 13-1 層　包含遺物（その 2）……158
図 59　第 13-1 層　包含遺物（その 3）……159
図 60　第 13-1 層　包含遺物（その 4）……160
図 61　第 13-2 面　全体図 …… 163・164
図 62　第 13-2 面　1310 住居 1　床面・
　　断面図 ……165
図 63　第 13-2 面　1310 住居 1 床面遺構
　　断面図 ……166
図 64　第 13-2 面　1310 住居 1 床面
　　1311 炉内　台石 ……167
図 65　第 13-2 面　1500 住居 2　床面・断面図（上）、
　　底面・炉底面（下）……168
図 66　第 13-2 面　1500 住居 2　床面土器出土状況・
　　遺構断面図 ……170
図 67　第 13-2 面　1500 住居 2
　　出土遺物（その 1）……171
図 68　第 13-2 面　1500 住居 2
　　出土遺物（その 2）……172
図 69　第 13-2 面　1500 住居 2
　　出土遺物（その 3）……173
図 70　第 13-2 面　1600 住居 3 ……175
図 71　第 13-2 面　1600 住居 3　1590 周溝内
　　出土遺物（その 1）……176
図 72　第 13-2 面　1600 住居 3　1590 周溝内
　　出土遺物（その 2）……177
図 73　第 13-2 面　1600 住居 3　1590 周溝内
　　出土遺物（その 3）……178
図 74　第 13-2 面　1750 住居 4　底面・断面図
　　住居内遺構　断面図 ……180
図 75　第 13-2 面　1687 建物 1 ……181
図 76　第 13-2 面　1712 ピット　土器 1
　　出土状況 ……182
図 77　第 13-2 面　土坑　断面図 ……183
図 78　第 13-2 面　遺構出土遺物（その 1）……184
図 79　第 13-2 面　遺構出土遺物（その 2）……185
図 80　第 13-2 面　遺構出土遺物（その 3）……187
図 81　第 14-1 面～第 13-2 面　1609 流路　断面図
　　（その 1）　X=-149,900 ライン ……192
図 82　第 14-1 面～第 13-2 面　1609 流路　断面図
　　（その 2）　X=-149,920 ライン ……194
図 83　1609 流路東岸ポイントバー最上層
　　推定分布範囲と土器群の位置 ……196
図 84　1609 流路東岸ポイントバー最上層
　　土器群 1 ～ 5 出土状況 ……197
図 85　第 14-1 面～第 13-2 面　1609 流路東岸
　　ポイントバー最上層出土遺物（その 1）……198
図 86　第 14-1 面～第 13-2 面　1609 流路東岸
　　ポイントバー最上層出土遺物（その 2）……199
図 87　第 14-1 面～第 13-2 面　1609 流路東岸
　　ポイントバー最上層出土遺物（その 3）……200
図 88　第 14-1 面～第 13-2 面　1609 流路東岸
　　ポイントバー最上層出土遺物（その 4）……201
図 89　第 14-1 面～第 13-2 面　1609 流路東岸
　　ポイントバー最上層出土遺物（その 5）……203
図 90　第 13-2b 層・第 14-1 層　包含遺物……204
図 91　第 14-1 面　全体図 …… 209・210
図 92　第 14-1 面～第 13-2 面　1609 流路埋積層
　　出土遺物 ……211
図 93　第 14-1 面～第 13-2 面　1609 流路東岸
　　ポイントバー下部粗砂層内出土遺物……212
図 94　第 14-1 面　1669 溝　断面図 ……213
図 95　第 14-1 面　土器出土状況 ……214
図 96　第 14-1 面　出土遺物 ……215
図 97　第 14-1 面　1610 溝（13 面 1258 流路・
　　12 面 1130 流路）　断面図……216
図 98　第 14-2 面　全体図 …… 219・220
図 99　第 14-2 面　1792 流路　断面図 ……221
図 100　第 14-2b 面（東半）　全体図 ……222
図 101　第 14-2 面　1792 流路　埋積進行状況……223
図 102　第 14-2 面・第 15 面　出土遺物 ……224
図 103　第 14-2 面　1791 土器 1　出土状況 ……225
図 104　第 15-1 面　全体図 …… 227・228
図 105　第 15-1 面　1815 土器 1　出土状況 ……229
図 106　第 15-2b 面（東半）　全体図 ……230
図 107　第 16 面　全体図 ……233
図 108　T.P.+0.9 m面　全体図 …… 231・232
図 109　植物遺体分析試料の出土位置 ……236

図　版　目　次

図版 1
1　東半　第 2-1 面　全景
2　東半　第 2-1 面　北側　東西坪境付近
図版 2
1　西半　第 2-1 面　全景
2　X=-149,920 ライン西半断面
第 2-1 層～第 3 層・1b 土坑
3　Y=-34,041.5 ライン（二十一ノ坪）断面
第 2-1 層～第 3 層・1b 土坑
4　X=-149,900 ライン西半断面
第 1b 層内状況
5　第 1 面　239 埋樽　底板上遺物出土状況
図版 3
1　東半　第 2-3 面　全景
2　東半　第 2-3 面　北側　東西坪境付近
図版 4
1　西半　第 2-3 面　全景
2　第 1 面　45 井戸　井戸枠瓦立面
3　第 1 面　45 井戸　井戸枠瓦断面
4　第 2-3 面　150 畦畔盛土内　240 礫群
5　第 3-1 面　299 溝断面　No.1
図版 5
1　東半　第 3-1 面　全景
2　西半　第 3-1 面　全景
図版 6
1　東半　第 4 面　全景
2　東半　第 4 面　北側　東西坪境付近
図版 7
1　西半　第 4 面　全景
2　Y=-34,000 ライン　坪境畦畔断面
（十六・十七ノ坪境）
3　第 9 面　324 畦畔・327 溝
切り合い状況
4　X=-149,920 ライン　南北坪境畦畔断面
（十六・二十一ノ坪境）
5　Y=-34,020 ライン断面　第 4 層～第 10-1 層
図版 8
1　東半　第 5 面　全景
2　東半　第 5 面　北側　東西坪境付近
図版 9
1　西半　第 5 面　全景
2　第 5 面　255 島畠
3　第 5 面　231 島畠
4　第 5 面　232 島畠
5　第 6 面　坪境交点
図版 10
1　東半　第 6 面　全景
2　東半　第 6 面　北側　東西坪境付近
図版 11
1　西半　第 6 面　全景
2　第 6 面　310 島畠
3　第 6 面　315 島畠
4　第 6 面　318 島畠
5　第 8 面　334・335 溝　切り合い状況
図版 12
1　東半　第 8 面　全景
2　東半　第 8 面　北側　東西坪境付近
図版 13
1　西半　第 8 面　全景
2　第 8 面　坪境交点
図版 14
1　第 8 面　379 溝断面
2　第 8 面　412 土坑・413 溝断面
3　西半　第 10-1 面　全景
4　第 10-1 面　364 溝断面
5　第 10-1 面　536 溝断面
図版 15
1　東半　第 10-1 面　全景
2　東半　第 10-1 面　北側
図版 16
1　東半　第 10-2 面　全景
2　西半　第 10-2 面　全景
図版 17
1　東半　第 11 面　全景

2　西半　第 11 面　全景

図版 18

1　第 10-1 面　618 溝断面

2　第 10-1 面　718 落込床面ピット　瓦器椀出土状況

3　第 11 面　1094 土器 1　出土状況

4　Y=-34,041.5 ライン断面　第 10-1 層～第 11b 層

5　X=-149,900 ライン断面　第 12-1 面 ～ 第 13-2b 面　微高地 3 ～低地 3

6　Y=-33,980 ライン断面　第 11b 層内　粗砂層

7　X=-149,900 ライン断面　第 11b 層内　粗砂層

8　Y=-34,000 ライン断面　第 11b 層内　地震変形

図版 19

1　東半　第 12-1 面　全景

2　西半　第 12-1 面　全景

図版 20

1　X=-149,900 ライン　第 12-1 面　立ち木痕断面

2　X=-149,900 ライン　第 12-1 面　立ち木痕断面

3　X=-149,900 ライン　1609 流路西肩部断面

4　X=-149,900 ライン　第 11b 層・1142 侵食痕上の粗砂層との交指状堆積断面

5　X=-149,900 ライン　第 12-1 面　1142 侵食痕上粗砂層断面

6　X=-149,920 ライン　第 12-1 面　1130 流路東肩部第 11b 層内交指状堆積断面

7　第 12-1 面　1146 溝断面　No.1

8　第 12-1 面　1145・1147 畦畔・1146 溝断面 No.1

図版 21

1　第 12-1 面　1146 溝断面　No.2

2　第 12-1 面　1145・1147 畦畔・1146 溝断面 No.2

3　第 12-1 面　1146 溝断面 No.3

4　X=-149,900 ライン　第 12-1 面　1145・1147 畦畔・1146 溝断面

5　西半　第 12-2 面　全景

図版 22

1　東半　第 12-2 面　全景

2　第 12-2 面　微高地 1

図版 23

1　X=-149,900 ライン　第 12-1 面　微高地 3 西辺 1132 畦畔断面

2　X=-149,920 ライン　第 12-1 面人口堤防断面

3　第 12-2 面　1200 溝上面　木製鋤出土状況

4　第 12-2 面　1209 ピット　土器出土状況

5　第 12-2 面　低地 3 部分　畦畔検出状況

図版 24

1　第 12-2 面　1130 流路　完掘状況

2　西半　第 13-1 面　全景

図版 25

1　東半　第 13-1 面　全景

2　東半　第 13-1 面　東側

図版 26

1　東半　第 13-2 面　全景

2　西半　第 13-2 面　全景

図版 27

1　第 13-1 面　1380 土坑断面

2　第 13-2 面　1545 土坑断面

3　第 13-2 面　1712 ピット　土器 1 出土状況

4　第 13-2 面　1310 住居 1 床面　1311 炉・1312・1313 柱穴検出状況

5　第 13-2 面　1310 住居 1 床面検出状況

図版 28

1　第 13-2 面　1310 住居 1 床面　1311 炉・1312・1313 柱穴半割状況

2　第 13-2 面　1310 住居 1 床面　1311 炉断面

3　第 13-2 面　1310 住居 1 床面　1312 柱穴断面

4　第 13-2 面　1310 住居 1 床面　1313 柱穴断面

5　第 13-2 面　1310 住居 1　床面・周堤検出状況

図版 29

1　第 13-2 面　1310 住居 1　周堤盛土除去後

2　第 13-2 面　1500 住居 2 周辺

図版 30

1　第 13-2 面　1500 住居 2　床面検出状況

2　第 13-2 面　1500 住居 2 南北断面　北側

3　第 13-2 面　1500 住居 2 南北断面　中央・1582 炉検出状況

4　第 13-2 面　1500 住居 2 南北断面　南側

5　第 13-2 面　1500 住居 2 東西断面　中央・1582 炉断面

図版 31

1　第 13-2 面　1500 住居 2 床面　土器 1 出土状況
2　第 13-2 面　1500 住居 2 床面　土器 2 出土状況
3　第 13-2 面　1500 住居 2 床面　土器 3 出土状況
4　第 13-2 面　1500 住居 2 床面　土器 4 出土状況
5　第 13-2 面　1500 住居 2 床面　1582 炉検出状況
6　第 13-2 面　1500 住居 2 床面　1582 炉中心部炭層
7　第 13-2 面　1500 住居 2 床面　1582 炉炭層除去後
8　第 13-2 面　1500 住居 2 床面　1582 炉完掘状況

図版 32

1　第 13-2 面　1500 住居 2　底面検出状況
2　第 13-2 面　1600 住居 3 周辺

図版 33

1　第 13-2 面　1600 住居 3　床面盛土除去後
2　第 13-2 面　1600 住居 3　炭化木群検出状況

図版 34

1　第 13-2 面　1600 住居 3 内 1547 炭化木群
2　第 13-2 面　1547 炭化木群（1600 住居 3 検出前）
3　第 13-2 面　1547 炭化木群詳細
4　第 13-2 面　1750 住居 4 南北断面北側
5　第 13-2 面　1750 住居 4 南北断面中央

図版 35

1　第 13-2 面　1750 住居 4
2　第 13-2 面　1750 住居 4

図版 36

1　X=-149,900 ライン　1609 流路東岸ポイントバー層断面西半
2　X=-149,900 ライン　1609 流路東岸ポイントバー層断面東半
3　1609 流路東岸ポイントバー最上層　土器群 1
4　1609 流路東岸ポイントバー最上層　土器群 2
5　1609 流路東岸ポイントバー最上層　土器群 3
6　1609 流路東岸ポイントバー最上層　土器群 4
7　1609 流路東岸ポイントバー最上層　土器群 5
8　第 13-2 面　1750 住居 4 南北断面南側

図版 37

1　Y=-34,020 ライン断面　第 13-2b 層 ～ 第 14-2b 層
2　X=-149,900 ライン断面　第 13-2b 層 ～ 第 14-2b 層
3　西半南法面　第 14 層付近土層断面　地震変形
4　西半南法面　第 14 層付近土層断面　地震変形
5　X=-149,900 ライン　1609 流路西肩部断面
6　X=-149,920 ライン　1609 流路西肩部断面　地すべり
7　1609 流路東岸ポイントバー層下部　木製高杯出土状況
8　1609 流路東岸ポイントバー層下部　木製高杯出土状況

図版 38

1　東半　第 14-1 面　全景
2　西半　第 14-1 面　全景

図版 39

1　第 14-1 面　1610 溝断面　No.1
2　第 14-1 面　1610 溝断面　No.2
3　第 14-1 面　1669 溝断面　No.1
4　第 14-1 面　1669 溝断面　No.2
5　第 14-1 面　1669 溝内　土器 1 出土状況
6　第 14-1 面　1208 土器 1 出土状況
7　第 14-1 面　1608 土器 2 出土状況
8　第 14-1 面　1691 土器 3 出土状況

図版 40

1　東半　第 14-2 面　全景
2　西半　第 14-2 面　全景

図版 41

1　第 14-2 面　1791 土器 1 出土状況
2　第 15-1 面　1815 土器 1 出土状況
3　X=-149,920 ライン断面　第 14-4b 層 ～ 第 15-2b 層
4　第 14-2 面　1792 流路南東側下層完掘状況
5　東半　第 14-2b 層　全景

図版 42

1　東半　第 15-1 面　全景

2　西半　第 15-1 面　全景（左奥は T.P.+0.9 mで止め）
図版 43
1　東半　第 15-2b 面　全景
2　東半　第 16 面　全景
図版 44
1　東半　T.P.+0.9m 面　第 15-2b 層・第 16 層・第 16b 層露出状況
2　西半　T.P.+0.9m 面　第 15-2b 層・第 16 層・第 16b 層露出状況
図版 45　出土遺物
図版 46　出土遺物
図版 47　出土遺物
図版 48　出土遺物
図版 49　出土遺物
図版 50　出土遺物
図版 51　出土遺物
図版 52　出土遺物
図版 53　出土遺物
図版 54　出土遺物
図版 55　出土遺物
図版 56　出土遺物
図版 57　出土遺物
図版 58　出土遺物
図版 59　出土遺物
図版 60　出土遺物
図版 61　出土遺物
図版 62　出土遺物
図版 63　出土遺物
図版 64　出土遺物
図版 65　出土遺物
図版 66　出土遺物
図版 67　出土遺物
図版 68　出土遺物
図版 69　出土遺物
図版 70　出土遺物
図版 71　出土遺物
図版 72　出土遺物
図版 73　出土遺物
図版 74　出土遺物
図版 75　出土遺物
図版 76　出土遺物
図版 77　出土遺物
図版 78　出土遺物

目　　次

巻頭カラー図版

序文

例言

凡例

目次

第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1

第１節　経緯と経過 …… 1

第２節　調査の方法 …… 3

第２章　位置と環境 …… 5

第１節　地理的環境 …… 5

第２節　歴史的環境 …… 6

第３章　調査の成果 …… 10

第１節　基本層序 …… 10

第１項　基本層序・層名・土質について …… 10

第２項　基本層序各層の詳細と既往の調査区との検討 …… 11

第３項　池島Ⅱ期地区の基本層序整理の総括 …… 43

第２節　各遺構面の調査 …… 46

第１項　第１ｂ面 …… 46

第２項　第２-１面 …… 55

第３項　第２-３面 …… 63

第４項　第３-１面 …… 73

第５項　第４面 …… 79

第６項　第５面 …… 83

第７項　第６面 …… 89

第８項　第８面 …… 98

第９項　第10-１面(第８ｂ面重複) …… 112

第10項　第10-２面 …… 123

第11項　第11面 …… 129

第12項　第12-１面 …… 132

第13項　第12-２面 …… 139

第14項　第13-１面 …… 147

第15項　第13-２面 …… 161

第16項　第14-１面 …… 207

第17項　第14-２面 …… 218
第18項　第15-１面 …… 226
第19項　第15-２b・16面・最終掘削面 …… 229
第４章　自然科学分析 …… 234
第１節　分析までの経緯 …… 234
第２節　池島・福万寺遺跡Ⅱ（その12）発掘調査大型植物遺体委託　報告 …… 235
第３節　分析結果を受けて …… 241
第５章　まとめ …… 242

巻末
遺物観察表 …… 255

表　目　次

表１　図５・６　セクション断面図土色・土質一覧 …… 14
表２　池島Ⅱ期地区各調査区層序対照表 …… 44
表３　図７十六ノ坪十七ノ坪坪境断面図土色・土質 …… 48
表４　図８二十ノ坪二十一ノ坪坪境断面図土色・土質 …… 51
表５　図８十六ノ坪二十一ノ坪坪境断面図土色・土質 …… 51
表６　図19　2-3面161島畠・３～５面232島畠・６面318島畠
・３面234段差・４～５面255島畠・６面310島畠断面図土色・土質 …… 71
表７　図65　1500住居２断面　土色・土質 …… 169
表８　図81　第14-1～13-2面1609流路断面図（X=-149,900ラインセクション）土色・土質 …… 193
表９　図82　第14-1～13-2面1609流路断面図（X=-149,920ラインセクション）土色・土質 …… 195
表10　大型植物遺体同定結果 …… 237
表11　種実遺体・木材遺体の記載 …… 239
表12　弥生土器破片数集計表 …… 247

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　経緯と経過

本調査は、大阪府寝屋川水系改修工営所によって進められている寝屋川流域総合治水対策事業の一つである、一級河川恩智川治水緑地建設に伴うものである。

治水緑地は、全体計画で 40.2ha となる予定であり、東大阪市域の池島Ⅰ期地区、Ⅱ期地区、八尾市域の福万寺Ⅰ期地区、Ⅱ期地区の４地区からなる。両市域のⅠ期地区の調査はすでに終了し、現在はⅡ期地区で調査を行っている（図２）。

恩智川治水緑地が計画された付近は、条里制地割りが良好に遺存し、「池島条里遺構」として知られていた。治水緑地建設に伴って昭和56・57年には大阪府教育委員会により試掘調査が実施され、条里遺構が重層的に遺存している事、その下層には弥生時代の遺構・遺物が遺存している事が確認された。

その成果を受け、大阪府教育委員会は福万寺Ⅰ期地区の調査を開始し、その後、平成元年から財団法

図１　池島・福万寺遺跡調査区位置図

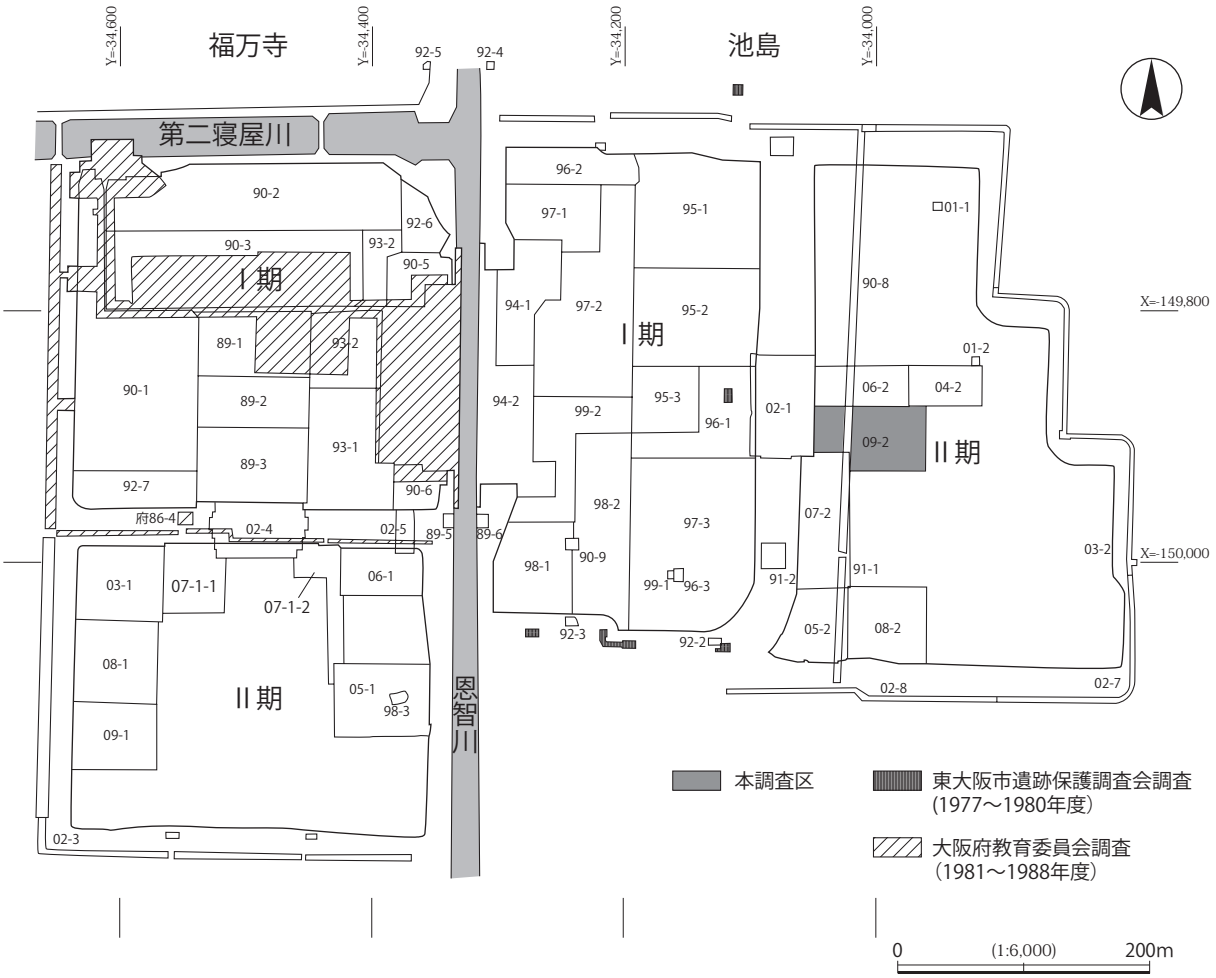


図2　池島･福万寺遺跡の調査区配置図

人大阪文化財センター（現、公益財団法人大阪府文化財センター、以下同じ）が大阪府教育委員会の指導の下、調査を引き継いだ。

福万寺Ⅰ期の発掘調査は平成14年に終了し、池島Ⅰ期の発掘調査は平成元年より開始、平成14年に終了した。両Ⅰ期地区の調査成果については事業単位ごとに概要報告書を刊行するとともに、平成14年には福万寺Ⅰ期地区の成果をまとめた「池島・福万寺遺跡２」調査報告書を、平成19年には池島Ⅰ期地区の成果をまとめた「池島・福万寺遺跡３」調査報告書を、各々刊行している。

平成14年より池島Ⅰ期地区・Ⅱ期地区間の施設部と池島Ⅱ期地区の外周水路、平成15年より福万寺Ⅰ期地区・Ⅱ期地区間施設部の調査が行われ、両Ⅱ期地区の調査が始まった。これまでに池島Ⅱ期地区では当調査区を含め７調査区、福万寺Ⅱ期地区でも７調査区の発掘調査を実施、終了している。まだ各Ⅱ期地区には広大な未調査区があるが、現在、発掘調査は行われていない。

両Ⅱ期地区の調査では、調査報告書を調査区単位毎に刊行する事となり、既に「池島・福万寺遺跡４～ 13」の 10冊の報告書が刊行されている。

今回の 09 － 2調査区は、池島Ⅰ期地区との越流堤部分の 02 － 1調査区の東隣、池島Ⅱ期地区の南北方向ではほぼ中央で、北側には 04 － 2調査区・06 － 2調査区、南西に 07 － 2調査区が接している。寝屋川水系改修工営所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが調査を実施した。平成21年６月１日付けで「一級河川恩智川治水緑地池島・福万寺遺跡Ⅱ発掘調査

（その 12)」として平成21年６月１日から平成23年６月30日までの受託契約を締結し、平成21年８月24日から平成23年５月31日まで現地調査を実施した。

主な遺構面についてはヘリコプターによる航空写真測量を行い、効率化を図った。調査は調査区を東西に分割して行っており、航空写真測量は東西同時測量１回を含み、９面、計17回実施している。

現地調査中には、平成22年11月６日に現地公開を行った他、以下の体験学習を受け入れ、現地で実施した。平成21年10月15日、和光高校・平成22年２月２・３日、石切中学・同年７月28日、今宮高校・同年10月14日、和光高校・同年11月10日、石切中学・同年11月16日、N.P.O. 法人高齢者大学普通科・同年11月18日、N.P.O. 法人高齢者大学考古学専攻・同年12月９・10日、池島中学。

現地調査終了後、平成23年７月１日付けで「一級河川恩智川治水緑地池島・福万寺遺跡Ⅱ遺物整理（その２)」として受託契約を締結し、平成23年７月１日から平成24年６月30日まで、報告書作成事業を行った。また、自然科学分析として大型植物遺体同定を行い、成果は本文第４章に掲載した。平成24年９月、本書の刊行をもって一連の調査は終了した。

第２節　調査の方法

調査の方法はマニュアル（『遺跡調査基本マニュアル』 暫定版　2003 （財）大阪府文化財センター）にのっとって行った。今回の調査区は 09‐２調査区となる。

遺構面・遺構の実測、各層の包含遺物の取り上げなどは、国土座標第Ⅵ座標系（世界測地系）を基準とした地区割りに基づいて行った（図３)。今回の調査区はＨ６‐３‐１N・１O、Ｈ６‐４‐20N・20O（第Ⅰ～Ⅲ区画）にまたがり、遺物の取り上げは第Ⅳ区画まで分けて行った。また調査区は東西に分割し、作業を交互に進行しながら調査した。Y= －34,000 ラインを境に「東半」と「西半」とした。調査区の土層観察・記録のための断面は国土座標の 20m 毎に設置するのを基本とするが、Y= －33,360 ラインは調査区東辺の法面が下部で重複してくるため、Y= －34,040 ラインは矢板の打設・引き抜きを行ったラインで地層が変形していたため、各々西に 1.5m ずらし、東から見た形で観察・記録を行った。

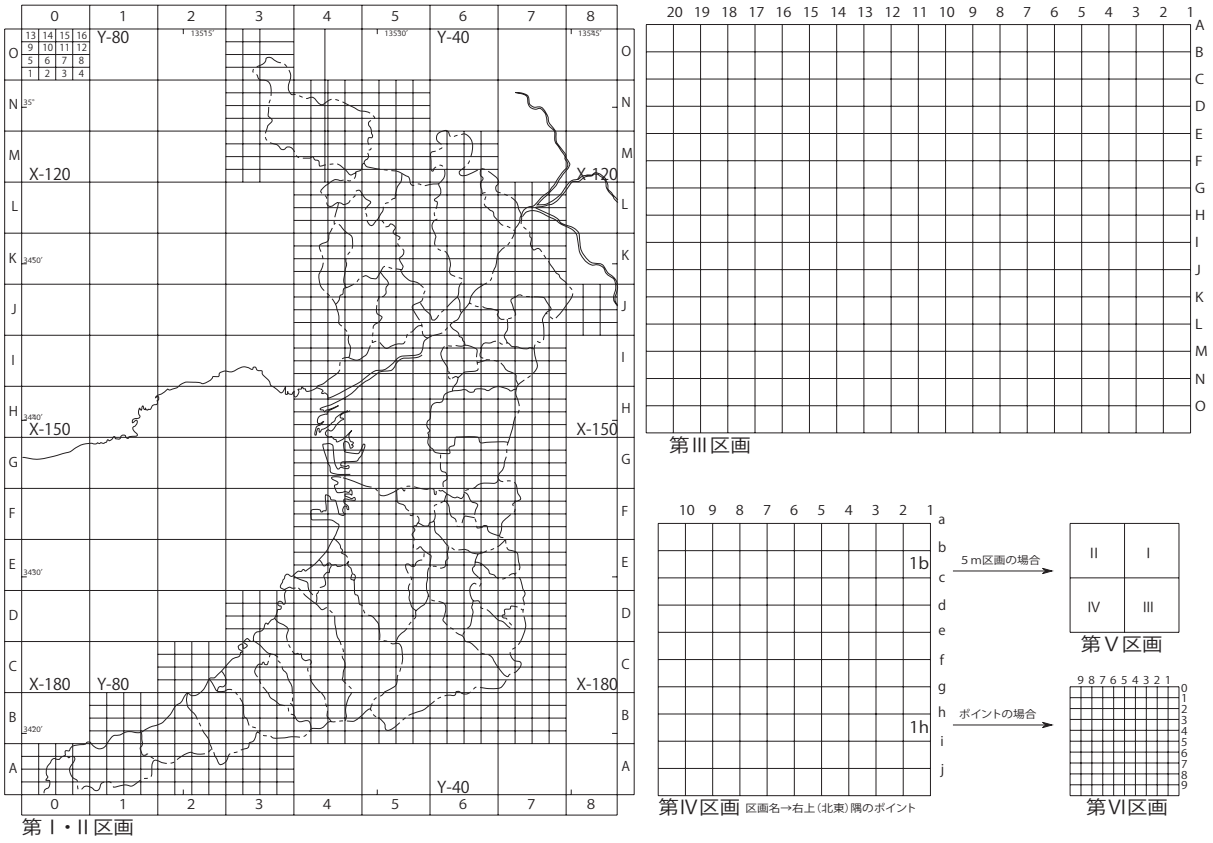
調査はまず、重機で盛土・現代耕作土・現代の攪乱を除去し、その後、設定した断面に沿ったトレンチを人力掘削し、近世後半の耕作土層と洪水砂層である第１層・第１ｂ層の堆積状況を記録した。そして再び重機で第１ｂ層を除去し、第２面から平面的な調査も開始した。

各遺構面の記録は、主要な遺構面ではヘリコプターによる航空測量を行い、その他、平板測量により補足している。なお航空測量の図化は世界測地系によるが、あわせて日本測地系も表記した。ただし、本報告書内では全て世界測地系で表記した。その他、各遺構図・断面図など状況に合わせて作成した。

遺構番号は１から付しており、本報告書で使用する遺構番号は調査時の番号と一致している。遺構の種類は番号の後ろに付すが、考察の結果変更したものもある。

整理作業に当たっては、遺物は洗浄後、デジタル写真を付した台帳に登録し、注記を行った。
その後、接合作業と抽出を行い、その際全てを種別・器種・型式などで分別し、破片数を集計した。抽出した遺物は実測図を作成し、必要と判断されたものに関しては写真撮影を行った。これらの図面・写真は本報告書に掲載している。掲載遺物は実測図番号を通し番号で付して管理しているが、本報告書では図版毎に番号を付している。ただし、報告書の番号によっても検索できるようになっている。

図面・遺物に関してはマニュアルに沿って収納作業を行った。その他、各種台帳についてもマニュアルに沿って作成し、保管している。


第Ⅰ・Ⅱ区画
第Ⅲ区画
第Ⅳ区画 区画名→右上（北東）隅のポイント
5m区画の場合
ポイントの場合
第Ⅴ区画
第Ⅵ区画

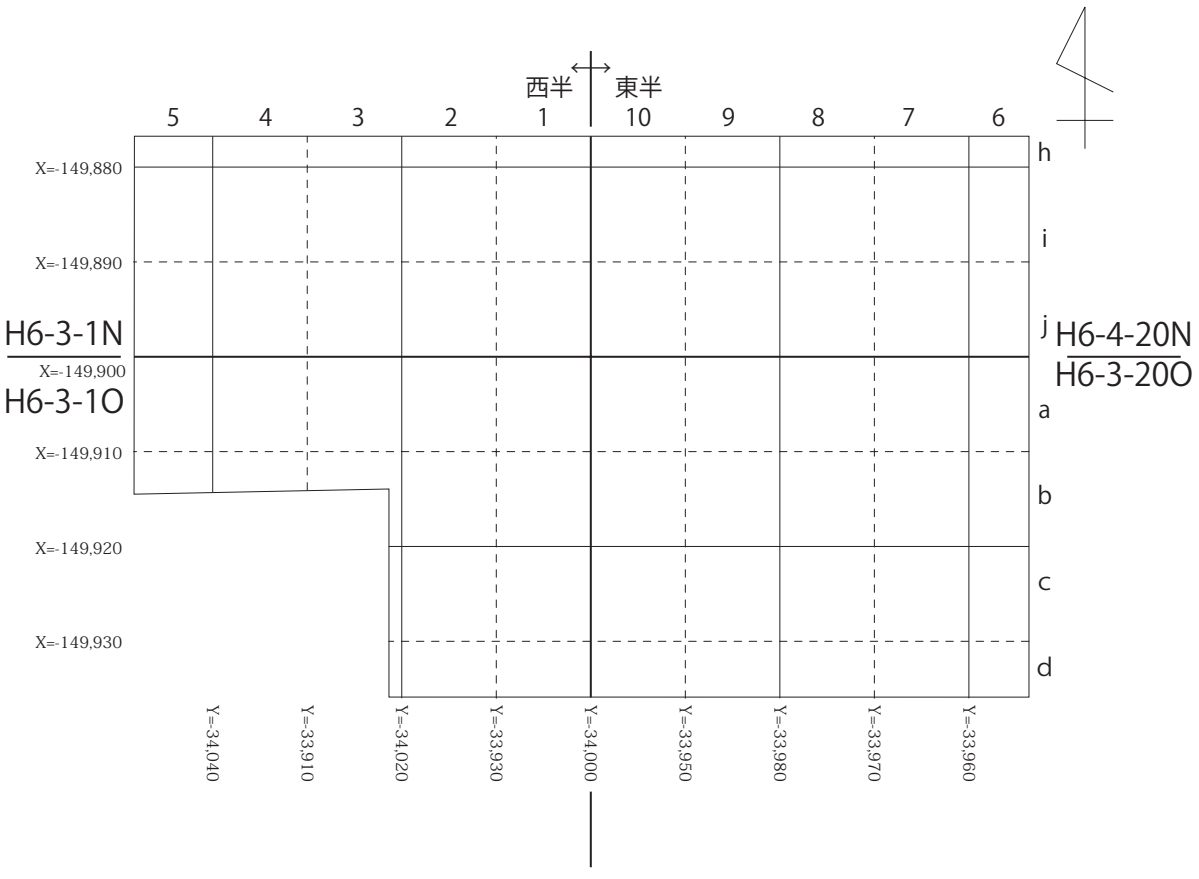

西半
東半
X=-149,880
X=-149,890
X=-149,900
X=-149,910
X=-149,920
X=-149,930
H6-3-1N
H6-3-1O
H6-4-20N
H6-3-20O
Y=34,040
Y=33,910
Y=34,020
Y=33,930
Y=34,000
Y=33,950
Y=33,980
Y=33,970
Y=33,960

図3　国土座標地区割図

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

池島・福万寺遺跡は大阪府東大阪市池島町と八尾市福万寺町にまたがり、中河内地域の東部に位置する（図１）。高橋学の河内平野地形分類（高橋学　2003年）では、三角州帯Ｉａに属する。東には生駒山から流下する小河川が形成した扇状地が連なる。西には大和川付け替えまで、その流れの一つであった玉串川が蛇行しながら北流する。遺跡の中央を北流する恩智川は、条里制地割に規制された直線的な形態で、低地の排水を目的とした人工河川と考えられている。また、恩智川から分岐し、遺跡北辺を西流する第二寝屋川は、洪水対策に掘削された現代の人工河川である。

最終氷期に谷地形であった河内平野は、温暖化により海に没し、海底に沖積層が堆積した。縄文海進最盛期（約6000 ～ 5500年前、縄文時代前期）に河内湾の海域だった時、当遺跡周辺は水深５～ 10mほどの浅い海となるほど堆積が進行していたと言われる。

その後、海水面が低下し、河内潟の時代となる。遺跡内では縄文中期末葉の土器（北白川Ｃ式）が出土し、その頃には干潟や湿地帯のような環境であった事が知られる。

遺跡付近の陸化は縄文時代後期～晩期頃である。土壌が形成されるが、まだ起伏少ない地形の中を網状に流路が走るような状況であった。高橋学の「臨海平野の微地形変化モデル」のステージ３（以後「ステージ○」とのみ表記）の段階に陸化したとして良く、その時期は縄文時代後期中葉頃の可能性が高い。

縄文時代晩期～弥生時代前期には最東端の調査区の 04 － 2・08 － 2調査区以東に微高地が形成された。低平な地形にわずかに微高地の形成が始まるステージ４の三角州帯Ｉａのモデルに良く対応する。

弥生時代中期初頭頃、微高地が発達し、凹凸のある地形となる。遺跡内東部は弥生時代中期初頭に成立した地形が、中期後葉まで踏襲されるのに対し、西側は中期の地形変化が激しく、後期にようやく安定する。中期の状況は、扇状地帯河床低下に伴う土砂が三角州帯Ｉａに流入し、微高地の形成が活発になるステージ５・６に対応する。後期は後背湿地埋積の進行と安定化からステージ７に対応する。

弥生時代後期末～古墳時代後期には、弥生時代中～後期の流路が埋積し、高燥な微高地になる傾向が見られる。時期的にはステージ７の後半にあたるが、微高地がかえって発達するなど、状況が異なる。生駒山から流下する小河川の影響が増した局所的な現象とも考えられる。

飛鳥時代～奈良時代は非常に堆積の少ない時期のようである。全体的には前代の地形が、やや埋積が進行しながらも踏襲されている。大きな変化がないという点ではステージ８に対応する。

平安時代10世紀頃に、現代に踏襲される条里制地割りが施行されるが、その初期（第８層）では微高地は坪内で不整形な畑地となって残る。河床低下により完新世段丘面Ⅱが形成されるステージ９の時期だが、そのような傾向は認められない。恩智川の成立が河床低下現象の代わりを果たしたものか。

鎌倉時代後半以降は、洪水堆積物を処理する島畠が出現し、水田は平坦化が進行する。これ以降、洪水堆積物は、西ほど粗粒で大量、東ほど細粒で少量、という傾向がある。これは、固定された恩智川・玉串川の天井川化が進行し、破堤的な洪水が増加したためと思われ、ステージ 10 に対応する。

その後、近世前半頃の洪水の痕跡の増加と島畠の拡大は顕著である。ステージ 11 に対応する。

大和川付け替え以降、洪水堆積物は減る。だが反面、水不足に悩まされる環境になった事が知られる。

第１ｂ層を堆積させた洪水は、遺跡内ではかえって島畠が減少する現象を引き起こした。ただし、これはその洪水による砂層の堆積が激しかった部分の局所的現象と考えられる。

遺跡の地理的環境の変遷は、河内平野の一部としてモデルケースに良く合致する部分もあるが、生駒山からの小河川の影響も受け、局所的な現象や、遺跡内の東西差が生じていると言えるだろう。

第２節　歴史的環境（図４）

当遺跡の周辺では、旧石器時代後期の遺物は、生駒西麓の低位段丘面扇状地帯の千住寺山遺跡・山畑遺跡でナイフ形石器が、正興寺山遺跡で縦長剥片が採取されている。また、再堆積ではあるが鬼虎川遺跡・神並遺跡・若江北遺跡でもナイフ形石器・翼状剥片が採取されている。

縄文時代では早期に神並遺跡で居住域が見られ、恩智遺跡は前期～後期の各時期に居住域が存在した。中期～後期には日下遺跡・鬼塚遺跡・縄手遺跡にも居住域が見られる。いずれも生駒西麓扇状地上に位置する。当遺跡では縄文時代中期～後期の土器片のみが出土する。

縄文時代晩期には、生駒西麓扇状地上には晩期前半では馬場川遺跡・恩智川遺跡、晩期後半には鬼塚遺跡に居住域が見られる。しかし、晩期後半には低地の鬼虎川遺跡・水走遺跡にも居住域が見られ、当遺跡でも 04 － 2 調査区で墓域が検出されている。また、縄文時代晩期後半は、弥生文化との接触もあった。その事は、鬼塚遺跡・縄手遺跡・鬼虎川遺跡などでの突帯文系土器と遠賀川系土器の共伴、両者の技法の混在する折衷土器の存在が示す。

弥生文化集落は当遺跡付近では若江北遺跡を端緒とし、弥生時代前期中葉には、山賀遺跡・美園遺跡・跡部遺跡・中田遺跡・大竹西遺跡などで集落が成立する。長瀬川水系の形成した微高地を中心に弥生文化が浸透すると言える。同時期の水田は若江北遺跡・山賀遺跡・志紀遺跡などで確認されている。当遺跡でも 08 － 2 調査区で弥生時代前期後葉の居住域が確認された。生駒西麓に近いのが注目できる。

弥生時代中期には、集落が急増し、生駒西麓では鬼虎川遺跡・水越遺跡・恩智川遺跡、長瀬川・楠根川流域の微高地では瓜生堂遺跡、さらに南では亀井遺跡などに拠点的集落が成立する。また、鬼虎川遺跡では青銅器の鋳型が出土し、加美遺跡・瓜生堂遺跡では卓越した規模の方形周溝墓が出現する。しかし、当遺跡西部を含め、玉串川流域には、弥生時代の遺構・遺物が希薄である。今回の調査では、遺跡東部の微高地上に居住域が確認され、弥生時代中期の水田を経営する集落の立地が明らかになった。

弥生時代後期には拠点的集落が衰退し、小規模集落が増加する。また、生駒西麓の山畑遺跡・岩滝山遺跡などで高地性集落が出現する。当遺跡内では西側も長期的に水田が維持されるようになる。

古墳時代初期（庄内式期）には、当遺跡の南西２km ほどの長瀬川右岸で東郷遺跡・成法寺遺跡・小坂合跡・矢作遺跡・中田遺跡・弓削遺跡の「中田遺跡群」が一つの巨大集落となり、長瀬川左岸に対峙する久宝寺遺跡・加美遺跡にも大集落が成立する。この小地域で河内型庄内式土器が成立するが、河内型庄内式土器が多数派なのは、この小地域のみで、周辺では弥生Ｖ様式系土器の中に客体的である。

この小地域は古墳時代前期、布留式期前半まで継続するが、後半には衰退し、中河内は小集落が点在する状況になる。その時期の小阪合遺跡の流路から内行花文鏡・鹿角装刀剣・鉄矛など豊富な祭祀関連遺物が出土したのが注目される。

古墳時代前期中葉から後期にかけて生駒西麓扇状地上に楽音寺・大竹古墳群が形成され、向山古墳・

1 池島・福万寺遺跡
2 新家遺跡
3 意岐部遺跡
4 西岩田遺跡
5 菱江寺遺跡
6 吉田遺跡
7 稲葉遺跡
8 水走遺跡
9 鬼虎川遺跡
10 植附遺跡
11 塚山古墳
12 西ノ辻遺跡
13 額田寺遺跡
14 鬼塚遺跡
15 辻子谷遺跡
16 法通寺遺跡
17 神並遺跡
18 舳古墳群
19 若宮古墳群
20 正興寺山遺跡
21 神並古墳群
22 神並古墳１号墳
23 神並古墳２号墳
24 神並古墳18号墳
25 神並古墳９号墳
26 神並古墳８号墳
27 神並古墳４号墳
28 夫婦塚古墳
29 千手寺山遺跡
30 箸尾古墳群
31 辻子谷古墳群
32 額田山古墳群
33 つぼ塚古墳
34 みかん山古墳群
35 豊浦谷古墳群
36 鵜立遺跡
37 狐塚古墳
38 皿池遺跡
39 河内寺跡
40 出雲井遺跡群
41 松本塚古墳
42 丸山古墳
43 神津嶽祭祀遺跡
44 水走氏館跡
45 五条古墳
46 客坊山遺跡群
47 五条山古墳群
48 市尻遺跡
49 山畑古墳群
50 山畑遺跡
51 瓢箪山古墳
52 成山古墳
53 馬ハギ塚古墳
54 花草山古墳群
55 経塚古墳
56 鉢伏古墳
57 五里山古墳群
58 岩田遺跡
59 瓜生堂遺跡
60 巨摩廃寺遺跡
61 若江北遺跡
62 若江遺跡
63 山賀遺跡
64 西郡廃寺遺跡
65 玉串遺跡
66 花園遺跡
67 北鳥池遺跡
68 五合田遺跡
69 段上遺跡
70 下六万寺遺跡
71 縄手遺跡
72 えの木塚古墳
73 上六万寺遺跡
74 船山遺跡
75 桜井古墳群
76 岩滝山遺跡
77 二本松古墳
78 往生院金堂跡
79 池島東遺跡
80 コモ田遺跡
81 北屋敷遺跡
82 西代遺跡
83 馬場川遺跡
84 半堂遺跡
85 大賀世古墳
86 浄土寺谷古墳群
87 常光寺古墳
88 貝花遺跡
89 浄土寺跡
90 萱振遺跡
91 萱振１号墳
92 山本町北遺跡
93 楽音寺遺跡
94 大竹西遺跡
95 鏡塚古墳
96 心合寺跡
97 心合寺山古墳
98 太田川遺跡
99 西の口遺跡
100 楽音寺跡
101 萩山古墳
102 大光寺山遺跡
103 禿山古墳
104 西の山古墳
105 花岡山古墳
106 花岡山遺跡
107 大竹遺跡
108 向山１号墳
109 向山２号墳
110 向山瓦窯跡
111 双子塚古墳
112 愛宕塚古墳
113 薗光寺跡
114 高安古墳群
115 核山古墳
116 中谷山古墳
117 宮町遺跡
118 穴太廃寺
119 八尾寺内町
120 東郷遺跡
121 東郷廃寺
122 成法寺遺跡
123 小阪合遺跡
124 水越遺跡
125 高麗寺跡
126 植松遺跡
127 老原遺跡
128 田井中遺跡
129 志紀遺跡
130 竜華寺跡
131 矢作遺跡
132 中田遺跡
133 東弓削遺跡
134 弓削寺遺跡
135 郡川遺跡
136 郡川西塚古墳
137 郡川東塚古墳
138 教興寺跡
139 恩智遺跡
140 恩智弥生時代遺跡
141 恩智銅鐸出土地
142 恩智城跡
143 神宮寺遺跡
144 大県郡条里遺跡
145 山ノ井遺跡
146 岩戸古墳群
147 信貴霊苑内古墳
148 高安城跡
149 平尾山古墳群

国土地理院発行 1:50,000地形図
「大阪東北部」(平成2年4月1日発行)・「大阪東南部」(平成元年12月1日発行)を使用

図４　周辺遺跡分布図

西ノ山古墳・花岡山古墳・中ノ谷古墳・心合寺山古墳・鏡塚古墳の順に造営が続く。地域首長層の出現と言える。平野部では、中期前葉頃の萱振１号墳など小型方墳の存在が知られる。

当遺跡では庄内式期～布留式期の遺構集中域が幾つか見られ、居住域と考えられる。遺跡内に複数あるのが前代と異なる。08‐２調査区の布留式期の井戸から百済系の陶質土器壺が出土している。

古墳時代中期後半には、当遺跡南東には横穴式石室を持つ前方後円墳の郡山東塚・西塚古墳が、北東

には韓式系土器が出土し、小型方墳からなる段上・植附古墳群が出現し、渡来系要素が古墳にも見られる。北鳥池遺跡・縄手遺跡では韓式系土器が、郡川遺跡では馬歯や製塩土器が出土している。

当遺跡では西側で古墳時代中期後葉～後期中葉の居住域が出現する。数棟で一群を為し、竈屋の可能性のある小竪穴が見られる。生駒西麓産胎土の移動式竈と羽釜を使用し、大型の甕がない。臼玉を主とした滑石製石製品が大量に出土するが、工房跡・原材などは未確認で、玉造り集落とは言えない。

周辺では古墳時代後期には、生駒西山腹に、山畑古墳群・花草山古墳群・五里山古墳群・六万寺古墳群などの群集墳の形成が見られる。古墳の造営は７世紀前半まで継続する。

上記古墳群が分布する東大阪市四条町・六万寺町・横小路町付近は、河内国河内郡桜井郷に比定され、古くは「桜井屯倉」があったと言われる。それを管掌したであろう桜井田部連氏は記紀の応神・安閑の条にも見え、天武13（684）年、宿祢の姓を賜っている。また、当遺跡より南約１km に御野縣主神社がある。その県主として、雄略没後の吉備上道国造の乱に連座した、三野県主小盾の名が見える。「三野」は「御野」・「美努」とも書き、天武13（684）年に連姓を賜り「美努連」として復権している。現在の東大阪市花園から八尾市上之島にまたがる三野郷村が、その三野県の後身と考えられる。

飛鳥時代には生駒西麓の高野街道沿いに河内寺・心合寺・高麗寺・教興寺などの寺院が次々と建立される。当遺跡の西約１km の平野部にも西郡廃寺がある。667年には、生駒の高安山に、古代山城の高安城が築かれる。礎石建物などが確認されている。当遺跡から南東へ３km 強の距離である。

天平17（745）年には行基四九院の一つである六萬寺が創建され 1349年の焼失まで存続した。東大阪市六万寺町の地であり、その封戸が後の六万寺村の元となったという説もある。

当遺跡での飛鳥～奈良時代の様相は不明確である。福万寺Ⅰ期地区で飛鳥時代の土器が出土した正方位の溝が、最古の条里制地割りの可能性を指摘されるが、畦畔はなく、上層の条里制地割りの坪境とも異なる。福万寺Ⅱ期地区の 08‐１調査区では、８世紀中葉頃の自然流路が、正方位の直角に曲がる形に改変されているが、改変時期が確定的ではない。周辺でも美園遺跡・志紀遺跡で７世紀の正方位耕地区画があるが、条里制地割りかは不明である。遺跡内での遺物は、南河内の「精良な胎土」の土師器が供膳器を中心に見られるが、移動式竈と羽釜は生駒西麓産胎土のものが使われ続ける特徴がある。

平安時代には当遺跡一帯は「玉櫛荘」の範囲に含まれる。玉櫛荘は平安時代中頃に開発されたようで、摂関家の所領であったが 1137（保延３）年、宇治平等院建立に伴い寄進され、以後室町時代まで平等院領となる。当遺跡の東南東約1.5km の向山瓦窯では、平等院の瓦を焼成している。

当遺跡で確実な条里制地割りで最古のものは 10世紀中葉頃成立で、この条里制施行が玉櫛荘の開発と関係するものと考えられる。また、排水用河川としての恩智川の整備もこの時期の可能性が高い。

鎌倉時代には当遺跡周辺は水走（みずはや）氏の支配下にあった。水走氏は中臣氏同流で枚岡神社・大津神社を管掌した平岡連の末と称する。12世紀前半には枚岡神社社領を領する他、大江御厨山本河俣両執当職となり、漁業権・水運権に関わる。源義家以来の河内源氏の家人である、当遺跡の北３km の水走（みずはい）遺跡では 12世紀後半～ 15世紀の大溝・土壙墓・集落が確認されているが、その地名は、天養年間（1144年）に水走季忠が 100町歩の水田を開発した事に由来する。

当遺跡でも南側で 13世紀前半～ 15世紀前半の屋敷地が確認されている。

鎌倉幕府滅亡時、水走氏はいち早く楠正成方につくが、南北朝期、正成の死後も楠正行に協力し、高師直の攻撃を受け降伏する。その後は勢力を縮小し河内守護畠山氏の家人となる。

畠山氏の跡目争いに端を発した応仁・文明の大乱（1467 ～ 77年）後も、畠山義就が河内・大和で抵抗

を続け、中河内は争乱が止む間もなく戦国時代に突入する。当遺跡より北西に 1km 強の若江遺跡には若江城が 14世紀後半に築かれ、守護代遊佐氏が居城していたが、この争乱で度々争奪戦の的となった。16世紀中頃には三好長慶政権の拠点となり、その頃の堀や建物など城郭らしい遺構が検出されている。天正元（1573）年には若江城にあった三好義継が織田信長に攻められ自刃、三好政権は崩壊する。

当遺跡でも中世の耕作土中からしばしば鉄鏃が出土し、河内の争乱を物語る遺物かもしれない。

慶長20（1615）年の大坂夏の陣では、羽曳野市道明寺から東大阪市若江にかけても激戦地となったが、当遺跡の北西300m 足らずの所に、豊臣方武将木村重成と徳川方武将山口重信の墓碑がある。

江戸時代には当遺跡周辺は大部分が幕府領に、福万寺村は狭山藩領となる。そして、水はけの良い島畠を利用し木綿生産が盛んになる。元禄 5（1692）年の「六万寺村銘細帳」には織物生産も行っていたと記される。これらは「河内木綿」として全国に流通する商品となった。

当遺跡での近世前期の急速な島畠の拡大も、この木綿生産の拡大と不可分のものであろう。

宝永元（1704）年には大和川付け替えが行われ、大和川旧流路が縮小し、広大な面積が新田開発された。鴻池新田などが有名である。しかし反面、新大和川以北は、旱魃の害が増加し、当遺跡でも近世後半以降に水田中に多くの井戸が掘られるようになる。

以上の変遷を重ねながら、遺跡周辺は平安時代に施行された条里制地割りの形を現代に残している。

第３章　調査の成果

第１節　基本層序

第１項　基本層序・層名・土質について

池島・福万寺遺跡では、共通基本層序の構築が試みられている。基本的には洪水などによる水成堆積層の上部に形成された、耕作土を含む古土壌層を「ａ層」とし、その下の水成堆積層を「ｂ層」とし、セットで捉える。そして、ａ・ｂ層どちらとも判断できないものは「Ｘ層」とする事になっている。

ａ層は土壌学層区分の「Ａ層」であるが、堆積学的には「生物擾乱」とされる部分である。耕作土層は下層と明確な層境を為すが、自然の土壌化層は層境が漸移的である。遺構検出面の問題もあり、堆積層に準じて扱う。ｂ層は土壌学層区分では「Ｂ層・Ｃ層」の範疇だが、水成堆積層の構造が確認できる層を対象とする。そのため、Ｂ層部分は所によりｂ層の一部としたり、土壌化の弱いａ層としたり、認識が統一されていない事がある。

根幹的な基本層序が、複数に分かれる場合、枝番号で「第２－１ａ層」のように分別し、各ａ層直下の水成堆積層を「第２－１ｂ層」などとする。「ａ層」は「第２－１層」のように略する場合がある。

面は層の上面を層名と共通させる。一例としては、第２－２ｂ層上面を「第２－２ｂ面」と呼称する。

しかし、隔たっている層同士を同一層と認識する基準、狭い範囲にのみある層をどこまで基本層序に組み入れるかなどの問題は曖昧なままである。また、基本層序の決定には、調査毎に、複数者による現地での層序の検討により、共通の認識を構築する必要があるが、それもあまりなされていない。

そのため、現在では、特に池島側と福万寺側の基本層序に時期的なずれが生じており、細かい点では、調査区間に齟齬をきたした部分もある。また、層の認識を間違っていると思われる調査もある。

今回の調査地点は池島Ⅱ期地区の中で、北側に展開していた調査区と、南側に展開していた調査区をつなぐ位置にあり（図２）、図らずも基本層序の再検討を迫られる事となった。力量不足もあり、明確に解決できたとは言いがたいが、池島Ⅱ期地区各調査区の基本層序のつながりも検討しておきたい。各々の調査区との比較は主に以下の報告書に拠った。報告書からの引用は「」で示す。

池島Ⅰ期地区：廣瀬時習他　2007 年『池島・福万寺遺跡３』（財）大阪府文化財センター
04－２調査区：田中龍男他　2008 年『池島・福万寺遺跡５』（財）大阪府文化財センター
05－２調査区：内田真雄　2008 年『池島・福万寺遺跡７』（財）大阪府文化財センター
02－１・06－２調査区：廣瀬時習他　2009 年『池島・福万寺遺跡９』（財）大阪府文化財センター
07－２調査区：島崎久恵　2011 年『池島・福万寺遺跡 11』（財）大阪府文化財センター
08－２調査区：後藤信義他　2011 年『池島・福万寺遺跡 13』公益財団法人　大阪府文化財センター

今回の報告書の土質の記載法は、主体的な粒子と異なる粒径の粒子がランダムに混じる場合「粘質土・砂質土」を使用する。それを土質記載に使用した層は人為的に攪拌された層か自然土壌、または泥流・土砂流的堆積にほぼ限られる。その後に主体的粒子を「○○～○○主体」と記載し、混じる粒子を「○○～○○あり（多し・若干あり・わずかにあり）」と記載する。「～」を使用している場合、前に記した粒径の方に偏りがある。ブロック土や互層状の構造がある場合、その土質も記載する。

この記載法は、例えれば「粘質土　シルト～細砂主体　粗砂あり」は地質学的記載法の「粗砂混じり細砂質シルト」に読み替えられるようになっている。

第２項　基本層序各層の詳細と既往の調査区との検討（図５・６）

以下に各層の詳細を述べ、池島Ⅱ期地区の既往の調査と、池島Ⅰ期地区のまとめとの比較検討・考察を行う。混乱を防ぐため、既往の調査の層名は「第」を略し、本調査区のものは略さず記す。

第１層

攪乱が激しく、残りが悪いが、耕作土層であるａ層は２層に分かれる部分が多い。基本的には洪水砂層の第１ｂ層を掘り込んだ「１ｂ土坑」で下から採取した耕作土を主な原材にした耕作土層である。

第１－１ａ層　灰～暗灰黄　7.5Y5/1 ～ 2.5Y4/2　砂質土　中砂～シルト主体　粗砂あり　Fe あり　部分的に Mn あり。

第１－２ａ層　灰～暗灰黄　5Y4/1 ～ 2.5Y5/2　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂～中砂若干あり　斑状 Fe・Mn 若干あり。

第１－２ｂ層　にぶい黄～灰黄　2.5Y6/4 ～ 7/1　中砂～細砂　ラミナあり　部分的に Fe あり。

共通基本層序では「１ｂ層」となる。18 世紀後半以降、江戸時代後期の洪水堆積層である。遺跡の西側では厚く、中礫も含む部分もあるが、今回の調査区では平均 15 ㎝ほどしかない。「１ｂ土坑」に砂を流し込んだ後の残存厚なので、洪水当初はもっと厚かったはずである。ラミナはほとんどが水平であるが､残りの良い部分では上部のラミナが蕨手状･S 字状に屈曲している例があり地震変形と思われる。

この上面から多数切り込む「１ｂ土坑」の埋土の元でもあるので､両者の区別がつきにくい部分も多々ある。「１ｂ土坑」の埋土については第２節第１項で後述する。

第２層

近世の耕作土層であるａ層が４層確認された。各々のａ層の間には、部分的に薄くｂ層が認められる。第２－４ｂ層は基本的に３層に分かれ、第２－４ｂ－２層上面では足跡・耕作具痕が認められる。

第２－１ａ層　灰　5Y4/1 ～ 7.5Y5/1　砂質土　中砂～シルト主体　粗砂～極粗砂あり　管状 Fe・Mn 粒あり。

第２－１ｂ層　第２－１ａ層下面の足跡などの中にわずかに砂粒が入る他は、南東側、十六ノ坪の一部にわずかに残るのみで、上下２層に分かれるようである。

上層　第２－１ｂ－１層とすべきか。　黄褐～浅黄　2.5Y5/6 ～ 7/6　粗砂～中砂　ラミナあり。

下層　第２－１ｂ－２層とすべきか。　灰　N5/0　細砂～シルト　ラミナあり。

第２－２ａ層　灰～オリーブ灰　5Y5/1 ～ 2.5GY5/1　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂あり。

残りが悪く、１ｂ土坑で寸断されているため判別しにくいが、今回、北西二十ノ坪で、この層成立時点に作られた島畠があるのを確認した。その下の第２－２ｂ面切り込みの溝状土坑が北隣の 06－２調査区では１ｂ土坑とされている。これは島畠上の第２－２ａ層が残存しないと、第２－２ｂ層が第１ｂ層と分別しがたく、見落とされていたものと考えられる。

第２－２ｂ層　黄褐～浅黄　2.5Y5/6 ～ 7/6　粗砂～中砂　ラミナあり。

調査区内の数ヶ所で薄く残るのみだが、二十ノ坪で溝状土坑の埋土・島畠の基部となっていると考えると、この坪には比較的多量に流入していたと考えられる。

第２－３ａ層　灰～オリーブ灰　5Y5/1 ～ 5GY5/1　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂～中砂あり　管

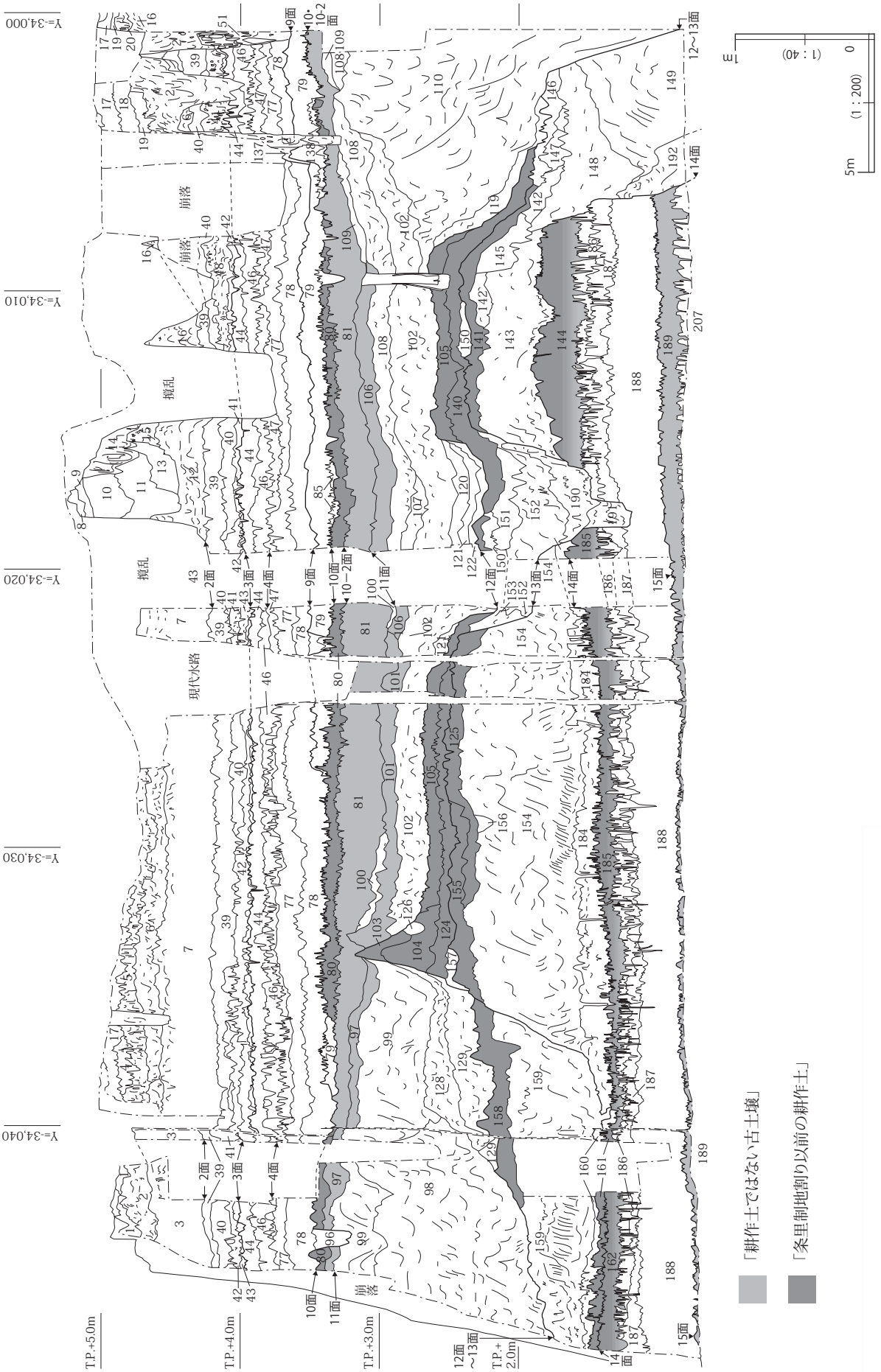


図 5　池島・福万寺遺跡 09-2　X=-149,900 ライン（西半）　断面図

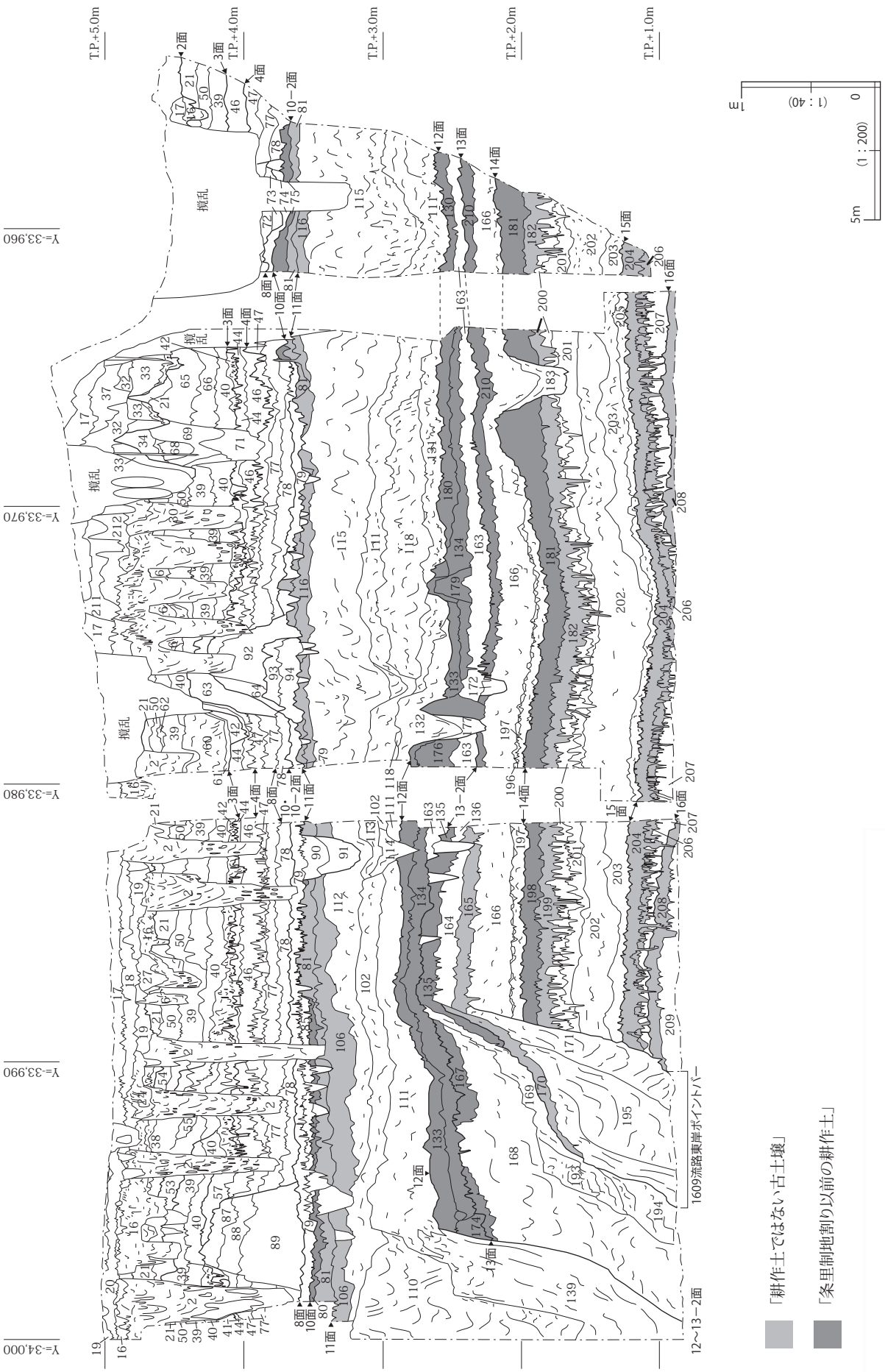


図 6　池島・福万寺遺跡 09-2　X=-149,900 ライン（東半）　断面図

表1　図５・６　セクション断面図土色・土質一覧

１．2.5Y7/1 ～ 6/4　灰黄～明黄褐　中砂～細砂　ラミナあり　部分的に Fe あり　1層のブロックあり　1b 層

２．2.5Y7/2 ～ 6/1　灰白～黄灰　中砂～細砂　ラミナあり　部分的に Fe あり　2-1層のブロックわずかにあり　1b 土坑埋土

３．2.5Y7/1 ～ 6/4　灰黄～明黄褐　中砂～細砂　ラミナあり　部分的に Fe あり　1b 層

４．2.5Y5/2　暗灰黄　砂質土・細砂～シルト主体　中砂あり　斑状 Fe・Mn あり　1-2層

５．2.5Y7/2 ～ 5/1　灰黄～黄灰　中砂～極細砂　部分的に Fe あり　1b 層

６．2.5Y7/2 ～ 6/2　灰黄　中砂～細砂　ラミナあり　Fe・Mn 部分的にあり　1b 層

７．6 と同質　ただし層境あり　1b 層

８．2.5Y5/2 ～ 6/2　暗灰黄～灰黄　中砂～細砂　１～４㎝の 1-1層のブロックあり

９．7.5Y5/1 ～ 2.5Y4/2　灰～暗灰黄　砂質土　中砂～シルト主体　粗砂あり　斑状 Fe あり　1-1層

10．９の 12 ～３㎝のブロック間に「5Y5/3　黄褐　中砂～シルト」あり　盛土

11．「7.5Y4/1 ～ 3/1　灰～オリーブ黒　砂質土　細砂～シルト主体　中砂～粗砂あり　０層？」内に「5GY5/1　オリーブ灰　シルト～極細砂」・「5Y6/4　オリーブ黄褐　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂あり」・「2.5Y5/4　黄褐　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂あり」の９～２㎝のブロック多し　植物遺体あり　盛土

12．「2.5Y6/4　にぶい黄　中砂」～「10Y6/1　灰　シルト」 ラミナあり　16 と同層　1b 層

13．11内のブロックと同質の５～ 10㎝のブロック　盛土

14．10・11 と同質の土がコンボリュートラミナで混じる　地震による地滑りか

15．2.5Y5/3 ～ 6/1　黄褐～黄灰　中砂～細砂　ラミナあり　Fe あり　1b 層

16．15 と同質　ただし層境あり　1b 層

17．2.5Y4/1 ～ 3/1　黄灰～黒褐　砂質土　細砂～シルト主体　極粗砂～中砂あり　０層

18．5Y4/1 ～ 5/1　灰　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂～中砂あり　斑状 Fe・Mn あり　1-1層

19．5Y4/1　灰　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂～中砂若干あり　管状 Fe あり 「5Y6/2灰オリーブ　中砂」のブロックわずかにあり　1-2層

20．16 と同じ　ただしコンボリュートラミナあり　1b 層上部

21．5Y4/1　灰　砂質土　中砂～シルト主体　粗砂～極粗砂あり　管状 Fe・Mn 粒あり　2-1層

22．5B5/1　青灰　中砂～細砂　ラミナあり　1b 層

23．2.5Y5/1　黄灰　19 に中砂が多く混濁　溝埋土

24．19 と同質の中に 16 の砂、火炎状に入る　1-2層

25．10YR5/1　褐灰　粘質土　シルト主体　粗砂～中砂若干あり　管状 Fe あり　貼り土？ 1-1層時点

26．2.5Y5/1　黄灰　砂質土　細砂～シルト主体　中砂あり　管状 Fe あり

27．2.5Y5/1 ～ 6/1　黄灰　砂質土　中砂～シルト主体　粗砂若干あり　斑状 Fe あり　1-2b 面遺構埋土？

28．10Y5/1　灰　シルト　ラミナあり　1b 層？　2-1面島畠肩部に堆積

29．19 に 18 のブロック入る　1-2面遺構埋土

30．「7.5Y4/1　灰　シルト」内に「5Y6/1　灰　細砂～粗砂」のラミナあり　Fe・Mn 斑あり　1b 土坑埋土

31．30 のブロック間に 16 の砂

32．2.5Y5/2　暗黄灰　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂あり　小礫わずかにあり　斑状 Fe あり　１層時点盛土

33．5Y4/1　灰　砂質土　細砂～シルト主体　極粗砂～小礫あり　斑状 Fe あり　１層時点盛土

34. 10Y4/1　灰　粘質土　シルト～細砂主体　中砂若干あり　斑状 Fe・Mn 若干あり　2-2層～ 2-1層時点盛土

35. 33 と 34 のブロック

36. 5Y6/2灰オリーブ　粘質土　シルト～細砂主体　小礫あり　管状 Fe あり　撹乱埋土

37.「2.5Y5/3　黄褐　砂質土　細砂～シルト主体　中砂～粗砂あり　Fe あり」・「5Y5/1　灰　砂質土　細砂～シルト主体　極粗砂～小礫あり（33 に似る）」のブロック　1 層時点盛土

38. 36 に中砂～細砂混濁　杭痕

39. 5Y5/1 ～ 5GY5/1　灰～オリーブ灰　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂～中砂あり　管状 Fe 若干あり　1 ～ 3 ㎝のブロック状構造　締まりは良い　2-3層

40. 5Y5/1　灰　砂質土　細砂～シルト主体　中砂～粗砂多し　上面平坦　2-4層

41.「2.5Y6/3 ～ 6/6　にぶい黄～明黄褐　中砂～細砂」内に「10Y5/1 ～ 6/1　灰　シルト（2-4層？）」の 1 ～ 3 ㎝のブロック下面に足跡多数　下部に粗砂のみでラミナ残る部分あり　2-4b-1層（2-4層の直接の b 層）　洪水砂と 40 より古い 2-4層を粗く攪拌したものか

42. 10Y5/1 ～ 6/1　灰　シルト　ラミナあり　2-4b-2層　43 と同じ洪水の後半の堆積

43. 5Y6/1　灰　中砂～細砂　ラミナあり　2-4b-3層　42 と同じ洪水の前半の堆積　二つで（その 8）の 3-1b 層

44. 10Y5/1　灰　粘質土　シルト主体　細砂若干あり　層内コンボリュートラミナあり　3-1層

45. 2.5Y6/4 にぶい黄　中砂～細砂　ラミナあり　3-1b 層

46. 10BG5/1青灰　シルト　管状 Fe あり　3-2層

47. 10BG4/1　暗青灰　粘質土　シルト～粘土主体　粗砂～小礫わずかにあり　灰白色の結核若干あり　4 層

48. 2.5Y7/4　浅黄　粗砂　Fe あり　ラミナあり　2-4b-1層　乱れる（荒起し？）前の洪水砂の状態

49. 7.5Y5/1灰　砂質土　細砂～中砂主体　シルトあり　粗砂わずかにあり　斑状 Fe（10YR4/4褐）多し　2-1層　島畠耕土？

50. 5Y5/1 ～ 2.5GY5/1　灰～オリーブ灰　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂あり　49 と似る　2-2層　島畠耕土？

51.「2.5Y7/2　灰黄　中砂」内に 2-1 ～ 5層の 20 ～ 5 ㎝のブロック多し　1b 土坑埋土

52. 39 のブロックと中砂　2-3面遺構埋土

53. 5GY4/1　暗オリーブ灰　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂あり　2-3層時点　新しい島畠の盛土（東へ拡張）

54. 5Y5/1　灰　砂質土　細砂～シルト主体　中砂～粗砂あり　53 と同じ島畠盛土

55. 53 のブロック土　53 と同じ島畠盛土

56. 39 とほぼ同質　島畠拡張以前の 2-3層水田耕土

57. 5GY4/1暗オリーブ灰　粘質土　シルト～細砂主体　粗砂あり　小礫わずかにあり　3-1層時点島畠拡張盛土？

58. 2.5Y5/6 ～ 7/6　黄褐～浅黄　粗砂～中砂　ラミナあり　2-1b 層相当　島畠の芯の洪水砂

59. N5/0灰　細砂～シルト　ラミナあり　2-1b 層

60. 2.5Y5/6 ～ 7/6　黄褐～浅黄　粗砂～中砂　ラミナあり　2-4面で島畠を西に拡張させた芯になる洪水砂　2-4b-1層相当

61. N5/0灰　細砂～シルト　ラミナあり　60 と同じ性格　2-4b-1層相当

62. 2.5Y5/6 ～ 7/6　黄褐～浅黄　粗砂～中砂　ラミナあり　2-2b 層

63. 7.5GY5/1　緑灰　粘質土　シルト主体　粗砂～小礫あり　5 ～ 4 層時点島畠盛土

64. 5GY5/1　オリーブ灰　粘質土　シルト主体　粗砂～小礫若干あり　9？～ 4 層時点島畠盛土

65. 5Y5/3灰　オリーブ　粘質土　シルト～細砂主体　中砂～小礫あり　斑状 Fe あり　ブロック状構造　2-3 ～ 2-2層時点畦畔（里道？）盛土

66. 5Y5/2　灰オリーブ　粘質土　シルト～細砂主体　粗砂～小礫あり　管状 Fe あり　ブロック状構造　65 に同じ

67. 5Y6/1　灰　細砂　2-1b 層相当

68. 2.5Y5/2　暗灰黄　粘質土　シルト～細砂主体　粗砂若干あり　大礫１個あり　Mn 斑あり　2-2層時点遺構埋土？

69. 10YR5/2　粘質土　シルト主体　粗砂～小礫若干あり　斑状 Fe・Mn 斑あり　ブロック状構造　2-2層時点盛土

70.「10GY5/1　緑灰　シルト」・39（2-3層）・40（2-4層）の 15 ～５㎝のブロックと粗砂～小礫わずかにあり　2-3面遺構埋土？

71. 46（3-2層）・44（3-1層）・47（４層）・40（2-4層）・39（2-3層）の 15 ～３㎝のブロック　同上

72. 2.5GY5/1　オリーブ灰　粘質土　シルト主体　細砂若干あり　中砂わずかにあり　７層候補

73. 5GY5/1　オリーブ灰　粘質土　シルト主体　細砂若干あり　中砂～粗砂わずかにあり　７層の畝溝？

74. 2.5Y4/4　オリーブ褐　粘質土　シルト主体　細砂あり　Fe・Mn 粒あり　８層

75. 2.5Y4/6　オリーブ褐　砂質土　細砂～シルト主体　中砂若干あり　５㎜ほどの小ブロックわずかにあり　Fe・Mn 粒あり　10-1層（北東側）

76. 2.5Y5/4　黄褐　粘質土　シルト主体　中砂～細砂あり　斑状 Fe あり　10-2面遺構埋土？

77. 10BG4/1 ～ 5/1　暗青灰　粘質土　粘土～極細シルト主体　小礫～粗砂あり　47（４層）より多い　灰白色の結核若干あり　５層

78. 10BG4/1　暗青灰　粘質土　77（５層）より若干暗色　極細シルト～シルト主体　中砂～粗砂わずかにあり　６層

79. 5B4/1　暗青灰　粘質土　シルト主体　細砂若干あり　灰白色の結核あり　高師小僧部分的にあり　８層

80. 7.5GY4/1 ～ 7.5Y4/2　暗緑灰～灰オリーブ　粘質土　シルト主体　細砂若干あり　10-1層（暗色層、西側）

81. 7.5Y5/3 ～ 5G5/1　灰オリーブ～緑灰　粘質土　シルト～細砂主体　中砂若干あり　所々小ブロックあり　10-2層

82. 欠番

83. ほぼ 79 と同じ　若干粗砂多し　ブロック状構造　９面南北溝埋土

84. 79 と「5Y5/2　灰オリーブ　粗砂～中砂」の５～２㎝のブロック　同上　（その８）ではこれを 10面遺構として検出

85. 10BG5/1　青灰　シルト　8b 層

86. 80（10-1層）・81（10-2層）の５～２㎝のブロック　10面遺構埋土

87. 7.5GY4/1　暗緑灰　粘質土　シルト主体　粗砂～小礫あり　細砂わずかにあり　島畠耕土？４～３層時点

88. 10G4/1　暗緑灰　粘質土　シルト主体　粗砂～小礫あり　ブロック状構造あり　４～３層時点島畠盛土

89. 5BG4/1　暗青灰　粘質土　シルト主体　粗砂若干あり　小礫わずかにあり　灰白色の結核わずかにあり　６～５層時点島畠盛土

90. 10GY4/1 ～ 10Y4/2　暗緑灰～オリーブ灰　粘質土　シルト～細砂主体　粗砂若干あり　Fe あり　10面遺構埋土

91. 10G5/1 ～ 7.5Y4/3　青灰～暗オリーブ灰　シルト～中砂　斑状 Fe あり　下端部粗砂あり　同上

92. 2.5GY5/1 ～ 7.5Y4/3　オリーブ灰～暗オリーブ　粘質土　シルト～極細砂主体　粗砂～中砂わずかにあり　６層時点島畠盛土

93. 7.5Y5/2 ～ 10YR4/3　灰オリーブ～にぶい黄褐　粘質土　シルト～細砂主体　中砂若干あり　Fe あり　７層候補

94. 10YR4/3 ～ 7.5Y5/1　にぶい黄褐～灰　粘質土　シルト主体　中砂～粗砂あり　管状 Fe 多し　Mn 粒あり　８層？

95. ほぼ 77（５層）と同質　ただし　若干粗砂～小礫多い　５層時点小畦畔盛土

96. 5G5/1　緑灰　粘質土　シルト～細砂主体　中砂若干あり　10-2面遺構埋土

97. 5G5/1 ～ 2.5GY5/1　緑灰～オリーブ灰　砂質土　中砂～シルト主体　部分的に粗砂あり　10-3層？

98. 5Y6/3 ～ N5/0　オリーブ灰～灰　極粗砂～細砂　ラミナあり　11b 層（粗砂系）　12面浸蝕痕内

99. 5Y6/1 ～ N5/0　灰　粗砂～細砂　ラミナあり　植物遺体わずかにあり　11b-1層（砂粒系）

100. 2.5Y5/6 ～ 2.5GY5/1　黄褐～オリーブ灰　シルト～極細砂　部分的にラミナ残る　10-2b 層

101. 2.5Y5/4 ～ 7.5Y5/3　黄褐～灰オリーブ　シルト　炭化物わずかにあり　粒状構造あり　11a 層（西側）

102. 5B5/1　青灰　シルト～極細砂　炭化物のラミナあり　11b-2層（シルト系）

103.「5Y5/3　灰オリーブ　シルト～細砂」・「10GY5/1　緑灰　シルト」のブロック　12面畦畔盛土

104. 5B4/1　暗青灰　粘質土　シルト主体　粗砂あり　12-1層時点畦畔盛土

105. N3/0　暗灰　粘質土　シルト主体　中砂・粒状植物遺体わずかにあり　粒状構造あり　12-1層（微高地２・３部分）

106. 5GY4/1 ～ 5/1　暗オリーブ灰～オリーブ灰　粘質土　シルト主体　中砂～細砂あり　11層

107. 10BG5/1　青灰　シルト～細砂　下部に粗砂あり　ラミナあり　11b-2層（シルト系）

108. 10BG4/1　暗青灰　シルト～極細砂　ラミナあり　11b-2層（シルト系）

109. 2.5Y6/2　灰黄　粗砂～シルト　ラミナあり　10-3b 層

110. 2.5Y5/1　黄灰　小礫～粗砂　ラミナあり　12面1142浸蝕痕洪水堆積

111. N4/0　灰　シルト～極細砂　粒状植物遺体のラミナあり　11b-2層（シルト系）

112. 10BG5/1　青灰　細砂～シルト　ラミナあり　11b-1層（砂粒系）

113. 5BG5/1　青灰　シルト　粒状植物遺体のラミナあり　11b 層洪水途中の浸蝕痕（11b 層シルト系と砂粒系の間）

114. 5Y7/1　灰白　粗砂　ラミナあり　同上11b 層（粗砂系）

115. 5BG5/1 ～ 2.5Y5/4　青灰～黄褐　中砂～細砂　ラミナあり　逆級化（上、中砂～下、細砂）　一部最上部に粗砂あり　11b-1層（砂粒系）

116. 2.5Y5/2　暗灰黄　砂質土　粗砂～細砂主体　シルトあり　ラミナなし　11層？ 11b 層再堆積？

117. 5B5/1 ～ 5PB3/1　青灰～暗青灰　シルト～細砂　ラミナあり　粒状植物遺体あり

118. N7/0　灰白　粗砂～小礫　ラミナあり　11b 層（粗砂系）　シルト系堆積前の破堤的洪水砂

119. 5B3/1　暗青灰　シルト～細砂　ラミナあり　植物遺体あり　12面1142浸蝕痕内堆積

120. N4/0　灰　シルト　わずかにラミナあり　12面1130流路内　11b 層堆積以前の最終堆積

121. N4/0　灰　シルト　わずかにラミナあり　植物遺体若干あり　同上

122. N4/0　灰　粘質土　シルト主体　細砂～中砂若干あり　５～２㎝の植物遺体多し　わずかに土壌化？ 12面1130流路内 11b 層堆積以前の低湿地状堆積か

123. 欠番

124. N4/0　灰　粘質土　シルト主体　細砂～中砂わずかにあり　12-2層 (微高地３部分)

125. N3/0　暗灰　粘質土　シルト主体　粗砂～中砂あり　特に下部に多し　13-2層 (微高地３部分)

126. 5G4/1　暗青灰　粘質土　シルト主体　中砂～粗砂若干あり　下部にラミナ状に植物遺体入る　遺構埋土？

127. 欠番

128.「N5/0　灰　シルト～細砂」と「5Y6/2　灰オリーブ　中砂～粗砂」の互層状ラミナ　西ほど粗粒化　12面1129浸蝕痕内 11b-2層（シルト系）相当

129. N4/0　灰　シルト　極細砂のラミナ若干あり　植物遺体あり　灰白色の結核あり　12面1129浸蝕痕内　11b 層堆積以前沼状堆積

130. N4/0 ～ 3/0　灰～暗灰　粘質土　シルト～粘土主体　極細砂～細砂わずかにあり　12-2層 (低地１東側部分)

131.「2.5GY3/1　暗灰　シルト」内に細砂～中砂・粒状植物遺体のラミナあり　11b-2層（シルト系）

132. 10GY3/1　暗緑灰　シルト～極細砂　粒状植物遺体わずかにあり　ラミナあり　11b-2層（シルト系）

133. 5GY2/1　オリーブ黒　粘質土　シルト主体　細砂～中砂あり　粒状植物遺体わずかにあり　12-1層 (微高地１部分)

134. 10GY3/1 ～ 4/1　暗緑灰　粘質土　シルト主体　細砂～中砂あり　133 よりやや多し　12-2層（微高地１～低地１部分）

135. N3/0 ～ 4/0　暗灰～灰　（一部5Y4/2　灰オリーブ）砂質土　細砂～シルト主体　中砂～粗砂あり「土壌化した砂」 13-2層

（微高地１部分）

136. 5B4/1　暗青灰　シルト　極細砂・粒状植物遺体わずかにあり　13-2b 層？

137. 78（６層）と同質　６層時点坪境畦畔盛土

138. 79（９層）に極粗砂加わる　ブロック状構造　９層時点坪境畦畔盛土

139.「5Y5/3　灰オリーブ　粗砂～小礫」と「10G4/1　暗緑灰　シルト～細砂」の互層状ラミナ　大きめの植物遺体あり　12面1142浸蝕痕内

140. 5G4/1　暗緑灰　粘質土　シルト主体　極細砂～細砂あり　植物遺体わずかにあり　12-2層（微高地２部分）

141. 5BG4/1　暗青灰　粘質土　シルト主体　極細砂～細砂多し　13-1層（微高地２部分）

142. 5BG4/1 ～ 5Y5/3　暗青灰～灰オリーブ　中砂～細砂　やや土壌化　ラミナ残る　13-2b-1層（微高地２東肩部分）

143. 10BG4/1 ～ 3/1　暗青灰　シルト　粒状植物遺体のラミナあり　下半に細砂のラミナあり　13-2b-2層（微高地２部分）

144. N2/0　黒　シルト～粘土　灰白色の結核あり　14層（14-1層）　1609流路以西は 14-1・14-2層の分別できない

145. 142 と 143 のブロック　崩落土か

146. 7.5GY4/1　暗緑灰　粘質土　シルト主体　極細砂～細砂あり　植物遺体あり　1609流路内　13-2b 層相当

147. 142 と 146 の混濁

148. 5G4/1　暗オリーブ灰　シルト～細砂　ラミナあり　粗砂若干あり　粒状植物遺体あり　1609流路内　13-2b 層相当

149. 2.5GY6/1　灰　中砂～小礫　ラミナあり　1609流路14面時点洪水埋積層

150. 5Y5/3　灰オリーブ　中砂～細砂　ラミナあり　12-2b 層（12面1130流路・13面1258流路間）

151. 10G4/1　暗緑灰　シルト　わずかに極細砂・粒状植物遺体あり　同上

152. 5BG4/1　暗青灰　シルト～小礫　ラミナあり　植物遺体あり　混濁した流水堆積　13面1258流路内

153. 5BG4/1　暗青灰　シルト　中砂～粗砂あり　ラミナあり　13面1258流路内

154. 5Y6/2 ～ N6/0　灰オリーブ～灰　小礫～細砂　ラミナあり　13-2b 層（微高地３部分）

155. N3/0 ～ 2/0　暗灰～黒　粘質土　シルト主体　中砂多し　粗砂若干あり　13-1層　（微高地３部分）

156. 125 のブロック土　13-2b 面遺構埋土

157. 10GY4/1　暗緑灰　シルト　12-2b 層（微高地３西肩部分）

158. N3/0　暗灰　粘質土　シルト主体　粗砂～中砂あり　灰白色の結核あり　12 ～ 13層相当（低地３部分）

159. 7.5Y6/1　灰　粗砂～細砂　小礫あり　ラミナあり　13-2b 層（低地３部分）

160. 7.5Y4/1　灰　シルト～極細砂　ラミナあり　13-2b 層

161.「N2/0　黒　シルト」・「5Y3/1　オリーブ黒　粘質土　シルト主体　中砂～粗砂あり」の１～３㎝のブロック

162. N2/0　黒　シルト　細砂わずかにあり　下層との境は漸移的　14層相当

163. 10BG4/1　暗青灰　シルト　わずかにラミナ残る　12-2b 層（低地１部分）

164. 5Y4/1 ～ 2.5Y5/6　灰～黄褐　中砂～細砂　わずかにシルトあり　ラミナなし　13-2b-1層（微高地１部分）

165. 7.5Y3/1　オリーブ黒　粘質土　シルト主体　細砂多し　斑状 Fe わずかにあり　古土壌で本来なら 13-3層と呼ぶべきだが　13面微高地１の一部分にしかない（微高地裾部では２～３層の部分的な古土壌層が見られる）ので　13-2b 層としておく　1609流路東岸ポイントバー最上層に対応

166. N4/0 ～ 10GY6/1　灰～緑灰　シルト　ラミナあり　粒状植物遺体あり　上部細砂降下　13-2b-2層（東半部分）

167. 5B4/1　暗青灰　粘質土　シルト主体　細砂わずかにあり　13-1層相当（低地２部分、1609流路東岸？）

168. 2.5Y5/4 ～ 10GY4/1　黄褐～暗緑灰　細砂～粗砂　中砂主体　ラミナあり　13-2面時点　1609流路埋積洪水堆積

169.「5B4/1　暗青灰　シルト」に「5Y6/3　オリーブ黄　細砂」のラミナ　粒状植物遺体多し　13-2層からの二次堆積

170. N3/0 ～ 4/0　暗灰～灰　細砂～シルト　植物遺体若干あり　やや土壌化　165 と 135（13-2層）の間で堆積　164 と同時期的か　1609流路東岸ポイントバー最上層

171. N4/0　灰　細砂～中砂　ラミナあり　1609流路内　14面以降165（13-3層相当）以前　洪水埋積層

172. 135・164 の混濁　13-2面遺構埋土

173. 5Y6/3　オリーブ黄　中砂　ラミナあり

174. 134 のブロック土　12-2層時点　畦畔盛土

175. N3/0　暗灰　粘質土　シルト主体　細砂若干あり　粒状植物遺体若干あり　12-1層時点畦畔盛土

176. 5B4/1　暗青灰　粘質土　シルト主体　細砂若干あり　粒状植物遺体若干あり　12-2層時点畦畔盛土

177. N4/0　灰　シルト　「10BG5/1　青灰　シルト」の５㎜弱の小ブロックあり　粒状植物遺体あり　締まり悪し　12面1146溝止水堆積

178. 7.5Y5/2　灰オリーブ　粘質土　シルト主体　細砂若干あり　12-1層時点畦畔盛土

179. N4/0　灰　粘質土　シルト主体　細砂～中砂若干あり　粒状植物遺体わずかにあり　３～５㎝のブロック状構造　12-2層時点畦畔盛土

180. 5B4/1　暗青灰　粘質土　シルト主体　細砂わずかにあり　12-1層（低地１部分）

181. 5Y2/1　黒　粘質土　シルト主体　極細砂若干あり　14-1層

182. 10G3/1 ～ 5Y2/1　暗青灰～黒　粘質土　シルト主体　極細砂あり　下部に下層巻き上げあり　14-2層

183. N4/0 ～ 2/0　灰～黒　シルト～細砂　ラミナあり　粒状植物遺体あり　14面1169溝埋土

184. 5G4/1　暗オリーブ灰　シルト～極細砂　ラミナあり　植物遺体若干あり５～２㎝の 14層のブロックあり　13-2b 層（西半部分下部）

185. N3/0 ～ 2/0　暗灰～黒　粘質土　シルト主体　極細砂若干あり　コンボリュートラミナあり　14層

186. 5BG4/1 ～ N4/0　暗青灰～灰　シルト　コンボリュート等乱れ激しい　14-2b-1層

187. 10GY6/1　緑灰　粘質土　シルト主体　中砂若干あり　灰白色の結核あり　Fe あり　暗色ではないが土壌化 B 層か　14-2b-2層

188. 上部「10BG5/1　青灰　シルト」～下部「N5/0 ～ 4/0　灰　細砂」最下部は 189（15-1層）を巻き上げ N4/0 ～ 7.5YR3/1 灰～黒褐を呈す　14-2b-3層

189. 5Y2/1　黒　シルト　15層

190. 5GY4/1　暗オリーブ灰　シルト～細砂　「5Y5/3　黄褐　細砂～中砂」ラミナ状に入る　植物遺体多し　下部に小礫～粗砂あり　ラミナあり　13面1258流路機能時堆積

191. 5Y6/2 ～ 6/1　灰オリーブ～灰　細砂～粗砂　ラミナあり　13面1258流路の底だがその元となった 14面1610溝埋土

192. 5Y6/4　オリーブ黄　中砂～粗砂　ラミナあり　1609流路14面時点堆積　機能時堆積の可能性あり

193.「10YR5/6 ～ 2.5Y6/4　黄褐～にぶい黄　中砂～細砂」と「N4/0 ～ 5/0　灰　シルト」の互層状ラミナ　植物遺体若干あり　13-1 ～ 13-2面間の 1609流路機能時堆積か

194.「N5/0　灰　シルト」と「5Y6/3 ～ 7/3　オリーブ黄～浅黄　中砂～細砂」の互層状ラミナ　植物遺体あり　1609流路東岸ポイントバー最上層～ 13-2面間の流路機能時堆積か

195.「5Y6/4 ～ 7/3　オリーブ黄～浅黄　中砂～粗砂」と「N5/0　灰　シルト」の互層状ラミナ　1609流路東岸ポイントバー堆積　14面～ポイントバー最上層間

196. 10GY6/1　緑灰　シルト　扁平なブロック状に飛び飛びに上下層にはさまる　上面平坦　13-2b-3層 (東半部分下部)

197. N4/0 ～ 3/0　灰～暗灰　シルト　ラミナあり　粒状植物遺体若干あり　下の 14層を巻き上げ　下部ほど暗色　13-2b-4層

多くの調査区でこれの下部を誤認して 14-1層としている

198. N2/0　黒　粘質土　シルト主体　極細砂若干あり　灰白色の結核わずかにあり　14-1層

199. N3/0　暗灰　粘質土　シルト主体　極細砂あり　下層が攪拌されたぼやけた小ブロックあり（生物擾乱）　14-2層　14-1層の耕土の攪拌を免れた　それ以前から形成の自然土壌層

200. 5BG4/1　暗青灰　極細砂～シルト　上からの植物根痕・クラック・生痕多し　14-2b-1層

201. 10G5/1　緑灰　シルト　植物根痕多し　土壌化層序の B 層的土壌化　14-2b-2層　有機分溶脱か　上に A 層的土壌未発達か

202. 10BG5/1 ～ 5Y6/2　青灰～灰オリーブ　シルト～中砂　ラミナあり　植物遺体わずかにあり　14-2b-3層

203. 5B4/1 ～ 2.5Y3/1　暗青灰～黒褐　シルト～極細砂　ラミナあり　上面わずかに土壌化　15層を巻き上げ暗色　14-2b-4層

204. 10YR2/1　黒　シルト　15-1層

205. 2.5Y3/1 ～ 2.5GY5/1　黒褐～オリーブ灰　シルト　粒状植物遺体わずかにあり　ラミナあり　15層巻き上げ　14-2b-4層

206. N4/0 ～ 3/0　灰～暗灰　粘質土　シルト主体　極細砂～細砂あり　上部15-1層との境は漸移的　15-2層　15-1層の下部の土壌化の弱い部分

207. 5GY5/1　オリーブ灰　シルト～細砂　ラミナなし　b 層的土壌化　15-2b 層

208. 7.5Y4/1 ～ 3/1　灰～オリーブ灰　粘質土　シルト主体　細砂あり　粗砂若干あり　16層

209. 2.5GY5/1 ～ 4/1　オリーブ灰～暗オリーブ灰　シルト～細砂　ラミナ残らず　16b 層

210. 5B4/1 ～ 3/1　暗青灰　粘質土　シルト主体　粘土あり　細砂・粒状植物遺体わずかにあり　13-1層（低地 1 部分）

211. 5Y4/1　黄灰　砂質土　細砂～シルト主体　中砂～小礫あり　斑状 Fe・Mn あり　0 層時点盛土

212. 27内に「2.5Y5/1　黄灰　シルト」の２～６㎝のブロック若干あり　同上

213. 5Y5/1 ～ 6/1　灰　細砂～極粗砂　ラミナあり　斑状 Fe・Mn あり

状 Fe 若干あり　1～3㎝のブロック状構造　締まりは良い。

この層が耕作土として機能している期間に島畠の拡張や成立が見られるので、その期間に洪水堆積があったと思われるが、その水成堆積層は一部の島畠基部に見られるのみである。島畠部分と水田部分の耕作土の区別はつかない。

第２－３ｂ層　灰オリーブ　5Y6/2　細砂～中砂　ラミナあり。

わずかに坪境での畦畔や水路で数ヶ所残存するのみである。第２－４ａ層時点から第２－３ａ層時点にかけて拡張される島畠部分でもこの層は残存していない。

第２－４ａ層　灰　5Y5/1　砂質土　細砂～シルト主体　中砂～粗砂多し　上面平坦。

第２層のａ層の中で一番砂質である。それは後述する第２－４ｂ－１層と本来存在していた第２－５ａ層の天地返し時に、洪水砂が混ざったためか。上面はほとんど第２－３ａ層と接しているため、その耕作により平坦で、小畦畔も突出していたはずの頂部を削平され、耕土と不明瞭な切り合いのみを残す。

第２－４ｂ層　この層は調査区内のほとんどの部分で３層に分かれ、各々の質もほぼ一定であったので、ｂ層にさらに枝番号をつけて細分した。

第２－４ｂ－１層　「にぶい黄～明黄褐　2.5Y6/3 ～ 6/6　中砂～粗砂」内に「灰　10Y5/1 ～ 6/1　シルト（2-4 層に似る）」の１～３㎝のブロック　下部に部分的にラミナある砂層残る。

砂層だが、第２層のｂ層の中では層厚もあり、ブロック土を含む。ブロック土は第２－４ａ層から中砂～粗砂を抜いたような土質である。下層上面の状況と合わせると、ブロック土が本来あった第２－５ａ層由来のもので、その上に洪水砂が堆積した後、耕作土を掘り起こし、洪水砂を下にする「天地返し」を行った後の砂層と考えるのが妥当と思われる。07－２調査区の２－４ｂ層にあたる。

第２－５ａ層らしきものは、二十一ノ坪の北と東の坪境付近の一部に、この層の下で薄く残存する。

第２－４ｂ－２層　灰　10Y5/1 ～ 6/1　シルト　ラミナあり　上面に耕作具痕・足跡多数でやや土壌化。

上面の耕作具痕や足跡は規則性がなく、中には砂粒が入る。おそらくは天地返しの作業中に付いたものであろう。上層に含まれるブロックに質が近いながら、水成堆積の痕跡を残す。07－２調査区で「細砂～極細砂が一部ラミナ状に見られる」「土壌化は明瞭でない」２－５ａ層としたものに相当する。耕作土層でないのは下面に遺構が存在しない事からも分かる。直下の層と同じ洪水の後半に堆積した層である。この２層は第２－５ａ層が残存していれば、第２－５ｂ層となるべきものである。

第２－４ｂ－３層　灰　5Y6/1　中砂～細砂　ラミナあり。

層厚は薄いが洪水堆積の砂層である。破堤的な状況でこの層が堆積し、その後洪水が終息に向かう時点で第２－４ｂ－２層が堆積したのであろう。若干、地震のためらしい変形が見られる。

第２層の比較検討　南西に隣接する 07－２調査区の報告書では、２－４ｂ層が池島Ⅰ期地区の２－５ｂ層に、２－５ａ層が３－１ａ層に対応すると考察されているが、先述したとおり 07－２調査区の２－５ａ層は、少なくとも二十一ノ坪においては大部分ｂ層に含むべきと思う。北西に隣接する 02－１・06－２調査区では、２層のａ層は「４層に分層が可能」とし、２－４ｂ層は細分していないが「下部に粘性の強い粘土～シルト、上部に極細砂」とするのが本調査区の第２－４ｂ－１・２層に対応する。

池島Ⅱ期地区の南西端の 05－２調査区ではａ層が５層に分けられ、２－５層・２－５ｂ層の状況が本調査区の第２－４ａ層・第２－４ｂ－１～３層の状況に似るが、二十一ノ坪より高い地形の二十二ノ坪に位置しているのに層が細分されている事や、池島Ⅰ期地区の２－５ａ層が残存している可能性も考えると、断定するにはいたらない。その東隣の 08－２調査区でも５層に分層され、そのうち２－４・５層

が南北坪境の西側にしかないとされ、２－５ｂ層の状況も共通するのを考えれば、南から二十二ノ坪にまで及び、そこで止まる洪水堆積があったため、北側の坪より１層多くなり、その東隣の十五ノ坪はさらに高いため堆積回数が少なく、３層までしか細分されないという事であろう。

本調査区の北東隣の04-２調査区では、２層自体を細分しておらず、部分的には質の違いがあっても、ｂ層は認められないと報告されている。本調査区と接する部分では攪乱で遺存しておらず、その付近で堆積状況が異なっていた可能性が高い。

第３層　これ以下、最古条里までの耕作土層はやや還元的雰囲気になり、シルト主体の粘質土になる。島畠も第２層の状況とはやや断絶がある。時代的にもこの層から下が中世の形成となる。ｂ層がほとんど遺存しないため、小畦畔は上層で同位置に重なるものの他は上部を削平されている。しかし、まれに下層の小畦畔がそのまま継続して使用されるものもある。

第３－１ａ層　灰　10Y5/1　粘質土　シルト主体　細砂若干あり　層内コンボリュートラミナあり。

上面もやや波打つ、地震変形と思われるが、下層との層境には影響が少ない。残存していない第２－５ａ層が耕作土であった時点で、第２－４ｂ－２・３層が滞水層となり、止水層となっていたこの層の上部が変形を受けたものか。第３－２ａ層～第５層の地震変形とは時期が異なる。

第３－１ｂ層　にぶい黄　2.5Y6/4　中砂～細砂　ラミナあり。

調査区西端付近の、足跡などの凹部にのみ残存する層である。

第３－２ａ層　青灰　10BG5/1　シルト　管状 Fe あり。

淘汰良く、シルトのみだが、攪拌されており、耕作土層である。有機分の集積が強くないために比較的明色を呈する。既往の調査でも指摘されるように耕作土として機能していた期間が比較的短いためかも知れない。上面は平坦だが、下面は凹凸激しく、以下第５層まで変形が見られる。層内の変形構造が観察できないのは淘汰が良いためか。第３－１ａ層耕土時点の地震による変形と考えられる。

第３層の比較検討　本調査区ではａ層が２層あった。02－１・06－２調査区では３層あるが、そちらの３－１層は黄褐色系の「シルト混じり砂質土」である。両調査区の境では本調査区の第３－１ａ層の残りが悪いが、質から見ても、そちらの３－２層に対応し、３－１層は本調査区にはないと思われる。

07－２調査区では中砂以上の砂粒を含まず、３－１ａ層が弱還元、３－２ａ層が還元的雰囲気であるのを見ても、本調査区と共通し、そのまま、池島Ⅰ期地区の３－１層・３－２層に対応させても良いと思われる。３－１ａ層上面が上層と「激しく混ざり分離できない箇所あり」とするのは、本調査区でも第３－１ａ層は上面が波打ち、内部構造として地震変形らしき異常堆積構造が見られるのと共通する。

池島Ⅰ期地区の３層は、最大５層に分割されるが、３－３層は島畠の盛土・耕作土などを水田耕作土層と別に、独立して基本層序に入れたものである。３－１・２層が所により細分されているが、ｂ層がほとんど残存せず、土質も細粒であるので、その１回の堆積範囲は狭いと推測でき、坪境の大畦畔や島畠の左右で質や層の累積が異なる事が多いためと理解できる。

04-２調査区ではａ層１層のみで、土色は本調査区の第３-１ａ層に似るものの、「酸化鉄が目立つ」「極粗砂～小礫を含」む古土壌である。また、上面は直上層により削平されているとするのも本調査区と異なる。本調査区と接する西端部分で層が高まり、その上部が現代に攪乱されているので、その付近以西と以東とで異なる形成過程があるものと推測される。

05－２調査区では３層に分割するが、３－３層は３－２面の島畠の下部にのみある耕作土層としている。池島Ⅱ期地区では島畠盛土も耕作土と区別が付きにくい傾向にあるので、これをどう位置づけるか

で、基本層序は異なってくる。３－１・２層は 08－２調査区の坪境西側まで続くので、これが二十二ノ坪の基本的な第３層と考えて良い。08－２調査区の坪境以東では「中砂～粗砂混じりシルト」のａ層１層のみであるが、これは池島Ⅱ期地区現南東端付近の高所、十五ノ坪の第３層の状況であろう。

第４ａ層　暗青灰　10BG1/4　粘質土　シルト主体　粗砂～小礫わずかにあり　灰白色の結核あり。

この層から第５層にかけて灰白色の結核が見られ、池島Ⅰ期地区ではそれにより５層との層境が認識しにくいとしているが、本調査区ではそれほどではない。むしろ、上下面及び層内が激しく変形しているのが目立つ。池島Ⅰ期地区の報告では､「炭酸鉄の集積」を「乾燥した時期」もあった証拠としているが、灰白色の結核は褐色の炭酸鉄の集積とは異なり、むしろ還元的雰囲気の土中で形成されるものであるし、形成は第４ａ層が埋没し、耕土としての機能を停止した後であるので、この層の耕作土であった時期の環境とはなんら関係ないと考える。

第４層の比較検討　第３層との間に第３－２ｂ層というべきシルト～細砂の層は調査区北西部にわずかに認められた程度である。02－１・06－２調査区では普遍的にあるが、東に細粒化していくとされ、07－２調査区では認められないので、二十ノ坪にのみ遺存しているものか。第５層との間にはｂ層は認められない。04－２調査区では、西側はやや酸化するが本調査区と質が似る。しかし、攪乱をはさみ東側では、砂粒は細砂しか含まず「酸化鉄・マンガン斑が目立」ち、様相が違う。この調査区は十七ノ坪のほぼ中央、Y=－33,958 付近で東西の遺構の様相が変るラインがあり、そこを境に耕作土の質も異なるのかもしれない。05－２・08－２調査区では二十二ノ坪で本調査区よりかなり砂礫が多く混じるようだが、それ以外の部分では質が似ており、ｂ層がない事も共通する。

第５ａ層　暗青灰　10BG4/1 ～ 5/1　粘質土　粘土～極細シルト主体　小礫～粗砂あり　灰白色の結核、第４層より多い。

主体粒子は条里制地割りの耕作土中最も細かく、そこに第４層より砂礫が多いのが目立つ。上面は地震変形を受けるがそれは層の半ばで終わり、第８層下面以下に見られる変形とは別の地震変形である。第６層との間にｂ層は遺存しない。

第５層の比較検討　池島Ⅰ期地区の５層は質も似て、共通性は問題ない。しかしそちらでは部分的に２層に分かれる事もあり、「上層の攪拌のため基本的には遺存状況が悪い」とされるが本調査区では約 15 ㎝ほどの層厚があり、安定している。その間の 07－２調査区でも、やや薄くなるが、質も変らず続く。02－１・06－２調査区も本調査区と状況は同じ。しかし、04－２調査区では灰白色の結核についての言及はなく、砂粒は極細砂～細砂が混じり、酸化鉄・マンガン斑が目立つとされる。上面が凹凸するのは本調査区と同じ地震痕跡のようである。南の 05－２・08－２調査区でも、やや酸化し、主体粒子がシルトと少し粗いが、砂礫の混じりや灰白色の結核が観察されており、本調査区とのつながりが同定可能である。締まりも良く、池島Ⅱ期地区では識別しやすい層で、Ⅰ期地区とのつながりも問題ない。

第６ａ層　暗青灰　10BG4/1　粘質土　第５ａ層より若干暗色　極細シルト～シルト主体　中砂～粗砂わずかにあり。

第５ａ層よりはやや厚さが薄いが残りは良い。本調査区で確認される最古の島畠が成立する層である。その島畠盛土は、質は似るが、「暗青灰～オリーブ灰　5BG5/1 ～ 2.5GY5/1　粘質土　シルト～細砂主体　粗砂～中砂あり」と、やや酸化・明色で、主体粒子も混じる砂粒もわずかに粗めである。下面はほとんど第８層と接し平坦で、ｂ層は坪境大畦畔の基部に部分的に見られる程度である。

第６層の比較検討　02－１・06－２調査区での「６層」は、遺存状態が悪いとするが、断面図で見る限

りそうでもない。ただし、土色を「緑黒色　10GY2/1」としており、本調査区とは大きく異なる。本調査区では、十七ノ坪・二十ノ坪でも南側坪境畦畔をはさんで南北の第６ａ層に質の違いは見られなかったが、北に向かって若干暗色化していく傾向はあった。坪内で漸移的に土質が変化していると見て、本調査区の第６ａ層とつながるものとしても問題はなかろうか。

07－２調査区では、６ａ層は層厚が薄く、下面で様々な層と接触し攪拌するため、場所により質の違いが大きいとされる。２層に分層し、６－２ａ層は６－１ａ面島畠下部にのみ遺存し、他調査区との関連は不明とする。それが本調査区の第６ａ層併行の、島畠盛土と考えられる。また 07－２調査区で最も広がりのある「暗青灰色　5B4/1　細砂～粗砂混じり粘質シルト　細礫含む　Fe 管根状に見られる」とされる６－１ａ層が、色調や粒子から見て、本調査区の第６ａ層に対応するものと考えられる。

その観点で池島Ⅰ期地区を見ると、残りが悪い事や「暗青灰　5BG4/1　粗砂混じり砂質シルト」である点からも、池島Ⅰ期地区の６層が本調査区の第６ａ層につながると見て良いだろう。ただし、坪によっては２層に細分される部分もあるらしい。粒子の粗さや層が細分される傾向を見れば、池島Ⅱ期地区より、Ⅰ期地区の方が、土砂が供給される中心に近いと思われる。

04－２調査区では、「灰・暗青灰　7.5Y4/1・5B4/1　極細砂混シルト　粘性強い　酸化鉄含む」とされる６ａ層がつながる。ただし、隣接の 06-２調査区と土色が異なり、本調査区と近いのが疑問である。また、調査区東側では「黄灰　2.5Y5/1　シルト混極細砂～中砂　粘性強い　酸化鉄を含む」と、酸化と明色化が著しく、粒子もかなり粗い。東西の６ａ層は連続していない可能性も考えられる。

05－２調査区では「６層・７層については、当調査区では分層することが困難である。」として、池島Ⅰ期との対応も不明とする。５層と８層の間に、部分的に「シルト質砂の間層」があるとされるので、ほとんど遺存していないのであろうか。

しかし、その東隣の 08－２調査区では、６層は断面図を見る限り、本調査区の第６ａ層と同じく、最古の島畠と併行する時期の耕作土であるようだ。05－２調査区と同じ二十二ノ坪にあたる坪境以西では「暗青灰～灰　5BG5/1 ～ 5Y5/1　極細砂～粗砂混じりシルト」、それ以外では「暗灰黄～灰　2.5Y5/2 ～ 5Y5/1　細砂～粗砂混じりシルト」とされる。本調査区の第６ａ層よりやや明度が高く、酸化が強いが質的には似ていると言える。しかし、５層より粘質とするのは状況的に異なる。

下層の影響で質が異なる部分があるとは言え、広い範囲で土質の連続性が追えるとは言える。ただ、02－１・06－２調査区の土色と、05－２調査区の状況が疑問として残る。

第７層　本調査区で第７層と確定できる耕作土層はなかった。ただ、第６ａ面 315 島畠下部で、第８ａ層との間に、上面に畝立ての残る耕作土層があり、これが第７ａ層の候補とする事ができる。また、同面の 310 島畠も、攪乱を受け層の構造が分かりにくいが、島畠の下部に耕作土の可能性もある層が確認でき、第８ａ面に畝溝状の遺構が残されていた。

315 島畠下部のものは、灰オリーブ～にぶい黄褐　7.5Y5/2 ～ 10YR4/3　粘質土　シルト～細砂主体　中砂若干あり　Fe あり。

310 島畠下部のものは、オリーブ灰　2.5GY5/1　粘質土　シルト主体　細砂若干あり　中砂わずかにあり。

310 島畠下部のものは、土色は攪乱の影響と見れば 315 島畠下部のものと土質に極端な差はないが、距離的に近いのにやや差があるとも言える。また、十六ノ坪内の二つの島畠の下部に残存していただけの層を基本層序に組み入れても良いかという問題もある。

第７層の比較検討　02‐１・06‐２調査区では７層は「暗灰色　N3/0　粘土～シルト」で、十七ノ坪では下層の砂粒を巻き上げ「砂混じりシルト」となり、東に行くほど遺存度が低いとされる。しかし、本調査区では二十ノ坪・十七ノ坪にそのような層は見当たらず、第６ａ層の下に直接第８ａ層が接し、東側では第６ａ層でさえない。層のつながりは確定できない。

07‐２調査区の７層は北半になく、南半の島畠下部・坪境畦畔付近にのみ見られるとされる。「４～６層に比して砂礫を多く含み粗い」「黒色　7.5Y2/1　粗砂～細礫混じりシルト　シルトブロック少量含む」とあり池島Ⅰ期地区の７ａ層と対応するとしている。以上のどの調査区も本調査区の第７ａ層候補とは土色・土質がかなり違うと言える。

池島Ⅰ期地区の７ａ層は「暗緑灰　10G4/1　中～粗砂混粘質シルト」とされ、遺存状況は悪いらしい。ただ、層下面から８・９層に地震変形が報告されており、本調査区の第８ａ層から第10‐２層にかけての地震変形と対応すると考えられる。ただ、本調査区の第７ａ層候補の層下面には地震変形は見られず、第８ａ層も上面は平坦で、変形は層内からである。02‐１・06‐２調査区の断面図では７層下面に地震変形は見られず、07‐２調査区ではその層位で変形が見られる。04‐２調査区では06‐２調査区と質が似た層が良く遺存し、東ほど酸化した土色となって続く。08‐２調査区の第７層は「にぶい黄～暗灰黄　2.5Y6/3～5/2　シルト混じり極細砂層」とどことも質が異なり、地震変形については触れられていないが、６層の島畠の下部にのみ遺存しているのは07‐２調査区と共通する。

全体的に見ると、02‐１・06‐２・04‐２調査区の７ａ層は、明らかに他の７ａ層とは異なり、本調査区の状況から見れば、十七ノ坪・二十ノ坪の南側坪境周辺を除く範囲に広がっているようだ。他の調査区では上層の島畠の下部にのみ残る状況が共通するが、質は場所により大きく異なる。また、地震変形から同時期性を問えば、08‐２調査区と本調査区の第７ａ層（候補）は、明らかに07‐２調査区のものより新しい時期の層と言える。唯一07‐２調査区の７ａ層のみが、池島Ⅰ期の７ａ層と同時期と考えられるが、島畠が第４面になるまで出現しない池島Ⅰ期地区に、遺存度が悪いながらも広範囲に広がる７層と、島畠下にのみ遺存し、黒色層である07‐２調査区のものとは状況が違いすぎると言える。

同時期性から、池島Ⅱ期地区の第７ａ層をまとめると２層に大別できる。第７‐１ａ層は十七ノ坪・二十ノ坪の、南端付近を除く部分に平坦に広がるものと、それ以南で島畠の下部に残る当調査区と08‐２調査区のものの２種類があり、その間には厳密な同時期性は問えない。第７‐２ａ層は07‐２調査区で島畠下部に残るもので、これが、池島Ⅰ期地区の第７ａ層と同時期であると言うしかないだろう。

つまり、池島Ⅰ・Ⅱ期地区では第７層時点で少なくとも２回の土砂供給があったと言える。池島Ⅰ期地区では、地震変形を残す第７‐２ａ層（Ⅰ期地区の「７ａ層」）以外は第６ａ層に攪拌されて消滅した。遺存した第０７‐２ａ層は水田耕作下で酸化・明色化した。07‐２調査区の島畠下の７‐２ａ層は地震変形を留めるので、６ａ層に伴う島畠は第７‐１ａ層時点に成立しているのであろう。その第７‐２ａ層は粘質土系の島畠盛土にパックされ暗い土色を保った。粗い砂粒が入るのはⅠ期地区と共通する。そして２回目の土砂供給の後、池島Ⅱ期地区ではそれ以外の第７‐２ａ層を全て攪拌して第７‐１ａ層が成立するが、第６ａ層成立時には、十七ノ坪・二十ノ坪以外では島畠下にしか遺存しなかった。

なお、福万寺Ⅰ期地区では、島畠が第７層の時点で出現するが、池島Ⅱ期地区では、07‐２調査区の第７‐１ａ層に遡る可能性のある第６ａ面検出の島畠がそれに近い時期の成立と思われる。しかし、それは二十一ノ坪南半に限られるようで、当調査区の第７ａ層候補上面畝立てを見ても、第８層時点のように、坪内で高い部分が畑地、低い部分が水田とされるような状況があったのではないかと推測される。

大部分では島畠の成立は第６層時点まで下るのであろう。

第８ａ層　オリーブ褐　2.5Y4/4　粘質土　シルト主体　細砂あり　Fe・Mn 粒あり。

現地調査時点では、既往の調査の「最古の条里制地割の耕作土は９層」との見解に従い第９ａ層としたものを、整理作業段階で変更した。現地調査時点では第８層が遺存していないと見ていた。

しかし、既往の調査で最古条里制地割りの面とする第９ａ面で、坪境でさえ畦畔が検出されず溝しかない例がほとんどで、耕作土層床面の状況のように思われる事、薄い層が激しく地震変形を受けているために、土質の把握に問題があると思える事などから、池島Ⅱ期地区の、少なくとも本調査区付近では第９ａ層は存在しないと考え、第９ａ層としていたものを第８ａ層に変更した。

最古の条里制地割りの耕作土層で、坪境大畦畔も小畦畔もこの層内から立ち上がる。北東部分など還元の強い部分では土色が「暗青灰　5B4/1」となり、灰白色の結核が見られる部分もある。局所的には高師小僧の形成されている部分もある。この層時点では島畠は見られない。第６面の 315 島畠の下部に第７層候補となる耕作土があり、この第８ａ層の直上層である。また、調査区の南北の一部で、第８ａ面でこの層が遺存せず、直接 10‐１ａ層が露出する部分があった。

第８ａ層の比較検討　02‐１・06‐２調査区の８層は「青灰色 10BG5/1」でやや明度が高いが、質は本調査区の第８ａ層と似ており、つながると見て良いだろう。地震変形が報告されており「上下層合わせて交じり合ったような状況」とされるが、断面図では地震変形は下面のみのようである。直下９面の坪境に溝のみで畦畔が検出されない状況も最古条里制地割りの床面的状況として本調査区と整合する。

07‐２調査区の８層は「灰色　7.5Y5/1　細砂混じり粘質シルト」とされ、遺存状態は悪く、北側にのみ残る。池島Ⅰ期地区の８層と対応するとされる。土色が異なるが、下面遺構のつながりや、８層大畦畔基部の「擬似畦畔」以外畦畔が見られない状況から、本調査区の第８ａ層と対応すると見られる。

池島Ⅰ期地区の８層は「青灰　5B5/1　中～粗砂混じり粘質シルト」とされ、本調査区とは質が異なる。しかし、地形の高い部分が上層の攪拌により遺存しない事や、下面ではほとんど畦畔が検出されないなど、共通する要素はある。地震痕跡は上面から見られるが、先述したとおり、池島Ⅰ期地区で遺存する７層の下面で地震痕跡を残し、本調査区の第８ａ層は直上の第６ａ層に上面が削平されて平坦となったと考えれば整合する。ただ、上層より凹凸のある地形で不連続な部分が多い事や、各部分の土質の違いから、Ⅰ期地区内の各調査区で整合がとれているかやや疑問である。

04‐２調査区では「灰～暗青灰　10Y4/1 ～ 5B3/1」と土色の変化が激しいが、質は「極細砂混シルト」と本調査区と似る。「上部は上層による攪乱で削平」され、比較的平坦のようである。ただ、上下面検出の遺構は、帰属面に不明確な点があり、層的に完全に対応するとは言い切れないものがある。

05‐２調査区の８層は、地震変形が報告されるが、部分的にしか遺存せず、遺構の検出も困難であったとしか報告されていない。ただ、下面の土坑など遺構の在り方は本調査区と共通性がある。08‐２調査区では遺存していないようである。

池島Ⅱ期地区では、南側の高い部分ではほとんど遺存せず、それ以外では、後発的な環境の違いにより土色等が異なるが、土質的にはシルトにやや細砂の混じるものが坪境を越えて広範囲に遺存していると見られる。下層の自然地形を踏襲して、坪内で不整形な高低差を残す事も共通するようである。池島Ⅰ期地区の８ａ層とは、粗い粒子の有無において質が異なるが、直下層の影響であろう。

第８ｂ層　青灰　10BG5/1　シルト。

直下の第 10‐１ａ面のやや窪んだ部分に遺存する薄い洪水堆積層である。調査区西側の方が遺存度

が高い。現地調査時点では第９ｂ層としていたが、先述した理由で変更した。

薄い上に、地震変形により激しく凹凸しているために、断面観察で削っても上下の層の砂粒をひきずる。小型のナイフでこの層の部分のみ削ると、淘汰の良いシルト層と分かり、乾燥すると白っぽくなる事からも古土壌ではないと思われる。また、第 10‐１ａ面との間に他のｂ層はなく、第 10‐１ａ面が低い部分では厚く堆積し、下から第 10‐１ａ面の畦畔が頂部を削平されずに検出される事からも洪水堆積層と判断できる。それらの事から結論を先に言うと、多くの既往の調査区でこの層を古土壌とし、９層としているのではないかと思われる。上下の遺構面の状況からもそれは推測できる。

その上面は第 10‐１ａ面と同時に検出したが、上面は第８ａ層床面の遺構として正方位の溝群が検出され、下面では第 10‐１ａ面の自然地形に合わせた小区画水田が検出されたので、この層のない部分でも、遺構の埋土と方位性で本来の遺構切り込み面が推測可能であった。

第８ｂ層（９層）の比較検討　02‐１・06‐２調査区の９層は土色の幅は大きいが明度は土色帳の５である。検出後酸化しやすい水成堆積層的な特徴であろう。８層に比べ「色調が明るくなる」とも報告される。「上層の地震による変形の影響のためか遺存状態は非常に悪く、ほとんど識別不可能な部分も見られる。」とするが、上下層と混濁したのではなく、層境が激しく凹凸していた状態と思える。上下の遺構の状況も本調査区の第８ｂ層と変らず、特に上面の二十ノ坪・二十一ノ坪境は溝のみで、その溝は本調査区でその上に第８ａ層の坪境畦畔の盛土がのり、条里制地割り施行時の遺構と思われる。以上の事から、この９層は確実に第８ｂ層と改称すべきものであり、第９層は存在しないと言える。

04‐２調査区の９ａ層は、断面図では灰色系統の「極細砂混シルト」とされるが、文章では「極細砂～中砂が主体的に混じる」「粗粒堆積物の目立つ部分も存在している。」などの記載があり、古土壌的である。また、10 面で本調査区では第８ｂ面の特徴的な遺構である正方位の溝群が検出されている。この調査区では８・９・10 面の検出に、なんらかの混乱があるようである。部分的に粗い粒子が混じるのは、断面図で 11 ｂ層と接する部分が多い事と関連するであろう。10 面の遺構が９面の遺構と重複し、一部切込みが９層中に上がるのも確認しているようなので、断面図上の９ａ層は、06‐２調査区との連続で見れば本調査区の第８ｂ層に続くと見て良いだろう。

07‐２調査区の９層は「作土層」とされるが「灰オリーブ　5Y6/2 ～ 7.5Y6/1　細砂混じりシルト」と明度は高い。８層より砂粒の混じりは少ないとされ、島畠下部・坪境畦畔下部の他、北西部でわずかに残ると報告されている。明度や層の遺存状態は水成堆積層的で、上下の遺構の検出状況も本調査区の第８ｂ層と共通する。特に上面の遺構は本調査区の第８ｂ面と連続する溝が確認できる。報告書では「課題もあるが」池島Ⅰ期地区の９層と対応するとするが、これも第８ｂ層と訂正すべきであろう。

池島Ⅰ期地区の９層は、断面図では「5B5/1　青灰　極細砂～細砂混粘土」とされ、文章では「中砂～粗砂の僅かに混じる粘土～シルト」と表現される。「変形構造のため層境が著しく不明瞭な部分もある。」とか、下面の地形が高い部分では「確認できない」とも報告される。９面では「条里に伴うと考えられるような遺構自体は確認され」ず、６世紀後半～８世紀の土器埋納ピットが検出されている。つまりは８世紀以降の耕作土床面であろう。下面は古墳時代の庄内式期～６世紀後半の遺構が多数あり、南西部の微高地には遺構集中部、低地の一部には小区画水田が検出されている。上面の最古の遺構出土遺物と下面の最新の遺構出土遺物に時期差がないのは短期間での堆積である事を示し、上下面の遺構検出状況は本調査区の第８ｂ層と共通性がある。ただし、広大な池島Ⅰ期地区の中で、10 面の二つの微高地部分で層の連続性が切れているのは確実で、全域の９層が本調査区の第８ｂ層に該当すると断言す

るのには躊躇される。だが、池島Ⅰ期地区以西の既往の調査でも「第９層」の再検討は必要であろう。

05－２調査区の９層は「細粒砂からシルトを主体とする砂質泥層（灰色 10Y4/1）」と報告され「相対的に標高の低い北西部や北部に分布する」とされる。断面図上でも削平されたのではなく、10 面の高所から緩傾斜面をやや下がった所に堆積した状況である。上下が変形しているのも見て取れる。その東隣の 08－２調査区では確認されていない。上下面の検出遺構も本調査区の第８ｂ層と整合性がある。

池島Ⅱ期地区の既往の調査で「９層」とされたものは、全て本調査区に習って第８ｂ層とすべきであろう。第８ａ層が条里制地割りの最古の耕作土層であり、第９ａ層と言える層は存在しないと結論できる。また、分層に関しては第６層から第８層にかけて、遺構面の検出に関しては第７面から第８b 面にかけて、幾つかの調査区で不分明なところや混乱があるのも注意を要する。

第 10 層　ｂ層をはさまない二つのａ層とその下に部分的に残る一つのｂ層が認められた。

第 10－１ａ層　第 10－１ａ面で小区画水田を検出した部分を中心に遺存する西側のものと、北東部にのみ残るものがあった。

西側のものは、暗緑灰～灰オリーブ　7.5GY4/1 ～ 7.5Y4/2　粘質土　シルト主体　細砂若干あり。

調査区北東部と南西部では削平を受け遺存しない。耕作土である。

北東部のものは、オリーブ褐　2.5Y4/6　砂質土　細砂～シルト主体　中砂若干あり 0.5 ㎝ほどの小ブロックわずかにあり　Fe・Mn 粒あり。

西側のものとは削平されて遺存しない部分をはさみ、直結しない。耕作土と考えられる。

第 10－２ａ層　灰オリーブ～緑灰　7.5Y5/3 ～ 5G5/1　粘質土　シルト～細砂主体　中砂若干あり所々に 0.5 ㎝弱の小ブロックあり。

ほぼ調査区全域に遺存し、西にいくほど厚く、層厚が 40 ㎝近い部分もある。その厚さや、明度、上下面の遺構の状況から、耕作土層とは考えにくく、自然の古土壌と考えられる。

第 10－２ｂ層　黄褐～オリーブ灰　2.5Y5/6 ～ 2.5GY5/1　シルト～細砂　部分的にラミナ残る。

調査区西半の一部に残り、局所的には粗砂など粗い粒子構成の部分もある。第 11 ａ層が遺存しない部分では第 11 ｂ層と区別がつきにくいが、その上に厚さ 10 ㎝ほどの層としてある。

第 10 層の比較検討　02－１・06－２調査区の 10 層は、ａ層は１層のみである。「オリーブ灰～暗灰 10Y5/2 ～ N3/0」と色の幅が大きいが、東側に行くにつれ極細砂～細砂を含むようになるシルト主体の粘質土で、削平で遺存度が悪くなるという共通点と、断面図上の層厚からすれば、本調査区の西側の第 10－１ａ層に相当すると思われる。10 ｂ層は 02－１調査区の一部にしかないので連続性は追えないが、11 ａ面にのる事から、本調査区の第 10－２ｂ層と同じと見て大過ないだろう。

04－２調査区の 10 ａ層は部分により「青灰～黄灰　5B5/1 ～ 2.5Y4/1」と土色の違いが激しく「極細砂～細砂混シルト」の質は共通するが、断面図上も連続しない。強いて言えば、本調査区から遠い東端の層が、暗色で、Fe・Mn 粒がある点で本調査区の北東側の第 10－１ａ層に類似する。他の部分は、下面の凹部に残る事や、明度５である事から、本調査区の第 10-２ａ層に対応する可能性が考えられる。上面検出の遺構は先述の通り、疑問が残るものである。

07-２調査区の 10 層は「氾濫堆積層である」10-２ｂ層と「その上面の土壌化層である 10-２ａ層」、そして、南半でその上部が分かれた 10－１ａ層が認められる。10－２ｂ層は第 11 面の流路からの堆積物と考えられ、地形的に低い北半では厚さ 50 ㎝を越える部分もある。３層に細分されているが、土質から見て、一回の洪水の一連の堆積と理解できる。本調査区の第 10－２ｂ層に問題なく対応できる。

上部の二つのａ層も対応できそうに見えるが、報告書ではこの調査区の 10 － ２ａ層が 02 － １調査区の 11 ａ層と対応する可能性があるとする。10 － ２ｂ層が調査区北端付近で途切れ、10・11 層が集束しているが、層序的に 10 － ２ｂ層の上で、本調査区とのつながりで見ても 11 ａ層にはならない。07 － ２調査区北半の 10 － ２ａ層は西の低地部１と北東隅の低地部２に存在し、低地部１では 10 － ２ｂ層の影響で砂質、上面で小区画水田検出、低地部２は「９層」直下に黒褐色系シルト質土層とされている。

低地部２は本調査区で第 10 － １ａ層の水田区画が検出された部分と連続し、本調査区でも、現代矢板水路の攪乱付近は第 10 － １ａ層が酸化激しく黒褐色化し、その連続は認められる。つまり本調査区の第 10 － １ａ層が 07 － ２調査区低地部２の 10 － ２ａ層であると言える。低地部１の 10 － ２ａ層も 10 － ２ｂ層の影響で粗い粒子が多く入るだけで、小区画水田が上面で検出される事からも対応できる。

07 － ２調査区南半の 10- １・２ａ層は微高地部分では 10 － １ａ層のみで、それより低い南側で上層の島畠下部に２層に分かれる部分があるらしい。そのため、各部分での 10 － １ａ層の同時期性には疑問が残る。微高地部分のものは「褐色系の砂質土で、暗色が強い部分がみられる」とあるので、低地部１の 10 － ２ａ層に近い可能性が強いようにも思える。南側低部島畠下部残存の 10- １・２ａ層は 10- １ｂ層も確認されているので、本調査区の第 10- １ａ層より上位に新たな水成堆積があって成立したのが、そこの 10- １ａ層と考えられる。ただしその部分の 10- ２ａ層が北側低地部のものと同時期かは不明で、後述の 05 － ２調査区の 10 － ２層と対応するなら、本調査区の第 10 － ２ａ層と対応する事になる。

本調査区の第 10- ２ａ層は、その高さ・厚さから、調査区境付近で 07- ２調査区の「10- ２ｂ層（上層）明黄褐～黄色　2.5Y7/6 ～ 7/8　シルト～細砂　細砂主体」が、本調査区に向けて漸移的に土壌化していったのを、両調査区で観察記録に留めなかったものではないかと考えられる。

池島Ⅰ期地区での 10 層は、ａ層が２層あり、各々にｂ層が伴うとまとめられているが、「南部中央から北西部にかけての」微高地では「局地的な層の堆積が多く見られ」、「東南部～北部にかけて」の低地では「粘性の強い細粒堆積物が顕著」とされ、途切れる所も多く、各調査区の整合性をとることは出来なかったと報告されている。どちらのａ層も自然土壌とされるが、水田区画が検出された部分もあるので耕作土層も含まれていよう。二つのａ層は部分的にｂ層をはさみ、本調査区の第 10 － １ａ・２ａ層と対応しないのは確実である。池島Ⅱ期地区がⅠ期地区より地形的に高く、堆積が少ないので、Ⅰ期地区で洪水堆積と土壌の形成が繰り返される間、本調査区ではほとんど土砂の供給がないまま、土壌化で第 10- ２ａ層の形成が進み、その上部が耕作されて第 10- １ａ層となった、という関係だと考えられる。

05 － ２調査区では 10- １層「暗緑灰～暗青灰　5G4/1 ～ 10BG4/1　シルト質砂」・10- １ｂ層「オリーブ灰　2.5GY5/1　シルト質砂」・10 － ２層「緑灰　5BG4/1　礫質砂」・10 － ２ｂ層「緑灰　5G5/1　シルト質砂」が報告される。これが 07 － ２調査区南側の 10 層に対応するだろう。10-1 層は耕作土、10 － ２層は自然土壌で、池島Ⅰ期地区の 10 － ２層とは対応しないとされる。10 － ２ｂ層は 11 面でこの調査区を横切る 280 流路から溢流したものと考えられる。東側の 08 － ２調査区との境付近では 11 面の地形が高く、10 層は残りが悪いようである。10 － ２層が本調査区の第 10 － ２ａ層に対応する。

08 － ２調査区の 10 層はａ・ｂ層が各々１層である。しかし、ａ層が、集落域・水田域など場所によって土色が異なり、10 面の最古の遺構が庄内式期の井戸だが、10 層に須恵器、10 ｂ層に布留式土器が包含されるなど、実際の堆積は細かく分かれるようである。調査区北東の集落域付近の「褐灰～灰黄褐　7.5YR6/1 ～ 10YR5/2　シルト～極細砂層」が一番古い自然土壌、水田域の「灰黄　2.5Y6/2　シルト～細砂層（マンガン含む）」がそれに次ぐ耕作土層、その他の部分に広がる「暗青灰～オリーブ灰

5BG4/1 ～ 5GY4/1　極細砂～細砂混じりシルト層」が一番新しい耕作土層､ではないかと推測される。おそらく各部分のｂ層もそれに伴い分割され、新しい遺物を含む層もあるのではないかと考える。集落域周辺のａ層が本調査区の第 10 － ２ａ層・05 － ２調査区の 10 － ２層に対応し , 水田検出部分のものが本調査区の第 10 － １ａ層、それ以外の部分が 05 － ２・07 － ２調査区の 10 － １ａ層に対応すると考えられるが、厳密な同質性・同時期性は問えないであろう。

池島Ⅱ期地区の第 10 層をまとめると、07 － ２調査区の中央付近から南北で状況が異なり、細かい堆積が繰り返される南部分と、最初のｂ層の堆積以降、土砂の供給が少なく、単一の土壌層が厚く発達していく北部分に分けられる、しかしそれは、08 － ２調査区北東から本調査区へ、南東から北西に伸びる大きな微高地と、その南西縁辺部の堆積の違いと見る事ができる。

池島Ⅱ期地区で第 10 層の共通基本層序を立てれば、最下のｂ層が共通して第 10 － ３ｂ層（本調査区の第 10 － ２ｂ層)、その上の自然土壌層を第 10 － ３ａ層（本調査区の第 10 － ２ａ層)、その上部を攪拌した耕作土層を第 10 － ２ａ層（本調査区の第 10 － １ａ層、第 10 － ３ｂ層直上でも耕作土層なら含める)、その上に部分的にでもｂ層をはさむ耕作土層を第 10 － １ａ層という形になろう。土質・土色は場所によりかなり異なると思われる。

池島Ⅰ期地区の 10 層の土壌層は、包含遺物の時期により３層ほどにまとめられると言っても、層位学的にはさらに多くに分かれていたものと思われる。池島Ⅱ期地区の未調査部分に関しては、堆積単位は減少傾向にあると思われ、さらに細分される可能性は少ないと考えられる。

第 11 層　当遺跡で弥生時代後期の水田耕作土層で「第１黒色粘土層」と通称される層のある層位であるが、本調査区ではほとんど遺存しておらず、その床面相当の自然土壌層をａ層としている。第 11 ａ面では、わずかに調査区南端付近の凹地に暗色帯と言える第 11 ａ層が遺存しており畦畔が検出できた。それのみが耕作土層である。第 11 ａ面は、ほとんどが第 10 － ２ａ層直下に接している。

ｂ層は三種に分別され、下部のシルト系のもの、上部の細砂～中砂主体の砂粒系のものが普遍的に堆積し、その中に様々な層位で粗砂層がはさまる。シルト系は洪水の始め頃の溢流堆積、砂粒系は洪水後半の破堤堆積と理解でき、粗砂層は、その洪水の途中の様々な段階で、第 12 － １ａ面で浸蝕痕を形成したものや、水路の畦畔を破壊して流れ出た水流によるものである事が判明した。つまり本調査区の第 11 ｂ層は、一回の洪水で堆積したものであると分かった。

第 11 ａ層　暗オリーブ灰～オリーブ灰　5GY4/1 ～ 5/1　粘質土　シルト主体　中砂～細砂あり。

上記の層が調査区北東を中心に一番広域に広がるが、南側に漸移的に変化し、南東隅付近では「暗緑灰　10G4/1　砂質土　細砂～シルト主体　中砂含む　粒状構造あり。」まで変る。西側ではそれを切る形で、「黄褐～灰オリーブ　2.5Y5/4 ～ 7.5Y5/3　シルト　炭化物わずかにあり　粒状構造あり。」の層が形成されている。それらはすべて自然土壌層である。また、南側で第 11 ａ面で水田畦畔が検出できた凹地には、「暗緑灰　5G4/1　粘質土　シルト主体　細砂含む。」の層が確認され、それらより上位にあたる耕作土層と考えられるが、当遺跡で「第１黒色粘土層」と通称される層とはやや色・質が異なる。

第 11 ｂ － １層　青灰～黄褐　10BG5/1 ～ 2.5Y5/4　中砂～細砂　ラミナあり。

場所により色・質の違いが激しい。粒子は「細砂～粗砂」～「中砂～シルト」の間で変るが「砂粒系」とまとめられる。しばしば逆級化構造が見られる。第 11 ｂ層を堆積させた洪水後半の破堤的堆積である。洪水終息時には細粒の堆積があったはずであるが、それは土壌化で 11 ａ層の中に含まれたのであろう。

第 11 ｂ － ２層　青灰～灰　5B5/1 ～ N4/0　シルト～極細砂　ラミナあり　わずかに粒状植物遺体あり。

細砂～中砂がラミナ状に入る部分もあるが、主体的な粒子はどこも同じく、「シルト系」としてまとめられる。下部は第 12 - 1 a 層を巻き上げ、「暗灰　2.5GY3/1・暗緑灰　10GY3/1」まで暗色化するところもある。洪水の始めの段階で流路からの溢流堆積で形成されたものと考えられる。

第 11 b 層（粗砂系）　第 11 b 層内に部分的に入る粗砂層で、切り込み面は第 12 - 1 a 面・第 11 b - 2 層内・第 11 b - 2 面など様々である。第 12 - 1 a 面浸蝕痕・流路内で下方浸蝕しての堆積や、大畦畔を伴う水路の屈曲部分から流出した溝状のものなどがある。多くの層上面が凸面を成す。

既往の調査で、第 11 b 層内で直線的な溝状に存在する粗砂層が確認され、b 層の形成が複数回の洪水により、b 層の途中に土壌が浸蝕された「失われた遺構面」があったのではないかと考えられてきたが、本調査区では、第 11 b 層は一回の洪水により形成され、溝状の粗砂層もあったが、下面遺構との関係から、その洪水の途中の堆積である事が判明した。層内に土壌化の痕跡も認められなかった。

第 11 層の比較検討　02 - 1・06 - 2 調査区では 11 a 層を「灰色 5N4/ の有機物を多く含む粘土～シルト」としているが、部分的な質の違いには触れていない。本調査区の第 11 a 層とつながる 11 b 層は、12 a 面の、低地の浸蝕痕を流路と、流路を溝と間違って把握しているが、浸蝕痕内の、本調査区で言う第 11 b 層（粗砂系）を「11 b 層内からの切り込み」とし、断面でも、第 11 b - 2 層がその前に、浸蝕を免れた低地部分に堆積しているのも把握している。それにも関わらず 11 b 層内に、「土壌化の進行した部分的な層が見られた。」として 11 b 層が複数の洪水により形成され、その間に地表面がかつて存在していたかのように報告する。しかし、断面図には土壌化層は示されず、本調査区の第 11 b 層と問題なくつながるので、この調査区の西北側の一部でのみ土壌化層が確認されたのであろう。

04 - 2 調査区では 11 a 層は東西両端にしか遺存しないが、西が「緑灰　10GY5/1　細砂混シルト」東が「灰　7.5Y4/1　中砂～粗砂混シルト」とされ、西側が本調査区の東側と色も近く、問題なく対応する。自然土壌層と把握される 11 b 層も上部は「シルト～細砂」、「中段には粗流堆積物」、「下部には植物遺体を含む粘土～シルト」という構成で、調査区西側を南東から北西に抜ける 12 面を浸蝕した浸蝕痕を中心に堆積したものと考察されており、浸蝕痕の流芯には「極粗砂～小礫が集中する」としている。本調査区とほとんど同様の状況であり、同じ洪水で浸蝕痕の形成や 11 b 層の堆積が起こったものと見て良いと考える。洪水終息時の堆積も「シルト～細砂」層として残存しているのであろう。

07 - 2 調査区では、a・b 層区別せず、11 - 1～5 層に分割する。「第 1 黒色層」と言える層がなく、a 層である 11 - 1 層が北東部にのみ残存し「オリーブ褐色シルト混じり細砂層」とされるのが、本調査区の西側の第 11 a 層に質が近く、問題なく対応する。その下の b 層は、上位に薄い「粘質シルトの互層」、中位に厚く「粗砂～細礫」、下位に「粘質シルト」があり、本調査区と同じ一回の洪水のセットと考えられる。11 - 4 層はこの調査区で「第 11 b 層流路」とした浸蝕痕に堆積し、本調査区の第 12 面西端の低地を浸蝕した第 11 b 層（粗砂系）に続き、11 - 5 層は下部が暗色になる細粒であるから第 11 b - 2 層に当たる。11 - 4 層が「12 面の低地部分である水田域が流路化して堆積したもの」としながら、「対応する地表面（a 層）が残っていない」と、「失われた遺構面」説にとらわれているが、洪水の途中でのクレバススプレー堆積が実態である。以上の理由と 11 b 層の粗粒堆積の切り合いが不明確なために、本調査区から続く一回の洪水による堆積が、この調査区で途切れているかを検証するのが困難になっている。11 - 3 層も下層から続く洪水の終息時の堆積なのか、別の洪水なのかは不明と言わざるをえない。

池島 I 期地区では黒色粘土層と言える 11 a 層があり、「暗青灰　5PB4/1　中砂～粗砂混じり粘質シルト　有機物・炭多く含む」とまとめられる。南側では b 層をはさみ 2 層に分かれるとするが、福万寺

Ⅰ期地区の 11 － 1 ・11 － 2 層と直結するかは検討が必要としている。11 b 層に関しては、池島Ⅱ期地区に似て、上から、粘土～シルト・砂礫層・粘土～シルトの３層構造が報告されている。しかし、それと相反し、「洪水堆積物中から掘り込まれた溝などが検出され」などの記述がある。この地区では実際に 11 b 層内で土壌化層がはさまる事もあったようで、この層中に 12 － 1 面相当の遺構面が存在していた可能性もあるが、それがどの範囲で言える事なのか、時期の異なる洪水堆積層の分布がどのようになっているのかは、ほとんど検証不能な状態になっている。

05 － 2 調査区では 11 a 層が「暗緑灰～黒　N3/0 ～ N2/0　シルト質砂」で「部分的に土壌化層が２枚に分かれるものの、確定できなかった。」と報告されている。土色からは西方に広がる「第１黒色粘土層」が連続している可能性が高い。11 b 層は「12 面を覆う」「シルト質砂の下層」、「流路内堆積物、及び」「粗砂粒を主体とするシルト質礫の中層、中砂粒を主体とした砂礫層の上層に分けることができる。」として、下層と中・上層とは「層中の礫の比率が異なるため」「停止面が存在する。」とする。断面図で見る限り、12 面検出の２本の流路のうち、西の 285 流路は、12 面の低地で、07 － 2 調査区と本調査区の西側を通過する浸蝕痕であり、調査区より南で、東の 284 流路から破堤したものであろう。中層が 284 流路埋積層と、クレバススプレー的堆積、上層はそれと同時性の高い微高地上の破堤的堆積、下層は破堤以前の溢流的堆積と捉えられる。クレバススプレーが三つの調査区をまたぎ同時期性が高く、上層が本調査区の第 11 b － 1 層、中層が第 11 b 層（粗砂系）、下層が第 11 b － 2 層に同定できる。

08 － 2 調査区では、共通基本層序の 11 a 層を 11 層 11 b 層を 12 層として、その 12 層が３層に分かれる。11 b 層が分厚く、さらに既往の調査での「失われた遺構面」の想定に配慮し、各面で平面的調査を行ったためである。12 － 2 面で若干の土坑と杭列を検出するが、切り込み面は他の面と推測され、第 11 b 層（この調査区の 12 層）の３層は一連の洪水で一挙に堆積したと結論している。11 層は北西部にのみ遺存しており、その中で低い東では「青灰（10BG5/1）シルト」、上面で畦畔が検出されている西側では「褐灰～黒褐（10YR4/1 ～ 3/2）粘質シルト」となる。東側は上層の影響で軽い浸蝕を受け、還元していると見られ、西側は酸化が強いが、05 － 2 調査区と同じ「第１黒色粘土層」の耕作土層が続いている 11 a 層で、本調査区の第 11 a 層より上層と思われる。12 － 1 層は「洪水堆積の中の最終堆積層」とされる「シルトおよび極細砂混じりの細砂層」で、本調査区の第 11 b － 1 層に対応する。12 － 2 層は非常に厚い細礫～粗砂層で下面の流路・溝を埋積する。本調査区の第 11 b 層（粗砂系）に対応する。12 － 3 層は「越流堆積層と考えられ」るラミナのあるシルト層で、本調査区の第 11 b － 2 層に対応する。

池島Ⅱ期地区で第 11 層を概観すると、池島Ⅰ期地区以西に広がる「第１黒色粘土層」は南端部分にしか連続せず、大部分ではその下面の自然土壌層しか第 11 a 層として残存していない。わずかな凹地に残る水田耕土も、西側とはやや質が異なるようである。共通基本層序とするなら、耕作土層を第 11 － 1 ～ 2 a 層、その下の自然土壌層を第 11 － 3 a 層（本調査区の第 11 a 層）とすべきか。第 11 b 層に関しては、おおよそ３層に分けられ、かなり疑問のある 02 － 1 ・06 － 2 調査区の土壌化層の存在以外は、本調査区と 08 － 2 調査区で検証されたように、１回の洪水で堆積したと見て良い。その洪水は 08 － 2 調査区の 13 － 1 面 646 流路（05 － 2 調査区の 284 流路と同一）と、それに続く本調査区の第 12 － 1 面 1130 流路からの洪水である。地区より南側で西側低地に破堤した流れは 05 － 1 調査区から 02 － 1 調査区まで抜けて北上し、本調査区では東の低地に破堤して北上する流れがある。そのクレバススプレー的な堆積の粗砂～小礫の層は、一貫して第 11 b － 1 層と第 11 b － 2 層の間から切り込むので、共通の層序としてはそれを間にはさみ、第 11 b － 1 ～３層とできる。この第 11 b 層の堆積により下面の流

路・低地が埋積され、微地形が大きく変り、その後しばらくは堆積の非常に少ない時期が続く。これは埋積された流路が西のほうに流路変更し、池島Ⅱ期地区から遠のいた事を示すのであろう。

第 12 層　第 12 － 1 a 層・第 12 － 2 a 層・第 12 － 2 b 層に分けられる。a 層はどちらも耕作土層だが、両層の間に間層はない。第 12 － 1 a 面は第 11 b 層堆積時に浸蝕を受けているが、第 12 － 2 a 面は小畦畔の頂部は削平されるが耕作土との切り合いは残り、大畦畔は両層の間で踏襲されるものが多い。第 12 － 2 b 層は微高地上では遺存しない部分が多いが、低地では広範に認められる。

第 12 － 1 a 層　暗青灰～オリーブ黒　5B4/1 ～ 5GY2/1　粘質土　シルト主体　細砂～中砂わずかにあり　粒状植物遺体わずかにあり。

微高地上では酸化、低地では還元が強い。砂粒の量は多い部分もある。低地の浸蝕痕部分には遺存しない他、多くの部分で上部に緩い浸蝕を受ける。当遺跡で「第２黒色粘土層」と呼ばれる層である。

第 12 － 2 a 層　暗緑灰　5G4/1 ～ 10GY4/1　粘質土　シルト主体　細砂～中砂あり。

一部は 10GY 3 － 1 まで暗色化しているが、相対的に第 12 － 1 a 層よりやや明るく、砂粒がわずかに多い。上面は第 12 － 1 a 層の耕作で削平され比較的平坦だが、平面的に、小畦畔盛土と耕作土との切り合いは確認できる。下面はやや緩く凹凸するが、足跡等も少なく、変形は認められない。

第 12 － 2 b 層　場所により「シルト」から「粗砂～細砂」まであり、土色の違いも激しい。しかし、基本的に水成堆積の構造を残し、上から弱い土壌化を受けた部分もある。

東から分布範囲と土色・土質を以下に各個述べる。

低地 1 では「暗青灰　10BG4/1　シルト　わずかにラミナ残る」、微高地 1 では「暗緑灰　10GY4/1　シルト～細砂　ラミナ見えず　やや土壌化」、微高地２に散在するのは「灰オリーブ　5Y5/3　中砂～細砂　ラミナあり」、微高地３の西肩部周辺では「暗緑灰　10GY4/1　シルト」、西端の低地３では「灰　7.5Y6/1　粗砂～細砂　小礫あり　ラミナあり」でやや下方浸蝕あり。

第 12 層の比較検討　02 － 1 ・06 － 2 調査区では、12 a 層を「暗青灰～黒色 2.5GY4/1 ～ 2/1 の極細砂～細砂を含む粘土～シルト」とする。本調査区の第 12 － 1 a 層と質も似て、対応する。低地部分では単層とするが、微高地では「２～３層に分層が可能」と言う。断面図を見ると、３層内の１層は微高地縁辺の大畦畔の盛土である。ただし、この調査区では「高まり」と呼称している。なので、微高地上で基本的には２層に分かれ、それが本調査区の第 12 － 1 － 2 a 層に対応するであろう。12 － 1 － 2 b 層は「明黄褐～暗オリーブ灰色 2.5Y7/6 ～ 2.5GY4/1 のシルト～粗砂」と「灰～暗灰色 N4/0 ～ 3/0 の極細砂を含む粘土～シルト」の２種があるとする。断面図によると層厚は厚く、50 ㎝ほどある所もある。当調査区とは異なり、微高地部分の堆積が多い。おそらく、本調査区より北側で、微高地末端に近い未発達な部分に、北流してきた土砂が堆積したのであろう。シルト～粗砂の層がその流芯付近の層と考えられる。本調査区の第 12 － 2 b 層に問題なく対応する。幾つかの 12 面の遺構から弥生Ⅳ様式の土器が出土している。

04 － 2 調査区では、12 a 層が１層で、b 層も薄くシルトなどの細粒で本調査区の様相に近い。12 面の畦畔から弥生Ⅳ様式前半の土器が出土している。

07 － 2 調査区では 12 a 層を３層に分けるが、「第２黒色粘土層」に同定される 12 － 1 a 層の下で、微高地のものを 12 － 2 a 層、低地「水田部分」のものを 12 － 3 a 層とする。微高地部分では両層の間に「緑灰シルト層の点在が確認できた」としている。微高地と低地の切り合いは確認されていないようだが、微高地の 12 － 2 a 層が耕作土でなければ、切り合い的には耕作土である 12 － 3 a 層が上位にな

るはずであろう。12‐1 a層は「暗青灰 5B3/1 細砂～粗砂混じり粘質シルト」、12‐2 a層はそれに比べ細礫多いとする。12‐3 a層は「灰色 7.5Y5/1 細砂～粗砂混じり粘質シルト、細礫含む」である。粗砂や細礫を含むのが気になるが、これはb層最下層の「粗砂～小礫」層が、部分的にa層直下に接しているためであろうか。b層に関しては 12‐2 b層の残りが悪く、12‐3 b層が厚めなのは、本調査区で第 12‐2 b層が微高地上で薄く、部分的で、低地で厚めなのと良く対応する。ただ、12‐3 b層が西側で厚く、その部分で最下に「粗砂～小礫」層があり、結果として 13 面にはなかった微高地を西側に形成している状況が本調査区とは異なる。どちらのb層も、b層同士で上下関係が明確な部分はなく、本調査区の第 12‐2 b層と対応するとして問題ない。12‐1 面で弥生Ⅳ様式の土器が出土している。

池島Ⅰ期地区の 12 a層（弥生時代中期中葉）は、福万寺Ⅰ期地区の 12‐1 a層（弥生時代中期後葉）より古く、11 b層中に弥生時代中期後葉の「失われた遺構面」があるとの説がある。12 a層は「灰色 N5/0 ～ 4/0 中砂～粗砂混じり粘土～シルト」とされ、高い地形では暗色化し、「黒 2.5GY2/1」まで見られる。また、「小規模な氾濫堆積などにより」部分的には数層に分かれるとされる。12 b層はシルト層が東端付近で厚くなるが、その西に流路状に北に伸びるシルト～粗砂層が見られる。これが 07‐2 調査区の 12 層に含まれる粗砂～小礫を供給したものと思われる。

この 12 a・b層が池島Ⅱ期地区に続くはずだが、池島Ⅱ期地区では各調査区の第 12‐1 a面で弥生時代中期後葉の土器が出土し、福万寺Ⅰ期地区の 12‐1 a面と時期が合う。つまりこれは池島Ⅰ期地区の一部で弥生時代中期中葉とされた 12 層最上面が、地区全体に敷衍できない事を示すと同時に、池島Ⅱ期地区では第 11 b層内に「失われた遺構面」の存在を考える必要もない事も示す。弥生時代中期中葉の面が、池島Ⅰ期地区の一部で独立して存在していたか、もしくは第 12‐1 面が、ただ遺物量が少ないだけで、弥生時代中期中葉～後葉の面であるのか、は検討が必要であろう。

05‐2調査区では、12 a層が、水田検出部分は暗青灰 5B4/1 の「泥質砂」で、微高地は「粗粒砂～中粒砂を主体とするシルト質砂層である。」と報告されている。12 b層も微高地で厚く粗粒、低地で薄く細粒である。08‐2調査区との境にある流路の影響であろう。水田部分の 12 a層が、本調査区の第 12‐1 a層と対応すると見て良く、12 層で弥生Ⅳ様式の土器が出土しており、時期的にも齟齬がない。

08‐2調査区では、13‐1層が本調査区の第 12‐1 a層、13‐2層が本調査区の第 12‐2 b層に対応する。13‐1層は南半微高地では「青灰色（5B5/1）シルト」北東水田部では「灰色（N4/0）極細砂混じりシルト」。13‐2層は流路両岸で厚く、他では薄く堆積し「緑灰（10GY5/1）シルト」。13‐1面でも、13‐2面でも遺構から弥生時代中期後葉の土器の出土が報告されている。

池島Ⅱ期地区全体では、第 12 a層は弥生時代中期後葉の「第2黒色粘土層」であり、それが二つに分かれない部分は、土砂の供給が少なく、同一層が耕作され続けたと見て、第 12‐1 a層と言える。基本的にはa層は二つに分かれる耕作土層とまとめられる。本調査区で微高地上に水田区画とそれにつながる水路が検出されたので、微高地上では耕作土層か自然土壌かは一つ一つについて再検討が必要である。b層は堆積の流芯や流路の自然堤防の比較的粗粒のものと、それ以外のシルト主体のものとに分けられるが、時期の差を考慮する必要はなく、一つにまとめても良いようである。07‐2調査区がやや特異ではあるが、それは池島Ⅰ期地区側の流路の影響と考えられ、そこからも池島Ⅰ期地区のⅡ期地区と隣接する部分も、弥生時代中期後葉から時期的ずれのない第 12‐1 面が広がっていると推測できる。

結論として池島Ⅱ期地区の第 12 層は、第 12‐1 a層・第 12‐2 a層・第 12‐2 b層にまとめられる。

第 13 層　この層は複雑な構成を持つ。ａ層は２層見られる。第 13 － １ａ層は耕作土層である。第 13 － ２ａ層は平面的に第 13 － １ａ層と重複する部分は微高地１・３の一部でしかなく、低地部分には遺存しない。微高地上では自然土壌やその再堆積層・整地土層・耕作土層などが各々狭い範囲で分布し、重なり合うようだが、個々を分別できず、総体として第 13 － ２ａ層とするしかないような状況である。

第 14 面から存続し、調査区中央を北上する 1609 流路は、第 13 － ２ａ面の当初には存続し、第 13 － １ａ面には埋没して低地２になるが、細かい埋没時期は、第 12 － １ａ面からの浸蝕により不明である。

また、第 13 － ２ｂ層内で、微高地１の南側一部や北東裾部、微高地２の北側裾部などで部分的な土壌化層が確認され、第 13 － ２ｂ層が複数回の洪水で形成されたと分かるが、それらの土壌化層は部分的で、また、層位的にも異なるので、基本層序には組み入れなかった。また、1609 流路東岸ポイントバー堆積の最上層も第 13 － ２ａ層より下位の土壌化層であり、そこから集中的に土器が出土する状況もあった。さらに、第 13 － ２ｂ層の最下層は第 14 － １ａ層を巻き上げて黒色化しており、既往の調査ではそれを第 14 － １ａ層と誤認している事が、遺構の検出状況も含め、明らかになった。

第 13 － １ａ層　耕作土層である。微地形により質の差を見せる。以下、東から順に記述する。

低地１：暗青灰　5B4/1 ～ 3/1　粘質土　シルト主体　粘土あり　細砂・粒状植物遺体わずかにあり。

微高地１：畦畔の検出された所に部分的に残ると考えられるが、第 13 － ２ａ層と区別がつかない。

低地２：暗青灰　5B4/1　粘質土　シルト主体　細砂わずかにあり。

1609 流路が埋没した平坦部である。上層からの浸蝕があり畦畔は確認されないが低地１と似る。

微高地２：暗青灰　5BG4/1　粘質土　シルト主体　極細砂～細砂多し。

微高地３：暗灰～黒　N3/0 ～ 2/0　粘質土　シルト主体　中砂多し　粗砂若干あり。

中砂～粗砂が入るのは、この部分の第 13－２ｂ層が粗粒のためか。微高地東半最高所では遺存度低い。

低地３：「黒　N2/0　シルト」・「オリーブ黒　5Y3/1　粘質土　シルト主体　中砂～粗砂あり」の１～３㎝のブロック。

第 12 － ２ｂ層堆積時に流芯があり、若干の浸蝕・攪拌を受けている。

第 13 － ２ａ層　微高地１・３上にのみ遺存する。これも東から順に記述する。

微高地１：暗灰～灰　N3/0 ～ 4/0（一部、灰オリーブ　5Y4/2）砂質土　細砂～シルト主体　中砂～粗砂あり　部分的に炭化物あり。

耕作土層から砂層上部が土壌化したものまで質は様々である。特に微高地南側では炭化物を含む局所的な層が多数重なる状況であった。居住域の存続期間に整地などが行われた結果かもしれない。

微高地３：暗灰　N3/0　粘質土　シルト主体　粗砂～中砂あり、特に下部に多い。

微高地東半最高所付近に遺存する。自然土壌と思われる。

第 13 － ２ｂ層　基本的には水成堆積層だが、微高地１・２部分で幾つかの土壌層をはさみ、数回の洪水堆積により形成されているのは確実である。

東半では部分的なものを除けば４層にまとめられる。最上層から順に記述する。

第 13 － ２ｂ － １層　灰～黄褐　5Y4/1 ～ 2.5Y5/6　中砂～細砂　わずかにシルトあり。

微高地１部分のみで下方浸蝕はなく、1609 流路の自然堤防堆積と思われる。

第 13 － ２ｂ層内部分的土壌化層　層位的には上記の層の直下で数ヶ所に見られる。

微高地１の X= － 149,900 ライン付近から 1310 住居１下付近にかけて「オリーブ黒　7.5Y3/1　粘質土　シルト主体　細砂多し　斑状 Fe わずかにあり」の古土壌層が広がる。土器片を比較的多く含む。

居住域が本調査区内に拡大する直前の地表面と考えられる。

微高地１の北東裾部、微高地２の北西裾部分に、薄いａ・ｂ層のセットが各々二組確認される。傾斜面に堆積する。質も異なり、連続性もないので各々の部分的古土壌の時期的対応は不明である。

第 13‐２ｂ‐２層　灰～緑灰　N4/0 ～ 10GY6/1　シルト　ラミナ・粒状植物遺体あり　上部砂粒降下。

低地１部分では色・質が第 13‐１ａ層と似る。その耕作土層の原材となった層と考えられる。層厚は安定し、西で 30 ㎝、東で 20 ㎝ほど。微高地１ではこの層上面で、部分的土壌化層がはさまる。

第 13‐２ｂ‐３層　緑灰　10GY6/1　シルト。

下層の小さく浅い凹部に点々とのみ残る薄い層であるが、その特徴が指標となりやすい。上面は下層と合わせて平坦となる。どのような条件で形成されたかは不明だが、その上下に土壌化の痕跡はない。

第 13‐２ｂ‐４層　灰～黒　N4/0 ～ 2/0　シルト　ラミナあり　粒状植物遺体あり。

第 14 面の低地に堆積する。第 14 層を巻き上げ、下部ほど暗色を示す。既往の調査の多くで、この層の下部を分層して 14‐１ａ層としている可能性が高いが、色の上下変化も漸移的で、下部にもわずかにラミナの見られる部分もある。05‐２調査区ではこの層に対応する層の上面に土壌化の痕跡が認められ、他の調査区ではしばしば人・鳥・鹿の足跡が確認される。そのため、上層とは異なる時期の洪水堆積で、一時期沼沢状の環境になったと認めても良いと思われる。本調査区でのみ上部が明色化し、直上の第 13‐２ｂ‐３層は足跡内に遺存した層であった可能性もある。しかし、土色のみで第 14 層に含めるより、遺構面の概念からも、基本的に水成層である事からも第 13‐２ｂ層に含めるべきものであろう。

調査区西半では、微高地２の東肩部の中砂～細砂層（図５の 142）が第 13‐２ｂ‐１層、その直下のシルト層（143）が第 13‐２ｂ‐２層にあたる。微高地３の小礫～細砂層（154）は下方浸蝕せず微高地を拡大している様相から第 13‐２ｂ‐１層に対応し、その下のシルト～細砂層（184）は第 13‐２ｂ‐２層に対応するが、直接第 14 層を浸蝕しその小ブロックを層内に巻き上げている。

1609 流路東岸ポイントバー最上層　暗灰～灰　N3/0 ～ 4/0　細砂～シルト　植物遺体若干あり　やや土壌化。

1609 流路東岸は、流路の蛇行の内側にあたり、ポイントバーの堆積が進行していた。そして、第 13‐２ａ層より前の段階でそこに微高地１からの緩斜面が形成され、表面が土壌化している。

そこで集中的に土器が出土した。居住域から投棄されたような状況である。層位的には第 13‐２ａ層と微高地１のｂ層内部分的土壌化層の間で、第 13‐２ａ層が緩斜面の上部に伸びる直下に接している。見かけの層位関係では第 13‐２ａ層より下位だが、微高地上平坦部と流路沿い緩斜面の土壌化の差とも考えられる。部分的土壌化層とは一部接しながら第 13‐２ｂ‐１層をはさむが、ポイントバー上緩斜面で土砂の堆積・流失と土壌化が同時進行していたとすると、同時期併存の可能性もある。土器の出土状況は部分的土壌化層と連続する様相があり、1310 住居１直下の部分的土壌化層からも土器の出土を見る。つまりこの層は微高地１の部分的土壌化層とも第 13‐２ａ層とも時期的に対応する可能性があり、形成時期はその２層をまたぐ期間に位置づけるしかない。

第 13 層の比較検討　02‐１・06‐２調査区では、本調査区の第 13‐１ａ層と同色で質も似た 13 ａ層が報告され、対応する。ただし、部分的質の差と微地形の関係にはふれず、その下の土壌化層にも言及はない。微高地の発達は本調査区より弱い。ｂ層は「全域に厚く堆積する粘土～シルトで構成される明青灰～暗青灰 10BG7/1 ～ 3/1 の氾濫堆積物層」と「灰色 N5/0 などの粘土～シルトからなるｂ層」と二種にまとめてあるが、前者が第 13‐２ｂ‐２層、後者が第 13‐２ｂ‐４層上半に対応するか。また、

14－１層とする層は「ヒシの実などの有機物を比較的多く含んだ湿地性の堆積物層」で、14－２面の一部の凹部にのみ堆積している。上面で足跡が検出されるが踏み込み面は不明で、他に遺構はない。この層は本調査区の第 13－２ｂ－４層下半を土色により分層してしまった可能性が考えられる。ｂ層は西が細粒、東が粗粒の傾向があるともされる。

04－２調査区ではｂ層が東端の落込（低地？）以外は薄く遺存度も低い。ａ層は灰～暗緑灰 N4/0 ～ 10G3/1 のシルトを中心とした粘土～細砂層とされる。ａ層が本調査区の第 13－１ａ層、薄く遺存するｂ層が第 13－２ｂ－２層に対応する。この調査区では、第 14 面が地形的に高いためにヒシの実やアシなどの植物遺体を含む「従来 14－１層とされてきた層」は東側落込内に流水堆積の黒色層があるのみで 13 ｂ層と認識されている。「第４黒色粘土層」と通称される「従来の 14－２層」を 14－１層としており、本調査区の第 13－２ｂ－４層下部を 14－１層と誤認している可能性はない。

07－２調査区では 13－１ａ層と、ｂ層をはさまない 13－２ａ層、部分的に遺存する 13－２ｂ層・13－３ａ層、13－３ｂ層と分層し、13－３ｂ層は３層に細分している。13－１ａ層は「暗青灰　5PB6/1　粘質シルト　緑灰色シルト小ブロック・炭化物点在」とあり、「第３黒色粘土層」・本調査区の第 13－１ａ層に対応する。13－２ａ層はそれより明るい「暗青灰　5PB4/1　粘質シルト」で、上面遺構はなく、「13－１ａ層の攪拌があまり及んでない範囲」としている。耕作深度の変化により取り残された部分なのかは不明であるが、13－１ａ層より遺存範囲は広い。本調査区にはない層である。

13－２ｂ層は調査区南東部分の 13－３ａ面が低い部分にのみ薄く残る層で「青灰～緑灰　5B5/1 ～ 2.5GY6/1　粘質シルト」である。13-３ａ層は「紫灰　5RP6/1　細砂混じり粘質シルト　弱い土壌層」で、「有機物を多く含んでおり、一帯は湿地状の環境が想定できる。」とも言い、13－３ｂ層上面の低い部分にあるとするが、断面図ではほとんどの部分で 13－２ａ層の直下にある。実質この層上面の 13－２ｂ面が 13－２ａ層床面のような状況で、これが耕作土層直下で自然に土壌化した部分である可能性が高いと思われる。その直下の 13－３ｂ層の最上層が「青灰　5B6/1　細砂混じり粘質シルト」で土壌化痕跡がないのもそれを示唆する。13－２ｂ層以下も本調査区にはない層だが、微高地を発達させる本調査区の第 13-２ｂ-１層と同時堆積した低地の層と考える事が妥当と思う。本調査区ではその堆積が薄く、低地での第 13－１ａ層の原材として攪拌されて消滅したのではないだろうか。

13－３ｂ層の上から二番目の層は「オリーブ灰　2.5GY5/1　粗砂主体　ラミナあり。」で、部分的に下方浸蝕をほとんどせずに盛り上がって堆積し、微高地を発達させる。これが本調査区の第 13－２ｂ－１層に相当すると考えられる。この層の裾部にかかり、残された低地に堆積した 13－２ｂ層～ 13－３ｂ層最上層までは、同時期堆積と、その後の小規模な溢流堆積と考えられる。その順で、「青灰　5B6/1　細砂混じり粘質シルト　炭層状に含む」の 13－３ｂ層最下層は、広範囲な事や層厚からも本調査区の第 13－２ｂ－２層に同定できる。また、水田を検出した 14－２ａ面直上の 14－１ａ層は、薄く、部分により色の違いも大きく、炭化物・植物遺体を含む事、そしてその上面では帰属面の不明確な遺構しか検出されていない事から、本調査区の第 13－２ｂ－４層に対応すると考えられる。

池島Ⅰ期地区で 13 層は上から、13 層「灰　N4/0　中～粗砂混じりシルト」、13－２層「灰　N5/0　極細砂混じりシルト」、13 ｂ層「暗灰黄～灰　2.5Y5/2 ～ 5Y7/2　シルト～極粗砂」、13 ｂ層「緑灰～青灰　10GY5/1 ～ 5BG6/1　粘土～シルト」とまとめられている。ａ層は高い部分では砂礫を多く含み、低い部分では土壌化が弱いが「第３黒色粘土層」の「作土層」であるとする。その記載から 13 層が高所部分、13－２層が低地部分のａ層と読めるが、層位的にはおそらく 13－２層が本調査区の第 13－１ａ層、

13 層が第 13 - 2 a 層のように逆転するだろう。13 b 層は粗い粒子のものが上層なので、本調査区の第 13 - 2 b - 1 層と第 13 - 2 b - 2 層に対応すると思われる。14 - 1 層は「植物遺体を多く含む粘土～シルト」で黒褐色～オリーブ黒を呈するが、「層中にヒシの実、アシなどが多く見られ」「人間活動の痕跡は明瞭でない」とされ、泥流的な堆積である本調査区の第 13 - 2 b - 4 層に対応するであろう。

05 - 2 調査区では、断面では、12 面で 285 流路とされた西側のクレバススプレーが 14 面・13 面でも形成されている。東側の 284 流路も 14 面からあり、12 面時点までこれが本流であろう。13 面では 284 流路に沿って微高地があり、南東隅の一段低い場所から水田が検出されている。水田部分の 13 a 層が「細粒砂を主体とする泥砂質（暗青灰色 5PB4/1）」、それ以外は「シルト質砂（暗オリーブ灰色 5GY3/1）の土壌化層」とされる。前者が本調査区の第 13 - 1 a 層、後者が第 13 - 2 a 層に対応する。13 b 層は「礫質粘土質砂（暗緑灰色 5G4/1）の氾濫堆積層」と「極粗砂粒～粗砂粒を主体とする粘土質礫層（暗青灰色 10BG4/1）の流路堆積」があるとするが、どんな層か見当がつかず、本調査区の第 13 - 2 b 層のどれに該当するか不明である。14 - 1 層は低部に堆積した黒色の「シルト質砂の水成層で、上部が土壌化している」とされる。上面に遺構は皆無である。珪藻分析で、湿地～沼沢の環境が考えられ、プラントオパール分析から、14 - 2 層を巻き上げている可能性が指摘されている。本調査区の第 13 - 2 b - 4 層に対応する。上面土壌化の確認により、堆積の停止期間があったのは認めて良いと思われる。

08 - 2 調査区では 14 層が該当する。第 3 黒色粘土層としては「灰色極細砂・細砂混じりシルト層」があり、b 層は「暗青灰シルト層」の他、15 面で調査区より東の流路からきた粗砂～中砂層が下面を浸蝕しながら南東から北西に伸びるらしい。14 面では、15 面から 13 面にかけての流路が西側にあり、その東岸は低地で南東隅に微高地、西岸はすぐ微高地になって 05 - 2 調査区に続く。a 層は本調査区の第 13 - 2 a 層に対応する。b 層では粗砂～中砂層は下方浸蝕するクレバススプレーで青灰色シルトより下層なので、第 13 - 2 b - 1 層ではない。青灰色シルト層も特定できる要素がなく、合わせて第 13 - 2 b 層対応と言うしかない。下の 15 面は弥生時代前期の遺構のある面で、15 層は「既往の調査にはない」層である。既往の 14- 1 層はなく、沼沢状の環境はこの調査区までは及んでいないと考えられる。

池島Ⅱ期地区の第 13 層をまとめると、本調査区で、微高地に第 13 - 2 a 層が形成された後、その上に居住域が成立し、低地を中心に広がる第 13 - 1 a 層直下からも住居址が検出された事から、立地と質の異なる両層の層位的上下関係と時期差が確定できた。a 層は基本的に 2 層にまとめられる。b 層では、本調査区の第 13 - 2 a 層・第 13 - 2 b - 1 層間に 07 - 2 調査区で最低 2 回の洪水堆積が考えられ、本調査区では部分的土壌化層から、第 13 - 2 b - 1 層・第 13 - 2 b - 2 層間で 2 ～ 5 回の洪水堆積があったと認められる。また、05 - 2 調査区の成果から、第 13 - 2 b - 4 層が上層とは異なる時期の洪水堆積と分かる。この状況では全体を通しての細分は無理で、まとめて第 13- 2 b 層とするべきであろう。ただ、下方を浸蝕せず、流路岸で微高地を形成する第 13 - 2 b - 1 層と、第 14 面の水田を埋没させて沼沢状の環境を出現させた第 13 - 2 b - 4 層は、その特徴から鍵層となりやすいとは言える。

また、「従来の 14 - 1 層」本調査区の第 13 - 2 b - 4 層は、あまりに近似する土色から第 14 層に含めていたと思われるが、本来的には、水成堆積層で、上面に遺構のない層として第 13 b 層に含めるべき層であろう。「遺跡のほぼ全域が沼沢化した時期」というイメージが一人歩きした感がある。暗色を示すのは上方明色化から下層巻き上げの可能性が強く、アシの遺体も現地植生にしては細片化し、流入した洪水堆積層の可能性の方が強い。また、もしアシが現地植生で、完形殻の保存率の高い珪藻の構成が資料採取地点の沼沢化を示すとしても、その分析結果が出る環境は、条件さえ整えば 1 年もかからず

に出来上がる。

第 14 層　a 層は 2 層、b 層は 4 層に分けられる。a 層は第 14 - 1 a 層が耕作土層、間に b 層なく第 14 - 2 a 層が自然土壌層である。しかし、1609 流路以西、調査区西半の a 層は、東半の 2 層を合わせたほどの 30 ㎝以上の層厚の部分もあるのに、上下の色・質の変化が漸移的で、断面上では層境が確認できなかった。ただし、平面的には層内で明色化した高さで東半の耕作土床面と同じ状況の遺構面を確認できたので本来は層境が存在すると思われる。地震変形で似た質の層の境が不明瞭になったものか。

b 層内の土壌化痕跡から、本調査区の第 14 層全体は 3 回の洪水堆積から形成されたと考えられる。しかし、調査区南端付近は a 層の下には第 14 - 2 b - 4 層上層しか遺存していないので他の調査区とのつながりには注意が必要である。

第 14 - 1 a 層　黒　5Y2/1 ～ N2/0　粘質土　シルト主体　極細砂若干あり　部分的に灰白色の結核あり。

耕作土層である。遺跡内で「第 4 黒色粘土層」と通称される。層内の変形構造は不明だが、下面が荷重痕と火炎状構造が混じるような変形を見せる。また、西側の低い部分では上面でも変形が見られる。

第 14 - 2 a 層　暗青灰～黒　10G3/1 ～ 5Y2/1　粘質土　シルト主体　極細砂あり　下層のぼやけた小ブロックあり。

自然土壌層である。相対的には第 14 - 1 a 層より明るい。下面の凹凸は、地震変形だけでなく、クラックや植物根痕などの生痕も多い。土壌化が進行し、この層がかなり厚くなった後、その上部を耕作して第 14 - 1 a 層が成立したと考えられる。

第 14 - 2 b - 1 層　暗青灰～灰　5BG4/1 ～ N4/0　極細砂～シルト。

薄い層だが、普遍的に広がる。変形は激しい。

第 14 - 2 b - 2 層　緑灰　10G5/1 ～ 6/1　シルト　上面からやや土壌化。

薄いが普遍的に広がる。変形も激しい。土壌化痕跡から上層とは異なる時期の洪水堆積層と分かる。

第 14 - 2 b - 3 層　上部「青灰～灰オリーブ　10BG5/1 ～ 5Y6/2　シルト」下部「灰　N5/0 ～ 4/0　細砂～中砂」西半では下面が直接第 15 - 1 層に接して巻き上げ、最下部は「灰～黒褐　N4/0 ～ 7.5YR3/1」を呈す　ラミナあり　植物遺体わずかにあり。

厚い b 層で粒子も粗い。上半はやや変形が見られるが、下半ではなくなる。ラミナは西にいくほど判然としない。上記 3 層は 1609 流路より東の南半では下層上面が高くなるにつれ薄くなり、途切れる。

第 14 - 2 b - 4 層　東半のみで、西半では確認できない。上下 2 層に分かれる。

上層：暗青灰～黒褐　5B4/1 ～ 2.5Y3/1　シルト～極細砂　上面わずかに土壌化の痕跡あり　下方は 15 層を巻き上げ暗色　ラミナあり。

直上層と異なる時期の洪水堆積層である。層厚は不安定で、1609 流路以東の南半では上面が高く、第 14 - 2 a 層と接し、下面は第 15 - 1 面 1820 流路埋積砂層との間に薄いシルト層数層をはさむ。

下層：黒褐～オリーブ灰　2.5Y3/1 ～ 2.5GY5/1　シルト　粒状植物遺体わずかにあり　ラミナあり　15 層を巻き上げ、暗色を呈す。

調査区北東付近のみに薄く堆積する。南東部の薄いシルト層のどれかはこの層と対応するか。

第 14 層の比較検討　02 - 1・06 - 2 調査区では、14 - 2 層が本調査区の第 14 - 1 a 層・第 14 - 2 a 層に対応する。「炭酸カルシウム塊を含む」とあるが、本調査区でも一部で灰白色の結核が見られた。「黒～青黒色 N2/0 ～ 5BG2/1 のシルトの a 層」である。b 層は 3 層あるが、「灰色 5Y4/1 のシルト～細砂」

が第 14 - 2 b - 1・2 層、「黄褐色 2.5Y5/4 の細砂～粗砂」が、粗砂まであるが第 14 - 2 b - 3 層、「オリーブ黒色 5Y3/1 粘土～シルト」が第 14 - 2 b - 3・4 層の第 15 - 1 層と接する最下部に対応すると思われる。西側部分は第 14 面で西に伸びる微高地が形成され、やや状況が異なるようである。

04 - 2 調査区では 14 - 1 a 層・14 - 2 a 層が問題なく本調査区の第 14 - 1 a 層・第 14 - 2 a 層に同定される。ただし、西端部分のみは上層が下層より明度が高く、06 - 2 調査区の 14 - 1 層（本調査区の第 13 - 2 b - 4 層）が及んでいる可能性がある。b 層は東西断面で見ると、中央に上面が盛り上がる流路埋積層があり、その上面の 14 面微高地に土壙墓群が立地している。その東側は層の構成が異なる。西側では「暗オリーブ灰　5GY4/1　シルト～中砂　部分的にラミナあり」の 14 - 2 b 層が本調査区の第 14 - 2 b - 3 層に対応し、「オリーブ黒　7.5Y3/1　粘質シルトと細砂の互層」が第 14 - 2 b - 4 層下層に対応すると思われるが、14 - 2 a 層直下にも薄い黒色層があるなど、異なる点も多い。

07 - 2 調査区の、14 - 1 a 層は本調査区の第 13 - 2 b - 4 層である。ただ、14 - 2 a 層との間に「緑灰色粘質シルトの剥層である」14 - 1 b 層と「暗青灰色の粗砂混じり粘質シルトの土壌層」である 14 - 2 a（上）層があるとする。いずれも部分的である。14 - 1 b 層は第 13 - 2 b - 4 層内の部分的な堆積、14 - 2 a（上）層は第 14 - 1 a 層の再堆積か、上部の有機分が溶脱して明色化した部分と思われる。上面切り込みの遺構はない。14 - 2 a 層は本調査区の第 14 - 1・2 a 層に対応する。この調査区でも「14 - 2 a 層は上層から下層に向けて暗色が漸移的に弱くなり、2 層に細分した部分もあるが境界は不明瞭である。」と報告され、本調査区の西半部分の状況と一致する。また、「北東部分では 14 - 2 a 層と 14 - 1 a 層が混ざった状況が認められ、地震の痕跡と考えられる。」とするのは、境を接する本調査区の西側低地部分で第 14 - 1 a 層上面に見られたものの続きであろう。b 層は上から「細砂～粗砂層」、「シルト層」、「細砂層」と重なるとしている。「細砂～粗砂層」は本調査区と接する北部では途切れて、その下に「弱く土壌化」したシルト層がある。それが本調査区の第 14 - 2 b - 2 層に対応するので、「細砂～粗砂層」が途切れた北側には細粒化した同時期堆積層が広がり、本調査区の第 14 - 2 b - 1 層につながると考えられる。下の「シルト層」と「細砂層」は、シルト層も「細砂ラミナ状にあり」とある事から、合わせて第 14 - 2 b - 3 層に同定できる。b 層最下部に「灰　5Y5/1　細砂混じりシルト　粘性あり　植物遺体含む」の薄い層があるのは、本調査区西半部分で第 14 - 2 b - 3 層最下部が第 15 - 1 層を巻き上げ暗色化した部分に対応する。これらの b 層は北に向かって細粒化し、南側の東西断面を見ると、最上層の細砂～粗砂層が東側では下方浸蝕の少ない自然堤防的な堆積で、西側では下方浸蝕の激しいクレバススプレー的堆積なので、南西方面から土砂が供給されていると考えられる。

池島Ⅰ期地区の 14 - 1 層は、本調査区の第 13 - 2 b - 4 層である。14 - 2 層が、第 14 - 1・2 a 層に対応するが、細砂～小礫を含む率が高い。b 層は上から、「細砂～粗砂の多く混じる粘土～シルト」、「中砂～小礫」、「粘土～シルト」の 3 層に大別されるが、明度が 5 以上で、池島Ⅱ期地区に似ない。強いて言えば、各層の粒子構成からすれば、02 - 1・06 - 2 調査区が近いとは言える。池島Ⅱ期地区の北西部分には、ある程度池島Ⅰ期地区に似た 14 層が分布している可能性はある。

05 - 2 調査区では、14 - 2 層が本調査区の第 14 - 1・2 a 層に対応する。「暗青灰色 5PB3/1 粘土・砂質礫　極粗砂多く含む」と粗粒を多く含むが、微高地上では 2 層に分かれ、上層が「濃い色調」で、下層は「生痕が顕著」という要素が共通する。b 層は上から、級化構造を持つ「砂質礫層」、「細砂の薄層を挟在させるシルト・砂質礫層」、「植物遺体を多く含むシルト質礫層」の 3 層に大別できると報告される。最上層は 07 - 2 調査区の「細砂～粗砂層」に続き、この調査区の方が礫まで含む。つまり、質

は異なるが本調査区の第 14 － 2 b － 1 層に対応する。中層は細砂をラミナ状にはさむ事から第 14 － 2 b － 3 層に対応するものと思われる。最下の植物遺体の多い層は対応する層がないが、下に第 15 面流路の埋積層があり、その同時堆積であろう。15 － 1 層は「シルト質砂（暗青灰色 5B4/1）の水成層である。」とされ、同定は出来ないが、第 14 － 2 b 層最下部で第 15 層を巻き上げた部分と考えられる。

08 － 2 調査区では 15・16・17 層が第 14 層に対応する。17 層が b 層なので 15・16 層が本調査区の二つの a 層に対応しそうだが、弥生時代前期中～新段階の居住域の遺構が 15・16 面で検出され、15 層は耕作土ではないだろう。両層とも濃い黒色で層境が見えにくく、15 層は部分的に数層に分かれるように見え、遺構切り込み面も判然としない状況であった。16 層は、上面でようやく掘立柱建物の柱穴が確認され、自然土壌化層の可能性が高いと考えられる。17 面検出遺構も 16 面切り込みの可能性があるとするのもそれを示唆する。報告書では 16 層を「第 4 黒色粘土層」とするが、05 － 2 調査区の 14 面水田と対応する層ならば、15 層の方がふさわしい。15 層が、耕作土ではないが、遺構埋土や整地土なども含み、本調査区の第 14 － 1 a 層に、16 層が第 14 － 2 a 層に対応するだろう。17 層は東に厚く西に薄く堆積し、「灰白～緑白色シルト」の上層と「灰色シルト～細礫層」の下層に大別でき、居住域の微高地を形成する。礫を含む層が下層なので、これが 05 － 2 層の 15 面流路埋積層と対応し、上層は微高地形成後顕著な土砂の供給がないとすれば、本調査区の第 14 － 2 b － 4 層に対応する可能性が強い。ただし、15 面 725 流路より西の部分は、堆積単位が細かく分かれ、東岸と正確に対応するか不明な点が多い。

池島Ⅱ期地区の第 14 層を総括すると、a 層は上下 2 層の層境が確認できない部分もあるが、本調査区と 08 － 2 調査区の成果から、自然土壌の第 14 － 2 a 層と、その上部に人為が加わった第 14 － 1 a 層に分けられると見て良いだろう。08 － 2 調査区は居住域という特殊な条件だが、第 14 a 面の水田遺構検出部分には耕作土層があるはずで、下面に生痕が多いのは自然土壌の存在を示すものと思われる。

b 層は、本調査区と 07 － 2 調査区で中に土壌化痕跡があり、複数回の洪水で形成されたと見て良い。だが、同時期堆積でも粒子の粗細は場所により異なる。その中で、本調査区の第 14 － 2 b － 3・4 層が流路の東西で、ある程度の層厚を持ち、広がっている。しかし、それより下層に 08 － 2 調査区の微高地を形成する「シルト～細礫層」などもあり、04 － 2 調査区東半以東では違う堆積状況もある。網羅して共通基本層序を立てるなら、本調査区の 14 － 2 b 層の細分に 08 － 2 調査区の「シルト～細礫層」や、15 面流路埋積層を加え、第 14 － 2 b － 1 ～ 5 層とするしかなかろう。

第 14 層上半付近の地震痕跡は各調査区で報告され、小規模な断層なども見られる。05 － 2 調査区の噴砂は本調査区の噴砂と同じ第 13 － 2 b － 4 層上面相当まで達して面的に噴出しており、同時期性が確認できる。一部第 14 － 1 a 面の地震変形も確認され、遺跡内の第 14 面ほぼ全域を水没させる洪水（従来の「14 － 1 層」を堆積させた）の直後に地震が起きた事になる。また、第 14 － 1・2 a 層の層境が不明となる部分が多いのは、地震変形による転動で攪乱された可能性が考えられる。

第 15 層　a 層は「第 5 黒色粘土層」と通称され、自然土壌化層である。黒色を呈する部分と、やや土壌化の弱い部分で 2 層に分けたが、層境は漸移的である。下部には植物根痕などの生痕が多く残る。b 層は、調査深度で確認できた範囲は限られるが、薄く、全体に土壌学の B 層的土壌化が見られる。第 15 － 1 a 面が既に調査区西側では調査深度以下に没し、確認できなかった部分も多い。

第 15 － 1 a 層　黒　10YR2/1 ～ 5Y2/1　シルト。

粒子の淘汰良く、均質である。緩い高低差はあるが、高低で酸化度の差は見られない。下面は生痕が多くあり、かなり深く入る根痕もある。調査区南東部 1820 流路付近では極粗砂がわずかに入る。

第 15 - 2 a 層　灰～暗灰　N4/0 ～ 3/0　粘質土　シルト主体　極細砂～細砂あり。

第 15 - 1 a 層との間の変化は漸移的である。下部の有機分の蓄積が弱い部分である。ただ、生痕はこの層下面から入るものもある。

第 15 - 2 b 層　オリーブ灰　5GY5/1　シルト～細砂　ラミナなし。

層全体が土壌学のＢ層的に土壌化している。ラミナが見られないのはそのためか。

第 15 層の比較検討　15 層は 02 - 1・06 - 2 調査区では深掘り部分でしか確認されていない。ｂ層が厚さ 30 ㎝以上あるように確認され、「有機物を含む」とされるのが、本調査区と異なる。

04 - 2 調査区では、15 - 1 a 層が、「暗オリーブ灰～オリーブ黒　2.5GY3/1 ～ 7.5Y3/1　粘質シルト」と暗色だが、「炭化物を筋状に含む」というのが、ラミナに沿って粒状植物遺体が並んだものと思われ、「粘性シルトと細砂の互層」との記載もあり、水成堆積層で第 14 - 2 b 層最下部と思われる。15 - 2 a 層が「黒色粘質シルト」で、15 - 3 a 層がそれより明色なので、この２層が、本調査区の第 15 - 1・2 a 層にあたる。15 - 3 b 層は「暗オリーブ灰～緑灰　2.5GY4/1 ～ 5G6/1　粘質シルト」で、部分的には 40 ㎝を超える層厚が確認されているようである。

07 - 2 調査区では、15 - 1 a 層が「第５黒色粘土層」とされ、本調査区の第 15 - 1 a 層に問題なくつながる。15 - 1 b 層が２層あるがその上層が「灰　N5/0　細砂混じりシルト」でこれが第 15 - 2 a 層に対応し、下層の「明緑灰　7.5GY7/1　細砂～シルト」が第 15 - 2 b 層に対応すると思われる。なお、ここで、15 - 2 a・b 層としているのは、本調査区の第 16 層と思われる。

池島Ｉ期地区でも一部で 15 層が確認されている。15 - 1 層とされる「シルト～粘土の薄い堆積層」は本調査区の第 14 - 2 b 層最下部の可能性が高い。15 - 2 層とされるのが「第５黒色粘土層」である。ｂ層は断面模式図の記載と本文の記載で上下関係が反対であるが、「中砂～粗砂」層と「粘土～シルト」層があり、「粘土～シルト」層には、倒れた状態のアシの茎の遺体が大量に含まれるらしい。「粘土～シルト」層が上層のようである。

05 - 2 調査区でも 15 - 1 層は「暗青灰色 5B4/1 シルト質砂の水成層」とされており、15 - 2 層が「黒色 N2/0」の「第５黒色粘土層」である。15 - 2 b 層は詳細不明だが、「中粒砂から細粒砂を主体とするシルト質砂層」とされる。

08 - 2 調査区では「第５黒色粘土層」は 18 層に当たる。直下のｂ層はシルト層である。

全体をまとめると、池島Ｉ期地区を含め、多くの調査区で上部を覆う水成層を 15 - 1 層とするのは訂正が必要であろう。それ以外は、「第５黒色粘土層」としてのａ層は問題なくつながる。さらに、ある程度のｂ層の層厚が確認される部分が多いのは、下の第 16 面が低いせいかと思われる。アシの遺体が大量にあるのは第 16 面が完全に湿地的な環境であった事を示唆するが、第 15 面自体も高低差の少なさや、酸化痕跡の乏しさなどを見ると、全体的にはかなり平坦で低湿な環境であったと思われる。

第 16 層　第 15 - 2 b 層の下で、調査深度の T.P.+0.9m に達するまでに、東半を中心に砂粒の混じった古土壌層の広がりを確認できた。暗色化の度合いも弱く、第 15 - 1 a 層とはかなり様相が異なるので、第 16 層とした。低い部分は調査深度限界を超え、流路か、浸蝕痕か、低地か不明であり、平面的に確認できたのはやや高い部分のみであるが、そこで一部は直下のｂ層も確認できた。

第 16 a 層　灰～オリーブ灰　7.5Y4/1 ～ 3/1　粘質土　シルト主体　細砂あり　粗砂若干あり。

酸化や乾燥の痕跡はなく、かなり湿潤な環境で形成された古土壌層のような印象がある。暗色化も弱いが、上層に含まれるアシの遺体から類推すると、葦原に堆積する砂泥はこのようなものだろうか。

第 16 ｂ層　オリーブ灰～暗オリーブ灰　2.5GY5/1 ～ 4/1　シルト～細砂。

層厚は定かではないが、一部で厚さ 20 ㎝足らずで直下に粗砂層の存在が確認できた所もある。

第 16 層は 07 － 2 調査区の 15 － 2 ａ・ｂ層に対応する。その他の調査区では確認されていないようである。池島Ⅰ期地区の部分的な深掘りで 16 ～ 18 層が設定されているが、その 16 層「有機物を含んだ粘土～シルト層」とは関係がない。この第 16 ａ面が今のところ当遺跡最古の旧地表面である。

第３項　池島Ⅱ期地区の基本層序整理の総括

以上、本調査区の基本層序の詳細を述べると共に、池島Ⅱ期地区全体の基本層序の整理・考察を行ってきた。各調査区の層序の対照を行い、当地区の共通基本層序の案も提示してみたのが表２である。

古代～近世　条里制地割り成立以降は、層の質や数も坪毎に異なり、特に南北方向での差が大きい事が分かった。ただ、第３層の細分では、基礎的データもまだ不足し、坪毎の違いなどが抽出できなかった。第７層は、同層位の層同士が、地震痕跡の有無で２時期に分けられるという複雑さが抽出できた。

最古条里制地割りの問題に関しては、少なくとも池島Ⅱ期地区では、第９層とされてきたものが第８ｂ層であり、第９層は存在しないとの結論に至った。遺跡全体でも、坪境の大畦畔さえ検出できない調査区では再検討の必要があると考える。

島畠に関する基本層序上の問題としては、併存する水田耕作土との層位的な関係がある。同時期併存する水田耕作土が複数重なる場合。島畠盛土は最下の水田耕作土より古く、島畠耕作土は最上層の水田耕作土と同時期埋没となる。盛土が複数層に分かれる場合、上層の盛土は、上面がその盛土層下面より低い水田耕土より古いとは言えない。原則を立てるなら、基本層序はあくまでも水田側の耕作土層で立て、島畠の盛土・耕作土は個々にそれとの併行関係を見るべきであろう。また、遺跡東部の問題として、島畠盛土のほとんどが、シルト主体の粘質土であるという事もある。実際、質的には島畠下部に残された古い水田耕作土層と区別が付きにくい。層の厚みや構造に、より詳細な観察が必要と言える。

弥生時代　弥生時代後期から古墳時代にかけて、土砂の供給・堆積が極端に少なく、消滅した層が多いのも池島Ⅱ期地区の特徴である。特に典型的な「第１黒色粘土層」が南西のごく一部にしか遺存していないのは池島Ⅰ期地区以西の調査成果とはかなり異なる。

第 12 面の時期問題　当地区の既往の調査範囲で、ほとんどの部分の第 11 ｂ層が一回の洪水で堆積した事が判明した。それと共に第 12 － 1 面は弥生時代中期後葉に位置づけられた。

従来池島Ⅰ期地区の第 12 － 1 面は弥生時代中期中葉とされ、福万寺Ⅰ期地区の弥生時代中期後葉との時期差が問題視されてきた。そして、第 11 ｂ層中の流路状・溝状の粗砂層や部分的な土壌化痕跡から、その層内に「失われた遺構面」が存在するという説が解決案とされた。だが、池島Ⅱ期地区は福万寺Ⅰ期地区と時期的齟齬がなく、池島Ⅰ期地区の第 12 － 1 面の再検討が必要な状況があると判明した。

微高地　弥生時代水田では、ほとんどの調査区で、微高地上には存在しない事になっている。しかし、本調査では微高地にも水田を検出し、それに取り付く水路も確認できた。

また、微高地上が自然土壌層ならば、併存する低地の水田耕土層は耕作が繰り返されるため、それより層位的に上位になるはずだが、07 － 2 調査区の 12 － 2 ａ・12 － 3 ａ層、池島Ⅰ期地区の 13 層・13 － 2 層の名称の付け方は逆転している事が指摘できる。

流路　弥生時代の堆積状況は、池島Ⅱ期地区既往調査範囲では、第 14 層時点で形成された、南から 05- 2・08 － 2 調査区境に入り、本調査区中央を北上していく流路が、各層でクレバススプレーや自然堤防で微

表2　池島Ⅱ期地区各調査区層序対照表

池島Ⅰ期地区	池島Ⅱ期地区共通基本層序	０９－２	０２－１ ０６－２	０４－２	０７－２	０５－２	０８－２
	十六・十七 二十・ 二十一ノ坪 は 2-1～4層 abセット	2-1～3層 各abセット	同左	2-1a層 のみ	０９－２に 同じ	2-2～4層 各abセット 二十二ノ坪	二十二ノ坪 同左 十五ノ坪 そのうち 2-1～3のみ
2-5a?		2-4a	2-4a	なし	2-4a	2-5	
2-5b?		2-4b-1 天地返し	2-4b上部		2-4b	2-5b	西側、 二十二ノ坪 のみ 同左
		2-4b-2 上面、足跡 耕作具痕	2-4b下部		2-5a 上面、足跡 耕作具痕		
		2-4b-3			2-5b		
	02-1・06-2 の細分に 従うか？		3-1				
			3-1b				
3-1		3-1a	3-2	3層	3-1a	3-1?	3層
		3-1b	3-2b				
3-2・3-3		3-2a	3-3		3-2a	3-2・3-3?	
			3-3b				
4層	4層	4層	4層	4層	4層	4層	4層
5層	5層	5層	5層	5層	5層	5層	5層
6層 2分される 坪あり	6a	6a	6層	6層	6-1a	分層困難 間層あり 遺存悪い？	6層
	6b	6b 坪境のみ			6-2a~8（北） 島畠盛土？		
	7-1a 地震変形なし	7a(候補)	7層 十七・二十ノ坪北側	7層			7層
7a	7-2a 地震変形あり				7層 南半のみ		
8層	8a	8a	8層	8層？	8層（南側）	8層	なし
9層 （一部？）	8b	8b	9層	9層	9層	9層	なし
9層 （一部？）	a層としての ９層はなし						
	10-1a				10-1a南側	10-1	細砂混じり シルトの10a
	10-1b				10-1b	10-1b	上記層下10b
10-1a?	10-2a	10-1a	10層	東端10a	10-2a北側		水田域10a
10-1b?	10-2b		なし				上記層下10b
10-2a?	10-3a 自然土壌	10-2a	10b	その他10a	10-2b-1 10-2a南側	10-2	集落域10a
10-2b?	10-3b	10-2b			10-2b-2・3	10-2b	上記層下10b
11-1	11-1a					11a 一部	
11-2	11-2a	11a 凹地水田部	11a低地			11a	11層
	11-3a 自然土壌	11a 自然土壌	11a微高地	11a	11-1	なし	なし
11b? 粘土シルト	11b-1	11b-1 (砂粒系)	11b	11b上部 シルト～細砂	11-2・3?	11b上層	12-1
11b? 砂礫	11b-2 当層位の粗砂	11b (粗砂系)	11層内切り 込み流路	11b中段 粗粒堆積	11-4	11b中層	12-2
11b? 粘土シルト	11b-3	11b-2 (シルト系)	11b シルト	11b下部 粘土～シルト	11-5	11b下層	12-3

池島Ⅰ期地区	池島Ⅱ期地区共通基本層序	０９－２	０２－１ ０６－２	０４－２	０７－２	０５－２	０８－２
	12-1a 中期後葉	12-1a	12a	12a	12-1a	12a	13-1
12a? 中期中葉 一部のみ の成果？	12-2a	12-2a	12a下層 微高地のみ	なし	12-3a 水田部		
					12-2a 微高地		
12b	12b	12b	12b 粘土～シルト	12b	12-2b 12-3b 切り合いなし	12b	13-2
			12b シルト～粗砂				
13-2 低地部	13-1a	13-1a	13a	13a	13-1a	13a 水田部	なし
					13-2a		
					13-2b		
13層 微高地部	13-2a 自然土壌	13-2a 整地土も？			13-3a	13a 他の部分	14a
13b シルト～ 極粗砂	13-2b-1	13-2b-1			13-3b-1・2 同時堆積？	13b 2種あるが 不明	
		部分的土壌					
13b 粘土シルト	13-2b-2	13-2b-2	13b 青灰系	13b	13-3b-3		14b
足跡		13-2b-3	足跡		足跡		
14-1	13-2b-3 水成堆積層	13-2b-4	灰色系13b ～14-1	なし	14-1a	14-1 上部土壌化	なし
					14-1b		粗砂系14b
					14-2a（上）		
14-2	14-1a	14-1a	14-2	14-1a	14-2a	14-2	15層
	14-2a 自然土壌	14-2a		14-2a		14-2 微高地下層	16層
14-2b？ 砂混じり 粘土シルト	14-2b-1	14-2b-1	14-2b 灰色 シルト～細砂		14-2b 細砂～粗砂	14-2b上層	
	14-2b-2 上面土壌化	14-2b-2		14-2b ？ 黒色シルト	弱く土壌化 したシルト		
14-2b？ 中砂小礫	14-2b-3	14-2b-3	黄褐色 細砂～粗砂	暗オリーブ灰 シルト～中砂	シルト ・細砂	14-2b中層	なし
14-2b？ 粘土シルト +15-1	14-2b-4 上面土壌化	14-2b-4 一部上下2層	オリーブ黒 粘土～シルト	14-2b最下部 +15-1a	細砂混じり シルト	15-1	17層上層
	14-2b-5			15面流路 埋積層		15面流路 埋積層	17層下層
15-2	15a 自然土壌	15-1a 自然土壌	15層	15-2a	15-1a	15-2	18層
		15-2a 土壌化弱い		15-3a	15-1b上層		
15-2b 葦の遺体	15b	15-2b B層的土壌	15b層	15-3b	15-1b下層	15-2b	18b
竪坑部など の16層は 別物	16a 自然土壌	16a			15-2a		
	16b	16b			15-2b		

高地を形成し、若干の流路変更もしながら第 12 層時点まで継続し堆積物を供給する。
各面で 05 － 2 調査区から 07 － 2 調査区・本調査区・02 － 1 調査区を抜けて北上するクレバススプレーの粗砂層は、第 11 b 層でも「11 層内切込み流路」などと流路に誤解される事もあった。また、06 － 2 調査区で、第 12－1 面の低地を下方浸蝕して形成されたクレバススプレーが、流路と誤解されていたが、本調査区で、それが流路から破堤する部分が検出された。

西側と異なる状況がこの地区には現れている。堆積において、生駒山から流下する小河川の影響が強いのがその違いを成していると考えられる。第 14 面から第 12 面にかけて、08 － 2 調査区東端の微高地が本調査区微高地 1 まで拡大していく様相は、その小河川の扇状地的堆積を視野に入れて考える必要がある。今後さらに調査が東側に展開すれば、その傾向は強まるであろう。

土層観察の問題点　また、遺跡全体で、 a 層の上に堆積した暗色の水成堆積層を、下層と同じ a 層として扱う例が続いてきた。既往の調査の大部分における 14 － 1 層・15 － 1 層がそれである。しかし、今回それを訂正する案を提示した。

その混乱は、何の要素を持って a 層と b 層に分ける基準とするかが曖昧だったためで、色調のみで分別している例もある。筆者は土壌学層区分の A 層のみを a 層とすべきだと考える。暗色を示しても、ラミナや級化構造などが確認できれば（地震変形の転動によるラミナは除く）、b 層とすべきである。また、B 層を a 層に分類する混乱も見られた。埋没後の明色化が起こりやすい条件になければ明度 5 以上、下の層境が自然土壌の a 層よりも不明確などの要素で判断し、独立させず一つの b 層の上部とするべきであろう。ならば堆積層に準じる a 層下端も A 層の構造を残す範囲と定義できる。

土質の記載に関しては、地質学的な記載法を使用する例が多いが、逸脱した記載も多い。例えれば「礫質粘土質砂層」などがある。今回の調査では第 1 項末尾に記した記載法で統一している。

第 2 節　各遺構面の調査

第 1 項　第 1 b 面

近世後半の洪水砂層の上面で、洪水復旧のための「1 b 土坑」が多数確認される。その形状と分布は第 2 － 1 面で確認した（図12・図版 1 － 1 ・ 2 － 1 ）。

条里制地割りの坪境が調査区北側で交わり、四つの坪が調査区にかかる。北東が十七ノ坪、南東が十六ノ坪、北西が二十ノ坪、南西が二十一ノ坪となる。十六ノ坪では Y= －33,965 ライン付近で、現地形でも東に 90㎝ほど落ちる段差がある。「十六ノ坪内東落段差」とする。

第 1 b 層下面までは筋掘りによる断面調査のみで、かつ、現代の攪乱で激しく寸断されているために、第 1 層時点での島畠の存在は不明である。しかし、わずかながら島畠の可能性のある段差や層の高低差は認められ、十六ノ坪に南北方向の、二十一ノ坪に東西方向の島畠が存在した可能性はある。

切り込みが第 1 b 面より上の井戸 4 基、肥溜めらしき土坑 2 基を検出した（図版 2 － 5 ・ 4 － 2 ・ 3 ）。しかしいずれも、井戸枠材の製材が回転式鋸によるものであるなど、構造材自体が現代のものであった。

坪境の状況　断面で第 1 層時点の坪境の状況が確認できる。

十六・十七ノ坪境は（図 7 ）、現代では十六ノ坪内東落段差から西端まで、幅1.5m ほどの水路が掘られ、その護岸として径20㎝前後の丸太材が杭として打設されていたが、第 1 層時点では幅0.5 ～ 0.7m の畦畔があり、一部は杭で補強されていたようである。十六ノ坪内東落段差より東の Y= －33,962. 5 ラ

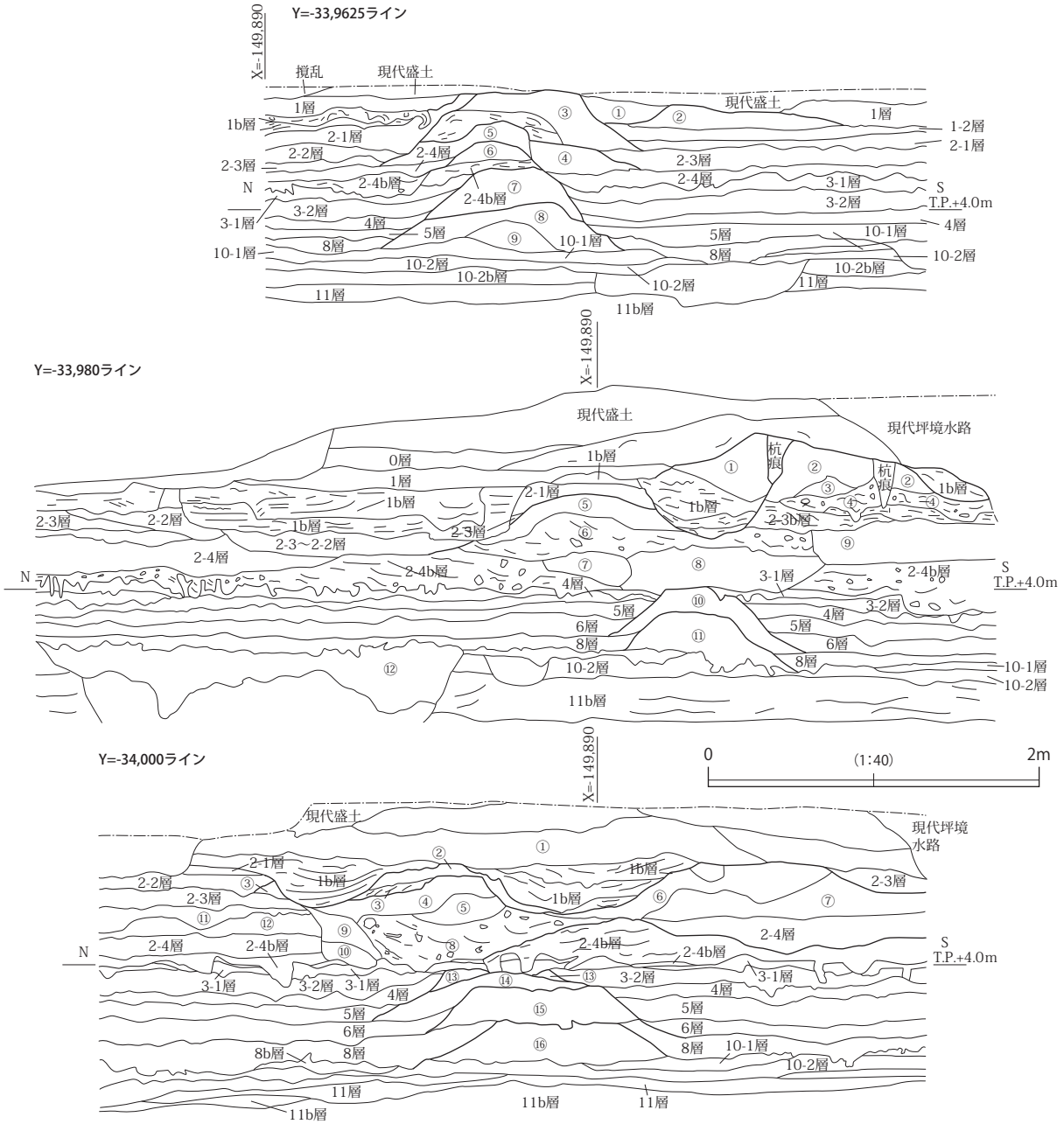


図７　十六ノ坪・十七ノ坪　坪境　断面図

インの断面ではその南にもう一つ畦畔があり（図７の②）、その間に幅0.2m 強の溝がある（図７の①）のを見れば、西側も現代水路で攪乱を受けた部分に水路があった可能性もある。

二十・二十一ノ坪境は（図８）、現代では幅約0.24m のコンクリート水路が通る。第１層時点ではY= －34,020 ラインの断面で、畦畔があるのが分かる（図８の①）が、その前に、第１ｂ層を掘り下げ（①の下の「１ｂ層」）、坪境畦畔の位置を確認している。おそらく第２層時点の坪境畦畔が砂層を盛土としていたために不確かであったのか（図８の④）、第３－１層時点の坪境畦畔の頂部まで至っている。

十七・二十ノ坪境と十六・二十一ノ坪境は、現代に坪境西側に幅６m ほどの水路が掘られたために第１層時点の畦畔等は攪乱されて遺存していなかった。ただ、現代も第２－１面にも水路が存在しているので、第１層時点に大畦畔にはさまれた水路が存在していた可能性はある。

十六ノ坪内東落段差（図９）　調査前の現況では、Y= －33,967 ライン付近に東に下る斜面があり、T.P.+4.5m ほどの平坦面になる。西側の平坦面は T.P.+5.3m ほどである。段差から３m ほど西には埋め

表３　図７十六ノ坪十七ノ坪坪境断面図土色・土質

Y=-33,962.5 ライン断面土色・土質

①　②・③・砂・０層のブロック。１層時点溝埋土。

②5Y4/1灰　砂質土　細砂～シルト主体　中砂～極粗砂あり。1-1層時点畦畔盛土。

③2.5Y5/2 ～ 5/3暗灰黄～黄褐　砂質土　中砂～シルト主体　粗砂～極粗砂若干あり　Fe あり。2-1 ～ 1-2層時点畦畔盛土。

④5Y5/1灰　砂質土　中砂～シルト主体　粗砂～小礫あり　Mn 粒わずかにあり。2-3 ～ 2-2層時点畦畔盛土。

⑤2.5Y5/1黄灰　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂～極粗砂あり　Mn 粒あり。2-3 ～ 2-2層時点畦畔盛土。

⑥5Y5/2 ～ 6/3灰オリーブ～オリーブ黄　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂わずかにあり　Mn 粒あり。2-4層時点畦畔盛土。

⑦2.5Y5/3黄褐　粘質土　シルト主体　粗砂～小礫あり　Mn 斑・Fe あり。５～ 3-1層時点畦畔盛土。

⑧10YR5/4 にぶい黄褐　粘質土　シルト主体　粗砂若干あり　小礫わずかにあり　Fe あり。８層時点畦畔盛土。

⑨10YR5/4 ～ 5/6 にぶい黄褐～黄褐　粘質土　シルト～極細砂主体　中砂～粗砂若干あり　Fe あり。８層時点畦畔盛土。

Y=-33,980 ライン断面土色・土質

①2.5Y5/2 ～ 5/3暗灰黄～黄褐　砂質土　細砂～シルト主体　中砂～粗砂わずかにあり　Mn 粒あり　４～ 12㎝のブロック。１層時点畦畔盛土。

②「2.5Y5/1 ～ 5/2黄灰～暗灰黄　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂若干あり」の１～４㎝のブロック。2-1層時点畦畔盛土。

③　②のブロックと「5Y6/2灰オリーブ　細砂～中砂（2-1b 層）」のブロック。2-1層時点畦畔盛土。

④「2.5Y6/2灰黄　粗砂　ラミナあり」内に 2-1b 層のブロック若干あり。2-1層時点畦畔盛土。

⑤2-4層のブロック間に粗砂。2-3 ～ 2-2層時点畦畔盛土。

⑥2-4b 層とほぼ同質。2-4b 層を盛った 2-3 ～ 2-2層時点畦畔盛土。

⑦2-4層のブロック。

⑧5Y5/2灰オリーブ　砂質土　細砂～中砂主体　シルトあり　粗砂～極粗砂あり（混濁した砂層？）。2-3層成立時点、坪境探索土坑か。

⑨「5Y5/1灰　砂質土　細砂主体　粗砂・シルトあり」と粗砂の混濁　輪郭ぼやけたブロックあり。2-4層相当、畦畔盛土？坪境探索土坑掘削土？

⑩5BG4/1暗青灰　粘質土　シルト主体　粗砂～小礫あり　細砂若干あり　斑状 Fe あり。６～ 3-1層時点畦畔盛土。

⑪10BG4/1暗青灰　粘質土　シルト主体　粗砂若干あり　管状 Fe 若干あり。８層時点畦畔盛土。

⑫10-1・2層の５～２㎝のブロック。

Y=-34,000 ライン断面土色・土質

①「10Y4/1灰　粘質土　シルト～細砂主体　中砂若干あり」・「10YR4/2 ～ 5/2灰黄褐　砂質土　細砂～中砂あり」・「2.5Y5/2灰黄褐　中砂～粗砂」のブロック。１層時点畦畔盛土？

②5Y5/1灰　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂あり　ブロック状構造。2-2 ～ 2-1層時点畦畔盛土。

③2.5Y6/4 にぶい黄　粗砂～中砂　ラミナあり。2-2b 層？

④　⑦のブロック間にわずかに「5Y6/2 オリーブ黄　中砂～粗砂」あり。2-3層時点畦畔盛土。

⑤　④内に 2-4b 層のブロックあり。2-3層時点畦畔盛土。

⑥2-3層と同質のブロック土。2-3 ～ 2-1層時点畦畔盛土。

⑦2.5GY5/1 ～ 5Y5/2 オリーブ灰～灰オリーブ　砂質土　細砂～シルト主体　中砂～粗砂あり。2-3 ～ 2-1層時点畦畔盛土。

⑧2-4層・2-4b 層・3-1層のブロックと粗砂。2-3b 層か。

⑨2-4層・2-4b 層のブロック。2-4層時点溝埋土？

⑩2.5Y5/6 ～ 6/4黄褐～にぶい黄　粗砂～中砂　ラミナあり。2-4層時点溝内流水堆積？

⑪　⑫のブロック間に粗砂あり。2-4・2-3層間整地土？

⑫2.5GY5/1 ～ 5Y5/2 オリーブ灰～灰オリーブ　砂質土　細砂～シルト主体　中砂～粗砂あり　2-4層相当？

⑬5BG4/1暗青灰　粘質土　シルト～細砂主体　中砂若干あり。４～ 3-2層時点畦畔盛土。

⑭10BG4/1暗青灰　粘質土　シルト～極細砂主体　粗砂若干あり。５層時点畦畔盛土。

⑮5B4/1暗青灰　粘質土　シルト主体　中砂多し　粗砂あり　ブロック状構造。６層時点畦畔盛土。

⑯5BG4/1暗青灰　粘質土　シルト主体　粗砂若干あり。８層時点畦畔盛土。

られた溝があった。東側の平坦面は大部分が攪乱されているが、残存部分で見ると、現代耕土直下に第２‐１層と粗砂の入った浅い１ｂ土坑が露出する状況であった。

その段差の下層は、第２‐３面では東側が 10㎝ほど高いのが、第２‐１面では西が 10㎝ほど高くなり、その後、東側は第１層の堆積が少ないまま現状になる。第２‐３層時点で幅２m ほどの里道（図、上⑪・⑫、下⑬・⑭）とその西に溝（図、上⑩、下⑫）が作られ、第２‐１・２層時点で大畦畔を伴う水路となるが、第１ｂ層の堆積を契機に再び幅３m 弱の里道ができ、現代まで、坪内を走る水路と里道として存続した。調査区より約10m 南で東に曲がり、10m ほどでまた南に曲がるという屈曲を見せる。

最初にここに里道・水路を作った理由は不明だが、段差が拡大したのは、第１ｂ層の堆積が、ここの大畦畔を伴う水路にさえぎられ、東側では薄かったためと考えられる。

このラインは、恩智川右岸に伸びる「沖積リッジⅣ－１」と名づけられた現地形での微高地の東端ラインと合致する（井上2010年）。少なくとも本調査区内では第２‐３面以前には、このライン以西の地形が高い傾向はないので、沖積リッジⅣ－１が現状の形になるのは第１ｂ層堆積後という事になる。

１ｂ土坑（図版２‐２・３）　当遺跡で普遍的に見られる、この面から切り込む、密集した溝状の土坑で、「１ｂ土坑」と通称される。切り込み面の異なる同様の遺構もあるので、遺構名としては「溝状土坑」としておきたい。平面的な検出・掘削は第２‐１面検出時におこなった。

第１ｂ層を堆積させた洪水の後、その洪水砂層の下から耕作土を掘り出し、そこに洪水砂を流し込んで洪水砂層の厚みを減らし、その上に掘り出した耕作土で耕地を復旧するためのものと考えられる。

壁はほぼ垂直に立ち、しばしば掘削具痕が見られる。深いものは両側の壁の途中に幅5 ～ 10㎝の段が数段付き、そこに足をかけると上り下りしやすい。底部は掘削具痕の凹凸が残る場合もあるが、おおむね平坦。上端幅は切り込む第１ｂ層の肩崩れも多く見られるが、1.2 ～ 0.8m のものが多い。底部幅は0.45 ～ 0.8m で 0.45m ほどのものが多い。深さは大別すると、0.3 ～ 0.5m で掘削が第２層内に留まるもの、0.6 ～ 0.7m ほどで段が１～２段付き、第２‐４ｂ層の砂層に達し止まるもの、1.2 ～ 1.5m ほどで段が３～５段付き、第11ｂ層上面付近で止まるもの、の３種に分けられる。

十六ノ坪では南北方向に長軸を持つもののみで、東側では間隔が 0.2 ～ 0.3m、西側では間隔１m 前後である。十七ノ坪では、西側に間隔0.4 ～ 0.3m の南北方向、東側に間隔0.2m 前後の東西方向のものが並ぶ。二十一ノ坪では東西方向のみで、間隔は２m 前後である。

二十ノ坪では、間隔0.6 ～ 0.7m ほどの南北方向に長いものの群の間に、東西方向の短いものが並ぶ

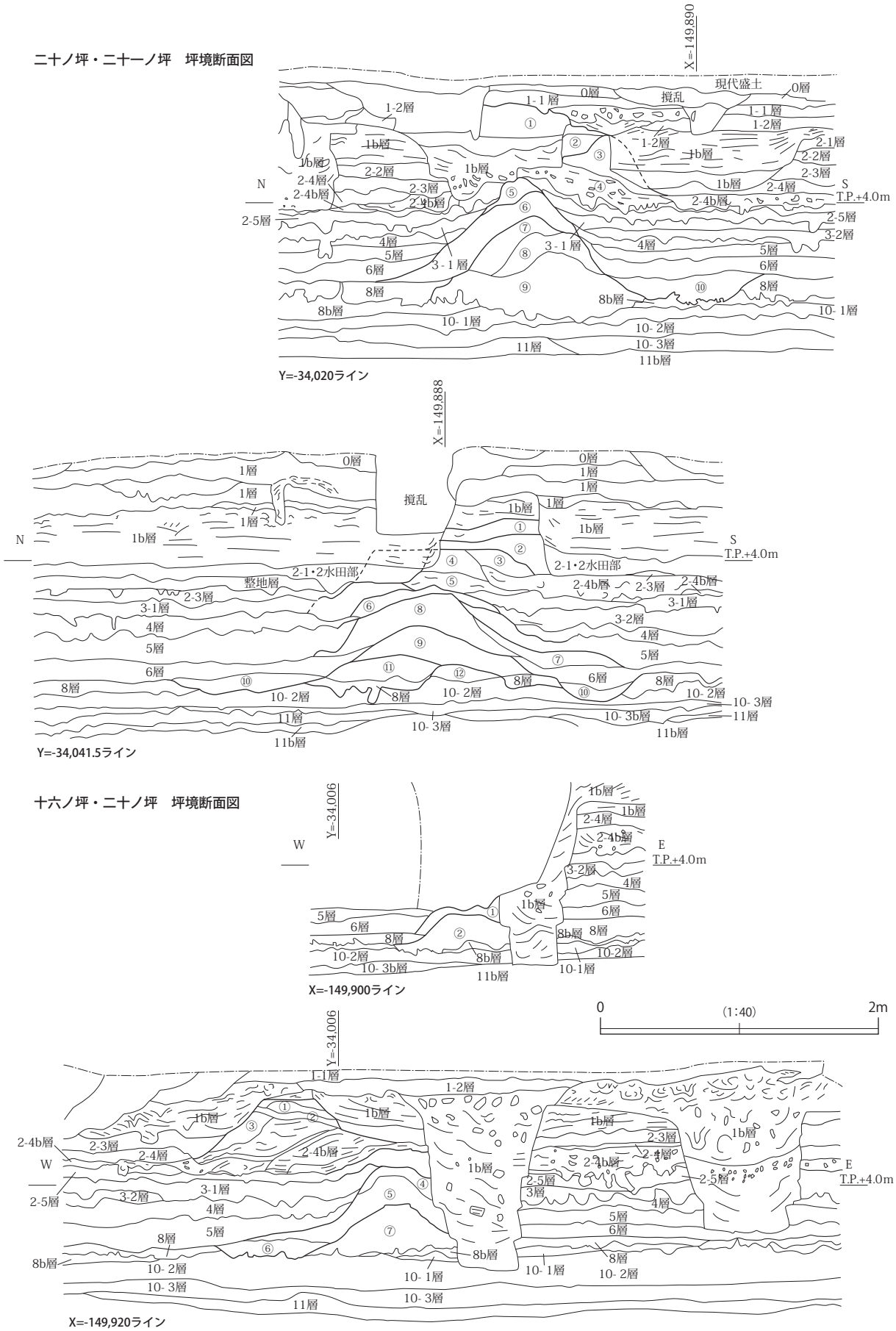


図８　二十ノ坪・二十一ノ坪境　十六ノ坪・二十一ノ坪境　断面図

表４　図８二十ノ坪二十一ノ坪坪境断面図土色・土質

Y=-34,020 ライン断面土色・土質

①2.5Y5/2 ～ 5/1暗灰黄～黄灰　砂質土　細砂～シルト主体　中砂～粗砂若干あり　Mn 粒多し。1-2層時点畦畔盛土。

②2.5Y5/2暗灰黄　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂～中砂あり　斑状 Fe・Mn あり。2-1層時点畦畔盛土。

③2-4層と同質　ブロック状構造。2-4 ～ 2-2層時点畦畔盛土。

④「2.5Y6/3 ～ 5/4 にぶい黄～黄褐　粗砂」に 2-4b 層の扁平なブロックあり　部分的にラミナあり。2-4層時点畦畔盛土。

⑤3-1層に「5Y7/2 ～ 7/1灰白　中砂～細砂」の２～３㎝のブロック若干あり。3-1層時点畦畔盛土。

⑥2.5Y6/2 ～ 10GY5/1灰オリーブ～緑灰　シルト～極細シルト　中砂～粗砂わずかにあり　管状 Fe あり。６～3-2層時点畦畔盛土。

⑦上部2.5Y3/4黄褐　下部10GY4/1暗青灰　粘質土　シルト主体　粗砂～中砂若干あり。８層時点畦畔盛土。

⑧2.5Y5/3黄褐　粘質土　シルト主体　粗砂若干あり。８層時点畦畔盛土。

⑨10GY5/1青灰　粘質土　シルト主体　粗砂～細砂わずかにあり。８層時点畦畔盛土。

⑩８層とほぼ同質、ただし砂粒なし。８層時点溝埋土。

Y=-34,041.5 ライン断面土色・土質

①5Y5/1灰　砂質土　細砂～中砂主体　シルトあり　粗砂わずかにあり　斑状 Fe 多し。2-1層時点畦畔盛土？

②7.5Y5/1灰　砂質土　細砂～シルト主体　中砂多し　粗砂のブロックあり　ブロック状構造。2-2層時点畦畔盛土。

③5Y5/4 オリーブ　砂質土　細砂～シルト主体　中砂多し　シルトのブロックあり　ブロック状構造。2-4 ～ 2-3層時点畦畔基部。

④5Y5/4 ～ 5/2 オリーブ～灰オリーブ　粘質土　シルト～細砂主体　シルト・細砂のブロックあり（2-4b 層）。2-4層時点畦畔盛土。

⑤10Y5/1灰　細砂～シルト　ラミナあり。2-4b-1層攪拌により層境ができた、2-4b-2・3層相当、2-4層時点畦畔基部。

⑥「2.5Y4/1黄灰　シルト」のブロック間に「2.5Y6/3 にぶい黄　細砂」。3-2 ～ 2-1層時点畦畔盛土。

⑦５層とほぼ同質、若干砂粒少ない。５層時点畦畔補修塗り土。

⑧10BG4/1暗青灰　粘質土　シルト～粘土主体　粗砂若干あり　上部斑状 Fe あり。５～４層時点畦畔盛土。

⑨5BG4/1暗青灰　粘質土　シルト～粘土主体　中砂～粗砂若干あり。６層時点畦畔盛土。

⑩10-2層に８層が若干混濁、炭化物あり。８層時点溝埋土。

⑪10BG4/1暗青灰　粘質土　シルト～粘土主体　中砂～粗砂若干あり　炭化物わずかにあり。８層時点新畦畔盛土。

⑫5BG5/1青灰　粘質土　シルト～粘土主体　中砂～粗砂若干あり。８層時点古畦畔盛土。

表５　図８十六ノ坪二十一ノ坪坪境断面図土色・土質

X=-149,900 ライン断面土色・土質

①６層と同質、層境のみ認められる。６層時点畦畔盛土。

②８層に極粗砂が加わったブロック状構造。８層時点畦畔盛土、土質から見て、洪水による破壊を補修した盛土か。

X=-149,920 ライン断面土色・土質

①5Y5/1灰　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂若干あり　管状 Fe あり。2-2層時点畦畔盛土。

②5Y5/2灰オリーブ　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂～中砂多し。2-3層時点畦畔盛土。

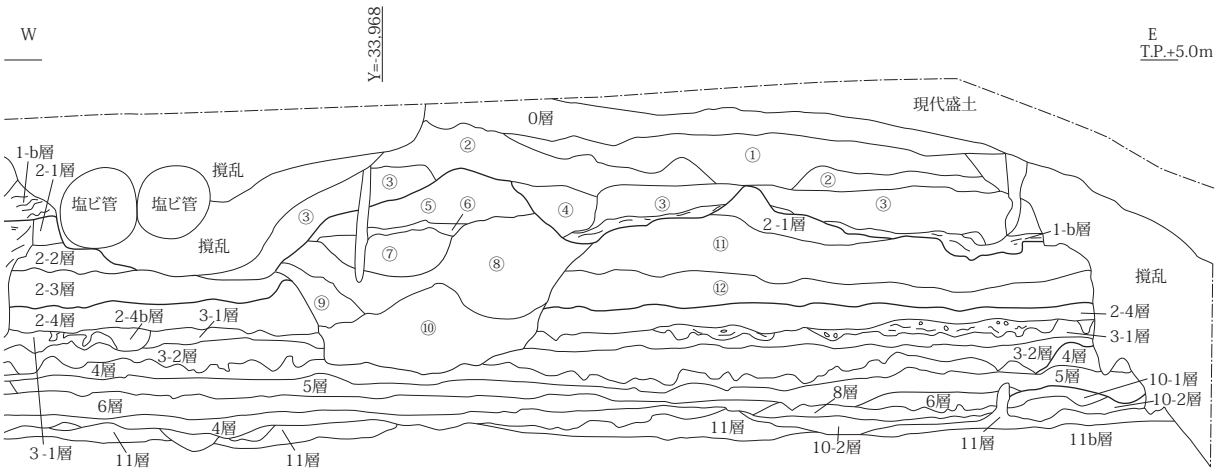
③5Y5/1灰　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂～中砂多し　粗砂のブロック若干あり。2-4層に似る、2-4 ～ 2-3層時点畦畔盛土。

④5G4/1緑灰　粘質土　シルト主体　粗砂あり。５～ 3-1層時点畦畔盛土。

⑤5BG4/1暗青灰　粘質土　極細シルト主体　粗砂～小礫あり　上部管状 Fe あり。６～５層時点畦畔盛土。

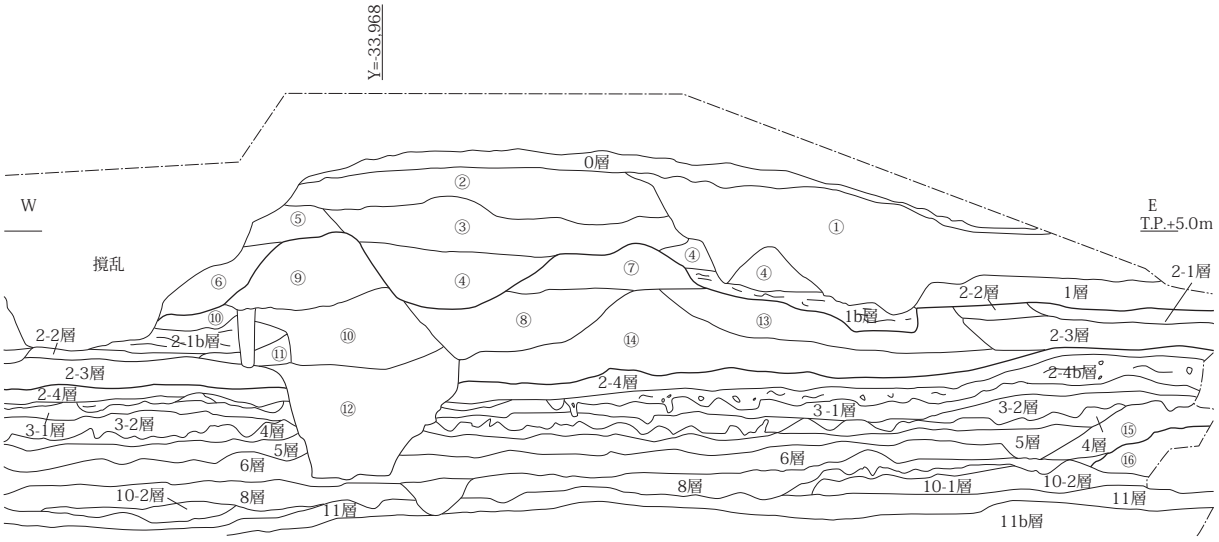
⑥６層と９層の混濁。９層時点溝埋土。

⑦5G4/1緑灰　粘質土　極細シルト主体　粗砂～小礫あり　管状 Fe あり。８層時点畦畔盛土。



X＝－149,000ライン土色・土質

①「2.5Y5/3　黄褐　砂質土　細砂～シルト主体　中砂～粗砂あり　Feあり」・「5Y5/1　灰　砂質土　細砂～シルト主体　極粗砂～小礫あり(③に似る)」のブロック。
　1層耕土時点盛土、里道か。
②2.5Y5/2　暗黄灰　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂あり　小礫わずかにあり　斑状Feあり。1層時点盛土、①と同時期か。
③5Y4/1　灰　砂質土　細砂～シルト主体　極粗砂～小礫あり　斑状Feあり。①②と同時期盛土か。
④　③と⑤のブロック
⑤10Y4/1　灰　粘質土　シルト～細砂主体　中砂若干あり　斑状Fe・Mnあり。2-1層時点畦畔盛土。
⑥5Y6/1　灰　細砂。2-1b層相当。
⑦2.5Y5/2　暗灰黄　粘質土　シルト～細砂主体　粗砂若干あり　大礫1個あり　Mn斑あり。2-2層耕土時点溝埋土。
⑧10YR5/2　灰黄褐　粘質土　シルト主体　粗砂～小礫あり　斑状Fe・Mnあり　ブロック状構造。2-2層時点畦畔盛土?
⑨「10GY5/1　緑灰　シルト」・2-3層・2-4層の15～5cmのブロックと粗砂～小礫わずかにあり。2-3層時点溝埋土。
⑩3-2層・3-1層・4層・2-4層・2-3層の15～3cmのブロック。2-3層時点溝埋土。
⑪5Y5/3　灰オリーブ　粘質土　シルト～細砂主体　中砂～小礫あり　斑状Feあり　ブロック状構造。2-3～2-2層時点里道?盛土。
⑫5Y5/2　灰オリーブ　粘質土　シルト～細砂主体　粗砂～小礫あり　管状Feあり　ブロック状構造。⑪に同じ。



X＝－149,920ライン土色・土質

①1層・②・③・1b層の4～20cmのブロック。0層時点盛土。
②2-3～4・3層の5～1cmのブロック多し　その間に「2.5Y6/3　にぶい黄　粗砂～小礫」あり。1層時点里道?盛土。
③2.5Y4/1　黄灰　砂質土　細砂～シルト主体　中砂～極粗砂あり　2～4cmのブロック状構造。②と同時期の盛土か。
④　③と⑨のブロック。③と同時期の盛土。
⑤1層とほぼ同質　やや小礫あり。1層時点畦畔盛土、②～④より古。
⑥「2.5Y4/1　黄灰　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂～小礫若干あり　斑状Feあり」の15～4cmのブロック間に砂粒。1層時点盛土、⑤より古。
⑦10YR5/2　灰黄褐　砂質土　シルト～細砂主体　粗砂～極粗砂あり　斑状Feあり。2-1層時点畦畔盛土。
⑧10YR5/1　褐灰　⑦とほぼ同質　砂粒やや少ない。⑦と同時期の盛土か、2-1層時点の古い段階の溝を埋める。
⑨10YR4/1　褐灰　粘質土　シルト主体　中砂～粗砂若干あり　Mn斑あり。2-1層時点畦畔盛土。
⑩10YR4/1　褐灰　粘質土　シルト～細砂主体　中砂若干あり　Mn粒多し　ブロック状構造。⑨と同時期の盛土。
⑪「10YR4/1　褐灰　シルト」のブロック。2-2層時点畦畔盛土。
⑫「2.5Y5/1　黄灰　シルト」の7～3cmのブロック　その間に「2.5Y6/2　灰黄　中砂」あり。2-3層時点溝埋土。
⑬2.5Y5/1　黄灰　粘質土　シルト～細砂主体　粗砂あり　Mn粒あり　2-3～2-2層時点畦畔盛土。
⑭5Y5/1　灰　粘質土　シルト～細砂主体　粗砂～小礫あり　管状Fe多し。2-3～2-1層時点畦畔盛土。
⑮5GY5/1～4/1　オリーブ灰～暗オリーブ灰　粘質土　シルト主体　粗砂～小礫あり。6～4層時点島畠盛土。
⑯5GY5/1　オリーブ灰　粘質土　シルト主体　中砂～細砂若干あり。8層時点畦畔?盛土。

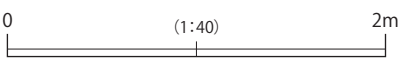


図9　十六ノ坪内　東落段差(近世～現代)　断面図

が、第１ｂ層と考えていた砂層掘削途中で検出した南北方向の溝状土坑は、群毎の上部を覆う砂層が第１ｂ層に切られ、その裾部が第２－２層の下に入りこむ事が判明した。さらに一部で、その砂層上部に第１－２層より下位の、島畠耕土らしき土壌層が残存していた（図12　第２－１面119島畠）。つまり、二十ノ坪では、第２－１面で検出した溝状土坑のうち、南北方向の長いものは、第２－２ｂ面の溝状土坑で、第２－２層成立時に造成された島畠の下にある事が判明した。１ｂ土坑がその間で東西方向の短い溝状土坑になるのは、第１ｂ層堆積後に島畠の位置を確認する事ができ、島畠間の水田部耕作土を洪水砂の下から掘り出したためと考えられる。北隣に接する06－２調査区でも、第２－１面の平面図で攪乱として表示されている溝状土坑が同じ状況であり、そこでも二十ノ坪で南北方向に長い溝状土坑は第２－２層時点成立の島畠下部にあったものと考えられる。

十六ノ坪で２例、隣接する１ｂ土坑同士の埋土の切り合いが見られたので、掘削と埋め戻しは１本ごとに行われたと思われるが、２例の東西の切り合いが逆なので作業順の方向性に統一性はないようである（図６の２・16・24・30が１ｂ土坑埋土。切り合いはY=－33,970・33,990付近にあり。）。

埋土は第１ｂ層の砂粒がほとんどだが、旧耕作土のブロックも若干あり、特に最下部に集中する。また、ラミナを保った砂層のブロックも見られ（図版２－４）、土坑に近接した第１ｂ層を切り崩して埋めた事が分かる。砂を流し込んだようなラミナも見られるが、上部は地震変形と思われる層の転動を示す、断面「C」・「S」の字状のラミナが見られる。

１ｂ土坑出土遺物　各土坑から出土した遺物を一括して述べる。深さや総数で占める面積のわりに遺物は少なく、全て残存率50％以下の破片で、ほとんど接合しない。意図的に入れたような状況もない。

総数を破片数で見ると、縄文土器１、サヌカイト剥片１、土師器７｛甕１、把手1、竈1、小皿2｝、円筒埴輪５、須恵器２｛甕（内面すり消しなし）１、古墳中期坏１｝、陶器擂鉢７、施釉陶器13｛碗11、徳利１｝、青磁碗３、白磁５｛碗２、鉢１、高台壺１、猪口１｝、染付け33｛碗30、皿３｝、瓦器椀２、瓦質土器26｛火鉢１、甕３、鉢１、擂鉢１、土管13｝、いぶし瓦46｛平29、丸17｝である。

図化可能な遺物は図10・11に掲載した。図10から述べる。

図10－１は陶器碗片である。黄色の釉には貫入あり。高台端部のみ釉ハギで、そこに砂目が見られる。

図10－２も陶器碗片で、高台周辺から底部外面は露胎、高台は削り出しである。灰黄色の釉に細かい貫入が見られる。底部外面中央に刻された「吉　小松」の文字は、針状の工具で書いたのか、非常に細い。

図10－３～６は染付け碗片で、高台端部のみ釉ハギ。４はその部分にまばらに砂が付着する。６の見込みの桔梗文は手描きである。

図10－７は軒丸瓦片で、いぶし焼きである。外縁と巴文の頭は高い。外縁から瓦当裏面にかけてはナデ調整。胎土の0.5㎜以下の砂粒に黒雲母と黒色砂粒（角閃石ではない）が見られるのが特徴的である。

図11はサヌカイト製剥片である。平坦な打撃面と対向する部分には原礫面が残る。ポジ面右下の面は原礫に入っていたヒビらしく、打撃点からそこへ力が抜け、意図した半分ほどの幅で剥離してしまった事故品と思われる。ネガ面の左側に調整剥離らしき左下からの剥離が二つほど残るので、片面が原礫面の板状剥片から、剥片を取り始めた段階くらいでのものであろう。

全体的に中世以前の遺物は少なく、碗類では磁器が陶器より圧倒的に多く、どちらも肥前系が多いようである。染付けに「こんにゃく印判」のものは見られない。

１ｂ土坑が掘られた時期を特定できる遺物はないが、碗類で染付けが主体となる事から、18世紀以降と

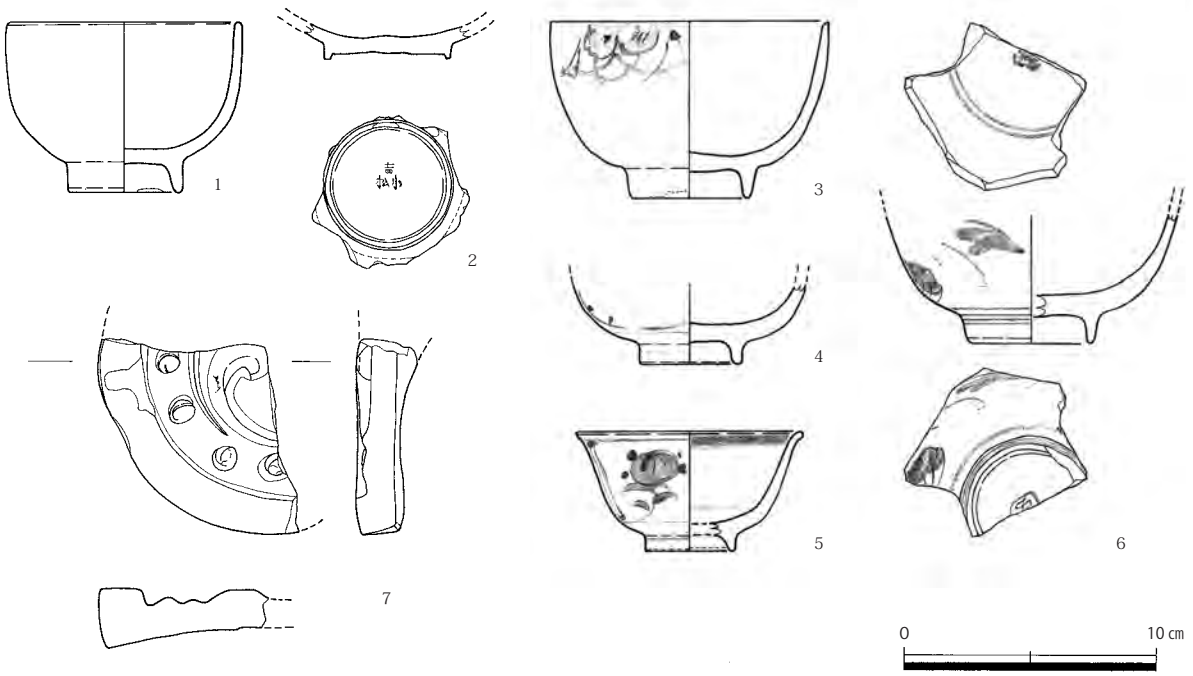


図 10　第 1b 面溝状土坑（1b 土坑）出土遺物（1：7・9 溝状土坑、2：15 溝状土坑、3：47 溝状土坑、4・7：62 溝状土坑、5：64 溝状土坑、6：107 溝状土坑）

は言えよう。既往の調査で指摘されている 19世紀初頭の時期とは矛盾しない。

第 1 層包含遺物　筋掘り以外は機械掘削なので、収容した遺物は少なく、攪乱からの混入の可能性を排除するとさらに少ない。また、図化できたものもなかった。確実に第１ｂ層に包含されていたのを確認できたのは、器種不明の土師器１片、染付け碗１片、器種不明鉄製品１片、自然礫１点のみであった。第1‐2・2層包含遺物も 103片を数えるのみである。土師器７｛鉢１、坏１、施釉小皿１、羽釜１｝、須恵器６｛甕１、擂鉢１、捏ね鉢１｝、陶器擂鉢５、施釉陶器10｛碗５、鉢１、土管１｝、青磁碗２、白磁３｛碗２、鉢１｝、染付け 19｛碗16、皿１、徳利１、茶匙立て１｝、瓦質土器７｛火鉢１、羽釜１、擂鉢１、土管１｝、いぶし瓦35｛平27、丸８｝、木製品５｛板２、杭３｝、炭１、自然礫１である。

１ｂ土坑出土のものと合わせても、陶磁器供膳器がほとんど碗で、皿・鉢が極端に少ない。また、平瓦と丸瓦の比率が極端であるが、これは耕作地内で転用するのに平瓦が多く使われたからであろう。ならば、供膳器も、碗以外は野良仕事中の飲食用には、耕作地に持ち込む必要がなかったと言える。

小結　１ｂ土坑に関しては「土取り穴」説もあるが、採掘している土が耕作土で、採掘中に第１ｂ層の砂も混じる事。また、密集していても整然とし、ほとんど重複がない事から、一連の作業として一気に掘られたと考えられ、それが広い既往の調査範囲のほぼ全域に分布する事から見ても、それだけの土砂を他の場所に搬出する目的も、意味も考えられない。第１ｂ面から切り込み、第１ｂ層を埋土主体とする意味を考えるなら、「土取り穴」説は完全に否定して良いと考える。

既往の報告書では「天地（転地）返し」という表現も見られるが、それは深耕により耕地の表層と深層を入れ替える事で、連作障害を防ぐため疲弊した耕作土を下にし、下部の有機分に富んだ土で上に耕作土を作り直すという場合もある。第２‐４ｂ‐１層で想定できる、耕作土とその上を覆った洪水堆積層を上下入れ替える例もその表現に合うが、この場合はその表現は妥当ではない。

また、07‐２調査区の報告では土坑の性格として「１ｂ層の洪水砂と２層の耕作土を混ぜることに目的があると考えられ」としているが、第１‐１・２層が、第２層の各層より極端に砂粒が多いわけでも

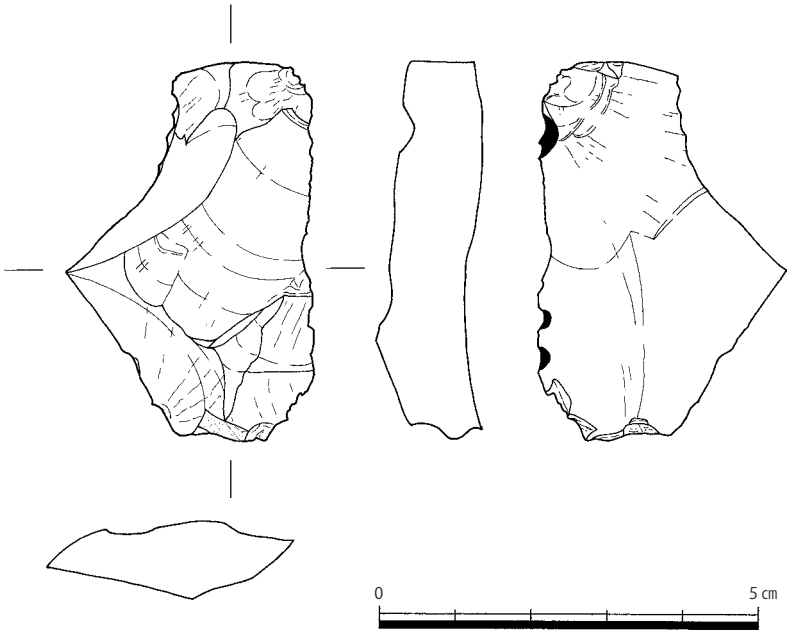


図 11　第 1b 面　61 溝状土坑出土石器

なく、床面となる第１ｂ層がそのまま残る部分も多く、立地的にも下方へ水が抜けるのを防ぐ必要もないと思われ、かつ、両者を混ぜたと言えるような層も残存していない。

前述したとおり、１ｂ土坑は、広範囲に厚い洪水砂で覆われた耕作地に、離れた地域からの運搬の手間を排し、かつ、耕作土として作ってきた土を使って、最小の労力で耕作土層を復旧するための作業の痕跡と考えて間違いなかろう。

第２項　第２－１面（図12・図版１－１～２－１）

現代攪乱以外に１ｂ土坑で寸断されているため、遺構の把握が困難である。第２－１層が水田部分と島畠部分でほとんど質・色調の変化がなく、面の高さも第１ｂ層堆積時に若干の浸蝕があったようなので、段差等を検出してもどこまでが島畠であったかを確認するのにしばしば困難を伴った。断面でもほとんど確認できない。そのため特に島畠に関しては、その範囲等の確認を誤っている可能性もある。

坪境　十六・十七ノ坪境は 139・140畦畔とその間の 98溝からなる。しかし、第１ｂ面十六ノ坪内東落段差付近から東側は、現代水路の攪乱で 139畦畔の北半分しか確認できない。また、図７の Y=－33,9625 ラインの断面で見ると、そこですでに 139畦畔（断面③）のみである。98溝はその西側で南に開口し、142畦畔東側81溝につながっていた可能性が高いが、つながる部分は現代水路の攪乱で不明である。平面でさらに東に伸びる 98溝部分はやや浅く幅も狭いので、溝屈曲部に取り付く水口のように思える。139畦畔は２ヶ所水口がある他、礫が畦畔頂部に半分埋まった状態で、数ヶ所に認められた。礫の位置に特に規則性は認められない。98溝は底部高が Y=－33,980・34,000 ラインのどちらでも約 T.P.+4.3m で、平面的にも傾斜は認められないが、東より西が幅広く、水の流れは西向きと思われる。140畦畔に水口は認められない。南側は現代水路の攪乱があるが、東側以外は頂部から南斜面まで第１ｂ層に覆われた部分が多く、裾部を攪乱されているとは言え、概ね本来の規模を保っているようである。

二十・二十一ノ坪境は 123畦畔のみである。北の 121島畠西辺に合う位置に水口が開く。南側の 124島畠との間は水路状に狭いが、平坦で水田耕作土が存在する。ただし、123畦畔北沿いに、119島畠の南東から西に抜ける溝が存在し、そこから 121島畠東辺沿いに北上する溝が分岐する。123畦畔と、短い畦畔状の 120高まりにはさまれた坪境水路の残存にも見えるが、その東側は坪境を破壊する例がない１ｂ土坑があり、坪南東端まで伸びていた可能性は少ない。水口から坪内に水を回すための溝か。

十六・二十一ノ坪境は、攪乱が激しく、セクション断面でも確認しにくいが、132溝と 131・133畦畔からなる水路がある。132溝の底部高は、南側は T.P.+4.3m 強、北側は T.P.+4.25m 前後で、北に傾斜している。98溝とつながると思われるが、その部分は攪乱され不明である。

坪境出土遺物　十六・十七ノ坪境の 98溝から若干の遺物が出土している。破片数で見ると、土師器５

{七輪２}、無釉陶器５ {甕１、擂鉢２}、施釉陶器碗１、青磁碗１、染付け碗５、瓦質土器14 {甕１、土管12}、いぶし瓦15 {平10、丸５}、砥石１である。図化可能なものは砥石のみであった。

図13－４は粘板岩製の砥石片である。節理に沿って剥離している。擦痕は残った辺に平行するものが多いが、斜行するものも様々な角度がある。径２㎜の穿孔が一つあるが、それに伴う剥離と割れが表裏にあるので、薄く剥離した後、穿孔しようとして破損したものと思われる。

坪境交点・114 ～ 116土坑　十七・二十ノ坪境と、その南の坪境交点は、現代水路で完全に破壊されるが、坪境は１ｂ土坑のない位置にあったであろう。図12 の 117島畠範囲西端の高まりが、坪境畦畔の可能性もある。坪境交点では現代水路の攪乱の底で、二十一ノ坪北東隅にあたる位置に 114 ～ 116土坑を検出した。切り込み面は不明だが、埋土に第１ｂ層由来らしき多量の砂粒が見られず、第２層由来らしきブロック土が見られた。第２層中のどこかの面で掘られたものとしてここで述べておく。

114土坑は最も北東で、坪境畦畔の交点にかかる位置にある。平面形は径2.0 ～ 2.3m 楕円、壁は 70 度ほどに立ち、底部は皿形に凹む。最深部は T.P.+3.09m である。遺物は須恵器壺が１片出土した。

115土坑はその南西に接し、わずかに 114土坑に切られる。南北1.4m、東西1.3m の歪な方形で、壁の傾斜は 114土坑より急である。底部は平坦で、T.P.+3.32m、第11ｂ層上部をわずかに切り込む。遺物は土師器鉢片１、無釉陶器壺片１、施釉陶器碗片１、いぶし平瓦片１のみである。

116土坑は 115土坑の南で南北1.1m、東西1.4m の方形である。壁の傾斜は 115土坑とほぼ同じで、底部も平坦。深さは T.P.+3.51m で、第10－２層内に達する。遺物は出土していない。

どれも埋土はブロック土で分層はできず、構造物の痕跡もない。周辺の第２－１面の高さは T.P.+4.6 ～ 4.8m で、そこからの切込みなら、114土坑は深さ 1.8m 近い。第11ｂ層まで達するが、周辺調査区の近世の井戸は、３m を越え、第13－２ｂ層に達するものが多い。また、湧水があったなら、第11ｂ層に達した部分での壁のえぐれや、下部の埋土が泥土状になりブロック土の輪郭が不鮮明になるなどの特徴がありそうだが、それも認められず、井戸とは考えにくい。耕作地に付属する施設ではあろう。

80溝・142・143畦畔　第１ｂ面「十六ノ坪内東落段差」の下にある大畦畔を伴う水路である。図９の断面で X= －149,900 ラインでは③・④、X= －149,920 ラインでは④を埋土とするのが 80溝である。溝の底部は北が低く、流れは北向きか。埋土に流水堆積が残るが、第１ｂ層堆積時のものの可能性が高い。北の坪境に接する部分は攪乱されるが 140畦畔もかなり低いので、98溝とつながる可能性はある。

畦畔は 143畦畔の盛土は粘質土だが、142畦畔は第２－１層に近い砂質土である。図９の断面で見ると、143畦畔は第２－１ｂ層堆積直後に作られるが、142畦畔は遅れて作られた可能性がある。つまり、第２－１面の当初は、第２－３面で作られた里道（図９上⑪・⑫、下⑬・⑭）があり、東から里道、溝（図９下⑧）、大畦畔の構成であったが、後に里道の上に新たに大畦畔が作られた（図９上⑪上の「２－１層」、下⑦）ようだ。142畦畔はその時点で近くに盛土に利用できる土が第２－１層しかなく、砂質になったと思われる。この面の里道の東肩部は削平を受けながらも 81溝の約0.6m 東に残存しているのを X= －149,920 ラインの断面で確認しているが、現地調査時点では、平面的に検出できなかった。

80溝から若干の遺物が出土している。破片数で見ると、施釉土師器灯明皿１、土師器羽釜１、無釉陶器２ {七輪１}、施釉陶器２ {碗１}、青磁碗１、染付け仏花器１、瓦質土器２ {火鉢１、羽釜１}、いぶし瓦５ {平３、丸２}、ミニチュア高坏形ガラス器１である。実測可能なものは３点であった。

図13－１は施釉土師器灯明皿片。上部皿部と受け皿部の口縁を欠く。底部には糸切り痕、そこから底部側面は露胎、他は黄色味を帯びた透明釉がかかる。底部側面にはナデ調整が確認できる。

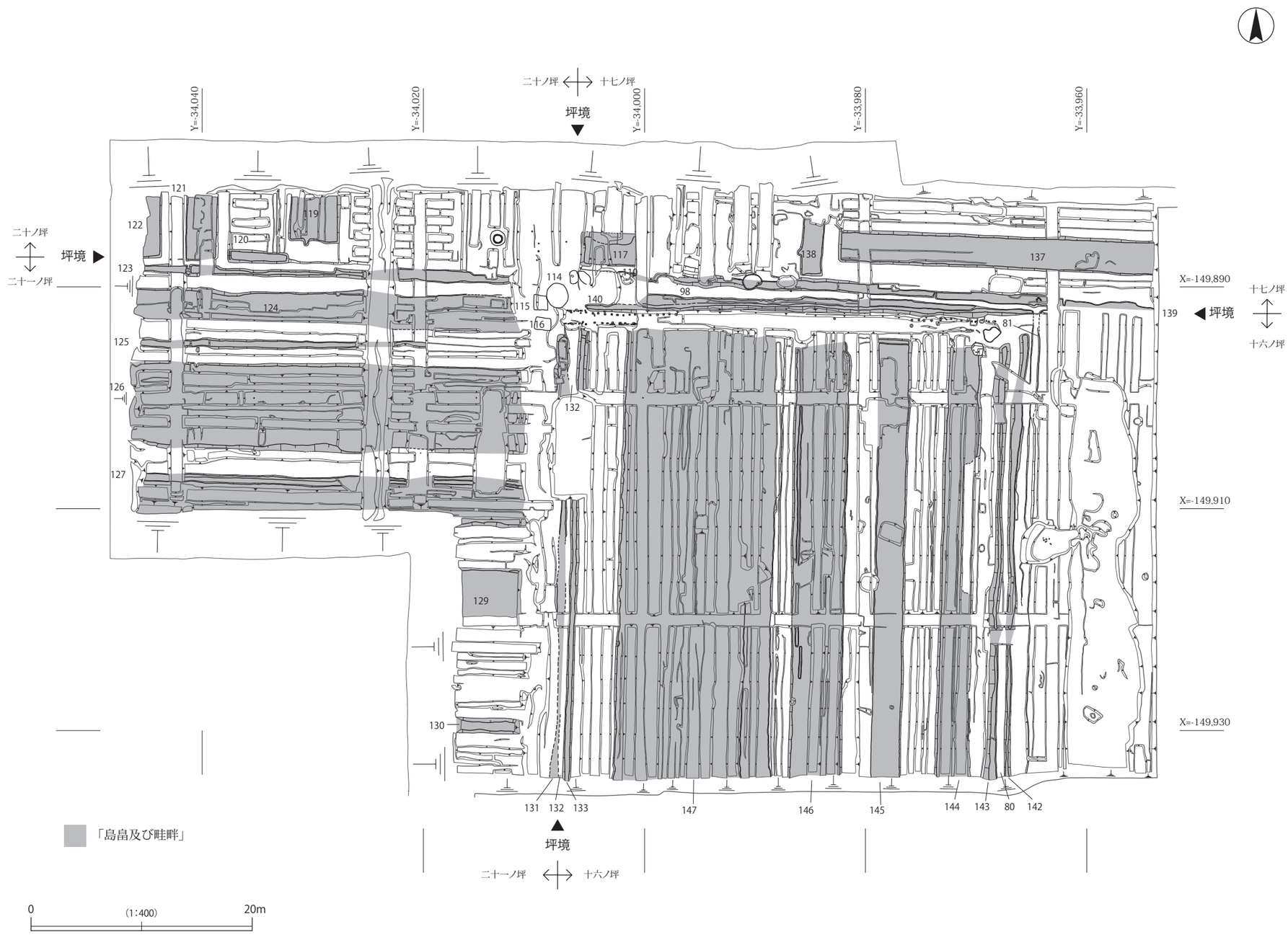

二十ノ坪
十七ノ坪
坪境
Y=-34,040
Y=-34,020
Y=-34,000
Y=-33,980
Y=-33,960
二十ノ坪
坪境
二十一ノ坪
X=-149,890
十七ノ坪
坪境
十六ノ坪
X=-149,910
X=-149,930
121
122
119
120
123
124
125
126
127
129
130
117
114
116
115
16
140
98
138
137
139
81
132
131
132
133
147
146
145
144
143
80
142
坪境
二十一ノ坪
十六ノ坪
「島畠及び畦畔」
0
(1:400)
20m

図 12　第 2-1 面　全体図

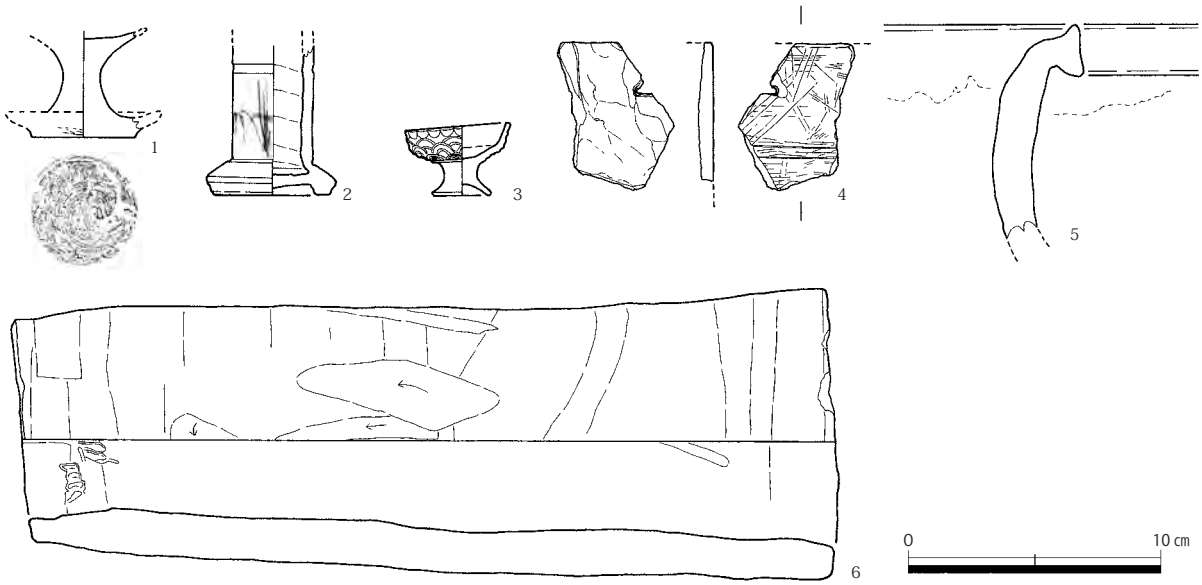


図 13　第２－１面・第２－３面　遺構出土遺物

図13‐２は染付け茶杓立て片か。コバルト釉で竹を描き、透明釉をかける。底部は外方に屈曲し、高台が付く。胴部と屈曲部上端に沈線が巡る。高台外側面から底面にかけては露胎、外側面には回転ケズリが見られる。内面は左上がりの回転ユビナデである。底部形態はお神酒徳利に似て、筒型胴部のお神酒徳利もあるが、お神酒徳利に沈線はなく、筒型は底部が広がらないため、茶杓立てと判断した。

図13‐３は高坏形ミニチュアガラス器片である。坏部の文様は突出し、鋳型成形である。形態は仏飯器のようだが、坏部の径が 3.9㎝とあまりに小さい。非実用品であろう。

十七ノ坪の島畠　十七ノ坪では３基の島畠が確認できた。137島畠は南の坪境に平行して東西に長い。ただし、北側は１ｂ土坑に切られ、それ以北は現代攪乱で第２‐１層が失われ、本来の幅は不明で、残存幅は３m 強である。断面では第２‐１層上面がわずかに盛り上がる程度しか確認できず、水田部との切り合いも不明、盛土も見られない。上面の高さは平均 T.P.+4.46m で、この坪の水田面は残り良い部分は T.P.+4.32m ほどなので、比高差は 0.15m 程度である。138島畠は南北方向に長いと思われるが、遺存するのは東・南辺のみで、北・西側は攪乱に切られる。残存幅は２m ほどである。坪境の 139畦畔との間が、0.7m ほどと接近している。06‐２調査区Ｂ８‐１島畠の西側部分につながる可能性が高い。上面は攪乱で乱れるが、残る部分は T.P.+4.53m である。117島畠も図７下の断面で見ると（左側③の上の「２‐２層・２‐１層」）第２‐２層時点で成立したもので、139畦畔とほぼ同じ高さとなる。最高所は T.P.+4.50m である。138島畠と同じく、坪境との間は 0.7m ほどである。検出状態では東西方向に長く見えるが、上層からの攪乱が重なり判然としない。西端に残る高まりは坪境畦畔の残存の可能性もあり、島畠も幅は不明だが南北に長い可能性が高い。そう見るとこの十七ノ坪南西隅部分の、西から２基の南北方向の島畠と、その西の東西方向の島畠という分布は「1880年ごろの土地利用」（井上2010）に見られる畑地の分布と一致し、これらの島畠が第１ｂ層堆積後も存続した可能性が考えられる。

十六ノ坪の島畠　島畠は南北方向に長いもののみで、全て調査区南端まで伸びる。北の坪境との間は現代水路の攪乱を受け、本来の距離は不明である。145島畠のみ、北端が二段落ちの形をとり、北端が残存しているように見えるが、これも現代水路の一時の肩部整形の可能性があり、確実ではない。

東側から状況を見ていく。まず、142畦畔の東は大きな攪乱がある以外にも、第２‐１面自体も削平

を受けているので、島畠の痕跡はないが、元々あった可能性は否定できないような状況である。

144島畠は、東隣の水田部が平均T.P.+4.43m、西隣の水田部が平均T.P.+4.39mなのに対し、平均T.P.+4.62mの高さで、0.2mほどの比高差がある。肩部は1ｂ土坑の肩部にわずかに落ちが残るのみである。途中で東の肩部が完全に攪乱され、その部分で1ｍほど西側に東向けの落ちがあったため、図12に図示した形を想定したが、それは島畠上の溝の肩部かもしれず、同じ幅で続いていた可能性もある。第２‐３面の159島畠を踏襲したものと考えられる。

146島畠の東肩部は、1ｂ土坑に切られた浅めの溝や土坑、そして下面での島畠拡張部のラインに影響を受けた土色の変化などを肩部と誤認した可能性がある。145島畠の西端は、最小の場合を想定して1ｂ土坑の肩部で区切ったもので、この二つは本来一つで、第２‐３面160島畠を踏襲した可能性が高い。上面の高さは144島畠とほぼ同じで、146島畠西端に鋤溝が若干残る。上面はわずかに削平を受けるか。二つ合わせれば幅10m強の島畠になる。西隣の147島畠までの距離は肩部で1.1～2.1mほどしかない溝状だが平坦で、耕作土層がある。平均T.P.+4.42mの高さである。

147島畠は本調査で最大幅の島畠で、最大幅14.3mを測る。上面の高さは東がT.P.+4.6m前後、西がT.P.+4.7m前後と、西がやや高い傾向が、これは東に拡張された部分が土圧で沈下したものと思われる。第２‐３面の161島畠を踏襲し、東にやや拡張している。南東部分で一部検出されたラインは161島畠の東辺ラインが露出したものである。西辺は1ｂ土坑と若干距離をおき、検出しやすかった。東辺ラインは浅い1ｂ土坑の攪乱を斜めにまたぐのでやや不明確な部分もあったが、検出範囲の南北両端付近は確実である。西の坪境との間は3.6mほど距離をおき、その間は平均T.P.+4.34mの平坦面である。

西の坪境からの距離で見て、坪一辺109mの1/20刻みの距離に近いものはあまりない。わずかに144島畠西辺が32.1mと3/10の距離、143畦畔が約38mと7/20の距離に近似する程度である。

二十ノ坪の島畠　二十ノ坪では、南北方向に長い溝状土坑が検出された部分に、第２‐２面成立の島畠が存在した事は先述したが、それを平面的に検出できたのは119島畠のみであった。

その東で、東西方向の1ｂ土坑群をはさむ南北方向溝状土坑群の部分は、島畠をほとんど掘削してしまった後、その島畠基部の砂層裾部が第２‐１層の下に位置するのを発見した地点であり、この面で島畠が存在したのは確かだが、その範囲は把握できなかった。

119島畠は、幅3.0m、高さ平均T.P. +4.45mである。119・121島畠周辺の水田部分の残りの良い高さはどこも約T.P.+4.3mで、比高差は0.15mほどである。南の坪境畦畔とは３ｍの距離をおき、長さ0.5mほどの小畦畔状の突出部が残る。この島畠の盛土は第２‐２ｂ層由来の砂層である。上から1ｂ土坑の切り込みもあるが、盛土下面の第２‐３面にも溝状土坑が存在する。06‐２調査区では、この島畠は検出されず、島畠下面で検出された溝状土坑のほうが1ｂ土坑として検出されている。

121島畠は幅3.0m、高さT.P.+4.42mで、南は坪境との間に幅0.5mの、東辺は幅0.9mの溝が沿う。溝の底は周囲の水田より0.2mほど低い。また、この島畠の西辺と合う位置で、南の坪境畦畔に水口が開く。この島畠は下部に砂層も溝状土坑もなかった。06‐２調査区のＢ２・Ｂ３島畠につながる。

122島畠は、規模不明だが、調査区内検出幅1.7m、高さT.P.+4.41mで、第２‐３面の171島畠を踏襲、拡大したものである。下部に砂層・溝状土坑はない。周囲はT.P.+4.1mほどで、121島畠周囲の溝底部と合うが、溝かどうか不明である。06‐２調査区のＢ１島畠につながる。

二十一ノ坪の島畠・畦畔　二十一ノ坪では東西方向に長い島畠と畦畔が確認された。どれも東側坪境との間は現代水路に破壊され不明である。

124島畠は、南辺は東の極一部しか遺存せず、その部分の幅は 3.3m である。本来の高さが残る部分も少ないが、一部 T.P.+4.5m を越え、最高所は T.P.+4.58m を測る。北隣の水田部は平均 T.P.+4.27m ほど、南側水田部は高さが乱れるが本来は T.P.+4.3m ほどか。02－１調査区の A51島畠につながる。

そこから 0.8m ほど南に 125畦畔がある。最大幅0.9m、残りの良い部分の高さは 124島畠と同じである。その南側の水田は T.P.+4.4m ほど。畦畔自体は攪乱がひどく、東西でほぼ高さを失い、痕跡のみとなる。02－１調査区で A52島畠とされるものの北辺につながる。

126島畠は 125畦畔の 1.5m ほど南で、北側裾は１ｂ土坑に切られるが、南側裾は良く残る。幅は 7.6 ～ 8.2m、高さ約 T.P.+4.5m である。南側水田部は T.P.+4.3m ほど。02－１調査区の A52島畠南半から A54島畠につながる。南辺は A54島畠に一致する。

126島畠から南へ 2.1 ～ 2.4m で 127島畠に至る。南辺は東側の一部しか遺存しないが、最大幅4.6m、高さは最高 T.P.+4.47m である。上面で北側肩部に沿い 128溝が走る。南側水田部は浸蝕で高さ不明である。02－１調査区 A55島畠北側につながり、南辺は 07－２調査区131島畠南辺と一致する。この事から、02－１調査区の A55島畠は、二つの島畠の間を見落とし、一つのものとしているのが分かる。

127島畠から南に 4.2m で 129島畠がある。高さ平均 T.P.+4.57m、幅4.4m である。周囲の水田は攪乱多いが、T.P.+4.33m ほどか。盛土下面の溝状土坑が第２－３面177島畠上面に残る。盛土は細砂～シルトである。07－２調査区74島畠につながり、南辺ラインは 02－１調査区 A55島畠と一致する。

127島畠の南9.5m に 130島畠がある。現状では幅1.4m しかなく、大畦畔状に見えるが、07－２調査区で 73島畠とするものにつながるので島畠とする。両側が大きく１ｂ土坑で削られているとすれば、最大幅３m ほどの島畠であった可能性もある。高さ T.P.+4.60m である。

各々の北側坪境からの距離は、125畦畔が 5.5 ～ 6.0m で、坪一辺109m の 1/20 に近似、126島畠南辺が約16m で 109m の 3/20 に近似、127島畠南辺が 22 ～ 21.8m で 109m の 1/5 にほぼ同じである。

第２－１・２層包含遺物　第２－１面と第２－２面は、坪境や島畠の状況もほとんど変わりなく、水田部分も継続する耕作土層が多いため、第２－１・２層は合わせて掘削した。

そのため第２－１・２層の包含遺物は分けずに取り上げている。破片数で見ると、縄文土器１、土師器11｛鉢２、羽釜１｝、須恵器甕体部（内面すり消しなし）４、無釉陶器３｛甕１、鉢１、擂鉢１｝、施釉陶器12｛碗８、皿１、鉢１｝、青磁３｛碗２、鉢１｝、染付け５｛碗４｝、瓦質土器14｛羽釜１、擂鉢１、土管８｝、瓦21｛いぶし平13、須恵質平１、いぶし丸７｝である。実測できたのは２点のみであった。

図14－１は陶器碗片である。灰白色の釉は貫入多く、高台から底部は露胎で一部橙色を呈す。その部分には回転ケズリが見られる。口縁端部は釉がないが、境目がはっきりせず、外面側が主に釉がないので、使用による磨滅と思われる。17世紀末葉以降の唐津碗か。

図14－２も陶器碗片である。唐津の腰折れ碗か。飴色の釉が厚くかかり、体部には１本の沈線が巡る。屈曲より下部外面はケズリか。

第１層の遺物構成と似るが、染付け碗が少ないのがやや古色か。時期を限定できる要素は少なく、上下層と勘案しても 18世紀頃としか言えない。

小結　現代の攪乱と１ｂ土坑で分断され、島畠など規模が分かりにくいため、隣接する調査区同士でも合わないものが多々ある状況である。

この面は島畠の面積が最大に達している。それも坪毎に方向性が異なる状況が鮮明である。島畠は水

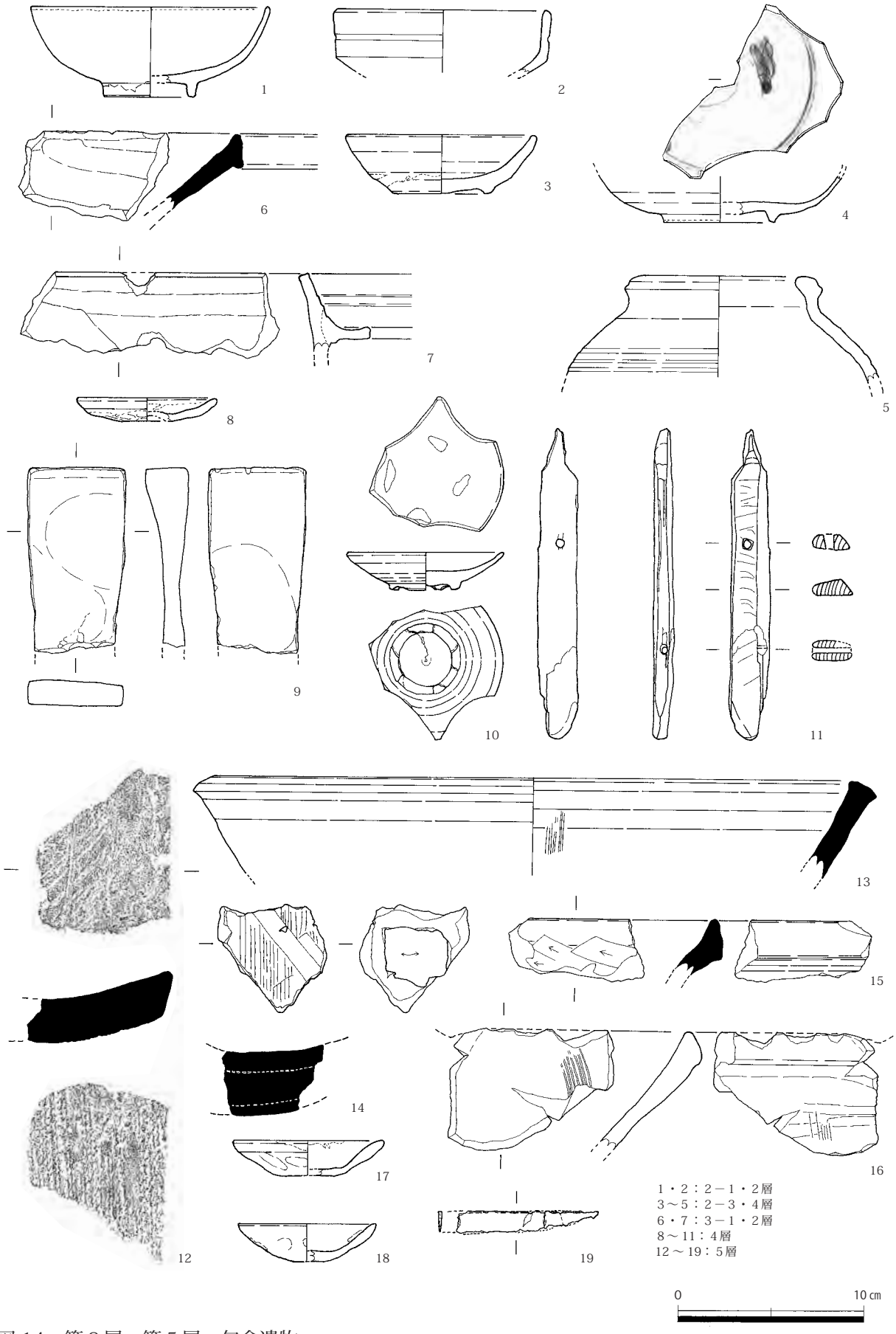


図 14　第２層～第５層　包含遺物

田との比高差が 0.15 ～ 0.2m ほどのものが多く、第３面以降、洪水砂を高く積んで処理するより、島畠の面積を拡大する事を指向してきた結果と思われる。水利体系は坪境の水路が基本のようだが、十六ノ坪で坪境以外のラインに水路が存在するのは注目できる。また、二十一ノ坪から二十ノ坪への水まわしは、水口を介した畦畔越しのものであった可能性が高い。それと、二十ノ坪内での水まわし用の溝は、位置的に関連性があると思われる。江戸時代中期の典型的な中河内の耕作地と言えよう。

第３項　第２－３面（図16・図版３－１・２、４－１）

第２－２面の平面的調査は省略し、第２－３面の検出を行った。島畠は第２－４面のものを踏襲し、そこからの拡張もこの面で確認できる。

坪境　十六・十七ノ坪境は 150・152畦畔とそれにはさまれた水路からなる。しかし、152畦畔は南から 157畦畔が伸びるラインで途切れる。間の溝は第２－１面の 98溝が重複し、この面での埋土はない。150畦畔は残り良い部分で高さは T.P.+4.53m ほど、図７の上図⑤、中図⑤の上の「２－１層」、下図④を盛土最上層とする。第２－４層時点盛土、第２－４ｂ層由来の盛土があるが、その下に掘り下げた痕がある（図７中図⑦・⑧、下図⑧）。それは第３－１面坪境畦畔頂部で止まる事から、洪水砂層である第２－４ｂ層で埋没した坪境位置を探った土坑と考えられる。その坪境探索土坑肩部付近の畦畔盛土内から、幾つかの礫が出土した（240礫群、図版４－４）。181水口の西側５m の範囲である。水口はもう一つ、151水口が東で開口する。152畦畔は図７の中図②、下図⑥を盛土最上層とする。遺存度低い第２－３ｂ層を盛土内に残す。その影響か、第２－４層時点の盛土は遺存しない。高さは T.P.+4.6m 強の部分が多いが、それも後の削平を受けており、本来は 150畦畔より高く、幅も広かったようである。

二十・二十一ノ坪境は、170畦畔のみが通り、ラインは東の 150畦畔と合う。南は 172島畠との距離を見ても、もう一つ大畦畔が入り水路を成す余地はない。図８の Y= －34,020 ライン断面では③が盛土最上層だが、この位置で第１ｂ面坪境探索土坑が掘られ、半分を攪乱される。第２－４ｂ層系の盛土もあり（④）、第２－４層時点から継続すると思われる。Y= －34,041.5 ライン断面でも、第２－４層の残りが悪いが、第２－４ｂ層系の盛土（⑤）はあり、継続している。この断面での盛土最上層は③である。

十七・二十ノ坪境畦畔は 163畦畔が確認された。上部は削平され最高所でも T.P.+4.41m である。西に傾斜した水口が一ヶ所確認された。西側は攪乱され、水路を成していたかは不明である。

十六・二十一ノ坪境は 164畦畔が確認される。図８の X= －149,920 ライン断面で見れば（①～③）、東西を攪乱されるが、第２－３層が両側に水平で、もう一つ大畦畔がある可能性はほとんどない。位置は第２－１面133畦畔に踏襲される。北側坪境に近い位置に 182水口が開き、そこに瓦質の土管が若干西に傾いた状態で埋設されていた（図13－６）。

全体で見ると、坪境水路が確認されるのは十六・十七ノ坪境のみで、第２－１面とは異なる。ただ、坪境交点で水路が途切れるのは不自然で、163畦畔部分は水路があった可能性も考えられる。

坪境関連出土遺物　181水口・182水口・240礫群から若干の遺物が出土している。破片数で見ると、181水口からは、無釉陶器甕１、土師質平瓦１、182水口からは瓦質土管１、240礫群に混じっては陶器甕１、瓦質土器１、土師質丸瓦１である。２点が図化できた。

図13－５は 240礫群の陶器甕口縁部片である。口縁に欠損多く、傾きは不確かである。緑がかった自然釉がかかり、露胎部分は明るい鉄錆色を呈するが、断面は灰白色で長石が残存する。器形的には 13世紀後半頃の常滑とも思えるが、信楽にもありえるものである。

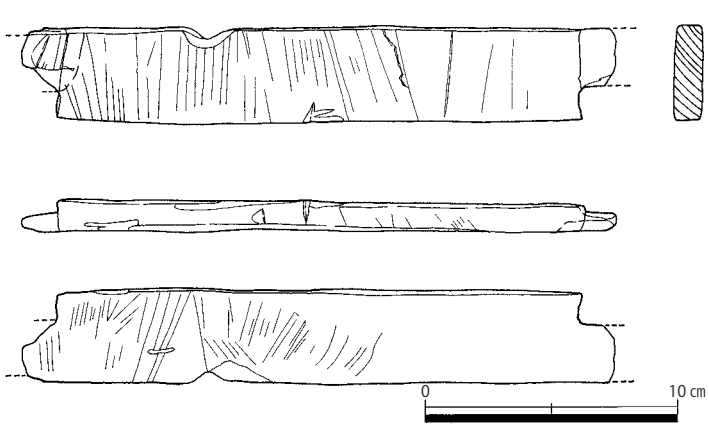


図 15　第２―３面（３－１面検出）229 溝出土木製品

図13－６は 182水口に埋設されていた、ほぼ完形の瓦質土管である。内面は布目圧痕とシボリ痕で、図左には紐圧痕も残る。両口縁はヨコナデである。外面はヨコナデが基本だが胴部中央付近に別のナデが不規則に散在する。胎土に石英・長石以外の砂粒は混じらない。

157・158畦畔・（第３－１面検出229溝）　十六ノ坪内で水路を成すが、実はこの二つの畦畔は第２－２面相当のものである。調査時点では面に対応する形態が判然とせず、慎重を期して、第２－１面時点畦畔盛土を１層掘削するに留めて検出した。本来の第２－３面での形態は、第３－１面で検出した 229溝（図９、上図⑧～⑩、下図⑫を埋土とする）が水路で、その東、155畦畔までの幅が盛土の里道であったと考えられる。229溝が、坪内のこの部分に走る最古の水路で、第２－４面以前にはない。

229溝は、第３－１面検出時点でかなり削平してしまったが、図９の断面では本来幅1.6 ～ 0.9m、深さ 0.6m ほどの断面逆台形の溝である。底部はわずかに北に向かって深くなる。埋土は全てブロック土で機能時の堆積は残っていない。第３－１面で埋土上面の 230畦畔としたものは、溝埋土最下層、図９上図⑩の上面の盛り上がりだった可能性が高い。

229溝出土遺物　本来この面の遺構であったので出土遺物もここで述べる。破片数は土師器４｛甕２、小皿２｝、陶器擂鉢１、瓦質羽釜１、木製品１である。実測可能だったのは木製品のみ。

図15 はその木製品である。札状の柾目板で、両短辺に幅も厚さも減じた突起を削り出す。突起の先端はやや丸味を帯びる。両面と突起から離れた方の側面には木目と直交するような擦痕が多くつくが、その角度は細かく見ればまちまちである。用途は不明である。

島畠　島畠は第２－１面のものと重複するものが多く、段階的に拡張していった様相が見られる。断面では水田部耕作土・島畠盛土・島畠耕土の質の区別がつきにくく、切り合いもはっきりしないが、層の高低差で島畠の存在範囲を確認できる場合も多い。

十七ノ坪の島畠　島畠の配置は基本的に第２－１面と変らない。

149島畠は図17 を見ると、第２－４層上に、そのブロック土を盛土にして、第２－３層時点で成立した島畠である。上部は削平されている。第２－１面137島畠は、第２－２層時点にこれを南側に拡張したものである。北側は１ｂ土坑に切られ、幅不明。図17 では１ｂ土坑内で終る想定にしたが、北側の第２－４層上面が、島畠下と同じ高さなので、そこまで島畠が広がる可能性もある。もし、確認範囲より北に１m あれば、北辺は南の坪境から 5.45m（109m の 1/20）に近い距離となる。

153島畠は上面が 138島畠より 15㎝ほど下がるが確認される平面形は重複する。北・西辺が不明なのも同じ。東辺が南の 181水口東肩部と同じラインで、西の坪境から 21.8m（109m の 1/5）であるのが注目できる。攪乱断面で観察した限りでは第２－４面には遡らない。

162島畠も 117島畠と重複する。163畦畔の位置を見れば、117島畠西側の高まりは坪境畦畔の残存であった可能性が高い。163畦畔から 1.5m ほどの距離をおき、北・東辺は不明である。上面は平均 T.P.+4.42m で、この坪の検出範囲の水田部の高さは T.P.+4.2 ～ 4.3m ほどなので比高差は小さい。

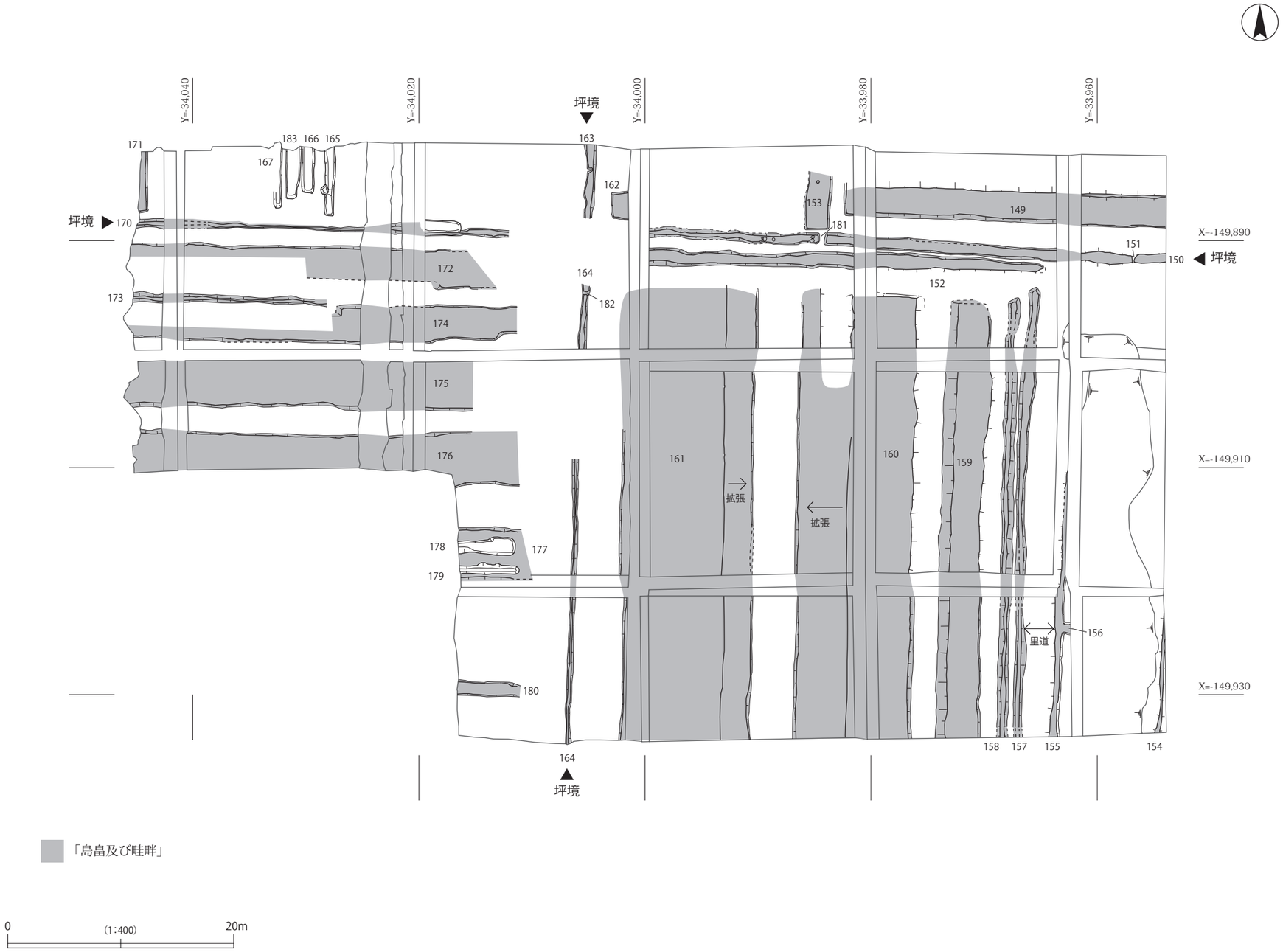

Y=-34,040
Y=-34,020
Y=-34,000
Y=-33,980
Y=-33,960
坪境
X=-149,890
X=-149,910
X=-149,930
171
183 166 165
167
163
162
153
181
149
151
150
170
172
164
182
152
173
174
175
176
161
160
159
拡張
拡張
178
177
179
156
里道
180
158 157 155
154
「島畠及び畦畔」
0
(1:400)
20m

図 16　第 2-3 面　全体図

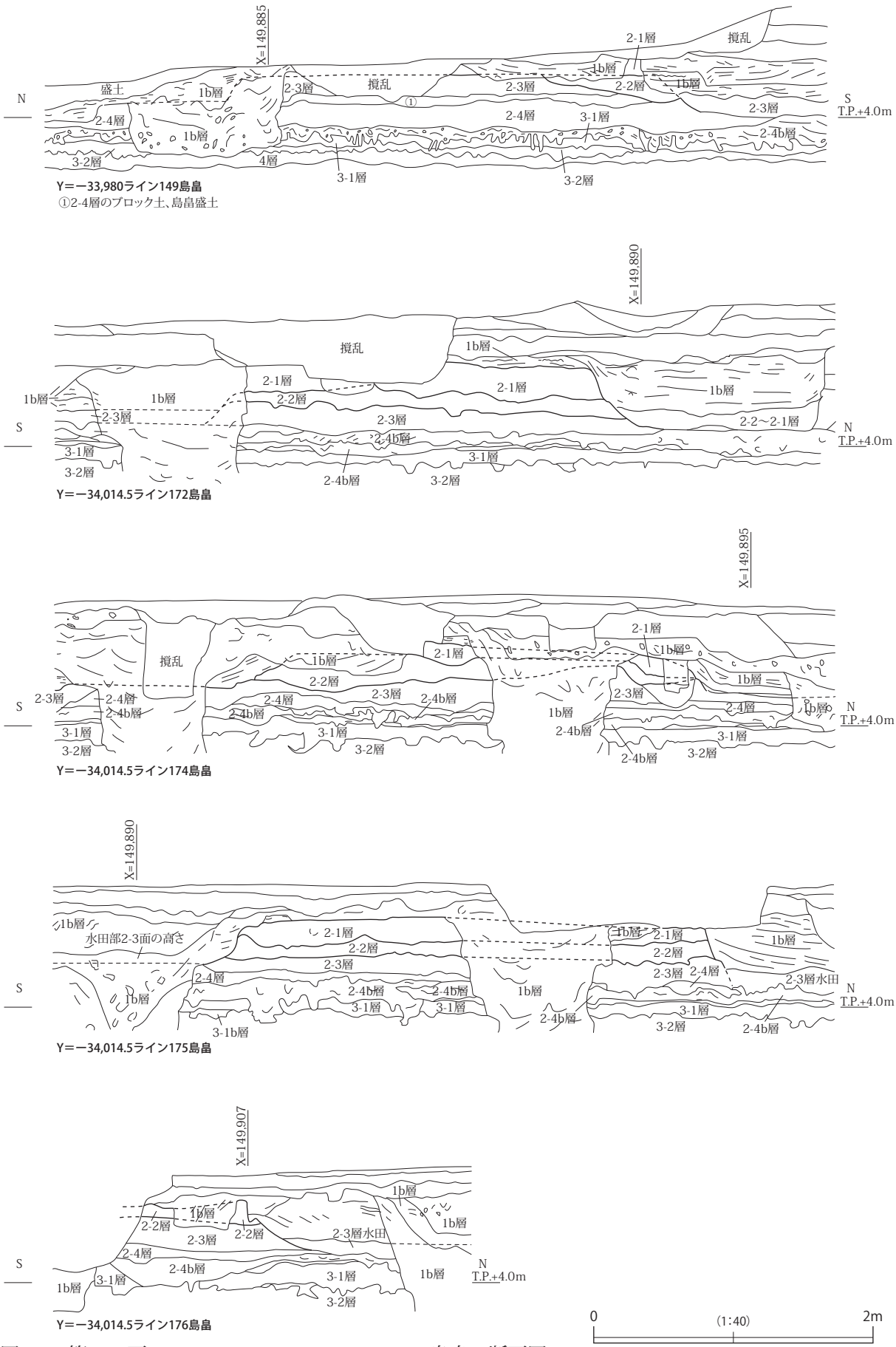


図 17　第 2-3 面　149・172・174・175・176 島畠　断面図

十六ノ坪の島畠　東側はまだ大きく攪乱を受けているが、里道東辺の 155畦畔から東に 156畦畔が伸び、調査区南東端に 154畦畔が確認される事からも島畠の立地する余地は少ないと思える。

159島畠は、セクション断面では確認できない。第2‐2・2‐3層が水平に通ると認識した部分が、攪乱のどこかで島畠盛土と入れ替わっていたか。平面では西辺がなだらかな段差を見せるのが検出できた。第２‐１面144島畠と重複し、西側の裾の分、幅が広い。東側水田部分は先述の通り検出に失敗し、高さ不明である。島畠の上面は平均 T.P.+4.47m、西側水田部分は T.P.+4.35m ほどの高さである。

160島畠は、図18 で見ると、第２‐４層時点に、第３‐１層231島畠を東側に利用し、西側に第２‐４ｂ層の洪水砂を盛土に、拡張して成立したと分かる。第２‐３層成立時点でさらに西側に拡張された。島畠上面も若干削平され、高さをほとんど変えずに拡張しているのが分かる。その範囲で 145・146島畠に踏襲される。高さは東側で T.P.+4.53 ～ 4.60m、西側拡張部はやや低く T.P.+4.50m 前後、北端部に「コ」の字形に 5㎝ほど凹む部分がある。北端部には攪乱のやや南で肩部上端らしき落ちが残る。

161島畠は、西辺はほとんど１ｂ土坑に切られるが、一部に西に落ちる肩部が残存していた。断面で見ると（図19上・中図）第２‐４層時点で第３‐１面232島畠の上に、東西に広がる形で形成され（上図⑦、中図⑤）、第２‐３面で同じ規模で嵩上げされるが（上図④、中図③）、第２‐３層時点の途中で東に 2.8m ほど拡張される（上図②、中図②）。第２‐４ｂ層以外、盛土・島畠耕土・水田耕土の区別が、質・厚さからも判別しにくい。拡張前の幅は 7.8 ～ 8.6m、拡張後の幅は 11.2 ～ 11.8m である。上面は高さ T.P.+4.6m ほどで、拡張部は土圧で沈下したのか 10㎝ほど低い。上面で拡張前の東側肩部ラインが検出できたが、一部で確認できたものを、島畠上面を削り追跡・検出した状況なので、わずかでも島畠耕土も遺存していたようだ。第２‐１面147島畠に拡張・踏襲されるが、第２‐２層時点の様相は不明である。東側水田面の高さは T.P.+4.35 ～ 4.41m、西側水田面の高さは T.P.+4.34 ～ 4.40m ほどである。

この坪では、西側坪境からの距離は、159島畠西裾が 32.2m と、109m の 3/10 に近似、229溝東肩が 38.3m と 109m の 7/20 に近似する他は、特に注目できるものはない。第３‐１面の島畠を核にして、状況に応じて面積的な拡大をしていった過程がうかがえる。

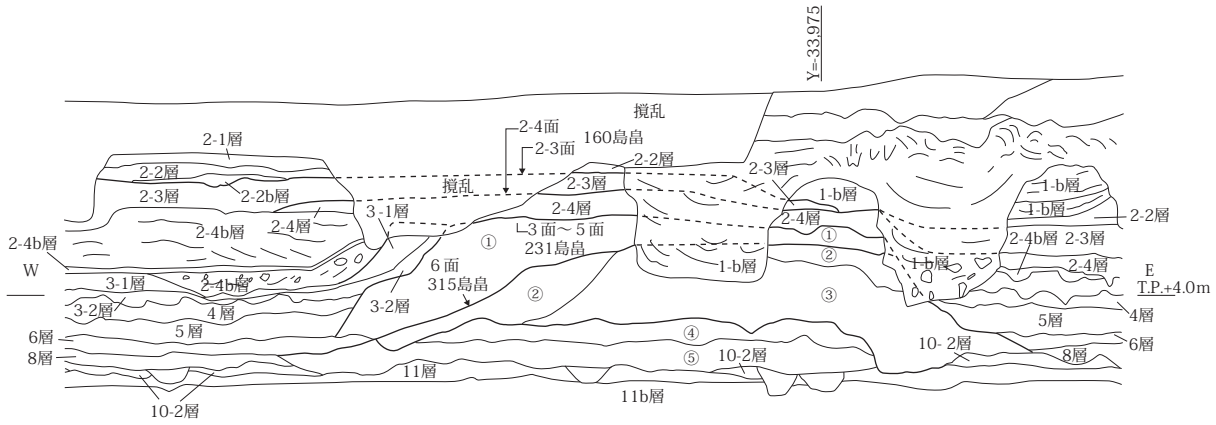
二十ノ坪の島畠・溝状土坑　島畠は 122島畠より小さい 171島畠を検出した。調査区北西隅にかかり、幅・長さとも不明。高さは平均 T.P.+4.41m で、水田面の高さは T.P.+4.3m 前後である。

第２‐１面119島畠の底面の遺構として 165 ～ 167・183溝状土坑を検出した。深さは 0.2 ～ 0.3m 程度で、壁は立ち、底部は平坦である。埋土は第２‐２ｂ層由来の砂粒内に下層のブロック土が混じる。

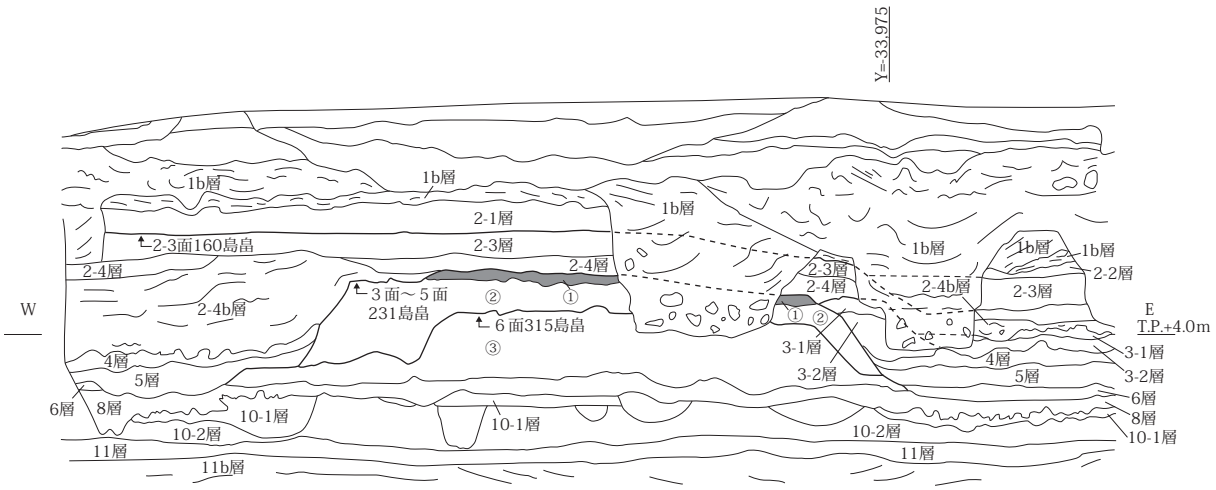
二十一ノ坪の島畠　東西方向に長い島畠が検出されたが、島畠盛土と水田耕作土の区別がつきにくく、中には第２‐１・２層時点で両側の水田部分が耕作で削平されたために第２‐３面が高めに削り残された「島畠基部」の可能性があるものもある。

172島畠は、124島畠と完全に重複し、南辺はほとんど遺存しない。断面では（図17）、北側の水田部分は第２‐１・２層時点の耕作土層が第２‐３層下面付近まで攪拌し、第２‐３層はほとんど遺存しない。南側の水田上面は島畠部分より 15㎝ほど低いが、島畠上面も北側が低く、ほぼ同じ高さになる。その状況を見ると、第２‐２層時点形成の 124島畠の「島畠基部」の可能性もあるが、島畠部分第２‐３層下面が水田部分より低めで、上面に水田部分にはない凹凸があるので、この面での島畠の可能性もある。直下に第２‐４ｂ層があり、島畠なら、第２‐４層時点成立のものであろう。

173畦畔は断面で見ると（図17、174島畠）、174島畠の北側肩部にも見えるが（図中、右の１ｂ土坑右隣の「２‐３層」とある部分）、一部で南側も丸みを帯びた肩部があったのと、174島畠北辺が、この



X=-149,900ライン断面土色・土質
①7.5GY5/1緑灰　粘質土　シルト主体　粗砂～小礫あり。231島畠盛土。
②5GY5/1オリーブ灰　粘質土　シルト主体　粗砂～小礫若干あり。315島畠盛土。
③2.5GY5/1～7.5Y4/3オリーブ灰～暗オリーブ　粘質土　シルト～極細砂主体　粗砂～中砂わずかにあり。315島畠盛土。
④7.5Y5/2～10YR4/3灰オリーブ～にぶい黄褐　粘質土　シルト～細砂主体　中砂若干あり　Feあり。島畠盛土。
⑤10YR4/3~7.5Y5/1にぶい黄褐～灰　粘質土　シルト主体　中砂～粗砂あり　管状Fe多し　Mn粒あり。島畠盛土。
（④・⑤は、④上面で９面より高いレベルで畝群検出。７層時点ぐらいの島畠の可能性もある。）



X=-149,920ライン断面土色・土質
①10Y5/2オリーブ灰　粘質土　シルト主体　中砂～粗砂あり。231島畠耕土。
②5GY5/1～4/1オリーブ灰～暗オリーブ灰　粘質土　シルト主体　粗砂～小礫あり。231島畠盛土。
③5GY5/1オリーブ灰　粘質土　シルト主体　中砂～細砂若干あり。315島畠盛土。
（③は下半、７層時点の、上面に畝群あった島畠の盛土との層境、見落とした可能性あり。）

0　(1:40)　2m

図 18　第 2-3 面　160 島畠・第３～５面　231 島畠・第６面　315 島畠　断面図

畦畔とつながりそうな部分で南側に屈曲する平面形を見せるので畦畔とした。つながりそうな部分は浸蝕されており、それを島畠北辺の屈曲と誤認した可能性はある。ならば、173畦畔は 174島畠北側の肩部であろう。南側は水田部分の第２－３層（図左端の「２－３層」）上面が、島畠部分の第２－４層上面とほぼ同じ高さなので、この面での島畠の存在は肯定できる。

175島畠は断面上（図17）、南北の水田部分との高さの違いが確認でき、北側では第２－１・２層とは少しずれた肩部の形も確認されるので確定できる。下の第２－４層の残存度が低いので、第２－３層成立時点にできた島畠であろう。第２－１面126島畠はこれをやや北側に拡張したものか。

176島畠は 127島畠と重複する。断面では（図17）北側で水田部分耕作土との切り合いも確認できた。

図 19　第 2- 3 面　161 島畠・第 3 ～ 5 面　232 島畠・第 6 面　318 島畠・第 3 面　234 段差・第 4 ～ 5 面　255 島畠・第 6 面　310 島畠　断面図

表６　図19　第2-3面161島畠・第３～５面232島畠・第６面318島畠・第３面234段差・第４～５面255島畠・第６面310島畠断面図土色・土質

161・232・318島畠 X=-149,900 ライン断面土色・土質

①7.5Y5/1~5GY5/1灰～オリーブ灰　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂～中砂あり　管状 Fe 若干あり。161島畠新段階併行水田耕土（2-3層）。

②5Y5/1灰　砂質土　細砂～シルト主体　中砂～粗砂あり。161島畠新段階盛土。

③　④のブロック土。161島畠新段階盛土。

④2.5GY4/1暗オリーブ灰　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂あり。161島畠中段階盛土。

⑤　⑦のブロックと粗砂　161島畠上面遺構埋土か。

⑥7.5Y5/1灰　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂～中砂あり。161島畠古段階併行水田耕土（2-4層）。

⑦7.5Y5/1~5GY5/1灰～灰オリーブ　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂～中砂あり　管状 Fe あり　ブロック状構造　締まり良し。161島畠古段階盛土（2-4層時点）。

⑧5GY4/1暗オリーブ灰　粘質土　シルト～細砂主体　粗砂あり　小礫わずかにあり。2-4層時点161島畠盛土か。

⑨7.5GY4/1暗緑灰　粘質土　シルト主体　粗砂～小礫あり　細砂わずかにあり。232島畠耕土、3-1層相当か。

⑩10GY4/1暗緑灰　粘質土　シルト主体　粗砂～小礫あり　ブロック状構造。232島畠盛土。

⑪5BG4/1暗青灰　粘質土　シルト主体　粗砂若干あり　小礫わずかにあり　Ca の結核わずかにあり。318島畠盛土。

161・232・318島畠 X=-149,920 ライン断面土色・土質

①　②の６～１㎝のブロックと中砂。161島畠裾部堆積。

②7.5Y5/1灰　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂～中砂あり。161島畠新段階盛土。

③5GY5/1灰オリーブ　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂～中砂・管状 Fe あり　締まり良し。161島畠2-3層時点古段階盛土。

④10G4/1暗緑灰　砂質土　細砂主体　シルト・中砂あり　粗砂わずかにあり。161島畠古段階併行、水田耕土（2-3層）。

⑤7.5Y5/2灰オリーブ　砂質土　細砂～シルト主体　中砂～粗砂多し。2-4層時点161島畠盛土か。

⑥7.5Y5/1灰　砂質土　細砂～シルト主体　中砂～粗砂あり。2-4層（水田耕土）。

⑦10Y5/2 オリーブ灰　粘質土　シルト主体　中砂～粗砂あり。232島畠耕土（3-1層相当）。

⑧5GY5/1~4/1 オリーブ灰～暗オリーブ灰　粘質土　シルト主体　粗砂～小礫あり。232島畠盛土。

⑨5GY5/1 オリーブ灰　粘質土　シルト主体　中砂～細砂若干あり。318島畠盛土。

⑩10Y4/1灰　粘質土　シルト主体　中砂若干あり　管状 Fe あり。318島畠盛土。

234段差・255島畠・310島畠 X=-149,920 ライン断面土色・土質

①5GY5/1~4/1 オリーブ灰～暗オリーブ灰　粘質土　シルト主体　粗砂～小礫あり。255島畠盛土。

②5GY オリーブ灰　粘質土　シルト主体　中砂～細砂若干あり。310島畠盛土。

③10YR4/1褐灰　粘質土　シルト主体　細砂あり　斑状 Fe・Mn 斑あり。310島畠盛土。

④2.5Y5/1黄灰　粘質土　シルト主体　中砂若干あり。310島畠上遺構埋土か。

水田耕作土直上の砂層が第２‐１ｂ層相当なら、127島畠は北側に拡張されていた可能性も残る。

以上の島畠とその周辺の水田部分の高さは、図17 の断面図の高さがほぼ平均的なものである。

177島畠は 129島畠と重複し、平面形もほぼ同じだが、上面に 129島畠盛土と同じ埋土の入った

178・179溝状土坑が残る。島畠上面からの深さは178溝状土坑が約0.17m、179溝状土坑が約0.33mで、壁は直立に近い。島畠上面の高さは平均T.P.+4.48mで、周囲の水田面はT.P.+4.34mほどである。

その南の180島畠も第２－１面130島畠と平面の位置・規模同じで重複する。高さ平均T.P.+4.42mで、周囲の水田面の高さは177島畠付近と同じである。

この坪の北側坪境からの各島畠の距離を見ると、174島畠の南辺が10.2mで109mの1/10に近似、176島畠南辺が21.8mと109mの2/10に同じと、島畠南辺が坪内の均等な地割りに合う例があり、少なくとも坪内北側は、10.9m幅に島畠が二つずつ位置している形になっている。

隣接する調査区では、02－１・06－２調査区では第２層では第２－１面のみ検出で、07－２調査区では第２－４面を検出するが、その面で本調査区につながる島畠はない。07－２調査区と接する位置にある176島畠は断面上、第２－４面にはない事が分かるので、その点で整合性はある。ならばおそらく177・180島畠も第２－４面には重複する島畠はなく、第２－３層時点成立のものであろう。

全体に第２－３層成立時点でできた島畠が多いが、十六ノ坪に第２－４面から継続する島畠が集中する。この面の調査で、第２－３層成立時、その機能期間、第２－２層成立時などの契機で島畠が面積的に拡張される過程が明らかにできたが、その様相も坪毎に異なると言える。

第２－３・4層包含遺物（図14）　第２－３面の次は第３－１面を検出・調査したので、第２－３・４層は同時掘削した。その包含遺物を概観する。

包含遺物の総破片数は以下のとおりである。土師器37｛甕１、把手１、小皿３、羽釜１｝、須恵器８｛甕体部すり消しなし１、捏ね鉢１、坏３（高台坏１）｝、無釉陶器22｛壺３、甕３、擂鉢５、七輪２｝、施釉陶器15｛碗９、皿２、甕３｝、青磁６｛碗４｝、白磁碗１、染付け10｛碗８、皿１｝瓦器椀12、瓦質土器48｛火鉢２、甕２、羽釜２、捏ね鉢１、すり鉢４、土管８｝、瓦42｛須恵質平２、いぶし平30、いぶし丸10｝、鉄滓１、木製板材２、砥石２、礫１、炉壁１である。

実測可能であったのは次の３点のみ。

図14－３は陶器皿片である。橙色の胎土に灰白釉がかかり外面下半は露胎。調整は回転ナデで、高台は若干丸味を帯び、鋭角さがない。16世紀末葉～17世紀初頭頃の肥前系陶器か。

図14－４は染付け皿片である。高台端部のみ釉ハギで砂付着、高台内側も釉あり。外面下部は回転ヘラケズリの痕跡あり。体部の器壁は薄く、残存部上端は口縁部に近い。17世紀前半頃のものか。

図14－５は陶器壺片、調整は内外面回転ナデ、肩部に３条の沈線が巡る。内傾する口縁上面には自然釉の剥離痕、それを境に内外面の色が違い、焼成時に蓋をされていたか。近世の備前焼か。

全体に上層に比べ、古い時期の遺物が増える。鉄滓や炉壁は中世の包含層にも見られる。碗が陶器と染付けがほぼ同数なのを過渡的様相と見れば、第２－３層が耕土として機能していた時期の下限は、大阪府内で染付けの出土が増加する17世紀後半頃と思われる。従来、第２－３層の時期は17世紀前半とされるが、都市部でない地域での耕作地の出土遺物はもう少し限定できない幅があると思われる。

小結　この面の調査では、第３－１面から第２－１面までの変化を追える成果が得られた。

この時点の水路は限られた坪境部分を通り、それ以外の坪境畦畔にも水口が見られる事から、坪同士の畦畔越しの水回しも行われた事が分かる。

島畠は面毎に面積を拡大するが、その様相は坪毎に異なる。十七ノ坪では第２－４面で東西方向のものが成立するが、第２－３面になって、その西に南北方向のものが成立し、わずかに拡張しながら第２－１面に継続する。十六ノ坪では第２－４層成立時点で第３－１面の島畠を核としたものが出揃うが、

それらが拡張される時期は各々異なる。二十ノ坪は西端のものが大きさを変えて継続するが、その東に新たな島畠ができるのは第２－２面の段階である。二十一ノ坪ではほとんどの島畠が第２－３面で成立し、その北側は整然とした配置だが、第２－１面では島畠間の水田部分を埋めるような拡張を見せる。

これらの違いは、その時々の洪水堆積層の範囲や量に左右され、また、その処理方法の決定が、坪毎になされているのを暗示しているのであろう。

また、第１ｂ面に多数見られた、洪水堆積物処理の方法としての溝状土坑が、島畠下底面の構造として他の面でも存在する事が、この面で第２－２層島畠の下底に残された溝状土坑で立証された。

また、図18・19で分かるように、第３層以下の島畠が、ほとんど幅を変えずに、上に積み重なり発達し、島畠間の水田の埋積が進行するまでは、水田面との比高差が大きいのに対し、第２層段階では各契機に幅を拡張して発達し、水田面との比高差の少ない島畠になっている。

これは、近世以降の、河内地域の綿花栽培など商品作物生産の盛行と関係しよう。洪水堆積物の処理方法として出現した島畠が、商品作物に適した畑を増やす方法に意味づけを変えた段階と言える。

第４項　第３－１面（図20・図版５－１・２）

第３－１面は、中世の最終段階の面と位置づけられている。また、この面でようやく現代の攪乱の範囲がせばまり、坪境周辺や調査区東端の状況がうかがえるようになってくる。島畠の分布範囲も限られており、坪内の地割をなす小畦畔が見られるようになってくる面でもある。

坪境　十六・十七ノ坪境は、東側では217・219畦畔にはさまれて218溝があるが、219畦畔は高さ0.1m弱で第３－１層と盛土の判別がつかず、218溝はその畦畔の高さ分の深さしかないので、断面上は第３－２層上面の凹凸にしか見えない（図７上図）。218溝は西の坪境から約38m（109mの7/20に近似）で終わり、その東で北に水口を開ける。それより東は217畦畔のみである。この畦畔は第６層時点から継続しているのが図７中図⑩で分かるが、上図の⑦は第４層時点で積み直され、下図では⑭と⑬が各々第５層・第４層時点で積み直され、部分的には数回補修されている（図版７－２）。西側で１ヵ所水口が開く。また、222・226浸蝕痕により破壊された部分がある。南に隣接する227溝も浸蝕痕らしく、坪境交点から水流が東進してきたのが分かる。222浸蝕痕の北辺にある畦畔状の221高まりは、浸蝕痕から巻き上がった土砂の堆積と思われる。

十七・二十ノ坪境は189畦畔のみ検出され、それも185浸蝕痕に破壊されている。畦畔は残存している部分で幅約0.8m、高さはT.P.+4.23mで、周辺は浸蝕され比高は不明である。

十六・二十一ノ坪境は、１ｂ土坑に切られるが、205畦畔が検出された。その畦畔は、断面では（図８最下図）確実には第５層から、おそらくは第６層から継続している。北側は次第に攪乱に入り、不明となるが、南端が途中で切れるのは浸蝕によるものか。

二十・二十一ノ坪境は190畦畔が検出された。断面では（図８）、第６層から継続しているが、西側では第５・３－２・３－１層時点で補修されたのが分かる。188浸蝕痕に切られ、東の坪境交点付近も浸蝕されている。188浸蝕痕の西側で不明確になるのは現代水路の鋼矢板による変形である。

全体で見ると、坪境に水路がないのが特徴で、この面と第２－４面との間に大きな水利体系の変化があったと思われる。また、坪境付近の攪乱の面積が少なくなった分、当時の浸蝕痕などが確認できるようになり、坪境が洪水の被害を受ける状況が把握できるようになった。

坪境出土遺物　218溝と226浸蝕痕からわずかながら遺物が出土している。埋土は第２－４ｂ層であ

る。破片数で見ると以下のとおり。218溝では瓦器椀１、瓦質土器１、226浸蝕痕では須恵器甕口縁片１、瓦質擂鉢１、いぶし平瓦１である。226浸蝕痕の須恵器のみ図化可能であった。

図21－１は須恵器甕口縁片である。頸部外面に縦方向の平行タタキがわずかに残り、内面には粘土接合痕が一部残るが、最終調整はヨコナデである。口縁は外反した端部を上方に折り曲げるという特異な作りかたをし、その接合痕を上面に残す。質は還元焔焼成で、器表にも石英・長石・黒色粒が見える須恵器である。魚住窯など東播系須恵器の13世紀前半頃の甕と思われる。

十七ノ坪の状況　坪内では224畦畔が検出され、南北方向の長地型地割りがあったようである。その西に接し、0.05～0.1mほど落ちる225段差が長方形に巡り、その西辺も耕地区画の可能性が高い。西の坪境184畦畔からの距離は約11.6m・19.5mと、109mの1/10・2/10とはややずれる。両方とも北隣の06－２調査区では検出されていない。水田面の高さは残りの良いところで西側が平均T.P.+4.12m、225段差内がT.P.+4.03m、224畦畔以東がT.P.+4.06mほどだが、浸蝕痕付近はそれよりやや低い。

十六ノ坪の状況　この面で検出した229溝・230高まりは上面の遺構である事は第３項で前述した。しかし、その付近に本来は小畦畔が存在し、上面からの攪乱で消滅した可能性も考えられる。ただし、その東西の水田面はどちらもT.P.+4.01mほどで高さの違いは見られない。

その東側で、234島畠を検出した。北側では付近に第２－４ｂ層を欠き、第２－３・４層に削平されて水田面と同じ高さになるが、切り合いは検出でき、島畠の北端部分も確定できた。北側坪境との間は3.3mである。その西辺は南側が次第に西に張り出し、図19下図断面で確認できる。この断面では第３－１・２層では水田耕作土との切り合いは見えないが、東へ10㎝ほど上がる段を成し、盛土は第５層下面から立ち上がる①である。島畠の幅は北側で5.6mほどである。

調査区南東端付近で、南北に直線的に伸びる土色の変化を確認したが、この部分は第３－１・２層が遺存していないので、第２－３面の154畦畔の痕跡と思われる（図20点線）。

231島畠は、この面では幅2.6mほどである。北端部分はかろうじて肩部が残るが裾部分は攪乱に切られる。北側坪境までの距離は2.8mである。図18の断面では第６層時点の315島畠の上に第５層成立時点に作られ、第２－３・４層時点の160島畠の東側の芯に利用されたのが分かる。盛土はシルトに砂の混じる粘質土である（上図①、下図②）。南側には上面に耕作土が残る（下図①）。第３－１・２層は水田部分から島畠法面に沿って上がり、各時点で法面に塗り加えられていたものか。西側に沿う不明確な溝は浸蝕痕の可能性が高い。西側水田面は平均T.P.+4.02mで、島畠東側と変らない。

島畠231・232間の中間付近に236畦畔が通る。幅0.3～0.4m、水田面との比高は0.04～0.1m程度である。西側水田面は平均T.P.+4.08mと、東よりわずかに高い。北側は攪乱で途切れる。

232島畠も第５層成立時に、第６面318島畠を踏襲して作られ、上に第２－３・４層時点161島畠がある。盛土も粘質土である（図19上図、中図）。北側坪境と連結するらしい畦畔が付随していた。下面の状況を見れば、231・234島畠にも本来そのような畦畔があった可能性が高い。島畠の幅は2.5～3.4m、上面は耕作土層が残り、西が高く平均T.P.+4.3m、東はT.P.+4.2mほどである。北側に連結する畦畔は島畠と西辺を同じくし、高さは一段低い。幅は約0.9m、北側の坪境とつながる部分は226浸蝕痕により破壊されている。西側の水田面は平均T.P.+4.12mである。

西側坪境からの距離は、232島畠の東辺が10.1～10.6mで109mの1/10に近似、231島畠の西辺が27.2～27.9mと109mの5/20に近似し、232島畠西辺から236畦畔までが10.1～10.6m、231島畠東辺と234島畠西辺の間が9.9～11.5mと109mの1/10に近似となるが、全体を通しての規則正し

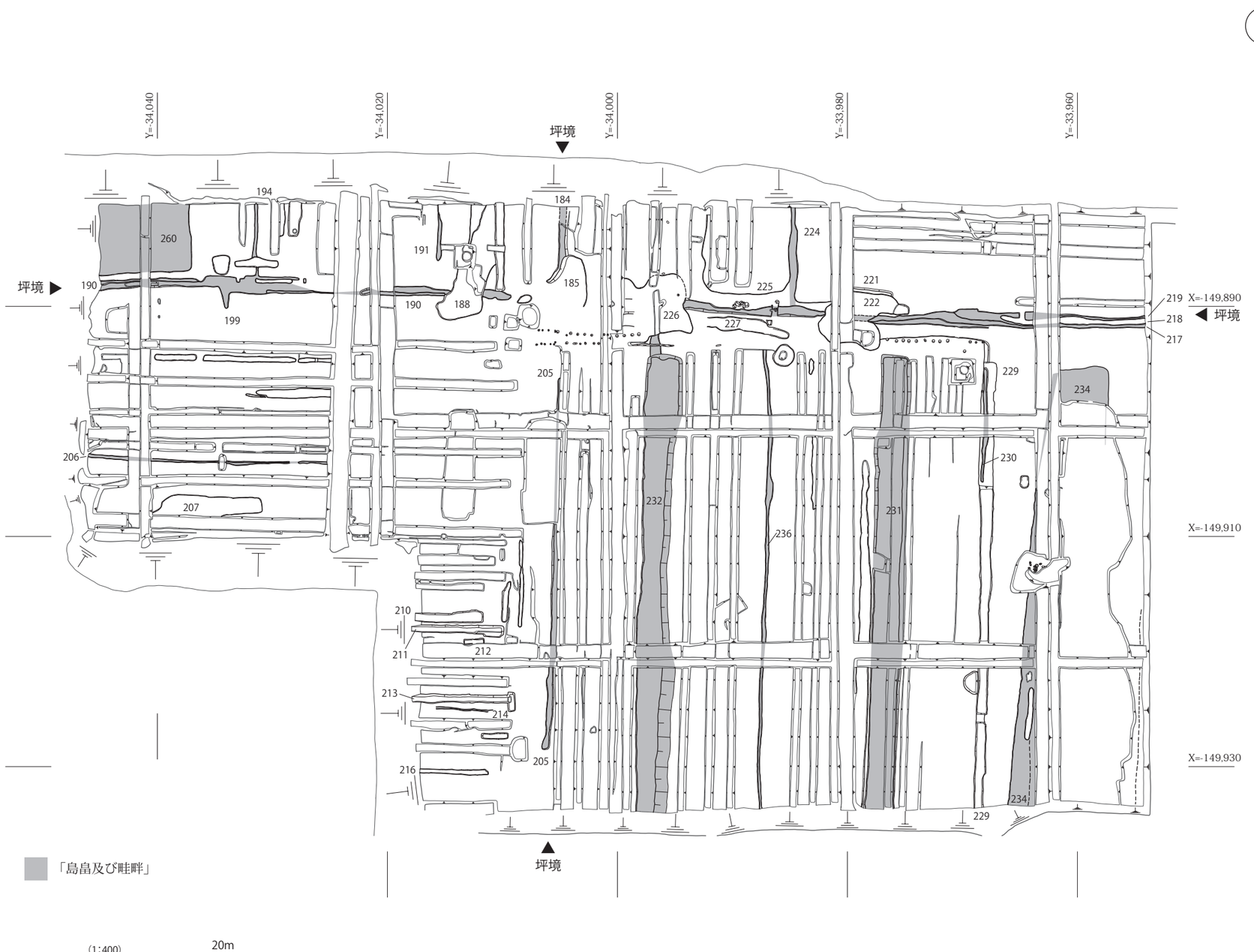
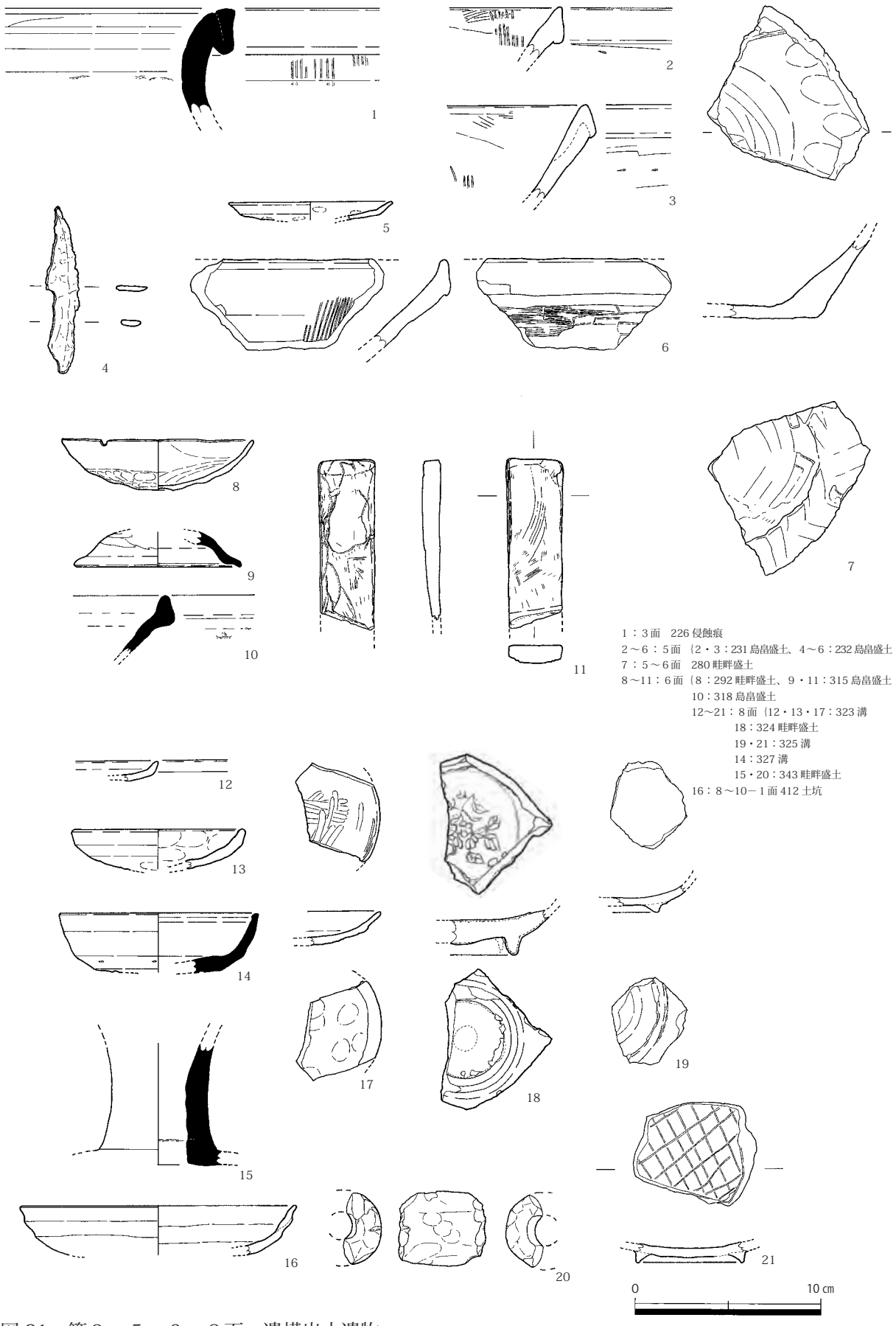

Y=-34,040
Y=-34,020
Y=-34,000
Y=-33,980
Y=-33,960
坪境
X=-149,890
X=-149,910
X=-149,930
「島畠及び畦畔」
0
(1:400)
20m

図 20　第 3-1 面　全体図



1：3面　226 侵蝕痕
2～6：5面〔2・3：231 島畠盛土、4～6：232 島畠盛土
7：5～6面　280 畦畔盛土
8～11：6面〔8：292 畦畔盛土、9・11：315 島畠盛土
10：318 島畠盛土
12～21：8面〔12・13・17：323 溝
18：324 畦畔盛土
19・21：325 溝
14：327 溝
15・20：343 畦畔盛土
16：8～10－1面 412 土坑

図 21　第 3・5・6・8 面　遺構出土遺物

い地割りとは言いがたい状況である。

十六ノ坪遺構出土遺物　231・232島畠は、盛土包含遺物は第５層成立時点のものなので後述するが、耕作土層は第３－１層と同時期埋没である。232島畠耕作土層からわずかながら遺物が出土している。破片数で見ると、土師器５｛粗製椀１｝、須恵器３｛甕体部すり消しなし１、鉢１、捏ね鉢１、坏１｝、礫２である。図化可能なものはなかった。

二十ノ坪の状況　南北方向の長地型地割りがあったようである。191畦畔は浸蝕を受けたのか残りが悪く、高い部分でも水田面との比高差は 0.04m 程度である。

194畦畔も高さは 0.05m ほど、南側を切る溝状の落込は浸蝕痕か。

この坪の水田面の高さはどこも T.P.+3.94m ほど、北西隅の 260島畠上面は T.P.+4.02m ほど、南側坪境との間は幅約0.5m の溝状を成すが、その底部は平坦で東の水田面と同じ高さである。260島畠としたが、盛土などは確認できず、高さもあまりない。また、第２－３面171島畠が重複するが、新しい方の島畠が縮小する例はほとんどないため、これは水田の段差と考えた方が良いかもしれない。

東側坪境からの距離は、191畦畔が 10.3m と 109m の 1/10 と近似だが、194畦畔は 26.2m、260島畠の東辺は 31.7 ～ 32.0m となる。191畦畔は 06－２調査区の同一面で３－２面 B15畦畔につながるが、他の二つは続きを検出されていない。

二十一ノ坪の状況　畦畔と溝・溝状土坑の方向から東西方向の長地型地割りが存在したと推測される。

北側坪境190畦畔から南に伸びる 199畦畔は長地型地割りの中を区切るものか。その南側の東西方向の溝群は深さ 0.1m 程度で畝溝状である。第２－４ｂ層で埋没するので上層の床面遺構ではない。

206畦畔は東側の残りが悪い。幅は 0.2 ～ 0.3m ほど、高さは 0.05m 程度。南北の水田面は高低差なく、平均 T.P.+4.06m である。その南の 207落込は深さ 0.08m ほど、東側は長方形状で幅約1.6m である。

210 ～ 212溝状土坑は第２－３面177島畠基底部の溝状土坑である。この面からでも深さは 210 が 0.46m、211 が 0.56m、212 が 0.26m である。その北東の溝群は鋤溝か。坪境沿いの耕作方向を示す。南側にも東西方向の溝状土坑・溝が散在するが、その中に 214畦畔がある。幅は最大0.25m、水田面との比高差は 0.05m 程度である。この付近の水田面の高さは T.P.+4.11m ほどで、畦畔南北で違いはない。

坪境からの距離で有意義な数値は見出せない。206畦畔と 213畦畔のライン間の距離は 21.0 ～ 21.3m で、109m の 2/10 に近似する。

隣接する調査区とのつながりでは、214畦畔が 07－２調査区３－２a 面197畦畔とラインが同一である。面が違うが、07－２調査区197畦畔は、３－1a 面畦畔の擬似畦畔（畦畔基部）の可能性が考えられており、それが正しければ問題はない。その他にはつながる遺構は検出されていない。

二十一ノ坪遺構出土遺物　211・213溝状土坑からわずかに遺物が出土している。211 からは青磁碗片１、いぶし平瓦片１、213 からは器種不明須恵器片１、瓦質甕片１である。図化できるものはなかった。

第３－１・２層包含遺物　第４面に向けて、第３－１・２層を同時掘削して遺物も取り上げた。破片数で見ると以下のとおりである。弥生土器3、土師器27｛竈１、坏１、小皿７、羽釜６｝、須恵器４｛捏ね鉢２、古墳後期坏身１｝、青磁碗２、瓦器椀14、瓦質土器19｛甕２、羽釜２、捏ね鉢１、擂鉢５、土管２｝、いぶし平瓦３、炭３、桃核１である。実測可能であったのは以下の２点である。

図14－６は東播系須恵器捏ね鉢片である。全体にナデ調整で内面は布ナデか。口縁端部の上下への拡張がまだ緩く、12世紀末葉～ 13世紀初頭頃のものか。

図14－７は羽釜片で、色は土師器的だが、二次的被火を受けるので瓦質土器であろう。残存率は

10% 以下。調整は大部分ヨコナデだが、鍔部下面の体部との接合部分のみヘラケズリが残り、胴部外面の調整か。口縁外面は緩く段が二つ見られる。胎土に泥岩のような黒色の砂粒がわずかに見られる。時期は限定できず、13 ～ 14世紀頃か。

陶器碗や染付けは見られなくなり、中世以前の遺物でまとまる。瓦器椀片は内面ミガキもまばらなものが多い。ただし、層自体の時期を限定できる要素は少なく、13世紀以降としか言えない。

小結　確実な島畠は十六ノ坪にのみあり、それも坪境畦畔も大体第５層時点から継続する。だが、洪水が少なかったわけでもなく、坪境畦畔は各所・各層時点での補修の痕が見られ、この面でも第２－４ｂ層堆積時の洪水の浸蝕痕跡がある。島畠断面を見れば、第５層時点でかなりの比高差があった水田面が、第３－１層時点では埋積が進み、比高差が減少している。つまり洪水堆積物の処理は主に、耕作土に混ぜ、新たな耕作土を作る方法で為され、第２層内島畠の変遷と大きく異なる。

本調査では、第３－１層が耕作土として機能していた時期は限定できなかったが、池島Ｉ期地区の97－３調査区で第３－１ｂ層から文明13年（1481年）銘の卒塔婆が出土している事から 15世紀末葉から 16世紀頃と考えられる。つまり下限は安土桃山時代、近世にかかる。

第５項　第４面（図22・図版６－１・２・７－１）

第５面から第３面に継続する坪境・島畠が見られる。

坪境　十六・十七ノ坪境は第３－１面の状況から、219畦畔など、北側に部分的にあった第３層系の盛土を除去した状況で 246畦畔を検出した。断面では図７の上図⑦、中図⑩、下図⑬を最上部盛土とし、217畦畔と変らない。幅0.9 ～ 0.5m、西側は第３－１面の浸蝕により途切れる。

十七・二十ノ坪境の 249畦畔は 184畦畔から薄い盛土を１層と、浸蝕で変形した部分を除去して検出した。最大幅１m、高さ T.P.+4.22m で、上部に一ヶ所水口状の溝が横断するが、底面が水田面から高すぎる。南側は第３－１面の浸蝕で削平されるが、坪境交点まで基底部は遺存している。

十六・二十一ノ坪境の 248畦畔は、205畦畔と同じ。第３－１面で検出できなかった南側も検出できた。南側の途切れは確認用の断ち割り、北側は攪乱に切られる。最大幅0.6m である。

二十・二十一ノ坪境の 247畦畔は 190畦畔から最上層の第３層時点の盛土を除去して検出した。途中の途切れや坪境交点近くのえぐれは、この面での浸蝕のようである。最大幅は 1.1m である。

この面でようやく坪境交点が確認できた。第３－１面での浸蝕を受けるが、平面形は把握できる。東西・南北の通りは良く、ずれはない。249畦畔と 248畦畔の幅がかなり違うのが特徴的である。

十七ノ坪の状況　257畦畔は第３－１面の 224畦畔と同じ位置だが、第３－２層時点からの 224畦畔の盛土下で、頂部も削平されず残っていた。北側で途切れるのは 224畦畔盛土時の影響か。高さ平均 T.P.+4.07m、幅0.4 ～ 0.6m である。西の坪境からの距離は約19.5m である。第５層時点から継続している畦畔である。06－２調査区第４面で短く痕跡のみ検出されている B23畦畔とラインが一致する。

252段差は南の坪境から 3.3 ～ 2.8m の距離で北へ落ちる。段差の北側が平均 T.P.+3.94m でそれ以外の水田面が T.P.+3.98m ほどなので、この段差は西側セクション付近で北に屈曲するか。

257畦畔は南北方向の長地型地割りを想定させるが、252段差はそれと矛盾する。第２－３面149島畠のように、東側に東西方向の地割が存在する形が、この面から形成されているのかもしれない。

十六ノ坪の状況　255島畠は第３－１面の 234島畠とほぼ同じで、ようやく全体の規模が見えてくるが、南西肩部で、第３－１・２層が法面から上面まで覆う。それを第３層時点の盛土と考え、除去した状態

で新たな遺構とした。本来の高さが残るのもその部分のみで T.P.+4.12m、最大幅は 6.4m である。北の坪境とは 2.9m の距離があり、その間を東辺に沿った幅0.7m ほどの畦畔でつなぐ、その畦畔には水口が開く。東側の水田面は北側で遺存するが、T.P.+4.03m で、西側の水田面は平均 T.P.+3.96m である。

231島畠はこの面で上部の耕作土層を除去した。床面には南北方向の鋤溝が散在する。北端は段落ちし、その部分が東に張り出した所から幅約0.9m の畦畔で坪境につながる。上の段から北側坪境までは 2.8m ほどである。西側水田面は平均 T.P.+3.93m である。

258畦畔は上面236畦畔と同位置に重複するが、その盛土下で遺存していた。頂部高は T.P.+4.11 ～ 3.98m で、幅は約0.4m、北側は攪乱で切れる。西側の水田面は平均 T.P.+3.98m である。

232島畠も耕作土層を除去し、鋤溝を検出した。北側坪境につながる畦畔も第３‐１面と同じで、現代水路に切られる。西側水田面の高さは平均 T.P.+4.02m である。

西側坪境からの各遺構の距離は第３‐１面の状況と変らない。

二十ノ坪の状況　250土坑が検出されたのみである。約1.1×0.7m の隅丸方形だが、深さは 0.04m と浅い。水田面は東で T.P.+3.85 m ほど、西で T.P.+3.75m ほどなので、本来どこかに小畦畔が存在したと思われる。06‐２調査区第４面では約10.9m 間隔で３本の小畦畔が検出されている

二十一ノ坪の状況　251畦畔が検出されたのみで、それも部分的にしか確認できなかった。幅約0.3m で、高さは残りの良い部分でも 0.05m ほどである。北側坪境から約9.4m のラインに位置する。02‐１調査区ではつながるものは検出されていない。

その北側の水田面は平均 T.P.+3.87m、南側は T.P.+3.93m ほどである。また、251畦畔から 15m ほど南から以南は T.P.+4.01m ほどなので、その付近に小畦畔があった可能性もある。07‐２調査区では、第３‐２a 面197畦畔（本調査区214畦畔と同ライン）がこの面から継続しているとする。

第４層包含遺物　破片数は、弥生土器１、サヌカイト製チップ１、土師器42｛甕２、鉢２、坏５、小皿12、羽釜１｝、須恵器７｛甕体部すり消しなし１、壺１、鉢１、擂鉢１、捏ね鉢１、坏１｝、白磁皿１、陶器甕２、瓦器椀７、瓦質土器16｛甕４、羽釜１、三足羽釜１、擂鉢１｝、いぶし平瓦１、木製品１、炭１、砥石１、スサ入り焼粘土１である。実測できたのは以下の４点である。

図14‐８は土師器小皿片である。底部外面は指オサエと粗いナデ、口縁部外面から内面はヨコナデである。欠損している底部中央は上方に突出していたようで、口縁部には煤が付着するので灯明皿として使用されたのであろう。へそ皿でも作りが粗く、浅いものなので、15世紀頃のものと思われる。

図14‐９は砂岩製砥石片である。使用によりかなり凹んでいる。図左面では左右から入る凹みが二つ、図右面では左から入る凹みがある。刃物を研いだとは考えにくい磨滅である。

図14‐10 は白磁高台皿片である。外面は口縁部が回転ナデの他は回転ケズリで、全面施釉される。高台底面は４ヶ所ヘラで弧状にえぐる。内面には四つトチン痕が残る。大宰府市推定金光寺跡で、外面下半が露胎だが、器形がほぼ同じ例があり、14世紀後半から 15世紀に見られるものらしい。

図14‐11 は木製品である。刀形状の形で、図上方は茎子状の形に作る。刀形とすると鋒部分は両面から刃状に削り、峰部に当たる面はかなり斜めである。図左面は平滑で、右面には工具痕が多く残る。刀形と思えないのは二つの貫通する孔がある事である。図左右面に抜ける孔は径3.5㎜ほど、端面に貫通する孔は径2.5㎜ほどである。

第４層が機能した期間は、基本層序のつながりに問題なければ、第４項で上述した紀年銘卒塔婆により、15世紀末葉が下限となる。図14‐10 の白磁皿・図14‐８の土師器へそ皿もそれに符合する。瓦質

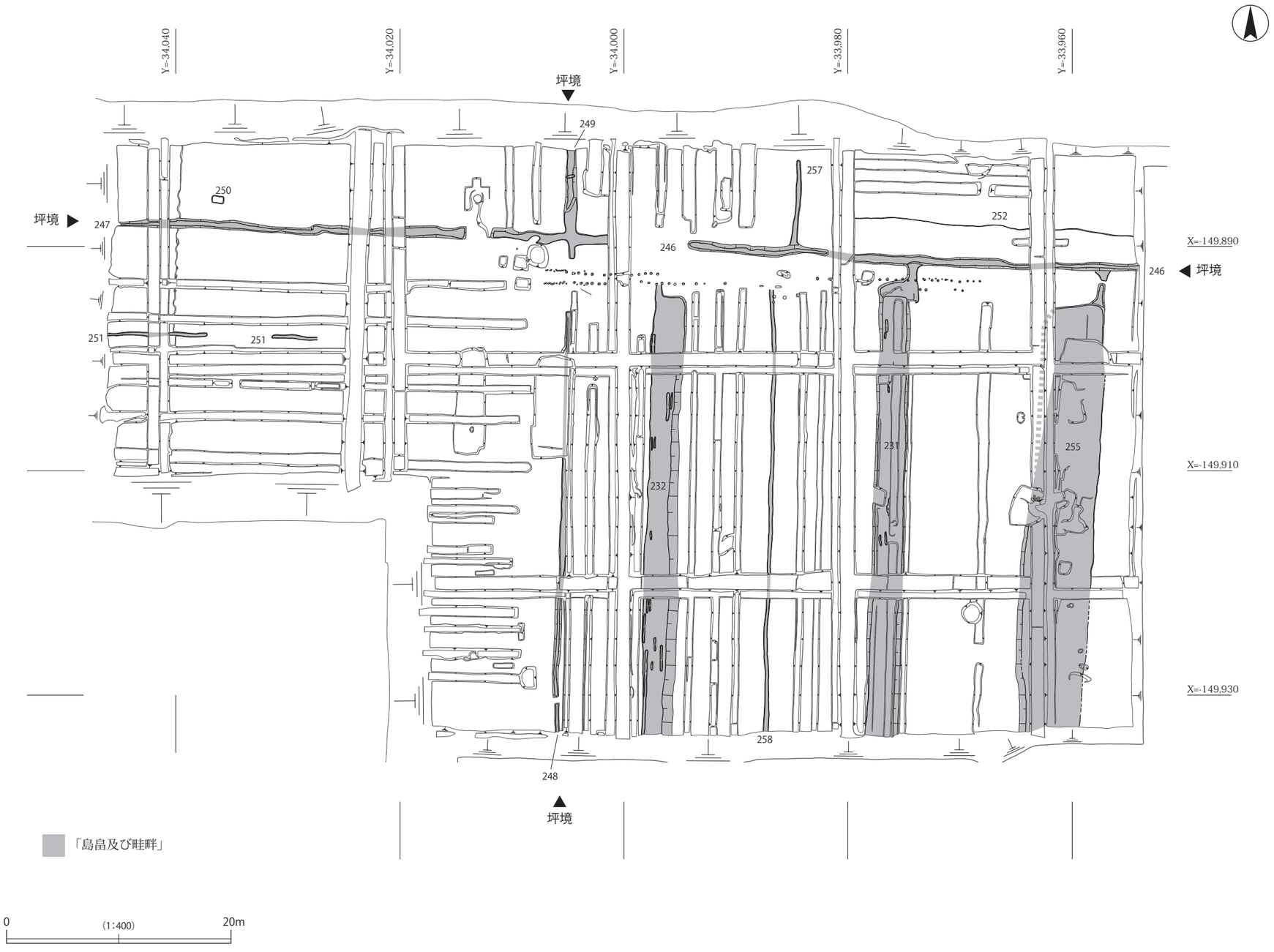

Y=-34.040
Y=-34.020
Y=-34.000
Y=-33.980
Y=-33.960
坪境
坪境
坪境
坪境
249
250
247
257
252
246
246
X=-149.890
251
251
231
255
232
X=-149.910
X=-149.930
258
248
「島畠及び畦畔」
0
(1:400)
20m

図 22　第 4 面　全体図

三足羽釜の存在で、上限は13世紀までと限られる。瓦器椀もミガキの粗いものが多いが、細片多く磨滅も激しいので同時期的ではなかろう。第５層も考慮すれば、15世紀中葉頃から末葉と考えられる。

小結　この面は、第５面から第３面へ継続する耕作地の途中の状況と言えるが、攪乱の影響が減少し、島畠と坪境のつながりなどが明確になる。坪境に水路が存在していないのが確実な面でもある。しかし坪内での均等な耕地区画の存在は確かめられず、むしろ、ややずれた区画が多い。

各水田面の高低差は、上の面よりやや顕著になり、逆から見れば平坦化の過程が見られる面でもある。

第６項　第５面（図23・図版８－１・２・９－１）

十六ノ坪の島畠は第６層時点のものに盛土を加えるが、面積的にはほとんど変らず、それが第３層時点まで継続する。十七ノ坪では均等な地割が確認できる。二十一ノ坪では、第４面までとは異なり、東坪境近辺に、南北方向の地割りが確認できる。

坪境　十六・十七ノ坪境は280畦畔である。図７の断面図では、下図では第５層成立時点で⑭の盛土が成されるが、上図⑦、中図⑩は第６層時点からの畦畔盛土である。下図⑭も、下層の⑮には崩れた形がなく、浸蝕の補修ではないようである。他にも補修された形跡はなかった。畦畔頂部は、東ではT.P.+4.2m を越える部分もあるのに対し、西ではT.P.+3.9m 台まで徐々に低くなる。

十七・二十ノ坪境は279畦畔としたが、第４面249畦畔と同一である。幅は最大1.4m と太くなる。

十六・二十一ノ坪境は283畦畔である。これも第４面248畦畔と同じもの。図８の断面図では第６層との関係が分かりにくいが、平面的には第６面の293畦畔の頂部に厚さ10㎝弱の盛土が見られたので、図８下図④が第５層時点の盛土である可能性が高い。

二十・二十一ノ坪境は281畦畔である。図８で、東側では第６層から継続する高い畦畔がある（上図⑥）のに、西では第６層時点では低く（下図⑨）、第５層成立時に盛土が成される（下図⑧）。西の方だけ浸蝕されたか。頂部高は坪境交点近くが削平される以外は変化なく、T.P.+4.05～3.92m の中に収まる。畦畔北側で土坑状に見える282は浸蝕痕で、畦畔北側法面から水田面をえぐったような形状であった。

坪境交点では、南に伸びる283畦畔が、第４面の248畦畔より残りが悪い事から、交点南側で畦畔を破壊する浸蝕があった可能性があるが、判然としなかった。

坪境は、西の方で浸蝕を受けた痕跡は残るが、全体的には破壊・補修の痕跡は少ないと言える。

十七ノ坪の状況　257・286・288畦畔が検出された。257畦畔は第４面に継続する畦畔である。

286畦畔は第４層の床面で削平され、第５面で盛土と水田耕作土との切り合いを残すのみの形で検出された。この面での検出幅が257畦畔に比べ細く、後述する第６面305畦畔と同一なので、第６～５層時点でのみ機能していたのであろう。平均的な幅0.2m 強。

257畦畔は上述のとおり第４面で検出され、この面の水田耕作土とも切り合いを持つ。平均的な幅は約0.7m である。

288畦畔は頂部を削平され、東側は水田面と平坦で切り合いのみを残すが、西側は水田面との間に0.1m 弱の段差を成す。幅0.2m 強と細いので、これも第６～５層時点のみでの畦畔であろう。

西側坪境と288畦畔の距離は約8.1m だが、小畦畔同士は、ほぼ10.9m である。それから見れば、Y=－33,9625 ラインセクション内に小畦畔があったのを確認しないまま掘削した可能性が高い。

水田面の高さは調査区東端付近が約T.P.+3.91m、286畦畔の東西は約T.P.+3.86m でほとんど差がない。288畦畔の東側は約T.P.+3.94m、西側は約T.P.+3.86m である。

第４面では意味づけし難かった 257畦畔の位置もこの面で理解できる。この坪内の地割りは、おそらくは東の坪境から 10.9m 間隔で割り付けられた長地型地割りで、その誤差が 288畦畔と西側坪境との間に集積したのであろう。06‐２調査区では第５面でこれらにつながる小畦畔は検出されていない。

十六ノ坪の状況　第３面まで継続する島畠と、それぞれを北側の坪境と連結する畦畔、そして島畠間に２本の小畦畔が検出された。

255島畠は平面的規模が明確である（図版９‐２）。北西隅は検出できなかったが、方向性はほぼ正確に正方位である。図19下図の断面では、東辺は第６面310島畠と一体で、西辺はわずかに拡張している。幅約7.6m、高さは南西肩部付近で約 T.P.+4.12m である。北側坪境との距離は約2.6m、幅0.6m ほどの 253畦畔がつなぐ。ここは第４・６面で水口があるが、この面では検出されない。畦畔は坪境畦畔と同高である。東側水田面の高さは平均 T.P.+3.86m、西側水田面は平均 T.P.+3.91m である。

その西には 287畦畔が南北に通る。幅約0.4m で、頂部は削平され、東側は水田耕土との切り合いのみが検出され平坦、西側はわずかに段が残り、西側水田面の高さは T.P.+3.87m ほどである。

その西には 231島畠がある（図版231）。図18 の断面では、これも東辺は第６面315島畠盛土と共通し、西辺の緩やかな法面の上に急角度な法面の盛土をし、上部平坦面を若干西へ拡張する。幅は約 3.2m である。上図では西側肩部に第３‐２～１層時点で若干の補修か拡張が見られる。下図の東側法面も補修か。西側は 315島畠盛土が削られたような形があるが、盛土が締まった粘質土なので、それをこれだけ浸蝕する洪水流は考えにくい。231島畠造成時に、滑り崩壊を防ぐために削り込んだ可能性もある。北端部分の法面の傾斜は緩く、その裾部と北側坪境の距離は約１m で、その間を幅1.6m の 256畦畔がつなぐ。256畦畔の東裾部は 231島畠の裾部よりやや東に出るが、中軸線のラインは十七ノ坪の 286畦畔とほぼ同じである。高さは坪境畦畔より高い。その西側の水田面は平均 T.P.+3.85m である。

その西側には 289畦畔が南北に通る。頂部を削平され、水田耕土との切り合いのみが残り、幅約0.3m である。中軸線は第４面258畦畔から 0.1 ～ 0.4m 西にずれる。その西の水田面の高さは東側と同じ。

その西側に 232島畠がある（図版９‐４）。図19 の断面図では、第６面310島畠の幅がある北側ではその上に盛土され、幅が狭い南側では法面まで覆うように盛土される。幅は、北側がやや太くなるが、平均3.4m である。北側坪境までの距離は 4.1m ほどで、その間を、幅約0.7m の 275畦畔がつなぐ。その畦畔の高さは坪境畦畔と同じである。その西側の水田面の高さは平均 T.P.+3.92m である。

西側坪境からの距離は、232島畠西辺が 6.2 ～ 6.4m など、有意義な距離は認められない。231島畠の東辺が十七ノ坪の 286畦畔とラインが合うが、それを基点にしても同じ状況である。意外な事に、255島畠西辺を基準にすると、287畦畔が約5.4m と 109m の 1/20 に近似、231島畠東辺が約10.2 ～ 10.8m と 1/10 に近似、289畦畔が 22.0 ～ 22.6m と 2/10 に近似、232島畠西肩部が 33.0 ～ 33.4m と 3/10 と近似、となる。十七ノ坪内地割りより約2.2m 西にずれた地割り基準線がある事になるが、東側坪境を基点にして割り付けた誤差が集積したかは疑問である。坪境と島畠をつなぐ畦畔の位置も法則性がない。

十六ノ坪島畠盛土包含遺物　231・232島畠盛土から若干の遺物が出土している。第５層成立時点の盛土なので、遺物の包含された時期は第５層包含遺物より古いが、ここで述べておく。

破片数で見ると、231島畠盛土では、土師器16｛杯３、小皿４、羽釜１｝、無釉陶器１、白磁１、瓦器椀３、瓦質土器10｛羽釜１、擂鉢６｝である。232島畠盛土では、弥生甕２、土師器16｛甕２、鉢１、坏１、小皿３、羽釜１｝、須恵器２、瓦器椀１、瓦質土器10｛火鉢１、甕２、鉢３、擂鉢４｝、鉄製刀子１、炭１、桃核１である。双方で実測可能なものは以下の５点であった。

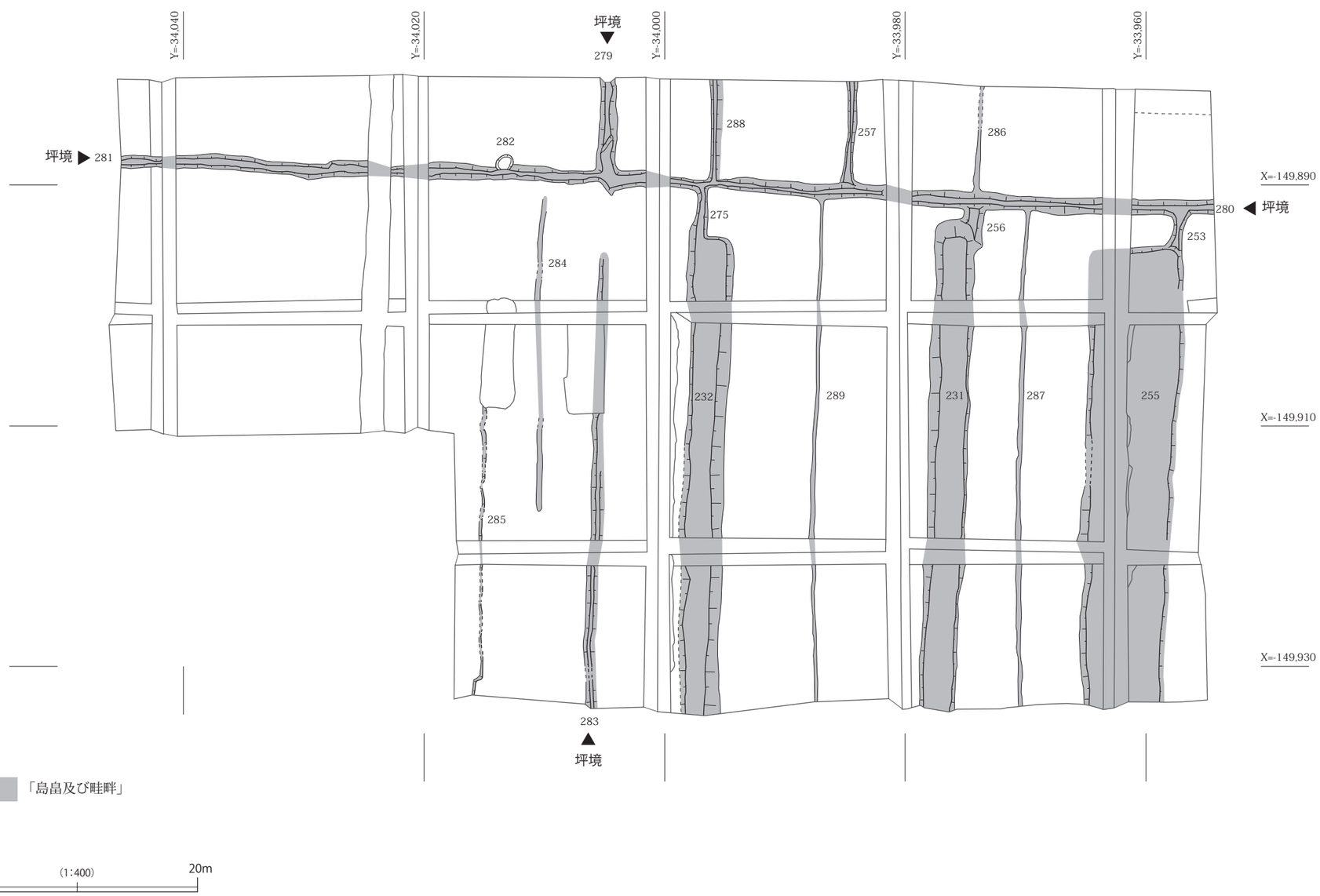

Y=-34,040
Y=-34,020
坪境
279
Y=-34,000
Y=-33,980
Y=-33,960
坪境 281
282
288
257
286
X=-149,890
280 坪境
275
256
253
284
232
289
231
287
255
X=-149,910
285
X=-149,930
283
坪境
「島畠及び畦畔」
0
(1:400)
20m

図 23　第 5 面　全体図

図21－２は瓦質擂鉢片である。内面から口縁外面はヨコナデで、外面はヨコケズリ、口縁内面にナデに先行するナナメハケが残る。口縁端部を上下に拡張する形態は最古型式を示し、14世紀後半でも中葉に近い頃のものと思われる。

図21－３も瓦質擂鉢片である。調整も上に同じ。口縁端部の形態は図21－２よりやや新色だが、下方に拡張気味で、その下にヨコケズリが残るので 14世紀後半のものか。

図21－４は鉄製刀子か。刃部は片刃造りで短い。その形態から、研ぎで磨耗して短くなったような印象を受ける。茎部との境の関部は、棟部は身部から直角にえぐってから丸く茎部に入る。刃部は錆で形態がはっきりしない。茎部は一旦やや広がってから末端は細くなる。やや特異な形態と言える。

図21－５は土師器小皿片である。外面は口縁ヨコナデ、底部はユビオサエ後、粗くナデる。内面はヨコナデだが、その下にユビオサエが散在する。時期は特定しがたい。

図21－６も瓦質擂鉢片である。内面から口縁端部外面はヨコナデ、それ以外の外面は、ヨコハケ、ヨコケズリ、ヨコナデの順に調整が重なる。口縁端部の上下への拡張がしっかりし、丁寧な外面調整を見ても、14世紀後半の中葉に近い時期と思われる。

総量が少ないが、瓦質擂鉢が 14世紀後半頃で時期的にまとまり、他の遺物もそれに矛盾はない。

二十ノ坪の状況　遺構は検出できなかった。ただし、北隣の 06－２調査区では B26 ～ 24畦畔の３本が東側坪境から 10.9m 間隔で並び、南北方向長地型地割があった。本調査区でもそのラインを境に、水田面の高さが若干の違いを見せる。東側坪境と B26畦畔ラインの間は平均 T.P.+3.79m、そこから B25畦畔ラインまでは平均 T.P.+3.68m、そこから B24畦畔ラインまでは平均 T.P.+3.72m、それ以西は平均 T.P.+3.75m である。検出できなかったが、小畦畔はあった可能性が高い。

二十一ノ坪の状況　上面まで東西方向の地割りだが、この面では南北方向の小畦畔・段差が検出された。

284畦畔は東側坪境から西へ 4.4 ～ 5.1m の位置で南北に走る。幅約0.4m、高さはどこも 0.05m に満たない。北端は攪乱で荒れ、不明。南も途中で不明確になり検出できなかった。

285段差は東側坪境から西へ 8.4 ～ 8.8m の位置で、西へ 0.03 ～ 0.05m 落ちる段差である。第６面の 301畦畔より約0.5m 西と、近い位置関係にある。南側が鍵形に曲がるが、その屈曲部分は第６面の東西方向小畦畔、302畦畔のラインと一致する。

坪内の水田面の高さは、調査区内で北西部分は T.P.+3.72 ～ 3.78m と平坦、284畦畔以東は平均 T.P.+3.89m、以西は平均 T.P.+3.87m と東西でほとんど差がない。285段差以西の調査区南西部は平均 T.P.+3.84m である。

285段差は、東西方向長地型地割りが基本の第６面小畦畔と位置的に関連性があるため、長地型地割り内の区画と思われる。284畦畔はこの長さを検出し、ラインのずれもないため、東西方向長地型地割り内を区画しているとは考えにくい。東側坪境付近のみ南北方向の地割りがあったのであろうか。

どちらも、坪内南東側から東側坪境に沿って北に伸びる、やや高い地形に対応するための耕地区画と考えられ、上下面との関係から見れば、この面でも基本は東西方向長地型地割りで、その耕地区画を検出できなかった可能性がある。07－２調査区第５面では、本調査区に直接つながる遺構はないが、やや南で東西方向の段差や島畠が検出されている。

第５層包含遺物　破片数で見ると、弥生土器３｛高坏１｝、土師器192｛甕20、把手１、高坏１、坏６、粗製椀18、小皿22、羽釜８｝、須恵器35｛甕体部すり消しなし３、壺15（蓋１）、擂鉢７、捏ね鉢２｝、無釉陶器３、青磁碗１、瓦器椀78、瓦質土器50｛甕７、羽釜19、鉢１、捏ね鉢２、擂鉢19｝、瓦４｛い

ぶし平１、須恵質平２、土師質丸１｝鉄製刀子１、点け木２、桃核２、骨２、砥石２、礫２、炉壁１である。実測可能だったのは以下の８点である。

図14－12は須恵質平瓦片である。上面は布目痕、下面は縄目痕があり、端面はヘラ切り後ナデである。器表面に石英粒が多く付着し、胎土には石英・長石・黒色粒のみである。厚さから平安時代頃か。

図14－13は須恵器擂鉢片である。復元径はやや不確かである。内外面回転ナデで、外面には自然釉と降灰痕がある。口縁端部に体部と直角な面を持ち、その内外の稜は鋭角的である。11世紀後半頃の東播系片口鉢の口縁部形態に似るが、明らかに胎土が異なる。東海系とすれば、12世紀末葉より前のものと考えられるので、11世紀後葉から12世紀後葉頃のものか。

図14－14は須恵質だが、平瓦片にしては残存面の弯曲が不均等な部分がある。上面はハケ、一部ナデがそれを消す。下面は上面のハケと方向的には直交するナデ。胎土は断面の点線より外側は焼き締まり、内部は発泡している。その焼成状況だと、焼き割れを起していると思われる。だとすれば生産地で廃棄されたはずで、近くに生産地があった可能性を示す遺物かもしれない。平瓦だとすれば、その厚みから奈良時代に遡る可能性もある。

図14－15は須恵器捏ね鉢片である。外面はヨコナデ、内面は口縁部のヨコナデを体部の左上がりナデが切る。東播系須恵器で、12世紀末葉～13世紀初頭頃のものか。

図14－16は東播系須恵器擂鉢片である。全体にヨコナデだが、外面は棒状工具によるナデもあり、一部その上からハケが入る。二次的被火により器表の砂粒周辺がはぜている。この口縁端部の形態はあまり時期を限定できず、12～13世紀頃のものか。

図14－17は土師器小皿片で、口縁部の一部に濃く煤が付着し、灯明皿に使用されたと思われる。内面は底部直線ナデ後、口縁部ヨコナデ、外面は体部ユビオサエ後粗いナデ、最後に口縁部ヨコナデである。器高があるこの形態は、へそ皿と共通する形であり、14～15世紀頃のものか。

図14－18も土師器小皿片である。底部は内外面磨滅するがナデか。体部の内外面にユビオサエが残存するが、最後にはヨコナデを入れる。胎土に黒雲母がわずかに入る。これも14～15世紀頃のものか。

図14－19は鉄製刀子片である。茎部の方を欠き、身部も途中で大きく曲がる。棟部から直線的に刃部に至る両刃造りで、断面から棟部で折り返して鍛造しているのが分かる。作りは非常に薄い。232島畠盛土出土の刀子（図21－４）とはかなり異なり、用途の違いがあるように思われる。

全体に見ると、古いものの混じりが多くなる。しかし、十六ノ坪島畠盛土包含遺物の方が層位的に古い事を考えれば、第５層の成立は14世紀後半頃で、須恵器捏ね鉢・擂鉢の示す年代よりも新しくなり、土師器小皿が同時期的と思われる。第４層が15世紀末葉を下限とする15世紀代と考えられるので、第５層が機能していた期間は14世紀後半～15世紀前半頃と見るのが妥当であろう。

小結　坪内の耕地区画にある程度規則性が見えてくるが、不均等な部分も多く、整然とした区画が貫徹されているとは言いがたい。これは耕作経営組織内の不均衡を反映したものか。

また、二十一ノ坪北西部から二十ノ坪の水田面が低く、水田面の高い十六ノ坪にのみ島畠が見られる。南西に隣接する07－２調査区でも、二十一ノ坪は南東側にのみ島畠があり、この付近では南東が高く、そこに島畠が集中すると言える。この面の洪水堆積物の供給は主に南東側からであったようだ。

小畦畔の検出は、第４層に頂部を削平されたものが多く、盛土の質も水田耕作土とほとんど変らないため困難を伴った。加えて地震変形と灰白色の結核の形成が影響する。実際、存在していたものを検出できなかった可能性が高い部分も多い。状態が良ければ畦畔部分は、精査の際手応えが若干固く、不明

確ながらブロック状の構造が見える。それで、耕作土との切り合いが直線的に１ｍ以上見え、途切れても同じライン上で確認できた範囲に畦畔があると認定した。また、257畦畔のように、第４層まで継続して同じ盛土で存続する小畦畔があるのも問題を複雑にする。隣接地の調査の際は留意されたい。

第７項　第６面（図24・図版10－１・２、11－1）

今回の調査で島畠の見られる最古の面である。坪内の耕地区画は上面に比べ、整然としている。

坪境　十六・十七ノ坪境は 280畦畔である。図７の断面図で見ると、第８層時点の畦畔とほぼ同じ幅・高さのものを再建している（中図⑩・⑪、下図⑮・⑯）。第５層時点まで継続するが、一部第５層時点の盛土があったので、それを除去して検出した。この面での幅は 1.2 ～ 1.8m、頂部の高さは東の高い所で T.P.+4.26m、西は低くなり最低 T.P.+3.86m である。

十七・二十ノ坪境は 290畦畔である。幅1.6 ～ 1.9m、頂部は最高所 T.P.+4.18ｍで、第５面の 279畦畔の頂部から裾部にかけて薄く盛土層１層を除去した状況である。南側坪境交点に向けては、上の浸蝕痕の攪乱もあるが、それ以外でもやや低くなっていく。

十六・二十一ノ坪境は 293畦畔である。図８の断面図での盛土は上図①、下図⑤となる。幅0.9 ～ 1.2m、高さは最高所で T.P.+4.12m、平均で T.P.+4.08m 前後だが、坪境交点から南へ７ｍほどの所から、北に 15㎝ほど下がる。第５面283畦畔から１層盛土を除去した状態である。

二十・二十一ノ坪境は 292畦畔である。図７の断面図では第６層時点の盛土は上図⑥、下図⑨である。下図では盛土が低く、第５層時点281畦畔でまた盛土されるが、第６層との切り合い形態から、南からの浸蝕を受けて低くなった可能性が高い。平面形でも東は 281畦畔と変らず、T.P.+4.04m 前後で、西は T.P.+3.85m 前後と低くなる。ただし 291畦畔が取り付く以東も 0.1m ほど低くなる。

坪境交点（図版９－５）は、各々の坪境畦畔が低くなるが、浸蝕の痕跡は認められない。畦畔の上部は平坦で、肩部に顕著な崩れもない。交点中心での高さは T.P.+3.87m である。二十一ノ坪北東隅に、長楕円形の 294土坑が検出された。長軸約1.6m、短軸0.6m 強で、深さは 0.04m ほどである。

坪境畦畔包含遺物　292・293畦畔盛土から若干の遺物が出土している。第６層成立と同時期の盛土なので、第６層より層位的に古いが、部分的な補修などで遺物が入る事も充分ありうるので第６層存続期間と併行する時期の遺物と考えて良いだろう。

293畦畔からの出土遺物の総数を破片数で見ると、弥生土器１、土師器８｛甕２、粗製椀１、小皿２（「て」の字状口縁１）｝、須恵器甕体部すり消しなし１、陶器甕２、瓦器椀７、瓦質土器２｛甕１、鉢１｝、スサ入り焼土塊１、である。実測可能なものはなかった。瓦質甕の破片が含まれるので、13世紀後葉以降の時期とは言えよう。

292畦畔盛土からは図２－８の瓦器椀が１点だけ出土している。全体にやや磨滅するが、ミガキ・暗文はない。内面は口縁部ヨコナデ、左上がりのナデ上げが見られる。底部は上のヨコナデを切る弧状のナデが若干見られるが、全体的かは不明。外面は口縁部ヨコナデ、体部下半は横に２列に並ぶユビオサエ列が見られる。底部は高台の貼り付けは認められず、中央に一つのユビオサエを入れて形成している。口縁部に１ヶ所外方からの打撃による打ち欠きが見られる。和泉型の最終段階の瓦器椀と考えられるが、堺市域の成果から見れば、無高台の出現が 13世紀末葉～ 14世紀初頭、内面暗文・ミガキのないものの出現が 14世紀前葉と考えられるので、14世紀前葉頃のものか。

十七ノ坪の状況　南北方向に伸びる４本の小畦畔と東西方向の高まり１基が検出された。

調査区北東隅で、北に約0.08m 上がる東西方向の段差が検出された。その段差は Y= －33,961.5 ラインの断面までは達していないが、調査区北側法面崩壊のため、盛土の有無などは確認できなかった。本調査区の北東に接する 04 － 2 調査区では第 6 面で何も検出されていないが、第 5 面で東西方向の島畠が検出されており、それから考えると、これも東西方向の島畠の可能性がある。364島畠とした。上面の高さは平均 T.P.+3.94m で、その南側水田面の高さは平均 T.P.+3.83m である。

その南西側には 312畦畔がある。280畦畔から北に 2 m ほど伸びて途切れる。この面での幅は約0.5m、第 8 層下面から立ち上がり、この面まで継続する畦畔である。坪境に接する部分は若干高いが北側は削平を受け水田面と同じ高さになっている。そこから西の水田面の高さは平均 T.P.+3.75m である。

その西には 305畦畔がある。異なる遺構番号を付けたが、第 5 面286畦畔と同一で、頂部は第 5 面で削平を受けている。幅は約0.6m である。西側水田面の高さは平均 T.P.+3.76m である。

その西の 306畦畔も第 5 面257畦畔と同じ位置だが、その盛土を除去して検出した。頂部の高さは T.P.+3.88 ～ 3.91m で、幅は 0.6 ～ 0.8m である。西の水田面の高さは平均 T.P.+3.73m である。06 － 2 調査区 6 面 B32畦畔につながる。

坪内最西端の小畦畔は 307畦畔である。これは第 5 面288畦畔と同一である。頂部は第 5 面で第 4 層により削平されているので、この面でも T.P.+3.91m の高さを残すのみ、幅は 0.6 ～ 0.9m である。その西、坪境までの水田面は平均 T.P.+3.74m である。

307畦畔が西側坪境から約8.1m の距離だが、各小畦畔同士はほぼ 10.9m 間隔で並ぶ。ただ、気になるのは 304島畠の存在である。十七ノ坪は東に東西方向の島畠、西は南北方向の長地型地割りがあるようである。西の長地型地割の小畦畔が、東で東西方向に並ぶ島畠の西端に規制されたラインを基準として、そこから 10.9m 単位で割付られたのだとすると、最西端の地割がその余りとして幅狭くなるのも理解できる。また、各水田区画の面の高さがほぼ同じなのがこの坪の特徴と言える。

十六ノ坪の状況　本調査区での最古の島畠が見られる。

310島畠（図版11 － 2）は第 5 面255島畠より西辺がやや東に寄る。図19 の断面図で見ると、東側は上に第 5 層時点の盛土（図の①）があるが 310島畠の盛土は薄く（図の③）、西側肩部の盛土（図の②）上面より低いため、255島畠の盛土時点で削平を受けている可能性がある。上面には不整形で浅い、南北方向の落込が幾つか認められる。幅約6.4m、高さは平均 T.P.+4.12m である。北端は北側坪境と 2.8m の距離で、東辺寄りの、幅約0.8m の 308畦畔が間をつなぐ。その畦畔には 309水口が開く。東の水田面の高さは平均 T.P.+3.84m である。

その西には、幅0.6m ほどの溝状部分をはさみ 311畦畔が走る。255島畠の西裾はほぼこの上になる。幅約0.6m、高さは平均 T.P.+3.78m で、南北に高低差はない。異なる遺構番号を付けていたが、第 8 面 376畦畔と同一で第 6 層時点まで継続したものである。北側坪境近くで水口が開き、調査区南端で途切れるのも水口か。西側の水田面は高さ平均 T.P.+3.75m である。

その西の 315島畠は（図版11 － 3）第 5 面231島畠と平面規模はほぼ同じである。西側の法面傾斜が緩いので、上の平坦面の幅は狭い。図18 の断面図で見ると、上図は盛土が 2 層あるが（②・③）、その層境が不整形で、③が下図③と同じ層であるので、拡張ではなく造成時の質の違いと思われる。下層には、第 8 層との間に、第 7 層候補の耕作土層が遺存し（上図④・⑤）、その上面では畝立てが見られた。幅は 2.8 ～ 3.8m で、高さは平均 T.P.+4.18m である。北側坪境とは約 1 m の距離があり、東辺寄りで、幅約0.7m の 314畦畔でつながる。この畦畔は上面の 256畦畔の西半に位置し、高さも坪境畦畔より低

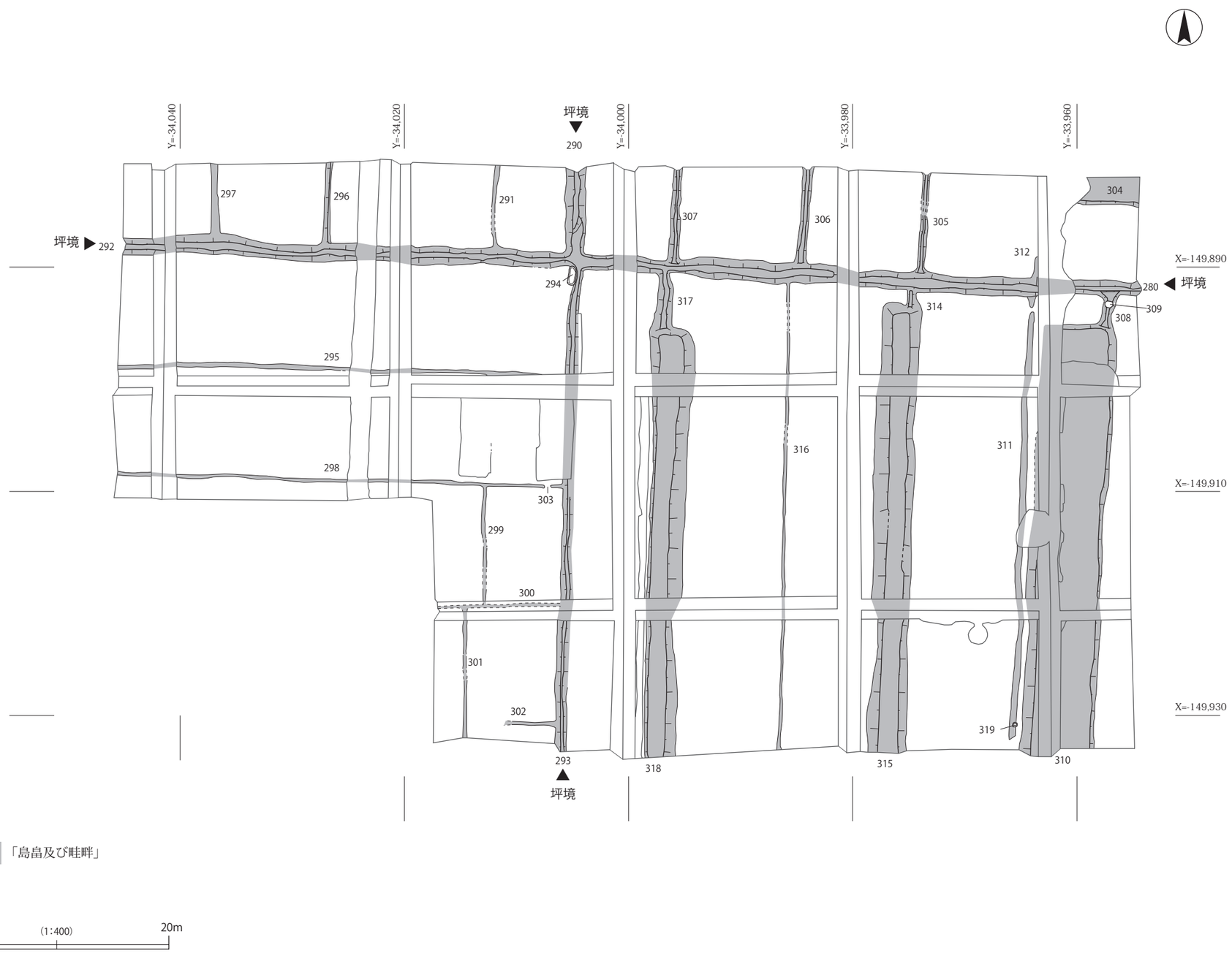

Y=-34,040
Y=-34,020
Y=-34,000
Y=-33,980
Y=-33,960
坪境
290
坪境
292
坪境
280
X=-149,890
X=-149,910
X=-149,930
297
296
291
307
306
305
304
312
294
317
314
309
308
295
316
311
298
303
299
300
301
302
319
293
318
315
310
「島畠及び畦畔」
0
(1:400)
20m

図 24　第 6 面　全体図

い。島畠西側の水田面の高さは平均 T.P.+3.77m である。

その西側には 316畦畔がある。第５面の 289畦畔より 1.2 ～ 0.8m 東に位置する。第５層による削平を受け、水田面と平坦で、切り合いのみ確認できる。幅は 0.2 ～ 0.3m ほどである。細いが直線的に歪みも少なく伸びる。その西側の水田面の高さは平均 T.P.+3.79m である。

その西側には 318島畠がある（図版11－４）。平面規模は第５面275島畠とほぼ同じだが、北端がやや南寄りで、東裾部が若干えぐれる部分がある。上面の幅も狭い。図19 の断面図を見ると、中図は盛土が２層だが（⑨・⑩）、同時期盛土のようである。上図の盛土（⑪）とは質が異なる。幅は 3.2 ～ 3.9m、高さは平均 T.P.+4.17m である。北端は北側坪境から 4.9m ほどで、その間を幅約1.2m の 317畦畔がつなぐ。畦畔の上面は坪境畦畔と同じ高さである。西側水田面の高さは平均 TP.+3.78m である。

水田面は 310島畠以東がやや高い他は、平坦である。三つの島畠の上面も高さが揃う。西側坪境との距離に 10.9m の倍数に近いものはないが、310島畠西辺からは、315島畠東辺が 10.4m と 109m の 1/10 に近似、316畦畔が 21.8m で 109m の 1/20、318島畠東肩部が 32.2m と 109m の 3/10 に近似する。

十六ノ坪島畠盛土包含遺物　315・316島畠盛土から若干の遺物が出土している。第６層成立時点の盛土であるから、第６層包含遺物より古い時期のものとなるが、ここで述べる。

総数を破片数で見ると、315島畠盛土からは、土師器19｛甕１、粗製椀５、坏３、小皿５、擂鉢１｝、須恵器２｛壺蓋１｝、瓦器３｛椀２、小皿１｝、瓦質土器３｛甕１、羽釜１｝、点け木１、桃核３、砥石１で、318島畠盛土からは、土師器１、須恵器２｛甕体部内面すり消し１、捏ね鉢１｝である。実測可能なものは以下の３点であった。

図21－９は 315島畠盛土出土、須恵器壺蓋片である。外面上半回転ケズリ後、全面に回転ナデ、内面は回転ナデで自然釉・降灰痕がある。胎土には粗い砂粒を含まず、暗色で、陶邑・一須賀・千里など府内の産地とは異なる印象を受ける。器形的にはかえし部がない退化型式で飛鳥Ⅲ期頃のものか。

図21－10 は 318島畠盛土出土、東播系須恵器捏ね鉢片である。全面ヨコナデ、外面には自然釉が見られる。口縁端部は上に強く、下にも若干拡張される。12世紀末葉から 13世紀初頭頃のものか。

図21－11 は 315島畠盛土出土、粘板岩製砥石である。やや青みがかった灰色を呈し、薄い板状節理が見られ、それに沿って成形している。表面は平滑で長い円弧状擦痕と、方向がまちまちな短い擦痕が混じる。裏面は節理に沿った剥離の凹凸が残るが擦痕も見られる。左右の端面には表面と平行する擦り切り痕があり、図の上の端面には表面と直交する擦り切り痕がある。下端の折れ面に向かって表裏面がやや丸くなり、折れた以降も使用されていたと思われる。

全体でも時期を限定しにくく、わずかな瓦質土器から、13世紀後葉以降と言えるのみである。

二十ノ坪の状況　３本の小畦畔が検出され、南北方向の長地型地割りが存在したと思われる。

291畦畔は上部を第５層に削平され、東側水田面と平坦に検出されたが、西側は 0.05m 弱の段差が残る。第8面359畦畔と同位置にあるが、盛土は異なる。幅0.2 ～ 0.3m である。東側水田面の高さは平均 T.P.+3.67m、西側水田面は平均 T.P.+3.59m である。

その西側の 296畦畔も上部を削平され、西側水田面と平坦となるが、東側は 0.05m 弱落ちる段差が残る。第８面320畦畔より約0.5m 東にずれる。幅0.4 ～ 0.5m である。東側水田面は 291畦畔西側より現代水路の攪乱をはさんでやや低くなり、平均 T.P.+3.53m、西側水田面は平均 T.P.+3.58m である。06－２調査区の第６面 B30畦畔とつながる。

その西の 297畦畔も上部を削平され、東西の水田面と平坦となり、切り合いのみを残す。第８面の

321畦畔より東に約0.5m ずれる。幅は 0.5 ～ 0.8m ほどである。その西側水田面は東側と高さ同じ。06‐２調査区第６面 B28畦畔につながる。

296・297畦畔が約10.2m 間隔で 109m の 1/10 に近似だが、291・296畦畔は約15.1m 間隔、291畦畔と東側坪境とは約6.2m と不均等である。291・296畦畔間では水田面の高さが途中で変り、攪乱内に畦畔があったとすれば、291畦畔から 10.9m ほどであった可能性が高い。しかしその場合、296畦畔との距離は 4.4m ほどしかない。その一番細い区画が一番低いのも、意味があるのだろうか。坪内に10.9m 幅の区画もあるが、不均等な地割りと言える。四つの坪のうち、水田面が一番低い坪でもある。

二十一ノ坪の状況　東西方向と南北方向の小畦畔が検出された、東西方向の長地型地割りが基本で、南北方向の小畦畔はその中をさらに区画する。

295畦畔は北側坪境から約9.8m の距離にあるが、心々距離では約10.6m と 109m の 1/10 に近づく。幅約0.3m、頂部の高さは T.P.+3.68 ～ 3.76m で、水田面との比高は 0.03 ～ 0.04m ほどである。北側の水田面の高さは平均 T.P.+3.67m、南側は平均 T.P.+3.66m とほとんど差はない。

その約10.1m 南に 298畦畔が走る。頂部は削平され、切り合いのみ残る。幅は約0.3m である。東側坪境に近い部分で水口が開く。東側坪境から約７m の所で南に伸びる 299畦畔が取り付く。

299畦畔は、頂部を削平されるが、西に 0.05m 弱落ちる段差は残る。幅約0.3m である。東側水田面の高さは平均 T.P.+3.82m、西側水田面は平均 T.P.+3.73m である。

299・301畦畔が X= －149,920 ライン付近でくい違い、断面セクションが 298畦畔から南に 10.9m のラインと重なるため、セクション内に東西方向の小畦畔が存在すると予想された。セクション掘削の際、数ヶ所で小畦畔の存在を確認したが、崩壊が激しく、記録できなかった。その小畦畔を 300畦畔とした。略測によると幅0.3m ほどである。06‐２調査区第6-1a 面314島畠北辺のラインに近い。

300畦畔に南側から取り付くのが 301畦畔である。東側坪境より約8.1m の距離である。頂部は削平され、耕作土との切り合いのみを残すが、切り合いが視認できない部分もあった。幅0.2 ～ 0.3m である。本来なら、302畦畔との交点があり、その部分で南北がずれてもよいはずだが、確認できなかった。その東の水田面の高さは平均 T.P.+3.78m、西側は平均 T.P.+3.72m である。

その南東で東側坪境から西に伸びるのが 302畦畔である。300畦畔との距離は約10.6m と 109m の 1/10 に近似する。頂部は第５層に削平され平坦、幅は約0.3m である。その南側の水田面は検出範囲が狭いが、高さ平均 T.P.+3.81m である。

この坪では、ほぼ 10.9m 幅の均一な東西方向長地型地割りが成されていたと言える。水田面は南東側に高い傾向があり、その付近の南北方向小畦畔は、自然地形に対応したものであろう。295・298畦畔間も、299畦畔北側で、攪乱部分に南北方向小畦畔が存在した可能性がある。調査区内で最も整然としているが、06‐２調査区では東西・南北両方向の島畠が入り乱れ、複雑な様相を呈している。

第６層包含遺物（図25）　これまでの上層よりも包含遺物が増加する。破片数で見ると、弥生土器３{高坏１、生駒西麓産胎土１}、土師器329｛甕30（口縁３）、把手１、高坏７、粗製椀39、坏７、小皿48（「て」の字状口縁１、へそ皿２）、羽釜24、擂鉢２}、須恵器92｛甕15（内面すり消しなし 10、あり２）、壺14（平瓶１）、鉢２、擂鉢１、捏ね鉢30、高坏１、杯20｛古墳中期蓋１、古墳後期身10、飛鳥身１、奈良身４（高台２)}、無釉陶器２、青磁８｛碗６、鉢２}、白磁３｛玉縁碗１、皿１、盒子１}、黒色土器Ａ類椀１、瓦器198｛椀191、小皿７}、瓦質土器62｛甕10、羽釜20、三足羽釜２、鉢１、捏ね鉢６、擂鉢15}、瓦８｛平４（須恵質２、土師質１、いぶし１)、丸４（須恵質２、土師質２)}、銭

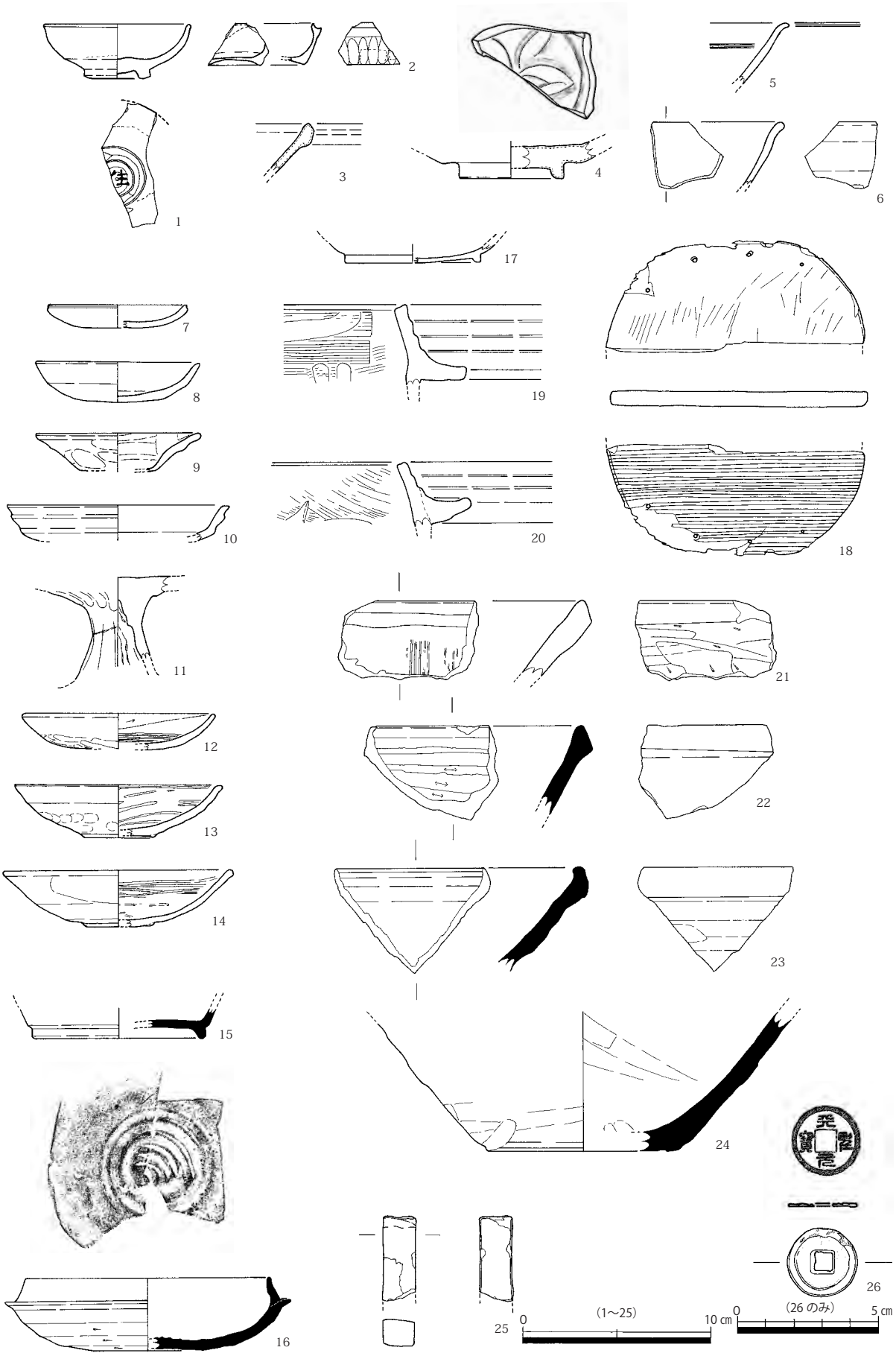


図 25　第 6 層　包含遺物（1 ～ 3：白磁、4 ～ 6：青磁、7 ～ 11・19：土師器、12 ～ 14：瓦器、15・16・22 ～ 24：須恵器、17・18：木器、20・21：瓦質土器、25：石製品、26：銅銭）

１、木製品７｛漆器椀１、板材２、点け木４｝、牛馬歯１、骨３、砥石１、礫１、スサ入り焼土塊２、である。その中で実測可能であったのは以下の 26点であった。

図25－１は白磁皿片である。外面下半は露胎で、回転ケズリ後、回転ナデか。高台内に墨書あり、やや欠けるが「住」か。高台断面が逆台形で、北宋後半でも 11世紀末葉から 12世紀初頭頃のものと思われるが、近畿地方では 12世紀前葉～後葉頃の遺構から出土するものが多い。

図25－２は白磁盒子片である。受け部上面から立ち上がり部内外面と、外側面の一部から外底面が露胎。外側面には花弁状の陽刻、底部は上に反り、非常に薄い。立ち上がり部が小さい白磁盒子は京都市の左京五条三坊十五町井戸 D に類例があり、12世紀中葉頃のものか。

図25－３は白磁椀口縁部片である。玉縁状口縁は肥厚し、その下端は釉の下で胎土の合わせ目が深く残る。体部の断面形は直線的である。11世紀後半から 12世紀頃のものとしか限定できない。

図25－４は青磁碗片である。高台まで全面施釉され、輪高台内側の底部外面中央のみ釉が掻き取られる。内面は見込みに花弁状の片刃彫り、底部と体部の境に同じく片刃彫りの圏線が巡る。釉はやや緑がかる。南宋頃の龍泉窯系青磁か。12世紀後半から 13世紀前半頃か。

図25－５も青磁碗片である。器壁は薄く、口縁端部は外反する。内面には沈線が１本巡る。12世紀中葉から末葉頃の龍泉窯系青磁か。

図25－６も青磁碗片である。口縁端部は外反、外面は釉の下に回転ナデの単位が見える。これだけでは時期を特定しがたい。

図25－７は土師器小皿片である。口縁端部外面に沈線が入り凹面状の端面を成す。外面は体部ヨコナデ、底部一定方向ナデ、内面は体部ヨコナデ、底部は磨耗し調整不明。「精良な胎土」で、南河内産か。時期は不明である。

図25－８も土師器小皿片である。口縁端部は内面が外反する。外面は体部上半ヨコナデ、下半は方向不明の緩いナデ、内面は見込みの一定方向ナデが体部のヨコナデに切られる。整った形と外面のヨコナデの範囲を見れば、黒色土器小皿の影響を受けるか。10世紀後葉から 11世紀前葉頃のものか。

図25－９も土師器小皿片である。外面はユビオサエとユビヨコナデ、内面は左から右上方に抜けるユビナデ。底部はかなり薄いが、残る限りでは上方に突出する傾向はない。へそ皿の系統だが、まだ底部が上方に突出せず、体部の深さもあるので、13世紀後葉から 14世紀初頭頃のものか。

図25－10 は土師器坏片である。口縁端部は水平な端面を持ち、外面は強いヨコナデ２段、内面もヨコナデである。この形式は皿ではなく、系統的には坏である。10世紀後葉から 11世紀初頭のものか。

図25－11 は土師器高坏片である。体部内面は磨滅で調整不明、外面はタテユビナデ、脚柱部外面は、粘土接合痕を残しながらタテナデ、内面はシボリ痕が残る。「精良な胎土」で、かつ脚柱部が開く形は飛鳥時代のものであろう。

図25－12 は瓦器小皿片である。外面は、体部上半ヨコナデ、下半から底部は５㎜ほどの幅の直線ナデが不定方向に入る。内面は体部上半ヨコナデで、右上にナデ上げる。体部下半はミガキ、底部は磨滅と欠損で不明。体部上半が外反しない瓦器小皿は少数ながら早い段階からあり、瓦器小皿のミガキ・暗文の完全消失は 13世紀後葉頃と思われるので、それ以前、12世紀～ 13世紀中葉頃のものか。

図25－13 は瓦器椀片である。外面は口縁部ヨコナデ、体部下半ユビオサエ後緩いナデ、水平のユビオサエ列が見られる。高台付近はナデ。内面はヨコナデ後まばらなミガキである。退化高台で体部が浅いが、ミガキの密度では時期を限定できず、13世紀後葉から 14世紀前葉にありえる形である。

図25－14も瓦器椀片である。外面上半はヨコナデ、下半はユビオサエも見えず無調整か。高台周辺はナデである。内面は体部ヨコナデ、底部一定方向直線ナデ後、ミガキである。図25－13より口径も大きく、ミガキの密度も高く、13世紀中葉から14世紀初頭にありえる形である。

図25－15は須恵器高台坏片である。調整は回転ナデのみである。高台が底部外縁に近い形は平城宮編年Ⅴ期頃、8世紀後葉か。

図25－16は須恵器蓋坏身片である。内面は回転ナデで底部に同心円文タタキあり。外面は上半回転ナデ、下半回転ケズリで、受け部以下に降灰痕、底部に粘土粒付着。6世紀中葉のものである。

図25－17は木製漆器椀片である。全体に黒漆後に赤漆を重ねるが、高台内側は黒漆のみである。

図25－18は木製曲げ物底板片である。半分に折れた残欠である。図下面は柾目が浮き出て、上面は線状の擦痕が残る。外縁から9㎜ほど内に、ほぼ3㎝間隔で、径1.5㎜の孔が並ぶ。外縁端面は面取りが為されるが、図の下面への角がやや丸い。図の下面が底部内面であったのだろうか。

図25－19は瓦質土器羽釜片である。炭素が吸着しないが、焼成環境と型式は瓦質土器のものである。内面ヨコハケに、それを緩く消すナデ散在、外面はヨコナデ、鍔より下はケズリか。鍔下面には煤付着。口縁は断面直線的に内傾し、端部には面、外面の段はしっかりしている。堺市内の資料による成果では、口縁端部に面が出来るのが14世紀前葉、口縁が内弯から内傾に変化するのが14世紀中葉、口縁外面の段が凹線化するのが14世紀後葉と考えられるので、14世紀中葉頃のものか。

図25－20も瓦質羽釜片である。外面はヨコナデ、鍔部下面の胴部近くはヨコケズリ、内面は斜めハケ後軽いヨコナデである。鍔部下面には煤付着。図25－19と同じく14世紀中葉頃か。

図25－21は瓦質擂鉢片である。内面から口縁端部はヨコナデ、それ以外の外面はケズリである。ケズリは、口縁付近は横方向だが、下部は下からの縦方向である。口縁部端面の拡張は認められないが、ヨコケズリが残るのは古色で、14世紀前葉から中葉頃か。

図25－22は東播系須恵器捏ね鉢片である。内外面共にヨコナデである。口縁端部を外に折り返して肥厚させた部分の外面が暗色を示す。13世紀代か。

図25－23は東播系須恵器捏ね鉢片である。内外面ともヨコナデである。口縁端部は上方に拡張し、その外面は光沢のある暗灰色である。14世紀代のものか。

図25－24も東播系須恵器捏ね鉢片である。外面はヨコナデ、底部は磨滅する。内面は左上がりナデで、底部は磨滅する。成形に雑さなく、底径が10㎝強あるので、14世紀後半に下る事はなかろう。

図25－25は凝灰岩製砥石片である。図下方が欠損部で、上方は粗いが端部である。断面の上左右面は平滑に仕上げられているが、下面は平坦でも粗い。使用痕らしき擦痕は認められない。

図25－26は銅銭、「天聖元寶」である。天聖元寶は北宋仁宗の天聖年間（1023～1032年）に鋳造された貨幣で、字体には真書と篆書があるが、これは篆書である。江戸時代に長崎貿易銭として日本で鋳造された事もあるが、これは字体・法量共に北宋銭に間違いない。

第6層包含遺物は、古い時期のものが増えて下層の遺構面の時期が予想できる状況になっている。古墳時代・飛鳥時代・奈良時代の遺物があり、古墳時代では後期の遺物が圧倒的に多い特徴がある。また、白磁器・青磁器の様相は12世紀から13世紀への変化を反映していると言えよう。

層の機能期間は島畠盛土包含遺物が上限となる。厳密には言えないが、13世紀後葉の時期が示され、この層で比較的残存率の良い瓦器類が13世紀中葉以降と同時期的に位置づけられる事から上限を13世紀後葉として良かろう。下限としては瓦質羽釜類が時期下限を14世紀中葉としてまとまり、東播系捏

ね鉢・擂鉢類も 14世紀代である。それと瓦質の擂鉢・捏ね鉢の破片が一定数出土しており、今のところその出現は 14世紀後葉までしか遡らないが、その時期が第５層機能期間の時期的上限、14世紀後半と整合する。第６層が耕作土であった時期は 13世紀後葉から 14世紀後葉と見てよかろう。

隣接する調査区では、07－２調査区では上層遺物の混入を排除できなかったため「13世紀を中心にその前後」としており、02－１・06－２調査区では明確な時期を推測していないが、包含遺物に 13世紀中葉から後葉のものが多く、「14世紀後半かと思うもの」も含まれているとしている。

小結　調査区最古の島畠が見られ、各坪である程度の整然とした耕地区画も見られる。

島畠は、池島Ⅱ期地区では、07－２調査区の二十一ノ坪南半において第７層時点まで遡る可能性もあり、池島Ⅰ期地区で第４層時点からなのと大きく異なる。しかし、その盛土が粘質土で耕作土層と似るため、基本層序の認識に混乱があった。島畠盛土の幾つかを、残存した耕作土層と誤認したらしき例もある。今回の調査はその点を若干明らかにできたと言える。

包含遺物が上層より増加し、下層の古墳時代後期から鎌倉時代頃までの遺物が一定数ある事は、その頃の居住域が近くにあった可能性を感じさせる。特に同時期的な遺構・包含層がほとんど遺存しない古墳時代から奈良時代の遺物は、第８層包含のものと併せ、考察するに値する資料と言えよう。

第８項　第８面（図26・図版12－１・２・13－１）

調査時点では第９面としていたが、第１節基本層序で述べたように第８面に変更した。最古の条里制地割りの耕作土上面である。調査区の南北端の一部では、地形が高かったせいか、第６層に削平され第８層が残らずその床面、第10－１層上面が露出した部分もあった。

この層以下第11面までは、地震変形で層境が激しく凹凸しており、遺構検出にはその凹凸の中で、下層が 50％以上の面積で見えるまで下げなければ不可能であった。加えて第８面は第６層の削平を受け、第８層自体の層厚も薄い。水田面の高さ等は、原状を反映していない部分があると思われる。

第７面候補　この調査区では第７層が基本的に遺存していなかったが、第６面315島畠盛土下に、第７層の可能性のある耕作土層が遺存し、その上面に畝立てが見られた（図26「７面？」の点線範囲）。

その第７層候補は北側が厚く、第18図上図断面では２層に分かれる（④・⑤）。下層の⑤が第８層を削りこみ、上層の④の上面が第６面より高いので、第６層が、第７層時点から継続する水田耕作土なら、この２層は第７層時点の島畠であった可能性もあるが、積極的証拠はない。南では遺存度は低く、南半は畝溝を残すのみである。上面で南北方向４本の畝立てがあり、東の層遺存範囲外側にも並行する鋤溝があり、それに直交する短い鋤溝が第８面の 374畦畔を切る。一本の畝は 315島畠北端に沿って屈曲するが、その部分はやや質が異なり、第６層時点で島畠盛土のために付加されたものかもしれない。

310島畠下も図19下図断面で第７層候補の③の層があるが、遺存度が低く、範囲は確認できなかった。ただ、第８面で、畝溝らしき、やや幅広の長く続く溝が数本確認でき（図26十六ノ坪 Y= －33,960ライン付近）、畝立てがあった可能性が高い。ただし、③は 315島畠下の層とやや質が異なる。

この二つの部分に遺存した層は、層位的には第７層としても問題ないが、わずかな部分にしか残らない事、近い２ヵ所で質が異なる事、第６層時点の古い段階での島畠である可能性もある事から、第７層と認定するには至らなかった。

「７面」畝溝・「７層」出土遺物　７面候補から切り込む畝溝群から若干の遺物が出土している。破片数で見ると、315島畠下では土師器９｛坏１、小皿２、羽釜２｝、須恵器２｛甕体部すり消しなし１、古墳

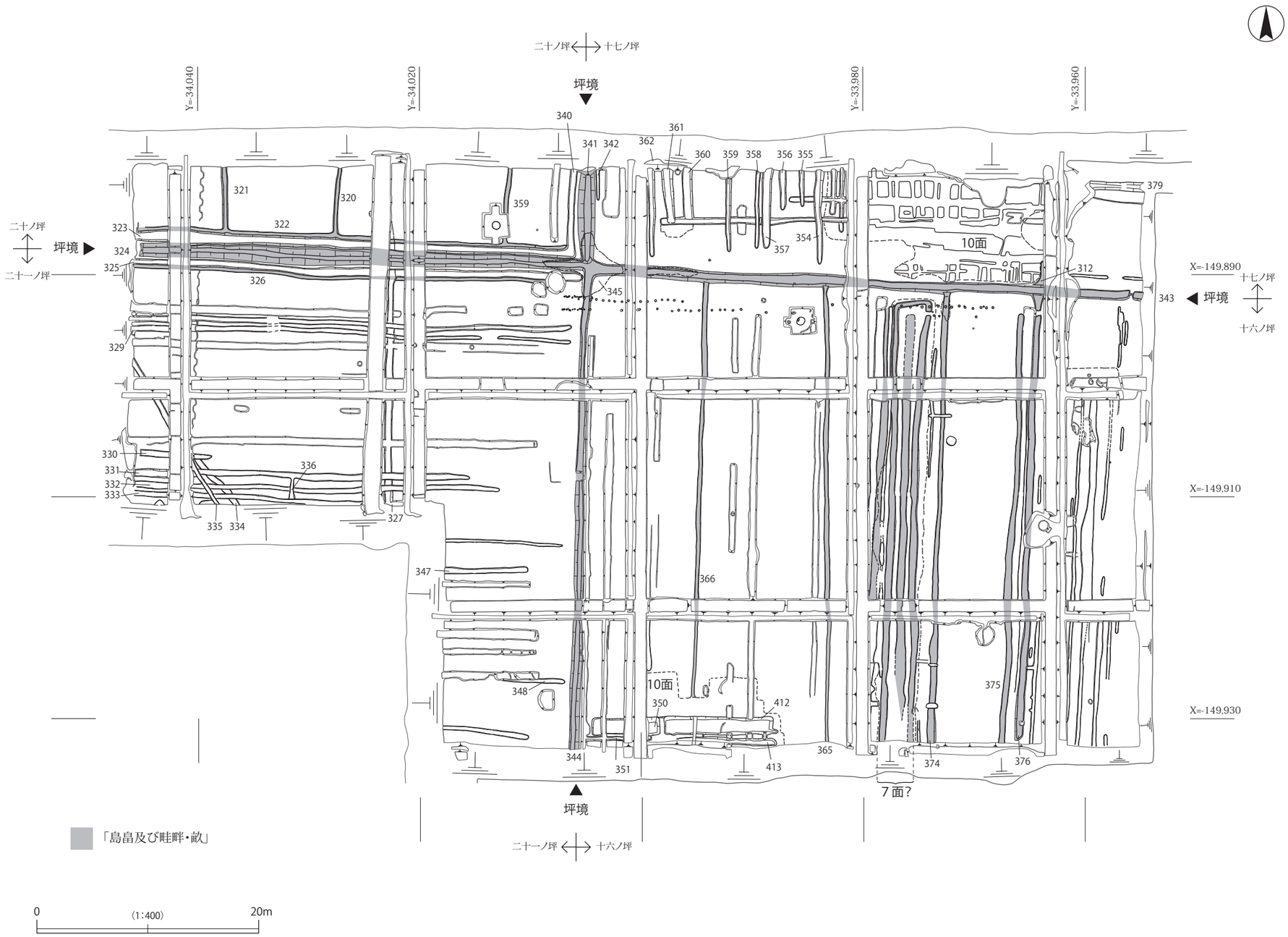

二十ノ坪
十七ノ坪
坪境
Y=-34,040
Y=-34,020
Y=-33,980
Y=-33,960
二十ノ坪
坪境
二十一ノ坪
X=-149,890
十七ノ坪
坪境
十六ノ坪
X=-149,910
X=-149,930
10面
10面
7面?
坪境
二十一ノ坪
十六ノ坪
「島畠及び畦畔・畝」
0
(1:400)
20m

図 26　第 8 面　全体図

時代後期坏蓋１〕、瓦器椀３、瓦質甕１で、310島畠下では土師器小皿１、瓦器３〔椀２、小皿１〕である。実測可能なものはなかった。第７層と第６層の境目の時期を示すと思われ、瓦器椀は内面ミガキの密度が低いものはないようだが、瓦質甕があり、13世紀後葉頃と見られる。

315島畠下の第７層候補内からも若干の遺物が出土している。破片数で、弥生土器３、土師器５〔粗製椀２、小皿１〕、須恵器壺１、瓦器椀３、瓦質土器？２、桃核１である。実測可能なものはなし。

坪境　十六・十七ノ坪境は343畦畔である。平均的な幅は0.9mで、高さは東が高く、西が低く、T.P.+4.04 ～ 3.64mである。図７の断面でも（上図⑧・⑨、中図⑪、下図⑯）、最古の坪境畦畔と分かる。南北の第８層は北側が高い。調査区東端近くで一ヶ所水口が開く。西側では後述する坪境交点の修復痕以外に、そのすぐ東に一ヶ所、他の畦畔盛土より粗砂の多い盛土での修復が見られる。

十七・二十ノ坪境は341畦畔である。高さはT.P.+3.93m、幅約1.6mである。西には340溝が沿うがその西側には畦畔は検出されない。340溝は幅約0.6m、深さ0.08 ～ 0.1mで底部の傾斜は不明である。西肩部に畦畔がないのは疑問だが、坪内水回しの水路であろう。東の342溝は鋤溝か。

十六・二十一ノ坪境は344畦畔である。幅0.65 ～ 0.95m、高さはT.P.+3.68 ～ 3.91mとやや凹凸するが、南北高低差の傾向はない。図８断面では（上図②、下図⑦）、既往の調査で第９層とされた第８ｂ層が下に通る、最古の坪境畦畔である。図８下図では畦畔西側に溝のような断面があるが、平面では確認できなかった。上図の②は単層で第８層時点畦畔盛土となるが、第８層と同質のブロック間に粗砂が入る盛土であり、その質から第８層時点の途中で補修・再建された畦畔である可能性が高い。

二十・二十一ノ坪境は324畦畔を中心に、その北に323溝・322畦畔、南に325溝・326畦畔がある。

324畦畔は幅約1.4m、東が高く、東最高所T.P.+3.87m、西平均T.P.+3.7mである。図８断面図では３回ほど盛土されたようだが（上図⑦～⑨、下図⑨・⑪・⑫）、東（上図）では当初に高く盛土され、その上に盛土が重なるが、西側（下図）では当初は低い盛土で、各々第８層の一部を下に取り込み盛土が追加される。ここでもこの畦畔が第８ｂ層の上にのる最古の坪境畦畔であるのが確認できる。

その北の323溝は幅平均0.8m、底部の高さは東がT.P.+3.31mほどで、西がT.P.+3.28mとわずかに低いが、傾斜は明確ではない。340溝と切り合いなくつながる。北には322畦畔が沿い、幅0.35 ～ 0.5m、高さは北の水田面から0.04mほどである。北側から小畦畔が取り付き、東では340溝西肩部に当たって止まる。盛土は第８層と区別つかず、切り合いも確認できない。

南の325溝は幅0.5 ～ 0.9m、底部高は東がT.P.+3.38mほど、西がT.P.+3.21mほどでやや西に低い。東は坪境交点に至る。その南には326畦畔が沿い、幅約0.3m、高さは南の水田面から0.03mほどである。これも盛土は第８層と区別できない。東は攪乱されるが、坪境交点までは至らないようである。

坪境交点では浸蝕痕と、それを埋めて坪境交点を復旧した盛土が確認できた（図26坪境交点付近の点線、図版13－２）。浸蝕痕の形状から、浸蝕した洪水は南西から北東へ抜けたと思われる。浸蝕痕底部には植物遺体混じりのラミナのある砂層が残存していた。浸蝕痕を埋め、畦畔を修復した盛土は、それ以前の畦畔盛土や水田耕作土より明らかに粗砂を中心とした砂粒の混じりが多い。

全体で見ると坪境は、第８層が機能していた期間中に１回は洪水の被害を受け、二十・二十一ノ坪境は３度にわたって畦畔の盛土が積み重ねられていたようである。また、二十・二十一ノ坪には坪境沿いに、小畦畔を伴った水路が見られるが、これは第３面以上に見られた、広域に及ぶ水路網の一部のようなものではなく、あくまでも坪内での給排水に機能した溝と思われる。

坪境関連遺構出土遺物（図21）　坪境の畦畔・溝から若干の遺物が出土している。畦畔は補修や盛土の

追加があるので、包含遺物は第８層機能期間内に入ったものである。溝は第８層の混じる、もしくは第８層に似た埋土で、流水堆積層は認められず、包含遺物は第８層時点の末期に入ったと考えられる。

破片数で見ると、323溝には、弥生土器３、土師器23｛甕２、坏７、小皿６｝、須恵器２｛甕体部すり消しなし１、壺１｝、黒色土器Ａ類椀１、瓦器19｛椀17、小皿２｝、瓦質土器１。

324畦畔には、弥生土器２｛甕１｝、土師器小皿３｛「て」の字状口縁１｝、須恵器３｛甕体部内面すり消し１、古墳後期坏身１、同左蓋１｝、青磁碗１、瓦器５｛椀４、小皿１｝、木製杭１、スッポン甲羅１。

325溝には、弥生土器１、土師器２｛甕口縁１、粗製椀１｝、黒色土器Ａ類椀１、瓦器椀２。

343畦畔補修盛土（418浸蝕痕内）には、土師器３｛甕１、小皿１、土錘１｝、須恵器３｛長頸壺1、高台壺１、古墳後期坏身１｝、瓦器椀１。

344畦畔盛土には、弥生土器１、土師器２｛甕１｝、須恵器捏ね鉢１、黒色土器Ａ類椀１、瓦器椀２、木製杭１である。

実測可能なものは以下の８点であった。

図21－12は323溝出土、土師器小皿片である。内面から外面口縁までヨコナデ、外面底部は磨滅、調整不明である。浅くて口縁が屈曲する小皿は12世紀後半から13世紀前半頃に散見される。

図21－13も323溝出土、土師器小皿片である。内面はユビオサエ後ヨコナデ、外面は口縁から２条のヨコナデ、底面のユビオサエはそれに切られる。厚みがあり、内弯気味に身が深く、坏に近い形態の小皿で、これも12世紀後半から13世紀前半頃か。

図21－15は343畦畔盛土出土、須恵器長頸壺片である。内外面回転ナデで、外面は自然釉が見られる。平城宮Ⅲ期以降の肩部の丸いもので、頸部の径から平城宮Ⅴ期８世紀後葉以降、肩部と頸部の接合部の内面が直角になる形は９世紀後半までと考えられる。

図21－17は323溝出土、瓦器小皿片である。外面は口縁ヨコナデ、底部ユビオサエ後粗い不定方向ナデ、内面は底部数方向の直線ナデ後、口縁ヨコナデ、その後ミガキ、見込みは３方向の直線的なミガキの群が切り合う。見込みのミガキが密な瓦器小皿は11世紀後半に限定されるものであろう。

図21－18は324畦畔盛土出土、青磁碗片である。内面は、圏線内に草花文を彫る。外面は高台も全面施釉だが、高台内側を幅1.4㎝の輪状に釉ハギ、その外縁に砂付着する。13世紀頃の龍泉窯系か。

図21－19は325溝出土、黒色土器Ａ類椀片である。内外面共にナデで高台は断面三角形である。ミガキは確認できない。胎土に細かな角閃石と黒雲母が見られ、生駒西麓産の可能性があるのが珍しい。新Ａ類出現以前とすれば10世紀後半以前か。

図21－20は343畦畔盛土出土、土錘片である。管状土錘の大型に属する。調整はユビオサエ・ユビナデで、端面もユビオサエで丸味をつける。0.5㎜以上の砂粒が混じらない「精良な胎土」で、時期は限定できないが古墳時代には遡らないであろう。今回唯一の土錘である。

図21－21は325溝出土、瓦器椀片である。外面は断面三角形の高台付近はヨコナデ、それ以外の底部は緩い不定方向ナデで小さな粘土塊が幾つか付着する。内面見込み部分は、数方向の直線ナデ後粗い斜格子暗文である。胎土の質や厚さから和泉型と思われるが、12世紀前葉から後葉にありえる。

これらの遺物から見れば、第８層が耕作土として機能していた期間の下限は13世紀前半と考えられる。上限は確定しがたいが、12世紀は期間内に含まれ、10世紀頃まで遡る可能性があると言えよう。

十七ノ坪の状況　ここでは検出範囲のほぼ中央、Y=－33,9615ラインセクションの西側からY=－33,983付近まで、第８層が遺存せず、第10面が露出していた。一部は南側坪境近くに達する。これは

第８面で高かった部分が第６層の耕作で削平され、床面が露出している状況と思われる。露出範囲の境が直線的な部分もあり、自然地形をその方向に整理した段差が存在していたと思われる。

第10面露出部には、東西と南北の溝が多数、切り合いなしに重複する遺構が見られたが、第８層の床面遺構と見て、この面では掘削していない。しかし、問題は、一部の溝が第８層の遺存する部分にまで伸びて検出でき、その部分では東西方向の溝を南北方向の溝が切るのが見られた事である。第８層遺存部分で検出された溝は、第６面の畦畔と重なるものもあり、第６層床面遺構とは考えにくい。

考えうるのは、第８層の構造が、微視的に見れば、耕作深度の変化により下半が数層の薄層に分かれ、上半は第６層により削平された状況である。そして、第８層遺存部分では比較的新しい段階の第８層床面遺構が見え、遺構の切り合いも確認できる状況、第10面露出部分は、第８層床面遺構の各時期のものが重複するが、遺構埋土下端付近で切り合いが不明瞭な状況、と考えれば整合性がある。事実、第８層遺存部分でも、層を除去すると重複する同じような溝が幾つか検出された。

つまり、第10面露出部周辺で掘削・調査した溝のほとんどは実質第８層床面遺構という事になり、本来なら次項で述べるべきだが、上下面に分割して検出した事にもなるのでここで述べる。

356 ～ 362・379溝（図27・28） 十七ノ坪内の西側で第８面が遺存していた部分の 356 ～ 362溝と東側で第８面が遺存していた部分で検出された 379溝を調査した。

西側では（図27上図）、第10－１面で調査した東西方向の溝である 363・364溝が第10面露出範囲から伸び、南北方向の溝に切られる。360・361溝のみ、364溝と切り合いが見えなかったのは、その部分で狭い範囲ながら第10面が露出している事と対応する。幅0.3m ほどで鋤溝状の 354・355溝などもあるが、多くは幅0.4m を越え、畝溝状である。また、溝の間が 0.7m ～ 1 m ほどの間隔のものが多い。そして埋土の a は第８層が入ったと見れば、これらの溝は畝溝と考えられる。埋土の b は下層と第８層が混濁したもの、c は溝掘削時に流水堆積したもののようである。

つまり十七ノ坪西側は、第８層の最終段階には南北方向の畝立てが為されていた可能性が高い。

379溝は（図27中図）第10面露出範囲より東で、南から一段上がる 380段差上で東西方向に走る。第６面で 304島畠に踏襲された段差の上面である。埋土が酸化激しいのは調査区北端の法面に近いせいだが、含む砂粒が多く砂質土なのは上下層とも異なる（図28・図版14－１）。その南、坪境近くにも東西方向の鋤溝があり、十七ノ坪東側は当初から、東西方向の耕地区画が存在していた可能性が高い。

全体に削平を受け、本来の高さは遺存しないと思われるが、十七ノ坪の面の高さは、東の 380段差より北は平均 T.P.+3.86m、南は平均 T.P.+3.76m、第10面が露出している周辺は平均 T.P.+3.65m、354溝以西は平均 TP.+3.61m である。全体で見ると十七ノ坪は、東側がやや高く、さらに北側に高くなり、東西方向の耕地区画がある。西側は低く、南北方向の耕地区画で、埋没直前には畝立てされていた可能性が高い。また西側部分は時には耕作方向が東西方向に変わる事もあったようである。

356～362・379溝出土遺物　図化できるものはないが、わずかに遺物が出土している。破片数で見る。

357溝からは須恵器壺２、瓦器椀２、壺１片は第10－１面607落込のものと接合した。

358溝からは須恵器壺１、瓦器椀口縁２、壺は 357溝に同一個体。瓦器椀片は内外面ミガキ密である。

359溝からは瓦器椀１、360溝からは土師器１、361溝からは須恵器壺１、壺片は丸底で古墳時代後期か。362溝からは弥生土器１、土師器２が出土した。

下面遺構と溝同士に同一個体片があるのは、それらが元は第８層包含遺物である事を示す。内外面ミガキ密の瓦器椀は 11世紀後半のものであろう。

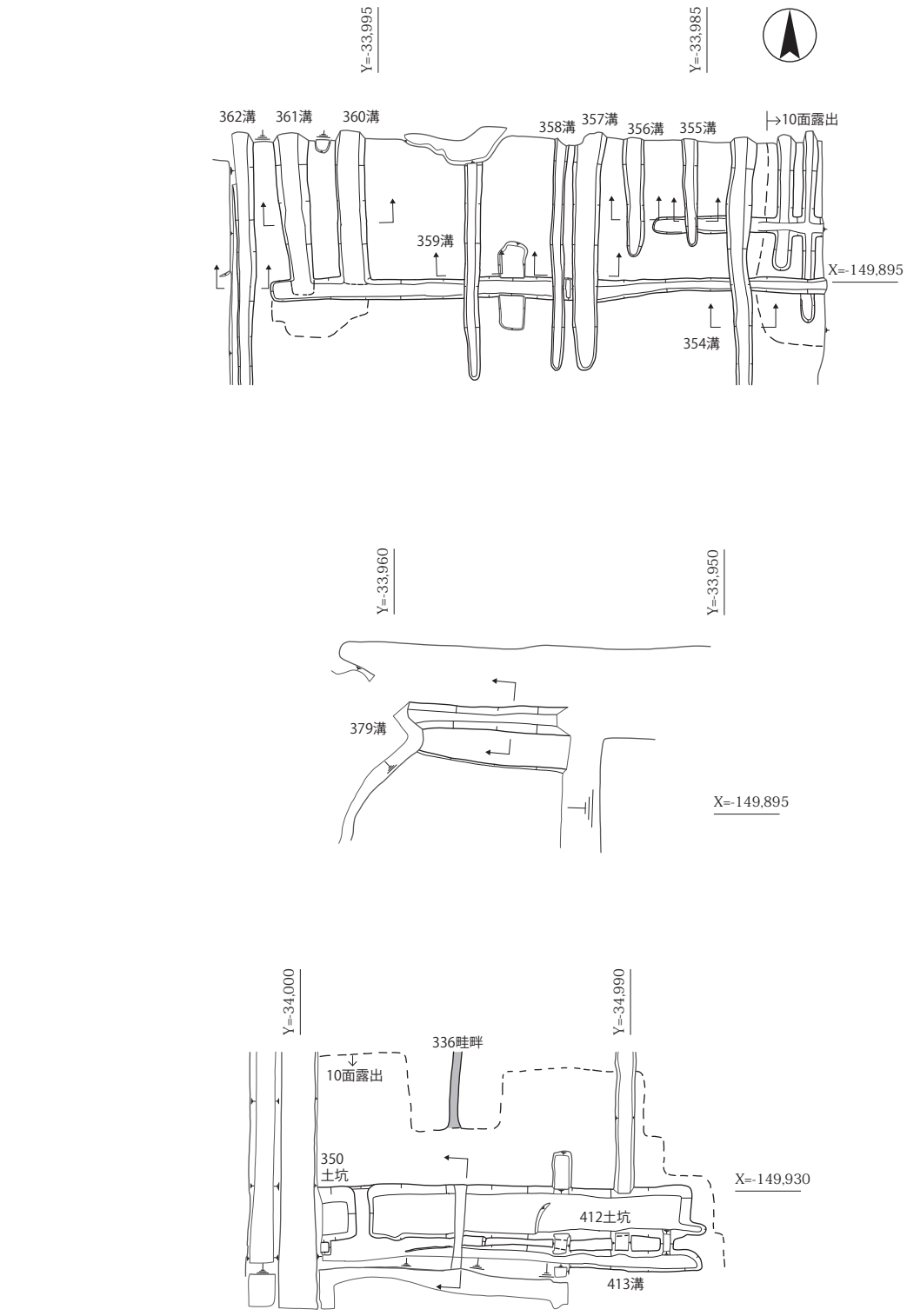
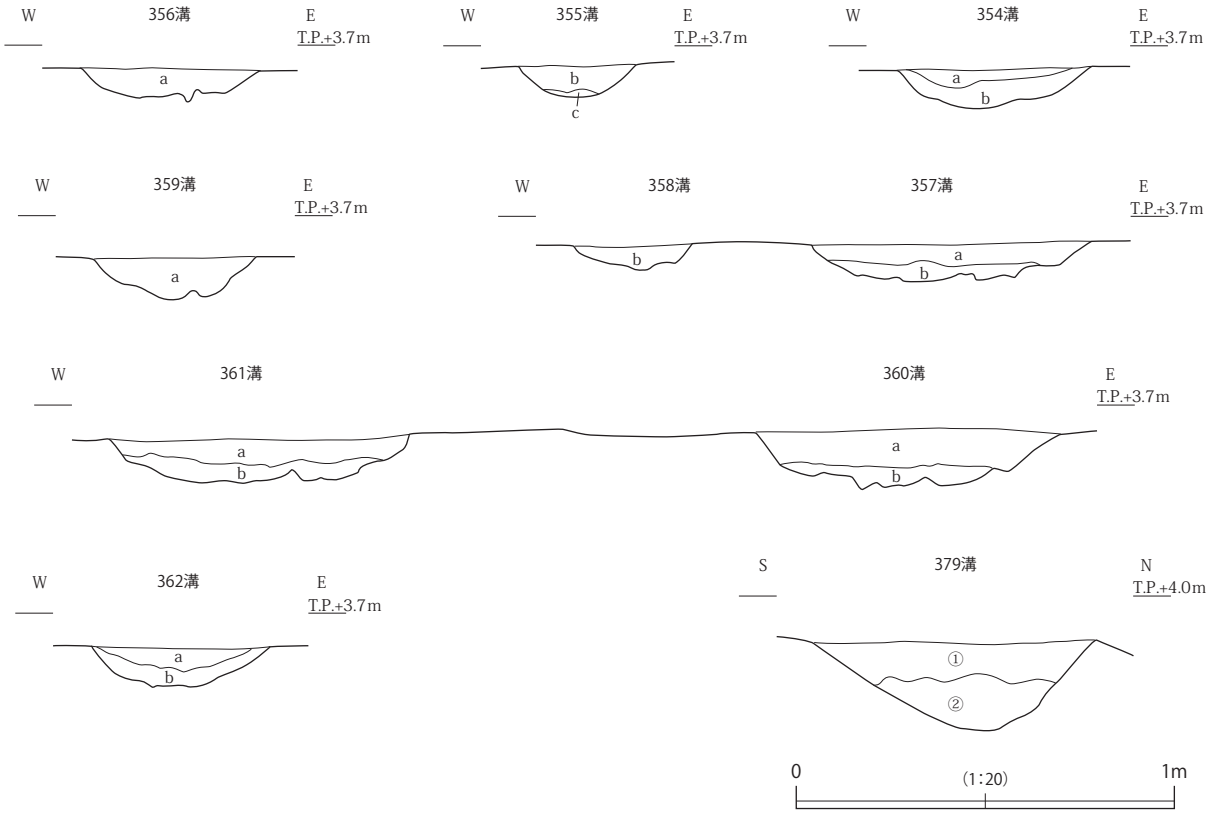


図 27　第 8 面　遺構断面位置図（断面図は 28・29・30）



共通土色・土質
a：10GY4/1暗緑灰　粘質土　シルト主体　中砂～細砂若干あり。８層に似る。
b：2.5GY4/1暗オリーブ灰　砂質土　シルト～細砂主体　中砂あり　１～３cmのブロックあり。
c：2.5GY5/1オリーブ灰　細砂～シルト　ラミナなし。

379溝土色・土質
①2.5Y5/4～5/3黄褐　砂質土　細砂～シルト主体　粗砂あり　Fe・Mnあり。
②「2.5Y6/3にぶい黄　細砂～シルト」と「2.5Y5/2暗灰黄　中砂～シルト」の４～１cmのブロック　管状Fe・Mn斑あり。

図 28　第８面　溝　断面図（356 ～ 362・379 溝）

十六ノ坪の状況　先の「第７面」遺構以外は、小畦畔・鋤溝がある。また、調査区坪内南西隅で第８層がなく、第10面が露出する部分があった。十七ノ坪と同じく、第８面で高かった部分であろう。その輪郭は正方位方向に屈曲し、おそらく坪内で整理された段差を成していたと思われる。その部分には、後述するように第８面でも最後まで開口していた土坑・溝もあったと思われる。

376畦畔は第６面の 311畦畔と同じもので、この面から継続している。幅は 0.7 ～ 0.8m ほどである。その東の水田面は平均 T.P.+3.86m である。

そこから 0.6 ～ 0.9m 西に 375畦畔がある。幅0.4 ～ 0.7m で、高さは平均 T.P.+3.69m で西の水田面平均 T.P.+3.65m との差は 0.05m 弱である。盛土は第８層と区別できず、北端が 376畦畔の水口が開く位置に合わせて途切れ、畦畔ではなく畝の可能性もある。376畦畔に近いため削平を免れたか。その間の溝状に見える部分も、西側水田と同じ高さである。

その西には 374畦畔がある。第７層候補遺存範囲とは若干距離を置く。幅は 0.4 ～ 0.6m、高さは平均 T.P.+3.71m である。北側坪境に近い部分に浸蝕の補修部分がある。南側に水口状部分が２ヵ所あるが、東西方向の鋤溝に切られた部分もあるので、これも上層床面遺構の鋤溝に切られたものかもしれない。

この西側の水田面の高さは第７層候補遺存範囲以外は、T.P.3.56m ほどと思われる。

その西に 365畦畔がある。幅0.3 ～ 0.45m、削平され平均 T.P.+3.64m で西側の水田面と同高である。その西には 366畦畔がある。削平され切り合いのみ残り、幅0.3 ～ 0.55m、高さは平均 T.P.+3.67 で西側水田面や南の第10面露出部分と同じである。南は第10面露出部分につながって終る。

350・412土坑・351・413溝（図29・30） 第10面露出部分は、十七ノ坪と同じく正方位の溝が切り合いなく重複して見えたが、その大部分は第８層床面遺構である。ただし、350・412土坑・351・413溝は、350土坑が第８層の遺存する部分で検出でき、セクション断面で第８面から切り込んでいる事が判明し、412土坑は 350土坑と同じ幅で同じラインに並び、351・413溝は各々土坑の南辺に沿って並び、その４遺構が一段下がった部分に納まっている事から、第８面まで継続する遺構と考えられた。

350土坑は幅1.6m、長さ 6.1m の東西に長い長方形の土坑である。底面の高さは T.P.+3.30 ～ 3.43m で平坦な形だが、東端付近が深い。遺物は出土していない。

その南0.22m に 351溝が平行する。幅0.4m、底部高は T.P.+3.35 ～ 3.57m で西が低い。東端は 350土坑東端より 0.75m 西で止まる。413溝の例から、セクション断面付近で 350土坑につながる溝があったかもしれない。西はこの面では坪境東側の攪乱までしか検出できなかったが、第10－１面で西に伸びる続きが坪境344畦畔の下を越え検出された。ただし、その部分は埋土が異なる。この溝は第８層成立時点で掘られ、坪境付近はすぐ埋められ、東側のみが存続した事になる。遺物は須恵器甕１片である。

両者の断面を見ると（図29）、第８層の肩部が丸くなり、第８面時点で開口していた事を示す。第６層が入るが、埋め立て後の沈下で入り、第５層の削平を免れたのであろう。土坑の埋土は質的には第８層に近く、第６層成立時点で埋められたようだ。それを溝埋土が切り、溝埋土にはブロック土があるので、351溝は、掘削は 350土坑と同時で、埋められたのは時期差があったようだ。

412土坑は幅1.6m で 350土坑と並ぶ。両者の間は 0.45m、その部分は北より７㎝ほど下がり、両者は同じ一段下がった部分に掘られている。長さ 9.8m の長方形で、南東角には溝状の突出部が東に 0.45m ほど伸び、その部分は土坑底部に向かって傾斜を成す。底部の高さは T.P.+3.28 ～ 3.35m で、東端付近が深い。遺物は土師器坏２片、瓦器椀１片のみである。

図21－16 はその土師器坏片である。内面ヨコナデ、外面は口縁から２段の強いヨコナデ、下半は方向不明だが緩いナデか。「精良な胎土」で南河内産と思われる。この外面２段ヨコナデの形式系統は坏と見て良い。10世紀後葉から 12世紀前葉頃までのものである。

413溝はその南0.22 ～ 0.5m に平行する。溝の幅は約0.6m、底部高は T.P.+3.34 ～ 3.44m で西が低い。東端は 412土坑の突出部より 0.2m ほど西で止まる。西へ約0.9m の位置で、412土坑と溝でつながり、その部分は土坑へ下る傾斜を成す。西端は調査区法面に入り不明である。遺物なし。

両者の断面を図30（図版14－２）で見ると、③が機能時の堆積、②が人為的埋土のようである。①が第８層の二次堆積とすれば、第８層時点で埋められた事になるが、沈下した部分に入った第６層の可能性もあるので、350土坑と埋没時期が異なるかは不明である。

これら４遺構の性格は、水溜と考えられるが、不可解な点も幾つかある。水溜なら、溝底部の傾斜などから、南東方面から給水されたと考えられるが、削平のせいか、給水経路が不明である事、413溝と351溝が同列に並び、底部の傾斜も同方向だが、413溝西側底部が 351溝より低い事、351溝が 350土坑より西に伸び、埋められた時期が部分により違う事、などである。

413溝と 351溝の間が、一旦浅くなる形でつながっていたとすれば、413溝から 412土坑に給水し、

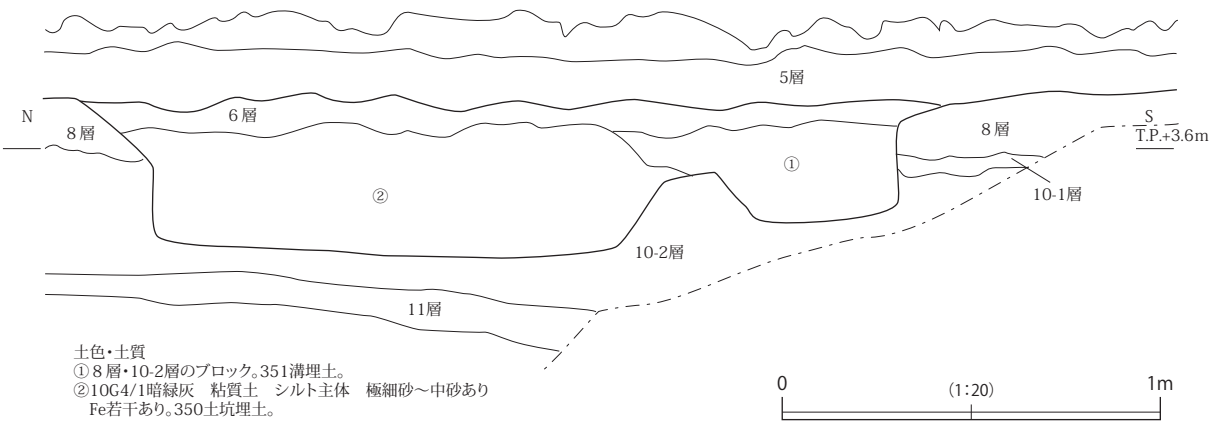


図 29　第 8 面　350 土坑・351 溝　断面図（Y=-34,000 ライン）

満水になれば自然に 351溝に流れ込む形であった可能性もある。また、412土坑が 366畦畔のラインと重なるので、366畦畔が検出範囲で止まり、土坑と同時併存なら、第10面露出範囲にはまったく異なる変則的な耕地区画が存在した事になる。

十六ノ坪を全体的に見れば、西の坪境344畦畔からの心々距離で見ると、360畦畔が 10.6m、365畦畔が 21.9m、374畦畔が 32.3m と、各々 109m の 1/10・2/10・3/10 にほぼ近似する。ただ、376畦畔は 40.4m と 4/10 に 3 m ほど足りない。かなり整然とした南北方向長地型地割が為されてはいるが、既に不均衡な地割りも存在していると言える。また、自然地形由来の高低差をその地割りで解消しきらず、それによる変則的な地割りが存在した可能性もあると言える。

二十ノ坪の状況　坪境324畦畔の北側323畦畔から、南北方向の 3 本の畦畔が伸びている。

359畦畔は第 6 面291畦畔と盛土は別である。幅約0.4m、高さ平均 T.P.+3.56m である。東側坪境から心々距離約7.4m である。東側水田面の高さは平均 T.P.+3.53m、西側は T.P.+3.40m である。

320畦畔はその西で、第 6 面296畦畔より約0.5m 西にずれる。幅約0.4m、高さ平均 T.P.+3.53m で、359畦畔との心々距離約15.2m である。西側水田面は高さ平均 T.P.+3.45m である。

321畦畔はその西で、第 6 面297畦畔より約0.5m 西にずれる。幅約0.5m、高さ平均 T.P.+3.49m で、320畦畔との心々距離約10.0m である。西側水田面の高さ平均 T.P.+3.39m である。

321畦畔が、東側坪境から心々距離32.6m で、ほぼ 109m の 3/10 である。320畦畔は 22.6m で 2/10 からずれるが、近いとも言える。359畦畔のみが大きくずれる。その東側の水田面のみが他よりやや高く、それ以外はほとんど平坦な事と関係するのだろうか。

359畦畔の続きは 06‐2 調査区では検出されていない。320畦畔は 06‐2 調査区第 7 面 B34・35畦畔のラインに一致、321畦畔は 06‐2 調査区第 7 面 B33畦畔・第 8 面 B39畦畔のラインに一致する。

二十一ノ坪　この坪では北側坪境沿いの 326畦畔以外小畦畔を検出できなかった。ただし、精査時の天候の不順もあり、検出しにくい状態であったので、存在しなかったとは断言できない。

溝が多く検出された。ほとんどが東西方向だが、わずかに南北方向や、北西から南東へ斜行するものも見られる。東西方向の溝は、最も細いものは幅約0.25m だが、ほとんどは 0.4 ～ 0.7m、深さは 0.04 ～ 0.11m ほどである。埋土は第 8 層に似る。深さが下層に達する溝は、埋土が下層と混濁し、その場所の下層の質により違いがある。近接する溝間の距離は 0.3 ～ 1.1m で、0.4 ～ 0.7m が多い。畝立てが削平を受け、溝のみが残った状況であろう。溝のない部分も面の高さは変らず、削平が強いわけではない。

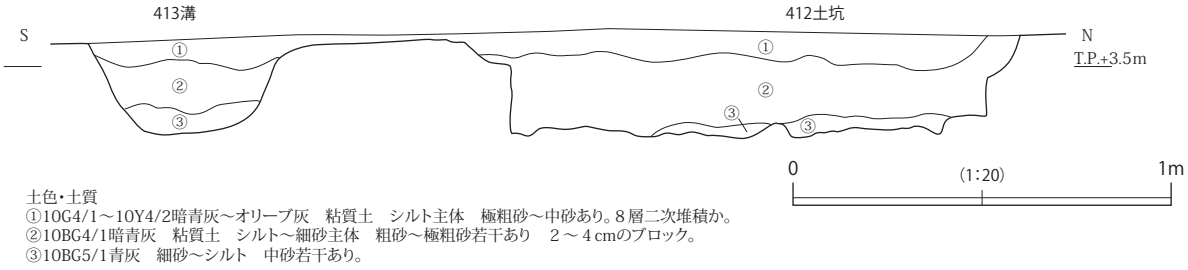


図 30　第 8・10- 1 面　412 土坑・413 溝　断面図

原状ではないとしても、坪内の面の高さは、Y= －34,021 ライン付近以西は平均 T.P.+3.47m で一番低く平坦、そこから Y= －34,013 ライン付近までは平均 T.P.+3.54m、東側坪境沿いが一番高いが、それも南が高く、北が低く、南最高所は T.P.+3.64m、北端付近は T.P.+3.58m ほどである。

327溝　二十一ノ坪内の、Y= －34,022 ライン付近を南北に走る溝である。交差する東西方向溝全てに切られる。07‐2 調査区第10‐1 a 面342溝として検出され、切り込み面が疑問と申し送りがあり、断面確認した所、切り込みが第 8 層内まで上がるが、第 8 面近くでは不明瞭になる。埋土は 2 層に分かれ、上層は第 8 層とほぼ同質、わずかに粗砂多く、ブロック状構造が確認できる。下層は粗砂～中砂で、上面では確認しづらいと思われる。幅0.5 ～ 0.8m、深さ 0.1 ～ 0.2m、断面逆台形で、底部が凹凸するのは地震変形か。南北で底部高はほとんど差がなく、南側 T.P.+3.39m、北側 T.P.+3.33m ほどである。

この溝を追跡すると、北側坪境324畦畔の盛土の下を抜け、二十ノ坪に達していた。324畦畔の 2 回目盛土より下なのは確実で、第 8 層機能期間の初期に掘られたようである。十七ノ坪第10面露出部分周辺の遺構検出状況と似る。溝の位置が坪内で低い部分の東端付近で、第 8 層機能期間の初期に、排水のために臨時に掘られた溝ではないかと想像される。二十ノ坪に抜けた部分が、その坪の中で東西の区画より低い部分である事もそれを裏付ける。

334・335溝（図版11-5）　調査区南西隅を南東から北西に斜行する 2 本の溝である。334溝は東西方向の 331 ～ 333溝全てに切られる。335溝はその全てを切るが、北西側は 334溝に合流するのか検出できなくなる。334溝は幅約0.5m、底部の高さは T.P.+3.36 ～ 3.42m で凹凸し、どちらかに傾斜する傾向はない。335溝は幅約0.4m、底部の高さは南東が T.P.+3.47m、北西が T.P.+3.38m と北西が低い。埋土は両溝とも周辺の溝とほとんど変化なく、第 8 層と下層が混濁したようなものである。

当遺跡では、最古条里地割り耕作土の上下面でしばしば正方位でない溝が見られる。334溝は 07‐2 調査区第 9 面（本調査区の第 8 b 面）249溝から続くが、335溝の続きは検出されない。また、02‐1 調査区ではこれより下面でも両溝の続きは検出されていない。

この部分は調査区隅で土層の風化・酸化が激しく、第 8 層が遺存しているか不明な部分もあったので、334溝は第 8 層床面遺構だとすれば問題はない。しかし、335溝の切り合いは確実に見えたので、それをどう解釈するかは難しいと言える。

二十一ノ坪は、本来は東西方向の畝立てが並んでいたと思われる。畝溝の遺存する範囲・粗密は第 6 面の耕地区画とは無縁のようである。しかし、329溝から 330溝間を東西溝空白部分と見れば、その幅が 10.6 ～ 11.1m、330溝から 347溝までを東西溝集中部分と見ると、その幅10.6 ～ 11.3m、空白部分かどうかは攪乱のため断言できないが、347溝から 348溝の間が約10.4m と、109m の 1/10 に近似す

る幅を抽出できる。基本的には幅10.9m に近い東西方向の長地型地割りがあり、北端のみ幅が狭かったか。そして畝立てが為された区画と、水田の区画が交互に並ぶ状況が推測できる。

二十一ノ坪遺構出土遺物（図21） 坪内の溝の幾つかから、若干の遺物が出土している。破片数では以下の通り。実測可能なものは 327溝出土の１点のみであった。

327溝から飛鳥時代須恵器坏身１（図21－14）内面は底部一定方向ナデ後、体部ヨコナデ、外面は体部２条の回転ナデ、下部に回転ヘラケズリ、底部は回転ヘラ切りで小さな粘土塊がいくつも付着する。飛鳥Ⅱ～Ⅲ期のものである。他に瓦器椀２、断面三角形の高台片あり。

328溝から土師器２ ｛高坏１、坏１｝、須恵器高坏１（６世紀後葉)。329溝から土師器坏１。330溝から弥生土器１、古墳後期須恵器坏蓋１。331溝から土師器甕１、瓦器椀３、瓦器椀はミガキ密な破片と高台断面台形の破片あり。332溝から土師器小皿１。346溝から弥生土器１、土師器坏１。348溝から土師器坏１、瓦器椀１。349溝から黒色土器Ａ類椀１が出土。

古墳時代後期から飛鳥時代の遺物も見られるが、幾つか瓦器が出土するのが注目できる。特に切り合い上古い遺構である 327溝でも瓦器が出土しているのは同時期的な遺物と言えよう。

第６・８層包含遺物（図31） 第８面は第６層耕作による削平が強く平坦だが、溝底部などに激しい地震変形が見られ、層内も変形する。面上でも削平を免れ、荷重痕状に沈下した層境が小ピット状に散在していた。そういった地震変形の沈下部分にはしばしば上層の遺物破片が入る事はよく経験している。本来なら面検出時点の高さから、沈下部分がなくなるまで掘削した前後の包含遺物を分別すべきだが、第８層の遺存する層厚が薄いため無理だった。それで第６層包含遺物が混じる可能性が排除できない事を示し「第６・８層包含遺物」として取り上げた。地震変形が広がる第10－１層も同様である。

遺物を破片数で見ると、弥生土器１、土師器265｛甕30、把手１、高坏２、粗製椀７、坏23、小皿37、羽釜13｝、須恵器96｛甕体部９（内面すり消しなし２、あり７)、壺12（提瓶１、蓋２)、鉢３、捏ね鉢８、高坏１、坏56（古墳中期蓋１、古墳後期身21、蓋７、飛鳥身３、蓋５、奈良高台４、蓋２)、塼１｝、陶器甕１、青磁４ ｛碗３｝、白磁碗２ ｛玉縁１｝、黒色土器Ａ類椀４、瓦器127｛椀119、小皿４｝、瓦質土器８ ｛甕５、三足羽釜１、捏ね鉢１、擂鉢１｝、土師質平瓦２、雁股式鉄鏃１、丸太材２、点け木２、桃核１、牛馬歯２、骨２、砥石１、勾玉１、磚１、である。実測可能なものは 19点あった。

図31－１は玉縁状口縁の白磁椀片である。口縁内面と玉縁外面に緩い凹線が巡る。玉縁下部の合わせ目は釉の下で深い。玉縁が発達した南宋前半期の、12世紀前葉から 13世紀前葉のものか。

図31－２は青磁碗片である。口縁部は外反する。10世紀後葉から 11世紀中葉頃の越州窯系青磁碗か。

図31－３も青磁碗片である。外面下半から高台は回転ヘラケズリ、高台外側面の一部から高台内は露胎である。時期は特定しがたい。

図31－４は土師器小皿片である。内面は底部調整不明、口縁はヨコナデ、外面は口縁ヨコナデで左上にナデアゲ、底部はユビオサエが残り、粗いナデか。胎土にわずかにチャートあり。非常に浅い身で、口縁端部が単純な形は、コースター形出現以降、へそ皿出現までと見れば 12・13世紀頃か。

図31－５も土師器小皿片である。内外面とも口縁はヨコナデ、底部は調整不明で、胎土にチャートあり。図31－４と同じ時期のものか。

図31－６は土師器坏片である。内面は口縁ヨコナデ、それ以下は調整不明、外面は口縁に２段の強いヨコナデ、それ以下はやや磨滅するが、不定方向の粗いナデか。「精良な胎土」だが、白色と赤色の粘土が縞状に混じる。南河内産土師器に時々見られる胎土である。身が浅いが、外面２段のナデは坏の系

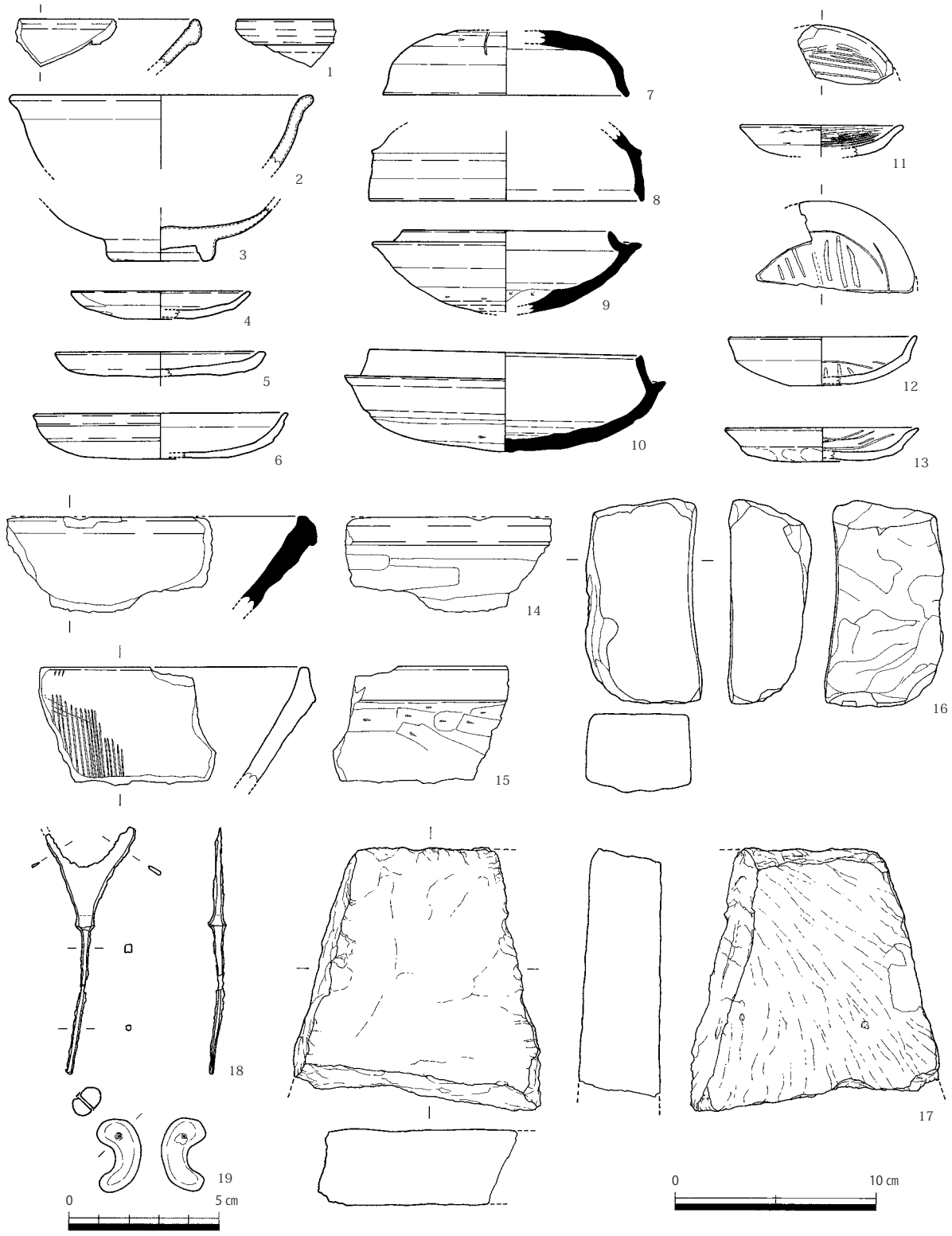


図 31　第６・８層　包含遺物（１：白磁、２・３：青磁、４～６：土師器、７～ 10・14：須恵器、11 ～ 13：瓦器、15：瓦質土器、16・17：石製品、18：鉄鏃、19：滑石製勾玉（S = 1/2））

統である。口縁端部の外反がほとんどなくなっているので、その形式でも 11世紀前葉頃のものか。

図31‐７は須恵器坏蓋片である。内面は天井部一定方向直線ナデ後、口縁回転ナデ、口縁端部内面は平坦な面状を成すが稜が立たない。外面は口縁回転ナデ、上部回転ヘラケズリ、天井部に１本線のヘラ記号あり。TK10型式から TK43型式までありうる形で６世紀中葉から後葉のものである。

図31‐８も須恵器坏蓋片である。残存部分は全て回転ナデで、口縁端部には内傾した凹面がある。

MT15型式からTK10型式にありえる形で、６世紀前葉から中葉のものである。

図31－９は須恵器坏身片である。内面は回転ナデ、底部の直線ナデがそれを切る。外面は上部回転ナデ、下部回転ヘラケズリである。形状が高坏に良くあるものだが、復元形で脚部が接合する余地はない。TK43窯より古色だが、型式段階としては同時期のものと見て良く、6世紀後葉のものである。

図31－10は須恵器坏身である。内面回転ナデ、外面は上半回転ナデ、下半回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切りで降灰痕がある。口縁端部に内傾する凹面があり、MT15型式、６世紀前葉のものである。

図31－11は瓦器小皿片である。内面は、口縁ミガキ密、見込みには平行暗文、外面は、底部不定方向の粗いナデ、口縁はヨコナデで外反し、粘土皺が残る。外面ミガキの瓦器小皿よりは新しく、内面ミガキと暗文の区別があやふやになるより前と見れば、12世紀初頭から末葉頃か。

図31－12も瓦器小皿片である。内面は磨滅・剥離激しいが、ヨコナデ後ミガキ・暗文、ナデは底部も円形に回しているのが残る。口縁のミガキは明らかではないが、下端のみ確認できる。見込みの暗文は粗い平行線である。外面も剥離し、底部は調整不明、口縁はヨコナデか。見込みの暗文が図31－11より雑なので、12世紀末葉から13世紀初頭頃のものと思われる。

図31－13も瓦器小皿片である。内面ヨコナデ後ミガキ、ミガキはまばらで見込みまで区別なく伸びる。外面は底部ユビオサエ、口縁ヨコナデ。内面ミガキと暗文の区別なくなり雑になる段階で、瓦器小皿のミガキ消滅以前とすれば13世紀前葉から中葉頃のものか。

図31－14は東播系須恵器捏ね鉢片である。内外面共ヨコナデで口縁端部は上下に拡張され、若干肥厚する。口縁端部の拡張が比較的弱く、過渡期的なので、12世紀末葉から13世紀前半頃か。

図31－15は瓦質擂鉢片である。内面は左上がりハケ後左上がりナデ、口縁部はヨコナデ、その後カキ目である。外面は口縁部ヨコナデ、以下はヨコケズリ、体部下方は厚く煤が付着する。胎土には長石・石英の他、わずかにチャートあり。瓦質片口鉢の中でも最古段階の口縁部形態だが、それでも14世紀後葉と、他の遺物と若干乖離した時期を示す。地震変形で沈下した第６層内の遺物か。

図31－16は凝灰岩製砥石である。図左面と、その右側面（図中央）のみ全面成形されている。図下端面は部分的に２ヶ所研磨された平坦面が残る。図左面左側面も断面位置付近のみ研磨成形、上端面は割れか。図右面は板状節理が磨滅した自然面のようで、川原石か。図左面は上から二つの緩い凹面があり、下端へ向けて丸まる。その右側面は全体に一つの凹面で、どちらも肉眼で確認できる擦痕はない。

図31－17は花崗岩製磚片である。明確な加工痕はないが、板状の両面は鉱物の結晶に関わらず均等に平滑なので研磨されているようである。図左面の上辺と左辺が加工端面で右辺・下辺は割れ。

図31－18は雁股式鉄鏃である。二股の刃部は両方とも両刃造りだが左右刃幅が異なる。篦被ぎ（のかつぎ）部は裾広がりで四周に段を成す丁寧な造りである。茎部は途中で折れ曲がるが、丁度その場所の上下で太さが変るので、篦被ぎからその部分は鏑が装着されていた可能性もある。

図31－19は滑石製勾玉である。やや赤味を帯びたあまり類例を見ない滑石で作られる。表裏に平坦面を残すが、滑石製にしては丸く仕上げられている。穿孔は細く径１㎜弱で貫通するが、図右面で穿孔周囲にアタリを付けたような凹部が残る。古墳時代後期、６世紀頃のものであろう。

坪境関連遺物も含めて見ると、古墳時代後期から奈良時代の遺物が一定数あり、９世紀代から10世紀前半に限定できる遺物がない。そして10世紀後葉から、13世紀前半頃の遺物が空白期なく続く。第６層が13世紀後葉から、第７層候補が13世紀後葉頃と考えられる事から、やはり、図31－15の瓦質擂鉢のみが、時期的に乖離し、沈下した第６層のものと見て良い。その混入の比率は、実測可能遺物で

1/19 ほどになる。第８層が耕作土として機能していた期間の下限は、13世紀前半頃と見て、第８面遺構出土遺物とも整合する。ならば上限は包含遺物の空白期の後、10世紀後葉頃の可能性が高い。

02－１・06－２・07－２調査区では第８層に 12世紀から 13世紀のものが含まれ、齟齬はない。

小結　第８面は、最古条里制地割りらしく、かなり整然とした地割が為されるが、自然地形の高低差を完全には解消できず、それが変則的な地割りとして表出している。また、畝立てされていた可能性が指摘でき、島畠出現以前の畑作の状況として興味深い。ただ、畝立てされていたのは、埋没時の状況であるので、それが恒常的な畑地か、二毛作のような状況かは課題として残る。

第８層は耕作土として機能していた期間が 10世紀後葉から 13世紀前半とすれば、平安時代の摂関政治期から鎌倉時代前半に及び、かなり長く耕作されていた層である。坪境畦畔盛土の補修痕から、その間も何回かの洪水があったと分かるが、洪水堆積層はほとんど残らない。

しかし、第８層床面遺構的性格の遺構が第８面で検出される状況は、第６層による削平が強かった事を示すとともに、洪水堆積物の供給の度に、耕作床面が上昇し、削平され残った第８層は、その薄層の重なりのような状態になっていたからと考えられる。本調査以外でもこの面上下で遺構検出に混乱が多いのは、そのためもあろう。現地調査時点で、層の構造を仔細に把握できなかった事が悔やまれる。

加えて、本調査では、第７層の可能性のある層が、わずかしか遺存しておらず、「第７層候補」としたが、「基本層序」で述べたように、第７層の構造や分布も各調査区で複雑な様相を示し、上下２層に分かれそうである。その場合、本調査の「第７層候補」はその上層に当たる事は指摘しておこう。

第９項　第10－１面（第８ｂ面重複）（図32・図版14－３・15－１・２）

第10－１面では、第８面の「第10面露出部分」で見えていた東西南北に重複した溝群の続きが検出された。しかし、全体に検出するとそれらの遺構は、第10－１面の上を部分的に覆う洪水堆積層の第８ｂ層（周辺既往の調査の第９層）上面から切り込む事が判明した。

その第８ｂ面で一部、下層の第10－１層の畦畔の頂部が検出され、第８ｂ層が一部にしか遺存せず、層厚も薄かったので、第８ｂ面で遺構を検出・掘削後、その輪郭以外の第８ｂ層を除去し、第10－１面遺構も検出して測量した。図32 で、トーンの入る畦畔が検出された範囲が第８ｂ層が遺存し、第10－１面の遺構が残っていた部分で、そこで重複する正方位の遺構は第８ｂ面のものである。

第８ｂ層遺存部分は、第10－１面が凹面を成して低い部分で、それ以外では第８層が第10－１面を削平し、平坦になっており、第10－１面の遺構はほとんど遺存していない。その部分の正方位溝群は第８層床面、つまり第８ｂ面相当の遺構である。

第８ｂ面相当遺構　これらの遺構はほとんどが正方位を指向し、東西方向と南北方向のものが重なる部分が多いが、切り合いが確認できるものは少ない。便宜上以下の５種に大別して述べる。幅0.5m 以上、深さ 0.1m 以上で長く伸びる溝（A 種）、幅0.2 ～ 0.4m と細いが壁が立ち深さ 0.1m 前後の長く伸びる溝（B 種）、深さ 0.05m 前後と浅い鋤溝・畝溝状の溝（C 種）、鋤溝・畝溝が重複して形成されたような浅く細長い落込（D 種）、隅丸方形で深いものが多い土坑（E 種）、とする。埋土は場所により下層の影響を受けるが、標準的には C・D 種が第８層よりやや明るくわずかに粗粒の「暗青灰～青灰5BG4/1 ～ 5/1細砂～シルト」で、A・B はそれと第10－１～ 11ｂ層のブロックか混濁。E 種は第11ｂ－１層の中砂～細砂間に第８～ 11層のブロックである。

坪境（440・461・462・624溝）　坪境に溝のみで畦畔が検出されないのは、最古条里地割りの床面な

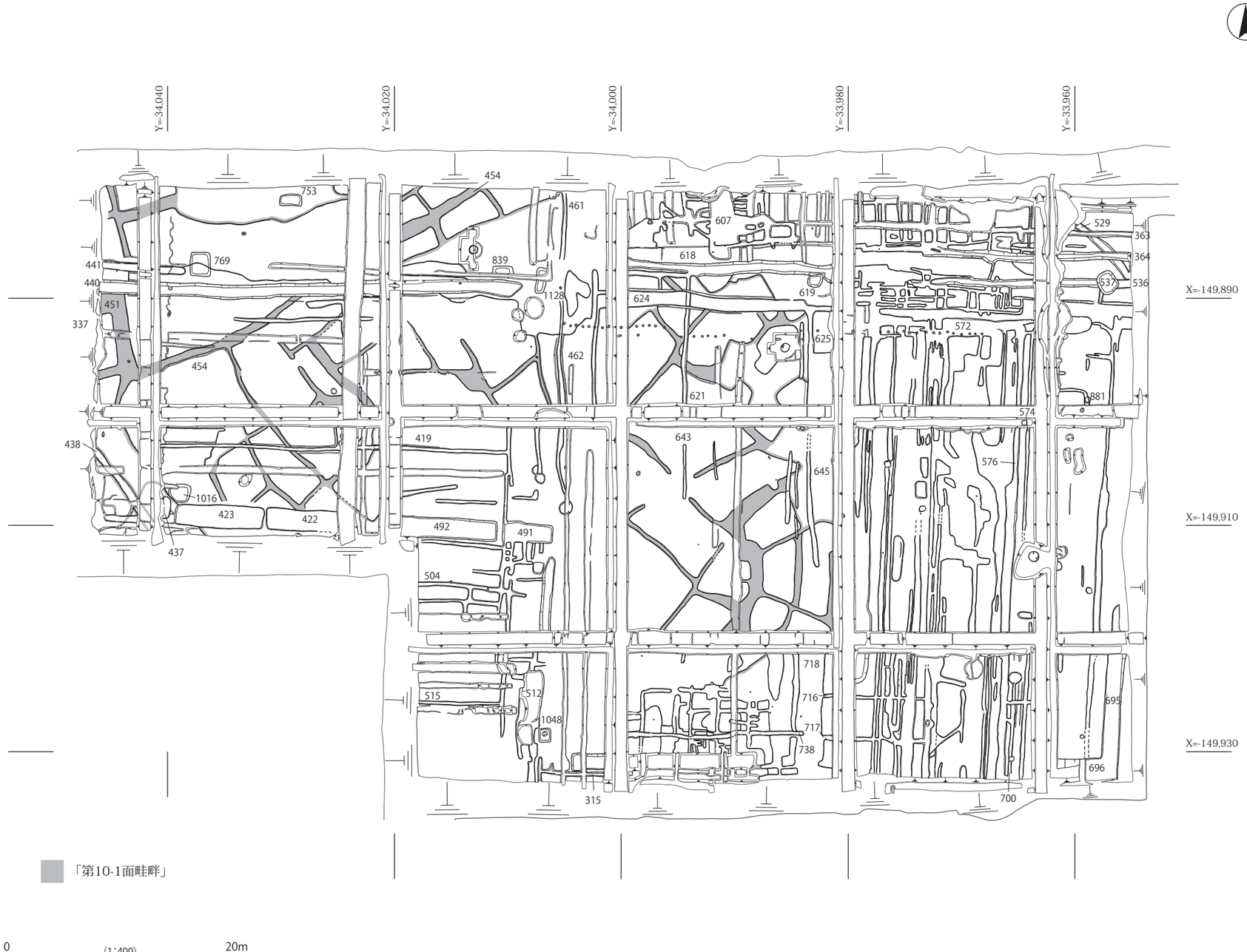


図 32　第 10-1 面（第 8b 面重複）　全体図

ので当然であるが、既往の調査ではこの面を「第９面」と見て、坪境畦畔がないまま耕作土層上面としている。以下、第８ｂ面相当の坪境の状況を、第８面の坪境畦畔との関係で述べる。

十六・十七ノ坪境は、上に 343畦畔がある部分は、東側では溝のない部分として残されており、十六ノ坪側で東西方向の 572落込（D 種）の北辺が 343畦畔の南裾と一致する。ところが西側では 624溝（A 種）が畦畔の真下に重なる他、その溝に切られる 621溝（B 種）が畦畔の下を横切る形で通る。

十七・二十ノ坪境では 341畦畔の下、中軸に近い位置に 461溝（C 種）がある。

十六・二十一ノ坪境では 344畦畔の下に、やや蛇行するが 462溝（C 種）が確認できる。しかし南側では第８面で先述した 315溝（B 種）の埋土が異なる部分が畦畔の下を横切る。

二十・二十一ノ坪境では、西側は 324畦畔が 441（C 種）溝と 440溝（A 種）の間に位置するが、440溝は東でやや北にずれ、324畦畔の下にもぐる。

これを見ると 440・461・462・624溝は条里制地割り施行時の坪境の設定に伴う溝と考えられる。東西方向のものが A 種のしっかりした溝で、南北方向のものが C 種の鋤溝程度のものであるのが注目できる。また、315・621溝などの B 種の溝はそれらより切り合い的に古く、条里制地割り施行準備段階から何らかの作業が正方位の溝を掘るなどして行われていた事を示す。

坪境出土遺物（図33） 坪境の第８面畦畔の下になる溝から、わずかながら遺物が出土している。破片数で見ると、440溝から弥生１、土師器８ ｛坏７、小皿１｝、461溝から土師器坏１、624溝から土師器６ ｛甕２、小皿２｝ である。実測可能なものは１点のみであった。

図33－３は 624溝出土の土師器小皿片である。磨滅により調整不明、口縁部はヨコナデか。口縁端部は内面が外反し、外側に水平につまみ出す。「精良な胎土」で、南河内産か。時期は特定しがたい。

わずかな遺物しかないが、条里制地割り施行時のもので、瓦器は含まれないと言える。

十七ノ坪の状況（363・364・536・618溝・537・619土坑） この坪内では C 種の溝が多く、南北方向が主体で、東西方向のものは南坪境付近に多いが全体にも散在する。東西方向の鋤溝が坪境付近に限定されないのは、全体で耕作方向が異なる時期があったという事であろう。それらに混じり、東西方向の A 種の 363・364・536・618溝が通る（図34）。363・364溝は第８面西側の第８層遺存部分で見えて調査した溝である。東側第８層遺存部分ではその２本と 536溝は第８面では見えず、この面で検出できた。第８項で先述したとおり、第８層が薄層の重なる構造であったとすると、検出の逆の順に古いと考えられ、618溝が最古、次に 536溝、そして 363・364溝が新しいと考えられる。

溝底部の高さは、363溝は東端で T.P.+3.59m だが、西に下がり、Y= －33,980 ラインを超えた付近で T.P.+3.34m、そこから西は上がり途切れる。364溝は東側は T.P.+3.36 ～ 3.56m で凹凸するが、西は T.P.+3.28m と下ってから浅くなり途切れる。536溝は東 T.P.+3.55m、西 T.P.+3.44m と西が低いがやはり西端は上がり途切れる。618溝は両端が不明だが、底部は T.P.+3.42 ～ 3.47m の間でほぼ平坦である。埋土は（図35・図版14－４・５）、最上部に第８層が陥没後入ったらしい部分が多いが、人為的埋土のブロック土は第８層とも第10－１層とも異なる。536・618溝には部分的に機能時の堆積と思われる止水・流水堆積層が残る。溝の性格は不明だが、坪内の自然地形で高かった部分を通り、水成堆積層が残る事などからすると、一時的な水溜・水回しの可能性が考えられる。536溝の西端は西側坪境の 461溝中軸より 32.3m で、109m の 3/10 に近似する。

この坪では、南の坪境近くに 537・619土坑がある。537土坑は隅丸方形だが、正方位からは斜めで 536溝を切る。平面規模は 1.9×1.7m、深さ 0.23m で、埋土は、下層のシルト～砂に緑灰シルトのブロ

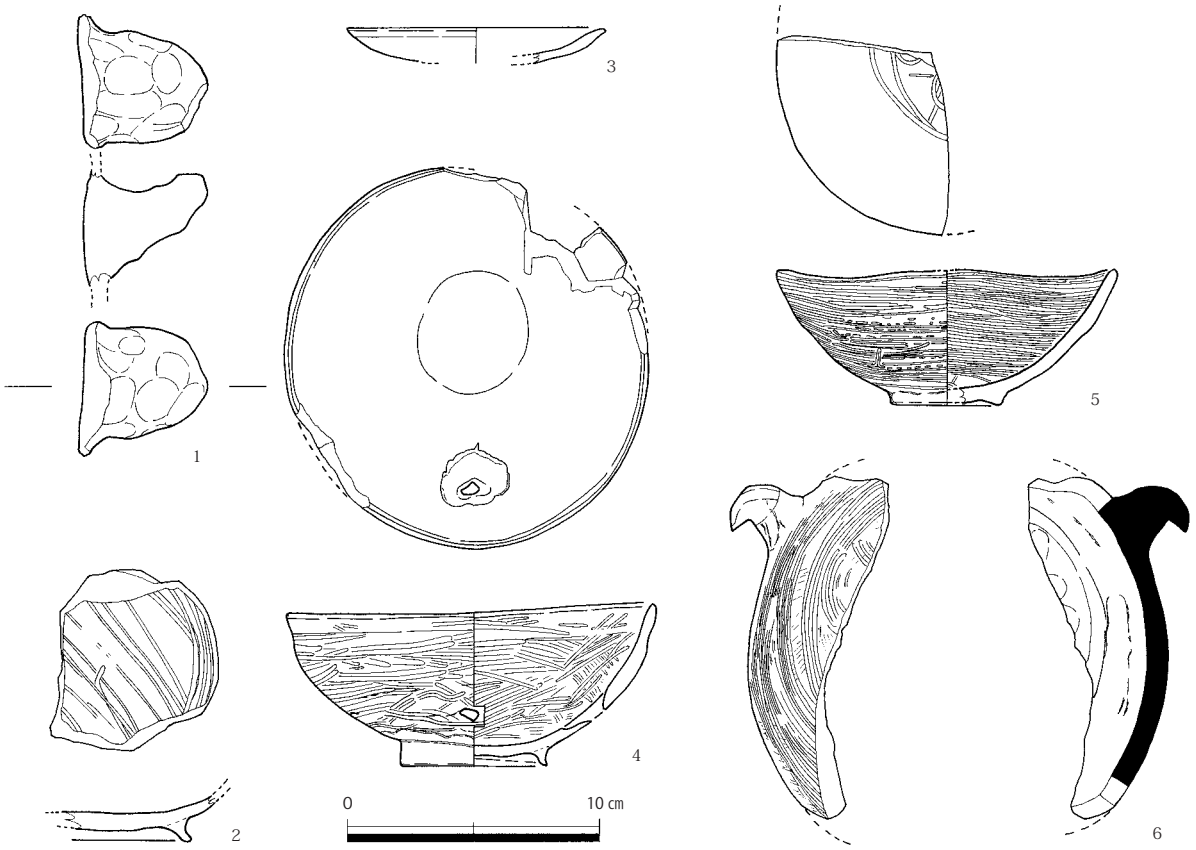


図33　第10－1・第10－2面　遺構出土遺物（1～5：10－1面｛1：537土坑、2：607落込、3：624溝、4：718落込床面ピット、5：88ピット｝、6：10－2面874溝）

ックが混じる（図35）。619土坑はやや不整な隅丸方形で1.1×1.3m、ほぼ正方位で618溝を切る。深さは0.66mである。埋土は536土坑とほぼ同じ。どちらもE種の遺構になる。この種の土坑は東西方向坪境近くに多いが、そればかりでもなく、埋土は基本ブロック土で水成堆積層はなく、遺物はほとんど出土しない。性格不明の遺構である。

十七ノ坪内遺構出土遺物（図33）　破片数では524溝から須恵器古墳後期坏蓋1、537土坑から土師器2｛甕1、把手1｝、568溝から土師器甕1、607落込から須恵器壺1、瓦器椀1、617落込から土師器坏1、須恵器奈良時代以降坏身1、618溝から土師器坏3が出土している。実測可能だったのは以下の2点のみである。

図33－1は537土坑出土の土師器把手片である。ユビオサエ・ユビナデ成形、左右不対象で分厚い。胎土に角閃石・黒雲母も入るが若干少なく、チャートもあり、河内低地産胎土か。破断面で見られる本体の器壁が薄く、移動式竈の把手ではなく、古墳時代の甑などの把手か。

図33－2は瓦器椀片である。内面は底部に一定方向のナデ後、体部にヨコナデ、その後に見込みに平行暗文、体部にミガキ、体部ミガキはわずかに間隔があくが、残存部分では分割性がうかがえる。外面は、底部は数方向の粗いナデ、高台から体部のヨコナデがそれを切る。高台は高く、外に張る。11世紀末葉から12世紀前葉頃のものか。

十六ノ坪の状況　南北方向のC種の溝、D種の落込が主体である。第10－1面の遺構が検出された部分は、短い鋤溝も若干あったが、比較的長く続く溝のみを選別して検出・掘削した。その意味では第8b層残存範囲の遺構密度が極端に低いわけではない。ただし、長い溝・落込は少なかった。

第8面の小畦畔と関係する溝がある。574・576溝は第8面の376畦畔をはさむ位置にある。その南

では700溝が下に重なる位置にある。その西の374畦畔もこの面の溝にはさまれ、南で716・717溝が下を横切る。625・645溝も365畦畔の下にほぼ重なる。621・643溝も366畦畔直下に位置する。

小畦畔をはさむ溝は、C種の溝で、畦畔の盛土や補修に関わると理解できるが、畦畔直下の溝は理解しにくい。それらの溝は全てB種の溝で、621溝は坪境をくぐり、十七ノ坪まで伸びる。643溝は621溝の、645溝は625溝の続きで、削平で遺存度が悪いと考えられる。つまり、この坪では小畦畔も条里制地割り施行時に位置が設定されていた可能性がある。何故床面に溝を掘るのかは不明だが、位置の明示や、横方向の水抜けを防ぐ、などが考えられる。

南側では状況が異なる。716溝以南では716・717・738溝などB種の溝が東西に走り、特に第8面で第10面露出部分であった付近は、東西方向のC種の溝もあり、錯綜する。第8面の350・412土坑・351・413溝も条里制地割り施行時に掘削されたと考えられ、これらの遺構と併存していた時期もある。716溝はD種の落込を越えて東に伸び、717溝と738溝は同一の溝のようである。315溝が西側坪境を越えて伸び、B種の溝はだいたい条里制地割り施行時に掘削されたと考えられる。すると、上述の小畦畔下のB種溝の例から、この付近には、条里制地割り施行時には、北側と異なり、東西方向の耕地区画が存在していた可能性がある。この部分が自然地形的に高い事と関係した地割りであろう。しかし、それも調査区南東隅の、695・696溝付近は達せず、坪内南西部に限られそうである。

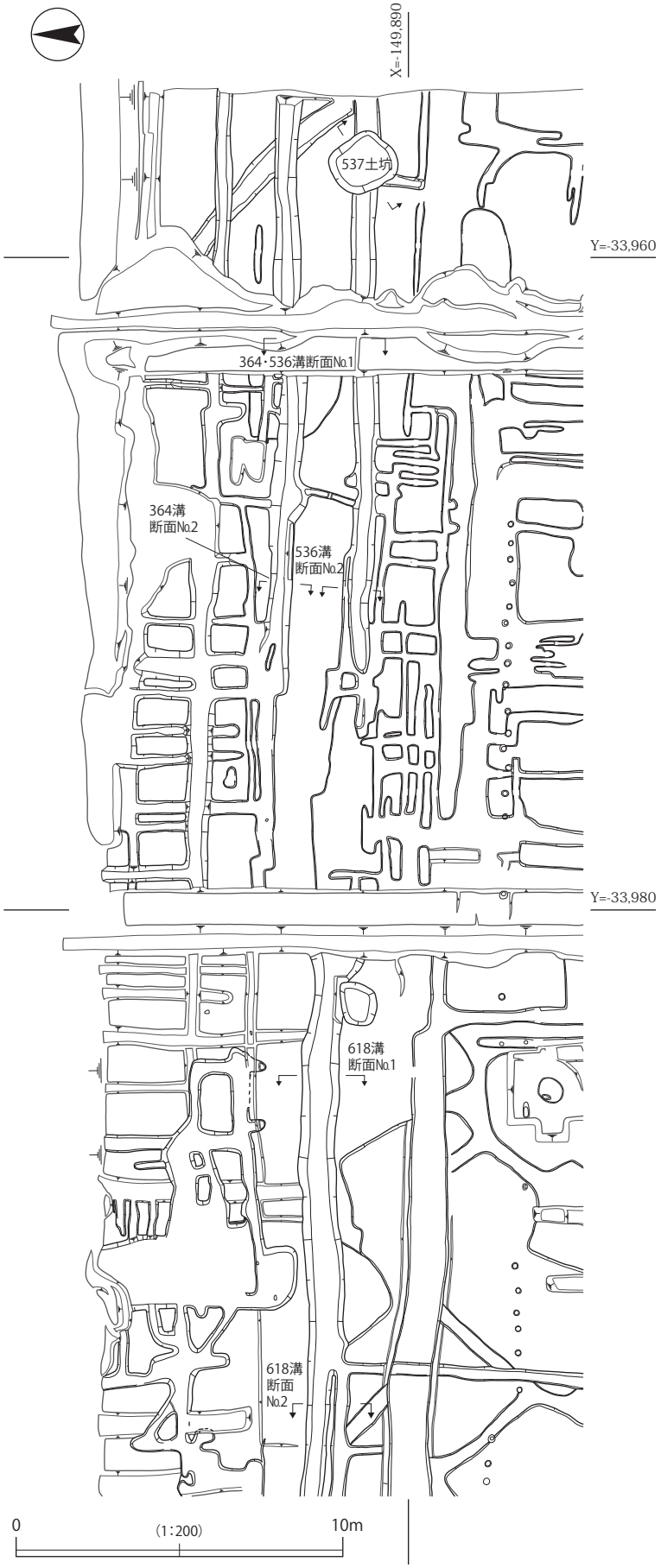
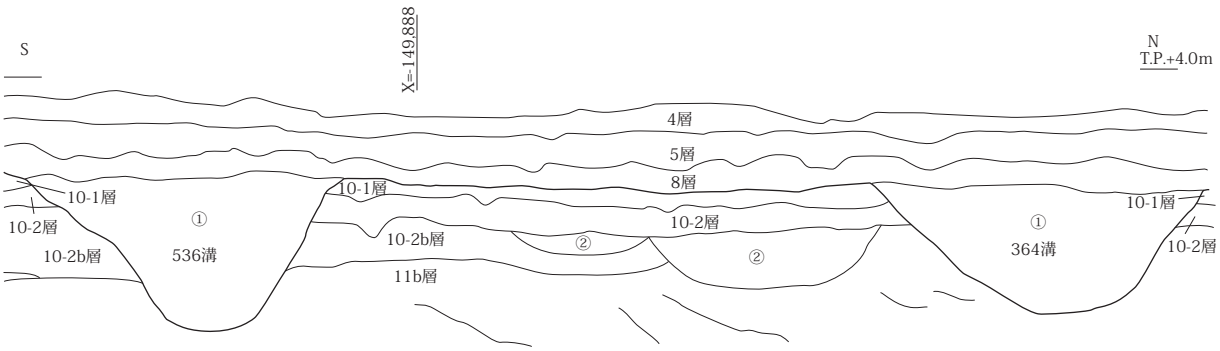
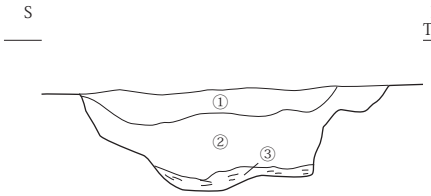


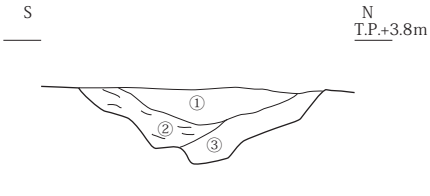
図34　第10-1面　遺構断面位置図（断面図は図35）



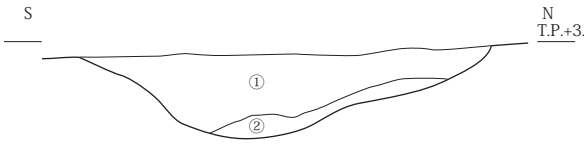
364・536溝断面No.1(Y=-33,962.5ラインセクション)
①5Y4/1～5/2灰～灰オリーブ　粘質土　シルト主体　細砂・粗砂～小礫若干あり　Mn粒若干あり。10-1面遺構埋土。
②7.5Y5/2灰オリーブ　砂質土　細砂～中砂主体　シルトあり。10-2b面遺構埋土。



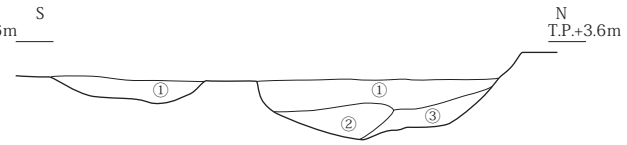
536溝断面No.2
①10G4/1暗緑灰　粘質土　シルト主体　中砂～細砂若干あり
肩部付近にラミナあり。陥没後流入土か。
②「5BG5/1青灰　シルト」と「10Y4/1灰　中砂～シルト」の６～１cmのブロック。
人為的埋土、③を攪拌したものか。
③5BG5/1～10Y4/1青灰～灰　中砂～シルト、ラミナあり、やや混濁。
溝機能時流水堆積。



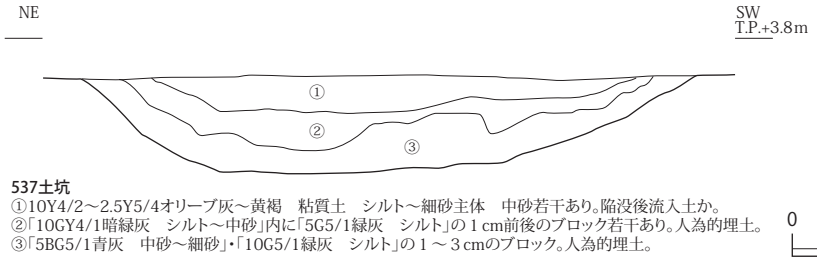
364溝断面No.2
①10G4/1暗緑灰　粘質土　シルト主体　細砂若干あり。陥没後流入土か。
②「10G4/1暗緑灰　シルト」内に中砂～細砂のラミナあり。流入土か。
③「5BG4/1暗青灰　シルト」と「10Y5/2オリーブ灰　細砂～シルト」の
４～１cmのブロック。人為的埋土。



618溝断面No.1
①「7.5Y5/2～10G4/1灰オリーブ～暗緑灰　粘質土　シルト主体
粗砂～中砂わずかにあり」の５～３cmのブロック　間に粗砂あり。人為的埋土。
②5Y5/3灰オリーブ　砂質土　中砂主体　シルトあり。砂に有機物の入った滞水層か。



618溝断面No.2・620溝
①「7.5Y5/2～10G4/1灰オリーブ～暗緑灰　粘質土　シルト主体
粗砂～中砂わずかにあり」の５～３cmのブロック　間に粗砂あり。人為的埋土。
②5Y5/3灰オリーブ　砂質土　中砂主体　シルトあり。砂に有機物の入った滞水層か。
③「10GY4/1暗緑灰　シルト」と「5Y6/1灰　細砂」の互層状ラミナ。溝機能時流水堆積。



537土坑
①10Y4/2～2.5Y5/4オリーブ灰～黄褐　粘質土　シルト～細砂主体　中砂若干あり。陥没後流入土か。
②「10GY4/1暗緑灰　シルト～中砂」内に「5G5/1緑灰　シルト」の１cm前後のブロック若干あり。人為的埋土。
③「5BG5/1青灰　中砂～細砂」・「10G5/1緑灰　シルト」の１～３cmのブロック。人為的埋土。

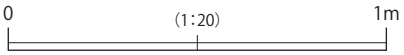


図 35　第 10-1 面　遺構断面図

718落込床面ピット・881 ピット及び出土遺物（図36・33）

この坪内では、土器埋納ピットも検出された。718落込床面ピット（図36）がその一例である。ピットとしたが、不整形な遺構で、やや曲がったような長さ 1.4m、幅0.5m 前後のもので、深さ 0.13m ほどである。南西からは緩く下がるが北端はやや壁が立ち、その斜面沿いに瓦器椀が 1 点出土した。

図33－４がその瓦器椀である。上方から見た図の右上の欠損は出土時点に高い位置にあった口縁部が粉砕割れしていたものだが、体部の穿孔は外側からの打撃による打ち欠きである。左下口縁の割れも、破片が存在せず、打ち欠きの可能性がある。内面は見込みも隙間なくミガキ、体部のミガキはそれを切

り、分割単位毎に左が右を切って一周する。口縁部付近はミガキの下にヨコナデが確認できる。外面は粘土継ぎ目がわずかに残り、口縁部２条のヨコナデ、体部はユビオサエ後軽いヨコナデ、高台部ヨコナデ、底部無調整で、ミガキは下部がやや乱れるが、上半は上下三つの単位で弧状のミガキの分割単位が、左が右を切る形で巡る。胎土には石英・長石の他、わずかに青いチャートが入る。楠葉型ではないが、大和型か和泉型か区別できない。11世紀後半のものである。

881 ピットは十六ノ坪北東部で、C 種の溝に上面を切られる、径約0.6m、深さ 0.16m のピットである。瓦器椀片1/4個体が出土した。完形に近いわけではないが、瓦器でこれだけの大きさの破片が他に見られないので、意図的に入れた可能性もあるように思われる。

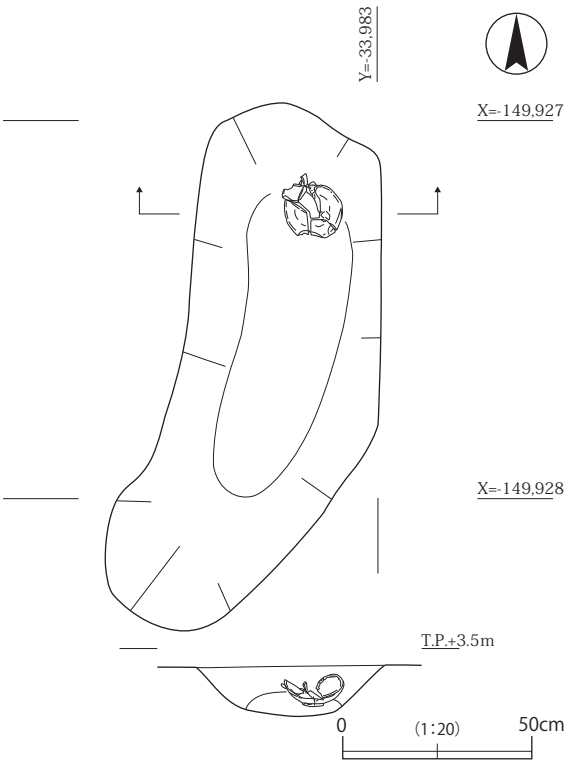


図 36　第 10-1 面　718 落込底面ピット瓦器椀出土状況

図33‐５がその瓦器椀片である。内外面共非常に密にミガキ、見込みは螺旋状暗文か。高台は断面三角形である。胎土に砂粒は認められず、細かい黒色粒のみである。器壁が厚く、ミガキが内外面密であるのに見込みは螺旋状暗文で、高台は断面三角形な事から楠葉型か。11世紀後半のものである。

この二つの遺構が土器埋納ピットとしても、その性格は考えがたい。第８層が耕作土層として機能している期間内に掘られたもので、その上限が 11世紀後半までは確実に遡る事を示すとは言える。

その他の十六ノ坪内遺構出土遺物　他にはほとんど　遺物は出土せず、694落込から土師器甑１片、699土坑から須恵器甕１片、719落込から弥生甕１片のみである。

二十ノ坪の状況（796・839・1128土坑）　第８ｂ面相当の遺構は少ないが、第８面坪境324畦畔の北に沿う上述の 441溝（A 種）と E 種の遺構である 769・839・1128土坑が、南側坪境沿いに並ぶ。

769土坑は南北約2.0m、東西約1.8m の正方位の方形の土坑である。最深部は T.P.+2.58m で、深さ 0.67m。839土坑は南北約1.2m、東西約1.8m の、正方位で東西に長い長方形の土坑である。最深部 T.P.+2.58m で、深さ 0.73m。1128土坑はやや北が東に振るが、南北約2.3m、東西約1.0m の長方形の土坑で、最深部は T.P.+2.48m、深さ 0.8m である。二十ノ坪の南東隅に位置する。

いずれも壁はほぼ垂直に立ち、埋土は単層で、第11ｂ層由来の細砂～中砂内にブロック土が入る。上面は陥没して第８層が入り、地震変形で輪郭が不明確であった。坪境沿い施設の痕跡とは思われるが、湧水の痕跡もない。遺物も出土しない。769土坑の西辺は東側坪境から 32.5m で、109m の 3/10 に近似し、第８面の 321畦畔のラインとも合う。長地型地割りの南西隅に位置していたと考えられる。

二十一ノ坪の状況（491・492・422・423・437・1016・1048土坑）　第８ｂ面相当の遺構は、東西方向の溝が多いが、東側坪境から 109m の 1/20 である 5.45m 幅の部分は南北方向の溝もある。東西に並ぶ四つの細長い土坑があるがこれらの南辺は北側の坪境から 21.8m、109m の 2/10 である。また、長く伸びる B 種の溝である 419溝は耕地区画に関連する可能性が感じられるが、その溝から南へ 10.7m に 504溝、22.2m に 515溝と同じ B 種の溝があり、各々 109m の 1/10・2/10 に近似する。

491・492・422・423土坑は、かなり削平を受けていると思われるが、D種の落込とは異なり、底部は平坦であり、平面形も整った長方形なので、土坑とした。491土坑は幅1.6～1.9m、長さ4.4m、深さ0.1m。492土坑は幅1.8m、長さは8.4～10.9mの間、深さは0.12m。422土坑は幅1.8～2.0m、長さは6.3～7.9mの間、深さ0.07m。423土坑は幅1.8～2.1m、長さ7.8m、深さ0.1mである。埋土は下層と第8層が混濁した層である。削平以前は深さがあったとすれば、第8面十六ノ坪314・412土坑と似たものかもしれない。遺物は極端に少なく、492土坑から土師器小片が1片出土するのみである。

その他に、E種の土坑が3基ある。437土坑は南北1.9m、西側がY=－34,0415ラインの筋掘りに切られるが、セクション断面には達しないので、東西幅は1.7m未満の、平面方形の土坑と思われる。深さ0.73mである。1016土坑はその北東に隣接し、東西2.2m、南北1.8mの方形の土坑で、深さは0.55mである。1048土坑は東西も南北も1.1mの正方形の土坑で、深さ0.31mである。3基とも壁は垂直に近く、底部は平坦、埋土は第11b層の砂の間にブロック土である。1016・1048土坑は上部の地震変形が激しく、この面では平面形が不鮮明なため、下面で確認して掘削した。3基とも遺物は出土していない。

1048土坑は東側坪境沿い、437・1016土坑は423土坑の西端に隣接する。井戸跡なら理解しやすいが、底部は第11b層でも上半で止まり、埋土のブロックも輪郭がはっきりし、湧水の痕跡はない。

この坪は、北側と東側に細めの区画を持ちながら、東西方向で幅10.9mの長地型地割りが為されていた可能性が高い。しかし、東西に並ぶ土坑列は北側坪境からの10.9mの倍数に整合した位置にあり、それらと齟齬をきたす。第8面と考え合わせると、第8面の一つの溝群の北端が、419溝より南に3mほどずれる。また419溝は北側坪境から10.9mのラインより約4m南にずれる。それを変化の方向性と考えると、最初に10.9m間隔で均等な区画があり、その後北側坪境沿いに幅4mほどの区画が生じ、最終的には幅7mほどの区画となり、それと共に他の区画が、徐々に南にずれていったと推定できる。

その他の二十一ノ坪内遺構出土遺物　遺物は極わずかである。442溝から古墳中期須恵器坏身片1、500溝から土師器片1、511溝から内面ミガキがまばらな瓦器椀片1、512土坑から瓦器椀片1、牛馬歯1、515溝から奈良時代須恵器坏蓋片1で全てである。

第10－1面小区画水田と関連遺構（438・529溝）　図32でトーンを入れた段差、畦畔が、残存していた第8b層を除去して検出した第10－1面遺構である。その他、削平を受けた第10－1面にも正方位を指向しない溝のうち、第10－1面に属するものがある。

小区画水田検出範囲は、条里制地割りの坪や耕地区画毎に削平の高さが異なるが、X=－149,980ラインとY=－33,980ラインの交点付近を基点として、北西方向に伸びる凹地形である。削平で消滅した部分も多いが、454畦畔より南東側は、馬蹄形に畦畔を巡らせたような耕地区画であろう。454畦畔は高く、第8b面で既に頂部が検出できた畦畔で、微地形を大きく区切る幹線的な畦畔のようである。

水田面には緩く凹む細長い部分が幾つか見られ、その部分で畦畔が途切れる事や、畦畔交点が失われている所もあるので、洪水により緩い浸蝕を受けているようである。

それを除外して平均的な水田区画面の高さを比較すると、調査区東半では、南西端に並ぶ区画の水田面がTP.+3.58～3.52m、北端付近がT.P.+3.56mで、その間はT.P.+3.51mほどの区画が多い。643溝の西側の区画が最も低くT.P.+3.46mである。そこから西半に行くと、X=－149,900ラインの北側に並ぶ区画が東からT.P.+3.41m・3.33mと西に低くなり、その西で454畦畔南東側に並ぶ区画はT.P.+3.32～3.28mほどである。その南はT.P.+3.40mと少し高い。454畦畔沿いも北東は高くなり調査区北端は

T.P.+3.39m である。454畦畔北西沿いは T.P.+3.26m、調査区北辺西端の区画が最も低く、T.P.+3.14m である。

水田遺存部分の北東と南西には微高地があったようだが、調査区北東隅の 529溝と、調査区南西隅の438溝は、その微高地を南東から北西に伸びる水路と思われる。438溝は、幅約0.7m、深さ 0.13m で、そこから 2.5m 北東の段差は第８面で斜めに走る 334溝が検出された位置である。529溝は、幅約0.7m、深さ 0.15m で、第８ｂ面相当の東西溝に切られる。どちらも遺物は出土していない。

第８・10-1層包含遺物（図37） 第８層から第10－１層は、最も地震変形が激しく、第10－１層も多くの部分で上層の沈下が層下面近くまで達していた。そのため、第10－１面調査後に掘削したものにも第８層の沈下部分に包含された遺物の混入が予想されたので、「第８・10-1層包含遺物」として取り上げた。結果を見ても、かなり上層の遺物が混入していると思われる。

破片数で見ると、弥生土器１、サヌカイト製石鏃１、土師器34｛把手１、坏２、小皿７、羽釜２｝、埴輪２、須恵器15｛甕体部すり消しなし１、壺５、坏９（古墳後期身３、蓋３、飛鳥身１）｝、黒色土器Ａ類椀１、瓦器椀４、瓦質土器３ ｛甕１、三足羽釜１、鉢１｝、土師質平瓦１、木杭１、である。実測可能なものは以下の３点であった。

図37－１はサヌカイト製石鏃である。大型の長三角形有茎式である。剥片時点のネガ・ポジ面を比較的広く残すが、ネガ面の打点が茎部方向からなのにポジ面ではほぼ 90度打撃方向を変えている。ネガ面では鋒部付近のみ大きめの成形の剥離が見られ、その後刃部は押圧剥離で形成しているが、ポジ面は身部半ばまで成形の剥離が入る。一部を欠くが重さ 5.0g である。風化度は弱い。

図37－２は土師器小皿片である。内面調整不明、外面も磨滅するが、底部ユビオサエ後粗いナデ、口縁部ヨコナデである。胎土にはわずかな長石・石英が見られるが、0.5㎜以下で角閃石も認められた。この形態の小皿は、黒色土器小皿の影響を受けたものと思われ、10世紀後葉から 11世紀初頭に多い。

図37－３は須恵器坏身片である。内面は、底部直線ナデ後、回転ナデ、外面は上部回転ナデ、その下に１条回転ケズリ、底部回転ヘラ切りである。外面受け部以下に降灰痕あり。６世紀後葉のものである。

全体で見れば、第８ｂ面相当遺構の出土遺物は、第８層の耕作期間に入り、第８層の上限が少なくとも 11世紀後半までは遡る事を補強する。しかし、先述のとおり、その上限が 10世紀後葉まで遡るなら、これらの遺物のうち、図37－２の小皿や瓦器椀は第10－１層の遺物ではない事になる。黒色土器Ａ類椀も疑問が残る。瓦質土器は第６層包含遺物の可能性さえ残る。63片中17片、約27% が上層の遺物と思われ、地震変形による包含遺物の混乱が軽微なものでない事を示している。

それらを排除して第10－１面小区画水田の時期を考えるのは難しいが、第10－２面遺物と考え合わせると、古墳時代中期から飛鳥時代頃と思われる。また、面や遺構はないが、上層に若干遺物が含まれる奈良時代にも人の活動が見られた事は否定できない。

小結　最古の条里制地割り床面と、それ以前の小区画水田を同時に検出したが、それゆえに周辺の既往の調査で第９層とした層が、内実は第８ｂ層であり、洪水堆積層である事が明瞭になったと言える。繰り返して言うが、溝のみで畦畔を伴わない坪境などありえないのである。

02－１・06－２調査区でも「９面」で坪境の溝が検出されている。440溝の続きの A120溝、461溝の続きの B66溝である。十七ノ坪の状況もほぼ共通する。「10面」では本調査区南西端の微高地とその上の 438溝の続きが、A391微高地と A140溝としてあり、その微高地には古墳時代初頭から奈良時代の遺構が集中する。その東の低地では、454畦畔の続きが B109高まりとして検出され、やはり幹線的

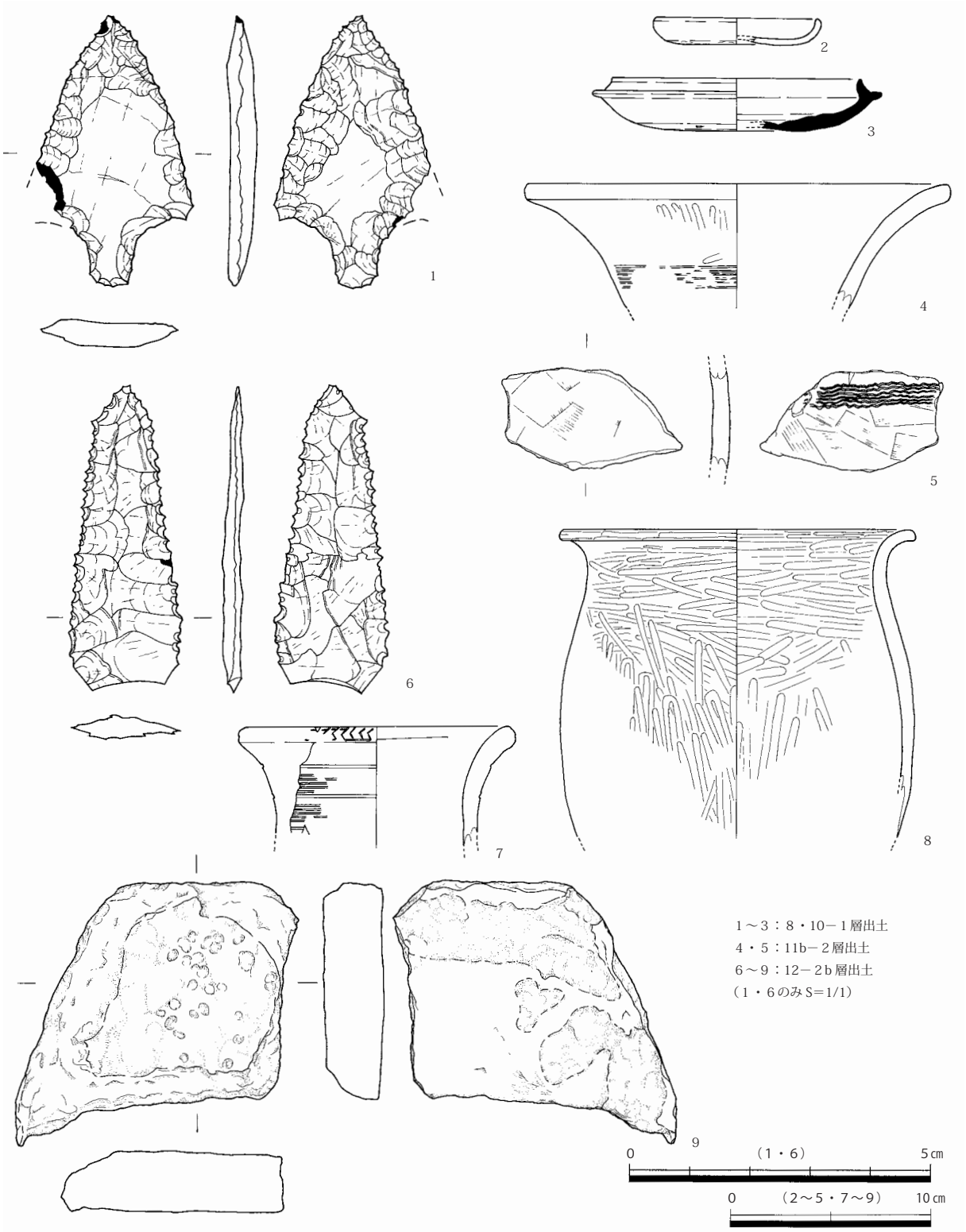


図 37　第８・10‐１層～第 12‐2b 層　包含遺物

な大畦畔のようだ。その東には本調査区では検出されていない B106溝が南西から北東に走るが、強いて言えば本調査区第10‐２面の 837溝につながるか。低地には痕跡程度だが畦畔が存在していた。07‐２調査区でも、面の広がりが限定的で、若干の混乱があるが、北側の「９面」が第８ｂ面に当たり、「10-2a 面」では第10‐１面に対応する微地形が検出され、低地に小区画水田が遺存している。

第８ｂ面相当の遺構は、第８層耕作期間での耕地区画の変遷をうかがわせる資料となった。ただ、D

種と分類した土坑は、切り込み面の認識が難しい上、周辺既往の調査で、第８面でも同じような土坑が検出されている例があり、以後も検証が必要なように思う。

小区画水田は、検出範囲が限られたが、自然地形に合わせた水田としては最も新しく、古墳時代中期から飛鳥時代のものと思われる。当遺跡で微高地の遺構集中域から古墳時代初頭から奈良時代とされる遺構面の中で、低地は場所により期間がより限定される遺構面が存在する可能性が指摘できる。

第10項　第10－２面（図38・図版16－１・２）

耕作土層第10－１層の床面であり、第10－２層は自然土壌層である。第10－１面の小区画水田が部分的にしか遺存せず、その不明な部分が多いため、この面でそれを若干でも明らかにする事を期待した。その結果、第10－１層を耕作土とした耕地は当初と最終の水利体系と区画が異なる事が判明した。

特徴的な遺構は、耕地区画の床面と思われる、方形基調の、底の平坦な落込と、それらをつないで伸びる溝である。深い 754・863・882・883土坑などは、上面で検出できなかった第８ｂ面相当遺構のE 種と思われる。866溝も同じ面帰属の遺構のようである。

水利体系　給水は南東方面からなされていたようで、954・999溝が見られる。954溝は T.P.+3.4m 台の所を底面 T.P.+3.30m 前後で同じ高さの 952落込まで北進する。999溝は東側の T.P.+3.5m 台の部分の南端で底部高 T.P.+3.43m だが、北西に下り 930溝から T.P.+3.30mの 957落込につながり、956溝で954溝と合流する。930溝は底部高 T.P.+3.36m ほどで屈曲しながら北進し、937・904落込につながるが、937落込の底部高は平均 T.P.+3.30mで、904落込は T.P.+3.46m なので 930溝からは給水できない。

903・904落込は東側から張り出した T.P.+3.5m 台の地形にのり、903落込が底部高 T.P.+3.52m と最も高い。その南の 923落込は T.P.+3.41m である。889溝は 903落込と T.P.+3.42m の 888落込をつなぐ。その北西に隣接する 887溝は南西が T.P.+3.36m、北東が T.P.+3.30m である。

954溝がつながる 952落込からは、789溝が北西に伸びる。T.P.+3.4m 台の場所で底部高 T.P.+3.31mで、T.P.+3.2m の部分に至り屈曲し、第10－１面454畦畔の南東沿いに南西に延び、底部高 T.P.+3.13mの 775落込に至る。その北東の 837溝は北東が TP.+3.33m、南西が T.P.+3.13m である。その西の 770溝は、T.P.+3.2m 台の所にあり、東部分が T.P.+3.02m とやや深いが、西は T.P.+3.12m で、底部高T.P. ＋3.02m と最も低い 768落込につながる。その南の 788落込は T.P.+3.07m である。調査区東端はT.P.+3.6m 台と最高所だが、その北東隅に 873・874.・875 と３本の溝が南東から北西に走る。

全体に、東が高く、北西に窪む地形だが、999溝の南東端が削平で不明瞭になるように、東は削平が強く、一番高い耕地区画である 903落込につながる水路が元はあったと思われる。954溝は高低差のないラインを伸び、この付近以南では、排水を受ける溝であった可能性がある。その続きの 789溝は第10－１面小区画水田の凹地の中軸線を通り、排水の溝であろう。そして北西の最低所に至る前に 454畦畔のラインで曲がり、まだ高い若干高い南西部分に水をまわす。887溝や北東隅の溝群は、調査区の北側にまだ耕作地の広がる低地がある事を示唆している。

903・904・923・937落込は、第10－１面の凹地の北東斜面にあり、元々は等高線状の細長い耕地区画が並んでいた事を示す。より正方形に近い形に改変されていったのであろう。それに比べ北西の768・788・775落込は、第10－１面の区画と共通する部分が多く、この付近から北西が、より高低差の少ない低平な地形であったことを推測させる。

第10－１面では水路が検出されず、畦畔越しの給排水が行われたと考えられるが、この面では水路が

あるのが大きな違いである。それでも分岐・合流が多く、深い溝でない事は、これらの溝が幹線的な水路ではない事を示し、それがこの水路網が廃絶した理由と思われる。幹線水路は北東隅の 874溝が、幅約1.7m、深さ約0.3m なのでふさわしい規模のように思える。

また、溝の配置と微地形から見れば、調査区南西側や、903落込より北東側は、元から耕地区画がなかった可能性が高いと考えられる。

ピット列　散在するピット・土坑の中で、列状に並ぶピットがわずかに見られた。

930溝の西肩部沿いに、938 ～ 941 ピットが一直線に並ぶ。938 ピットは径0.35m、深さ 0.13m、そこから心々距離で 1.4m 南に 939 ピット、径0.4m、深さ 0.08m、南に 1.8m で 940 ピット、径0.32m、深さ 0.1m、南に２m で 941 ピット、径0.5m で深さ 0.18m である。埋土は第10‐１層に似て、柱痕は確認できないが、なんらかの構造物があったと思われる。また、その南で 930溝南西肩部沿いの 979 ～ 982 ピットも、規模・間隔が一層ばらつくが、ピット列として直線に並ぶ。

第10‐２面遺構及び第10‐２層出土遺物（図33）　遺構出土遺物は非常に少ない。破片数では、770溝から弥生土器１、837溝から土師器甕４、874溝から須恵器提瓶１、904落込から須恵器古墳中期坏蓋１のみである。実測可能なものも１点のみであった。

図33‐６は 874溝出土、須恵器提瓶片である。内面は粘土接合痕を残し、回転ナデ、粘土円板部分にはユビオサエが残る。外面はハケ後カキメだが、なぜか同心円文タタキが一部に残る。把手はユビナデで成形し、屈曲した下面はヘラ切りで平坦な面を作る。胎土はやや陶邑産とは異なる感じがする。把手が退化せず、実用性のあるものである事から、６世紀中葉頃のものか。

第10‐２層に包含される遺物も少ない。破片数で、弥生土器16｛甕13（ハケ 12（生駒西麓産６）、底部１）｝、土師器４ ｛甕１（庄内？）｝のみである。

以上から第10‐２面、及び第10‐１層の小区画水田の時期を考えると、須恵器の破片から、古墳時代中期から後期の時期が押さえられる。834溝の土師器甕に布留式的なハケメの破片があるのも矛盾しない。飛鳥時代の遺物はないが、下限は不確定である。上限に関して言えば、第10‐２層に土師器らしき破片が含まれ、第10‐１層の小区画水田は、古墳時代前期に遡る可能性は低く、当遺跡でしばしば見られる古墳時代前期の遺構面は、本調査区内には遺存していない可能性が高い。

小結　この面の調査で、第10‐１層の小区画水田の変遷が考えられるようになった。水路の廃絶や、等高線状の細長い区画から、正方形指向の区画への変化がある。

時期的には、この水田はほぼ古墳時代中期から後期に限られるようで、上層包含遺物に見られる飛鳥時代から奈良時代と、当遺跡でしばしば見られる古墳時代前期との、遺構・遺構面は不明である。第10‐１層上下の面は、当遺跡では層が収斂する微高地上の遺構出土遺物により、古墳時代初頭から奈良時代とされるが、本調査区で低地では場所によって、時期がより限定された遺構面が存在する可能性を指摘できた。

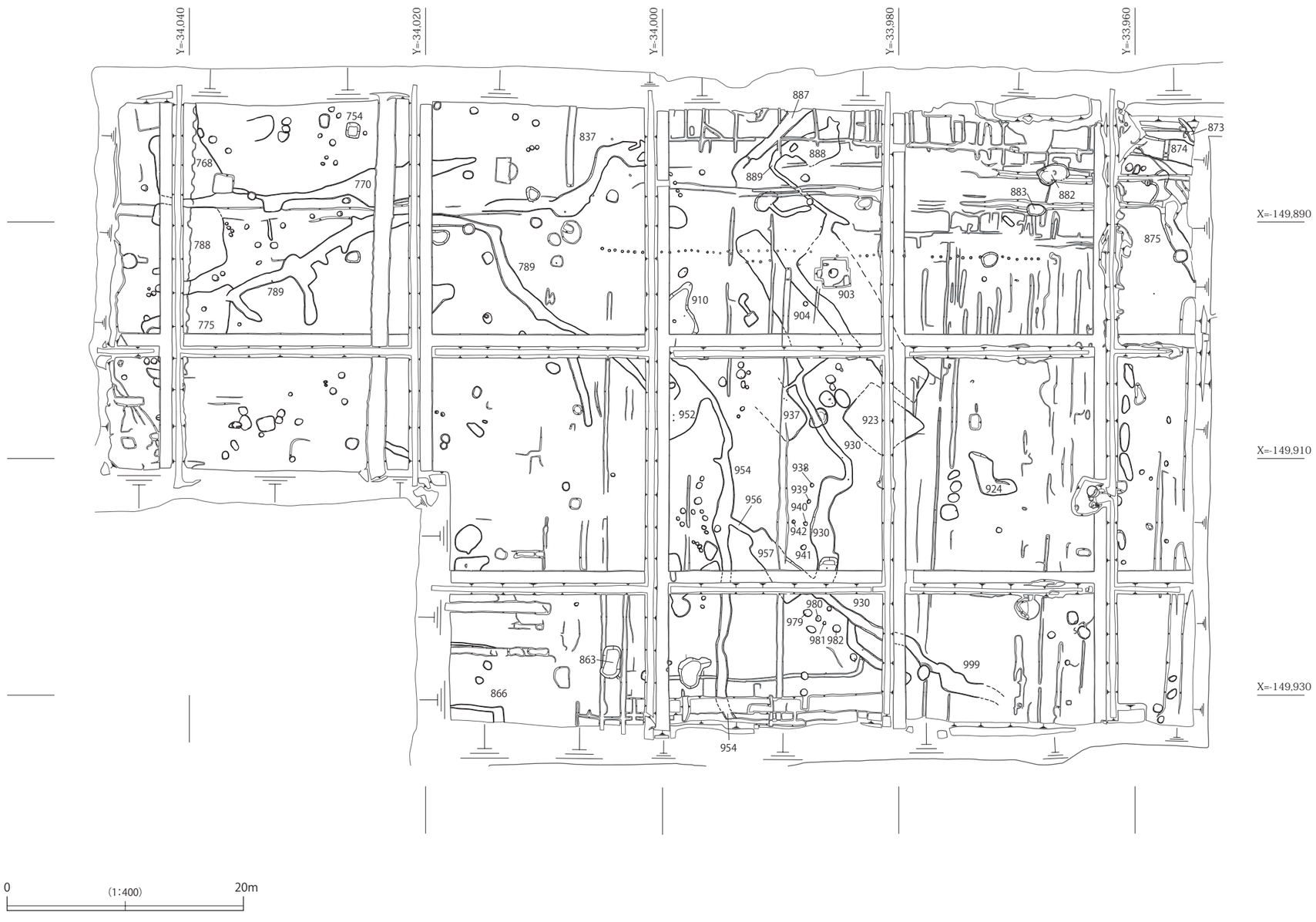


図 38　第 10-2 面　全体図

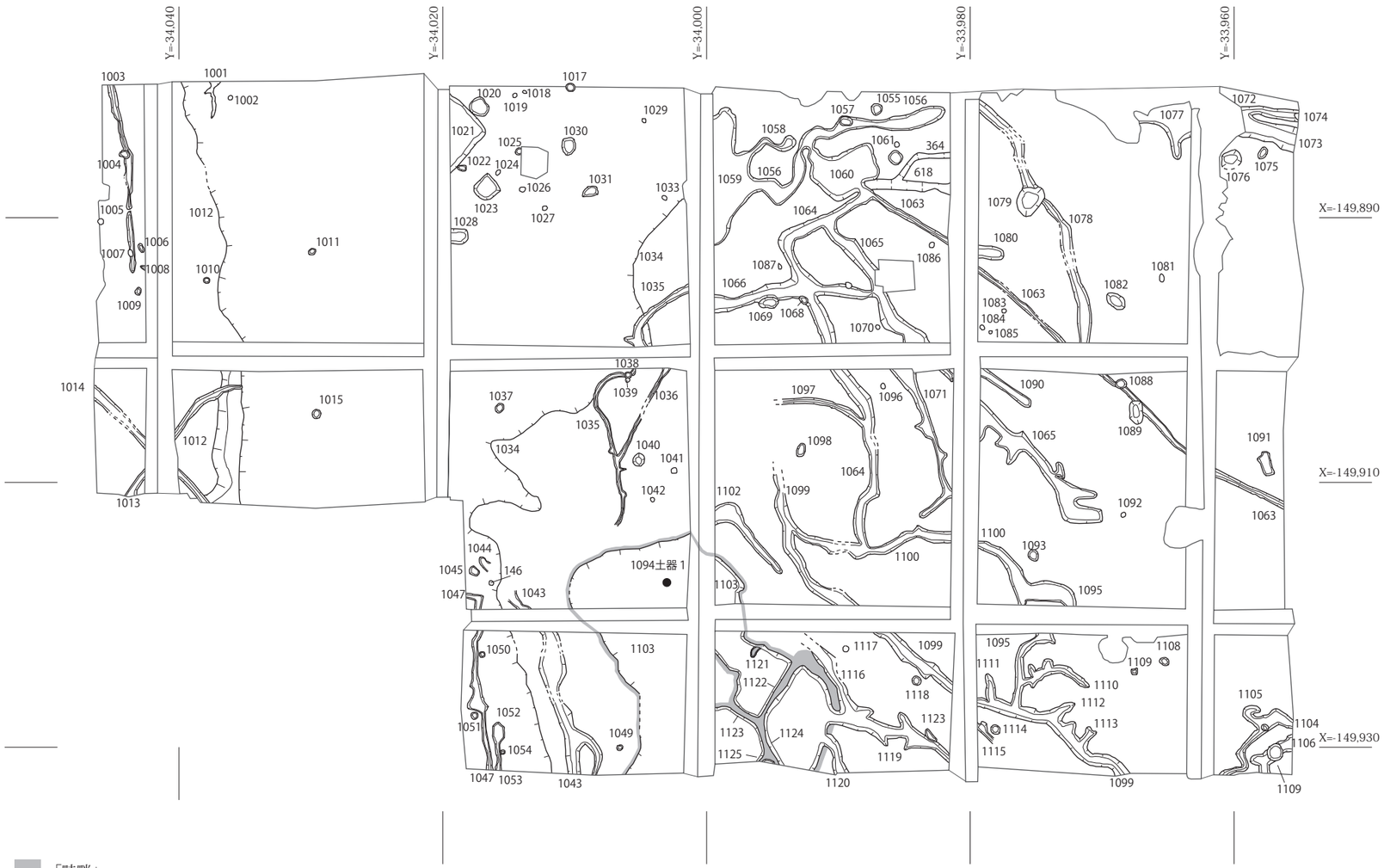

Y=-34,040
Y=-34,020
Y=-34,000
Y=-33,980
Y=-33,960
X=-149,890
X=-149,910
X=-149,930
「畦畔」
0
(1:400)
20m

図 39　第 11 面　全体図

第11項　第11面（図39・図版17－１・２）

当遺跡では本来弥生時代後期の耕作土層があり、その上面を11面とするが、本調査区ではその耕作土層の大部分は失われ、床面に残る自然土壌層の上面が第11面となった。調査区南端の一部の凹地（1103落込）にかろうじて耕作土層である第11層が遺存し、その中の一部で畦畔も検出された。調査区西半にも幅16～40mほどで南北に抜ける低地が広がるが、そこには耕作土層の第11層は遺存せず、畦畔も検出されない。凹地以外には主に溝が見られる。これらの溝は面の高さとの関係とその分岐・合流のしかたから、耕作地の給排水の溝と思われ、溝に囲まれた範囲に耕地区画が存在した可能性が強い。つまり、耕作土層床面が検出されたような状況である。

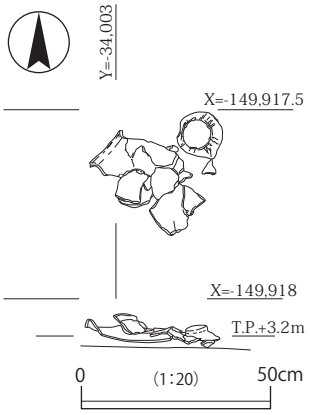


図40　第11面　1094
土器1　出土状況

1103落込及び小区画水田　1103落込周辺はT.P.+3.24～3.28mほどで、北西はT.P.+3.43mとやや高い。落込内には暗色化した水成層が堆積していたが、西半部でそれを徐々に下げると、下部に暗緑灰色の土壌層が現れた。耕作土層の第11層と思われたが、西半部では畦畔は検出できなかった。東半部でようやく畦畔を検出し、少なくとも４区画はある小区画水田が存在していた事を確認した。

水田面は北端部分が一番高く、T.P.+3.17m、その南東がT.P.+3.14m、東端がT.P.+3.10m、その西がT.P.+3.08mである。西半は畦畔が検出できず、耕作土層上面の高さに疑問はあるが、平坦な面では北東側がT.P.+3.17m、北西がT.P.+3.23m、南側がT.P.+3.18mほどにまとまる。落込には南東から1119・1120溝が取り付き、この落込への給水の役を果たす。溝が取り付く区画より高い区画もあるのが疑問である。排水経路が不明だが、おそらくは落込南西側調査区外方面に排水するものと思われる。

1094土器1（図40・図版18－３）　調査区西半の1103落込内で、北側肩部から下った、平坦な耕作土層上面で弥生土器甕半個体が出土し、1094土器１とした。この面で唯一図化可能な遺物である。底部片は外面を上に向け、その南西側に胴部から口縁部の破片が平たく潰れた状態で出土した。ほとんどの破片は内面を上に向け、横置状態で割れた後、外面が上を向いた破片が失われたような状況である。

図41が1094土器１である。内面はユビオサエ後ナナメナデ、口縁部はヨコナデである。外面は上半右が左を切る右傾タテハケ後、下半タテミガキ、頸部から口縁はヨコナデで、口縁端部面に刻み目、その面はわずかに上方に拡張されている。底部外面は粗いナデである。外面は最大径付近から底部より７㎝ほど上までの範囲で煤付着、内面は底部から７～２㎝の範囲に炭化物付着。胎土内砂粒で最多は角閃石で、黒雲母もあり、生駒西麓産である。外面ミガキ甕は河内Ⅱ様式からⅤ－２様式までであり、その中で口縁端部面を上方にも拡張するのはⅣ様式的傾向で、河内Ⅳ－１～４様式にありうるが、生駒西麓産は古色を残すのでⅤ様式前半まで入る可能性もある。従来の第11面の時期より古い時期を示す遺物である。耕作土層の第11層は、既往の調査で部分的に２層に分かれる事が知られ、1103落込内第11層が、その下層であれば、弥生時代後期前半頃まで遡る可能性はある。

溝から推測される耕地区画　この面の溝は、長いものは南東から北西に伸びる傾向があり、微地形や溝底部高から見て、それが水の流下方向である。溝の所々に短い突出部分があるが、これは水口の痕跡ではないかと考えられる。調査区中央付近で、溝にはさまれた部分は、多くが北東の溝が高く、南西の溝が低い傾向にあり、北東の溝から給水し南西の溝に排水する形があると考えられる。その部分の平面形は、直線的な溝の交差・屈曲に囲まれ細長い方形状になるものと、彎曲する溝の分岐と合流に囲まれた

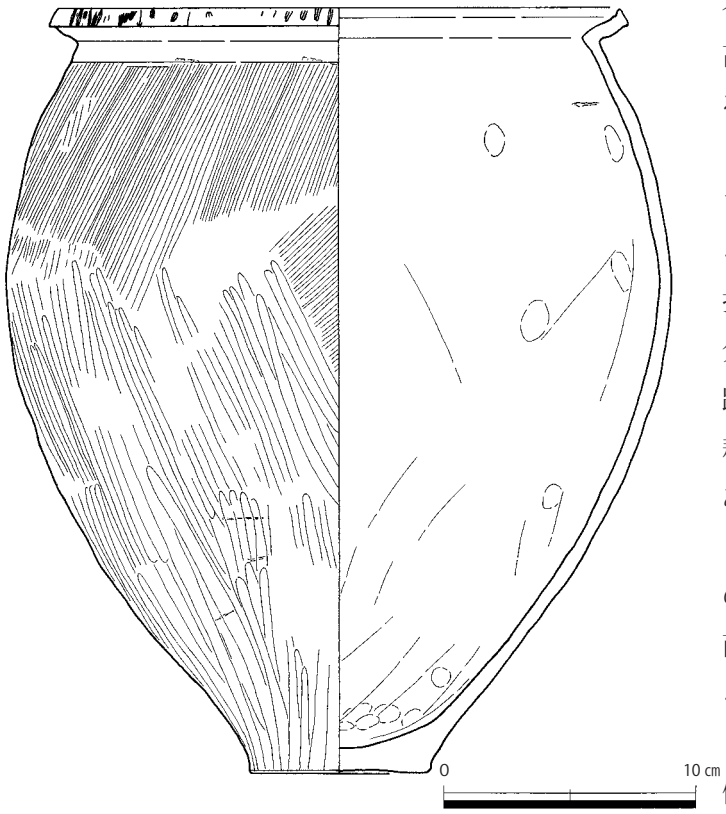


図 41　第 11 面　1094 土器 1

不整形な形がある。これは緩傾斜面を等高線状に分割しながらも、不整形な区画をはさみ自然地形との調整をつけていると考えられる。さらに個々の範囲で、高さの異なる平坦面が複数存在する所もある。高さが変る部分に畦畔が存在したと推測される。また、平坦面の溝沿いの部分だけがやや高い場合もあり、畦畔の痕跡ではないかと思われる。それらを元に耕地区画を想定復元したものが図42 である。

調査区東端付近は全体的に高く、その中でも高い部分を通って 1063溝が北西に伸びるので、これが主な給水路であろう。そこから南西へは溝ごとに低くなり、溝間では南東の区画が北西より高い傾向がある。1303落込の北東側で 1099 溝が落ち水を受ける構造になっている。1063溝より北東側は 1078溝の両側に、北西に段落ちする区画が並んでいたようである。

西半の低地の東肩は、南側の 1103落込との間が高くなるが、それより北側は東より低い。1035・1043溝はその低地肩部に開口する。低地内には Y= －34,020 ラインよりやや西に深めになるラインがあり、耕作土層や遺構を流失させた浸蝕があったようである。そのため畦畔・耕作土層は遺存しないが、1047溝・1021落込などは耕地区画の痕跡と思われる。低地の西肩が調査区西端付近にあり、その西にも溝が見られるが、肩部から西に徐々に高くなる緩斜面で、溝の形からも耕地区画を推測するのは難しい。

おそらく幹線的な水路は調査区よりやや東にあるのだろう。微高地が存在し、その上を通っていたと考えられる。その水路から段階的に分水し、この部分に給水したと思われる。低地部分にもわずかな痕跡があり、溝が肩部で開口するので、耕作地があったと思われる。

第11・11ｂ層包含遺物（図37） 第11層は自然土壌で、第11ｂ層と明確な層境を持たない。そのため、やや強めに掘削した部分から出土した遺物を「第11・11ｂ層出土」とし、その下から出土した遺物を「第11ｂ層出土」と分別して取り上げた。第８層以下の地震変形は第11ｂ層上部にまで及ぶが、変形の度合いは緩くなってきており、上層の沈下による遺物の混入は少ないと見られる。

破片数で見ると、第11・11ｂ層からは、弥生土器７（２）、サヌカイト製チップ１、礫１、第11ｂ層からは、弥生土器44（39）{生駒西麓産甕24（ミガキ 11、ハケ７、タタキ１）、壺17（15）{広口壺４（２）、以下全て生駒西麓産で、櫛描直線文３、波状文１、底部１}、サヌカイトチップ２、である（カッコ内数字のみは生駒西麓産胎土のもの）。実測可能なものは以下の２点のみであった。

図37－４は第11ｂ層出土の弥生土器、広口壺口縁部片か、器台裾部片である。内面から口縁端部は磨滅で調整不明、外面は櫛描直線文が１帯、タテミガキが見られるが、わずかに横位のミガキもある。胎土に角閃石は入るが多くなく、黒雲母を欠くので河内低地産か。広口壺とすれば河内Ⅱ様式のものだ

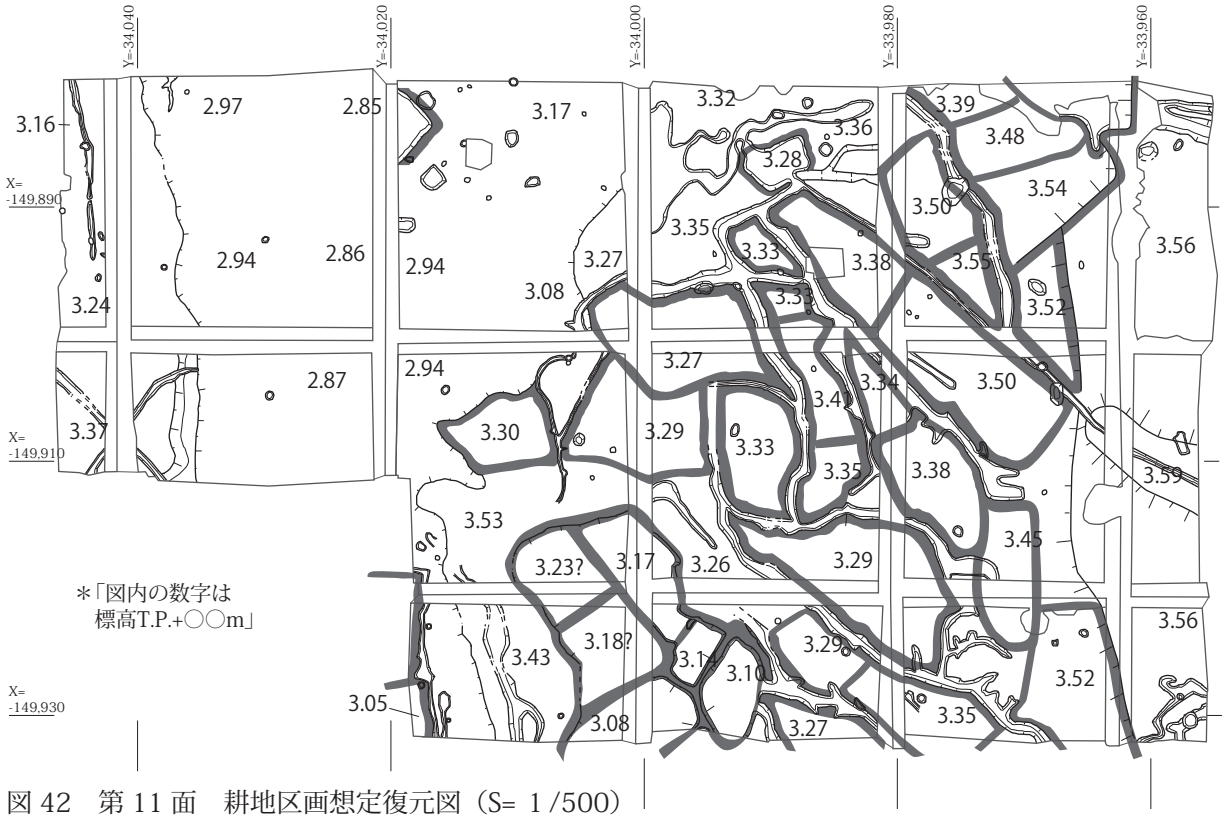


図 42　第 11 面　耕地区画想定復元図（S= 1 /500）

が、その場合口縁付近外面のミガキはヨコミガキの場合が多い。器台だとすれば、凹線文の入る河内Ⅳ様式より後の河内Ⅴ－０様式頃か。器台なら櫛描文の位置から裾部の破片と思われる。

図37‐５は第11ｂ層出土の弥生土器か。壺胴部片である。内外面ともハケ後ナデで、外面には波状文が１帯入り、煤が付着する。胎土には細粒でも角閃石・黒雲母があり、生駒西麓産である。波状文の振れ幅が少なく、櫛描直線文とセットにならないので、弥生時代中期のものではなく、庄内式土器の可能性もある。その場合は上層からの混入と考えるべきかと思われる。

全体に見ると、図37‐５を除き、古墳時代以降の遺物は皆無となる。弥生時代中期の遺物が多いのは下層の影響か。わずか１片ながら弥生時代後期と見られるタタキ甕が存在し、図37‐４も後期の遺物の可能性がある。これらから第11面は弥生時代後期初頭以降と考えられ、第11面1094土器１を後期前半にありえると見れば。耕作土層の 11‐２層相当、弥生時代後期前半頃の時期が示される。いずれにしても遺物量が少なく、結論にはいたらない。

小結　耕作土層の第11層がほとんど遺存していなかったため、弥生時代後期後半面としての第11面の最終形態は把握する事ができなかった。既往の調査での弥生時代後期の水田面はほとんどが幹線的水路のみが走り、耕地区画間の水回しは水口による畦畔越しのものである。しかし、それらの調査でもしばしば床面で、耕作土層上面では見られなかった溝が検出される事がある。その形態が本調査区では検出され、それに基づく耕地区画の想定もできた。ただし、それは当初の形態か、それ以降のものも混在しているのかは不明である。

02‐１・６‐２調査区では、11面で本調査区西半の低地の続きが検出され、そこに寸断されながらも畦畔が遺存し、この低地が耕地化されていた事を証明している。しかし、本調査区西端につながる微高地の上面は不明な部分が多い。その西側にも低地が見られ、畦畔が検出され、その南の微高地にも畦畔らしき「高まり」が見られる。11b 面には低地・微高地双方で溝が散在し、密度は低いが本調査区の状

況に似る。07－２調査区の 11面では、遺構から庄内式から布留式の遺物が出土するが、それらの落込や土坑が、溝を切るものが多く、遺構の切り込み面に疑問があるように思える。溝出土の遺物は弥生時代後期後半にまとまるのと対照的である。

第12項　第12－１面（図43・図版19－１・２）

この面の地形は第13－２面で形成され、踏襲されてきたものである。また、幹線的な水路や、微高地縁辺の大畦畔、人工的な堤防などが見られ、耕地区画を成す小畦畔も確認できる。しかし、この面を第11ｂ層で埋没させた洪水のため、大小様々な浸蝕を受け、遺構の遺存度は良くない。ただ、第11ｂ層の洪水の途中で堆積した粗砂層が、この面の流路や水路から破堤して堆積したもので、第11ｂ層内の「失われた遺構面」の遺構・流路ではない事が証明できたのは大きな成果である。

第11ｂ層の浸蝕痕　基本層序で述べたが、池島Ⅱ期地区の、既往の調査での第11ｂ層のほとんどは一回の洪水による堆積層である。本調査区では下半の溢流堆積的な様相を見せるシルト層の第11ｂ－２層と、上半の破堤堆積的様相を見せる細砂～中砂層である第11ｂ－１層、それらの間に様々な層準ではさまり、下方浸蝕し、上面も盛り上がるクレバススプレー堆積の粗砂層からなる。

本調査区でのクレバススプレー堆積の代表的なものは、1130流路から低地２へ流れ出し、1142浸蝕痕を残して堆積した粗砂層である。1130流路から、右岸の 1302人工堤防と微高地２との接合部で破堤し、低地に流れ込むが、堤防部分を破壊する前に、微高地・堤防を越えて流れ込んだ北東部分を深くえぐる（図５・６の 110・139、図版20－４・５）。そして、低地２内を下方浸蝕しながら北上するが、下方浸蝕が激しくない部分では、それより先に堆積した第11ｂ－２層が残る（図６の 111）。破堤部分より南からは 1302人工堤防の東側で低地２を浸蝕した 1144浸蝕痕の砂層が北上してきている。その部分では砂層内に地震変形が見られる（図版18-8）。

しかし、低地２が第14－２面から第13－２面まで 1609流路であった旧流路由来の低地で、これらの浸蝕痕が 1609流路の埋積層にまで達している事から、本調査区のように流路からの破堤部分が確認できないと性格が分かりにくく、06－２調査区では流路と誤解し、B197流路としている。

もう一つの大きな浸蝕痕は調査区西端低地３内の 1129浸蝕痕である。これもクレバススプレーで粗砂が堆積する（図５の 98）。底部には流木の枝がえぐったような痕が多く見られる。低地３は第14－１面以来、繰り返し浸蝕され、08－２調査区の 14面691流路・13面646流路などの左岸から破堤したクレバススプレーの通り道であった。しかし、低地３の浸蝕の弱い部分には第12－１・２層が残存し（図５の 158）、この面でも第12－２面でも水田が確認され、1129浸蝕痕は第11ｂ層が堆積する洪水の際、浸蝕されたものである。しかし、その 1129浸蝕痕は 02－１調査区では「11ｂ層中Ａ509流路」、07－２調査区でも「第11ｂ層流路」、05－２調査区でも「第12面285流路」と誤って認識されている。

1146溝・1145・1147畦畔の水路からも第11ｂ層の粗砂層が溢れ出している。この水路自体も南半は粗砂層で埋積するが、調査区中ほど 1153水口から流出した粗砂が、第11ｂ－２層下半で北東方面に平らに広がる。その後、第11ｂ－１・２層境の層位で、ほぼ同じ位置から 1147畦畔を越えて北西に直線的に伸びる粗砂層が堆積する（図６の 113・114、図版18－６・７）。この面で 1169浸蝕痕として痕を残し、1178畦畔を切り、低地２に落ちていく。これのみを見ると溝状で、第11ｂ－２面の遺構状に見えるが、第12－１面の水路から流れ出し、第11ｂ層の洪水途中のものであると理解できる。

それ以外にも第11ｂ層堆積時の浸蝕は多い。微高地２上の 1143落込も、元は 1302人工堤防上を伸

図 43　第 12-1 面　全体図

びてきた1207溝が浸蝕を受けたものの可能性が高い。畦畔が途切れるのも小規模な浸蝕であろう。面が細長く緩く窪む部分も多く、本来の平坦面の高さを認識するのが困難になっている。

1142浸蝕痕から若干の遺物が出土している。破片数で、弥生土器22｛甕１、壺２（長頸１、沈線文１）｝、サヌカイト製チップ１である。実測可能なものはなかった。

1130流路（図５の120～122、図版20－６） 本調査区内この面で唯一の流路である。元々は第14－１面1610溝を端緒とし、その面で浸蝕された後、第13－２面で、1609流路から流路変更し1258流路となり、第13－１面から第12－２面への前後は流れがなくなり低地のような状況になったが、第12－２面からまた、ラミナのある層が堆積し始める流路である。平面的にもこの面では蛇行が強く、流量がさほど多くない流路のようだ。規模や、途中低地化する状況から、河川本流というより、網状河川の分流のようなものではないかと推測される。

肩部は二段落ち状で、幅約６ｍの上段の中に、より蛇行の強い幅約2.4mの落ちがある。調査区南端から破堤部分までは深くえぐられ、本来の深さは不明だが、それより北側の底部高は、南がT.P.+2.12mほど、北端がT.P.+2.00mほどと緩く北に傾斜する。流路内の数ヶ所に流木があるが、粗砂層内で、第11ｂ層堆積の洪水時に入ったものであろう。遺物は出土していない。

1302人工堤防・1207溝　その1130流路の東岸を調査区南端付近で塞ぐのが1302人工堤防（図版23－２）である。第13－１層時点で初めて盛土されるが、その時点では1130流路底部と低地２の高低差は70㎝以下で、流路変更したばかりの流路から低地に水が溢れやすい状態だった。それで微高地２と調査区南外の微高地をつなぐように堤防が築かれ、低地２の耕地の安定化を図ったものか。第12－２層時点でも盛土がなされたが、結果としてこの面で微高地２との接点を洪水に破壊される。流路側側面も浸蝕されたようで本来の幅は不明だが、残り良い南端部分で幅約4.7m、上面の高さT.P.+2.94mである。北側はT.P.+2.85mほどの部分が多いが、その高さは微高地2最高所が1143落込西側の南端で、T.P.+2.82mであるのと整合する。

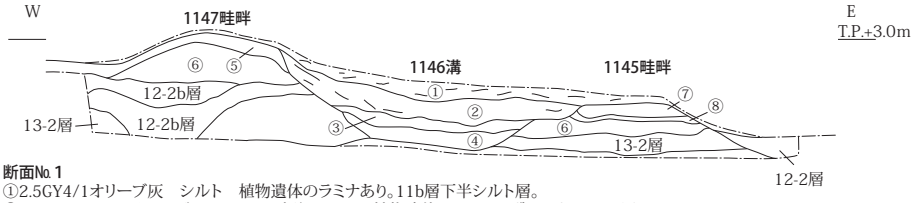
堤防の上には1207溝が走る。かなり浸蝕されるが、調査区南端で幅約1.4m、深さ約0.2mを測る。これは北側の微高地２上へ水を供給する水路と考えられ、1143落込が、浸蝕により形が崩れた、この溝の続きの可能性がある事は先述した。微高地上も耕地化されていた事の一つの有力な証拠である。

1146溝・1145・1147畦畔（図44・図版20－７～21－４） 調査区南辺東端付近から北西に伸び、途中屈曲し真北に抜けていく、大畦畔を伴う水路である。微高地１の東縁部を画する。

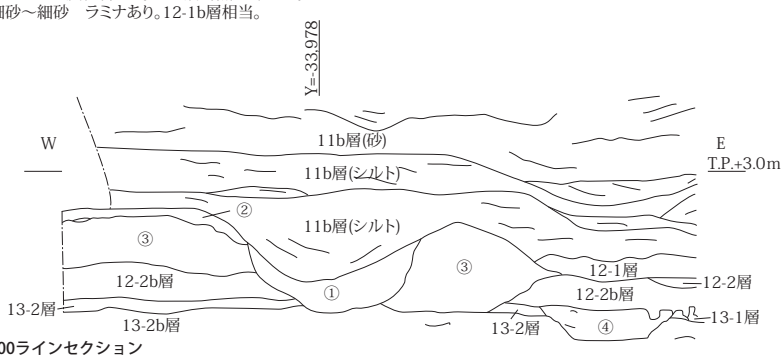
1146溝は幅２ｍ前後で、底部高は、屈曲部分から北はT.P.+2.53～2.56mで安定するが、南東部分はT.P.+2.46mほど、南端ではT.P. +2.36mほどで、南東部分は第11ｂ層堆積時に浸蝕を受けたか。溝機能時堆積と思われる止水堆積層は図44の断面No. １の③・④、X=－149,900ラインの①のみで、この水路から粗砂系第11ｂ層が溢れ出した部分より南東側には第11ｂ層の埋土しかない。

1145畦畔は場所により幅3.7～0.8mと規模が変る。1147畦畔も幅1.2～0.5mと同じ状況である。低地１に面した1145畦畔の方がやや大きい。高さはどちらも南東側最高所で約T.P.+3.2mで徐々に北に低くなり、北端付近でT.P.+2.6mほどである。断面で盛土を見ると、第13－１面の水路と重複する部分もあるが、第12－２層時点で作られ、第12－１層時点で盛土を追加する部分が多い。断面No. １では、第12－１層時点盛土下に唯一洪水堆積層の第12－１ｂ層が確認できた。

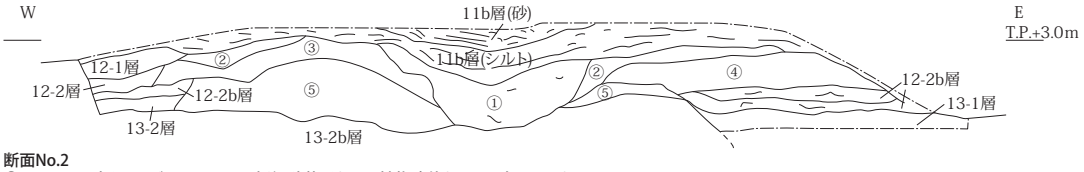
この水路は屈曲部分南側で、低地１側に1153水口が開く。その部分は耕地区画にしては狭い区画があり、浸蝕で定かでないが、なんらかの施設か。水口と反対側の1147畦畔上には立ち木があった。そ



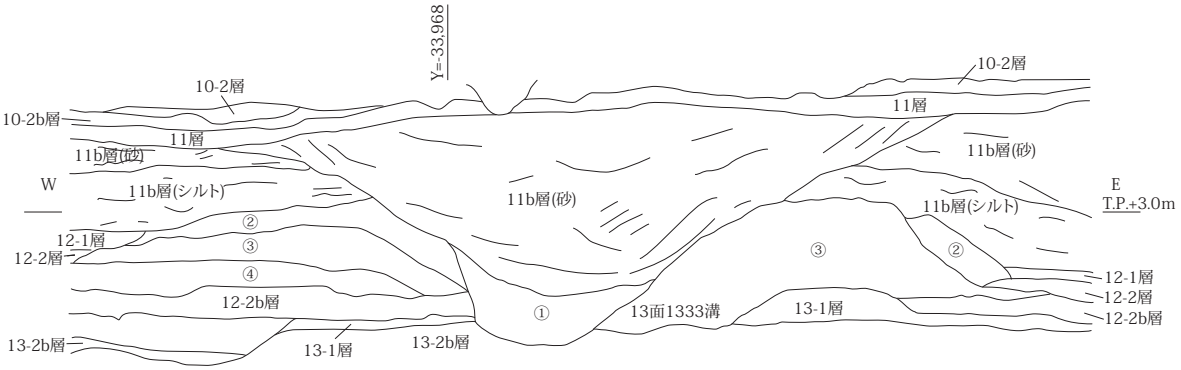
断面№1
①2.5GY4/1オリーブ灰　シルト　植物遺体のラミナあり。11b層下半シルト層。
②2.5GY4/1～3/1オリーブ灰　シルト～極細シルト　植物遺体のラミナわずかにあり。11b層。
③5GY5/1オリーブ灰　シルト　ラミナ見えず。溝機能時止水堆積か。
④10BG5/1~4/1青灰～暗青灰　シルト～極細砂　細砂若干あり　「10BG5/1～6/1青灰　シルト」の４～２cmの小ブロックわずかにあり。溝機能時止水堆積か。
⑤N4/0灰　粘質土　シルト主体　中砂～粗砂わずかにあり。12-1層時点畦畔盛土。
⑥N4/0灰　粘質土　シルト主体　中砂～粗砂若干あり。12-2層時点畦畔盛土。
⑦10G5/1緑灰　シルト　炭化物あり。12-1層時点畦畔盛土。
⑧N5/0灰　極細砂～細砂　ラミナあり。12-1b層相当。



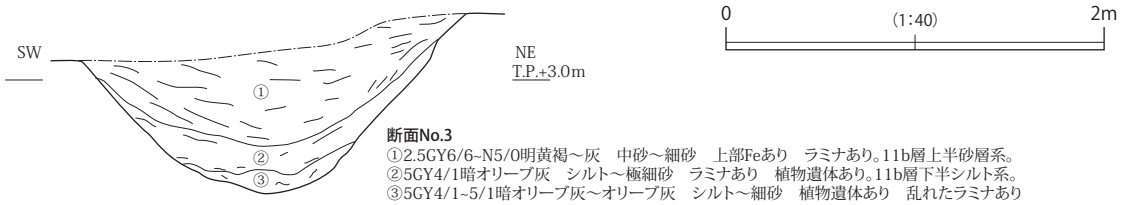
X=-149,900ラインセクション
①N4/0灰　シルト　「10BG5/1青灰　シルト」の５mm弱の小ブロックあり　炭化物あり　締まり悪し。溝内止水堆積。
②N3/0暗灰　粘質土　シルト主体　細砂若干あり　炭化物若干あり。12-1層時点畦畔盛土。
③5B4/1暗青灰　粘質土　シルト主体　細砂若干あり　炭化物若干あり。12-2層時点畦畔盛土。
④13-2層・13-2b層の混濁。13-1面1333溝埋土。



断面No.2
①2.5GY4/1暗オリーブ灰　シルト　極細砂若干あり　植物遺体あり　一部ラミナあり。
②7.5Y4/1灰　粘質土　シルト主体　中砂若干あり。12-1層時点畦畔盛土。
③N4/0灰　粘質土　シルト主体　中砂～細砂わずかにあり。12-2層時点畦畔盛土。
④10G5/1緑灰　シルト　炭化物あり。12-2層時点畦畔盛土。
⑤N4/0灰　粘質土　シルト主体　中砂～粗砂若干あり。13-1・2層時点畦畔盛土(1332・1334畦畔)



X=-149,920ラインセクション
①5B4/1～3/1暗青灰　シルト　微小なCaの結核・植物遺体あり　締まり悪し
②N4/0～3/0灰～暗灰　粘質土　シルト主体　極細砂若干あり。12-1層時点畦畔盛土。
③N4/0灰　粘質土　シルト主体　極細砂～中砂わずかにあり。12-2層時点畦畔盛土。
④5B4/1～5/1暗青灰～青灰　シルト　下部12-2b層の巻き上げあり　微小な植物遺体あり。12-2b層相当か。



断面No.3
①2.5GY6/6~N5/0明黄褐～灰　中砂～細砂　上部Feあり　ラミナあり。11b層上半砂層系。
②5GY4/1暗オリーブ灰　シルト～極細砂　ラミナあり　植物遺体あり。11b層下半シルト系。
③5GY4/1~5/1暗オリーブ灰～オリーブ灰　シルト～細砂　植物遺体あり　乱れたラミナあり

図 44　第 12-1・2 面　1145・1147 畦畔・1146 溝（水路）　断面図

こから北に 10m ほどの所では低地１側に 1150水口が、微高地１側に 1151水口が開く。1150水口では低地１が水路底部より低いが、浸蝕を受けているので原状は不明である。

この水路は低地１と微高地１の給水を行う幹線的な水路と見て良い、大畦畔からどちらにも枝状の小畦畔が伸び、耕地区画の基準ラインともなっている。

1146溝から生駒西麓産胎土の弥生土器甕片１が出土している。畦畔盛土内遺物は第12－２面で扱う。

微高地縁辺の大畦畔（図45・図版23－１） 微高地縁辺で大畦畔を確認した。図45断面でも①はブロック土であり、他もシルトに砂粒が入る攪拌された盛土があり、人為的な遺構なのは確実である。既往の調査ではなぜか「高まり」として自然地形のようにされる事が多い。これは福万寺Ⅰ期地区で、微高地が細長いものが多く、水路が走るのみの事が多かったため、「微高地には水田区画がない。」という思い込みができたためではないかと危惧する。沖積平野の微高地は、上部が平坦なだけでも人為が加わった可能性があり、まして微高地縁辺が細長く高まり状に残る自然地形形成は極めてまれであろう。さらに、微高地でも導水可能なら耕地化しない理由はない。1146溝の水路が微高地縁辺を通る事や、人工堤防上を微高地に向かう 1207溝の存在は、微高地上に水田を開発するための工夫と言える。

低地1　小畦畔の残りは悪いが、耕地区画の傾向はつかめる。水路屈曲部では、1153水口から 1152・1157畦畔までの部分は、耕地区画としては狭く、水の温度を上げる施設ではないかとも考えられる。1179・1158・1160畦畔が 1145畦畔と平行して直線に並び、その北東は南西より低い。水路と平行した畦畔を設定し、それを分割して方形に近い区画を作っているのであろう。1152畦畔が水路屈曲部分に合わせて弯曲するので、北側でも方向を変え同じような区画が続いたと思われる。小畦畔が途切れる部分から緩い浸蝕痕が北に伸びる事が多い。南東端は 1181畦畔の南東より少し上がり平均 T.P.+2.62m。1158畦畔の南西の区画は平均 T.P.+2.58m、北の小畦畔が検出されない部分は平均 T.P.+2.42m ほどである。

微高地１　東側は水路の 1147畦畔で画される。西側縁辺は南で 1162畦畔、北で 1165畦畔が縁辺を走るが、調査区中央で西に一段低くなり、上段縁辺は 1172・1175畦畔、下段縁辺は 1176畦畔で画される。1163畦畔南東側が T.P.+2.89m と高く、1162畦畔から北東は小畦畔・段差などが伸びるが、緩い凹地状に浸蝕される。1180畦畔西側付近も高く T.P.+2.83m ほどである。微高地中心付近の区画は T.P.+2.80m ほどだが、1178畦畔の北側、1151水口が開く区画は T.P.+2.92m とまた高く、調査区北端付近は T.P.+2.84m ほど。西の下段は T.P.+26.5m ほどで北西に抜ける緩い浸蝕痕の凹面がある。1178畦畔の南北で水路からの給水単位が異なる。方形に近い区画もあるが、不整形な区画が多いか。

低地２　ほとんどが 1142・1144浸蝕痕で削られるが、北西で 1171畦畔が遺存していた。そこの平坦面と、1142浸蝕痕をはさんだ東の平坦面は平均 T.P.+2.33m と高さが同じである。1144浸蝕痕の東には平坦面が残るが、北西に抜ける浅い凹地形があり浸蝕を受けている。加えて残存する土壌化層が第12－１層相当か第12－２層相当か不明であった。高さは平均 T.P.+2.54m である。

立ち木痕（図版20－１・２） この低地２では 1130流路からの破堤部分付近に多くの立ち木痕が見られた。浸蝕痕内で、流木状に見えても、根が深く下層に入ったものが多かった。立ち木痕はこの部分を中心に微高地１の西肩部から微高地２の南端付近に集中している。図版20－１・２の立ち木痕で良く分かるように、第12－１面で生えており、第11ｂ層で埋没し、自然土壌の第11層上面まで達している。その状況も第11ｂ層が一度の洪水の堆積である事を良く示しているとも言える。

この立ち木痕集中部分が、1130流路から低地２への破堤部分と重複する事から、これらは破堤しやすい部分の裏手に、意図的に植えられた防災林のようなものであった可能性が考えられる。

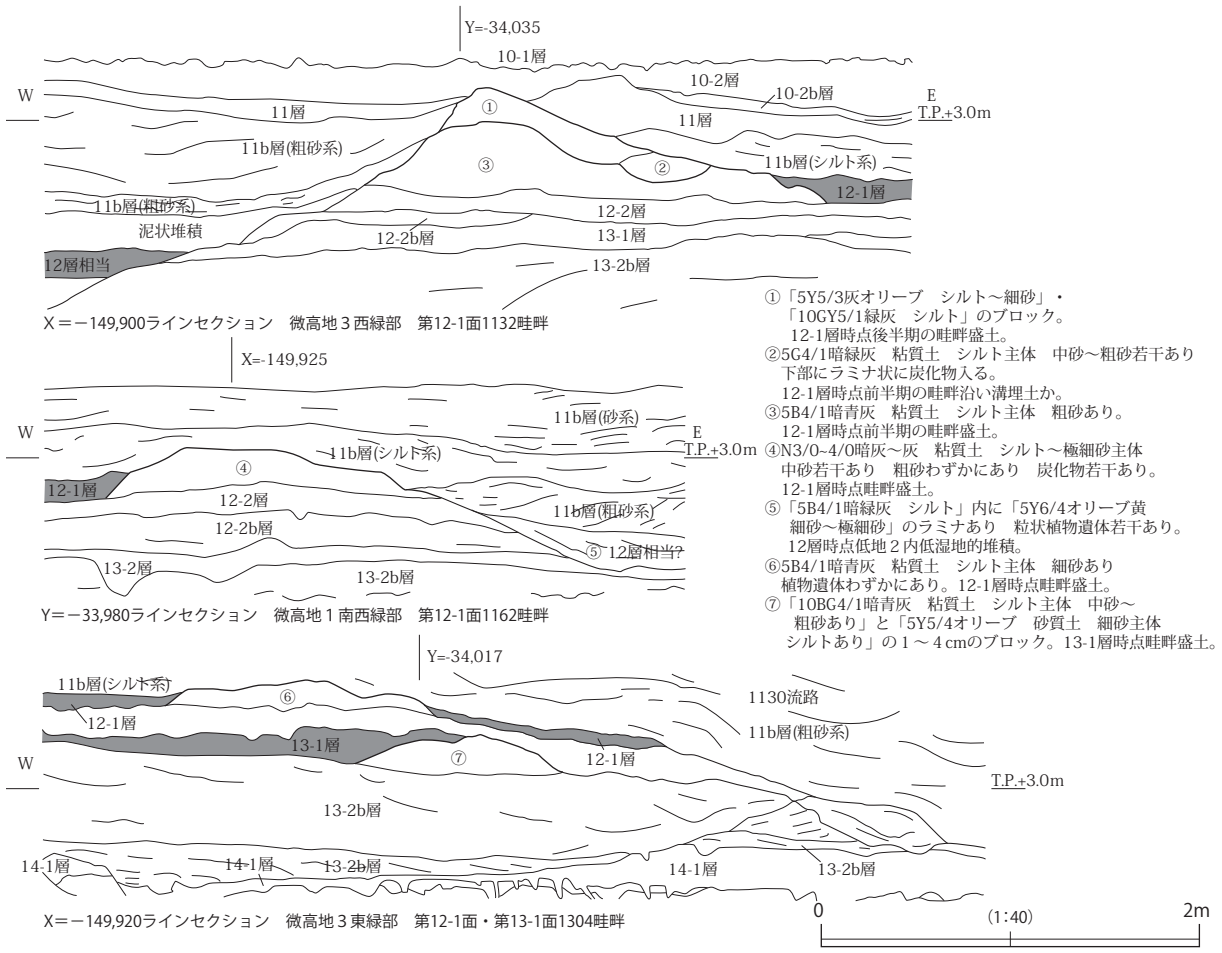


図 45　第 12・13 層　微高地縁辺部大畦畔　断面図

微高地２　1143落込が、1207溝の続きであった可能性は先述したが、それ以外には東側縁辺に 1141 畦畔があるのみである。しかし、第12‐２面の成果から見ても耕地区画が存在した事はほぼ確実と言えよう。1143落込以北は、畦畔以外は T.P.+2.56 ～ 2.63m の間で極めて平坦である。

微高地３　東側縁辺には 1139畦畔、西側縁辺には 1132・1138畦畔が走る。斜めに 1137畦畔と 1136 溝（図46）が横断する。1139畦畔は北側では幅広いが、高さはなく、基底部が残存する状況である。1132畦畔北側と、1137畦畔西端の南北で水口状に畦畔が途切れる。1136溝は理解しにくい形態だが、第12‐２面から見ると、本来は微高地西側縁辺を北上する水路と接続していたようだ。その面から継続する溝で、埋土にも第11ｂ層以外の層が残存する。微高地上の平坦面の高さは東西の傾斜はほぼなく、1137畦畔以南は平均 T.P.+2.71m、その北は平均 T.P.+2.65m、1132畦畔が北に一段低くなる部分から北側は平均 T.P.+2.58m である。

低地３　大部分を 1129浸蝕痕が占めるが、微高地３西裾から伸びる 1133畦畔と北端で 1134畦畔が残存し、耕地区画が存在していた事を示す。1133畦畔西側の段差は、1129浸蝕痕の肩部でもあるが、さらに西の段差以西より浸蝕度合いが弱く、元々耕地区画の段差であった可能性がある。1134畦畔は浸蝕痕内だが、残存部分でも幅1.7m、高さ 0.32m を測り、大畦畔である。南東端付近では、第12‐２面検出の 1200溝・1201畦畔がこの面でもあったはずだが、検出できなかった。それらを覆う、土砂流的な部分堆積層を古土壌と見誤った可能性がある。1133畦畔がのる平坦面は、南側が平均 T.P.+2.41m、1133畦畔の南側で平均 T.P.+2.33m、それ以北はやや高く、平均 T.P.+2.41m ほどである。

第12－１層包含遺物　破片数で、弥生土器43、内生駒西麓産胎土23｛生駒西麓産甕７（ハケ６）、壺15、内生駒西麓産８（広口１、櫛描直線文１、流水文１）｝、焼土塊１である。実測可能なものはなし。量的裏づけがなく、河内Ⅱ様式以降としか言えないが、後述する下層の状況から、第12－１層が耕作土として機能していた時期は河内Ⅳ様式の中に納まると考えられる。

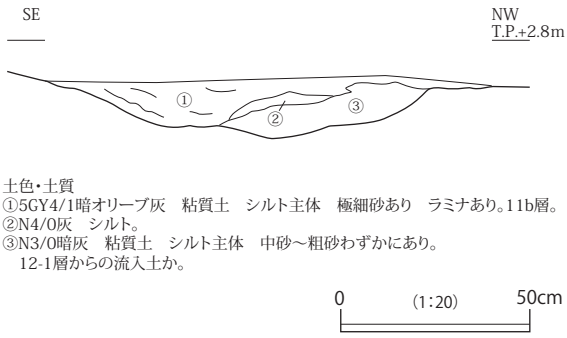


図 46　第 12-1 面　1136 溝　断面図

小結　微高地と低地が混在する中を流路が走り、そこに水田が営まれている。微高地上にも水田が存在した事が明らかになった。また、耕作地内にある立ち木が、防災林の可能性があるのも注目できる。また、この面で第11ｂ層堆積への知見が増え、流路と洪水浸蝕を分別できたのも大きな成果であろう。

02－１・06－２調査区では低地２内1142浸蝕痕の続きを「B197流路」とするが、低地内に 1171畦畔に続く畦畔を検出し、浸蝕で途切れた形もある。その東の微高地１の 1146溝の続きも検出している。1165畦畔の続きは段差部分を溝状に検出している。微高地２では 1141畦畔の続きの他、西側縁辺にも「B239高まり」として大畦畔を検出している。1130流路の続きは微高地上を走る溝と認識し「B240溝」とする。微高地３では 1132畦畔の続きも検出ある。低地３では 1134畦畔の続きを検出し、微高地３との間に水田区画を検出するが、1134浸蝕痕の部分を「Ａ509流路（第11ｂ層中）」としている。

07－２調査区で 1134浸蝕痕の続きを「第11ｂ層流路」とするが、微高地３上の 1138畦畔の続きは検出される。微高地３西裾部に畦畔と溝が検出されるのは本調査区では第12－２面で検出した 1200溝・1201畦畔の続きで、やはり第12－１面のものであった可能性が強い。

この面の重要な成果は、２点に絞られる。まずは微高地上にも水田区画が存在するという事である。微高地縁辺の「高まり」は人為的なものであり、畦畔と考えられ、微高地に給水する水路も存在する。

次に第11ｂ層中の流路状、溝状の粗砂層は、洪水の途中のクレバススプレー的な堆積層である場合が多い事である。少なくとも池島Ⅱ期地区では第11ｂ層内に遺構面が存在した可能性は極めて低い。また、第12－１面を下方浸蝕する場合も多く、その浸蝕痕と、粗砂で埋積した流路の分別には慎重を期す事が必要である。浸蝕のない部分で水平に堆積した層が残っていないか、遺構面の異なる流路と重複していないか、肩部の古土壌層が水平なままか斜面を下るか、などで検証されなければならない。

層の時期の考察は第12－２面の小結で後述するが、河内Ⅳ－２～３様式頃と考えられる。

第13項　第12－２面（図４８・図版21－５・22－１・２）

第12－２層はｂ層をはさまず第12－１層直下に広がる耕作土層である。そのため、多くの小畦畔は頂部を削平され、耕作土層との切り合いのみが検出される状態であった。耕作土層と質がほとんど変らない小畦畔は検出が難しかったが、第11ｂ層堆積時の浸蝕が及ばない部分はかえって耕地区画の残りが良く、全容が把握しやすい面でもあった。また、1146溝・1145・1147畦畔の水路や 1302人工堤防、その上の 1207溝など、第12－２面から第12－１面まで継続している遺構もあった。

低地１　水路の東側で 1212畦畔が北から南東に通り、そこから東西に畦畔が伸びる、東西方向畦畔同士は 1212畦畔で近い位置から伸びるが若干ずれる。水路と 1212畦畔の間は第12－１面の区画幅より若干狭い。1212畦畔西側の耕地区画の高さは、だいたい南東端1254畦畔の南側から北に徐々に低くな

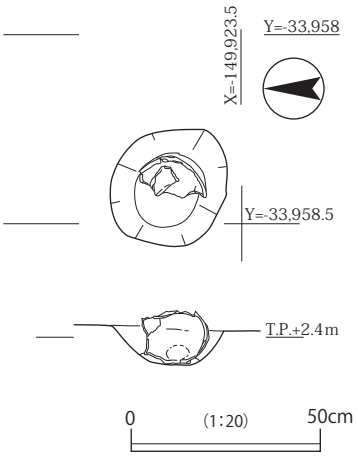


図 47　第 12-2 面　1209 ピット土器 1　出土状況

り、1212畦畔東側の区画は 1242畦畔南側が T.P.+2.48m とその北西隣の T.P.+2.52m より低いが、それ以北はまた徐々に低くなっていく。比較的平坦で整然とした耕地区画と言える。

1209 ピット（図47・図版23－4） その中で南側、水田面に 1209 ピットがあり、弥生土器壺が出土した。径約0.32m、深さ 0.0 9m ほどのピット内から、壺胴部下半が底部を斜めにした状態で出土した。第12－2面検出時点で破片が見えていたので、第12－1層床面遺構である。壺はピット埋土内でも破片のない部分があり、上層耕作で上半が失われたのではなく、元々下半のみでピットに入ったと思われる。

図49－1が 1209 ピット出土弥生土器壺片である。内面は、底部にユビオサエ残り後ナデ、それを上のミガキが切る。切り合い不明だが上半はハケである。外面はミガキ、底部側面はヨコナデ、底部は不定方向の粗いナデである。胎土は角閃石・黒雲母はわずかで、細粒に角閃石がなく、河内低地産か。胴部最大径が上半にきて、河内Ⅳ－2～Ⅴ－2様式にある無装飾の長胴広口短頸壺の系統と見られ、底部径がまだ広めなので、Ⅳ様式の範囲内であろう。

微高地 1　1146溝・1145・1147畦畔の水路が東縁を為す。微高地上全面に耕地区画があるのを確認できた。各区画は複雑な高低差を持つが、水回しは、南東からと、1223畦畔北側の区画からとの２系統があると思われる。第12－1面の 1151水口と同じ位置に水口があったのだろう。西へ落ちる段には、上段の比較的低い区画から水口が開く。西の下段でも低地２へ畦畔が途切れる部分があるが、これも水口の可能性がある。1226土坑も畦畔の途切れる横にあるが、深さ 0.15m 弱の浅いものである。

1145・1147・1252畦畔盛土出土遺物（図49） ここで微高地１上の遺構としてこれらの畦畔から出土した遺物をあげる。1145・1147畦畔盛土も第12－1層時点の盛土を除去した後の盛土である。

まず破片数で見ると、1145畦畔からは弥生土器６｛甕１、沈線文壺３｝が出土、1147畦畔からは弥生土器10｛甕２（底部１）、櫛描直線文壺１、高坏１｝、サヌカイト製石剣１が出土、1252畦畔からは弥生土器43｛甕９（ミガキ４、ハケ４）、壺27（広口１、長頸１、櫛描直線文１）、器台１｝、サヌカイト製掻器１が出土している。このうち 1147畦畔の石剣は下層に重複する第13－1面1332畦畔盛土のものと接合したのでそちらに帰属させた。他に実測可能なものは以下の３点である。

図49－2は 1252畦畔出土弥生土器広口壺口縁片である。内面はナデ、口縁端部のみそれを切ってミガキ、口縁端部面は凹面を成しヨコナデか。外面は磨滅激しいがタテナデか。胎土に角閃石あるが、少ないので河内低地産か。口縁端面の拡張もないのは河内Ⅱ様式頃のものか。

図49－3は 1147畦畔出土、弥生土器甕底部片か。蓋の可能性もある。内面はハケ、外面はタテナデ、底部側面にはユビオサエが残る。底面は不定方向の粗いナデ。胎土の微細な砂粒に角閃石・黒雲母多い生駒西麓産土器である。時期は限定しがたい。

図49－4は 1252畦畔出土サヌカイト製掻器である。原礫面を打撃面とした剥片を使用し、打撃面に対向する辺に刃部を形成する。ネガ面に 90度打撃方向が異なる剥離面が一つあり、これが剥片採取前の原礫面除去の剥離なら、原材は大きくない自然礫と思われる。やや風化し、欠損はほとんどない。

これらの畦畔の位置は、第12－2ｂ層が薄く、第13－1層が接近している。1147畦畔の石剣が第13－1面遺構出土のものと接合し、1252畦畔の広口壺片が河内Ⅱ様式である事からも下層の遺物を巻き上

図 48　第 12-2 面　全体図

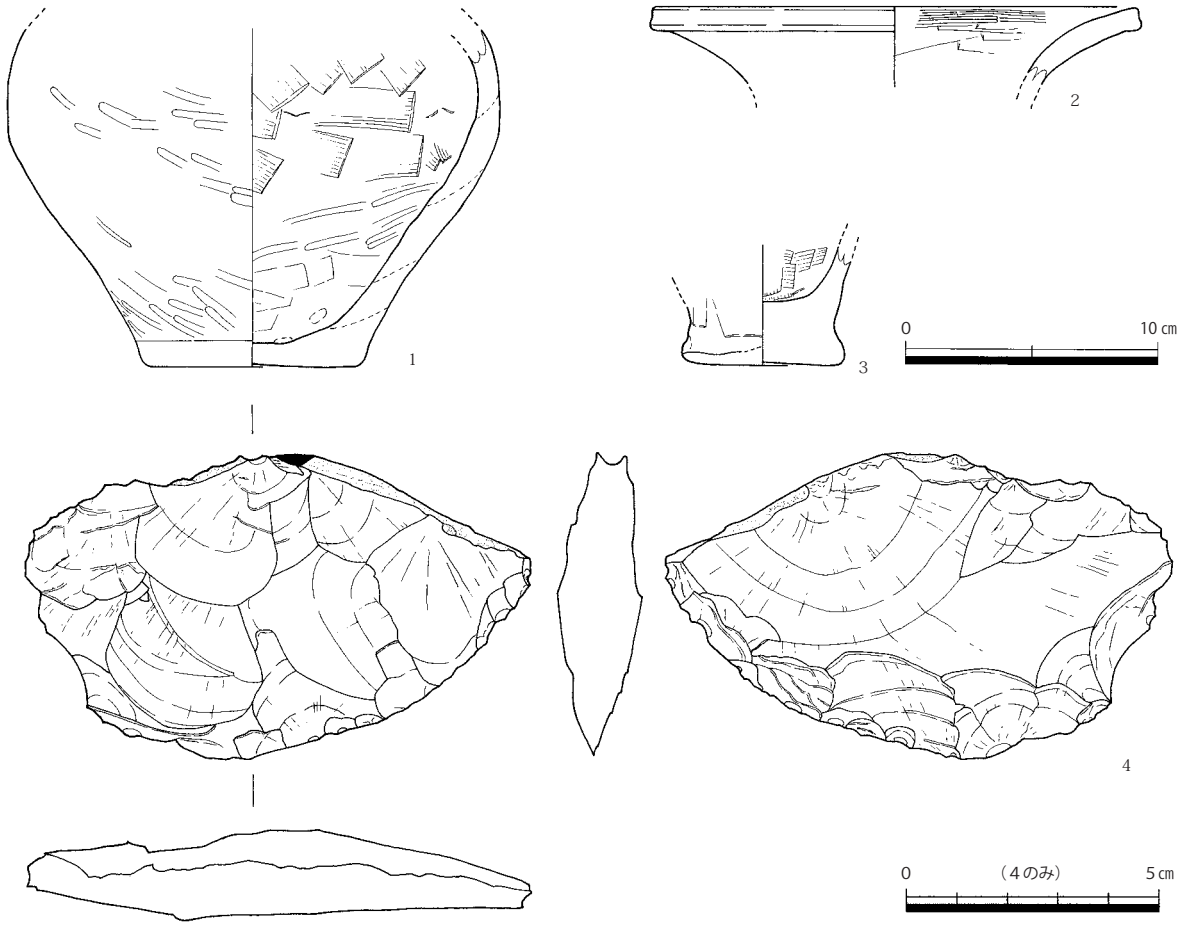


図 49　第 12 － 2 面　遺構出土遺物（その 1）（1：1209 ピット土器 1 、 2・4：1252 畦畔盛土、 3：1147 畦畔盛土）

げて含むと考えられる。この面の時期を示す遺物は特定しがたい。

低地 2　ほとんどが第12 - 1 面の浸蝕痕で失われるが、北西隅には耕地区画が遺存していた。第12 - 1 面でも畦畔が検出された部分は T.P.+2.28m だが、さらに南に一段低い T.P.+2.08m の部分でも畦畔が検出された。そこから浸蝕痕をはさむ東側は T.P.+2.25m ほどだが、西にやや傾斜し平坦ではない。

南東側にも平坦面が残るが、T.P.+2.42 ～ 2.26m で北西に低くなる。畦畔は認められない。その西の第12 - 1 面1144浸蝕痕底部に、この面の浸蝕痕らしき 1257浸蝕痕が検出された。埋土に細かい植物遺体を含む中砂～細砂で、1144浸蝕痕より細粒である。この面でも低地 2 は浸蝕されていると思われる。

微高地 2　東西を 1182・1185畦畔に囲まれるが、上面は平坦で、整然とした耕地区画がある。東西の畦畔がまだ南に伸びるので、元は 1210畦畔以南にもう一区画あり、そこに 1207溝がつながっていたのであろう。各耕地区画の高さから、南から北へ向けて畦畔越しの水回しがなされていたと思われる。

1130流路　第12 - 1 面の状況から、主に肩部上段の斜面堆積が取れる部分が多かった。完掘すると（図版24 - 1）、第13 - 1 面1258流路埋積層との間に第12 - 2 層が底部でもはさまる。この部分は自然土壌であろうが、耕作土層との切れ目は判然としない。水流が一時失われ、土壌化が進行する状況があったか。その状況をもって、第13 - 1 面1258流路とは分別できると考え、遺構名を別にした。

微高地 3　北側では第12 - 2 層があまり遺存せず、小畦畔も検出できず、微高地縁辺の大畦畔と、耕作土層床面の段差が検出できたのみである。南側では小畦畔が検出できた。1136溝はこの面から継続している。第12 - 1 面1137畦畔も、この面から継続していたと思われる。

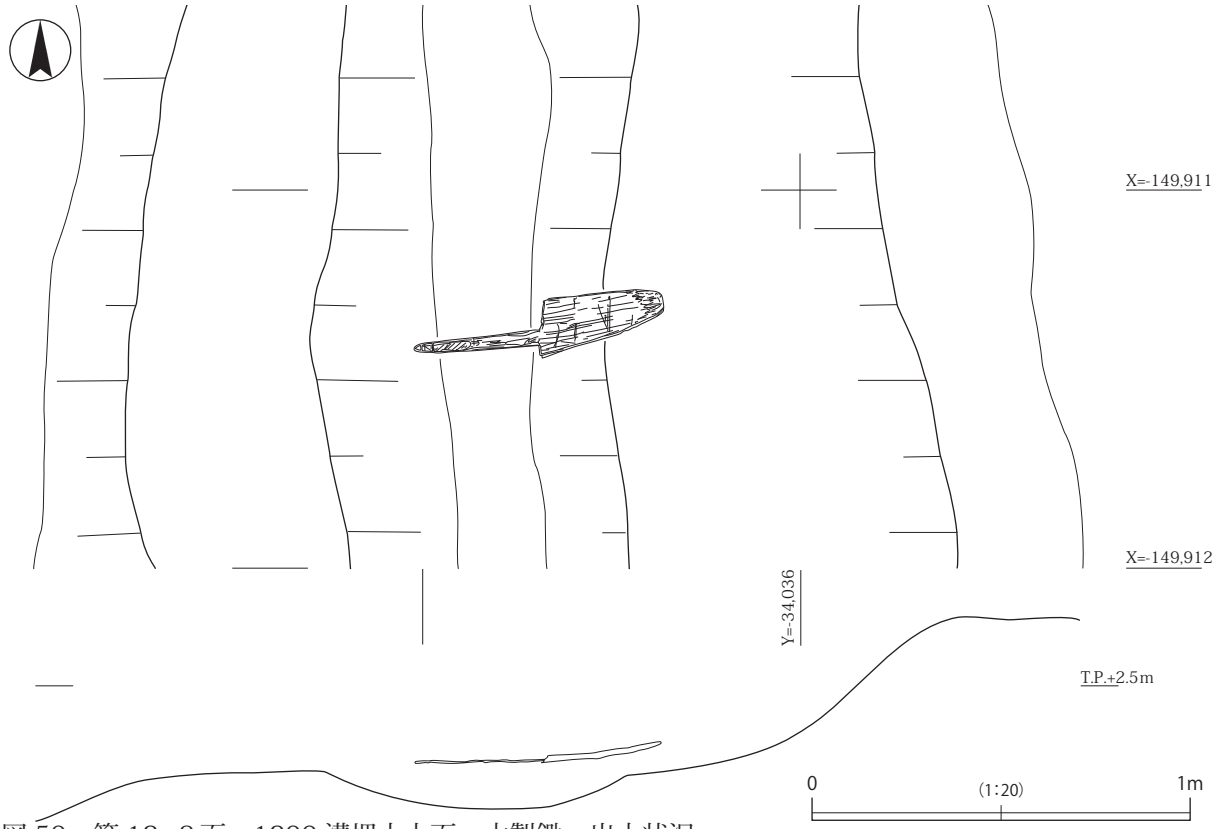


図 50　第 12- 2 面　1200 溝埋土上面　木製鋤　出土状況

1136溝は、西側で微高地縁辺裾部を南から伸びる 1200溝とつながる。この溝は第12‐1面では土壌層に似た部分的堆積に覆われ検出できなかったが、第12‐1面まで継続していた可能性が高い。

1200溝（図50・51）　検出状況では、低地３側で、1136溝より肩部も底部も低いが、それでは溝のつながりが理屈に合わない。覆った土砂流的堆積からも、浸蝕を受けたと思われ、元は西側肩部が畦畔状に微高地３より高く、1201水口から低地３に、1136溝を通じ微高地３に給水する水路と推測する。

1200溝の埋土上面から、木製鋤が出土した（図50・図版23‐3）。溝の輪郭が検出できた埋土上面からわずかに沈みこんだ状況であったので、溝内遺物と見て良い。

図51 がその木製鋤である。柄の上半を欠失する。全体に工具痕を若干残すが、柄が身部に付く位置はやや左右不均等で、そのラインで身部の背に稜を削り出している。木取りから見ると表側が原材の芯側を向いていたようである。先端付近の縁部は磨滅している。材はアカガシ亜属と同定された。

低地３　低地３はほとんどが第12‐1面1134浸蝕痕に攪乱されるが、それ以外に若干、この面で浸蝕された部分もあった。第12‐1層成立前に、やはり洪水があったのであろう。北東端にわずかに耕地区画が遺存していた（図版23‐5）。区画の大きさは比較的狭い。

第12‐2層・第12‐2ｂ層包含遺物（図37・52）　第12‐2ｂ面は無遺構だが、第12‐2ｂ層上部が土壌化し、第12‐2層と判別しにくい部分があった。そのため、第12‐2層掘削時に出土した遺物は、若干第12‐2ｂ層から混じった可能性を考慮し、「第12‐2・12‐2ｂ層」として取り上げた。結果的には第12‐2層のみの遺物として問題ない。それと下の第12‐2ｂ層の包含遺物とは分別した。

破片数で見ると（以下独立したカッコ内の数値は生駒西麓産胎土の破片数）、「第12‐2・12‐2ｂ層」は弥生土器79（34）{甕25（ミガキ 13（13）、ハケ５（３）、底部６）、壺24（７）（広口２、櫛描直線文30（10）、流水文１）}、礫２である。

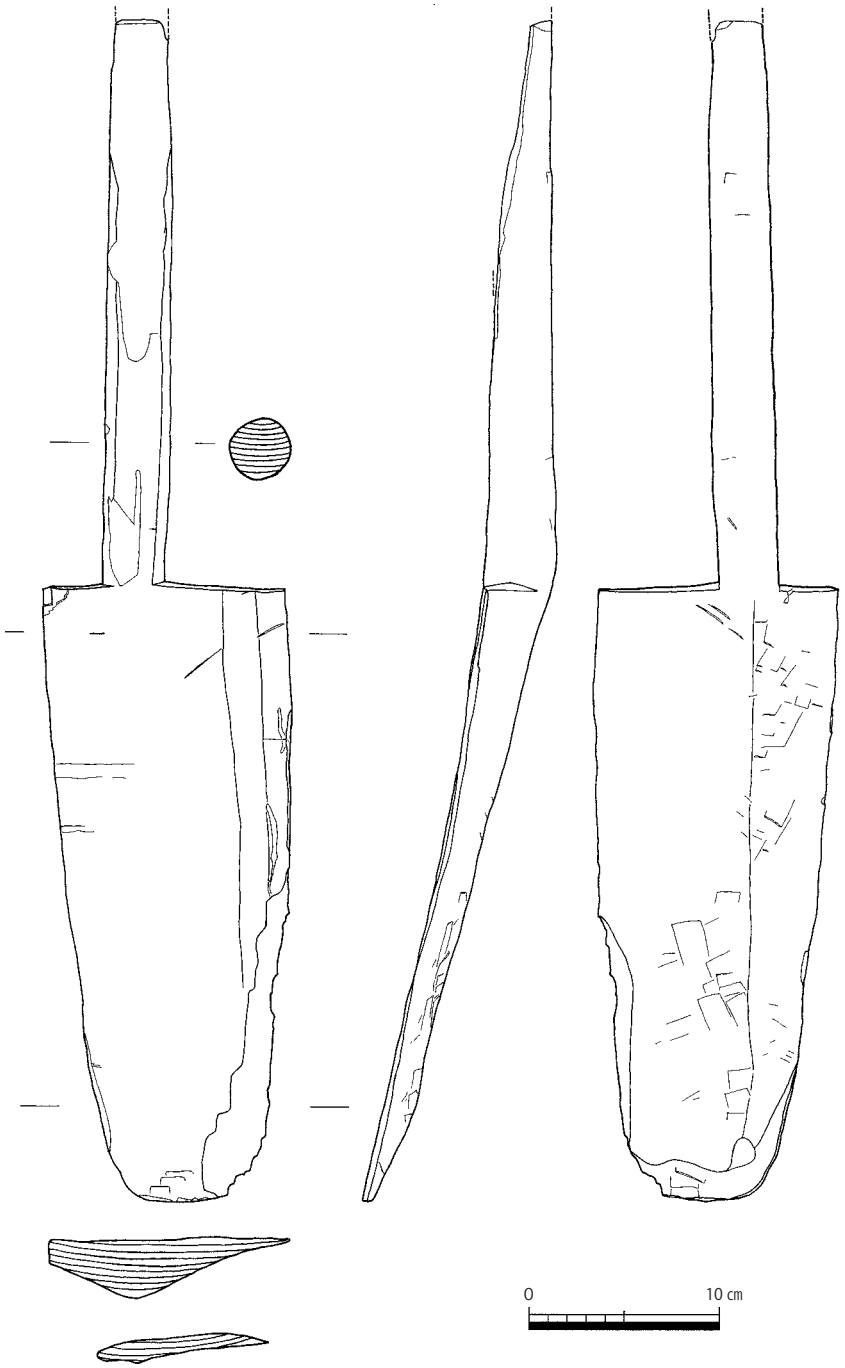


図51　第12－2面　遺構出土遺物（その2）（1200溝埋土直上）

「第12‐2b層」は弥生土器305（93）{甕79（45）（ミガキ16（13）、ハケ28（5）、底部6（3））、壺94（18）（広口3（2）、櫛描直線文30（10）、流水文1、波状文1（1）、簾状文1、底部5（1））、鉢5（5）、甑1、器台1}、サヌカイト製石器6｛石鏃1、石核1、チップ4｝である。

図37‐6は第12‐2b層出土サヌカイト製石鏃である。刃部は鋸歯状で、基部は徐々に薄くなりやや凹気味になる。欠失はなし。やや風化する。

図37‐7は第12‐2b層出土の弥生土器広口壺片である。やや磨滅し、内面口縁端部のヨコナデ以外調整不明である。丸味を帯びた口縁端部面には「く」の字状沈線が連続する。頸部には3本の沈線間に櫛描直線文が2帯入る。胎土に角閃石が見られるが、2㎜近い大粒もあり、黒雲母がなく、胎土の発色も明赤褐色で、生駒西麓産ではない。器形も特異である。搬入品か。文様はⅡ様式的である。

図37‐8は第12‐2b層出土弥生土器甕片である。内外面ともミガキ、口縁端部面もミガキが入る。内外面とも下のタテミガキが上のヨコミガキを切る。角閃石・黒雲母が入り、生駒西麓産胎土である。河内Ⅱ様式以降の生駒西麓産胎土の甕に多いミガキ甕だが、口縁端部を拡張せず、頸部の屈曲は緩く、内外面とも丁寧にミガキを入れる甕は河内Ⅳ－1様式までか。

図37‐9は第12‐2層出土砂岩礫である。図右の面は凹部を除いて研磨されたように平滑である。図左の面は平坦面に幾つかの敲打痕らしき凹部がある。台石か。

以下5点は第12‐2b層出土サヌカイト製石器である。

図52‐1は剥片である。左ネガ面に原礫面が多く残り、左辺の細かい剥離は剥離面の調整か、二次加

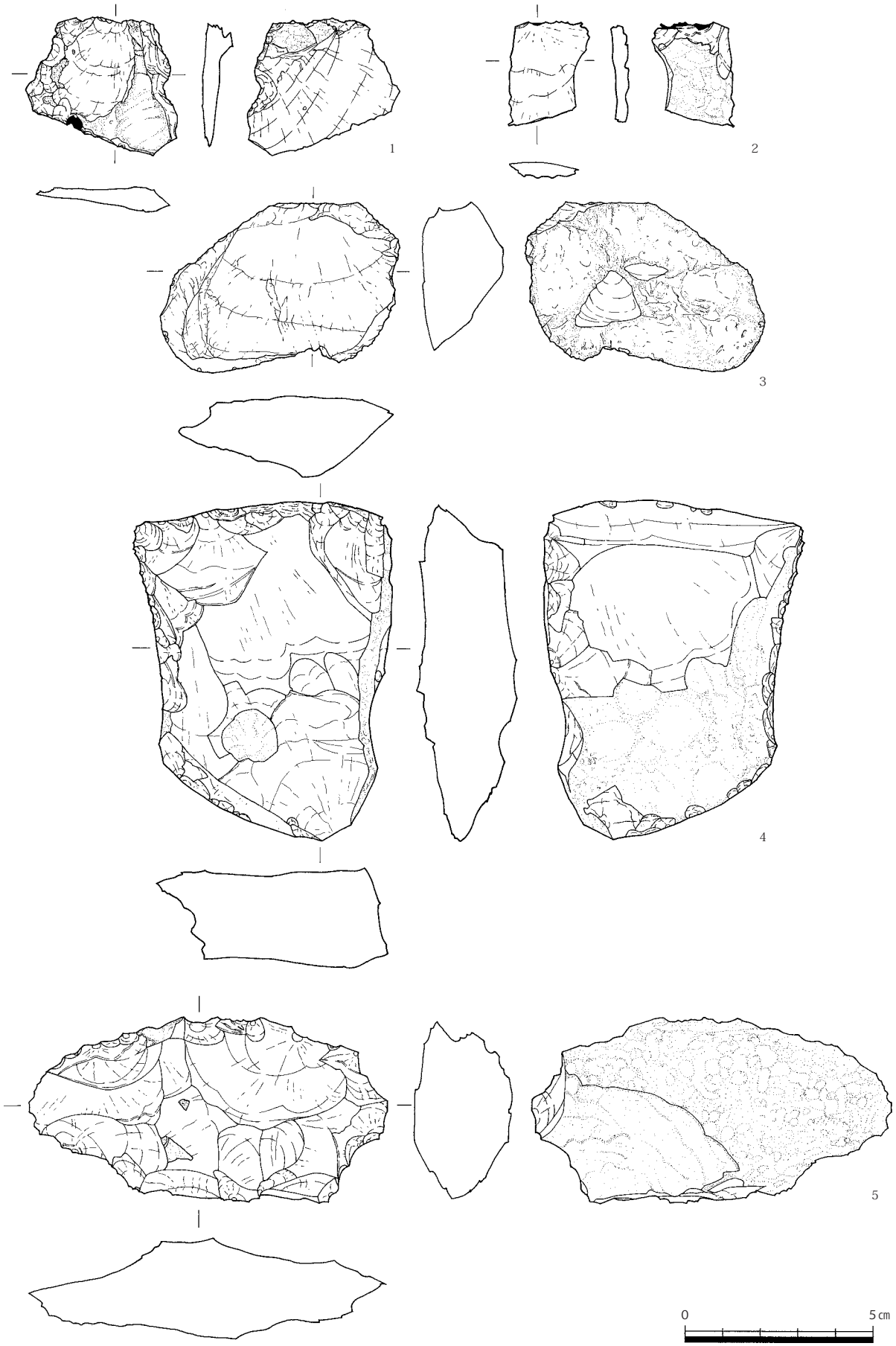


図 52　第 12-2b 層　包含石器（S = 2/3）（1：剝片、2：チップ、3～5：石核）

工か判然としない。打撃面は上辺の原礫面で、ポジ面の左辺で、打点の所で折れる。風化は弱い。

図52－２はチップである。原礫面を除去したものか。風化は弱い。

図52－３は石核である。右原礫面の剥離は風化が強く、自然割れと思われる。若干風化強い。

図52－４も石核である。上辺の打撃面は剥離での平坦面で、左ネガ面には捕獲岩が見られる他、上下同時割れの剥離もある。また、四周に細かい割れが多いが、刃部を形成するようなものはなく、石核を叩き石に転用したものかと思われる。風化は弱い。

図52－５も石核である。自然礫の上辺を打撃面にして剥片を取った残りか。下辺からの小さめの剥離のほとんどは剥片採取後盛り上がった部分を除去する剥離面の調整と思われる。風化は弱い。

全体に見ると、下層由来の遺物が多い。時期的には今回の調査で唯一の簾状文壺の破片が参考になる。河内Ⅲ～Ⅳ様式の中に第12－２層形成の上限があるという事である。1209 ピット出土壺片が下限を示し、第12－２層の機能していた時期は河内Ⅲ様式からⅣ－２様式頃と考える事ができる。

小結　第12－１層の床面でもあり、浸蝕の影響が少なく、全体の耕地区画の様相が良く残っていたと言える。微高地はほぼ全面が耕地化されている事が証明された。その区画も、区画ごとの面の高さも、水回しをするための理屈に合い、不自然な点はない。

02－１・06－２調査区では一部の微高地のみ 12ａ層が細分でき、第12－２面相当の面が調査されている。微高地３の続きでは「畝溝」が検出され、畝溝埋土と周辺の土壌は軟Ｘ線写真の分析で畠作土より「水田作土の状況に近い」と分析されている。微高地１の続きでは１本のみだが畦畔が検出されている。なお、低地２・３の浸蝕を免れた部分の続きに 12b 面で溝が検出されるが、それらも第12－２面の遺構であった可能性が強いと思われる。遺物は 12ｂ層に河内Ⅳ様式の遺物が含まれるが、状況から第12－２層相当の遺物が含まれる可能性が高い。12面遺構で最新の遺物は河内Ⅳ－３様式の壺片である。

07－２調査区では 12-3ａ面が対応し、微高地３の続きがあるが、そこではピットのみ検出される。低地には水田がある。遺物は少ないが、微高地上出土Ⅳ様式の土器を 12-1ａ面廃絶時のものとする。

以上を踏まえると、第12－２層の成立は簾状文出現、河内Ⅲ様式以降で、第12－１層成立が河内Ⅳ－２様式以前、第12－１層の埋没が河内Ⅳ様式の範囲内で、Ⅳ－３様式以降と考えられる。

第14項　第13－１面（図53・図版24－２～26－１）

微地形の大勢は第12－１・２面と変らない。第12－２ｂ層は低地部分にしかなく、微高地ではほとんど第13－１層と第12－２層が接する。第12－２ｂ層は場所により質の変化はあるが、上下に分層できる所はなく、一回の洪水で堆積したようである。低地部分に緩い浸蝕痕を残す。

第13－１層は微高地上では、微高地を形成した第13－２ｂ層やその再堆積層があるため低地部分と異なり砂質で、第13－２層と区別が付きにくく、遺存度も低い。第13－２面1310住居１が既にこの面で検出される。しかし、若干の耕地区画は検出され、低地と共に耕地化されていたと思われる。

低地１　調査区南東隅近く、1380土坑付近から 1347・1326浸蝕痕を通り北に抜ける浸蝕がある。元々そのラインが東西から緩傾斜で下がり、一番低いラインのようである。

その他に何ヶ所か水田面が不自然に落ち込む部分が見られたが、それらは第13－２面で大きめの遺構が存在した部分であった。例えば 1338落込は、その直下に 1500住居２がある。埋没後、上層の土圧で遺構埋土が圧縮され、陥没したものと考えられる。

それらの影響で耕地区画の元の高さは不明確だが、調査区南東隅は微高地１の範囲で、1380土坑が

位置する部分から低地となる。東半は 1384畦畔北側が一番高く、そこから北に徐々に下がる。西半は 1328・1368畦畔が幹線的畦畔で、1327溝以北に低い部分があるが、そこも含め 1328・1368畦畔東側より相対的に高い。その中でも 1327・1375溝に囲まれた区画は水路から分岐した溝に囲まれる特異な区画である。低地１東半は調査区南東隅付近から給水、西半は西側水路から給水を受け、一番低くなるラインで畦畔越しに排水していく水回しと考えられる。

1380土坑（図54・図版27－１） 低地１南東側に位置する土坑である。長径約2.2m、短径約1.3m の不整な楕円形だが、北東側が浅く、深い部分はほぼ円形の土坑状である。ブロック土があり、底部に径 0.35m ほどで深い部分があり、柱抜き取り穴状である。浸蝕も受け、直下に第13－２面1750住居４が存在するので、その柱穴の一つが露出したとも考えられるが、住居４の柱穴と比べても掘り方が大きい。

低地１遺構出土遺物 幾つかの遺構から若干の遺物が出土している。主なものを破片数で述べる。なおカッコ内に独立して数字だけ入るものはその前の破片数内での生駒西麓産胎土の破片数である。

1326浸蝕痕からは、弥生土器甕２（２）{ミガキ１、ハケ１}。

1372溝からは、弥生土器９ {ミガキ甕１（１）、壺４（広口２、櫛描直線文１）}。

1347浸蝕痕南東側の 1378落込からは、弥生土器３ {広口壺１、流水文壺２（２)}。この中の流水文壺片はこの落込から南東約８m の第13－２面1712 ピット土器１に接合した。

先述の 1380土坑からは、弥生土器４ {櫛描直線文壺２（２)、鉢１（１)}。

その北西の 1422落込からは、弥生土器22 {甕８（ミガキ５（５)、ハケ３)、壺11（３）（広口１、細頸１、櫛描直線文２（１)、底部１)、鉢２（櫛描直線文１)} サヌカイト製石匙１、焼土塊１である。

図56－２は 1422落込出土、サヌカイト製石匙である。ポジ面で分かるように横長の剥片を斜めに加工して作られている。柄部や刃部の押圧剥離はほとんどネガ面のみである。ネガ面で刃部に利用している剥離面はポジ面の打点と方向が違い、打点も遠いので、原材の原礫面除去などの剥離か。

1333溝・1332・1334畦畔及びその出土遺物（図44・54 ～ 56） 低地１と微高地２の境で、第12－１面の 1146溝・1145・1147畦畔に踏襲される水路である。位置的にほぼ重複し、攪乱される部分も多いが、ずれる場合は第12－１面の水路のほうが西に寄る（図44)。

周囲の高低差により 1333溝も 0.5 ～ 1.2m と幅を変え、両脇の畦畔は第12－２層の削平が強く、遺存しない部分もある。調査区南東では微高地１の上に乗るが、X=-149,920 ～ 900付近ではやや低地１側に入る。北側では正確に両方の境目を通る。第12－1・2面の水路が調査区内でどこでも低地・微高地両方に給水・排水を行う事が可能な作りになっているのは、この水路の状況を改良したとも言える。

図54 で見ると、溝埋土は上図①も下図①も質は異なるが第12－２ｂ層堆積の洪水時のもののようである。畦畔盛土は遺存度の低さもあって判然としない場合が多い。

出土遺物は畦畔盛土のものは第13－１層形成時、溝のものはその埋没時のものである。破片数は以下の通り。なおカッコ内に数字だけ入るものは生駒西麓産胎土の数である（以下同)。

1332畦畔からは弥生土器ハケ甕１（１)、サヌカイト製石剣１で、石剣は第12－１面1147畦畔西裾部出土のものと接合した。

1333溝からは、弥生土器５ {甕２（２）（ミガキ１)、壺１、器台１} である。

1334畦畔からは弥生土器甑13（13）で、全破片同一個体である。

図55－３は 1332畦畔盛土出土の弥生土器甕片である。内面は頸部タテユビナデ後、口縁から頸部ヨコナデ、以下は左上がりナデ、最後に破片下端にタテミガキが見られる。外面は、口縁部はユビオサ

図 53　第 13-1 面　全体図

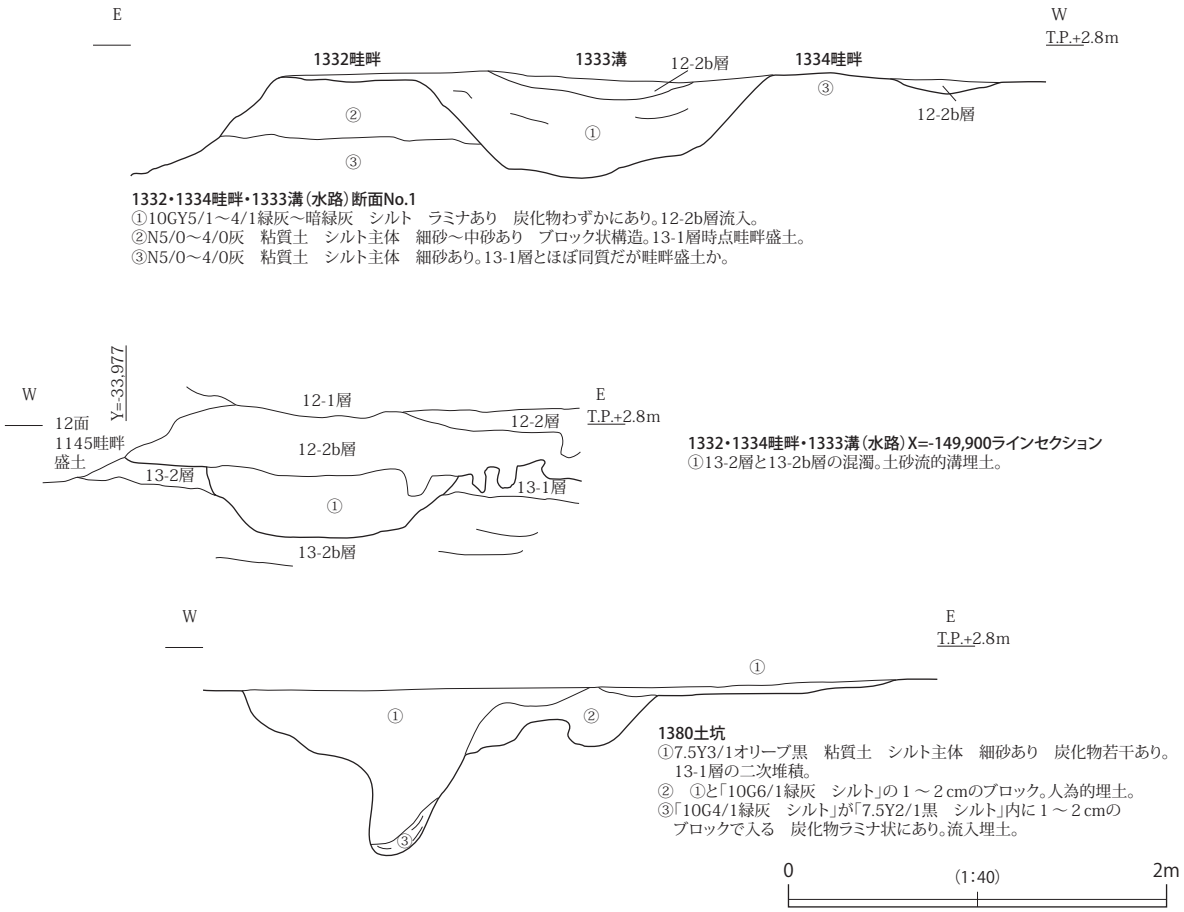


図 54　第 13-1 面　1322・1334 畦畔・1333 溝・1380 土坑　断面図

エ・ヨコハケ・ヨコナデの順に入る。胴部はタテハケ、それを頸部のヨコナデが切る。口縁端部はややゆるいが面を持つ。胎土は生駒西麓産である。頸部がほとんど締まらず、屈曲も緩く、口縁の形態を見れば河内Ⅱ－１～２様式頃のものか。

図55‐６は 1334畦畔盛土出土の弥生土器甑である。内面は頸部付近にユビオサエ・タテユビナデが残るが、その上に左上がりナデ。外面は下半タテケズリ後、頸部以下タテハケ、その後下半はミガキ、口縁から胴部上半はヨコナデが入るが胴部は弱く、タテハケが残る。底部はユビナデ後、不定方向の粗いナデ。底部の穿孔は内面からのややずれた刺突痕が残り、外面は椀状に開く。外面に凹みをつけてから、内面からそこへ刺突で貫通させたか。口縁端部面はわずかに上方に拡張する。胎土は細粒まで角閃石・黒雲母を含む生駒西麓産胎土である。ハケ甕の形式系統の下半にミガキが入るのは河内Ⅱ－２様式からで、胴部がまったく張らない形態は下っても河内Ⅱ－２様式までであろう。Ⅲ－１様式以降の型式要素の胴部下半ケズリは、ハケ・ミガキ後で本品とは異なる。河内Ⅱ－２様式にほぼ限定できよう。

図56‐１は 1332畦畔出土、サヌカイト製石剣である。二つに折れ、柄部の方は第12‐１面1147畦畔から出土した。やはり柄部のほうがやや風化強い。縁部の押圧剥離は全長のほぼ半分で鋒部側が刃部形成、柄部側がツブシとなる。柄部の端面に原礫面が残る。

微高地１　細かな浸蝕や再堆積を繰り返し、凹凸が激しいため、第13‐２面1310住居１が検出されたように、下面の遺構も他に露出していると思われる。例えば 1398落込とそこから北西に伸びる溝は第13‐２面1501溝の痕跡であり、その両側の畦畔は第13‐２面に帰属する可能性がある。

微高地上面は西が高く東が低い。西の高いラインでは、X=－149,900付近と調査区北端にピークがあ

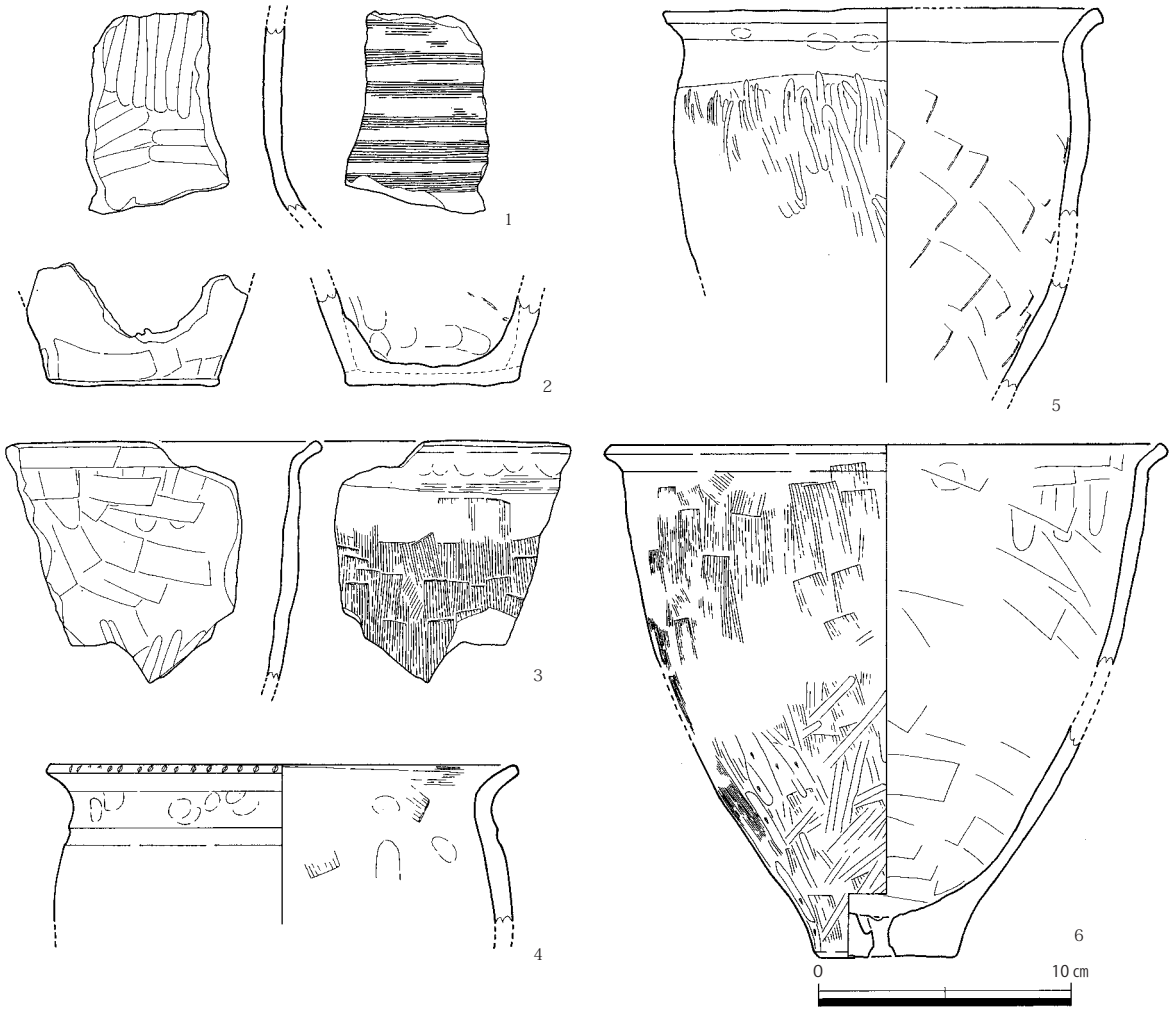


図 55　第 13 － 1 面　遺構出土遺物（その 1）（1：1258 流路上層、2・4：1401 落込、3：1332 畦畔盛土、4：1258 流路下層、6：1334 畦畔盛土）

る。その高い部分にも耕地区画が検出されたが、水回しの面では不可解である。1401・1406落込はその部分の裾で、深さ 0.3m 以上の長楕円形の落込だが、水溜として使われているのかもしれない。

さらに西側には一段落ちた部分が低地２の屈曲内側に存在する。そこへ落ちる段差に切られる畦畔もあり、やや浸蝕を受けていると思われる。西下段に耕地区画が検出されないのはそのせいであろう。

1392溝は北東から南西に伸び、低地２に開口する。南西側は第13‐２面1512溝を踏襲し、北東端は1334畦畔盛土の下を通って 1333溝につながるので、第13‐１面水田造成時の遺構かと思われる。北東端が、低地１でも低い部分に達し、第13‐１層形成時の洪水で排水不良を起した低地１の部分の水を低地２に排水するために 1512溝を利用して掘られたのかもしれない。

その他にも低地２に開口する溝や水口状の畦畔の途切れなどが幾つか見られるが、浸蝕痕か、浸蝕を受けた遺構か見極めが難しい。ただ、微高地から低地に水を落とす水利形態はあっただろう。

微高地１遺構出土遺物（図55・56）　主な遺構のものを先ず破片数から述べる。

1401落込からは、弥生土器９｛ミガキ甕７（７）、壺１（１）、鉢1｝。1406落込からは、弥生土器櫛描直線文壺２である。1424溝は調査区南東で 1333溝から低地１の東のやや高い部分への導水路の可能性が考えられる溝だが、弥生土器ミガキ甕１（１）、サヌカイト製チップ１。

図55‐２は 1401落込出土の弥生土器壺底部片か。内面は底部からの立ち上がりにヨコユビナデが断続的に巡る。その上はタテユビナデで粘土接合痕残る。外面は磨滅、底部側面ヨコナデが確認できるの

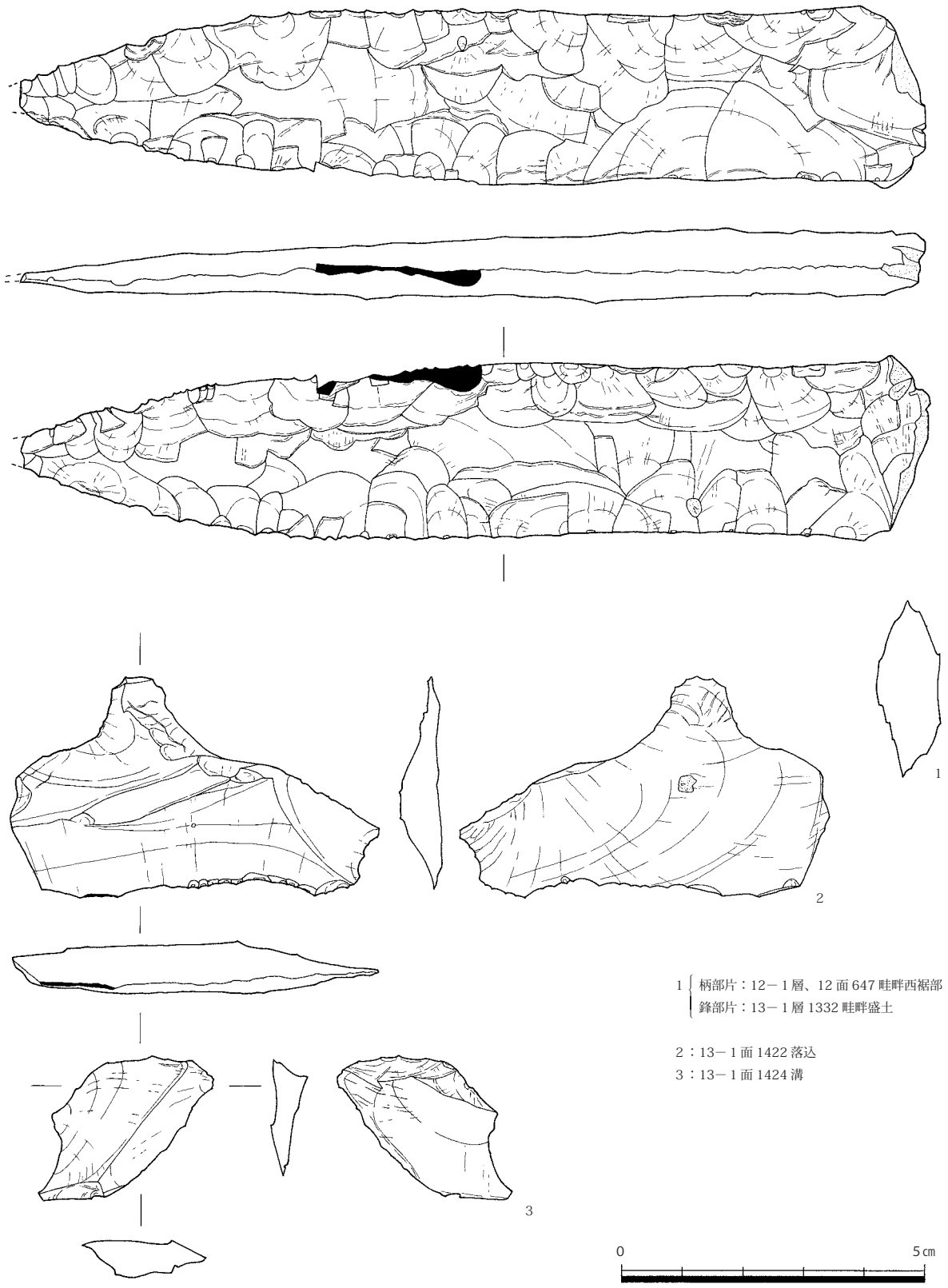


図56　第13－1面　遺構出土遺物（その2）

みである。破断面では、底部の円盤状粘土の上に胴部の粘土を接合する。内面側の底部付近の胎土はユビナデが強く、粘土素材単位から層状に分離する。胎土は生駒西麓産。上への広がりが緩いが、河内Ⅱ－1～2様式の小型無装飾の広口壺などならありえる。

図55‐５も 1401落込出土、弥生土器甕片である。出土した７片全て同一個体である。内面は左上がりナデ、口縁付近はヨコナデだがやや荒れて、単位が判然とせず、下のナデとの切りあいも不明。外面は口縁から肩部ヨコナデ、頸部にはその下のユビオサエが残る。胴部はタテミガキである。胎土は生駒西麓産。ミガキ甕で器壁はやや厚く、ミガキの単位も太めな事からすれば、河内Ⅱ－１様式のものか。

図56‐３は 1424溝出土、サヌカイト製剥片である。右、ポジ面の上辺が打撃面で、この剥片の打点は右端にあり、打点付近にはステップ状の剥離がある。ネガ面の打点もほぼ同じ位置なので、剥離時に打点から左右別々に割れた剥片の採取失敗品と思われる。風化は弱い。

低地２　1609流路の埋積層（図５の 148・149、図６の 168）上面に形成された地形である。上層からの浸蝕痕のため、南東側の一部と北西・北東隅しか遺存しない。流路埋積層上に一部暗色の止水堆積層や土壌層があるが、畦畔は認められず、耕作土層と確定できるものはない。南東部分・北東隅は北西に下がる緩傾斜面を成し、耕地区画があったとは見えない。北西隅のみ一段上がり、平坦面を成し、溝とピットがある。不明な部分が多いが、第13‐２面でも遺構がある事から、一部は耕地開発されていたのではないかと推測される。

微高地２　1258流路東岸で、遺構の残存状況から、弱い浸蝕は受けていると思われる。南側で 1302人工堤防との接続部分は上面からの浸蝕痕で失われている。最高所は南側1299畦畔南端で T.P.+2.58m である。その東に沿い、南の 1303溝から続くであろう 1301溝が北上する。その北端は東西方向の 1300溝につながり、東の耕地区画にも西の 1258流路にも水を導水できる。そこから北側は耕地区画が広がる。西が低く東が高いが、東の高いラインも区画ごとに北に低くなり、水回しに問題はない。西側の一部は畦畔が検出できないが段階的に北に低くなるので耕地区画は存在していたと考えられる。

微高地２以西では、1258流路以外の遺構で遺物はまったく出土していない。

1302人工堤防・1303溝　本来、1258流路右岸で微高地２に接続していたと思われる。堤防は第12‐１面まで、盛土を加えながら継続する。1303溝はその上で、第12－１・２面1207溝と位置は同じだが、埋土が異なり、長めに検出された。堤防再盛土後に同位置で掘り直しか。1302人工堤防の西側が階段状なのは、この溝の一部である。南端で溝の規模は幅約0.85m、深さ 0.25m ほどである。

1302人工堤防は平面検出範囲の北半は急激に低くなり、第12‐２面で盛土が足される。第12‐２ｂ層堆積時点でも浸蝕があったようである。南半の上面の高さは T.P.+2.73m ほど。

1258流路及びその出土遺物（図55）　第12‐１・２面1130流路に踏襲される流路である。1130流路よりは蛇行の度合いが低く、平均幅７ｍほどの流路である。埋土は埋積層である上層（図５の 152・153）と、機能時の堆積である下層（図５の 190）に大別できる。その下にはこの流路の元となった第14‐１面1610溝が埋没している。

埋土上層はシルト～小礫と、場所によっても粒子の粗細が大きく変る。層内に流木を含む植物遺体もある。第12‐２ｂ層堆積の洪水の初期に埋積が進行していたようである。

埋土下層はやや暗色の「シルト～細砂」に明色の「細砂～中砂」がラミナ状に入る他、破砕した状態の植物遺体が多く入る。比較的緩やかな流れで堆積したものと思われる。

上下層から若干の遺物が出土している。先ず破片数を述べる。生駒西麓産胎土の表記は低地２に同じ。

上層からは、弥生土器11（４）｛甕７（ミガキ３、底部１（１））、櫛描直線文壺１（１）｝、サヌカイト製チップ１、下層からは、弥生土器５｛甕２（２）（ミガキ１、底部１）、櫛描直線文壺２（１）｝、サヌカイト製チップ１である。

図55－１は上層出土の弥生土器細頸壷片である。広口細頸壷か。内面は肩部と頸部の境付近にヨコミガキ、その上にタテミガキ。外面には６帯の櫛描直線文がある。胎土には角閃石があり、生駒西麓産と思われるが、黒雲母が見られない。河内Ⅱ様式からⅣ－１様式までありえるものである。

図55－４は下層出土弥生土器甕片である。内面は磨滅するが、頸部付近から上にユビオサエ、下にタテユビナデが残り、その上から口縁ヨコハケ、以下左上がりハケが残る。外面は肩部に緩い凹線が巡り、それ以下は磨滅により調整不明。頸部から口縁に２条のヨコナデ、頸部にはその下にユビオサエが散在して残る。口縁端部には刻み目が入る。生駒西麓産胎土である。肩部凹線は沈線文に類すると見て良いか。肩部沈線文と口縁端部刻み目の甕は河内Ⅰ様式にある系統だが、この系統の甕は特に胴部が張らない。本例はやや胴部が張るのでⅡ様式に入ると思われ、河内Ⅱ－１～２様式のものと考えられる。

微高地３　微高地上は西が高く、東が低い、その境で東に落ちる水口状の畦畔の途切れ周辺は、若干浸蝕された痕跡が残る。また、西側の、南から、南北に長い２区画は区画内で南北にやや高低差があり、その間を区画する畦畔を検出しそこなった可能性がある。また、調査区南辺の 1258流路西側の２区画は、北西側の区画より低いので、水回しの系統が異なるようである。

水回しは、微高地西縁沿い南側に 1283溝・1284畦畔があるのは第12－２面1200溝と似るが、これらは低地３内に位置し、1284畦畔も、元は微高地と同じ高さだったとは、その幅から見ても考えられず、低地側の畦畔と規模・高さに整合性がある。微高地３では基本的に畦畔越しの水回しであったか。

また、北側の 1262溝の存在も理解し難い。幅約１ｍの溝で、底部高は南西 T.P.+2.40m、北東 T.P.+2.21m、開口する微高地北東端の区画を満水にしても、西の低地３に導水するのは不可能である。また、1282溝の底部高は、この溝南西側より 20㎝低く、両者の間は低地3 の耕地区画が微高地西斜面裾まで明確に確認できているので、両者がつながっていて浸蝕で途切れた可能性はまずない。

この溝の機能として考えられるのは、低地３が洪水で浸水した時、予期せぬ場所で微高地３を越えて耕地区画を破壊しないよう、あらかじめ 1258流路への排水路として掘削したというものである。しかしその場合、この溝より北側への水回しをどうするのか問題が残る。溝は微高地北東隅の区画を貫通しないので、この区画より低い区画へは導水可能だが、北西隅の区画へは導水不可能になっている。

低地３　第12－１面浸蝕痕の攪乱も残るが、第12－２ｂ層に覆われた所もあった。ただ、断面では分層できなかった古土壌層（図５の 158）を段階的に下げると、第12－１・２面・第13－１面の耕地区画が各々検出できた。第13－１層相当の古土壌層は 5㎝以下と薄くしか残存せず、畦畔も下部が残り、耕作土層との切り合いが見えるのみであった。そのため、この部分では耕地区画を確認した後、耕作土層を除去し、畦畔を残した状態で測量している。そのため、耕地区画の高さは、床面の高さである。

給水は微高地３西裾部を通る 1283溝による。北北西に伸びる畦畔が幹線的であろう。残存部分は少ないが、比較的整然とした耕地区画が広がっていたと推測できる。

第13－１層包含遺物（図57 ～ 60）　下の第13－２面で居住域が存在していた事もあり、包含遺物がかなり多い。そのほとんどは低地２の東側斜面以東で、西にはほとんどない状況である。まず破片数をあげる。カッコ内に数字のみ入るのは、その前の破片数内の生駒西麓産胎土の破片数である。

弥生土器503（184）｛甕106（73）（ミガキ 35（31）、ハケ 34（15）、底部14（７））、壺116（24）（無頸１、広口17（３）、刻み目突帯１、櫛描直線文36（19）、流水文１（１）、波状文１（１）、底部19（９））、鉢10（６）（櫛描直線文１）、蓋１（１）｝、サヌカイト製石器18｛石鏃３、掻器１、石核１、剥片８、チップ５｝、礫２である。

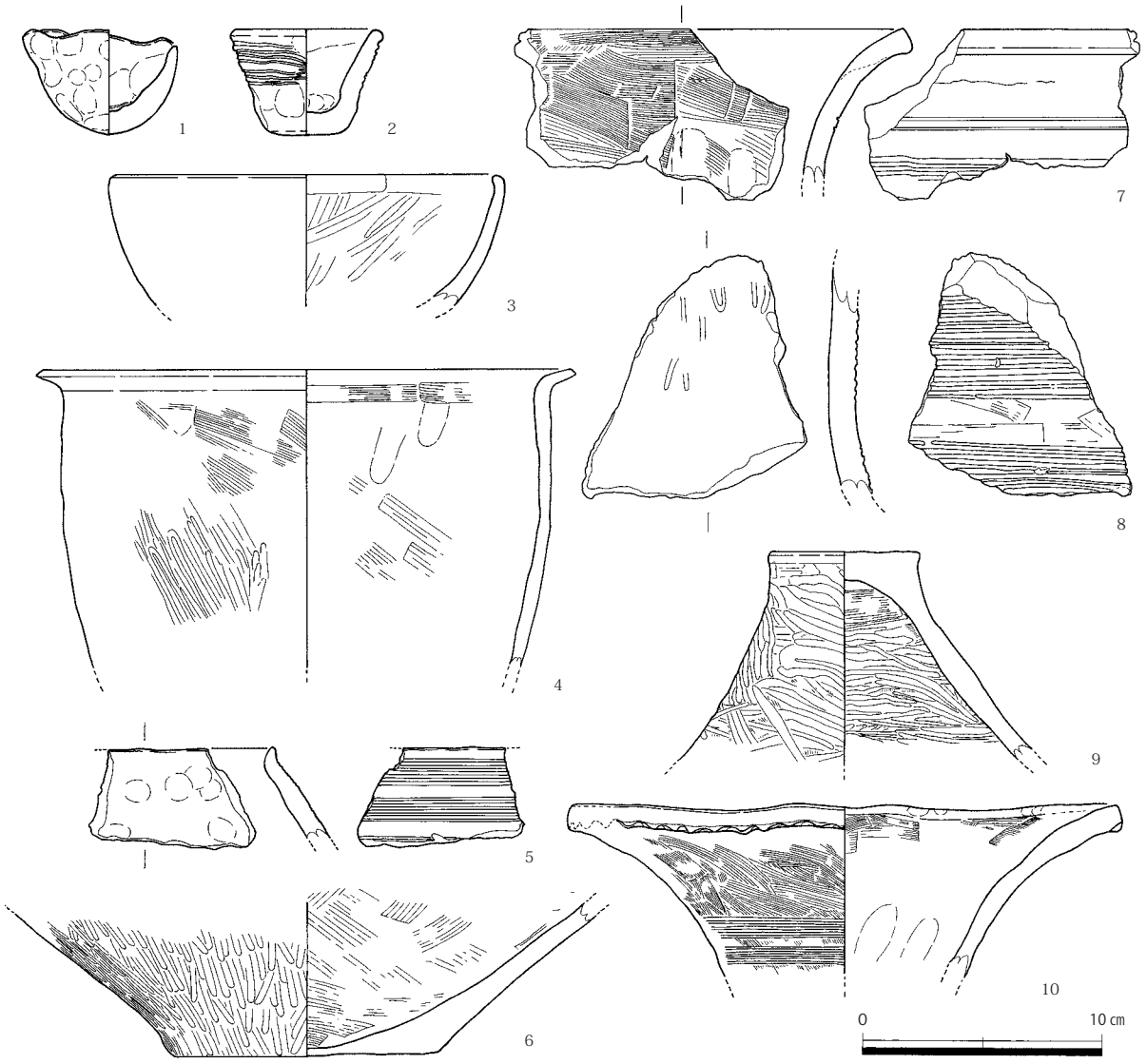


図 57　第 13 － 1 層　包含遺物（その 1）土器

図57‐1は手捏ねミニチュア土器である。内外面ともユビオサエ後ユビナデ、内面は親指か。胎土内に角閃石が多い生駒西麓産胎土である。ミニチュアと言っても、何を模したものかは分からない。

図57‐2もミニチュア土器である。鉢を模したものか。内面は底部にユビオサエ、体部はヨコナデ、外面はユビナデ、ユビオサエ後、2帯の櫛描直線文を巡らすがややいびつである。切り合いから、上から見て右回りである。生駒西麓産胎土。文様からすれば、河内Ⅱ～Ⅳ－1様式の時期か。

図57‐3は弥生土器鉢片である。内面はミガキが口縁部ヨコナデに切られる。外面は磨滅で調整不明だが平滑である。口縁端部は内側に屈曲する。胎土内には長石・石英・黒雲母あるが、角閃石はない。口縁端部が内側に屈曲する鉢は河内Ⅰ～Ⅳ様式に少数あり、Ⅱ－1様式では似た体部の高坏もある。

図57‐4は弥生土器甕片である。内面は、口縁部ヨコナデ、屈曲部ヨコハケ後軽いヨコナデ、その下には、タテユビナデが残る。体部の大半はナナメハケ後ナデである。外面は口縁部ヨコナデ、胴部上方はナナメハケ後軽いナデ、下部はそれを切るタテミガキ、それ以下は磨滅で調整不明である。胎土は生駒西麓産である。外面にハケが残るが、やや範囲が狭く、軽くナデ消すので、ミガキ甕の系統と見て良いだろう。胴部が張らず、口縁の屈曲が緩いので、河内Ⅱ－1～2様式に限定できる。

図57－５は弥生土器無頸壺片である。内面はユビオサエ後ヨコナデ、外面はヨコナデで、櫛描直線文が３帯確認できる。口縁端部は直立する。胎土に角閃石・黒雲母はあるが少なく、河内低地産か。口縁端部が直立する無頸壺は、河内Ⅱ様式に限られると見て良いだろう。

図57－６は弥生土器壺底部片である。内面はハケ後軽いナデ、ハケは左上がりが多いが、残存部上方では、それを切る右上がりが見られる。外面はタテミガキ、底部は粗い一定方向ミガキである。胎土内砂粒にわずかに赤いチャート・黒色片岩が見られ、他地域産の可能性がある。壺底部が薄いのは弥生中期的要素だが、その中でも特に薄い。時期はそれ以上限定できない。

図57－７は弥生土器広口壺口縁片である。内面は下の頸部に近い部分にタテユビナデ後、左上がりハケ、最後に口縁端部にヨコハケ。口縁端部面から外面はヨコナデで上に２条の沈線文、その下に櫛描直線文が入る。口縁端部面はわずかに下に拡張か。胎土に角閃石・黒雲母が細粒でも入るが、やや少なく、わずかに青色のチャートが見られるので河内低地産か。口縁端部面が明確で、沈線文と櫛描直線文があるものは河内Ⅱ－１～２様式に限定できるだろう。

図57－８は弥生土器壺片である。広口長頸壺の頸部か。内面は磨滅するが、上部にタテミガキ残る。下部はナデか。外面は２帯の帯条沈線文が入り、その間に残る調整はハケ後ヨコナデである。胎土内に石英多く、青色チャート・黒雲母がわずかにあり、粘土自体も細粒なのと、色調などから見ると摂津産かと思われる。多条沈線文でも条数が多く帯状を為す帯状沈線文は摂津Ⅰ－３～Ⅱ－１様式に限られる。河内Ⅰ－４～Ⅱ－１様式にほぼ併行すると見て良いだろう。

図57－９は弥生土器蓋片である。内面は天井部にナデ、それを切り下にヨコハケ、さらにその下を切りミガキ入る。ミガキの間に縦方向ハケが残る。残存部下端に煤付着。外面は天井部からそのやや突出した側面はナデ、他はミガキ、ミガキの間に残るハケは右下がりである。全体的に煤が付着する。生駒西麓産胎土である。器種的には時期を限定できる要素があまりないが、河内Ⅱ様式内と仮定してミガキの様相をミガキ甕のものと比較すれば、単位の幅が広く、不揃いなのはⅡ－１様式的要素である。

図57－10は弥生土器広口壺口縁片である。内面は残存部下端にタテユビナデ、上方に左上がりハケ、口縁端部にユビオサエが残り、後にナデで、口縁端部はヨコナデである。口縁端部面はヨコナデ、若干下に拡張し、そこに圧痕を連続し、波状にする。その圧痕には布目痕が残る。外面は左上がりハケ、下部に２帯の櫛描直線文入る。胎土は明褐色で角閃石の量が少ないが、粗砂大の閃緑岩から、細粒のものまであり、生駒西麓産であろう。これほど外面にハケを残すものは珍しいと思うが、口縁部端面が拡張されるようになり、垂下口縁になるまでの間とすると河内Ⅱ－２～Ⅲ－１様式のものであろう。

以下はサヌカイト製石器である。

図58－１は石鏃である。長三角形有茎式である。剥片の剥離面をまったく残さない。左右非対称だが、その原因となったような剥離も現存していない。非常に薄く、風化は弱い。

図58－２は長三角形凹基式石鏃である。これも剥片剥離面を残さない。刃部は鋸歯状である。凹基部は剥離を両端から中央に向かって入れていく。風化は弱い。

図58－３は石鏃未製品である。剥片時の剥離面は右ポジ面の打撃方向と左ネガ面の剥離方向が90度異なる。ポジ面の打点は折れている下辺方向だが、フィッシャーから見てさほど遠くなく、両側縁刃部形成の剥離の下端は折れの後に入っている。風化は弱い。

図58－４もサイズから見て、石鏃未製品である。右ポジ面で分かるように横長の剥片を使用し、その右側が鋒部か。左ネガ面の上辺左端に折れ面があり、左上の剥離面がそれと同時割れである。その剥離

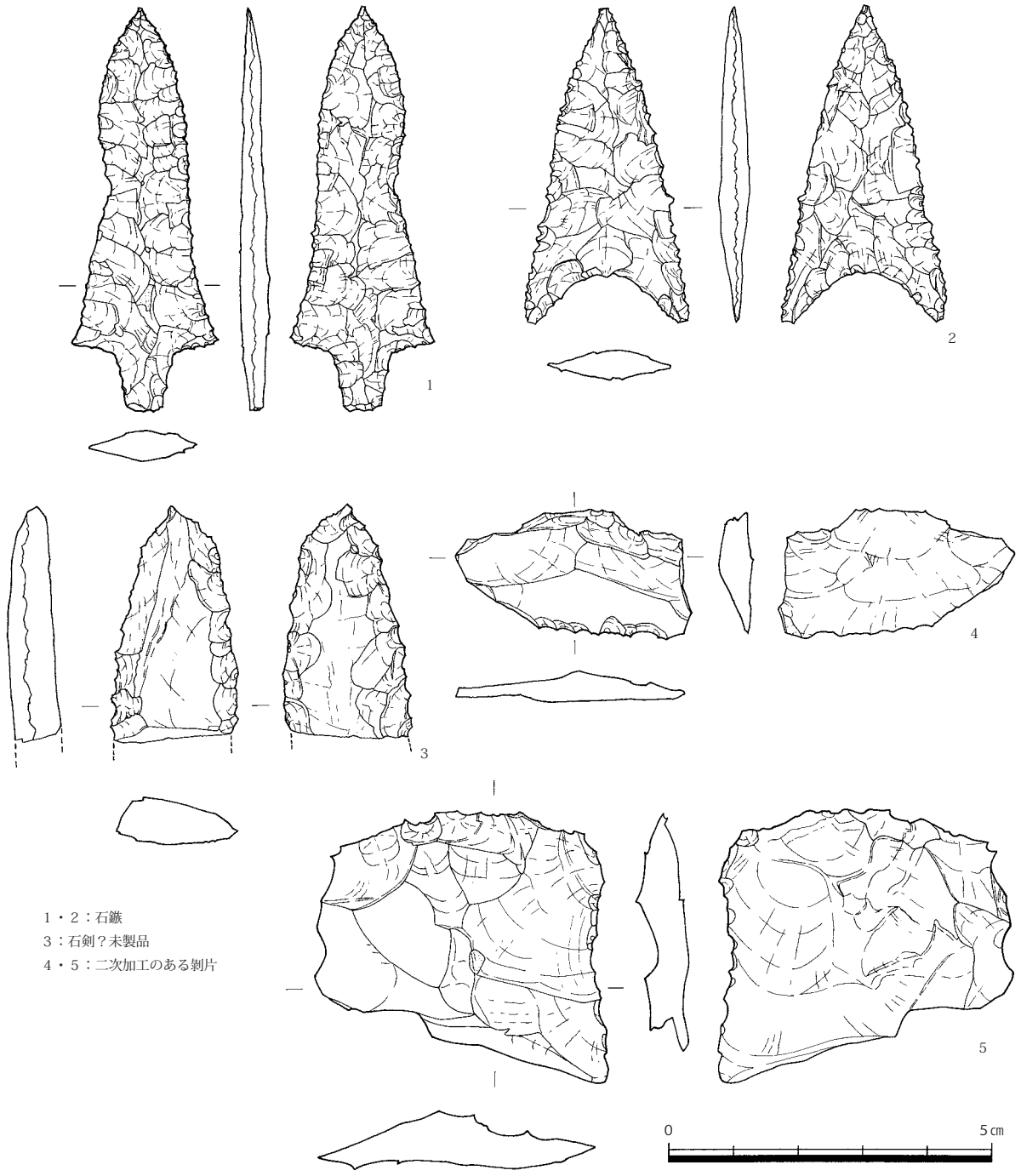


図 58　第 13 － 1 層　包含遺物（その 2）石器（その 1）

のため薄くなりすぎ廃棄されたものか。

図58‐5は二次加工のある剥片である。上辺が打撃面だがネガ面で見ると左右辺からも剥離面調整が大きめに入る。右ポジ面の左辺に両面からの押圧剥離で刃部が形成されるが、上辺右側と右辺からも若干の剥離を入れて厚みを減じている。柄に取り付けるための加工であろうか。風化は弱い。

図59‐1は掻器である。ネガポジ面の剥片剥離の打点を見ると。右ポジ面右上辺を打撃面として、その左右を交互に打撃して剥片を採取していたか。左上辺は右上辺と対象形になるよう両面から加工する。その後、下辺に刃部形成する。風化は弱い。

図59‐2も掻器である。上辺が剥片時の打撃面で、右ポジ面の左上辺には原礫面を残す。右辺にも若

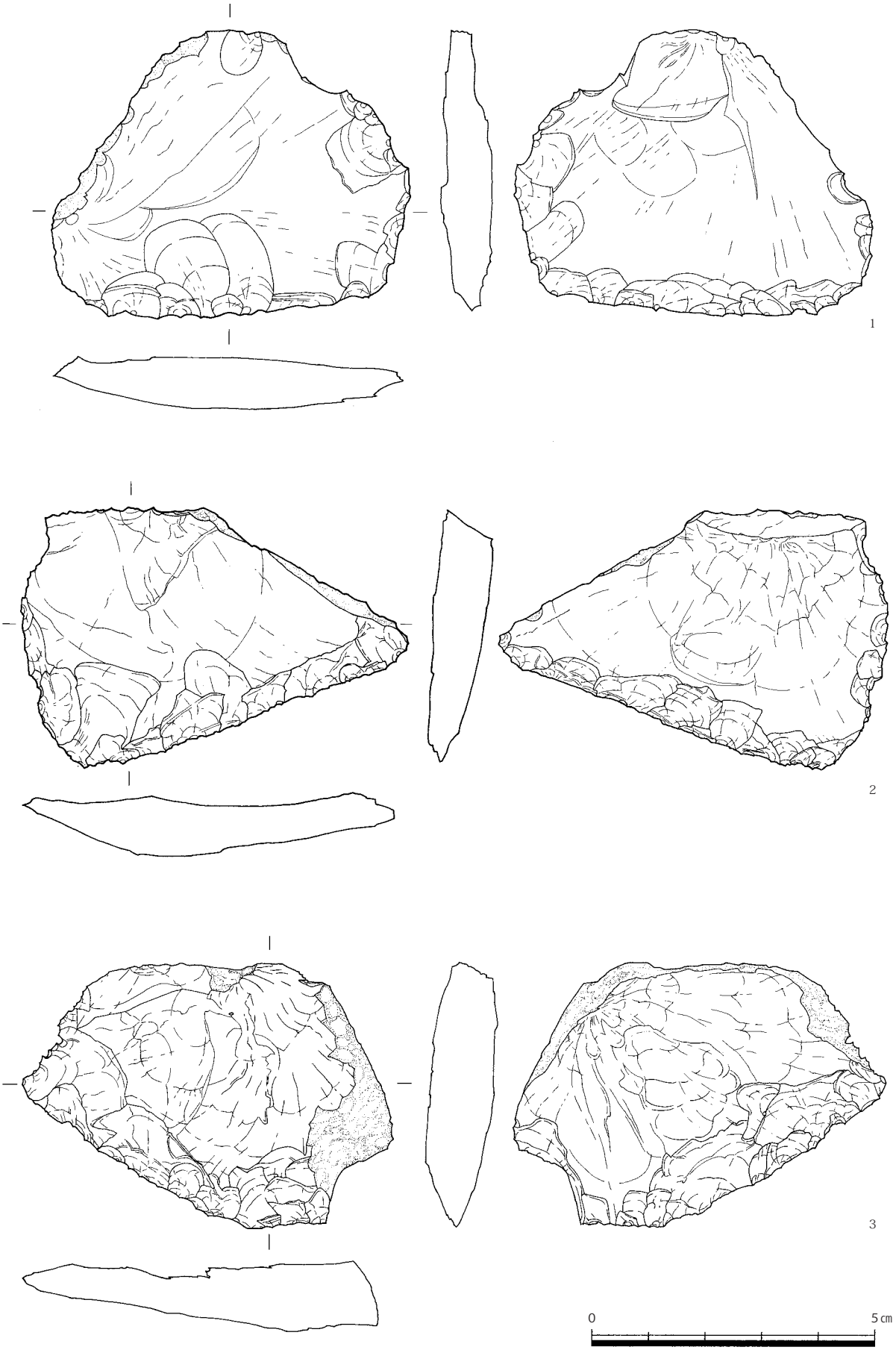


図 59　第 13 － 1 層　包含遺物（その 3）石器（その 2）掻器

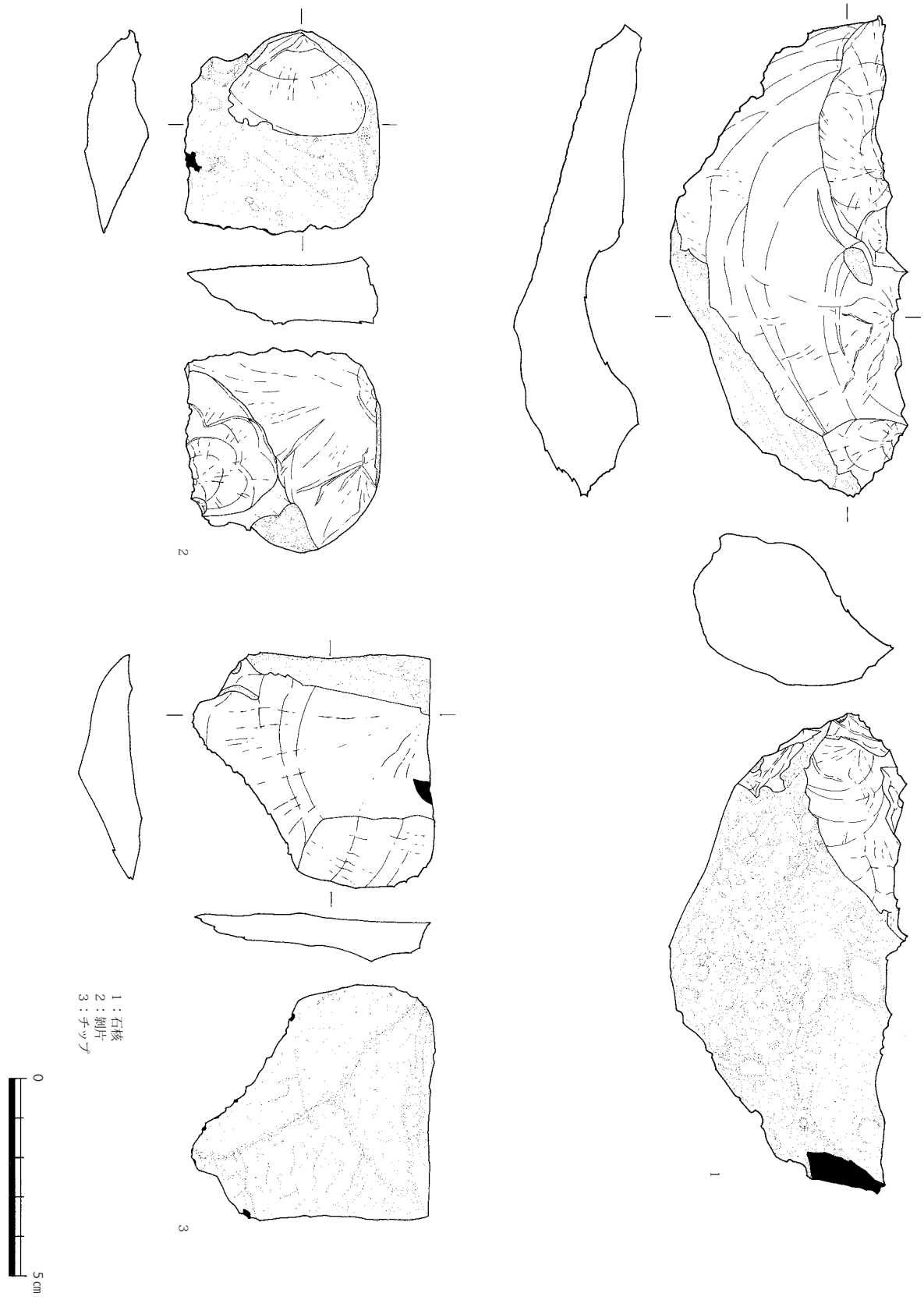


図 60　第 13 － 1 層　包含遺物（その 4）石器（その 3）（S = 2/3）

干加工が入るが、刃部は左下辺である。風化は弱い。

図59－３も掻器である。右ポジ面右下辺の刃部以外は原礫面が残り、かなり小さな礫を素材にしているのが分かる。風化は弱い。

図60－１は石核である。上辺を打撃面に剥片を取った残りである。右、原礫面側に残る剥離は調整剥離の際に割れたものか。風化は弱い。

図60－２は、左の面に残る剥離を原礫面除去のものと考えれば剥片と言える。実際にはほぼこのままの大きさの礫を割ってみただけのもののようである。風化は弱い。

図60－３は原礫面除去のチップか。残る形からみて、図上辺を打撃面として、素材の礫の端にあたる原礫面を剥離したものと思われる。風化は弱い。

石器類は、上層出土を含めて見ても、製品は石鏃と掻器が圧倒的である。また、小さい礫を原材とするものが多いのは、二上山周辺地域の特徴である。剥片・チップ・石核が揃うのは、ここでの石器製作を暗示する。第13－２面で、石器が集中的に出土した状況を反映するものか。

土器の様相も第13－２面の状況を反映していると思われる。河内Ⅱ－１～２様式期のものが圧倒的に多いが、図57－10の広口壺１点と、図55－６の1334畦畔盛土出土の甑がⅡ－２様式に限定できるが、第13－１層の期間の上限を、それのみで限定するのはやや根拠として危うい。後述する第13－２面で住居を含めた３遺構から破片が出土した1712ピット土器１が河内Ⅱ－３様式に限定できる遺物であるのを重要視すれば、その時期を第13－１層の上限とすべきだろう。

面存続時期の下限に関しては、第13－１面遺構出土遺物に簾状文はなく、第12－２ｂ層内に１片のみ簾状文の破片があった事から、河内Ⅲ様式期までと考えてよいだろう。第12－２層の形成時期が、Ⅲ様式期の中に想定できるが、その中でどれだけ遡るかは不明で、第13－１面埋没から、第12－２層形成までの間に時期的な空白が存在するかは、今回の調査では明らかにできなかった。

小結　微地形は第12－１・２面に踏襲され、微高地が耕地化される状況も同じだが、細かく見るとこの面の方が水路の位置や耕地区画が雑で、機能性で劣る部分がある事が分かる。また、検出に問題があったのか、理解しにくい耕地区画や溝も存在する。そんな状況を踏まえ、洪水後に第12－２面の耕作地が再建されているのであろう。そう考えると、両者の間には連続性があると思える。

02－１・06－２調査区では、この面でも微高地上で耕地区画を検出しないが、1258流路の肩部では大畦畔を検出する。低地２部分では、下面の1609流路埋積層まで下げてしまっている。低地３の続きでは畦畔を検出する。西側の低地には、広い面積で水田を検出している。本調査区に比べかなり一区画が広い水田である。出土遺物は本調査区よりⅠ様式のものが多いが、特定できる時期は変らない。

07－２調査区では1258流路の肩部を一部検出するが、微高地３の続きでは耕地区画を検出しない。1283溝・1284畦畔の続きはあるが、上面浸蝕痕の攪乱で途切れる。全体に畦畔があるが、浸蝕されている部分が多い。遺物も少なく、本調査で限定できる範囲の時期しか示されない。

この面の時期的下限が、弥生時代中期のどのあたりまで下がるかは今後の課題であろう。

第15項　第13－２面（図61・図版26－１・２）

弥生時代中期初頭の居住域が確認された。４棟の竪穴式住居と１棟の掘立柱建物が検出された。弥生時代居住域の発見は08－２調査区の前期居住域に次ぎ、弥生時代竪穴式住居の発見は初の例である。

第12－１面まで踏襲される微地形は、この面で形成され、居住域の範囲は微高地１周辺に限定され

る。調査区南東から入り北に抜ける、水路的な溝もあり、それに連結して住居址の周りを巡る溝や、小規模な耕地区画かと思われる、溝と連結した落込もある。その他に円形周溝・土坑・ピットが散在する。

また、微高地１にはこの面より下の第13‐２ｂ層内に部分的に古土壌がある。低地２部分はその当時はまだ1609流路で、その弯曲の内側、微高地１西斜面にポイントバーが形成されたが、その最上層が土壌化し、そこから多量の遺物が出土した。流路に向かって廃棄されたような状況で、調査区内の住居址が成立する前に、近くに居住域が存在した可能性がある。それらの遺物群は「1609流路東岸ポイントバー最上層」の遺物群としてこの項に付随させて述べる。

微高地１以外では微高地２の裾部で部分的に第13‐２ｂ層内相当の土壌化層が確認できる。その微高地２も上面は粗砂層の表面が若干土壌化した程度の、実質は第13‐２ｂ層上面である。低地も同じである。微高地１の上では、自然土壌が発達するのみならず、整地土層らしきブロック土、耕作土の可能性のあるもの、再堆積層などが入り組み、それを総称して第13‐２層とした。微高地３上にも一部、自然土壌層らしき第13‐２層が遺存する。調査区西半ではほぼ第13‐１層床面の状況であり、大畦畔下の削り残された基部などが若干検出されたのみで遺構密度は低く、遺物も少ない。

低地１は 1498溝が通るラインが東西方向で相対的に一番低い所となる。ただし南東端では、溝は微高地１の上に乗る。それに対し、1501溝南半から 1502溝は微高地１と低地１の境目付近を通る。北側で 1500住居２は半分が微高地１東斜面にかかり、半分は低地１に位置する。微高地１は西側が高く、それも X= －149,900 ライン付近が調査区内最高所となる。

低地２は第12‐１面浸蝕痕の攪乱以外に、北側と南東側には 1609流路埋積層上面が検出され、その上に若干の遺構が確認できた。北西隅で北に広がる 1595浸蝕痕が検出されたが、低地２西側には元はこれに続く浸蝕痕があっただろう。南側では 1512溝南西端付近がその浸蝕痕の肩部になると推測される。1609流路が埋積し、低地２となった当初の状況と言える。

微高地２は東が高く、西が低い。北側のいくつかの不定形な落込は、植物の痕跡のようである。

1258流路は肩部に若干第13‐１層相当層があり、それを除去した形である。微高地３は西が高く、東が低い。上面で人為的遺構は 1484畦畔基部のみである。低地３はわずかに西に低くなる。西側には上面浸蝕痕の攪乱が残る。ここも実質は第13‐２ｂ面である。

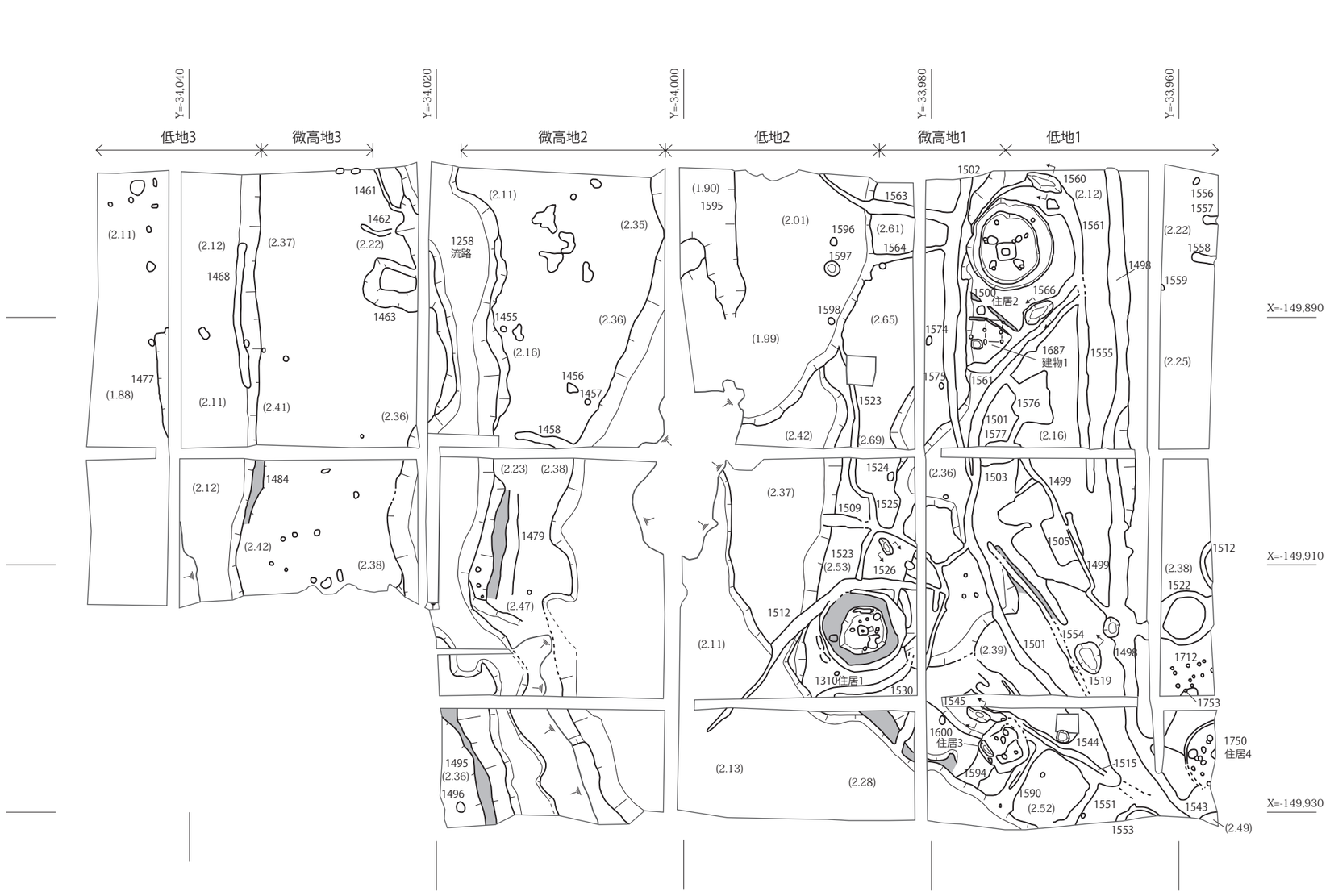
以下に各種の遺構について述べる。

住居址・建物　今回、４棟の竪穴式住居址が検出できたが、各々特色があり、統一性がないとも言える。簡単にまとめると、周堤を持ち２本柱の 1310住居１、ベッド状遺構を持ち４本柱の 1500住居２、地上に壁が立っていた可能性が高い 1600住居３、５～６本柱の 1750住居４となる。また 1687建物１は２×１間の極小の建物で、1500住居２に付随した施設のようである。

1310住居１（図62・63・図版27‐４～29‐１）　第13‐１面検出時点に微高地１上で確認された。当初、不整形な耕地区画と考え掘削したが、深さがあり、中心で 1311炉跡の炭化物層に当たったため、住居址と認識できた。そのため床面の一部を測量前に破壊した（図62・63断面図点線部分）。その時点で、床面整地層の上面を追跡してから断面位置を設定したので、断面図に埋土は記録できなかった。

微高地１の西側の高いラインに位置し、住居の東と南がやや低い。周辺は 1512・1530溝が住居を囲む。周堤は最大幅2.55m、平均的には幅1.4m ほど。周堤の下面で土坑・ピットなどが若干確認され（図版29‐１）、この住居は居住域の成立よりやや遅れて作られた可能性が高い。

竪穴の平面形は不整形だが、北辺が途中に土段もあり直線的で、東西辺が南側に開き、南はやや突出

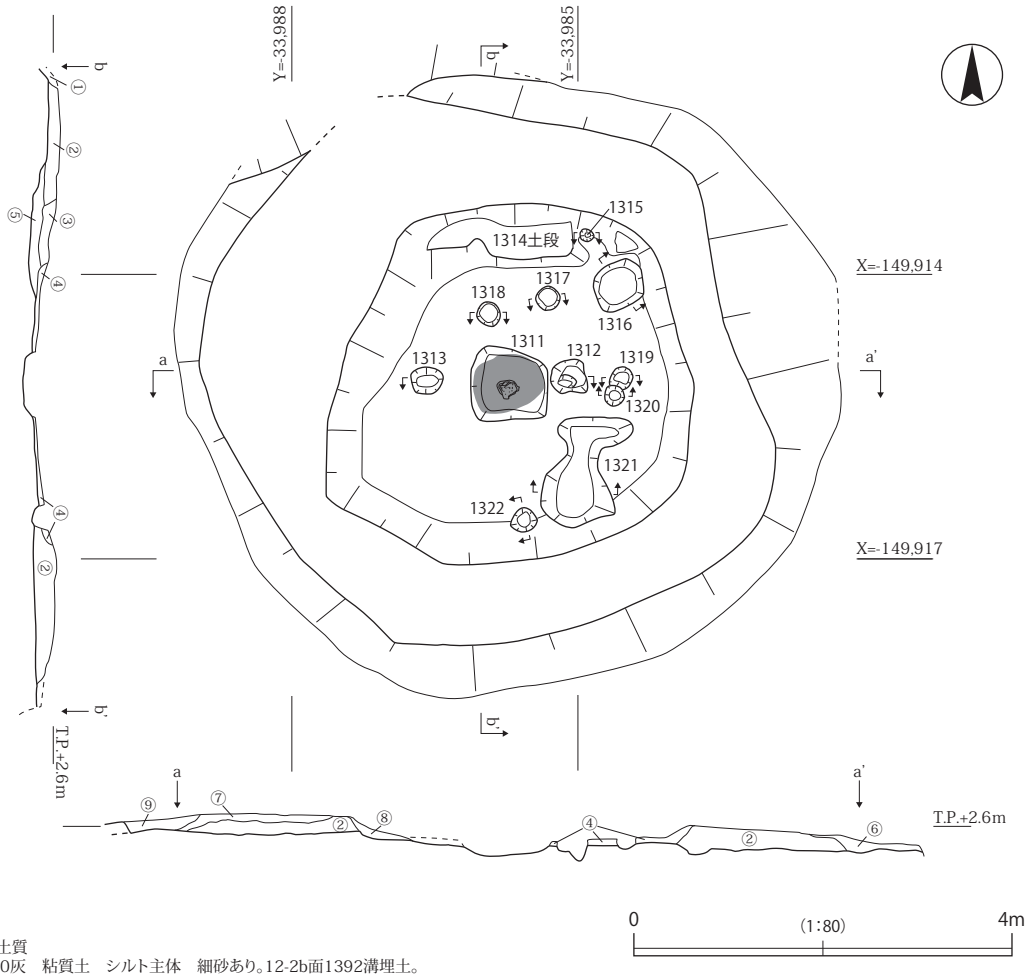


■「畦畔・畦畔基部・住居周堤」

(　)の数字は標高T.P.+○○m

0　(1:400)　20m

図 61　第 13-2 面　全体図



土色・土質
①N4/0灰　粘質土　シルト主体　細砂あり。12-2b面1392溝埋土。
②N4/0～2.5Y5/2灰～暗灰黄　砂質土　細砂～シルト主体　中砂若干あり　「7.5Y6/2灰オリーブ　シルト」の１～２cmブロックわずかにあり。周堤盛土。
③5Y5/3～5/2灰オリーブ　砂質土　細砂～シルト主体　中砂若干あり　１～３cmのブロック状構造。住居内1314土段盛土。
④「N4/0～3/0灰～暗灰　細砂～シルト」内に「10GY5/1暗灰　シルト」・「N3/0暗灰　シルト」の１cm前後のブロック若干あり。住居内床整地土。
⑤N3/0～4/0暗灰～灰　粘質土　シルト主体　細砂多し。住居以前の遺構?
⑥N3/0～4/0暗灰～灰　砂質土　細砂～シルト主体　炭化物若干あり。13-2層の二次堆積か。
⑦10BG5/1～N4/0青灰～灰　粘質土　シルト主体　細砂～中砂多し　②にシルトが増えた感じ。周堤盛土。
⑧5Y5/2～4/2灰オリーブ　砂質土　細砂～シルト主体　中砂わずかにあり　下半に炭化物あり。周堤盛土の崩れか。
⑨5B5/1青灰　粘質土　シルト主体　細砂若干あり。13-2面上の部分堆積か。

炭化物層範囲

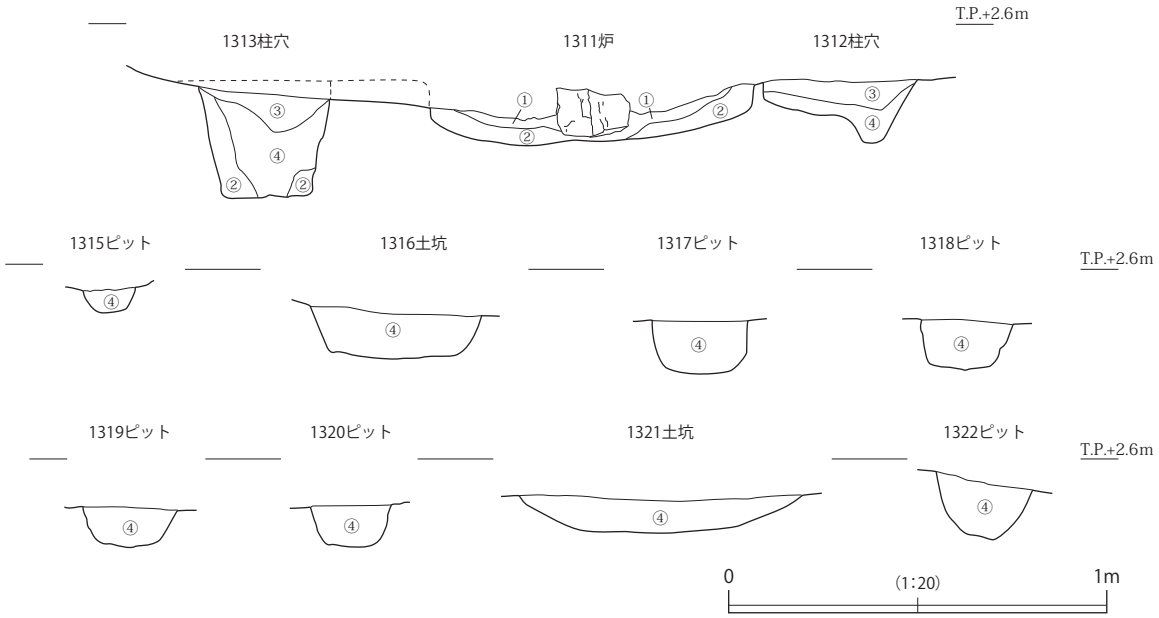
図 62　第 13-2 面　1310 住居 1　床面・断面図

するので五角形と判断した。東西南北とも最大幅3.8m ほどである。床は厚さ８㎝ほどの整地層で形成され、北側を除いて周堤底面より高い。整地層は周堤壁面に沿って上がる。整地層下面、竪穴底面は周堤下面より５㎝ほど低く、周堤も若干削って掘られたように見える。

住居床面では 1311炉跡と 1312・1313柱穴が東西方向に一直線に並ぶ（図版27－４・28－１）。1313柱穴では人為的埋土と抜き取り穴が確認できた（図版28－４）。1312柱穴はやや浅く、抜き取りは確認できないが底面に柱の沈み込み痕らしき凹部が見られる（図63・図版28－３）。中央土坑近くに２本柱がある類松菊里式住居と言える。

1311炉跡は、東西南北ほぼ 0.4m の、ややいびつな隅丸方形の土坑で、深さ 0.27m。1313柱穴の埋土と同じブロック土で、中央が凹部を成すように埋め戻した後、その凹部に植物繊維の残る炭化物を詰め、その中央に立方体状の石を、上面が水平になるように置く。本来は中央土坑と言うべき遺構だが、この構造から炉跡と判断した（図版28-2）。

床面が狭いが、他にもピットや土坑がある。それらは第13－２層再堆積のような流入土で埋まり、住



土色・土質
①7.5Y2/1黒　炭化物　シルト・灰若干あり。植物繊維残るが、編み物などの構造なし。炉内炭化物層。
②「2.5GY4/1暗オリーブ灰　シルト」と「N4/1灰　砂質土　細砂主体　シルトあり(13-2層)」の0.5～２cmのブロック(やや扁平)。炉床整地土・柱穴埋土。
③10G4/1暗緑灰　シルト　わずかに細砂あり　極小のCaの結核あり。13-1b層相当か。
④7.5Y4/1～3/1灰～オリーブ黒　砂質土　細砂主体　シルトあり。流入土、13-2層二次堆積。

図 63　第 13-2 面　1310 住居 1 床面遺溝　断面図

居廃棄以後埋没か。竪穴北辺壁沿いには周堤の残存高より一段低い位置に 1314土段が作られている。周堤と若干異なる盛土である。上面は奥行き 0.32m、幅1.58m である。その東に隣接する 1315 ピットは径0.14m ほどの柱の沈み込みのような形で、この土段に関連する構造の痕跡か。その東の壁沿いにも1314土段と同じ高さの段がわずかに残る。1316土坑も床面北東隅で北辺が 1314土段の裾部ラインと合い、関連する遺構かもしれない。

床面整地層を除去して底面も確認したが、特に遺構はなかった（図版28－５）。

1310住居１出土遺物（図64）　出土遺物は多くない。生駒西麓産弥生土器甕が埋土から１片、1316土坑から３片、周堤盛土からは破片数で以下の通り、弥生土器19｛甕10（ミガキ３（３）、ハケ６（２））、櫛描直線文壺６（６）｝である。1311炉跡からは中央に据えられていた台石のみである。

図64 は 1311炉跡出土台石である。閃緑岩である。側面は半分が風化した礫面、あとは割れ面だが人為的に割ったようではない。上下面は平坦で炉内で上を向いていた上面は、他の面が鉱物の結晶が風化で浮き上がっているのに対し平滑で、磨滅している。被火痕跡はない。

1500住居２（図65・66・図版29－２～32－１）　1502溝東側で、微高地１の東斜面にかかり、その部分だけは竪穴の壁も高いが、東側は低地１に広がる。第13－１面ではこの上で水田面が沈下し 1338落込となっていた。住居の東側は 1561溝が囲むように巡る。その溝の底にある 1560・1566土坑もこの住居に関連する遺構かもしれない。溝との間に周堤があるほうが立地としては理にかなうが、痕跡はない。1561溝の浅い部分が北側で住居竪穴と接触するのは埋没時の浸蝕のようである。周堤がこの溝

との間にあったと仮定すれば幅1.6m ほどで住居のほぼ東半分を巡っていたと想定できよう。

竪穴の平面形はやや不整な円形で径約7.4m、深さ約0.2m。竪穴内にはベッド状遺構が全周する。ベッド状遺構の上面の幅は 1.2 ～ 0.4m と場所により変り、微高地 1 にかかる西側で狭く、東側で広い。構造としては住居中央の底面より 8 ㎝ほど高く削り出し、その上に薄く盛土が為される。部分的には削り出しの段がほとんどなく盛土主体の所や、削り出しより幅広く盛土で拡張する部分もある。盛土は床面整地層より軟弱である。床面は全面整地層で形成されるが、層厚は 4 ㎝ほどと薄い。

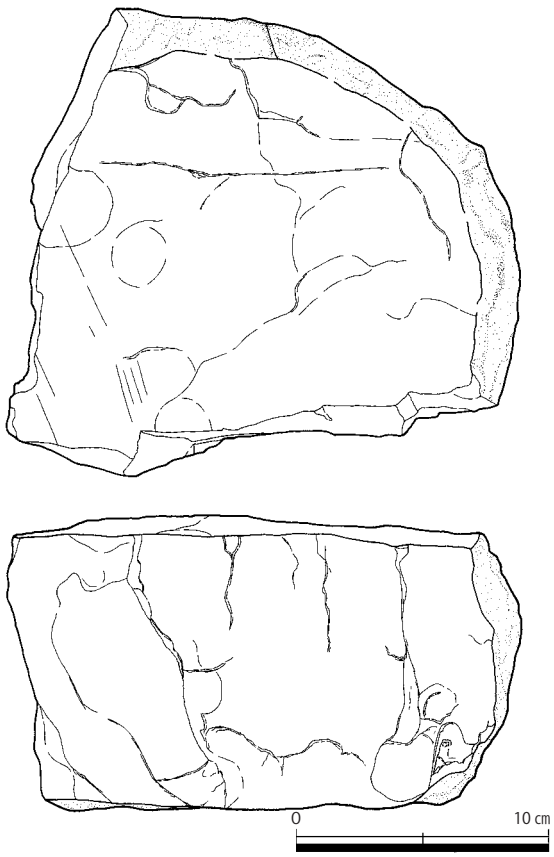


図 64　第 13 － 2 面　1310 住居 1 床面
1311 炉内　台石

床面遺構の内、中央土坑は 1582炉跡とした（図版 30 － 3 ・31 － 5）。複雑な構造を持つ。まず、一辺約 1.7m 四方の隅丸方形の土坑を 10㎝ほど掘り下げ、その底面北東隅にピットを設ける（図版31 － 8）。それをブロック土で埋め戻し（図65 の⑧）、さらにそれに東西1.48m 南北1.42m 四方の方形の土盛りを 3 ㎝ほど盛り上げる。その中央に径約0.76m、深さ 0.32m のピットを掘り（図版31 － 7）、その底に厚さ 16㎝ほど炭化物を敷き詰める（図65 の⑦・図版31 － 6）。炭化物層の上面も擂鉢状で、中央に焼土片があったので、それが炉機能時の底部であろう。その上の埋土から、方形の土盛り上面にかけて炭化物が集中するが、薄い堆積で、炉使用時に散乱したものであろう。防湿のためか、非常に丁寧な作りの炉である。炉の掘り方が 1605柱穴の掘り方を切り、柱を立ててから炉を作ったのが分かる。

柱は 1580・1583・1587・1605柱穴で四本柱を形成する。深さと形から見て、1584 も柱穴と思われるが（図66）、何のための柱かは推測できない。柱は全て抜き取られている。

それ以外の床面遺構は、浅めのピットが若干あるのみである。1606 ピットは唯一ベッド状遺構上面にある遺構だが、その横には、植物の茎を束ねたものがそのまま炭化したような炭化物があった。

遺物は竪穴埋土内で床面から浮くものが多いが、四つほど床面出土のものがあり（図66・図版31 － 1 ～ 4）、土器 1 ～ 4 とした。土器 1 ～ 3 はいずれも壺胴部下半である。土器 1 ・ 2 は破片最上部が埋土上面に接するが、埋土上面に接しない破断面もあり、そこに接合する破片はない。土器 3 は底部を上に向けた状態で破断面が床面に接しているが周囲に接合する破片はない。おそらく土器 1 ～ 4 全て、この残存状態のまま住居床面に置かれたのであろう。土器 4 は蓋片で、これも裾部を欠く。四つとも埋土流入前の投棄とも考えにくく、個体把握できる残存度なので埋土と共に流入したとも考えにくい。 3 個体が壺下半部という共通性も何か意味があるのかもしれない。甕などの煮沸器の個体を欠き、日常使用の土器が残されたとも考えにくいので、住居廃棄時に置かれたものと考えるのが妥当であろう。

1500住居 2 出土遺物（図67 ～ 69） 床面遺物は土器 1 ～ 4 のみである。他の遺物を破片数で以下に述べる。カッコ内に数字のみのものはその前の破片数の中の生駒西麓産胎土の数である（以下同）。

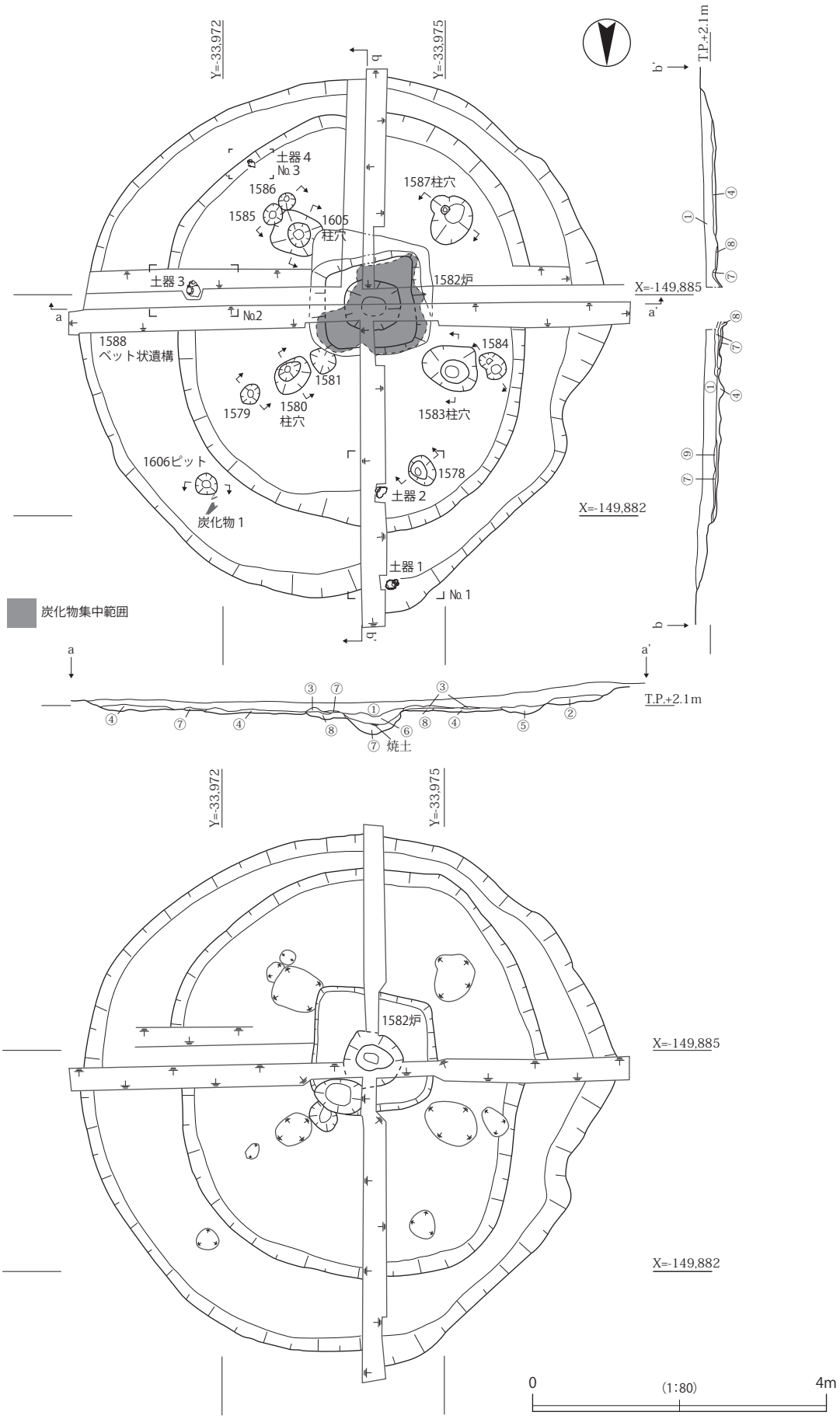


図 65　第 13-2 面　1500 住居 2　床面・断面図 (上)、底面・炉底面 (下)

表７　図65　1500住居２断面　土色・土質

①N4/0~5B3/1灰～暗青灰　粘質土　シルト主体　極細砂～細砂あり　炭化物若干あり　「10Y6/1~6/2灰～オリーブ灰　シルト」の0.5～1㎝のブロックわずかにあり。13-1層の原材となった洪水堆積層か。

②「N4/0灰　シルト～細砂」内に５㎜ほどの「10BG5/1青灰　シルト」の小ブロックあり　炭化物あり。ベッド状遺構盛土。

③「N4/0灰　シルト～極細砂」（大部分）・「10BG5/1青灰　シルト」（わずか）の幅１～５㎝、厚さ２～５㎜の扁平なブロック　その間に「5Y4/1灰　シルト　炭化物多し」あり。床面整地層。

④N4/0~5/0灰　シルト～極細砂　「10BG5/1青灰　シルト」の２～４㎜の小ブロックわずかにあり。基盤の13-2b層に似るが、やや汚れる。床面整地層か。東端はベッド状遺構盛土。

⑤N4/0灰　その他④に同じ。床面遺構埋土。

⑥　①よりブロック少なく炭化物多し、他同質。

⑦ほぼ炭化物　「N5/0灰　シルト（13-2b層）」のラミナ状ブロックわずかにあり　「10YR5/3にぶい黄褐　シルト（焼土）」の0.5～1.5㎝のブロックわずかにあり。炉内炭化物層。

⑧「N5/0灰　シルト（13-2b層）」・「7.5Y3/1オリーブ黒　シルト～極細砂（14-1層）」の２～６㎝のブロック。炉整形盛土。

⑨「10YR6/3にぶい黄褐　シルト（焼土）」が大部分、中に「N5/0灰　シルト（13-2b層）の扁平なブロック若干あり。

埋土内からは、弥生土器44（16）{甕13（７）（ミガキ４（２）、ハケ７（３））、壺22（９）（広口１（１）、櫛描直線文３（１））、鉢５（１）}、サヌカイト製石器12｛石核１、剥片８、チップ３｝、砥石１である。サヌカイト製石器は埋土内で特に集中する事なく散発的に出土した。

1582炉跡内からは弥生土器４（２）｛甕２（ハケ１）｝、サヌカイト製チップ１、1583柱穴内からは弥生土器甕１（１）、1587柱穴内から弥生土器６｛壺４（櫛描直線文１（１）、底部２）｝、1605柱穴内から弥生土器ミガキ甕１、床面整地層から弥生土器４｛ミガキ甕１（１）、壺２（１）、鉢１（１）｝である。

図67－１は床面土器１である。弥生土器壺下半である。内面は底部ユビナデ、胴部板状工具によるナデ、外面下部は磨滅し調整不明、胴部はヨコハケ後タテハケ、胴部の最大径部分よりやや上に櫛描直線文が2帯入る。残存部上半に煤が付着する。胎土には黒雲母・角閃石がわずかしかなく、河内低地産か。時期を限定できる要素は少なく、河内Ⅱ～Ⅲ様式にありえるものとしか言えない。

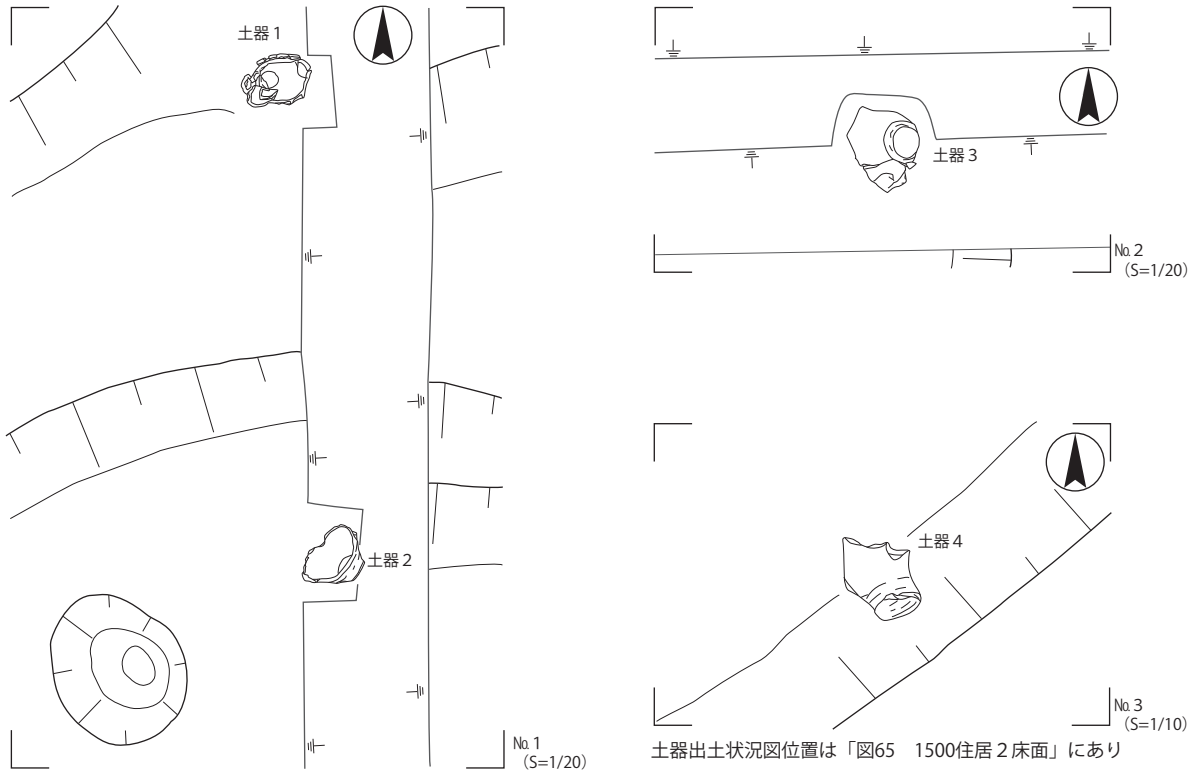
図67－２は床面土器２、弥生土器壺下半である。内面は左上がりナデ、外面は下部ヨコナデ、それを胴部のミガキが切る。これも土器１と胎土が似て、河内低地産か。時期を限定できる要素はない。

図67－３は床面土器３、弥生土器壺下半である。内外面ミガキ、内面は剥離が多く、二次的被火か。胎土には黒雲母あるが、角閃石なく、チャートが若干入り、摂津産か。時期は限定しがたい。

図67－４は床面土器４、弥生土器蓋である。裾部を欠く。内面上半はヨコユビナデ、下半はヨコナデ、下部に煤付着。外面下部は磨滅、煤付着し、調整不明、上部はユビナデ後、ハケ後、ナデで、天井部はユビナデである。胎土には細粒にも角閃石があり、生駒西麓産胎土である。時期は限定しがたい。

図67－５は埋土内出土、弥生土器甕片である。内外面ハケで口縁端部に刻み目、内外面に煤が付着する。胎土内には角閃石が多いが、チャートがわずかに混じるので、河内低地産か。胴部が膨らまない形態のようなので河内Ⅰ～Ⅱ－２様式頃のものか。

図67－６は1582炉跡内で、底面北東隅ピット内から出土した、弥生土器甕底部片である。内面は粘土接合痕を残しながらナデ、外面はタテハケで底部側面はヨコナデがハケを消す。河内低地産か。時期



土器出土状況図位置は「図65　1500住居２床面」にあり

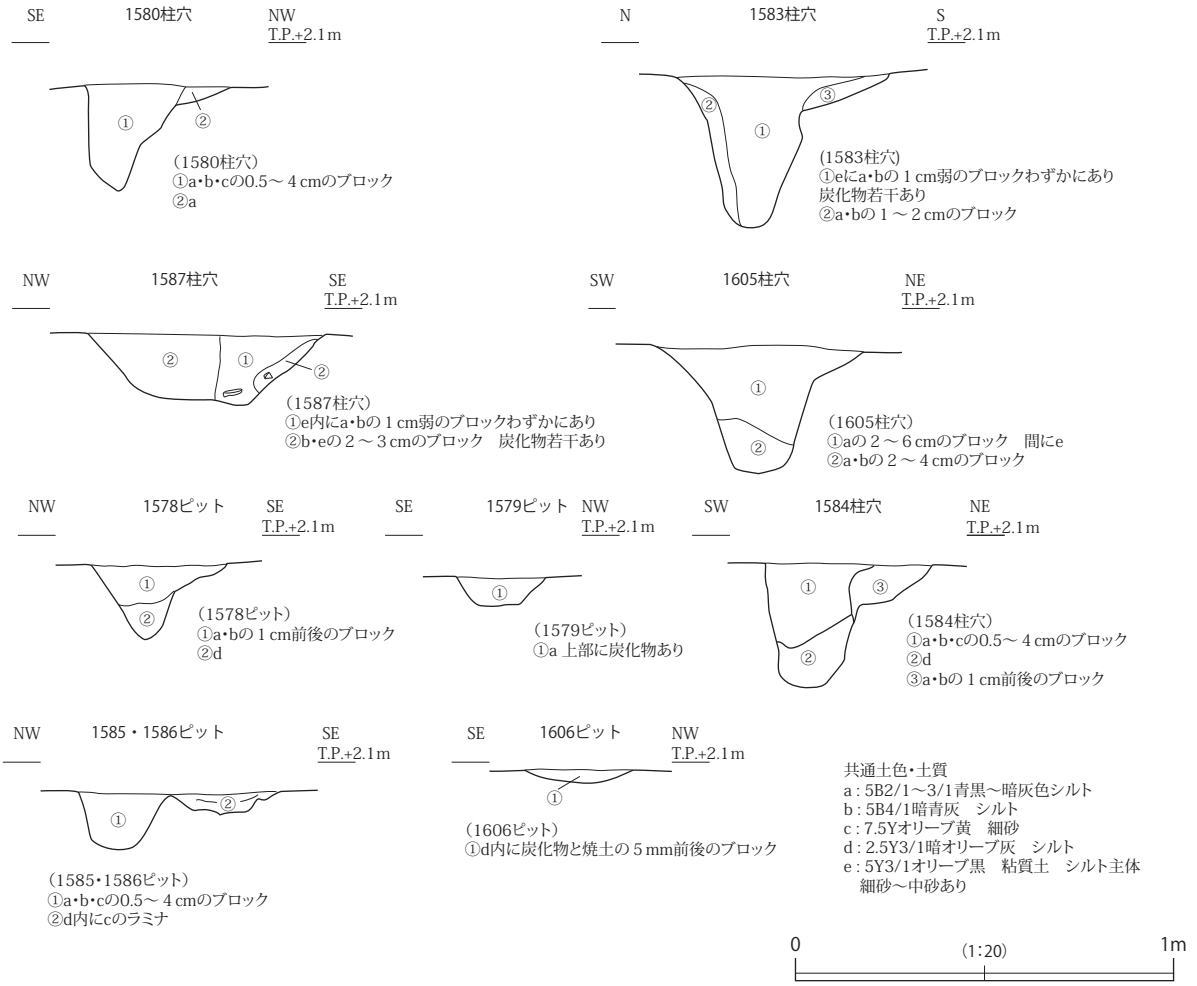


図 66　第 13-2 面　1500 住居 2　床面土器出土状況・遺構断面図

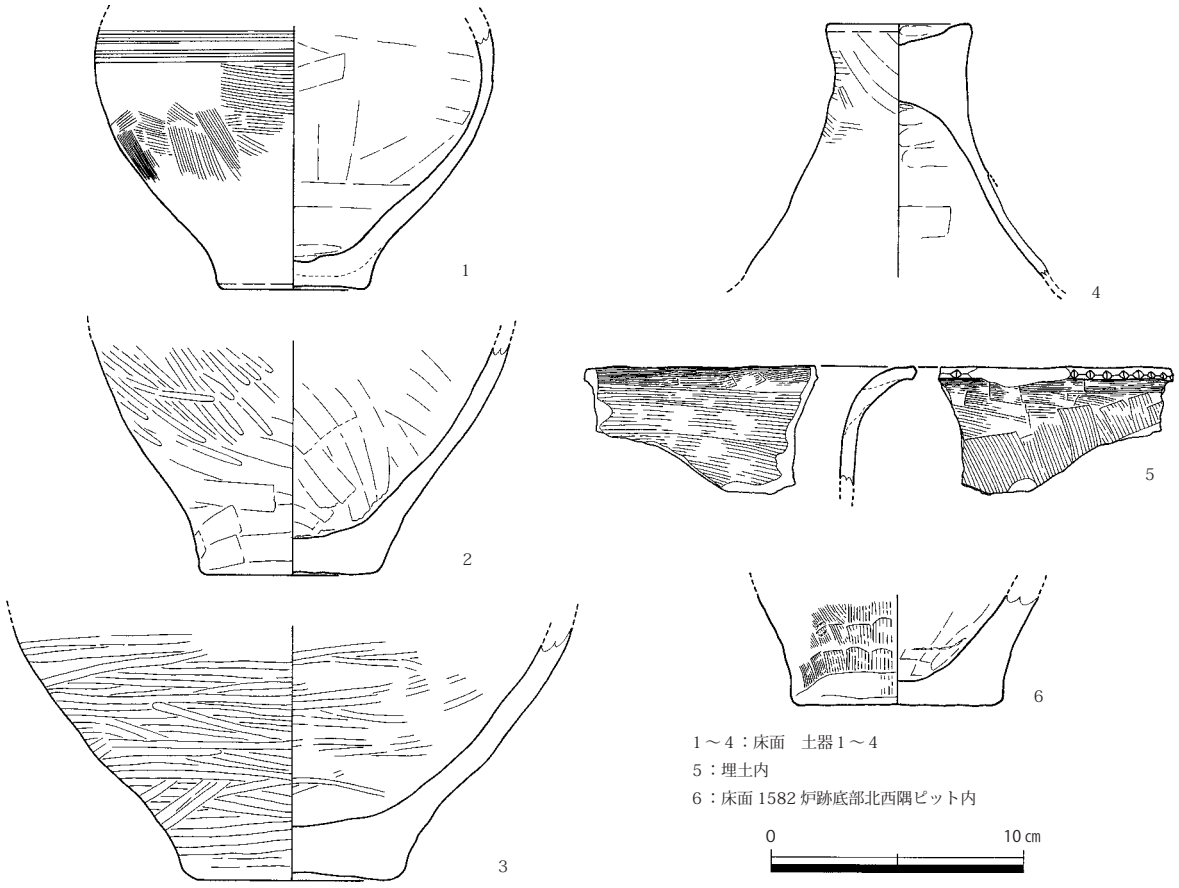


図 67　第 13 － 2 面　1500 住居 2 出土遺物（その 1）

は限定しがたいが、厚みのある底部は河内Ⅰ様式からⅡ－２様式までか。

図68 は埋土内から出土した石器である。

図68 － 1 は砂岩製砥石片である。全体的に磨耗が激しいが、３面の平坦面が残る。

図68 － 2 以下はサヌカイト製石器である。図68 － 2 は剥片で、上部の原礫面を打撃面とする。ネガ面右上の三つの小さな剥離は剥離面の調整か。風化は弱い。

図68 － 3 も剥片である。ポジ面の打点で左右二つに折れたものか。風化は弱い。

図68 － 4 も剥片である。ネガ面下半の剥離面は 90度打撃方向が異なり、原礫面除去の剥離か。上辺はネガ・ポジ両面とも打点が残らず、折れている。

図68 － 5 も剥片である。ポジ面右側はヒビが入りステップ状に剥離する。ネガ面左上の四つの剥離は調整か。風化は弱い。

図68 － 6 も剥片である。上辺は打撃面が失われている。風化は弱い。

図68 － 7 はチップである。上辺に原礫面が残り、そこを打撃面にした調整剥離か。風化は弱い。

図68 － 8 もチップである。側面に原礫面が残り、原材の端を剥離した調整のものか。風化は弱い。

図68 － 9 もチップか。ただ、小さく薄いが、ポジ面と打点がほぼ同じ剥離がネガ面中央にあり、事故的に薄く剥離した剥片の可能性もある。風化は弱い。

図69 は 1 ～ 3 が埋土内出土、 4 は 1582炉跡炭化物層内出土の、サヌカイト製石器である。

図69 － 1 は二次加工のある剥片である。ポジ面の左片には両面からツブシ状の剥離が入る。右上辺にはポジ面から、右下辺にはネガ面から押圧剥離が入り、刃部状になる。風化は強い。

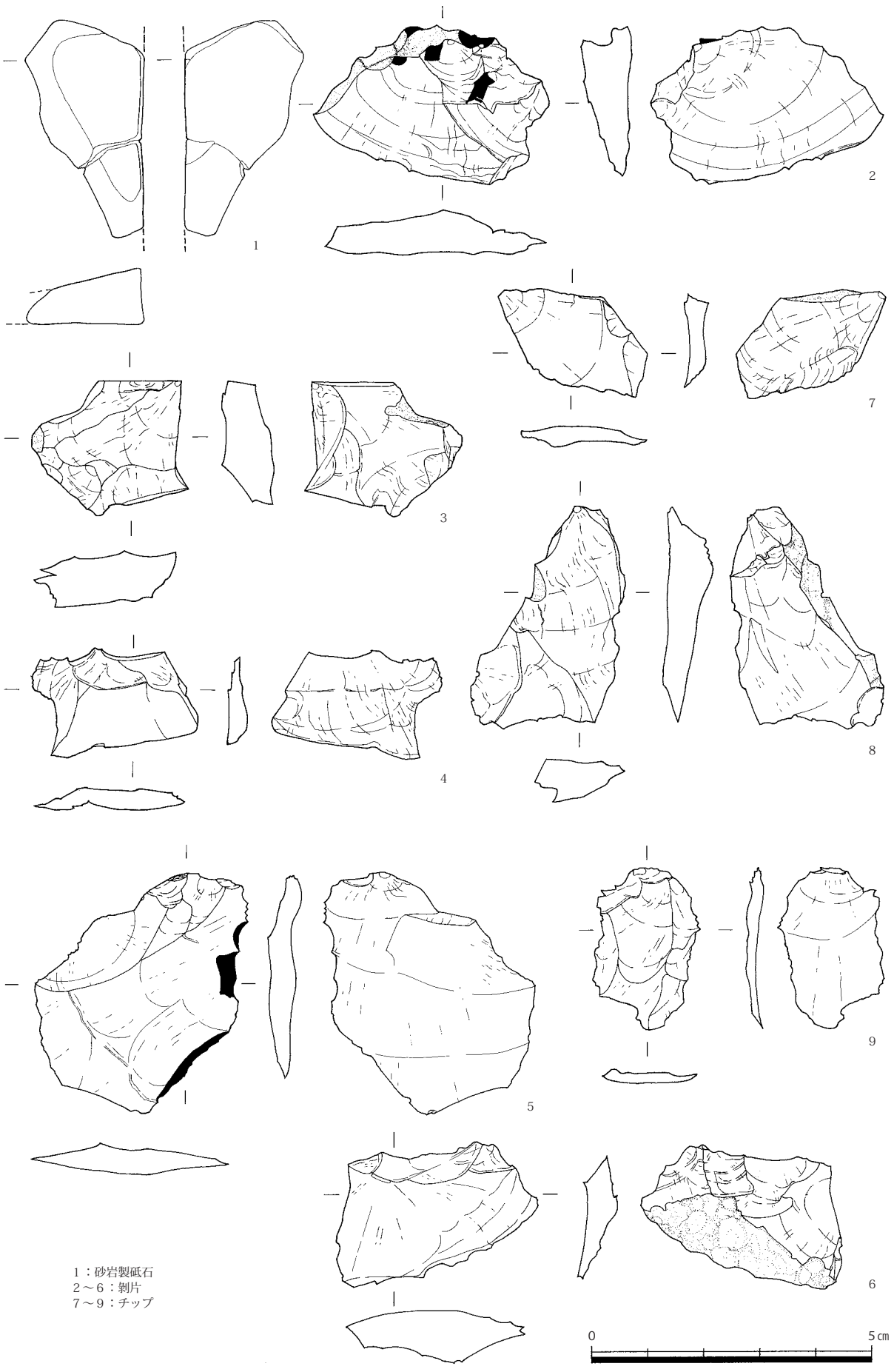
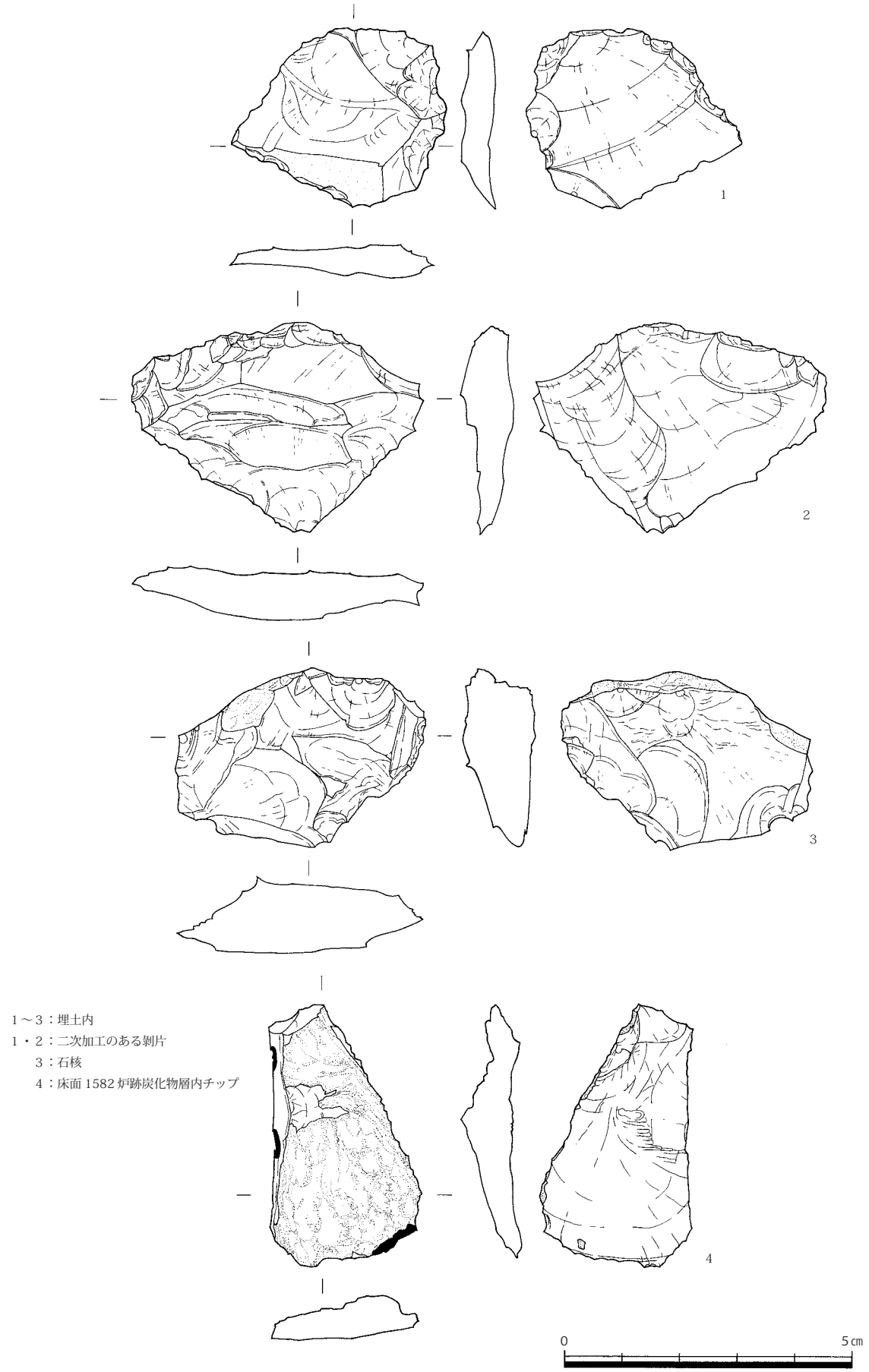


図 68　第 13 － 2 面　1500 住居 2 出土遺物（その 2）石器埋土内出土



1～3：埋土内
1・2：二次加工のある剝片
3：石核
4：床面 1582 炉跡炭化物層内チップ

図 69　第 13 － 2 面　1500 住居 2 出土遺物（その 3）

図69－２も二次加工のある剥片である。ネガ面の剥片採取の剥離はポジ面と180度異なる。ポジ面の打撃面である上辺に表裏からツブシの剥離が入る。左右下辺は押圧剥離ないが、シャープで、刃部として使用可能かと思われる。風化は弱い。

図69－３は石核か。元々上辺の原礫面を打撃面として剥片を採取した残りを、様々な方向から打撃しているようである。風化は弱い。

図69－４はチップである。原礫面除去のものか。風化は弱い。

この住居址の出土遺物を見ると、床面遺物は４点のみだが、住居址廃絶時のなんらかの行為の痕跡である可能性が高い。３点が壺下半部であるのも意味があるのであろう。埋土内遺物は少量で、この住居址が廃棄土坑に転用されたような状況になく、床面遺物も単なる廃棄ではないと思える。

1582炉跡内出土した図67－６甕底部は、炉を作った時に入ったもので、大きさから偶然混ざったとは考えにくい。これも意図的に入れられたものであろう。

埋土内の石器類は、石器製作の組成だが、床面になく、集中もしないので、石器製作後の一括投棄ではなく、周辺から流入した可能性が高い。住居址近辺で石器製作が行われていたのであろうか。

時期を限定できる遺物は少ないが、ミガキ甕片と、胴部の張らないハケ甕が共存している事から、河内Ⅱ－１～２様式の期間には限定できる。

1600住居３（図70・図版32－２～34－２） 調査区内で微高地１が南東に曲がる部分に位置する（図版32－２）。この付近は炭化物混じりの部分堆積層がいくつも重なり合い、どの面が第13－２面相当か把握しにくい部分でもあった。まず、北西に下がる斜面で炭化木が集中している部分と、その南東側に「コ」の字形に巡る溝が検出され（図版33－２・34－１）、当初は炭化木集中部を焚口とした、なんらかの火を使用する施設と考えた。炭化木集中部の実態を明らかにするため、炭化木を台状に残し、周囲の部分層を掘り下げたが、その時点で、住居北西半の床面盛土を除去してしまったものと思われる。

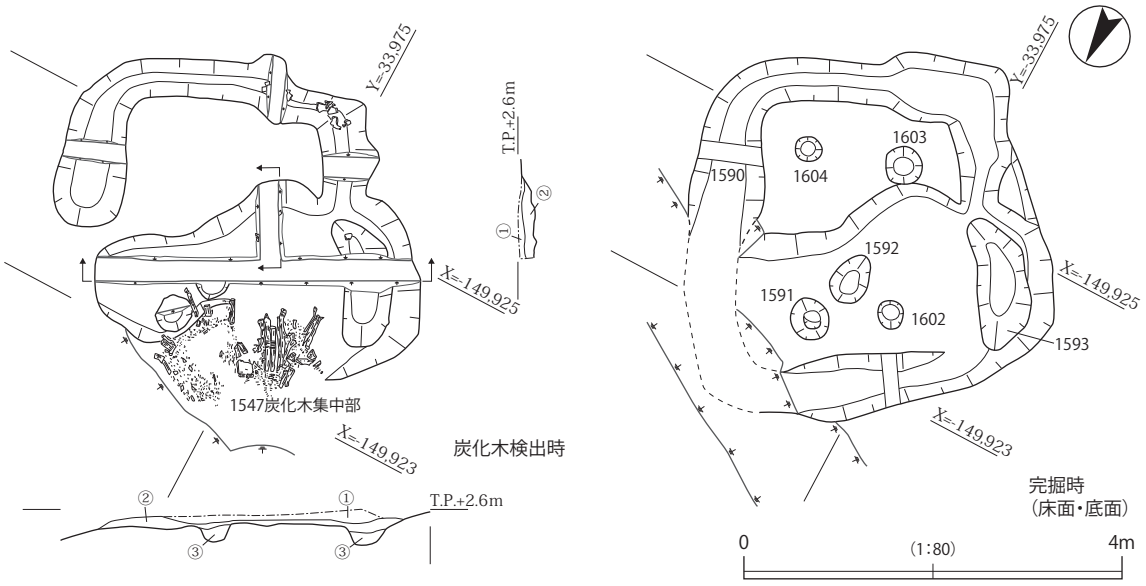
その後、炭化木に壁材のような構造があり、炭化は表面のみと分かり、炭化木集中部の下からも溝が検出され、隅丸方形に溝が巡る事が判明し、1600住居３とした（図版33－１）。

まず、1547炭化木集中部の状況から述べる（図版34－２・３）。炭化木は、第13－１面検出時にその北西端が一部露出していた。北東から南西に1.8m、北西から南東へ1.2mの範囲に集中し、北東側は粒状に炭化して残りが悪い。主体となるのは径４～７㎝の丸木で、樹皮はない。ほとんどが下の住居周溝と直交して北西から南東の方向を向き、残りの良い部分はほぼ密接して並ぶ。取り上げの際、折れ面を見ると、ほとんどのものが炭化は表面付近のみで、内側は生木の状態であった。

そのほぼ中央で、２本の丸木の上に、それと直交する方向で幅７㎝の植物繊維の帯が炭化して残っていた。縄状のもので丸木を緊縛していた痕跡ではないかと考えられる。

その他に、厚さ0.5㎝ほどの薄い板状の材が散在していた。最大のもので幅20㎝ほどある。板状だが木目は確認できず、取り上げの際崩れたが、どの部分でも出土状況の上面は筋状の凹凸があり、下面は比較的平坦であった。大体が丸木の上に乗る状態であった。剥ぎ取った樹皮のようである。

以上の状況から、これは住居壁材で、火災にあい倒れこんだものと考えた。住居周溝の上を覆うので、それより外側に立っていたと考えられる。そのため隅丸方形に巡る溝も、壁溝とはせず1590周溝とした。壁の構造を復元的に見ると、樹皮を剥いた丸木を密に並べ縄で縛り、その外側に樹皮を貼ったものではないかと考えられる。住居周辺は浸蝕が強いせいか、壁を立てた痕跡は遺存しないが、外枠を持ったパネル構造のようなものなら、４枚合わせて外壁を組めば、それだけで軽い上屋なら支えられる



断面土色・土質
①2.5GY3/1暗オリーブ灰　砂質土　細砂～シルト主体　中砂あり　炭化物わずかにあり。13-2層二次堆積。
②「5GY5/1オリーブ灰　砂質土　細砂～中砂主体　シルトあり」内に「N3/1暗灰　シルト」・「N5/0灰　シルト」の0.5～２cm
　のブロックあり　炭化物若干あり。住居内床面整地層か。
③「N4/0灰　シルト」の２～３cmのブロック間に細砂～中砂あり　わずかに炭化物あり。

図 70　第 13-2 面　1600 住居 3

と考える。そういった壁立ち建物であったのではないだろうか。

1590周溝は、壁材と考えられる 1547炭化木集中部がその北西辺の上を覆い、周溝より外側に立っていたと考えられるので、壁溝とは言えない。幅も太い部分では約0.7m、平均的にも 0.45m ほどあり、壁溝の規模ではない。深さは南東側に残る床面から 0.1m ほどある。壁の内側に巡っていた事になる。

北隅が途切れるのは他の遺構に切られるためである。南東辺の南西端付近は長さ 1.3m ほどが幅0.7m ほど膨らみ土坑状を呈する。図70左図はその部分で埋土が２層に分かれた上層のみ掘削した状況である。この部分では下層に炭化物と共に大きめの土器片が比較的多く出土した。その周溝で囲まれる床面の規模は約2.5×2.8m である。

住居東隅の 1593土坑は、1590周溝の一部を成していたのではなく、床面整地層が上を覆い、底面遺構である。南東半床面からは深さ 0.3m ほどと深く、遺物は集中していない。

住居底面で中央に北西に落ちる段がある。その南東半は削り出しの床面である。北西半は先述のとおり、南東床面と同じ高さまで盛土されていたのを調査で確認せず掘削してしまったようである。図70の断面図の②が床面盛土である。

この住居は北西に下る傾斜地に建てられ、高い南東部分は竪穴状に掘削し、北西部にその土を盛って床面を形成したと思われる。断面から見ると、1592 ピットも 1593土坑と同じく底面遺構である。

1591・1602 ピットは床面遺構か底面遺構かは不明だが、底面からでも 0.2 ～ 0.3m の深さがある。それと北西半の 1603・1604 ピットとで四本柱になるようにも見えるが、いびつな長方形になり、柱痕も見られない。1603・1604 ピットも 0.2m ほどの深さで、柱穴の可能性も否定はできないが、この平面規模で、壁立ちの建物であれば、柱はなくても問題ない。

1600住居３は半竪穴式の壁立ちで、壁の内側に溝が巡る特異な建物である。しかも壁はパネル状構

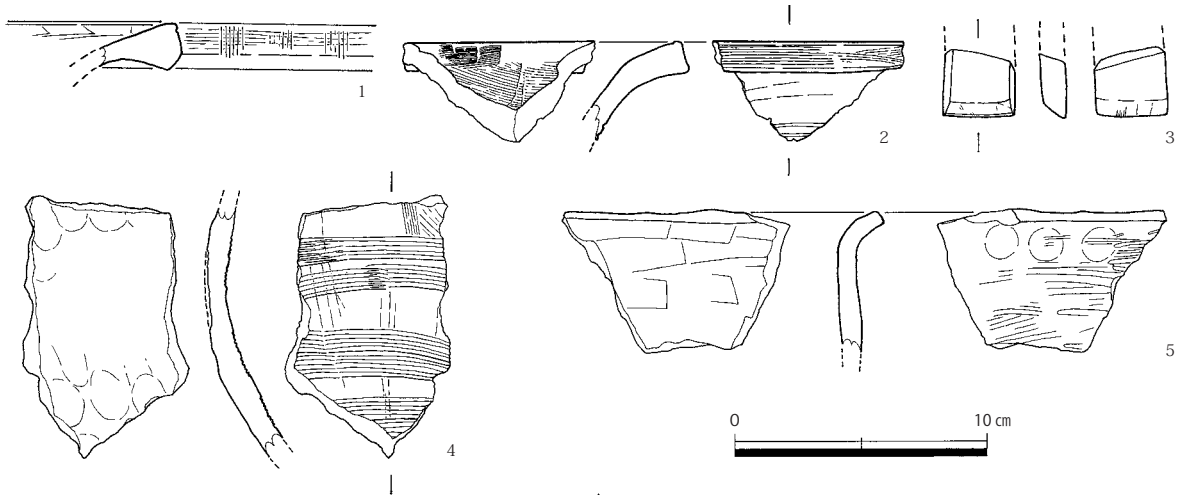


図 71　第 13 － 2 面　1600 住居 3　1590 周構内出土遺物（その 1 ）

造であった可能性が高い。遺構種別は住居としたが、一般的な住居とは考えにくい。性格を、斜面に立地、パネル状の壁、周溝の 3 点から考えると、湿気を防ぐ事を重要視した建物とは言える。

この周辺の部分堆積層には炭化物混じりのものが多く、1590周溝が切る層にも炭化物が混じり、住居 3 成立以前から人の活動があったと見られる。それと周溝が他の溝に切られる事を考え合わせると、1600住居 3 は、居住域存続時期の始めと終わりを除く期間に存在したと言える。

1600住居 3 出土遺物（図71 ～ 73）　先ず、破片数を見る。

1547炭化木集中部では、丸木が、わずかに形を留めるものも含めれば 22本確認できた。その周辺から弥生土器甕 5 ｛ミガキ 2 （ 2 ）、ハケ 1 ｝。床面盛土内からは弥生土器25（ 5 ）｛甕 6 （ハケ 4 ）、壺 6 （ 3 ）｝。1590周溝からは弥生土器106（21）｛甕12（ 6 ）（ハケ 4 （ 4 ））、壺39（15）（広口 4 （ 3 ））、細頸 1 （ 1 ）、櫛描直線文18（ 7 ）｝、サヌカイト製石器15 ｛剥片10、チップ 5 ｝、磨製片刃石斧 1 である。

実測可能なものは 1590周溝から出土した 20点のみであった。

図71 － 1 は弥生土器広口壺片である。内外面ヨコナデで、下に拡張した口縁端部面に櫛描直線文が入り、約 1 ㎝間隔で直交する櫛描直線文が入る。胎土は生駒西麓産である。拡張した口縁端部面に文様を入れる点では、河内Ⅱ － 2 ～Ⅲ － 1 様式にありえる。なお、接合はしないが、形態・胎土・焼成具合が同じ、同一個体の可能性の強い破片が北に 25m ほど離れた 1576落込から出土している。

図71 － 2 も弥生土器広口壺片である。内面ヨコハケ後口縁部ヨコナデ、口縁端部面ヨコハケ、外面はヨコナデで、破片下部に 2 条の沈線文が残る。胎土には角閃石・黒雲母が少なく、河内低地産か。口縁端部面はしっかりしているが、拡張はせず、沈線文が見られるので、河内Ⅱ － 1 様式以前のものか。

図71 － 3 は磨製石器扁平片刃石斧片である。粘板岩製か。全体に丁寧に研磨されている。図下辺の刃部は、左面は擦痕が残り先端部がやや磨滅し丸まる。右面も刃部付近が磨滅し擦痕が残る。

図71 － 4 は弥生土器壺頸部片である。内面は剥離があるが、タテのユビナデが残存する。外面はタテハケ後タテナデ、 2 条の櫛描直線文が 3 帯ある。切り合いがあり、上から見て左回りに施文されている。胎土は角閃石がわずかで、細粒なく、河内低地産か。あまり時期は限定できず、河内Ⅱ～Ⅲ様式か。

図71 － 5 は弥生土器甕片である。内面はヨコナデ、外面は口縁屈曲部にユビオサエ残るが、その上にヨコミガキである。生駒西麓産胎土である。ミガキ甕で口縁の屈曲の緩いものは河内Ⅱ － 1 ～ 2 様式と思われ、外面ヨコミガキが多いのはその中でもⅡ － 1 様式であろう。

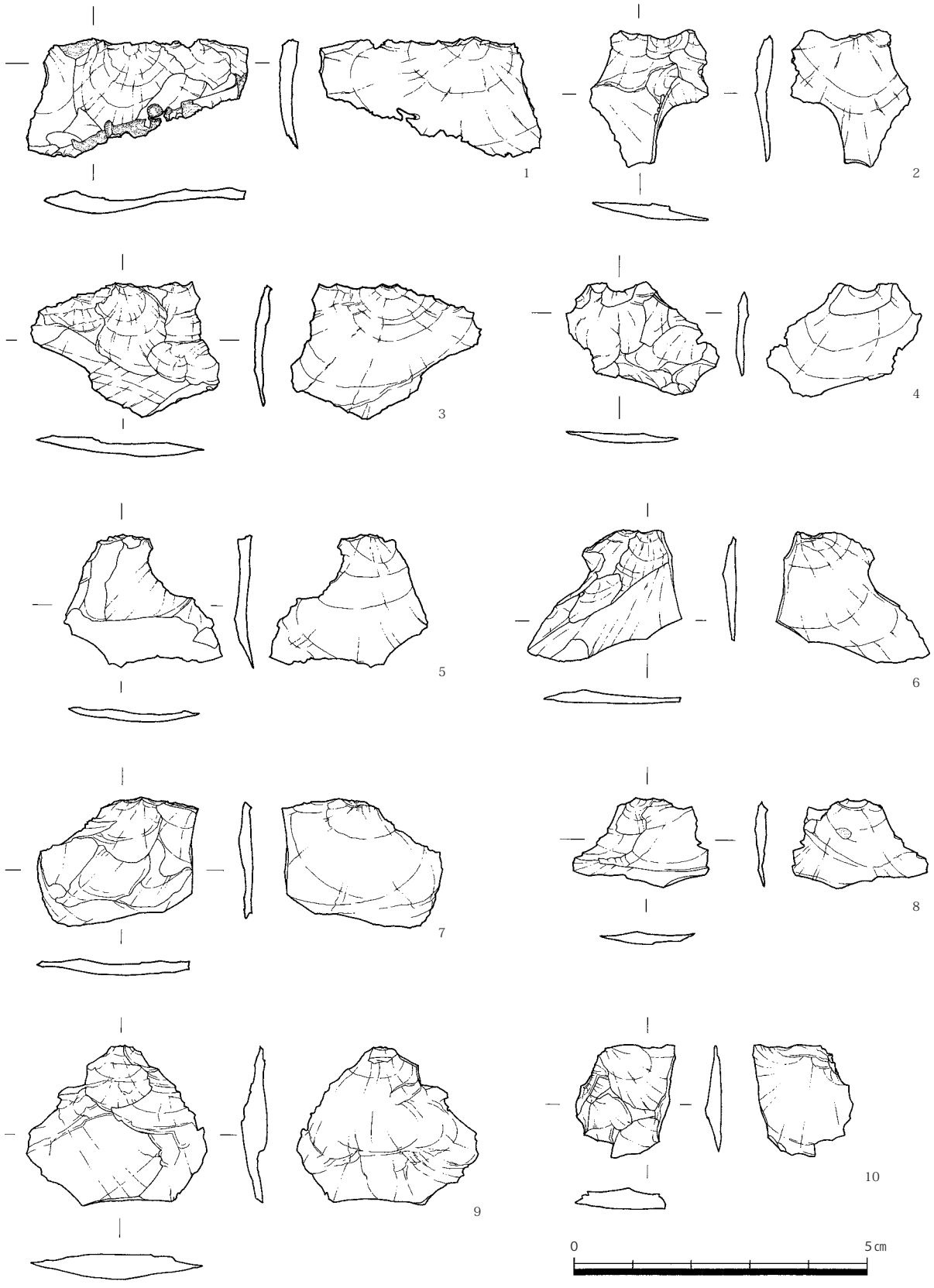


図 72　第 13 － 2 面　1600 住居 3　1590 周溝内出土遺物（その 2）石器剥片

図72 はサヌカイト製剥片、図73 はサヌカイト製チップである。

図72 - 1 は、下辺に原礫面が残り、薄く小さいが、ネガ面で左右に調整の剥離が見られるので剥片である。薄く剥離してしまった失敗品であろう。風化は弱い。

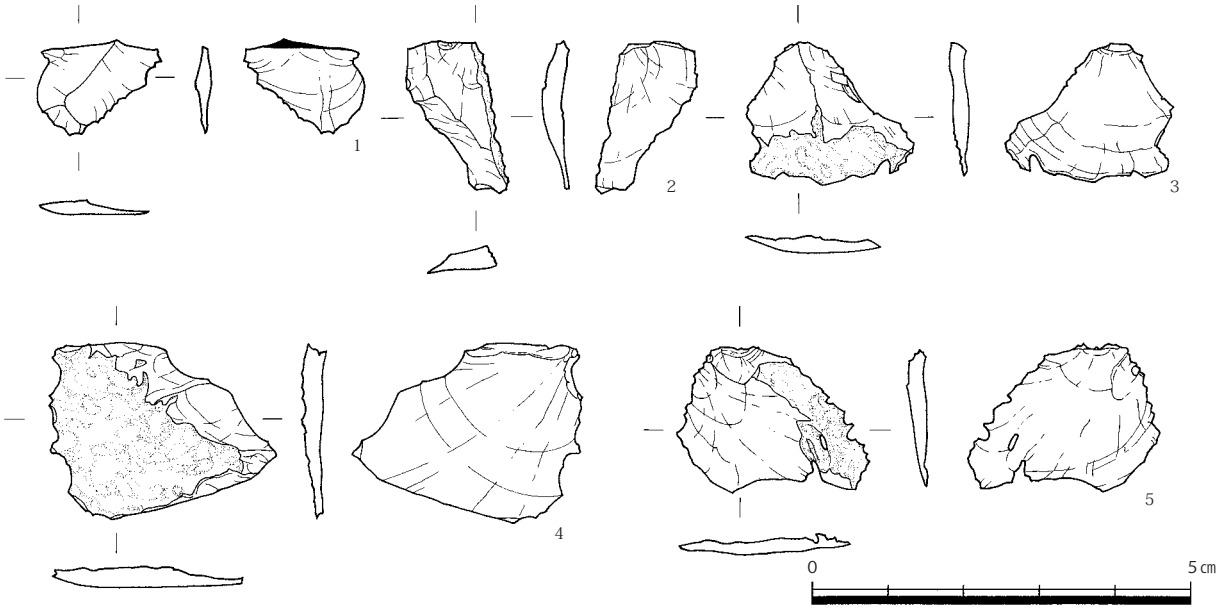


図 73　第 13 － 2 面　1600 住居 3　1590 周溝内出土遺物（その 3）石器チップ

図72 - 2はネガ面右下に折れが見られる。その左の剥離面は打点方向が異なる。風化は弱い。

図72 - 3はネガ面左下に打点方向の異なる剥離面がある。左右には調整の剥離が入る。風化は弱い。

図72 - 4はネガ面左上の一番大きな剥離面が両極打法状になっている他、下辺からの剥離も見られる。右上辺や左下辺の小さな凹部は原礫面の気孔のようである。風化はやや進む。

図72 - 5はネガ面下に打撃方向不明の剥離面があり、板状剥片の端に近い剥片か。風化は弱い。

図72 - 6はネガ面右辺が折れである。上辺はやや丸味がある原礫面が残る。風化は弱い。

図72 - 7はネガ面右辺と左上辺が折れである。風化は弱い。

図72 - 8はポジ面に捕獲岩が見られる。上辺が打撃面だがネガ面の打点は左右に動く。風化は弱い。

図72 - 9はネガ面下半の大きな剥離面が、打撃方向が若干異なり、板状剥片端の原礫面除去の剥離か。風化は弱い。

図72 - 10 はネガ面右辺が折れである。風化は弱い。

剥片はいずれも小さく、薄く、失敗品として放棄されたか。原材も小さく、自然礫が多い。

図73 - 1は上辺が折れだが、ポジ面の打点はそう遠くない。剥離面調整のチップか。風化は弱い。

図73 - 2はネガ面右辺に原礫面が残る。左辺沿いの剥離面が、剥片の剥離か。剥離面の調整のチップである。風化は弱い。

図73 - 3はネガ面下部に原礫面が残り、その角度から原礫面除去のチップと思われる。風化は弱い。

図73 - 4はネガ面のほとんどが原礫面で、原礫面除去のチップである。上辺は剥離により打撃面が形成されている。風化は弱い。

図73 - 5はネガ面右側に原礫面残るが、左の大きな剥離面が剥片のネガか。その右上面はポジ面との同時期割れ。ポジ面の打点が原礫の端寄りなので、剥離面調整のチップであろう。風化は弱い。

チップから推測される原材も剥片と同様で、石質が似るものもある。同じ石器製作の場から廃棄された可能性が高いと言える。

1600住居3の遺物は河内Ⅱ－1様式のものもあるが、時期的には河内Ⅱ－2様式期と考えられる。土器構成は甕より壺の破片が多いのが、日常生活のセットとは異なる。また、住居の中を巡る溝の、南隅

付近に集中する。その部分の土器片は大きいものが多く、集中する事からも、住居存続期間に周溝がオープンで、人為的に入れられた可能性が高い。しかし、ほとんど接合しないほど完形率が悪く、破損した個体をそのまま投棄したとは考えにくい。

石器類は、石器製作過程の剥片・チップだが、石核・二次加工のある剥片・石器未製品などを欠き、不自然である。投棄より、小さく軽いものだけが流入したか。土器の状況とは矛盾点がある。
今回の調査では珍しい磨製石斧の存在も見逃せない。

遺物の面でも一般的な住居址と考えるより特殊性が目立つと言えよう。

1750住居4（図74・図版34‐4～35‐2） 調査区東辺の南端付近に約半分が露出するように検出された竪穴式住居址である。この付近は低地1と微高地1の高度差が少ないが、住居址部分では第13‐1層が第13‐2b層に接して水平に堆積しており、住居址は低地1に立地していると言える。

同じ面で住居より後の浸蝕痕や段差が見られた他、同じ灰色系シルトの薄い層が重なり、第13‐2面検出当初は発見できなかった。そこから薄く掘削すると、層の変化があり、弧状の壁溝が検出されたので、急遽その面で精査し検出した。結果的に住居床面整地土層（図74住居断面の④）や1723炉周辺の層（⑥・⑧）などを削平して底面を直接検出してしまい、底面・床面遺構の分別に失敗した。さらに南側は、1498溝に流れ込む浸蝕痕らしき1543落込周辺の浸蝕で削られ、壁溝はほとんど痕跡を留めるのみであった。しかしその部分でも幾つかの住居内遺構は残存している。

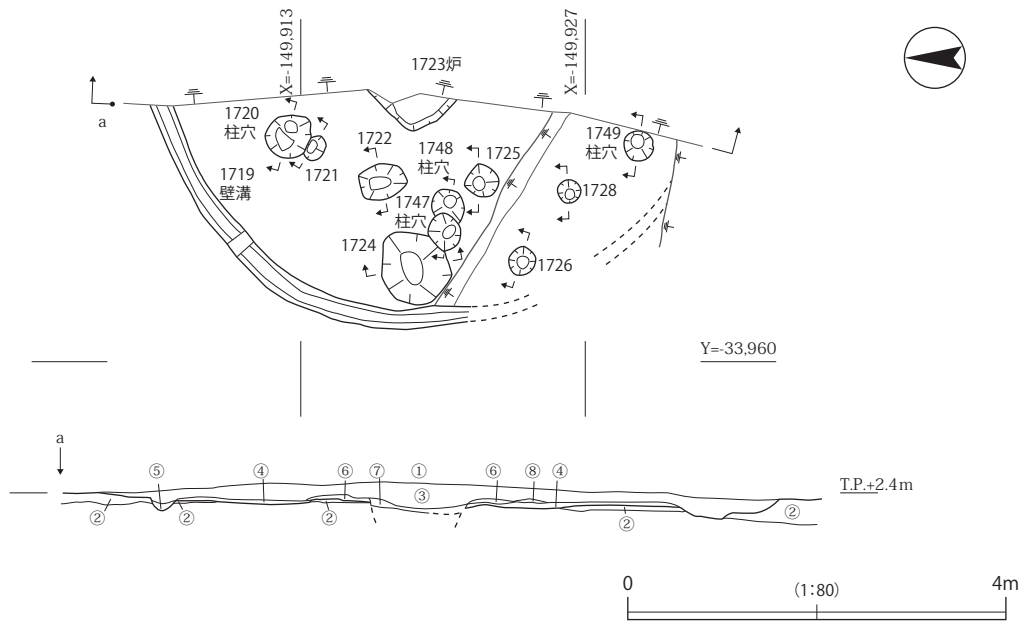
1719壁溝は幅0.2m前後、深さ約0.12mで、壁構造の痕跡はないが、壁溝と理解できる規模である。溝埋土は住居廃絶後に崩落して堆積したものか。この壁溝から住居の平面形を考えると、径6.5mほどの円形と考えられる。竪穴の深さは断面でも0.0 8mほどしか残存していない、付近の第13‐1層の厚さも10㎝弱で、耕作による削平を考えて復元しても0.2m弱の深さと考えられる。周堤の痕跡は皆無だが、もしあっても南西側を通る主要な水路である1498溝との間の約1.6mを越える幅ではないであろう。竪穴が非常に浅いタイプの竪穴式住居と言える。

住居内遺構は、床面・底面の分別が困難だが、各遺構埋土から類推できる。図74下半の遺構内埋土のうち、②は住居床面整地層とブロック土の大きさが異なるのみで同質で、住居建設時に掘削され、すぐ埋められた遺構の埋土と考えられる。①は住居竪穴内流入埋土と同質で、住居廃絶時に開いていた遺構に入ったのであろう。③も壁溝埋土と同質で住居廃絶後の埋土と考えられる。

柱穴は四つ検出されている（図74）。1747・1748柱穴は1747が1748を切り、1748は②の埋土である。最初に1748柱穴を掘ったが位置が悪く、埋めて1747柱穴を掘り直したと考えられる。切り合い部分の断面形に丸味があるのも、埋め戻しと掘り直しが一連の作業だったせいであろう。①の埋土は1720柱穴の例を見ても柱抜き取り穴埋土であろう。半分弱の面積に3本の柱が立つ。その位置を見ると1720・1749柱穴が半割ラインに近いので五本柱であった可能性が高いが、六本柱も否定できない。

ピットはほとんどの埋土が②で、底面遺構か、床面整地時点に埋められたと思われる。ただ1722ピットのみが埋土③で、住居廃絶時に開いていたようだ。1722ピットは1720・1747柱穴間のほぼ中央に位置するのも注目できる。

1723炉跡は中央土坑である。炉跡としたが、確定的とは言えない。調査区法面にかかり完掘できなかったが、深いようである。炭化物は入るが純粋な炭化物層ではない。その土坑周辺には薄い炭化物層があり（図74住居断面⑥）、ややシルトが混じり固く、その部分では床面整地層上面がやや下がるので、盛土であった可能性がある。おそらくは土坑周囲を巡っていたのであろう。その外側の一部にある⑧は



断面土色・土質
①N4/1～7.5Y5/1灰　粘質土　シルト主体　わずかに極細砂あり　「7.5Y7/2灰白　シルト」の１cm弱のブロックあり　斑状Feあり。13-1層。
②N4/1～5/1灰　シルト　わずかに極細砂あり　斑状Feあり。13-2b層　①と共に③と区別つきにくい。
③N4/1～2.5GY4/1灰～暗オリーブ灰　粘質土　シルト主体　極細砂若干あり　炭化物わずかにあり。住居址埋土。
④N4/0灰　粘質土　シルト主体　極細砂わずかにあり　炭化物わずかにあり
「5Y3/1オリーブ黒　シルト～極細砂（14-1層）」・「N5/1灰　シルト（13-2b層）」の１cm前後のブロック若干あり。住居址床面整地層。
⑤14-1層と②（13-2b層）の２～１cmのブロック　やや混濁。1719壁溝埋土　ブロックは崩落土か。
⑥5Y2/1黒　炭化物層　ややシルトあり。1723炉からの掻き出しか、炉周辺施設か。
⑦N3/1～4/1暗灰～灰　シルト　炭化物あり。1723炉埋土。（炉内埋土これより下はトレンチ法面のため確認できず。）
⑧N3/1暗灰　粘質土　シルト主体　極細砂あり　炭化物若干あり。⑦の掻き出しか。

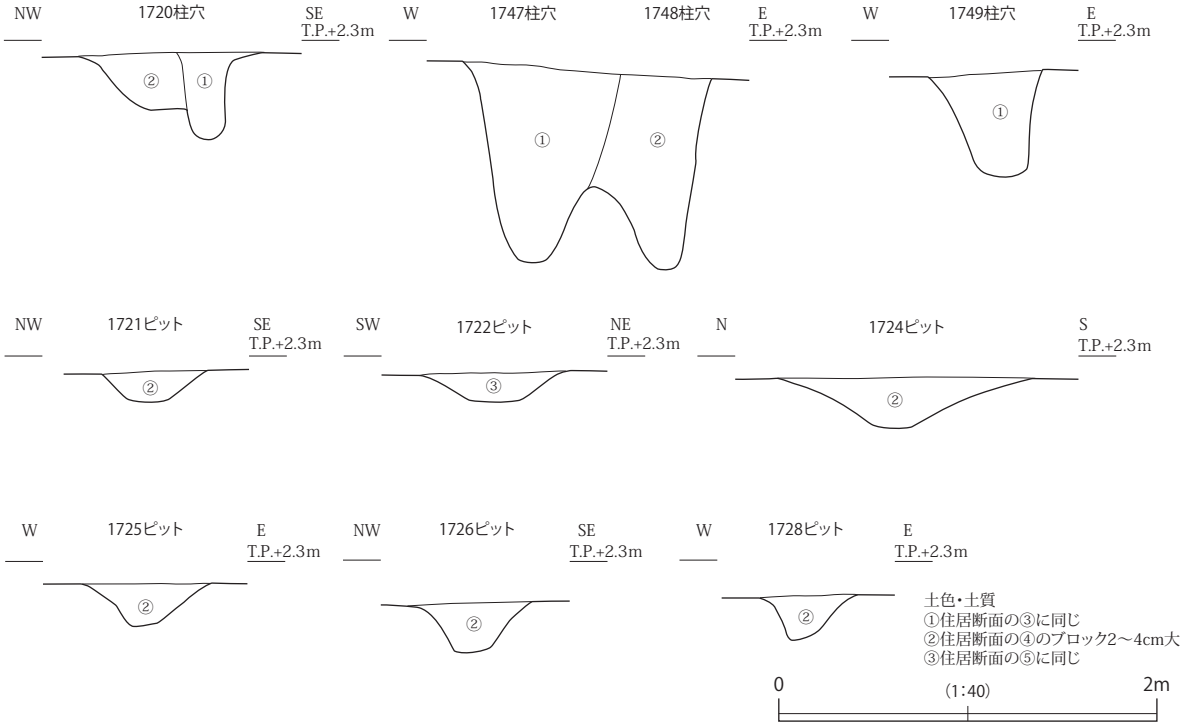


図 74　第 13-2 面　1750 住居 4　底面 (床面遺構含む) ・断面図、住居内遺構　断面図

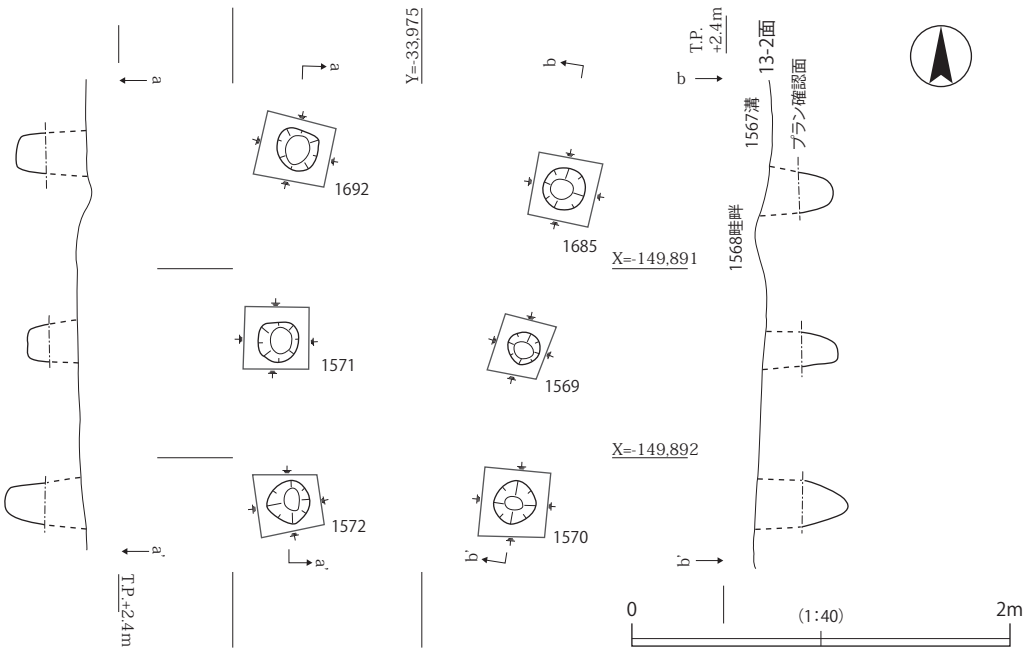


図 75　第 13-2 面　1687 建物 1

炭化物混じりの粘質土で中央土坑から掻き出したような感じである。

1750住居 4 は、弥生時代中期の住居址としては一般的な形である。出土遺物は非常に少ない。検出前に底面まで掘削した影響もあろうが、その掘削で出土した遺物も少量である。住居内遺構では、1720・1749柱穴から各々 1 片、生駒西麓産胎土の弥生土器片が出土した。1720柱穴のものは細頸壷片で、北北西に約4.8m 離れた 1712 ピット土器 1 と接合した。詳しい状況は 1712 ピットで後述する。

1687建物 1（図75） 1500住居 2 の南西側に位置する。微高地 1 の東斜面である。当初、1685・1692 柱穴は、1561溝に取り付く 1567溝両側の小畦畔盛土に覆われて見えなかった。1569 ～ 1572柱穴の四つが方形を成していたが、規模も小さく、柱痕や抜き取り痕もないため建物とするのは無理と考えていた。第13‐2 b 面確認の掘削を開始した際、1685・1692柱穴を発見し、1 × 2 間の掘立柱建物を認識した。そのため検出面はかなり下となる。図75 では本来の第13‐2 面の高さも合わせて図示した。

柱穴心々距離で南北1.84m、東西1.42m の非常に小さい 1 × 2 間の掘立柱建物である。桁行ラインはやや弧を描いて北が東に傾き、それも東の桁行の方が傾き激しいため、北側がやや開く形である。柱穴は全て径0.2m 前後で、復元的には深さ 0.26 ～ 0.48m ほど、隅柱、特に南側妻の隅柱が深い。柱穴の深さは高床式の倉と考える事も可能で、1500住居 2 に付随する小型の倉と思われる。

遺物は 1570柱穴から生駒西麓産胎土の弥生土器らしき破片が 1 片出土したのみである。

1712・1753 ピット及びその出土遺物（図76・79・図版27‐3） 調査区南東部で 1750住居 4 の北側、ピットが集中する部分にある。1712 ピットはそのピット群の北辺中央、1753 ピットは南端に位置する。

1712 ピットは長径0.52m、短径0.42m の不整形で深さ 0.2m ほど。埋土は灰色系のシルトであった。西側肩部近くで弥生土器細頸壷半個体が出土し、土器 1 とした。横置状態で破断面を上に向け、その上端は埋土上端に接する。特徴的なのはこの土器 1 の破片が他遺構からも出土した事である。1750住居 4、1720柱穴から出土し、西側の 1498溝から 2 片、第13‐1 面で北西に約 4 m 離れた 1378落込から 2 片出土し、全てが土器 1 に接合した。1378落込は 1498溝の上に位置している。

それら他遺構出土の破片にはさほど磨滅や破砕がない。1712 ピットに完形の土器が埋納され、その上部が削平され、割れた破片が他遺構に入ったなら、磨滅・破砕も激しく、接合部分も少なくなるはず

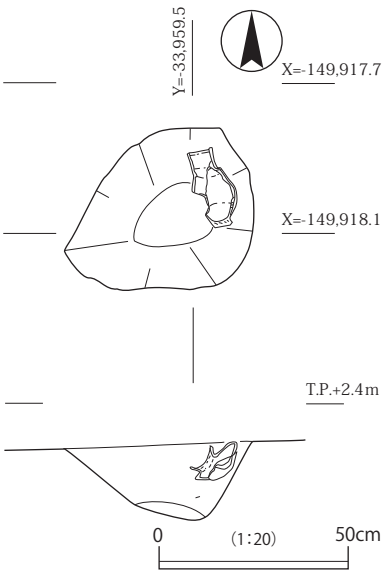


図 76　第 13-2 面　1712 ピット
土器 1　出土状況

だが、そのような状態ではない。また、土器 1 の破断面がピット埋土上端に達しても、一部のみであり、ピット周辺は第13‐1 層耕作の削平があるので、本来、土器破断面は埋土上端に接していなかった可能性が高い。つまり、土器 1 は割れた半個体がピットに埋納され、それ以外の破片が周辺遺構に流入したと考えられる。土器埋納時点で 1498溝はオープンで、住居 4 の柱穴で埋土が 1712 ピットに似るのは柱抜き取り穴の方であり、住居廃絶と 1712 ピット土器埋納の時期が近い事を示す。

図79‐2がその土器 1 で、弥生土器細頸壷である。内面は、胴部にユビオサエ・ユビナデ、頸部以上はヨコナデ、口縁端部近くに粘土接合痕が残る。外面は底部側面付近にヨコケズリ、それ以上はヨコナデで、胴部上半から口縁まで流水文が入る。流水文は、11 帯の櫛描直線文を入れ、2 帯の間を、対向する半円形の櫛描文でつなぐ形を、全周の 1/6 の単位で上下 1 帯ずつずらしてつなぐが、上から 6 帯目と 9 帯目は下につながらない。特に 9 帯目は 1 帯幅の半円形櫛描文で処理する。胎土は明るい発色だが、角閃石が多量にあり、黒雲母もあり、生駒西麓産胎土である。細頸壷は、文様が口縁上端にまで入るのは河内Ⅱ－3 様式以降とされ、Ⅲ－1 様式から口縁が内弯する。なので、これは河内Ⅱ－3 様式の時期に限定されると言え、この面としては最も遅い時期で、存続期間の下限を示すものか。また、1750住居 4 出土の破片は、住居廃絶がその時期に近い事を示す。

1753 ピットは径約0.21m のやや不整な円形で、深さ 0.24m である。埋土は灰色系シルトである。底部から図79‐3の礫が出土した。

図79‐3は敲き石か。閃緑岩である。全体に石斧のような形はするが、自然礫で加工はない。ただ、図下端面に敲打痕が多数残り、上辺にも 2 ヶ所、打撃による割れが見られる。

この二つが属するピット群は、埋土は共通し、柱痕・ブロック土などは認められない。また、調査範囲では建物状の配列もない。しかし、1687建物 1 の例もあり、1750住居 4 に付随する建物の存在は否定できない。また、北に性格不明の円形周溝が 2 基見られ、それに付随する可能性も考えられる。

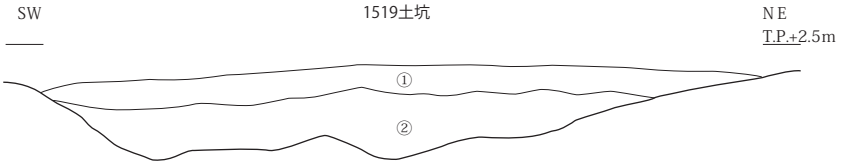
土坑（1519・1526・1532・1545・1560・1566）及びその出土遺物（図77・78・80・図版27‐2）

幾つかの土坑が確認されたが、その中でも長楕円形に近い平面形を持ち、埋土内に炭化物・焼土などを含む層がある、等の共通点がある土坑が見られた。住居址の周辺にあるものが多く、溝の中に掘られたものもある。

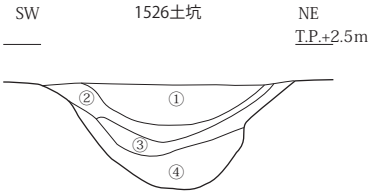
1519土坑は長軸2.65m、短軸1.85m で、深さ 0.25m である。これのみは住居址から離れた位置にあり、炭化物を含む埋土もない。1554溝の傍らにあり、水溜のようなものか。埋土は上下 2 層で、下は人為的埋土、上層は灰色シルト系で下層沈下後に流入し、第13‐1 層としての攪拌を免れた、第13‐1 b 層とも言うべき層であろう。遺物はない。

1526土坑は 1310住居 1 の北、約2.6m の位置にある。長軸1.5m、短軸0.62m で深さ 0.28m である。炭化物の多い水成堆積層が最下層、その上に純粋な炭化物層が堆積後、ブロック土で埋められるが凹部を残し、第13‐1 層が堆積する。遺物は土器片が、弥生土器 4 ｛ミガキ甕 2（2）、壺 2｝である。

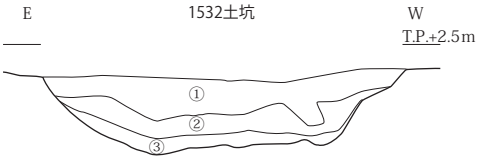
1532土坑は 1310住居 1 周堤南端盛土下から検出された。長軸は北東から南西方向で 1.78m、短軸は



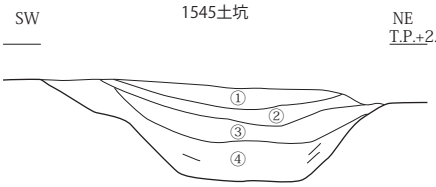
1519土坑断面土色・土質
①10Y4/1灰　粘質土　シルト主体　細砂～中砂若干あり。
②「N4/0灰　粘質土　シルト主体　細砂若干あり」・「10GY5/1緑灰　シルト(13-2b層)」の４～６cmのブロック。



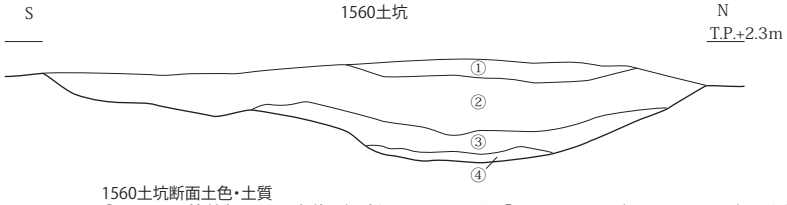
1526土坑断面土色・土質
①7.5Y5/1灰　砂質土　細砂～中砂主体　シルトあり　炭化物わずかにあり。
②「2.5GY5/1オリーブ灰　シルト～極細砂」の１～３cmのブロック間に「5Y5/1灰細砂～シルト」　炭化物わずかにあり。
③炭化物層
④N4/0灰　シルト～細砂　炭化物多し。



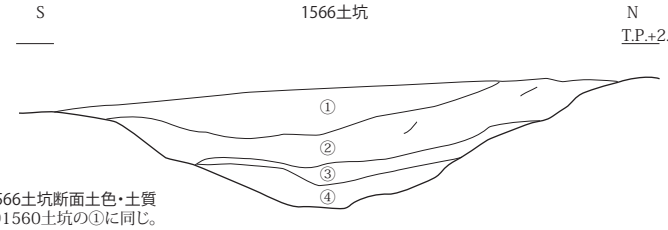
1532土坑断面土色・土質
①5Y4/1灰　砂質土　細砂主体　シルトあり　「N4/0灰　シルト」の１cmほどのブロックと炭化物わずかにあり。
②N3/0暗灰　細砂～シルト　「N4/0灰　極細砂～シルト」の１～２cmのブロックわずかにあり　炭化物あり。
③5Y5/1灰　シルト～細砂　「N4/0灰　シルト」・焼土の１～２cmのブロック若干あり　炭化物若干あり。



1545土坑断面土色・土質
①5Y5/3~10Y4/1灰オリーブ～灰　細砂～シルト。13-2b層の二次堆積か。
②「5Y5/3灰オリーブ　細砂」・「10Y4/1灰　シルト～細砂」の１～３cmのブロック。
③炭化物に若干②混じる。
④10Y4/1~5Y4/1灰　細砂～シルト　中砂・炭化物わずかにあり　ラミナあり



1560土坑断面土色・土質
①N4/0灰　粘質土　シルト主体　細砂あり　１cm以下の「5GY5/1オリーブ灰　シルト」のブロックあり　炭化物わずかにあり。1561溝埋土。
②N4/0灰　粘質土　シルト主体　細砂～中砂若干あり　炭化物若干あり。
③　②内に炭化物多し　１～２cmの炭化木片もあり。
④炭化物層



1566土坑断面土色・土質
①1560土坑の①に同じ。
②N4/0灰　シルト　わずかに細砂あり　炭化物ラミナ状に入る。
③炭化物間に扁平なブロック状に「10GY5/1緑灰　シルト」がはさまる。
④10GY5/1緑灰　シルト　ラミナ状に炭化物多し。

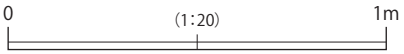
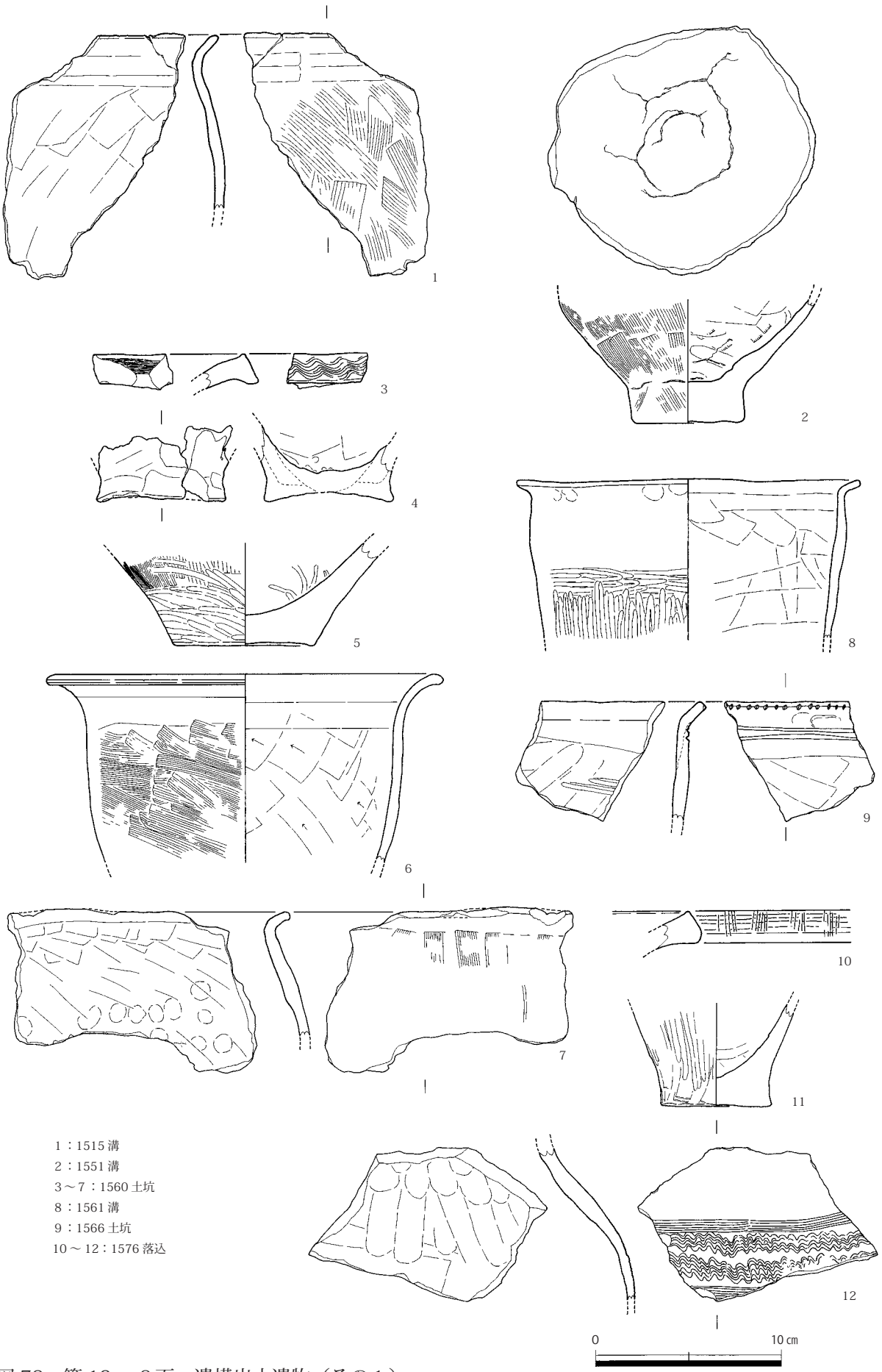


図 77　第 13-2 面　土坑　断面図（1519・1526・1532・1545・1560・1566 土坑）



1：1515 溝
2：1551 溝
3～7：1560 土坑
8：1561 溝
9：1566 土坑
10～12：1576 落込

図 78　第 13 － 2 面　遺構出土遺物（その 1）

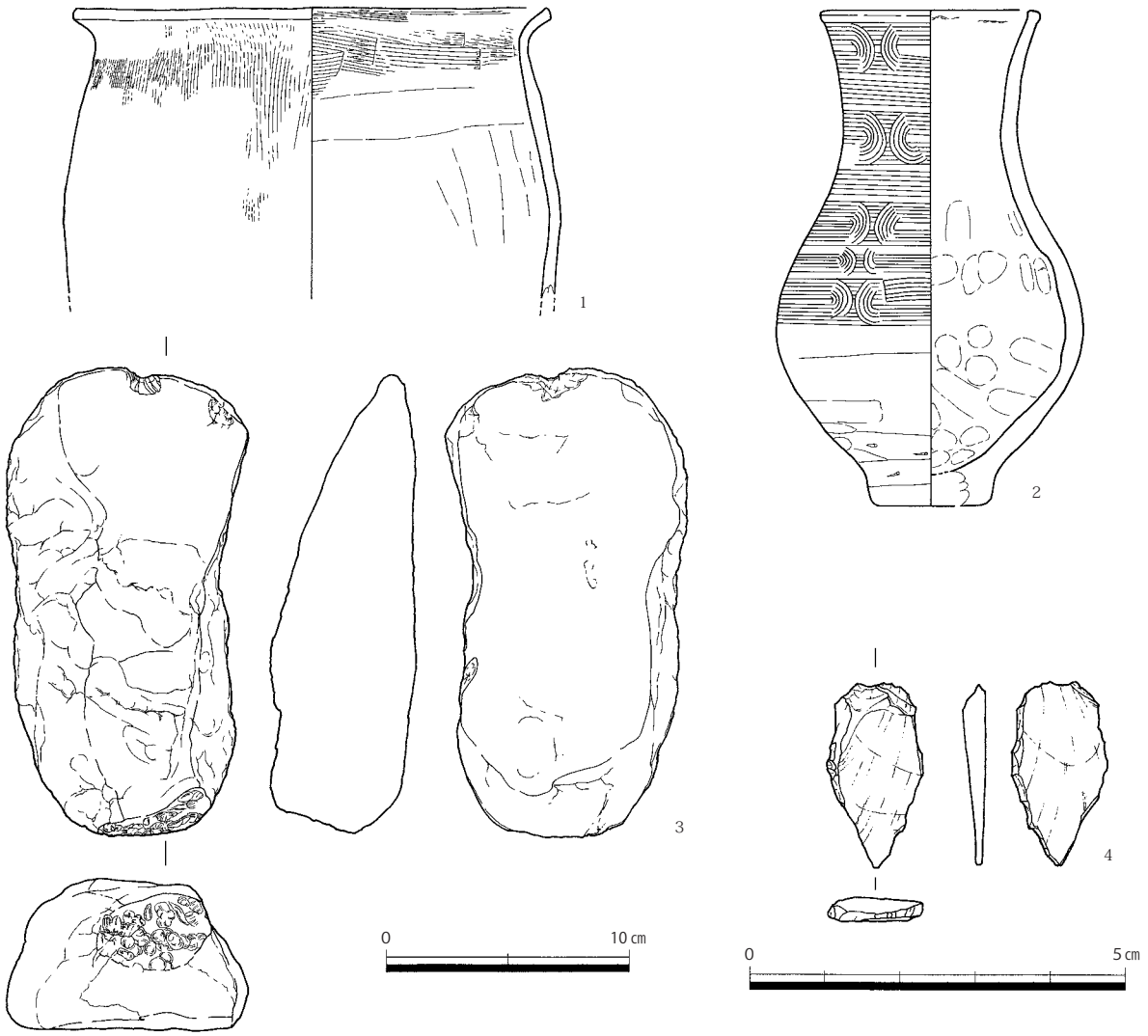


図 79　第 13 － 2 面　遺構出土遺物（その 2）（1：1595 落込、2：1712 ピット、3：1753 ピット、4：1563 溝）（4 のみ原寸大、他は 1/3）

0.96m、深さ 0.21m である。炭化物と焼土の混じる層が堆積後、2 層のブロック土混じりの層で埋められるが、そこにも若干炭化物があり、住居 1 周堤の盛土とは異なる。住居 1 周堤盛土除去時点では見えず、次の精査時に周堤底面より約 6 ㎝低い高さで検出しているので、住居 1 に関連なく先行する遺構であろう。この土坑と中の炭化物・焼土が、調査区の居住域成立は住居 1 より前である事を暗示する。遺物は生駒西麓産胎土弥生土器甕 1 片のみである。

1545土坑は 1600住居 3 北西0.5m ほどに位置する。長軸2.0m、短軸0.7m、深さ 0.26m である。最下層はラミナあり、炭化物も少量混じる。その上に炭化物層堆積後、ブロック土で埋められる。住居 3 に付随し、その火災後に埋められたと推測される。遺物はない。

1560土坑は 1500住居 2 東半を巡る 1561溝の北北東部内にある。長軸は溝の方向に合い 3.1m、短軸は 1.4m、深さ 0.28m である。1561溝埋土が上面を通り、それより前に埋められている。溝がこの土坑の西側から急に細く、当初は溝と一体で掘られたと思われる。最下層は炭化物層で、上は 2 層の粘質土で埋まるがそこにも炭化物が混じる。表面が炭化したのみの木片もある。

遺物はやや多く、破片数で、弥生土器21｛甕17（16）、壺 4（広口 1（1）、底部 3（1））｝、焼土 4 である。5 点が図化できた。

図78－３は弥生土器広口壺片である。内面ヨコミガキ、外面ヨコナデ、下方に拡張した口縁端部面には櫛描の波状文が入る。胎土は明色だが、角閃石だけでなく、閃緑岩礫も含まれ、生駒西麓産である。拡張した口縁端部面に波状文は、河内Ⅱ－２～Ⅲ－２様式に見られる。

図78－４は調整から弥生土器壺底部か。内面は底部に上からの棒状工具によるツブシ、それより上はヨコナデである。外面は底部側面ヨコナデ、それより上は右上がりナデである。破断面を見ると底部円板充填のようにも見えるが、強いツブシの影響かもしれない。胎土に角閃石がわずかに入り、河内低地産か。底部からの膨らみがあまりないが、無文の広口壺系統ならありえる形か。時期は限定しがたい。

図78－５も弥生土器壺底部片である。内面はナデ後ミガキか。外面は、上のタテハケ後、下のミガキだが、ミガキ間にヨコナデが残り、それがタテハケに切られるのが確認できる。底部はユビナデが残るが、その上にミガキ。胎土には細粒の角閃石が若干しかなく、河内低地産か。時期は限定しがたい。

図78－６は弥生土器甕片である。内面は左上がりナデ後、頸部から口縁にヨコナデ、外面も同じ位置にヨコナデが入るが、下の右下がりヨコハケがナデを切る。胎土は生駒西麓産である。外面ヨコハケは河内Ⅰ様式の伝統でⅡ様式にも残るがⅡ－３様式ではわずかしかなく、Ⅲ様式には消滅する。口縁の屈曲緩く、胴部がまったく張らない形はⅡ－１様式までであろう。

図78－７も弥生土器甕片である。内面はユビオサエ後、左上がりヨコナデ、外面は磨滅激しいがタテハケ、口縁部はヨコナデである。胎土は生駒西麓産である。傾きは不確実で、時期は限定しがたい。

1566土坑も 1561溝内で、1500住居２南東側に位置する。長軸は溝の方向に合い 2.6m、短軸は 1.22m、深さ 0.32m である。上面を 1561溝埋土が通り、1561溝との関係は 1560土坑と共通である。埋土最下層は炭化物が多く混じる流水堆積層、その上に炭化物とブロック土が混じる層がある。その上にもラミナのある層が見られる。

遺物はやや多く、破片数で見ると弥生土器25｛甕９（９）､(ハケ６（６））、壺５（刻み目突帯１（１）、櫛描直線文１（１）、底部２（２））｝、サヌカイト製剥片１である。２点のみ図化できた。

図78－９は弥生土器甕片である。内面は右上がりナデを口縁部のヨコナデが切り、ヨコミガキわずかにあり。口縁端部に刻み目。外面は左上がりナデを上のヨコナデが切り、口縁部にはユビオサエ残る。頸部に２条の沈線文あり。胎土は生駒西麓産である。河内Ⅰ様式全般に見られる甕であり、Ⅱ－１様式までのものである。

図80－２はサヌカイト製二次加工のある剥片である。上辺は剥離による打撃面、ネガ面左上辺は原礫面を残すが、右辺に両面から押圧剥離で刃部を形成する。掻器としても良い。風化は弱い。

これらの土坑は、1591土坑以外は埋土に炭化物を含み、住居に関連する位置にある。最下層に自然堆積層が見られ、一定期間はオープンであったようで、水溜のようなものとも考えられる。

1560・1566土坑が溝内にあるのもそれと矛盾しないが、なぜ溝より先に埋められたかは不明である。住居３と 1545土坑の関係のように、住居２廃絶時点で土坑が埋められ、溝は維持されたと考えられるなら、住居２廃絶時期は両土坑の遺物の示す河内Ⅱ－２様式期頃と考えられる。

住居３は火災の痕跡があるが、他にはない。しかし 1519土坑のように住居から離れると炭化物が埋土にないので、土坑内の炭化物は各々近い住居址住人の活動痕跡と考えて良い。住居１・２炉跡内の炭化物との関連も考えられる。

土坑内の遺物は小片が多く、甕でミガキ・ハケの有無が不明なものが多いように、磨滅したものが多い。住居址周辺に散乱したものが炭化物と共に流入したような状況であろう。

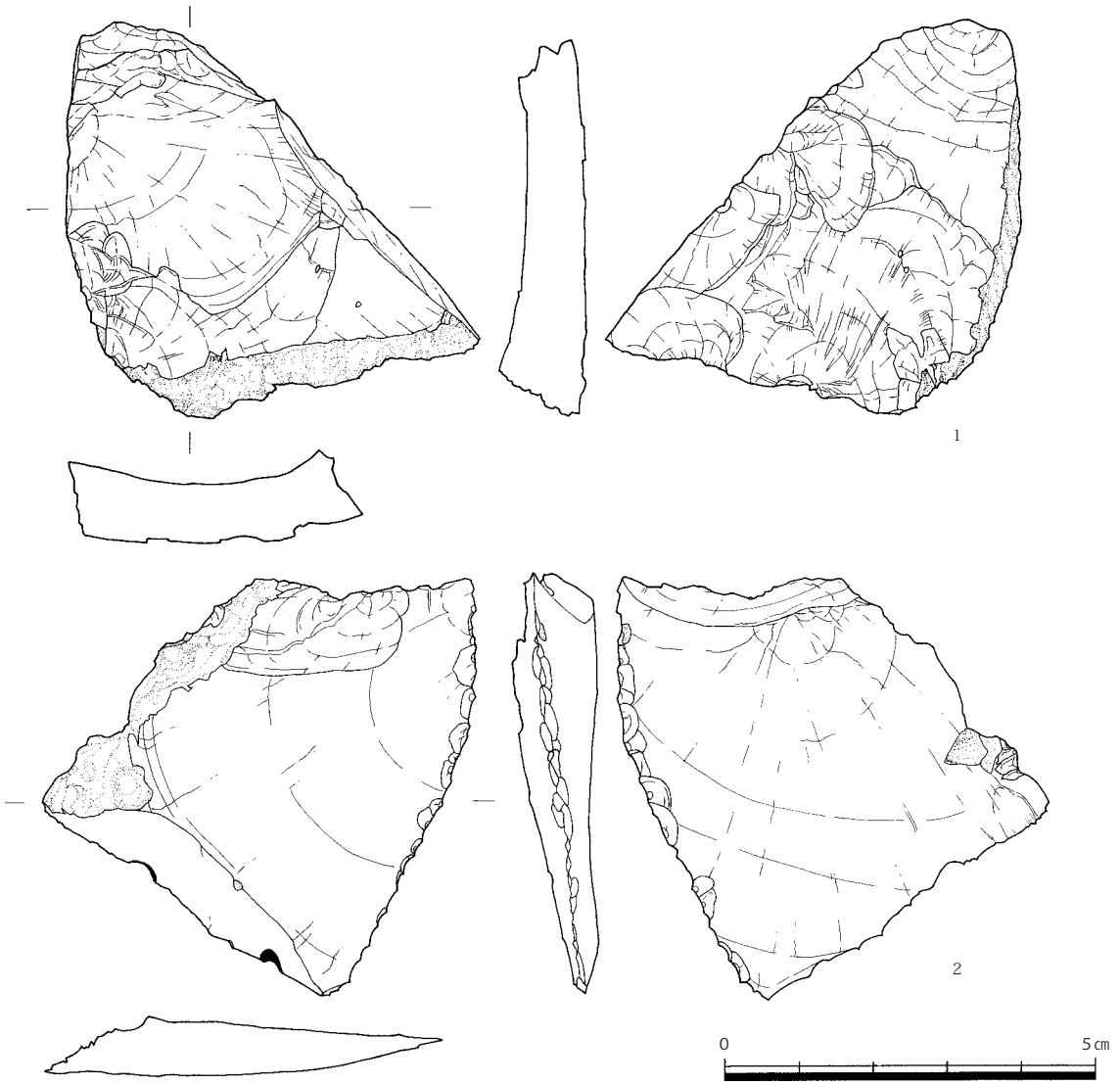


図 80　第 13 － 2 面　遺構出土遺物（その 3）（1 ：1515 溝、2 ：1566 土坑）

落込（1503・1505・1576・1577・1595）及びその出土遺物（図78・79）　1595落込のように自然地形のものもあるが、浅く一段下がり、底部は平坦で、溝が取り付くものがいくつか見られる。

1503落込は 1501溝の東に隣接し、南から何本かの溝を受け、東は 1499溝に枝溝を伸ばし、北は1577落込ともつながるようだ。南北長はよく分からないが、東西幅 3 m ほどで、方形に近い形である。深さは約0.0 5 m で北・東から段を成して下がった底部はわずかに北に下がるが平坦である。西の1501溝沿いはわずかに高く、小畦畔状に削り残されていた可能性もある。遺物はない。

1505落込は、中を 1499溝が通る長方形の落込である。埋土上面で溝との切り合いなく、底部に溝の底部が残り、長辺の方向が溝と一致するので、同時併存していたと考えられる。平面規模は 3.95×2.5m で、深さ 0.04m、底部は北西がわずかに低いが平坦である。遺物はない。

1576落込は 1501溝と 1555溝にはさまれ、1577落込と 1501溝に短い溝でつながる。平面形は東に開く台形で、南北4.4m、東西3.3m ほどである。深さ 0.04m ほどで、底部はほぼ平坦である。

出土遺物は破片数で、弥生土器20（8）｛甕 3（ハケ 1（1）、底部 2（2））壺 6（広口 1（1）、櫛描直線文 2（2）、波状文 1（1））｝、焼土 1 である。3 点が図化できた。

図78－10は弥生土器広口壺片である。内外面ヨコナデ、口縁端部面に櫛描直線文を入れ、約1㎝間隔でそれと直交する櫛描文を入れる。胎土は生駒西麓産である。先述した図71－1、1600住居3内1590周溝出土のものと、接合しないが、形態・胎土・焼成がほぼ同じで同一個体と思われる。河内Ⅱ－2～Ⅲ－1様式にありえるものである。

図78－11は弥生土器甕底部片である。内面は器表剥離した部分が多いが、底部付近にユビナデが残る。外面はタテナデ後タテミガキ、底部はナデである。生駒西麓産胎土である。外面にミガキの入った甕の底部であるので、河内Ⅱ様式のものであろう。

図78－12は弥生土器壺片である。胴部最大径位置から肩部にかけてのもの。内面は胴部ヨコナデ、肩部から上はタテユビナデ、外面はヨコナデで、胴部最大径位置に上下を櫛描直線文にはさまれた櫛描波状文が2帯入る。胎土は生駒西麓産である。胴部の櫛描直線文・波状文の組み合わせは河内Ⅱ～Ⅲ様式全般に見られ、それ以上時期は限定できない。

1577落込は1503・1576落込の間にあり、どちらとも溝でつながるようである。調査用筋掘りで破壊されたため全体形は不明だが、南北最大で2.4mと推測され、東西は2.9mである。東西に長い長方形か。深さ0.0 6mほどで、底部は平坦である。遺物はない。

1595落込は低地2内北西端にあり、自然地形の落込である。北に広がり、深くなり、北端では深さ約0.1mで、埋土は植物遺体を含んだ黒泥土状のものであった。上層浸蝕痕内堆積層とは埋土の質も異なるので、この面で形成された浸蝕痕である。埋土からも、1609流路が埋積して低地2になったばかりの中が、溢流的な洪水により浸蝕されたものと思われる。低地2は全体にその洪水の浸蝕を受け、耕地区画があっても、残らなかった可能性がある。遺物は破片数で弥生土器7（2）｛甕5（ハケ5）、壺7（櫛描直線文1（1））｝である。1点のみ図化できた。

図79－1は弥生土器甕片である。内面は、下方のタテナデを上方のヨコナデが切る。頸部から口縁にはヨコハケが残るが、口縁はヨコナデが軽くそれを消す。外面はタテハケ、口縁はその上にヨコナデで、若干煤が付着する。胎土に角閃石は含まれるが少なく、河内低地産か。口縁端部は緩いが面を持ち、胴部は若干膨らむ。だが口縁の屈曲はまだ緩いので河内Ⅱ－1～2様式頃か。

1597落込を除くこれらの落込は、人工的と判断できる。浅いが底部が平坦で、溝により給排水が可能な形はやはり耕地区画であろう。つまり、住居の傍らにごく小さな耕地区画が存在していた事になる。1484溝と1501溝の間に全て収まりながら間隔を空けて散在するのも意味があるのであろうか。上下面で見られる全面に広がる水田とは異なる性格を持つと考えられる。しかし弥生時代中期では苗代とも考えにくく、その性格は今後の課題である。

溝（1498・1501・1502・1512・1515・1551・1561・1563） この面の溝で幹線水路と言えば、1498・1501・1502溝であろう。1498・1501溝は調査区南東端では浸蝕で形が不鮮明だが近い距離にあり、調査区外で1本の溝から分岐した可能性が考えられる。

1498溝は1505落込に枝溝を伸ばすが、先述したとおり低地1の低い部分を通るので、そこ以北は排水を主とした水路になるのであろう。幅0.8m前後、深さ0.2～0.3mである。

1501溝は弓なりに曲がり、北端で1555溝に接続するが、基幹的な水路としては南半から1502溝につながる。その分岐部分の残存状況は1501溝南半から北半への形が整うように見えるが、埋没時の浸蝕を受けている。1502溝南端は上部を浸蝕され浅く細くなり、1501溝がそこから低地に下る部分は底部が浸蝕され、残存状況では北半とのつながりが良いが、本来は北半が枝溝であった可能性が高い。

1501溝南半から1502溝が、微高地上を伸びる給水用水路であり、1498溝と給排水の1セットとなり、調査区外北側に立地する耕作地の水利体系になると考えられる。幅0.6m前後、深さ0.2m前後で、畦畔も伴わないが、第13‐1面の1333溝の水路に踏襲される。1502溝は1333溝とわずかにずれる程度の位置関係だが、1501溝南半は重なる部分が少なく、1333溝のほうが蛇行の度合いが少ない。

1502溝から分岐し低地2に下る1563溝の存在から、低地2も一部耕地化されていた可能性が考えられる。低地2に伸びる溝は1512溝もあるが、この溝は1310住居1北側が溝底部の最高所で、そこから東西どちらへも下る。おそらく住居1周堤まわりの排水のためだけの溝である。住居1南側の1530溝も同じである。その北側の微高地1上も細かく溝で区画されるが、住居周りに生活に便利な平坦面を作り、各々が浸蝕されないように排水用の溝を巡らしたものか。

低地部分で同じく住居周りの排水を目的とした溝としては1500住居2の東半を巡る1561溝が見られる。おそらく1560土坑付近で北に排水する溝があったと推測できるが、調査区北辺で崩壊が進行し確認できなかった。この溝には1501溝北半が合流した1555溝がつながる。なぜ余計な水を受ける形になるのか疑問だが、1566・1560土坑に水を貯める必要があったか。また、排水は1498溝につなぐのが最も簡単なように見えるが、なぜつながらないのかも疑問である。

微高地1南東部では1515溝が1501溝から分岐し、北西に伸びる。そこから1551溝のように、いくつもの溝が直角に南西に伸び、低地2との段差に開口する。切り合いから1600住居3より前の状況である。だが、1515溝のみは住居3以降も存続し、そこを通った浸蝕が住居3の1590周溝の一部を切る。この溝からは1545土坑に給水可能で、また、北側の段差を下り、1501溝に水を戻す事も可能である。住居3以前の状況では、溝と南西段差に囲まれた方形の区画が並ぶ。給水路からの枝溝であるので耕地区画のようにも思えるが、給水範囲は極狭い。

以上の主要な溝からの出土遺物は以下の通り。

1498溝からは、弥生土器7（5）{ハケ甕1（1）、壺5（櫛描直線文1、流水文3（3））、鉢1（1）}である。図化できたものはない。

1501溝からは、弥生土器10｛甕4（ミガキ1（1））、壺3（櫛描直線文1（1）、底部1（1））｝、サヌカイト製チップ1である。図化できたものはない。

1502溝からは、弥生土器ミガキ甕1（1）である。図化できず。

1515溝からは、弥生土器22（5）{ハケ甕1（1）、壺7（櫛描直線文4（2））}、サヌカイト製剥片1である。2点が図化できた。

図78‐1は弥生土器甕片である。内面は右上がりナデ後、口縁部ヨコナデ、外面はタテハケ後、口縁部ヨコナデである。生駒西麓産胎土である。時期は限定しがたい。

図80‐1はサヌカイト製二次加工のある剥片である。ネガ面上辺からの打撃が多く、右片は折れなので、上辺が打撃面である。左下の剥離面は中央の剥離面を切る。ポジ面も左辺・下辺からの二次加工の剥離が多いが右片・下辺は原礫面が残り、どこにも刃部は形成されていない。風化は弱い。

1551溝からは、弥生土器3｛甕2（1）（ハケ1）、壺底部1（1）｝である。1点のみ図化できた。

図78‐2は弥生土器壺底部片である。内面は、底部周囲に螺旋状に粘土接合痕を残し、底部は螺旋状にユビナデ、上部はハケ後ナデである。外面はタテハケで胴部と底部の境に粘土接合痕が残る。底部側面から底面は不定方向の緩いナデである。胎土は生駒西麓産胎土である。粘土塊使用の分厚い底部で外面タテハケの壺の類例を知らず、時期は限定できない。

1561溝からは弥生土器ミガキ甕17（17）であるが、同一個体のもので接合し、図化できた。

図78－８がその甕片である。内面は縦方向の調整の痕跡があるが、ハケかナデか分からず、その上にヨコナデ、外面は口縁の屈曲にユビオサエ残り、その上にヨコナデ、そこからだいぶ下がった部分にヨコミガキが入り、さらに下からそれを切りタテミガキが入る。生駒西麓産胎土である。胴部は膨らまず、口縁屈曲弱く、口縁端部丸いミガキ甕なので、河内Ⅱ－１～２様式に限定できる。

1563溝からはサヌカイト製剥片１のみ出土した。図79－４がそれである。二次加工のある剥片で上辺が打撃面、左右辺は押圧剥離で輪郭を作っている。その形から石鏃未製品か。風化は弱い。

これらの溝の在り方から、調査区の居住域は微高地１・低地１の北側に広がるであろう耕地区画への給排水路の分岐点にあると理解できる。また、住居周りの排水に気を配る他、住居周辺の土坑に給水するシステムも存在した事が分かり、土坑が住居に付随した水溜の可能性が高まった。また、溝の存在から、低地２の少なくとも一部が、この面ですでに耕地開発可能な環境であった事も分かる。

1512・1522周溝　調査区東端付近、1750住居４から７ｍほど北側で、やや不整な円形に巡ると思われる二つの周溝である。周溝同士も溝でつながるようで、1522周溝はさらに 1498溝ともつながる。溝幅は 0.4 ～ 0.6m ほど、深さは 0.1m ほどで、住居壁溝の規模ではない。周溝の径は 1522周溝が約 4.5m、1521周溝は半分以上調査区外だが、ほぼ同じ径か。遺物は 1522周溝から生駒西麓産胎土の弥生土器、ミガキ甕１片、櫛描直線文壺１片が出土したのみである。周溝の規模、内側は無遺構、他の溝とつながる、などの要素から、住居址の可能性は低い。円形に巡る形態、南側にピット群があり、同じ周溝が近接している、などの要素からは実用的ではない祭祀的な性格のものかと推測される。

調査区西半の遺構　調査区西半はほとんどが実質第13－1b 面とも言うべき状態である。図61 の西半のトーンは、全て第13－１層の畦畔盛土下で、耕作により床面が削り出された畦畔基部である。

1479溝は何回か掘り直され第13－１面1301溝に継続し、1301溝より幅が大きい。その北の 1458溝は西半が第13－１面1300溝に重なり、1300溝が古い段階では低地２にも開口していた事を示す。

1258流路の南端東岸の 1302人工堤防は、この時点の盛土は分からない。第13－１層相当の黒色土を除去した時点で、北端は低地２との比高差30㎝ほどの自然地形状になったが、南側は北より 50㎝ほど高く、法面観察でもブロック土もないので、1302人工堤防が微高地２につなげていた南調査区外の微高地の北端が現れているのかもしれない。

1609流路東岸ポイントバー最上層及びその出土遺物（図81 ～ 89・図版36－１～ 36－７）　低地２成立以前、1609流路が機能していた期間に、その東岸のポイントバー最上部に形成された土壌層と、そこに包含された遺物群である。厳密に言えば第13－２層直下の層だが、第13－２面居住域の西に隣接し、遺物の時期も重複、かつ、遺物量や構成も居住域周辺的なので、この項で述べる。

第14－２層時点で形成された 1609流路は調査区内で東に弯曲する蛇行を見せる。その蛇行内側にあたる東岸にはポイントバー層が堆積していった（図81 の⑳・21、図82 の⑰・⑱）。

微高地１では第13－２ｂ層内に第13－２層より古い部分的な古土壌層が存在する（図81 の⑯）。その形成後、流路内ポイントバー最上部にも土壌層が形成される（図81 の⑭、図82 の⑯）。実際には微高地１の部分的古土壌から第13－２層にまたがる時期に、緩傾斜面に土砂の堆積と流出を繰り返しながら存続した層と思われる。それを「1609流路東岸ポイントバー最上層」と呼称する。

第13－２面のある時期に 1609流路は埋積され（図81 の⑩～⑬・27・28、図82 の⑪～⑬）ポイントバー最上層も埋没し、低地２が形成される。低地２には第13－１層やその相当層（図82 の⑥）は残る

が、第13‐２層相当層と確実に言える土壌層はない。しかし、第13‐２面として低地２部分で遺構を検出したのは、第13‐１層やその相当層の下面である。

その後、低地２は第12‐１面で 1142・1144浸蝕痕に浸蝕される。特に X= －149,900 ライン付近は激しく下方浸蝕される（図81 の⑤・⑥）。

つまり 1609流路東岸ポイントバー最上層は、層位的には微高地１部分的古土壌層と第13‐２層の間だが、時期的には両者にまたがって重複するものと考えられる。

その層の平面的範囲は図83 のとおりである。X= －149,900 ラインより北は第14‐１面検出の掘削途中で層の広がりを確認しないまま遺物を取り上げて除去したが、層は北に５m ほどで流路肩部にすりつき途切れていた。その部分で、包含遺物が多く、層厚の薄い土壌層が流路肩部付近にあると認識でき、南側では範囲を確認した。遺物は層内で分散して出土する。密に集中する部分は少なく、その範囲も確定もしにくい。１個体の破片があるかのような出土状況でも、取り上げると数個体の破片が混じり、個体の完形率も低い事が多い。それらの状況から、流路肩部の緩斜面に向け、少量ずつの土器片や石器の廃棄が散漫に繰り返された結果と思われる。

いくつかの集中部分を、土器群１～５として出土状況を記録したが、その周辺にも破片が散在していた場合が多い。土器群３・４が１個体のものである以外は数個体の土器片がある。土器群４・５は実際にはポイントバー最上層ではなく、それに対応する微高地１の部分的土壌化層内のものであり、土器群４は検出時にその横に土層断面を残し、第13‐２面1310住居１との層位関係の確認を行った。

層内の遺物総数は破片で以下の通り。カッコ内に数字のみのものは生駒西麓産胎土の数である。

弥生土器304（212）{甕212（160）（ミガキ 151（108）、ハケ 49（39）、底部３（１））、壺57（40）（広口３（２）、細頸壺８（８）、刻み目突帯１（１）、沈線文４（４）、櫛描直線文12（12）波状文２（２）、底部10（３））、鉢１（１）、高坏２、甑１（１）}、サヌカイト製石器20｛石鏃１、剥片７、チップ 12｝、礫１、粘土塊１である。

土器群１は X= －149,900 ライン南側で、第13‐２層と接触しているポイントバー最上層が、西に下がり始める部分にある（図84・図版36‐３）。検出時点では甕１個体と思われたが、図85‐４のミガキ甕17片以外に１片別個体の甕の破片があり、図85‐４の甕の破片も周囲に広く散らばっていた。

土器群２（図版36‐４）はポイントバー最上層が西に急激に下がる手前で平坦に広がり、密度は低かった。甕３個体分ほどの破片が混じり（図86‐１～３）、完形率は低い。その破片の下にサヌカイト製石器があり、剥片６、チップ 11 が集中して出土した（図88‐３～ 11・89‐１～８）、石器と共に甕・壺の破片も出土したが（図86‐４・５）、完形率は低く、多数の個体の一部が集まる感じである。

土器群３（図版36‐５）は検出面ではポイントバー最上層と。1609流路埋積粗砂層の境目に位置していた。下層では第14‐１面の 1609流路の肩部でもある。口縁を欠く壺１個体であった（図87‐１）。

土器群４（図版36‐６）は第13‐２面1310住居１の下に位置する。図84立面図では、②の層が土器とずれて見えるが、この層内である。微高地１の第13‐２ｂ層内部分的古土壌層の範囲の南端近くに位置する。甕１個体が、正置状態の底部片があり、そこから横に、口縁までの、内面が上を向いた破片が並んでいた（図87‐２）。半個体ほどの破片が失われている。

土器群５（図版36‐７）は微高地１部分に位置するが、土器群４が包含されていた微高地１中心部の部分的古土壌とは異なる、ポイントバー最上層と直結した部分的古土壌層に含まれていたようである。検出時点から甕と壺の破片が混在しているのが分かった（図87‐３・４）。完形率は低い。

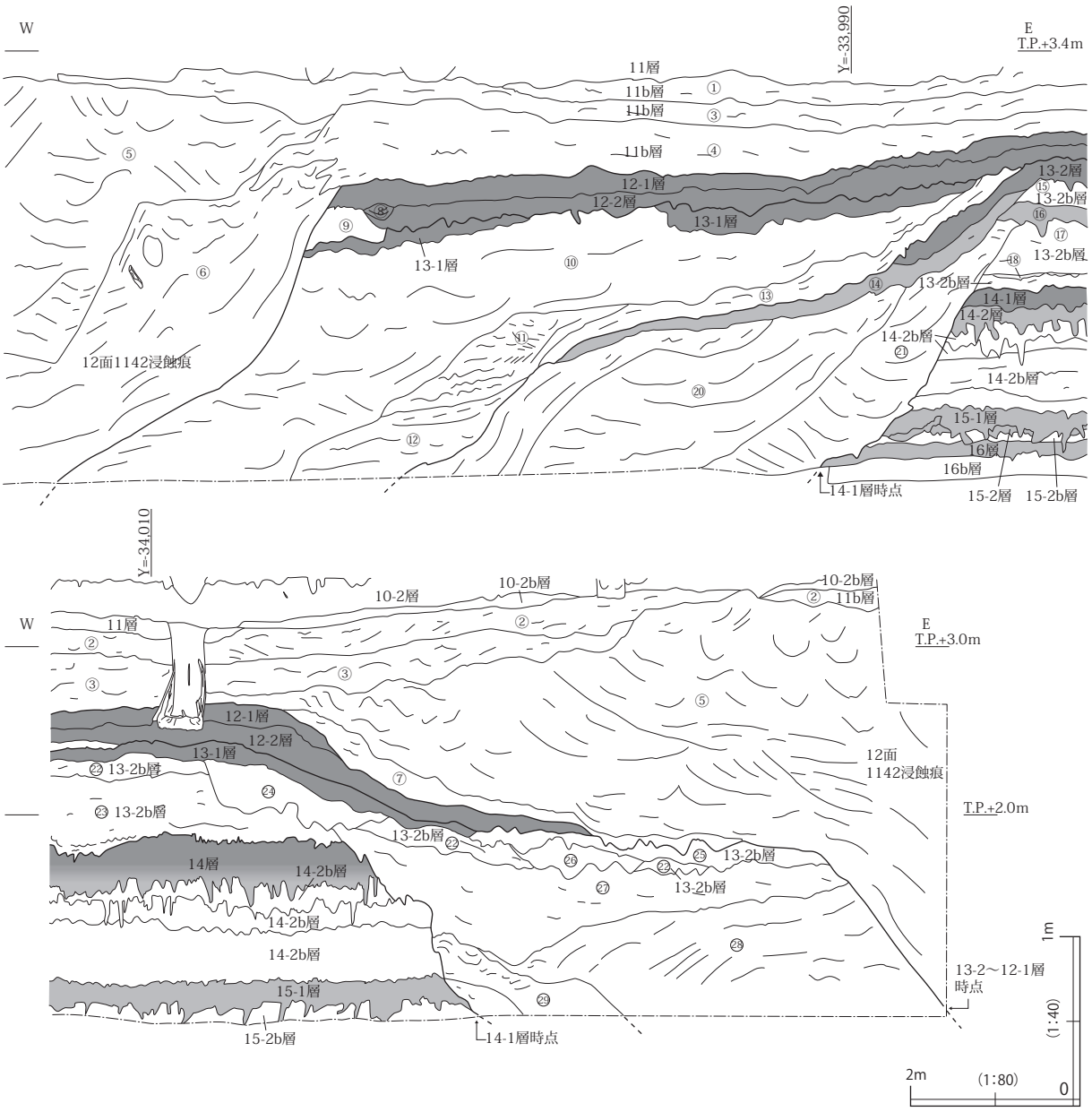


図 81　第 14-1 面～第 13-2 面　1609 流路　断面図（その 1）　X=-149,900 ライン

以下、1609流路東岸ポイントバー最上層包含遺物で図化できた遺物について述べる。

図85‐1～3は層の分布範囲のうち、X= －149,900 ライン以北で出土したものである。

図85‐1は弥生土器鉢片である。内面ヨコナデ、外面は方向不明ナデで、3帯の櫛描直線文と1帯の櫛描波状文がある。最下の櫛描直線文は上から見て右回りの合わせ目が残り、下の波状文に切られる。胎土の砂粒は石英・長石・チャートのみで、河内産ではない。文様と形態から、畿内Ⅱ様式前半頃か。

図85‐2は弥生土器壺片で、長頸広口壺の頸部か。内面は、下部の肩部に近い部分にはタテユビナデ、それより上部はタテミガキで、ミガキには折り返しが目立つ。外面はヨコミガキで、多条沈線文帯が 2帯入る。合わせ目から見ると沈線文は上から見て右回り。胎土は生駒西麓産である。頸部が発達しながらも沈線文が残るのは河内Ⅱ－1～2様式のものであろう。

図85‐3は弥生土器甕片である。内面は胴部下半から底部は剥離・磨滅が激しいが、上半はヨコナデで、水平にまで反った口縁上面に3条の櫛描による文様が巡る。外面は、全体に煤付着し、下半に剥

表8　図81　第14-1 ～ 13-2面1609流路断面図（X=-149,900 ラインセクション）土色・土質

①10BG5/1青灰　細砂～シルト　ラミナあり。11b 層上半砂層系。

②10BG4/1暗青灰　シルト～極細砂　ラミナあり。11b 層。

③5B5/1灰　シルト～極細砂　炭化物のラミナあり。11b 層下半シルト系。

④ N4/0灰　シルト～極細砂　炭化物のラミナあり。11b 層下半シルト系　⑤と交指状堆積。

⑤2.5Y5/1黄灰　小礫～粗砂　ラミナあり。12面低地２・1142浸蝕痕内埋積層。

⑥「5Y5/3灰オリーブ　粗砂～小礫」と「10G4/1暗緑灰　シルト～細砂」の互層状ラミナ　大型の植物遺体あり。12面1142浸蝕痕内埋積層。1144流路からの破堤堆積層。

⑦5B3/1暗青灰　シルト～細砂　ラミナあり　植物遺体あり。12面低地１埋積層。

⑧5Y6/3 オリーブ黄　中砂　ラミナあり。

⑨12-2層のブロック。12-2層耕土時点畦畔盛土。1142浸蝕痕以前に、ここに西へ落ちる段差あったか。

⑩2.5Y5/4~10GY4/1黄褐～暗緑灰　細砂～粗砂　中砂主体　ラミナあり。13-1層成立直前　1609流路埋積層。

⑪10YR5/6~2.5Y6/4黄褐～にぶい黄　中砂～細砂」と「N4/0~5/0灰　シルト」の互層状ラミナ　植物遺体若干あり。13-2層時点1609流路内流水堆積。

⑫「N5/0灰　シルト」と「5Y6/3~7/3 オリーブ黄～浅黄　中砂～細砂」の互層状ラミナ。13-2層時点1609流路内流水堆積。

⑬「5B4/1暗青灰　シルト」に「5Y6/3 オリーブ黄　細砂」のラミナ　粒状植物遺体多し。13-2層からの斜面堆積。

⑭ N3/0~4/0暗灰～灰　細砂～シルト　植物遺体あり　わずかにラミナあり　若干土壌化。「1609流路東岸ポイントバー最上層」微高地１の部分的土壌層である⑯と 13-2層の間に相当。

⑮5Y4/1~2.5Y5/6灰～黄褐　中砂～細砂　わずかにシルトあり　ラミナなし。13-2b 層。

⑯7.5Y3/1 オリーブ黒　粘質土　シルト主体　細砂多し　斑状 Fe わずかにあり。13-2b 層とするが、微高地１上で 13-2層より古い部分的土壌化層。

⑰ N4/0 ～ 10GY6/1灰～緑灰　シルト　ラミナあり　粒状植物遺体あり　上部細砂降下。13-2b 層　⑯のｂ層相当。

⑱10GY6/1緑灰　シルト　扁平ブロック状に飛び々々にはさまる　上面平坦　下面凹面。13-2b 層。

⑲ N4/0~3/0灰～暗灰　シルト　ラミナあり　炭化物若干あり　下の 14-1層を巻き上げ下方ほど暗色。13-2b 層（多くの調査区ではこの層の下部を誤認して 14-1層としている。）

⑳「5Y6/4~7/3 オリーブ黄～浅黄　中砂～粗砂」と「N5/0灰　シルト」の互層状ラミナ。1609流路東岸ポイントバー。

㉑ N4/0灰　細砂～中砂　ラミナあり。1609流路東岸ポイントバー。

㉒5BG4/1~5Y5/3暗青灰～灰オリーブ　中砂～細砂　やや土壌化　ラミナ残る。13-2b 層上半砂層系。

㉓10BG4/1~3/1暗青灰　シルト　粒状植物遺体のラミナあり　下半に細砂のラミナあり。13-2b 層下半シルト系。

㉔ ㉒㉓のブロック。

㉕7.5GY4/1暗緑灰　粘質土　シルト主体　極細砂～細砂あり植物遺体あり。13-2b 層相当か。

㉖ ㉒と㉕の混濁。

㉗5GY4/1暗オリーブ灰　シルト～細砂　ラミナあり　粗砂若干あり　粒状植物遺体あり。13-2b 層堆積時点1609流路埋積層。

㉘2.5GY6/1灰　中砂～小礫　ラミナあり。13-2b 層堆積時点1609流路埋積層。

㉙5Y6/4 オリーブ黄　中砂～粗砂ラミナあり。14層時点1609流路内流水堆積。

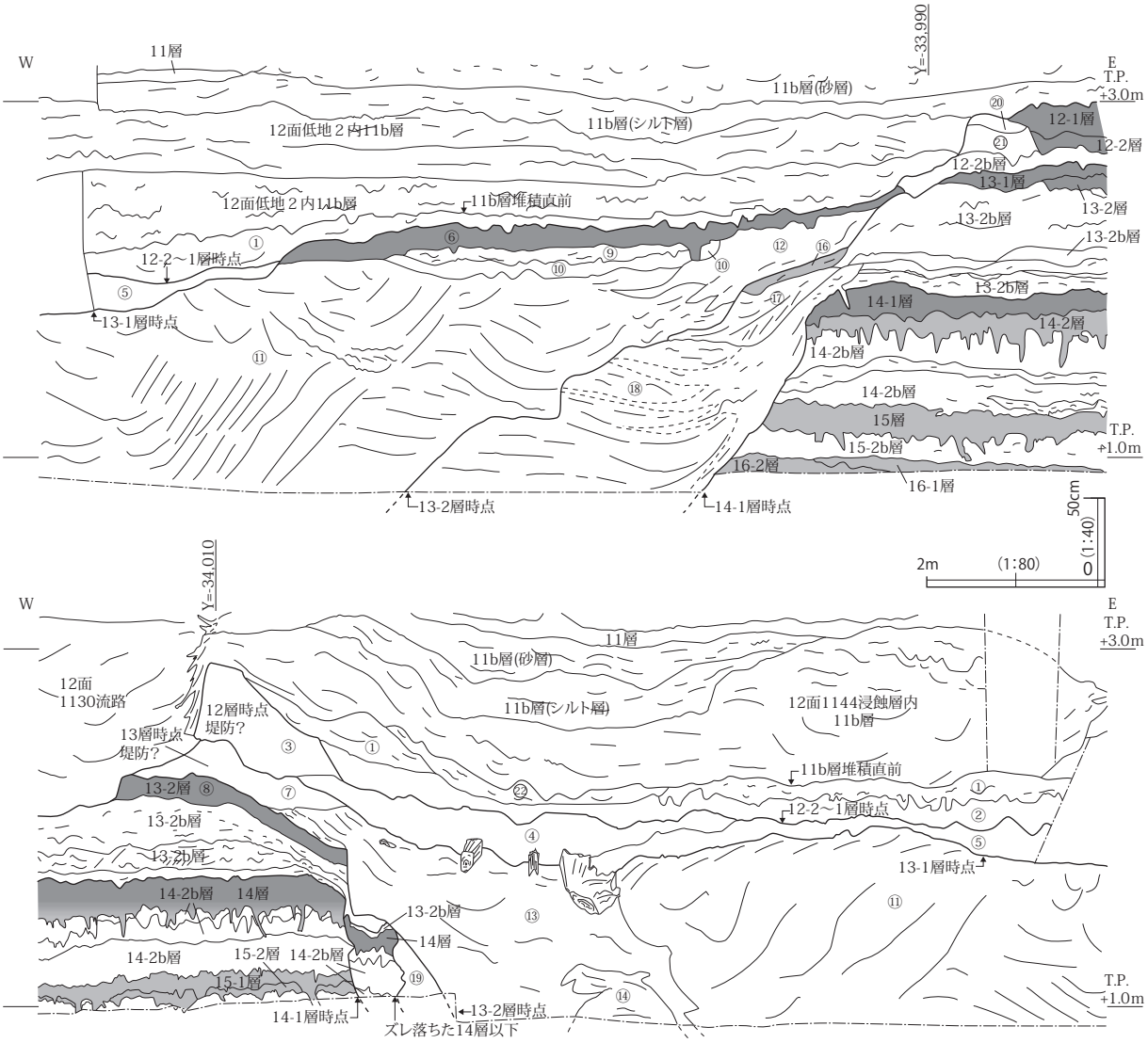


図 82　第 14-1 面～第 13-2 面　1609 流路　断面図（その２）　X=-149,920 ライン

離・磨滅多いが、底部側面ヨコユビナデ、その上部にユビオサエ散在で、その後タテナデ、上半はヨコハケ後タテナデ、その後３条の櫛描による文様が３帯入る。口縁は屈曲部から口縁端部にヨコハケ後、端部にヨコナデが軽く入り、タテに櫛描文が入る。胎土は、風化した白雲母も若干見られるが、生駒西麓産胎土である。在地胎土ながら、水平に開く口縁や、文様だけでなく、調整も異質である。水平にまで開いた甕口縁の上面に文様を入れるのは近江Ⅱ－２～Ⅲ－２様式に類例が多く、その地域の影響か。時期的には河内Ⅱ様式期併行のものであろう。

図85‐４は土器群１の弥生土器甕である。内面はユビオサエや、上半に左上がりのハケが残るが、全体にナデ、口縁はヨコナデである。外面はタテハケ後、胴部上半にヨコハケ、その後ミガキが入るが密度は低い。口縁部は始めのタテハケ後はヨコナデ、底部から底部側面付近はナデしか確認できない。外面上半に煤付着する。下半にミガキの入るハケ甕の系統と考えられ、河内Ⅱ－２様式頃のものか。

図85‐５～７は土器群１周辺から出土したものである。

図85‐５は弥生土器壺片、長頸広口壺頸部か。内面はタテユビナデで、残存部上部はヨコナデである。外面は、タテハケ後、上部にヨコミガキで、ミガキの範囲より下に４条の櫛描直線文が４帯入る。胎土は角閃石なく、黒雲母はあるが、チャートがわずかにあり、河内低地産か。破片のため傾きが不確

表9　図82　第14-1 ～ 13-2面1609流路断面図（X=-149,920 ラインセクション）土色・土質

①10GY3/1暗緑灰　シルト　極細砂のラミナあり　粒状植物遺体若干あり。11b 層以前　12-1面低地２内堆積。

②5B4/1暗青灰　シルト　細砂若干あり　Ca の結核あり　植物遺体わずかにあり。12-1層相当　沼状堆積か。

③5B4/1暗青灰　粘質土　シルト主体　細砂若干あり　Ca の結核あり。12-1・2層時点堤防盛土か。

④ N4/0灰　シルト　細砂若干あり　植物遺体あり　13-1面低地２　沼状堆積。

⑤5GY5/1~4/1 オリーブ灰～暗オリーブ灰　シルト　粗砂～細砂若干あり　植物遺体多し。13-1面低地２　土砂流的堆積。

⑥2.5GY3/1暗オリーブ灰　粘質土　シルト～細砂主体　中砂あり。低地２部分13-1層　耕土。

⑦5B4/1暗青灰　砂質土　細砂主体　シルト・中砂あり　植物遺体若干あり。13-1層時点堤防盛土か。

⑧ N3/0暗灰　粘質土　シルト主体　細砂若干あり。13-2層相当　耕土？自然土壌？

⑨10BG4/1~5/1暗青灰～青灰　シルト　粒状植物遺体あり　ラミナあり。13-1b 層相当　13-2面1513溝埋土。

⑩ N4/0~3/0灰～暗灰　粘質土　シルト主体　極細砂～中砂あり。13-2面1513溝埋土。

⑪5Y5/1~7/1灰～灰白　小礫～中砂　ラミナあり。13-2面1609流路埋積洪水層。

⑫「7.5Y6/3 オリーブ黄　細砂～中砂　ラミナあり」内に「N4/0灰　シルト」の１～４㎝のブロックあり。⑪と同時堆積。

⑬「N4/0灰　シルト～細砂」と「5Y6/2灰オリーブ　細砂～粗砂」の互層状ラミナ　植物遺体あり。⑪と同時堆積。

⑭10GY6/1緑灰　中砂　ラミナあり。⑪と同時堆積。

⑮「5Y6/2灰オリーブ　細砂　ラミナあり」内に「10BG4/1暗青灰　シルト」の１㎝前後のブロック。13-2面斜面堆積か。

⑯ N4/0~3/0灰～暗灰　細砂～シルト　わずかにラミナ残る　やや土壌化。1609流路東岸ポイントバー最上層。

⑰「10Y4/1~5Y4/2灰～灰オリーブ　細砂～粗砂　炭化物わずかにあり」と「5Y6/3 オリーブ黄　中砂～極粗砂」の互層状ラミナ。1609流路東岸ポイントバー堆積層。

⑱「5Y6/4 オリーブ黄　中砂～極粗砂（点線より左方）」と「7.5GY4/1暗緑灰　シルト～細砂」のクロスフィンガー　右側崩落した 14層のブロックあり。1609流路東岸ポイントバー堆積層。

⑲2.5GY5/1 オリーブ灰　中砂～シルト　植物遺体あり　ラミナあり。14層時点堆積。

⑳12-1層の４~ ３㎝のブロック。12-1層時点畦畔盛土。

㉑12-2層の３～７㎝のブロック。12-2層時点畦畔盛土。

㉒5Y3/1 オリーブ黒　シルト　細砂若干あり　植物遺体あり。沼状堆積？ 11b 層以前？

実で、上下逆の可能性もある。河内Ⅱ様式頃のものか。

図85‐６は弥生土器甑片である。内面は左上がりナデ、外面はタテミガキで、底部外面は円盤状粘土と外周の粘土紐の接合・ナデ付けの痕が残るが、凹面を成した部分にミガキも入る。底部穿孔は両面からである。胎土は生駒西麓産胎土である。時期は弥生時代中期としか限定できない。

図85‐７は弥生土器高坏坏部片か。内面は磨滅するが、ヨコミガキが残る。口縁はヨコナデである。外面はヨコミガキ、口縁はヨコナデである。胎土には黒雲母あり、細粒に角閃石があり、わずかにチャートもあるので河内低地産か。器形的には類例を見ないもので、時期は限定しがたい。

図86‐１～３は土器群２のものである。

図86‐１は弥生土器甕片である。内面はミガキだが、口縁屈曲部ではその間にハケが残り、口縁ではヨコナデが残る。外面は上部にヨコナデ後、タテミガキが入る。外面煤付着。胎土には角閃石がわずかしかなく、河内低地産か。口縁の屈曲緩く、胴部がほとんど張らないので、河内Ⅱ様式のものか。

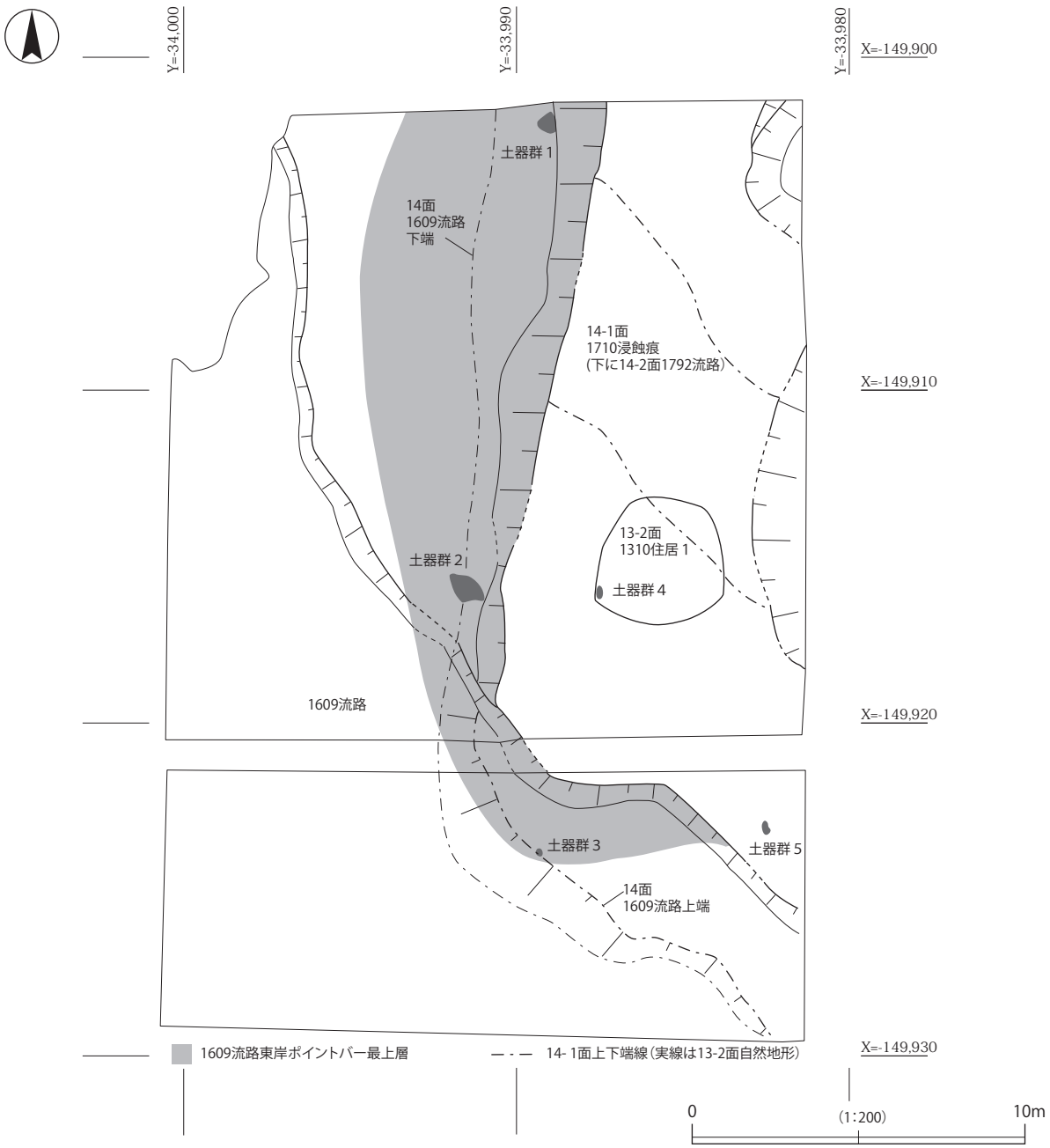


図 83　1609 流路東岸ポイントバー最上層推定分布範囲と土器群の位置

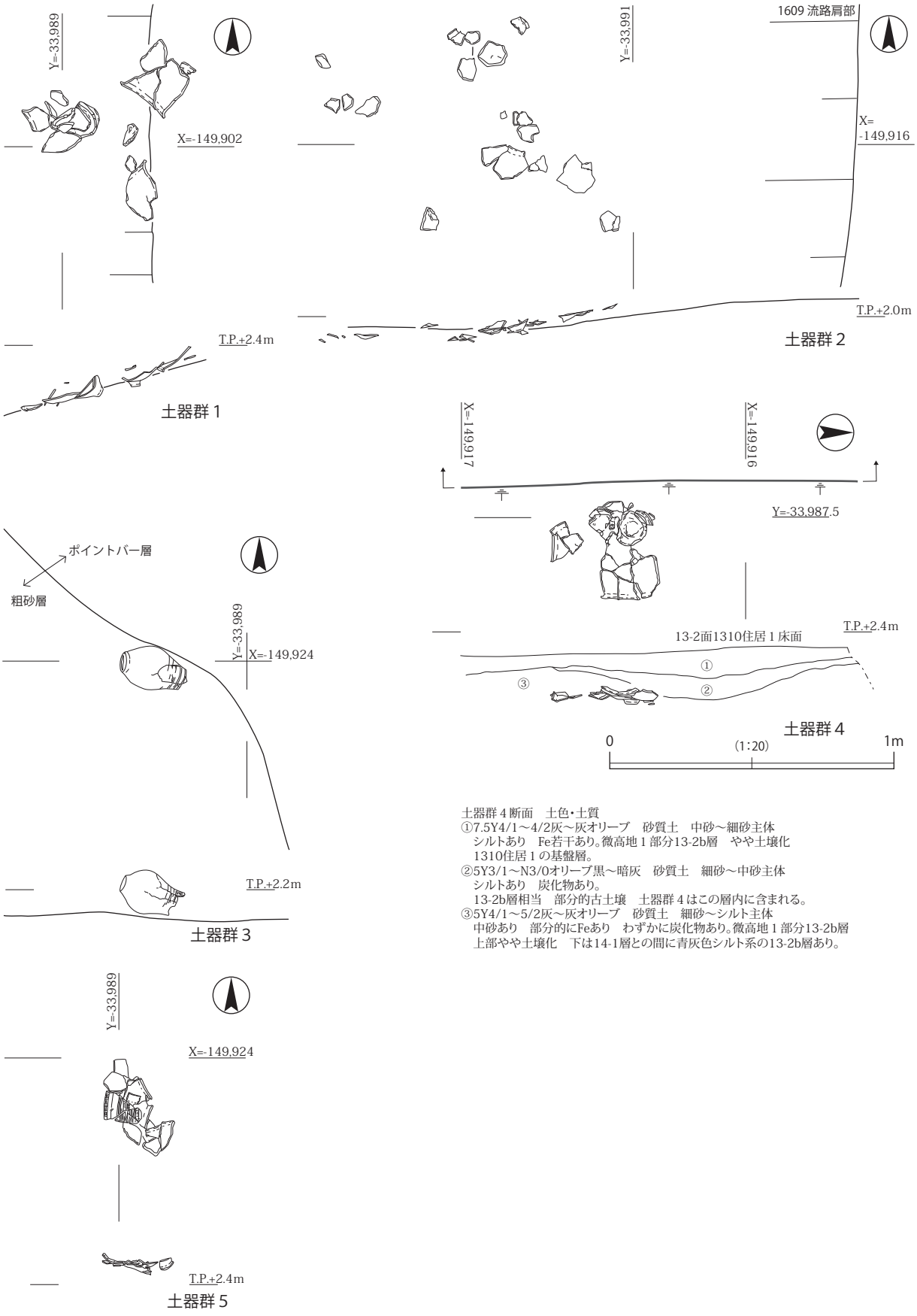
図86‐２は弥生土器甕底部片か。内面は磨滅で不明瞭だがナデか。外面はタテミガキで、底部から底部側面はナデである。胎土には角閃石がわずかしかなく河内低地産か。底部の薄さとミガキが特徴だが、弥生時代中期としか言えない。

図86‐３も弥生土器甕底部片か。全体に磨滅し不明瞭だが、内面はナデか。外面はタテハケ後、タテミガキで、底部はナデ、底部側面に粘土接合痕が残る。弥生時代中期としか言えない。

図86‐４・５は土器群２直下で石器類と混じって出土したものである。

図86‐４は弥生土器壺底部片である。内面は底部ツブシ後、ナデ、上部はハケである。外面はタテハケ、底部は不定方向直線ナデである。胎土には角閃石が細粒もあるが、チャートもわずかにあり、河内低地産か。時期は限定しがたい。

図86‐５も弥生土器壺底部片である。内面はナデで、右上がりと左上がりが混在する。外面はハケ、



土器群 4 断面　土色・土質
①7.5Y4/1～4/2灰～灰オリーブ　砂質土　中砂～細砂主体
　シルトあり　Fe若干あり。微高地 1 部分13-2b層　やや土壌化
　1310住居 1 の基盤層。
②5Y3/1～N3/0オリーブ黒～暗灰　砂質土　細砂～中砂主体
　シルトあり　炭化物あり。
　13-2b層相当　部分的古土壌　土器群 4 はこの層内に含まれる。
③5Y4/1～5/2灰～灰オリーブ　砂質土　細砂～シルト主体
　中砂あり　部分的にFeあり　わずかに炭化物あり。微高地 1 部分13-2b層
　上部やや土壌化　下は14-1層との間に青灰色シルト系の13-2b層あり。

図 84　1609 流路　東岸ポイントバー最上層　土器群 1 ～ 5 出土状況

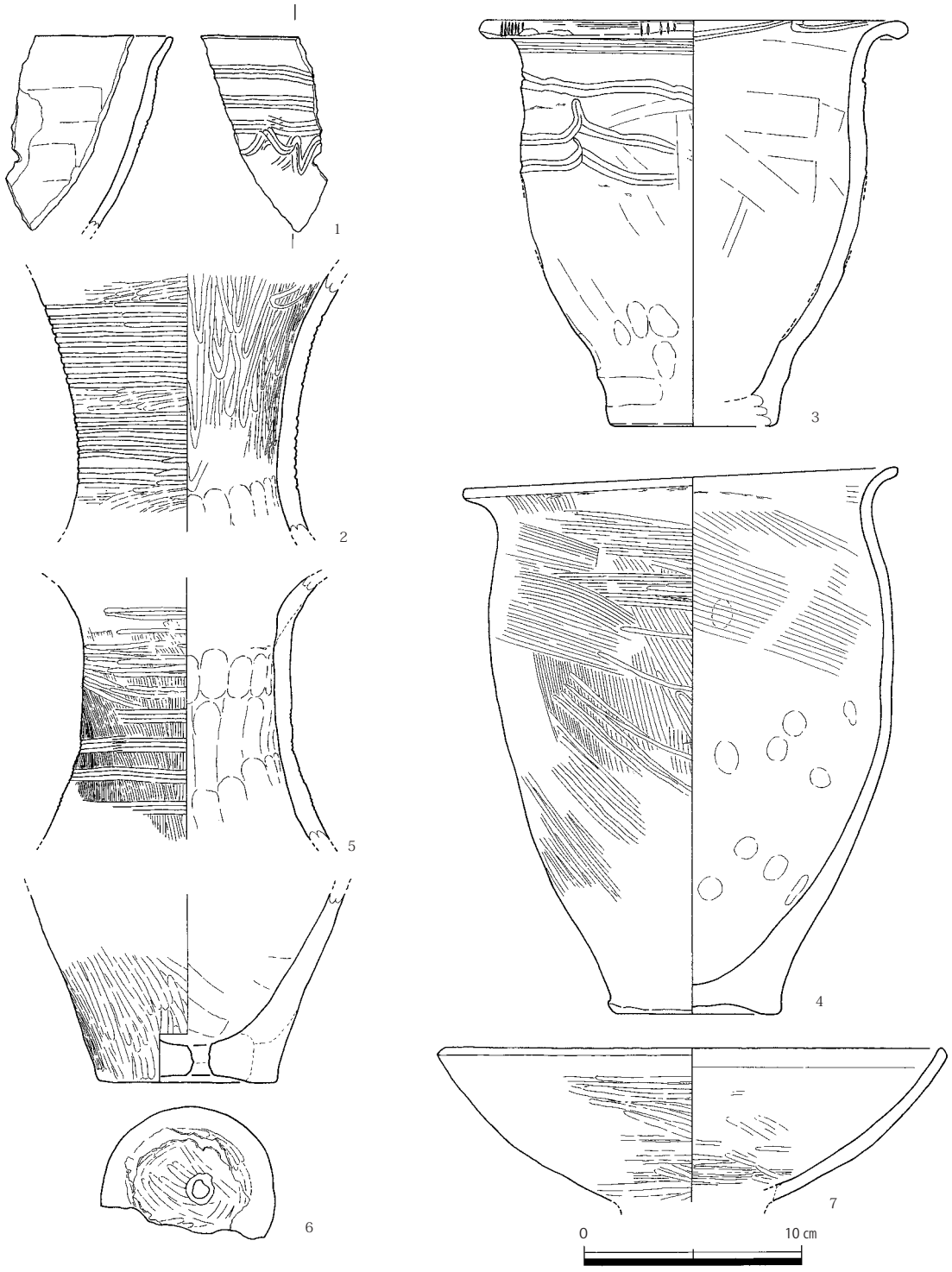


図 85　第 14 － 1 面～第 13 － 2 面　1609 流路東岸ポイントバー最上層出土遺物（その 1）
（1 ～ 3：北側（20N － 9i・j）、4：土器群 1、5 ～ 7：土器群 1 周辺（20O － 10a））

ナデ、ミガキの順に入る。胎土は生駒西麓産である。時期は限定しがたい。

図86‐6 ～ 9は土器群 2 周辺で出土したものである。

図86‐6は弥生土器甕である。内面は、底部ナデ、その上にはタテハケ残る。口縁はヨコナデ、他はヨコミガキ、下半に炭化物付着するが、底部にはない。外面は、底部ナデ、底部側面にタテハケ残るがそれより上は左上がりミガキ、上部は磨滅で調整不明瞭だが、口縁はヨコナデか。胴部最大径付近に煤付着する。胎土は、角閃石なく、わずかにチャートがあり、河内低地産か。河内Ⅱ様式頃のものか。

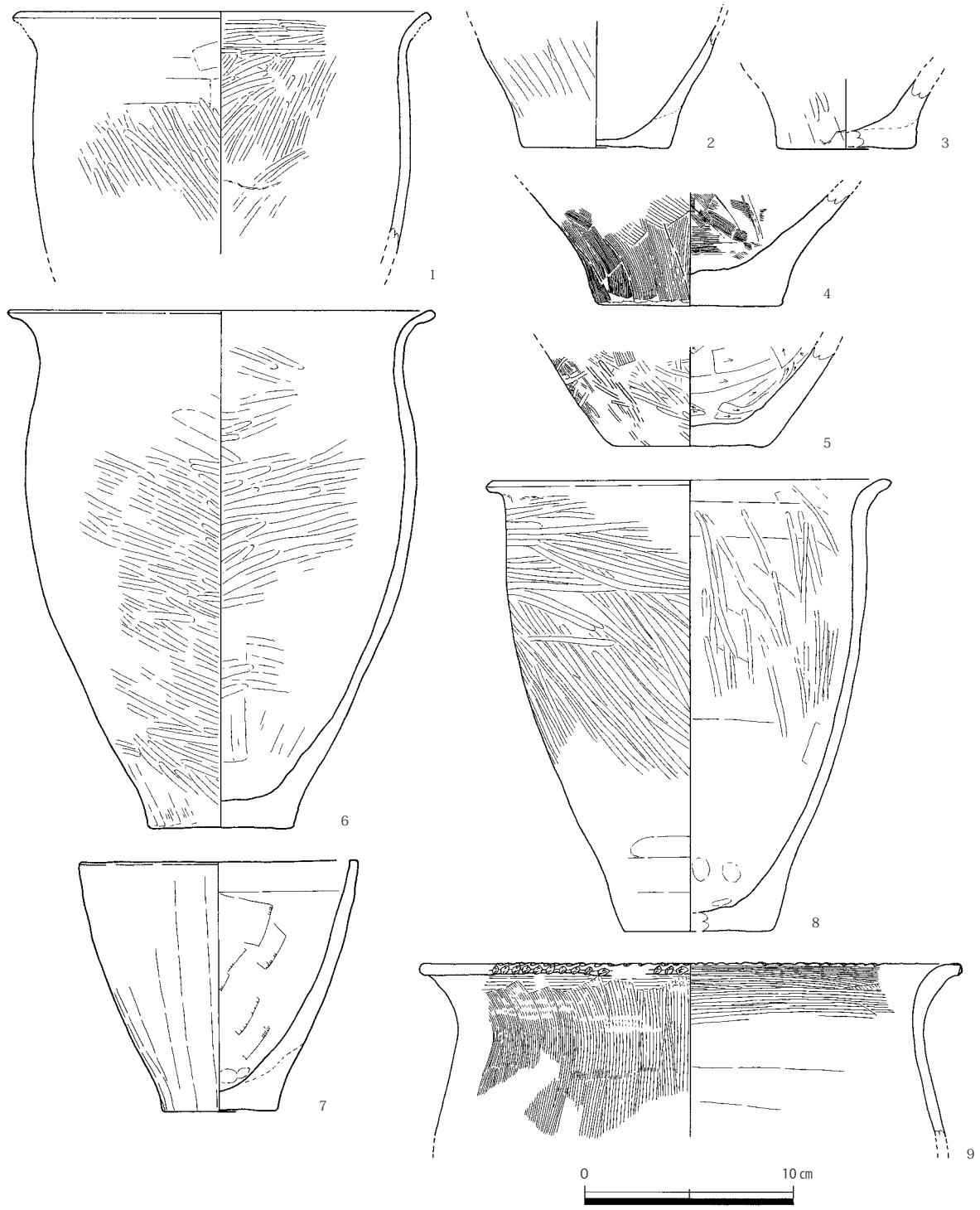


図 86　第 14 － 1 面～第 13 － 2 面　1609 流路東岸ポイントバー最上層出土遺物（その 2）
（1 ～ 3：土器群 2、 4 ・ 5：土器群 2 直下、 6 ～ 9：土器群 2 周辺（200 － 10b））

図86‐7は弥生土器鉢である。内面は、やや磨滅するが、底部にツブシ、体部は左上がりハケ、口縁はヨコナデである。外面は強いタテナデで単位は平坦面を成し、口縁はヨコナデである。生駒西麓産胎土である。鉢でもあまり類例を見ない形態・調整であり、時期を限定しがたい。

図86‐8は弥生土器甕である。内面は、底部にユビオサエ、体部に左上がりナデ、口縁にヨコナデが残るが、それらを切ってタテミガキがまばらに入る。下部に剥離多い。外面は、底部は磨滅で調整不明、底部側面付近は剥離多いがヨコユビナデ残る。口縁は屈曲部にユビオサエ残り、ヨコナデ、それら

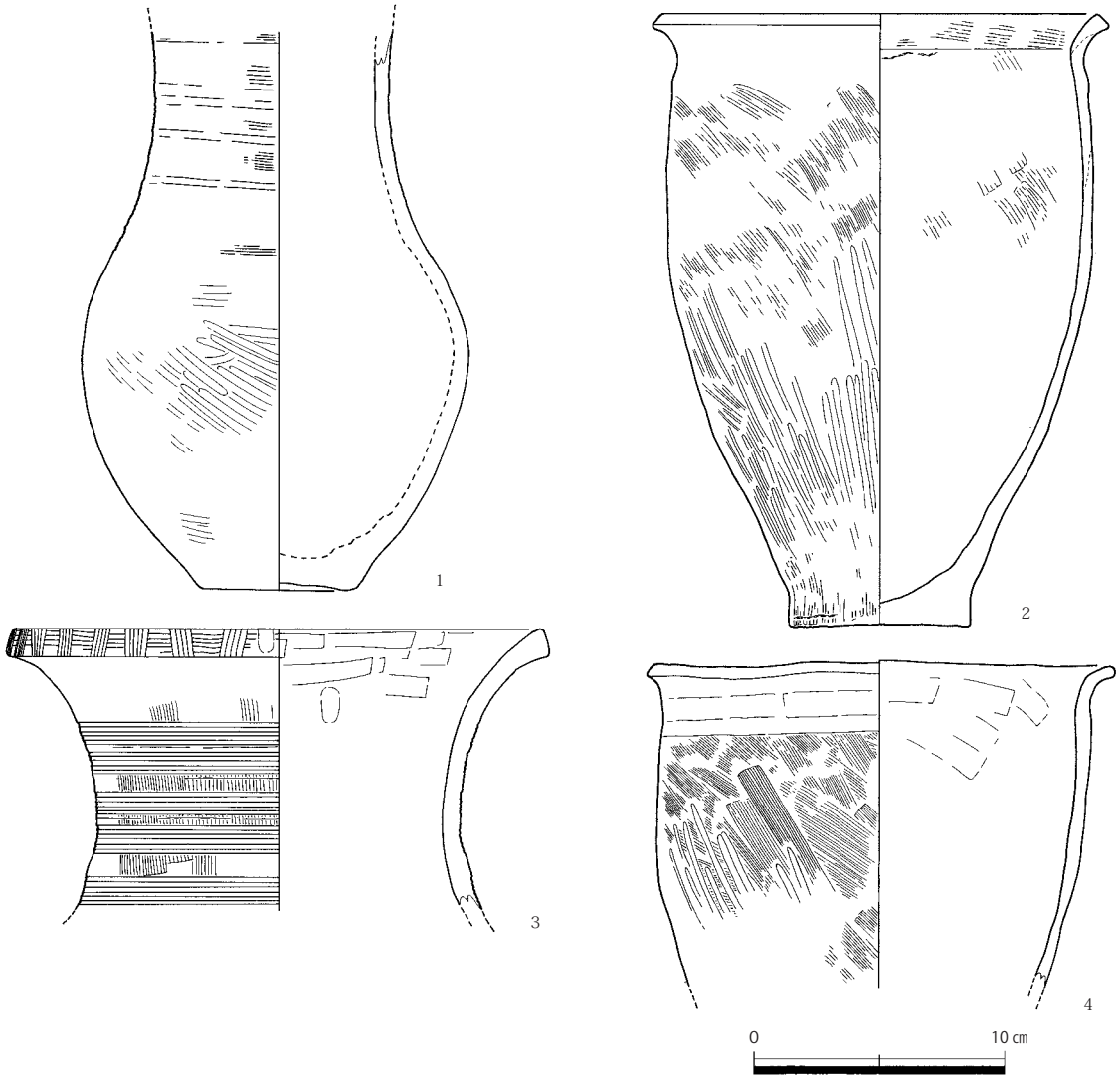


図 87　第 14 － 1 面～第 13 － 2 面　1609 流路東岸ポイントバー最上層出土遺物（その 3）
（1 ：土器群 3 、 2 ：土器群 4 、 3 ・ 4 土器群 5 ）

を切ってミガキが入るが、下部のタテミガキを上部のヨコミガキが切る。胎土は生駒西麓産である。内面にもミガキが入る甕は河内Ⅱ－ 1 ～ 2 様式に限定できるだろう。

図86 － 9 は弥生土器甕片である。内面は口縁ヨコハケ、それを切り体部ヨコナデである。外面は口縁ヨコハケを切り、タテハケ、口縁端部は上下に交互に刻み目が入る。胎土にはわずかにチャートが見られる。いわゆる大和型甕で、畿内Ⅱ様式頃のものか。

図87 － 1 は土器群 3 の弥生土器壺である。内外面とも磨滅する。内面はナデか。外面は、底部ナデ、胴部ミガキ、上半ヨコミガキ、下半左上がりミガキである。頸部に上下を 1 条の沈線文で画された櫛描直線文が、残存部で 5 帯確認できる。櫛の条数は 6 条か。胎土は生駒西麓産である。細頸壷ほど胴部張らず、頸部下半も締まらず、細頸壷成立前の長頸広口壷であろう。河内Ⅱ－ 1 様式に類例あり。

図87 － 2 は土器群 4 の弥生土器甕である。内面は、底部磨滅で調整不明、胴部左上がりハケ残存、口縁はヨコハケである。外面は、口縁部ヨコナデ、上半と底部側面付近タテハケ残り、それを切り胴部下半タテミガキ、底部はナデである。生駒西麓産胎土である。河内Ⅱ－ 2 ～ 3 様式にありうる。

図87 － 3 ・ 4 は土器群 5 のものである。

図87 － 3 は弥生土器壺片である。内面はナデ、口縁ヨコナデ、外面タテハケ後、口縁部ヨコナデ、頸

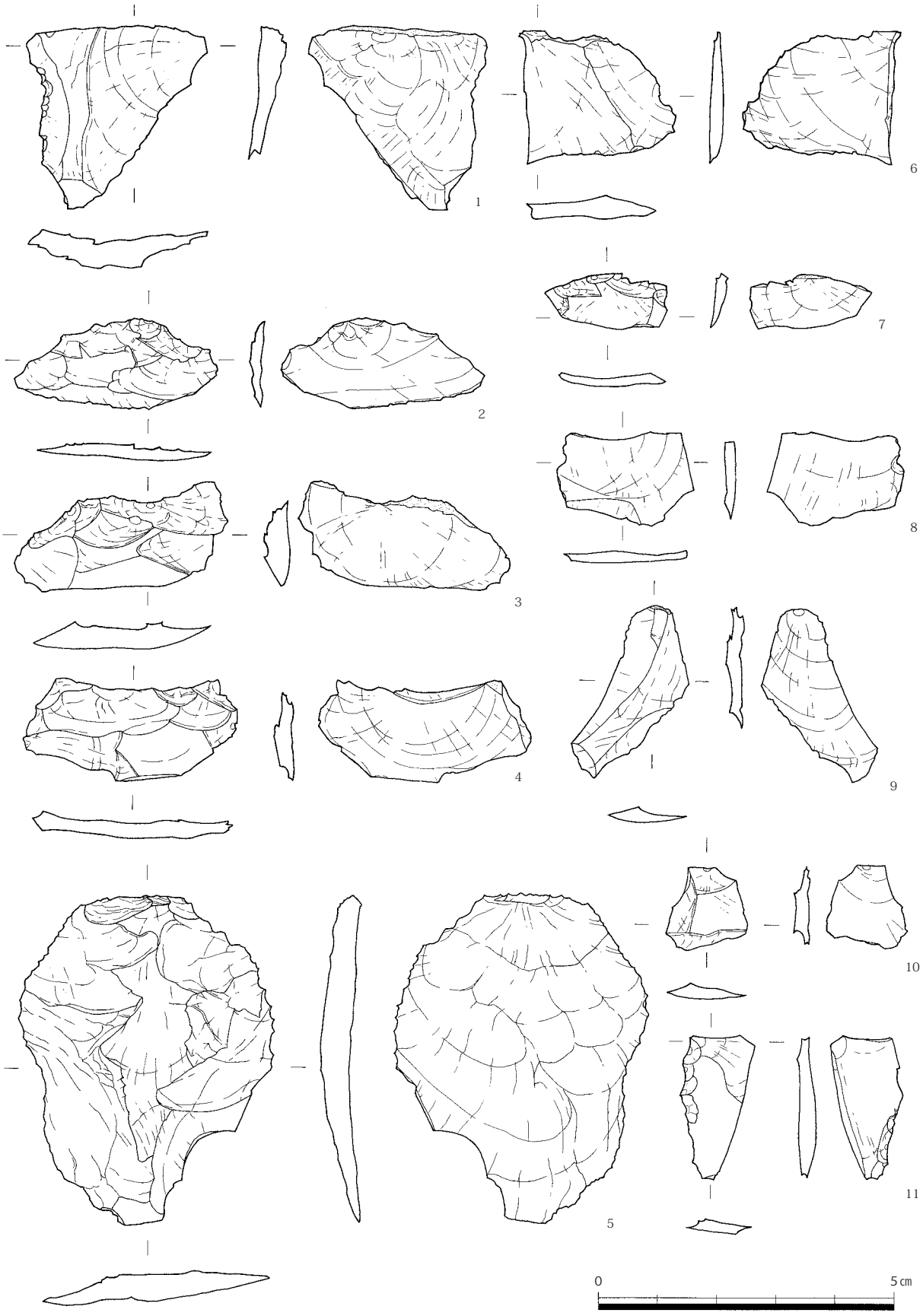


図88　第14－1面～第13－2面　1609流路東岸ポイントバー最上層出土遺物(その4)石器(その1)
(1：北側（20N－9i・j)、2：土器群2周辺（20O－10b)、3～11：土器群2直下)

部に櫛描直線文５帯入る。口縁端部はやや下に拡張、横方向の櫛描直線文を１㎝強間隔の縦の櫛描文が切るが、１ヵ所縦方向に強いナデあり。胎土に角閃石はわずかで、河内低地産か。短頸広口壺は河内Ⅱ－２様式を最後とし、口縁端部を拡張するのは新しい傾向なので、河内Ⅱ－２様式に限定できる。

図87－４は弥生土器甕片である。内面はナデ、口縁はヨコナデ、外面はタテハケ後、胴部下半にタテミガキで、ハケを口縁からの３条のヨコナデが切る。胎土は生駒西麓産である。胴部下半にミガキの入るハケ甕の系統で、口縁の屈曲が弱く、胴部が張らない形態から河内Ⅱ－２様式に限定できる。

図88・89はサヌカイト製石器類である。図88－１はX=－149,900以北より出土、図88－２は土器群２周辺出土で、それ以外は土器群２直下出土のものである。

図88－１は二次加工のある剥片である。ポジ面左下片は折れで、上辺は原礫面が打撃面となっている。ネガ面の左辺に若干の押圧剥離が見られ、刃部を形成する。風化は弱い。

図88－２は剥片である。下辺は折れである。ネガ面左端の剥離は剥離面の調整か。風化は弱い。

図88－３も剥片である。上辺打撃面は原礫面が残る。ネガ面左端の二つの面は調整か。風化は弱い。

図88－４も剥片である。ネガ面には左右からの打撃による剥離面が残る。風化は弱い。

図88－５も剥片である。ネガ面左右下の剥離面は原礫面除去の剥離のようで、ポジ面がやや凹面を成すのも原材の端近くだからであろう。風化は弱い。

図88－６も剥片。ポジ面の打点から折れたものである。ネガ面右の剥離面は調整か。風化は弱い。

図88－７も小さいが剥片である。風化は弱い。

図88－８はチップである。上辺が折れ、打点は遺存しない。剥片の一部が事故的に剥離したものか。風化は弱い。

図88－９もチップである。ネガ面左上の剥離面が剥片のネガ、剥離面調整のものである。風化は弱い。

図88－10もチップである。剥離面調整のものか。風化は弱い。

図88－11は二次加工のある剥片である。ポジ面は左辺が打点から左右に折れているが、右辺に、上はネガ面から、下はポジ面から押圧剥離が入り刃部を形成しようとしている。石鏃を作ろうとしている途中に折れて廃棄されたものか。風化は弱い。

図89－１はチップである。性格は不明、風化は弱い。

図89－２もチップである。ポジ面と近い打点でネガ面に三つの剥離面がある。風化は弱い。

図89－３もチップ。上辺と、ネガ面右辺の一部に原礫面残る。左辺に剥片採取の打撃面があるようで、調整剥離か。風化は弱い。

図89－４は剥片である。ポジ面右辺が打点から折れる。ネガ面右上辺に原礫面残る。風化は弱い。

図89－５はチップである。ポジ面とネガ面は90度打撃方向が異なる。風化は弱い。

図89－６は剥片である。ネガ面左上の大きめの剥離面が剥片のネガである。左下の剥離面が最新のものであり、これでえぐれてしまったため廃棄か。風化は弱い。

図89－７はチップか。上辺は原礫面残る。風化は弱い。

図89－８もチップである。ネガ面右の剥離面二つから、原材の端付近の調整と分かる。風化は弱い。

以上、1609流路東岸ポイントバー最上層包含遺物群は、土器では甕を主体とし、壺がほぼその1/4あり、少数ながら鉢・高坏・甑などもある。その組成は集落的様相と言えるだろう。

土器の示す時期は河内Ⅱ－２様式期を中心とし、そこから下らない期間と言える。少数ながらⅡ－１様式に限定できるものもあり、期間の始まりはその時期と見て良い。

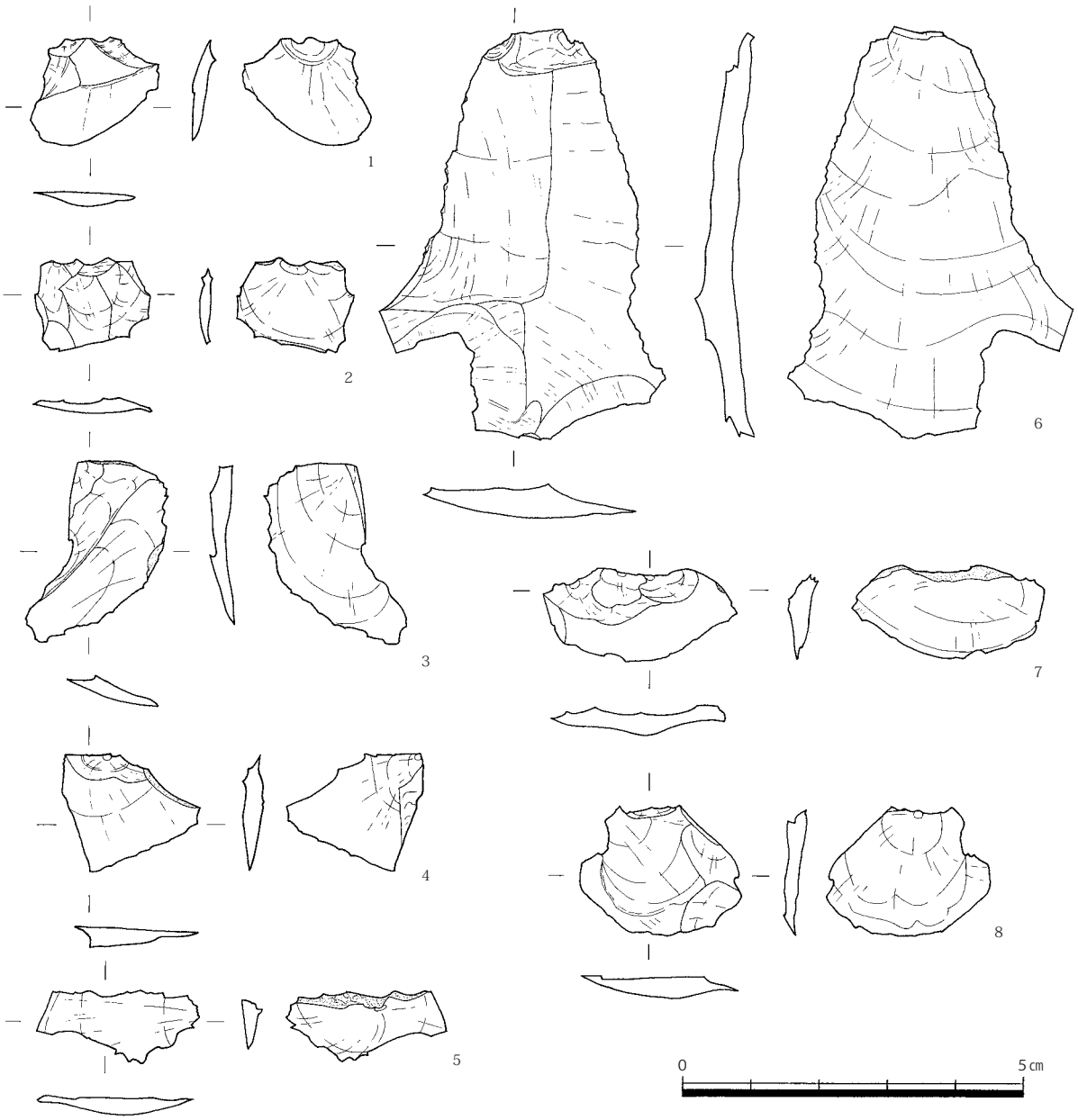


図89　第14－1面～第13－2面　1609流路東岸ポイントバー最上層出土遺物(その5)石器(その2)
(1～8：土器群2直下)

石器類は石核を欠くが、剥片に事故品や二次加工のあるもの、未製品などがあり、石器製作の残滓を廃棄した状況と見て良い。調査区外の近くに集落が存在し、この流路岸の緩斜面が廃棄場所として使われ、調査区内に居住域が拡大した後も廃棄場所として使用され続けたのであろう。その終わりは1609流路が埋積して低地2となる時点であり、居住域の終焉より早い時期と考えられる。

この層がどの断面でも層序的には第13‐2層より下となるのは、微高地上と流路内緩斜面の土壌化の環境の違いと考えられ、自然土壌層同士の接した上下関係は、必ずしも時期差を示すとは言えない。

第13‐2b層包含遺物（図90）　幾度か先述したが、微高地1・2においては第13‐2b層内に部分的土壌層が存在している。その事からもこの層は最低でも3回の洪水により形成されたと考えられる。また、微高地1上では、部分的な浸蝕や再堆積も多く、第13‐2層相当の部分的堆積層さえ見落とした可能性がある。そのため、第13‐2b層掘削時には、上部出土遺物を「第13‐2b層出土遺物」とし、第14‐1面に近い部分から出土した遺物を「第13‐2b層下部、第14面直上出土遺物」と分別した。

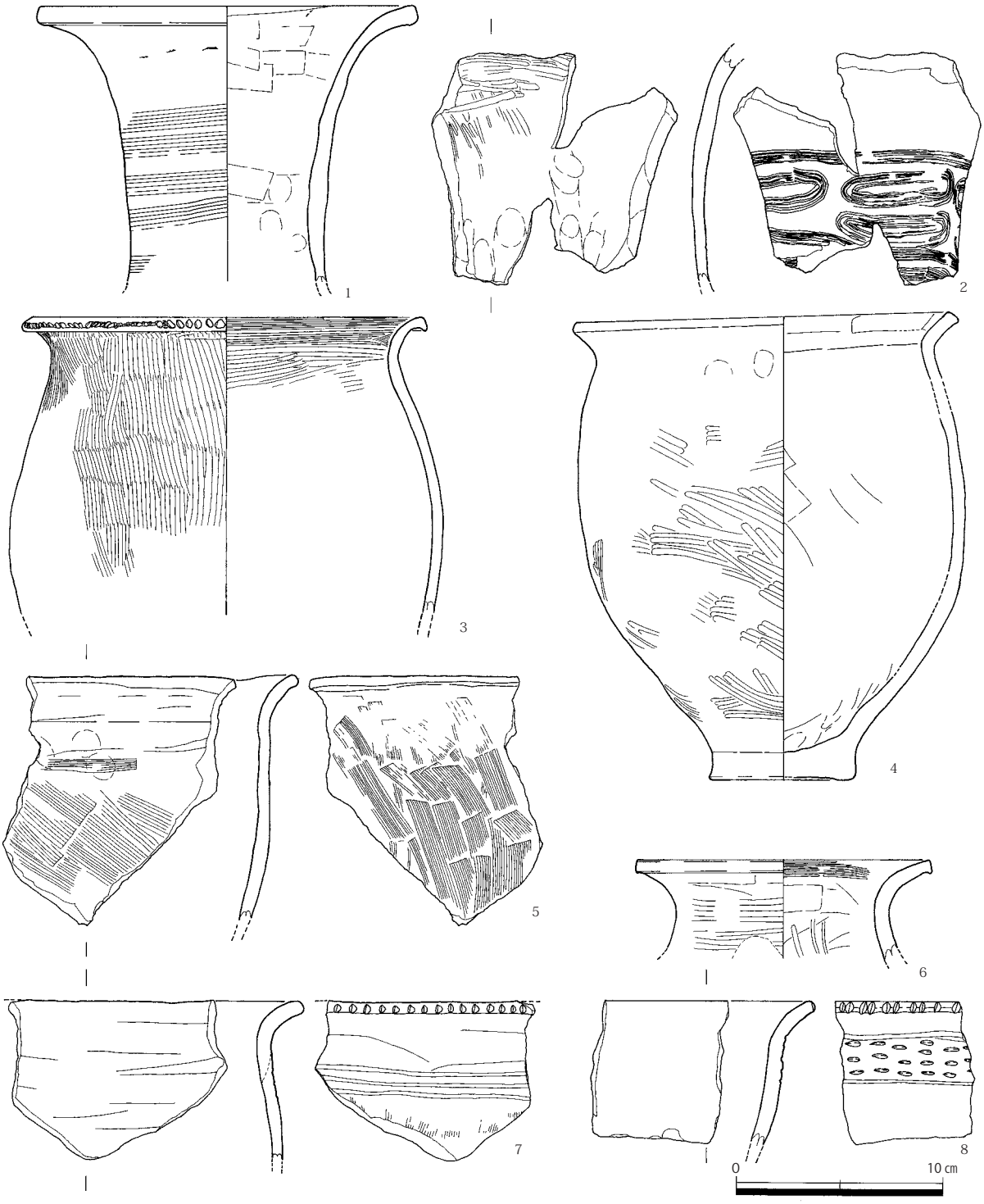


図90　第13－2b層・第14－1層　包含遺物（1～5：13－2b層出土、6～8：14－1層出土）

後者が第14‐1面を埋没させた、第13‐2b層内で最古の堆積に包含された遺物である。予想どおり、前者の遺物量は多く、そのほとんどは微高地1部分の層上部付近から出土している。

また、微高地1部分では掘削途中で一部、第13‐2b層内部分的土壌層上面の検出を行い、遺構の有無を確認したが、遺構は見られなかった。

まず、破片数を見ていく、カッコ内に数字のみのものは生駒西麓産胎土のものである。

「第13‐2b層出土遺物」は、弥生土器263（175）{甕152（130）（ミガキ115（115）、ハケ28｛7｝）、

壺63（31）（広口７（２）、肩部段１（１）、刻み目突帯１（１）、沈線文２（２）、櫛描直線文21（11）、流水文２、底部２（２））、鉢５（５）（櫛描直線文４）、甑１（１）｝である。ただし、この中の生駒西麓産胎土ミガキ甕のうち、102片は図90－４の１個体の破片数である。

「第13－２ｂ層下部、第14面直上出土遺物」は、弥生土器32（24）｛甕７（７）（ミガキ１、ハケ１）、壺19（12）（広口１、肩部段２、沈線文１）、高坏１（１）｝である。

５点が図化できた。全て「第13－２ｂ層出土遺物」である。

図90－１は弥生土器長頸広口壺片である。頸部下半にはユビオサエ残るが、その後全体にヨコナデ、外面もヨコナデだが単位がはっきりしない。頸部に４帯の櫛描直線文が残る。口縁端部もヨコナデ、一部に二次的被火による赤変が見られる。胎土は生駒西麓産である。口縁端部が、やや厚みを増すものの拡張というほどではないため、河内Ⅱ－１～２様式に限定できる。

図90－２も弥生土器長頸広口壺片である。内面は頸部下半にタテユビナデ・ユビオサエが残り、その上方にタテミガキ、口縁のヨコミガキがそれを切る。外面はナデで、頸部に櫛描流水文が入る。胎土には角閃石が細粒でわずかしかなく、河内低地産か。流水文は流麗さがなく、割付も乱れているが、簡略化はされていないので、河内Ⅱ－１様式のものと見てよかろう。

図90－３は弥生土器甕片である。内面はヨコナデだが、頸部から口縁にヨコハケ残る。全体に煤付着。外面はタテハケで、煤付着、特に外反した口縁の下面に厚い。口縁端部には刻み目が連続し、左から連続した刻み目が幅４㎝弱、右の刻み目を切る。なぜか刻み目には布圧痕が残る。胎土に角閃石が、細粒のものわずかしかない。ハケ甕で、口縁の屈曲は緩いが、口縁端部が下方に拡張され、胴部最大径が口径を越えている。大和型甕で、畿内Ⅱ様式頃のものか。

図90－４は弥生土器甕で、破片102片が接合した。微高地１上、1310住居１よりやや北側から出土した。第13－２ｂ層内部分的古土壌層上面を確認する際の出土だが、出土状況は確認できていない。状態から類推すると、破片は細く、破断面が風化したものが多い。底部と口縁の破片は比較的揃うが、胴部に破片が足りない部分が多い。その事から、埋納の可能性は低く、１個体が倒置状態からその場で割れ、散乱していたと思われる。

内面は底部にユビオサエ残り、左上がりナデ、口縁はヨコナデである。外面は左上がりミガキ、口縁屈曲部にユビオサエ残り、口縁はヨコナデ、底部側面もヨコナデである。胎土は角閃石の量が微妙だが、粘土生地自体は緻密で明色なので、河内低地産か。時期は河内Ⅱ様式とまでしか限定できない。

図90－５は弥生土器甕片である。内面は屈曲部ユビオサエ残り、ヨコナデとヨコハケがそれを切る。胴部左上がりハケ、口縁ヨコナデである。外面はタテハケで、口縁ヨコナデがそれを消す。煤付着。胎土は生駒西麓産である。口縁がやや波打ち、傾きが判然せず河内Ⅱ様式頃のものとしか言えない。

「第13－２ｂ層出土遺物」のほとんどは、第13－２面遺構の時期と変わりなく、第13－２ｂ層内部分的古土壌層に包含されていたよりも、第13－２面微高地上の浸蝕・再堆積の繰り返しの中に入った可能性が高い。本来の状況に近いのは「第13－２ｂ層下部、第14面直上出土遺物」の方であろう。ただ、その中のミガキ甕１片のみで、第14－１面の埋没が河内Ⅱ様式まで下ると言うのは躊躇される。

小結　この面では、居住域に併存する、広範囲の耕地の存在は確認できなかった。しかし、調査区内を抜ける水路の存在から、周囲に耕作地がある事は肯定できる。そして、調査区外南東側から微高地１上を伸びてきた水路が、給水を主とする 1501溝南半～ 1502溝と、排水を主とする 1498溝に分岐する位置に居住区が存在している事が認識できたのが、最も重要な点であるかと思う。

つまりこの居住区は１セットの水利体系の要に位置しているのである。

井戸が存在せず、幹線水路から住居近くの土坑に水を導く形態がある事や、住居の間に小さな耕地区画が散在する形も、この居住域が、耕作地や、その幹線水路と関連が深い事を暗示する。

また、1609流路東岸ポイントバー最上層や微高地１の部分的土壌化層の包含遺物は、この調査区の居住域に先行する居住域が近くに存在し、調査区内に居住域が拡大してきた可能性を強く暗示している。

だとすると、70m ほど南の 08‐２調査区で確認された弥生時代前期の居住域との関係が問題になり、時期的な検討が重要になる。

08‐２調査区の居住域は、16面から 15面に継続し、15面が本調査区の第14‐１面に相当する。土器編年では、河内Ⅰ－２様式に入る可能性もあるが、Ⅰ－３～４様式の時期にまとまる。Ⅱ－１様式にありえる土器もあるが、あえて下げて考える要素はないと言える。本調査区の第14‐１面で河内Ⅰ－４様式の土器が出土するのもそれと整合する。

本調査区第13‐２面遺構出土遺物は、河内Ⅱ－１～２様式に属するものがほとんどである。1609流路東岸ポイントバー最上層の遺物も含めると、Ⅱ－１様式に限定できる遺物が一定数あり、Ⅱ－２様式期に限定できる遺構に、切り合いで先行する遺構が存在する事から見れば、居住域の成立はⅡ－１様式に遡ると見ても大過ない。そして、1712 ピット土器１がⅡ－３様式に限定できる居住域最新の遺物であり、その破片が 1750住居４の柱穴からも出土し、住居４の廃絶もその時期と考えられる。

結果、08‐２調査区の前期居住域とは併行する期間がないと結論できる。

おそらくは 08‐２調査区の居住域は前期で廃絶し、中期初頭に北隣の、本調査区微高地１の南東側続き部分に新たな居住域が成立し、それが、Ⅱ－１様式期のうちに、本調査区まで拡大したのであろう。

４棟の住居址と１棟の建物は、住居１・３は先行する遺構があり、本調査区内での居住域の成立の初頭には遡らない可能性が高い。住居２は 1560・1566土坑の埋没と共に廃絶し、1561溝はその後も存続したと考えれば、少なくとも第13‐２面埋没時までは存続していない事になる。建物１も二つの柱穴が小畦畔盛土下だったので同じである。住居４はこの面最新の遺物を含む。各住居は充分な距離を置き、同時期併存的様相がある。つまり、住居2・建物１のみが存在する時期、全住居址・建物が併存する時期、住居２が廃絶した後の時期があったと見る事もできる。

すると、居住域の存続期間は前・中・後の三期に分けられ、前期がⅡ－１様式期後半頃、中期がⅡ－２様式期、後期がⅡ－３様式期前半頃と考えられる。

水路の存在から見て、この居住域の主な生業は水田耕作と考えられるが、遺物から、石器製作も行っていた事は間違いない。サヌカイトの原材は、小型の自然礫がほとんどであろう。製作した石器の大部分は剥片の大きさから石鏃で、若干の掻器を伴う、比較的単純な石器製作であったと考えられる。原材は二上山周辺地域的な様相で、作られる石器は自家消費的なものであると言える。

住居３は実際には住居ではないと見られ、住居・建物の多様さは、一見居住した人間の多様さを現すように思えるが、使用した土器は生駒西麓産が多く、河内低地産がそれに混在する、遺跡の立地に整合する状況であり、むしろ他地域からの搬入・影響が少なすぎるくらいに思える。

居住域に念入りに巡らせた排水用の溝、住居１・２に見る防湿を第一とした炉なども、河内平野に居住する経験を積んだ人間集団の工夫であろう。

将来この調査区の南東隣接地を調査する際、何が検出されるか興味深い。その方面はこの微地形を形成した水系の上流に当たり、微高地１第13‐２ｂ層内部分的土壌層に相当する層が普遍的に広がり第

13‐３層となり、その上面で、拡大する前の居住域が検出される可能性がある。

02‐１・06‐２調査区では13ｂ面がこの面と共通し、微高地１の続きには遺構が集中している。埋土に炭化物を含む長楕円形の土坑や、炉跡と思われるもの、柱穴などが検出されているが、住居址・建物は検出されていない。その北側では平行・直交する溝群があるが、耕地区画関連の遺構か。低地３の続きにも若干の遺構があるのが、上層床面遺構か検討が必要である。1502溝の続きは上の13面の遺構としている。低地２も13面で掘り抜き、1609流路の分別はされていない。遺物は前期のものが多いが、中期のものもあり時期的には整合する。

07‐２調査区では13‐３ａ面が対応するはずだが、検出されず、13‐２ａ面では低地３の続きに遺構はない。遺物も少ないが、包含層の遺物群は同じ時期を示す。

これでまた遺跡内居住域のデータが蓄積され、耕地の変遷のみならず、それを経営する集落の在り方も研究の対象にできるようになってきたと言える。また、弥生時代には、遺跡内でもこの付近から東側が、居住に適した環境であった事が判明してきたとも言える。

第16項　第14‐１面（図91・図版38‐１・２）

この面では調査区中央を貫く1609流路が明確に機能し、その東西に、耕地区画と水路が検出された。弥生時代前期の面で、この耕作地を経営したのは08‐２調査区の居住域に住む集団であろう。

この面の上には従来多くの調査区で14‐１ａ層とされてきた黒色の水成堆積層、第13‐２ｂ‐４層が堆積する。溢流的な洪水で、地表面を巻き上げる泥流状の水流が押し寄せ、堆積した層と思われる。上面に人・鳥・鹿などの足跡が見られる事から、遺跡のほぼ全域が沼状の環境になった時期を想定する調査者が多い。肯定しても良いが、層内に、年縞など長期間の湖沼底堆積を示すものが確認された事はなく、沼状であった期間は、堆積物の供給が一度も増減しない期間、長くて１年以下と考えられる。

この面には、その第13‐２ｂ‐４層堆積時のものと思われる、畦畔の途切れや緩い浸蝕痕が見られた。

第14‐１層上下面は激しい地震変形で乱れる（図版37‐３・４）。層内に変形は確認できなかったが、下は第14‐２ｂ層の半ばまで認められる。そのためか、調査区西半では、第14‐１・２層境が断面で確認できなかった。調査区南東側で確認された噴砂は第15‐１面1820流路を埋積した砂層から第13‐２ｂ‐４層上面まで達して止まり、地震は第14‐１面埋没直後に起きたようである。

この面の微地形は、第13‐２面から第12‐１面まで継続した地形とは異なる。この面では、1609流路をはさんでも一貫して東から西へ少しずつ低くなる傾向がある。また大部分は南より北が低い傾向があるが、1609流路東岸、1669溝までの部分は、北が若干高い。1609流路が形成されても、そこから供給される堆積物の影響を、まだほとんど受けていない状態と言える。

1609流路及びその包含遺物（図81・82・91・92）　第14‐２層時点で形成され、第13‐２層時点の途中まで機能した流路である。埋土は、第12‐１面浸蝕痕の埋積層以外は、この流路を埋積した第13‐２層時点の層と、東岸ポイントバー堆積層など、流路機能時に堆積した層（図81の⑳・21・27～29、図82の⑰～⑲）に大別できる。流路は調査区内で東側に弯曲するため、蛇行内側の東岸は斜めに下がるが、攻撃面になる西岸は垂直に近い形で切り立つ。図82の西岸では第13‐２ｂ‐４層以下が垂直にずれ下がり、第13‐２ｂ‐３層は西側から斜めに堆積してそれを覆う。このずれは噴砂から推測される地震と層位的に同時期であり、これも地震の影響の可能性が高い。流路底部は最終調査深度よりはるかに深いようだが、T.P.+1.0mほどから下は、常時激しく湧水する状態で確認できなかった。

この流路は 08‐２調査区の 15面725流路につながるものと思われる。

遺物は流路埋積層からは、破片数で、弥生土器32（23）{甕12（11）（ミガキ９（９）、ハケ２（２））、壺12（７）（櫛描直線文３、流水文１（１）、底部２（２））、鉢１（１）}、杭１である。

流路機能時の堆積からの遺物は少なく、東岸ポイントバー層の下部から、生駒西麓産胎土弥生土器沈線文壺１片と、木製高坏未製品１点（図版37‐７・８）のみである。

５点が図化できた。図92 は流路埋積層出土、図93 は流路東岸ポイントバー下部粗砂層内出土である。

図92‐１は弥生土器甕片である。内面はユビオサエが若干残るが、ヨコミガキ、口縁はヨコナデである。外面は胴部上部にヨコハケ残るが、タテミガキ、口縁は下のハケを切るヨコナデである。生駒西麓産胎土である。ハケが残るがミガキ甕の系統と見てよかろう。河内Ⅱ－１～２様式のものか。

図92‐２は弥生土器壺片である。内面は左上がりハケ後、ヨコミガキだが、胴部最大径部分にはミガキより前に棒状工具による強いナデが入る。底部付近には右上がりのハケもある。外面は、底部は粗いユビナデ、残る粘土接合痕より下はタテハケ、上はヨコハケで、その後、全体にゆるくナデを入れる。胴部最大径付近にはさらにヨコミガキで、その上部に櫛描で直線文・波状文・半円文が残る。櫛描直線文帯の間に波状文が入り、直線文帯は半円文でつなぎ、流水文になっていたのであろう。生駒西麓産胎土である。簡略化した流水文がある事からは、河内Ⅱ－２～３様式頃のものと思われる。

図92‐３は弥生土器壺底部片である。内面は、底部はツブシ残り後ナデ、それ以外はヨコミガキである。外面は、底部ナデ、底部側面はタテユビナデ後、ヨコナデ、上部は棒状工具による強い左上がりナデ後、ヨコミガキである。生駒西麓産胎土である。時期は限定できない。

図92‐４はサヌカイト製掻器である。上辺打撃面は原礫面、下辺は表裏から押圧剥離で刃部を形成する。ネガ面の右上と右片沿いの剥離面は、打点から見て、剥離面調整でも剥片のネガでもなく、製品への二次加工のようである。風化は弱い。

図93 は木製高坏未製品、坏部の材である。樹種はヤマグワである。一部欠け、口縁端部も遺存しないが、端部付近は薄く、口縁の円弧はおおよそ残存形に近いだろう。内面は加工痕散在の他、中心部に抉りが入る。外面は荒れて加工痕も不明確。底部付近は木目に沿って剥離して割れる。

流路埋積層出土遺物は第13‐２面居住域遺物群と時期も共通し、流路埋没時期を示す。東岸ポイントバー下部粗砂層内遺物は、沈線文壺は弥生時代前期的であり、木製高坏未製品は、08‐２調査区弥生時代前期居住域で木製品水漬け遺構が検出され、木製品の未成品が確認されている状況に符合する。

1669溝・1670・1671畦畔及びその出土遺物（図94・95・96・図版39‐１～５） 1609流路東岸側耕地区画内を北上する大畦畔を伴う水路である。調査区南端で南東方向から入り、北に屈曲する。

1669溝は断面形が、皿状溝の底に、逆台形の溝があるような、肩部二段落ちの形である。幅は 2.6～ 1.5m、平均的には 2.1m ほどか。二段目の幅は 1.2m ほどである。上段の形は図94 の断面 No. ２に崩落土（⑤）も見られるので、溝掘削以降の浸蝕・崩落によるものかもしれない。溝底部高は、南端屈曲部ではやや低く T.P.+1.62m だが、その北で T.P.+1.76m、調査区中ほどで T.P.+1.67m、北端付近で T.P.+1.63m とわずかに北に低くなっていく。南端屈曲部が深いのは浸蝕か。埋土は第13‐２ｂ層の上層、上面が土壌化する中層（図94断面 No. １・２の③）溝機能時流水堆積の下層に分けられる。さらに南側では土砂流的な堆積の最下層が見られる（断面 No. ２の⑥）。中層に土壌化の痕跡が見られるのは、面埋没時が、溝に水が流れていない時期であった事を示す。

1670畦畔は幅の変動大きく、2.0 ～ 0.8m、頂部高は、南 T.P.+2.24m、中ほど T.P.+2.22m、北は上

図 91　第 14-1 面　全体図

面1498溝により削平され不明。1671畦畔も幅変動大きく、1.8～0.8m、頂部高は、南T.P.+2.25m、中ほどT.P.+2.16m、北T.P.+2.17mである。南側に1ヶ所、水口あり。両畦畔は規模もほぼ同じ。断面では、上面の盛り上がりは確認できるが、畦畔盛土と耕作土の層境を確認する事はできなかった。

この水路の西側では1700畦畔に囲まれた部分が高く、西側に緩傾斜面がある。そして、水路の東側は調査区内で一番高い。つまり、高低差は少ないものの、水路東側が微高地であり、その西縁辺を水路が通っていると推測する事ができる。

遺物は1669溝から弥生土器壺1個体（8片）と生駒西麓産胎土の縄文深鉢6片が出土している。弥生土器壺は「1669溝土器1」として出土状況を記録した（図95・図版39－5）。頸部から口縁の破片は失われた状態で、溝の西側の二段目の肩にかかり、下層上面に倒置状態で接している。包含されているのは中層である。層位的に見れば第14－1面埋没直前の時期に溝に入った事になる。

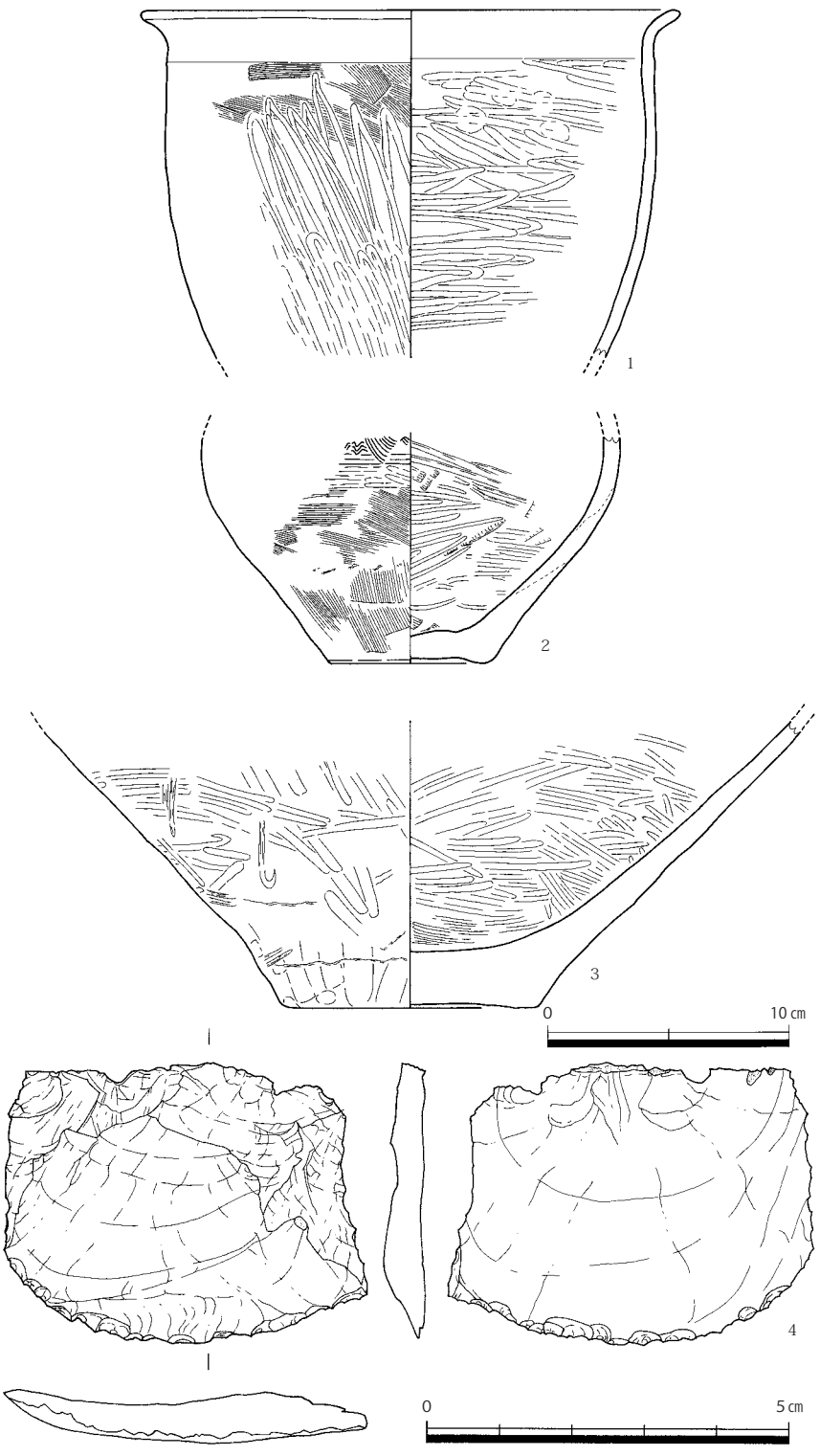


図92　第14－1面～第13－2面　1609流路埋積層出土遺物

図96－6が1669溝土器1である。内面はヨコミガキ、底部は剥離多く調整不明、外面もヨコミガキ、底部は一定方向に軽くナデ後、周囲に1条のナデ、籾圧痕が5個見られる。肩部にはかろうじて沈線文が1条残る。胎土には角閃石が少なすぎるが、細粒にも含まれるので生駒西麓産か。形態から、河内Ⅰ様式に少数ある、あまり胴部の張らない広口壺の系統と思われる。Ⅰ－1様式までは遡らない。

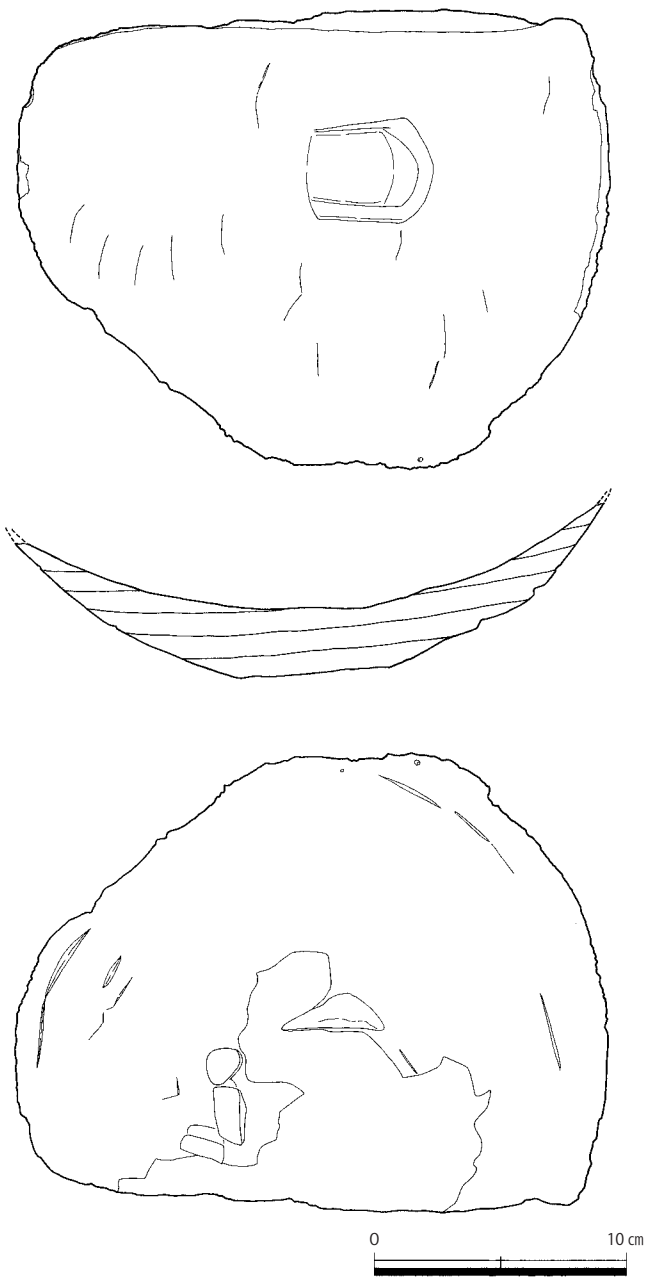


図 93　第 14 － 1 面～第 13 － 2 面　1609 流路
東岸ポイントバー下部粗砂層内出土遺物

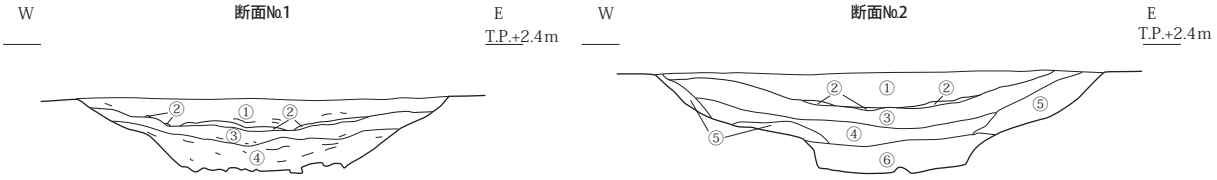
図96‐５は 1669溝出土の縄文土器深鉢の１片である。内外面ヨコナデで、口縁部の突帯には刻み目、胎土は生駒西麓産である。縄文晩期末葉の長原式で、弥生土器とは河内Ⅰ－２様式までは共伴しうる。他の縄文土器片はこれより小さく、接合もしない。溝が第14‐２層に切り込んでいるので、その層に包含されていたものが入った可能性が高い。

1610溝・1611浸蝕痕（図97）　第13‐１・２面1258流路の端緒となる溝と、その両肩部の浸蝕痕である。図97 の X= －149,900 ライン断面のように、1258流路の底で一部1610溝が見えていた部分もあったが、1258流路のほうが、自然流路として蛇行を強めているので、1610溝・1611浸蝕痕はその肩部より外側に位置する部分も多い。第13‐２層・第13‐２ｂ層が 1611浸蝕痕肩部を覆う部分が多く、直接面を埋没させた第13‐２ｂ‐４層が 1611浸蝕痕内に入り、1610溝埋土の上を覆う所もあった。つまり、この両者は第13‐２面に継続せず、この面で形成され、埋没したものである。おそらく、第14‐１面で洪水の水流が 1610溝に流入し、1611浸蝕痕を形成した。その部分は第13‐２ｂ‐４層上面でも浸蝕痕として残り、洪水毎に拡大し、第13‐２面で 1609流路から流路変更したのであろう。

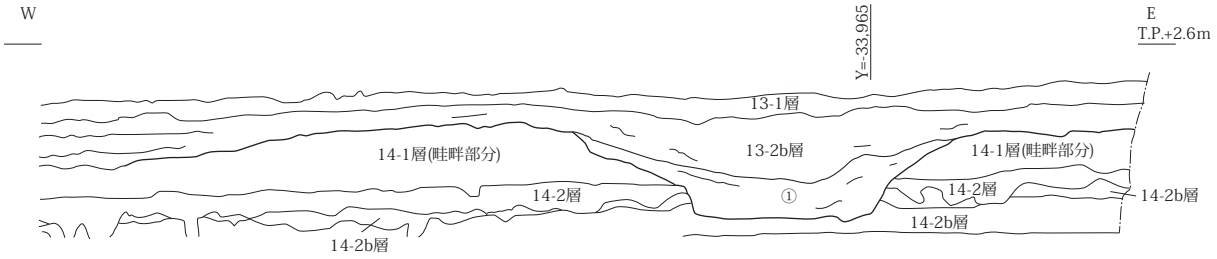
1610溝は残りの良い所で幅約1.1m、壁は立ち、底部は平坦である。調査区南端は浸蝕を受けたのか幅が広いが、底部は T.P.+1.37m、中ほどは T.P.+1.23m、北端付近では T.P.+1.16m と底面の傾斜は極めて緩やかである。図97 の断面 No. 1 では補修したかのようなブロック土（③）も見られる。遺物は生駒西麓産胎土の弥生土器壺１片のみである。

1646溝　1610溝の東側で北上する溝である。南側は 1611浸蝕痕に切られるが、浸蝕痕内の第14‐１層相当層を除去すると、その部分でも残存し、1610溝と調査区南端で重なる事が判明した。しかし、両者が重なる部分が 1258流路に攪乱され、切り合い関係は直接には確認できなかった。だが、1611浸蝕痕内第14‐１層相当層の下にあり、この溝は浸蝕されていない事から、1610溝とは同時期併存はせず、先行する遺構で、調査区南端付近から、1610溝に作り変えられたものと考えられる。

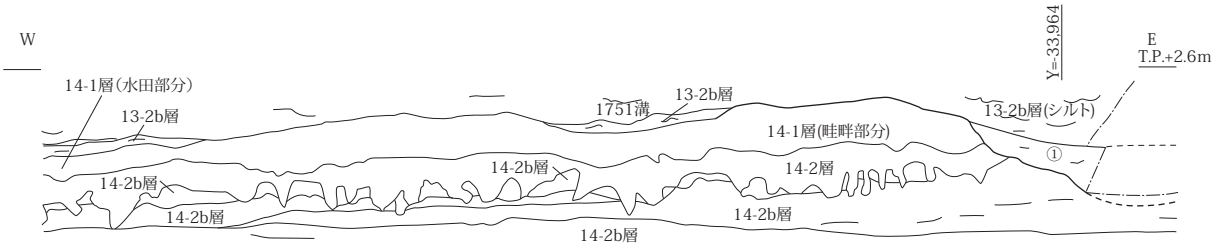
溝は 1609流路西岸の一番高いラインを通り、給水用の水路としては良い位置である。この溝があれ



断面No.1・2
①N4/0～10GY4/1灰～暗緑灰　シルト　ラミナあり　わずかに炭化物あり　「10GY6/1緑灰　シルト」ラミナ状に入る。溝内上層　13-2b層。
②10GY6/1緑灰　シルト　ラミナあり。溝内中層。
③2.5GY4/1暗オリーブ灰　粘質土　シルト主体　わずかに細砂・炭化物あり　わずかにラミナ残る　土壌化痕跡あり。溝内中層　止水堆積。
④N4/0～3/0灰～暗灰　シルト　ラミナあり　炭化物若干あり。溝内下層　溝機能時流水堆積。
⑤7.5Y3/1オリーブ黒　砂質土　細砂～シルト主体　中砂若干あり。溝内下層　崩落土　14-1層の再堆積。
⑥7.5Y4/1灰　砂質土　細砂～シルト主体　中砂若干あり　「10GY6/1緑灰　シルト～極細砂（14-2b層）」の１cm以下のブロック若干あり。溝内下層　混濁した土砂流的堆積。



X=-149,900ラインセクション
①N4/0～2/0灰～黒　シルト～細砂　ラミナあり炭化物あり。溝内下層　溝機能時流水堆積。



X=-149,920ラインセクション
①5Y3/1オリーブ黒　細砂～シルト　わずかにラミナ残る　わずかに炭化物あり。溝内下層　14-1層の再堆積か。

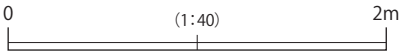


図 94　第 14-1 面　1669 溝　断面図

ば 1610溝の必要性はない。北側では 1645・1647畦畔を伴うが、南側では 1258流路の攪乱に近づく前に、1609流路西岸の地形が低い部分があり（図91 の T.P.+1.68m の部分）そこで畦畔が途切れる。その位置は 1609流路との間は 1.1m しかない。1609流路の蛇行攻撃面の浸蝕が進行し、かつ、溢流時の浸蝕も受け、この溝の維持が困難になり、1610溝に掘り直されたと考えられる。

幅は 1.4m 前後、断面は逆台形、底部の高さは南側で T.P.+1.53m、中ほど T.P.+1.67m、北側 T.P.+1.54m で、南側が低いのは浸蝕を受けるか。両側畦畔は、1645畦畔が幅0.9 ～ 0.5m、高さは南で T.P.+1.80m、北で T.P.+1.71m、1647畦畔は幅1.2 ～ 0.4m、高さは南で T.P.+1.79m、北で T.P.+1.70m である。双方の高さは良く合う。1647畦畔は北側で確実な水口が１ヵ所確認され、南側で畦畔が途切れる部分も、浸蝕を受けてはいるが水口の可能性がある。この溝・畦畔からは遺物は出土していない。**1208土器1・1608土器２・1691土器３・1716土器４**（図95・96） 第14‐１面上で、個体として把握できる土器が４個体出土した。

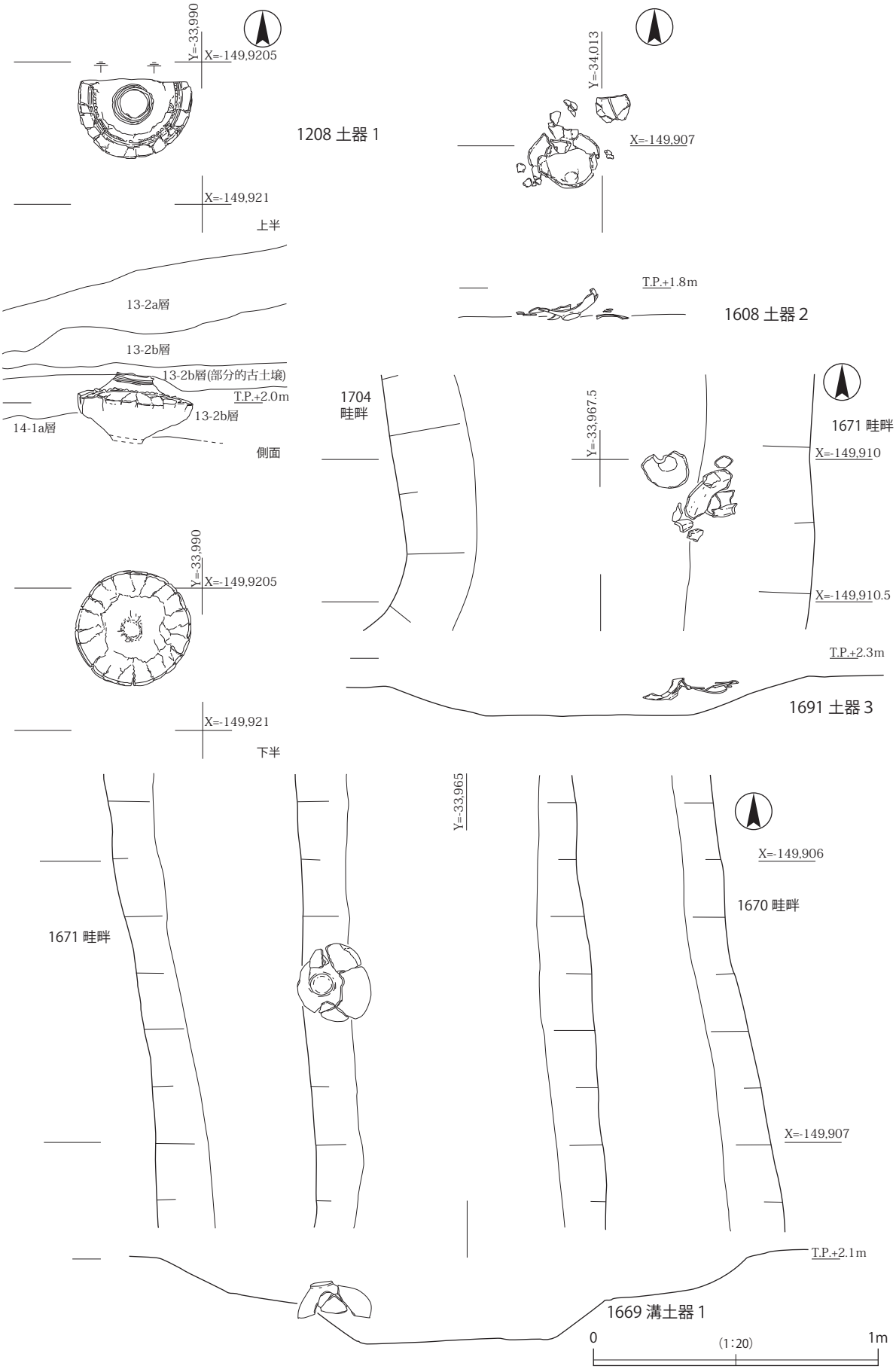


図 95　第 14- 1 面　土器出土状況（1208 土器 1・1608 土器 2・1691 土器 3・1669 溝土器 1）

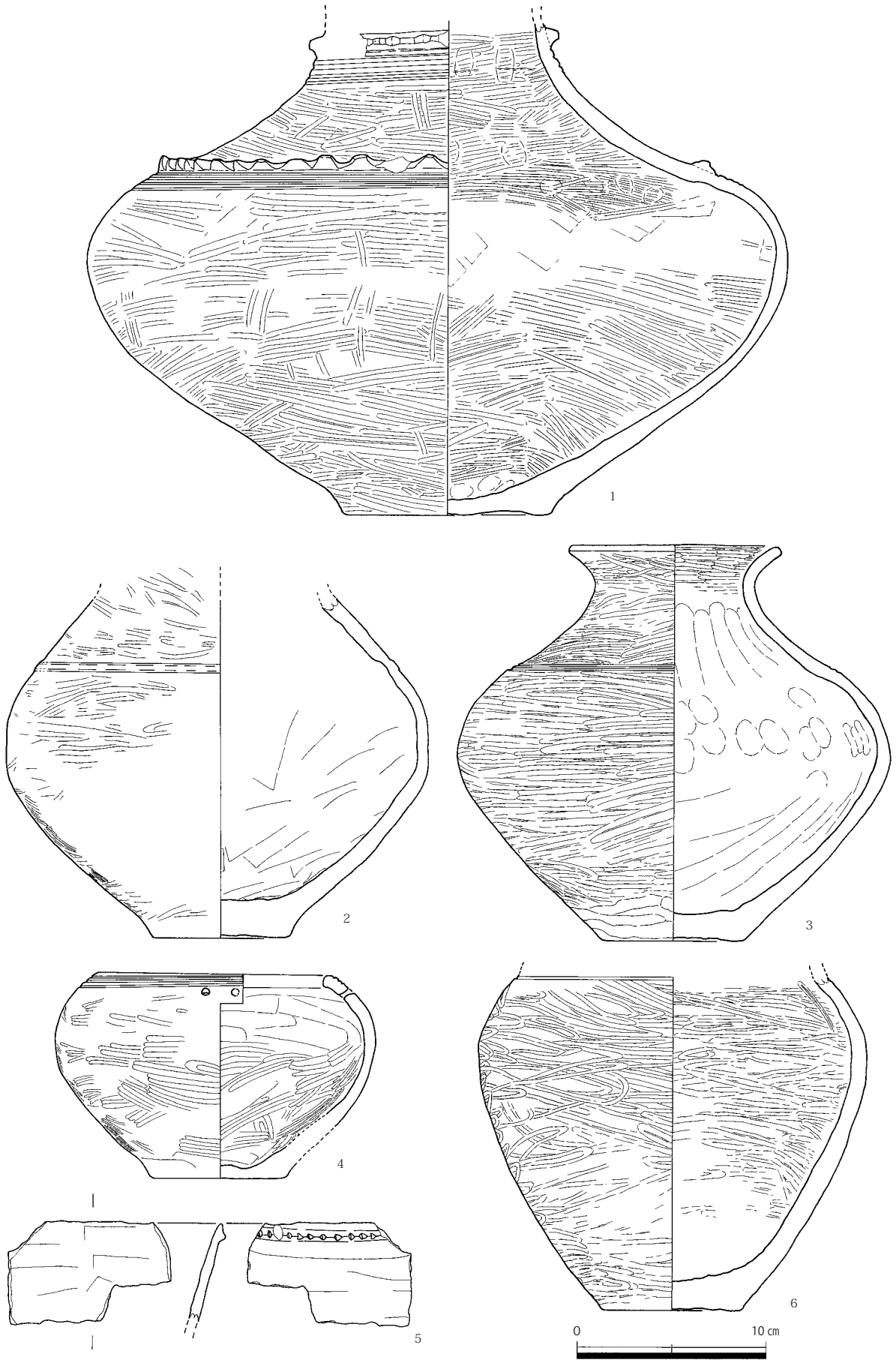
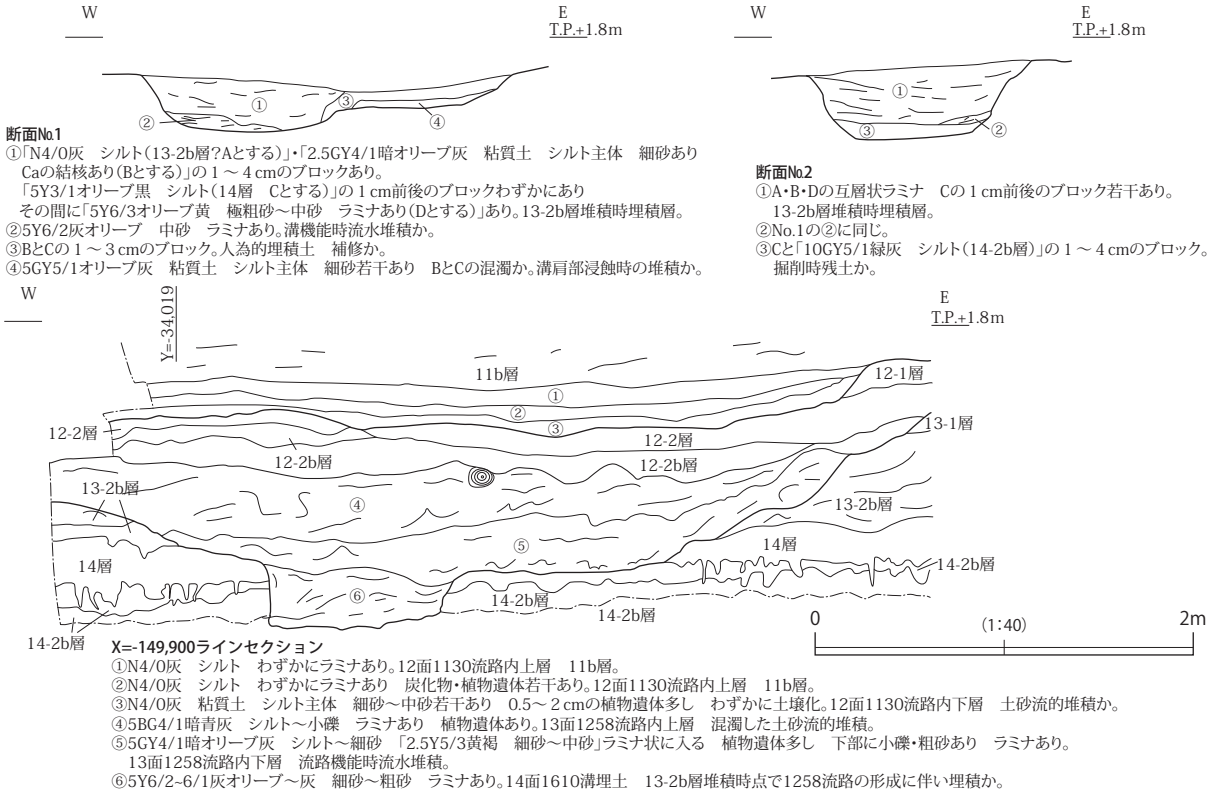


図 96　第 14 － 1 面　出土遺物（1：1208 土器 1、2：1608 土器 2、3：1691 土器 3、4：1716 土器 4、5：1669 溝、6：1669 溝土器 1）



断面No.1
①「N4/0灰　シルト(13-2b層?Aとする)」・「2.5GY4/1暗オリーブ灰　粘質土　シルト主体　細砂あり　Caの結核あり(Bとする)」の１～４cmのブロックあり。
「5Y3/1オリーブ黒　シルト(14層　Cとする)」の１cm前後のブロックわずかにあり
その間に「5Y6/3オリーブ黄　極粗砂～中砂　ラミナあり(Dとする)」あり。13-2b層堆積時埋積層。
②5Y6/2灰オリーブ　中砂　ラミナあり。溝機能時流水堆積か。
③BとCの１～３cmのブロック。人為的埋積土　補修か。
④5GY5/1オリーブ灰　粘質土　シルト主体　細砂若干あり　BとCの混濁か。溝肩部浸蝕時の堆積か。

断面No.2
①A・B・Dの互層状ラミナ　Cの１cm前後のブロック若干あり。
13-2b層堆積時埋積層。
②No.1の②に同じ。
③Cと「10GY5/1緑灰　シルト(14-2b層)」の１～４cmのブロック。
掘削時残土か。

X=-149,900ラインセクション
①N4/0灰　シルト　わずかにラミナあり。12面1130流路内上層　11b層。
②N4/0灰　シルト　わずかにラミナあり　炭化物・植物遺体若干あり。12面1130流路内上層　11b層。
③N4/0灰　粘質土　シルト主体　細砂～中砂若干あり　0.5～２cmの植物遺体多し　わずかに土壌化。12面1130流路内下層　土砂流的堆積か。
④5BG4/1暗青灰　シルト～小礫　ラミナあり　植物遺体あり。13面1258流路内上層　混濁した土砂流的堆積。
⑤5GY4/1暗オリーブ灰　シルト～細砂　「2.5Y5/3黄褐　細砂～中砂」ラミナ状に入る　植物遺体多し　下部に小礫・粗砂あり　ラミナあり。
13面1258流路内下層　流路機能時流水堆積。
⑥5Y6/2~6/1灰オリーブ～灰　細砂～粗砂　ラミナあり。14面1610溝埋土　13-2b層堆積時点で1258流路の形成に伴い埋積か。

図 97　第 14-1 面　1610 溝（13 面 1258 流路・12 面 1130 流路）断面図

1208土器１は X=－149,920 ラインの断面確認用筋掘りから出土した。そのため層序との対応が良く分かる（図95・図版39－６）。正置状態で底部を第14－１面にめり込ませるように立つ。口縁部を欠くのは、第13－２ｂ層内の部分的土壌層の形成により失われた事が分かる。位置的には 1609流路の東岸を画する 1713畦畔の裾部分である。器表は風化せず、面埋没直前にここに置かれたか、面を埋没させる洪水の際に流れて、たまたまここで沈んだかであろう。

図96－１が 1208土器１である。弥生土器広口壺であろう。内面はヨコミガキ主体だが、底部はその前にユビオサエでミガキなし。胴部最大径付近はヨコナデ、ミガキなし。他にミガキが密な部分も間にヨコナデの痕跡残る。肩部はミガキ前ユビオサエ、頸部はミガキ前タテユビナデが入る。外面はヨコミガキ主体だが、タテミガキも散在する。両者の切り合いはまちまちで、ヨコミガキの平行性の高い単位毎にタテミガキとの切り合いが変り、ヨコミガキの作業単位が変る際にタテミガキが入るようである。底部は不定方向のナデ。肩部には４条の沈線文が入った上部に、ユビオサエで刻み目を入れた突帯が巡る。頸部にも同様の装飾が巡る。胎土は生駒西麓産である。粗い角閃石が多い。ユビオサエで刻み目を作る突帯は河内Ⅰ－２～４様式にあり、その中で偏球形化した胴部はⅠ－４様式に限定できるだろう。

なお、土器内から数種類の植物種子が出土し、その種類の同定を委託したが、結果としては水田周辺雑草の様相を示し、人為的ではなく、自然に流入したとの結論が出た。詳しくは第４章で後述する。

1608土器２は 1609流路西岸、1646溝西肩部近くで 1647畦畔が途切れた部分から出土した。緩い浸蝕を受けた部分だが、水口とも、本来は畦畔盛土内とも考えうる。土器は底部が正置状態で、破片が北側に飛散した出土状況であった（図版39－７）。上半に欠失部分が多いのも浸蝕による流失か。

図96－２が 1608土器２である。弥生土器広口壺であろう。内面は右上がりナデ、外面はヨコミガキで、底部側面はヨコナデ、底部にもナデが入る。肩部には低い断面台形の突帯が巡る。生駒西麓産胎土である。削り出し突帯がある事と、胴部の形状は河内Ⅰ様式のものであろう。

1691土器３は1669溝西側に付随する1671畦畔西裾から出土した。この部分は南から1751溝が伸び、1671・1704畦畔間を開口するので、1751溝内と見ても良い状況である。ただ、この溝は南端で1671・1700畦畔接合部分に切り込みながら浅くなって途切れ、西隣の耕地区画との間に畦畔が存在しない事もあり、浸蝕痕の可能性がある。溝としても浸蝕で本来の幅より広がっているのだろう。1691土器３はその中で、やや浮いた状態で出土した（図版39－８）。面埋没時の洪水で流されてきた可能性が高い。底部は正置からやや傾き、上半部の破片は南東のやや高い位置に広がるが、失われた部分も多い。

図96－３が1691土器３で、弥生土器広口壺である。内面は胴部下半右上がりナデ、胴部最大径部分上半ユビオサエ、肩部から頸部にタテユビナデ、口縁ヨコミガキである。外面は口縁の一部にヨコナデ残るが、それを切り全体にヨコミガキ、底部側面はミガキを切りヘラ状工具でヨコナデ、底部は数方向のヘラ状工具によるナデで、小さな粘土塊が幾つか付着する。肩部には２条の沈線文が巡る。生駒西麓産胎土である。肩部２条の沈線文という型式要素からは河内Ⅰ－２様式に限定できるだろう。

1716土器４は、調査中、筆者が気づいた時にはほとんどの破片が取り上げられており、出土状況を記録できなかった。残る破片から出土地点のみは判明し、図91にドットで示した。1710浸蝕痕南西の高い部分、耕地区画の角付近に位置したと思われる。本来は畦畔盛土の中にあったのかもしれない。

図96－４が1716土器４である。弥生土器無頸壺である。内面はナデ後ヨコミガキ、ナデ下半は左上がりで、上半は横方向である。外面はヨコミガキ、底部側面ヨコナデ、底部は磨滅で調整不明。口縁直下に３条の沈線文が巡り、１ヵ所その下に1.2㎝の間隔をあけ、径４㎜の穿孔が２個並ぶ。それと対向する位置の破片はないが、本来そこにも穿孔が２個あったと推測される。胎土は生駒西麓産である。河内Ⅰ－３～４様式に類例があり、遡ってもⅠ－２様式までであろう。

これらの土器は、面埋没時の洪水で流れてきた可能性と、畦畔盛土内に埋納されていた可能性が考えられる。埋納だとすれば祭祀的行為であろう。壺類ばかりなのも意味がありそうだが、洪水で流れてきたとすれば偶然の所産という事になる。

1609流路東岸耕地区画　1669溝以東は、調査区最高所だが、南から北へ順次低くなり、水回しに問題はない。1669溝の水路が、調査区南外で、北西に伸びる部分から取水しているのだろう。耕地区画自体の残りは悪いが、不整形な区画が多いのは、微高地的な特徴かも知れない。

1669溝の水路以西は、微高地が水路以西に張り出す1700畦畔に囲まれた部分に水口が開き、そこから、北西方面に水を回すようである。ただ、1700・1706畦畔間の区画は、北北東に向かう緩い浸蝕痕の凹部があり、畦畔も途切れる。また、北側に高い区画があり、そこの水回しはまた別のようである。

南の1710浸蝕痕は、第14－２面1792流路の埋土上面が陥没したものでもあり、陥没以前の耕地区画の高さは分からないが、1710浸蝕痕南西隣接部の高さが参考になる。その位置からさらに南西の部分は一段高い。1669溝・1609流路間はその地形に合わせながら、平坦な部分は比較的方形基調の区画が並んでいたようである。

1609流路西岸耕地区画　1610溝以東の部分は、1646溝から両側に斜めに伸びる畦畔がある。1646溝西側は1646溝からの水口が開いた状態で検出されており、水路が1610溝に変わった以降は、この部分の耕地区画は放棄され、1646溝機能時の形態が残存した可能性が高い。

1610溝以西の耕地区画は、浸蝕が多いだけでなく、矢板抜き取りによる変形などもあり、区画の高さが不明な部分が多い。しかし全体的に見れば、南南東から北北西に伸びる区画が長く続き、その間を長方形に区画するようで、西南西に下がる微傾斜面であろう。ただし、調査区南西隅付近はやや高い。

第14－1層包含遺物（図90） 西半は第14－1・2層の層境が不鮮明なため、掘削時、面的に質が変るのを追跡し、遺物は「第14－1・2層」としたが、結果的には第14－1層の遺物として問題ない。

まず、破片数を述べる。カッコ内に数字のみは生駒西麓産胎土の数である。縄文土器3（3）、弥生土器66（44）{甕8（6）（ハケ2（1）、底部2（1））、壺16（10）（広口2（1）、刻み目突帯1（1）、底部6（5））鉢1（1）}、サヌカイトチップ1、礫1である。3点が図化できた。

図90－6は弥生土器広口壺片である。内面はヨコナデ後、頸部はタテミガキ散在、口縁はヨコミガキ、外面はヨコナデ後。ヨコミガキである。胎土に角閃石はわずかで、河内低地産か。河内Ⅰ－4様式で分化する広口壺のうち、無文のものであろう。

図90－7は弥生土器甕片である。内面はヨコナデ、外面は口縁ヨコナデ、胴部はタテハケ、頸部に3条の沈線文が入る。口縁端部には刻み目。胎土に角閃石少なく、河内低地産か。河内Ⅰ様式に通有の甕で、Ⅱ－2様式まで残存する。

図90－8も弥生土器甕片である。内外面は磨滅するが、ヨコナデか。外面頸部には上下を沈線文に画され刺突文が上下3～4個並ぶ。口縁端部には刻み目。外面一部に煤付着する。胎土は生駒西麓産である。河内Ⅰ様式のものであろう。

全体的に河内Ⅱ様式に下る要素はなく、居住域から遠いせいか、量的にも少ない。

小結　第13－2面以降と異なり、調査区東端が微高地の可能性がある以外に、明確な微高地がなく、平坦な地形である。おそらく生駒西麓から流下する小河川であった1609流路は、上流の08－2調査区居住域部分までしか微高地を発達させていない段階だろう。1609流路両岸に、水路を持った耕作地が広がるのが確認できた。西岸では流路の浸蝕で水路が変更され、その1610溝を元に浸蝕痕が形成され、最終的に第13－2面で流路がその位置に移動する過程が把握できた。

北東隣の04－2調査区では、14-1面で、1669溝の続きが検出されており、その東側はT.P.+2.5～2.2mの微高地で、14-2面でも土壙墓・建物が検出されている。

02－1・06－2調査区では、本調査区の第14－1面に対応する14－2面で、1609流路東岸の耕地区画の続きが整然とした方形の耕地区画として検出されている。その北側は東から微高地が張り出し画す。西岸では1646溝と両側畦畔の続きも検出される。1610溝の続きは、上面流路と一緒に掘削してしまっているが（13b面B335溝）、攪乱としてこの面に図示されるものが溝の規模・位置に合う。その部分に耕地区画は確認されないが、本調査区西隣には、区画傾向が似た耕地区画が広がる。

07－2調査区では14－2面が対応するが、本調査区とつながる北東部には遺構が検出されていない。低地部分と記されるが、本調査区西側よりやや高い。地震変形のために耕地区画が検出できなかったのだろうか。位置的に1610・1646溝につながる可能性の高い、両側に畦畔を伴う水路が見られる。意外な事に南西から北東に伸び、1609流路上流側からの取水でなく、05－2調査区390流路からの取水のように見えるが、390流路は浸蝕痕のようで、それに浸蝕された弧状の溝により、池島Ⅱ期地区南端付近で1609流路上流、08－2調査区725流路から取水し、若干迂回して北上すると見られる。

この面は、遺物を見ると、河内Ⅰ－3～4様式のものが多いが、Ⅰ－2様式のものも若干ある。他の調査区の例も合わせれば、上限はⅠ－2様式に遡り、下限はⅠ－4様式までの時期であると言える。

第17項　第14－2面（図98・図版40－1・2）

第14－2層は自然土壌層である。1610・1646・1669溝の古い形が残る他、第14－1層床面遺構と

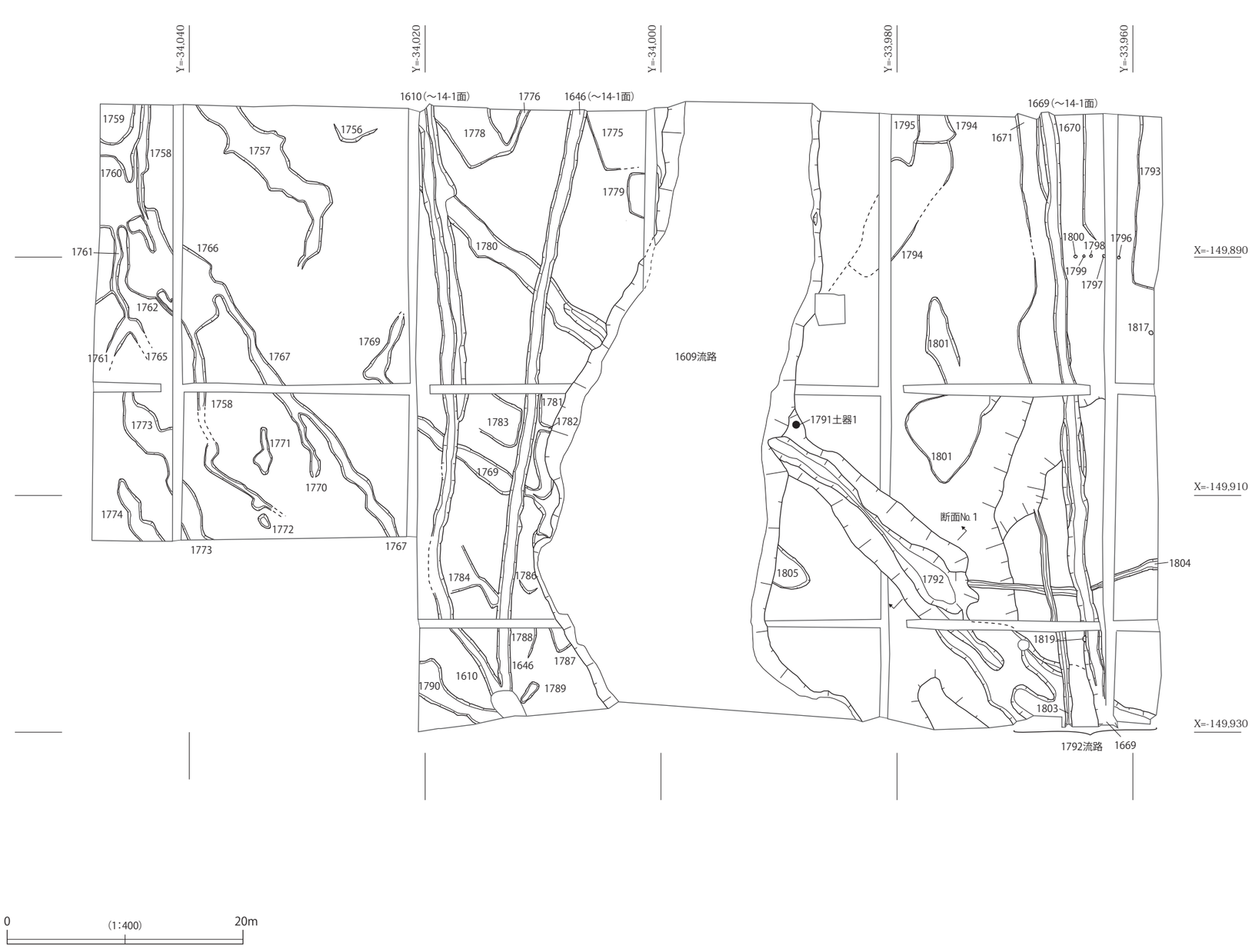


図 98　第 14-2 面　全体図

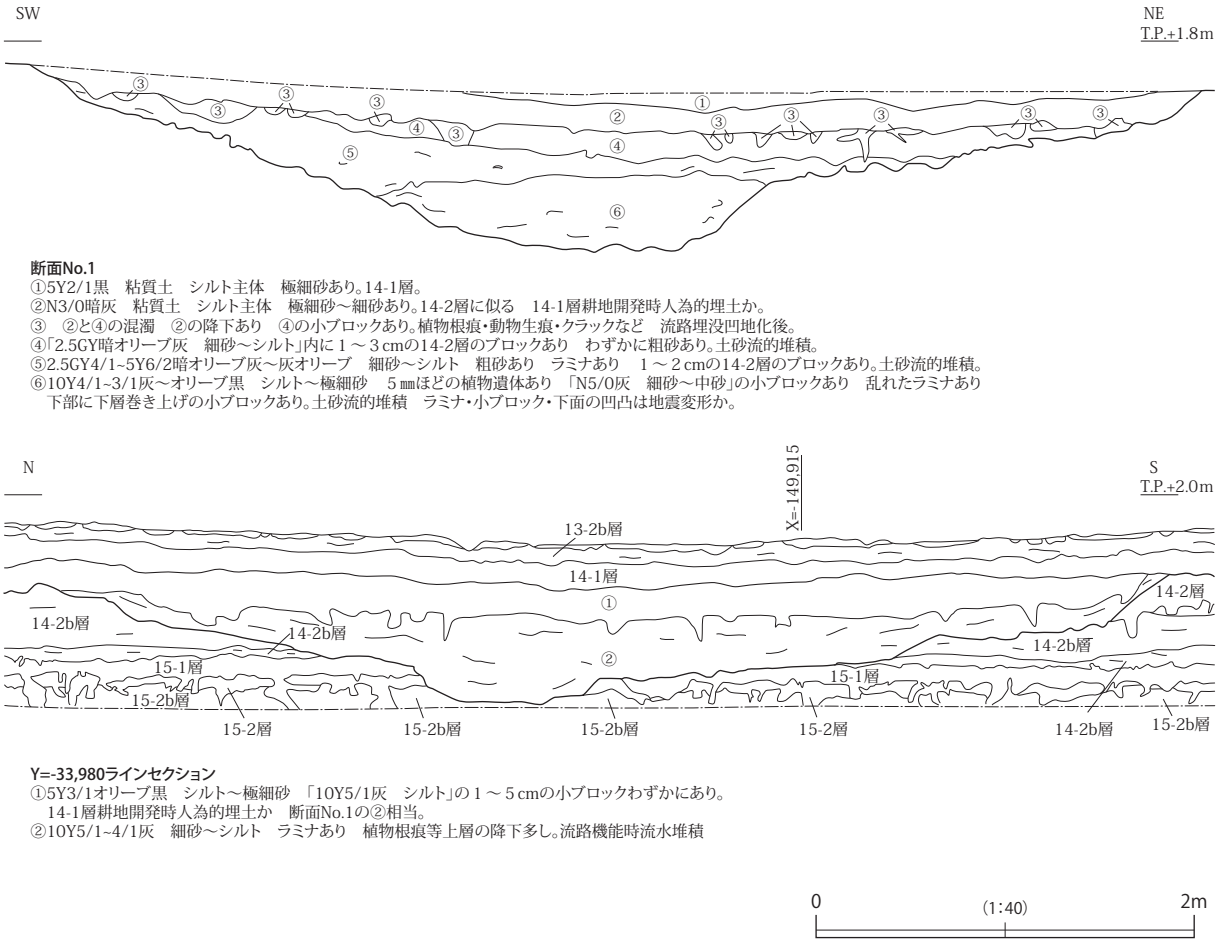


図 99　第 14-2 面　1792 流路　断面図

しての、第14‐１面埋没より前に廃されていた溝や、耕地区画に関係するらしい段差などが検出された。それと共に、1792流路など、耕地化以前に形成され、耕地化に際し埋められた自然地形も検出された。1609流路西岸の溝状のものは、1610・1646溝以外ほとんど自然地形、浸蝕痕のようである。

1792流路及びその出土遺物（図99 ～ 101・102・図版41‐４・５）　調査区南東隅から北西に伸びる流路である。北西では 1609流路に合流したと見られるが、対岸につながりそうな位置関係の 1780溝（浸蝕痕か）があり、1609流路形成以前に形成されていた浸蝕痕の可能性もある。

図99 の断面では、上図の②が下図の①に、④が②に対応する。この断面の上図⑤・⑥の存在でも分かるが、平面的にも流路内の X= －149,920以南の部分に土砂ダム的に砂質土が堆積して以降、その北西、下流側に堆積層が斜めに何枚も重なるのが確認できた。そして、第14‐２面の最終段階では上図の④上面に、生痕・乾痕が見られるように、低湿な凹地になり、1609流路と併存した。そして、第14‐１層の耕地開発の際に上図②で埋め立てられた。その後、第14‐１層と共に陥没し、第14‐１面にも1710浸蝕痕として痕跡を残す。

図98 での形は、図99上図⑤・⑥までを除去し、その南東側に土砂ダム的に堆積した砂質土を２層残した状態である。土砂ダム上面に、水が越流し浸蝕した形跡を残し、その下流側、1804溝が東から取り付く部分は深くえぐれ、幅も広い。図100 の形はこの部分の浸蝕を明確にするために第14‐２ｂ面を検出した際に、1792流路南西側の土砂ダム上層を除去した形である。この面でも土砂ダム上面に浸蝕痕が見られる。また 1792流路の両側に直角に浸蝕痕があるが、その部分は第14‐1・2面でも凹部が見

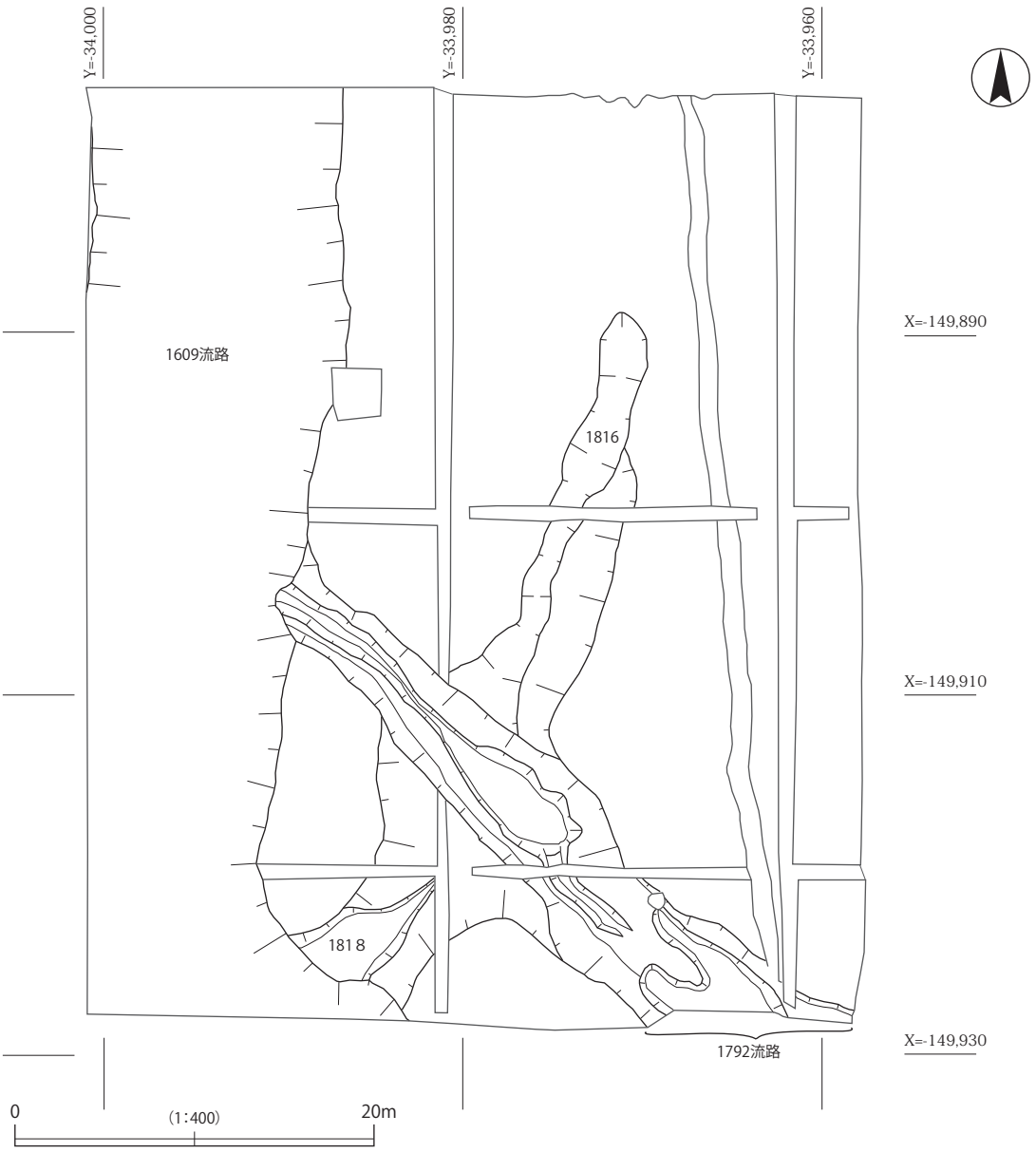


図 100　第 14-2b 面（東半）　全体図

られた。浸蝕痕と流路の接点は丸味を帯び、両者併存するようだ。1816浸蝕痕は流路から北北東に伸び、高い位置に達して浸蝕が弱まっていく形である。1818浸蝕痕は 1792流路から溢れ 1609流路に流れ落ちるような形である。1792流路を完掘した形は図101左上の図である。これから、上述の逆の過程で埋没していく。幅6.6 ～ 3.2m の肩部二段落ちの流路である。南東側土砂ダム形成以降は、常時流れのある状態ではないが、それ以前の状況は定かではない。形態からは調査区南東外で 1609流路の蛇行をカットした浸蝕痕のようなもので、増水時には流れるような状況と推測される。

この流路に取り付く 1804溝は、1669・1803溝に切られ、第13‐1 層の耕地に先行するのは間違いない。断面逆台形の整った形から、浸蝕痕ではないのは確実と思われる。1792流路を排水に利用する溝であり、可能性としては耕地開発時の、滞水していた部分の排水のための溝かも知れない。

1792流路は、1609流路の増水時に、蛇行部分をカットするように直線化して流れた痕跡と考えられる。しかし、形成が不充分で本流となるには至らず、後には上流側が土砂ダム的堆積でふさがれ凹地化していったのであろう。そして、1609流路に排水する経路として利用された後、第14‐1 層の耕地開

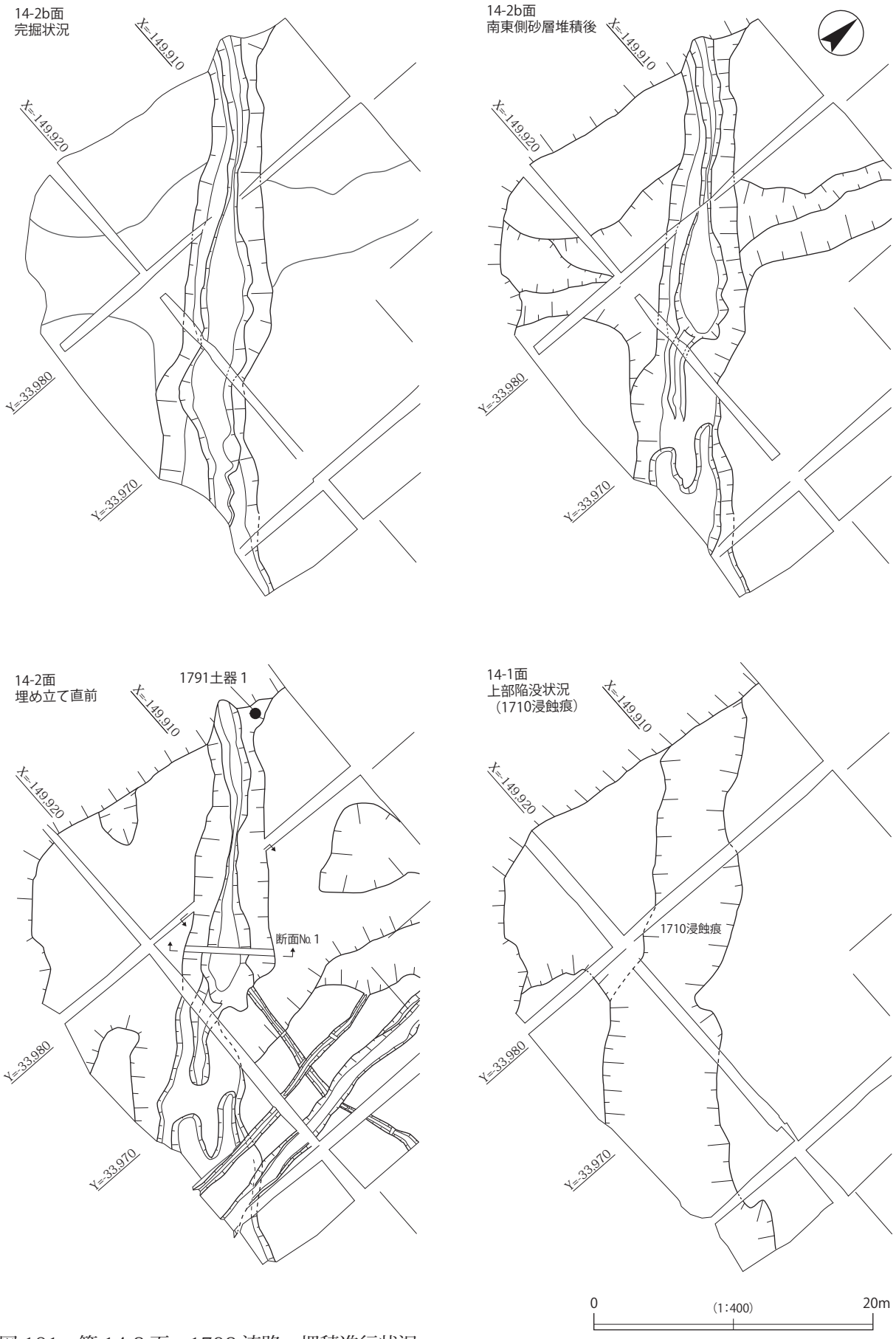
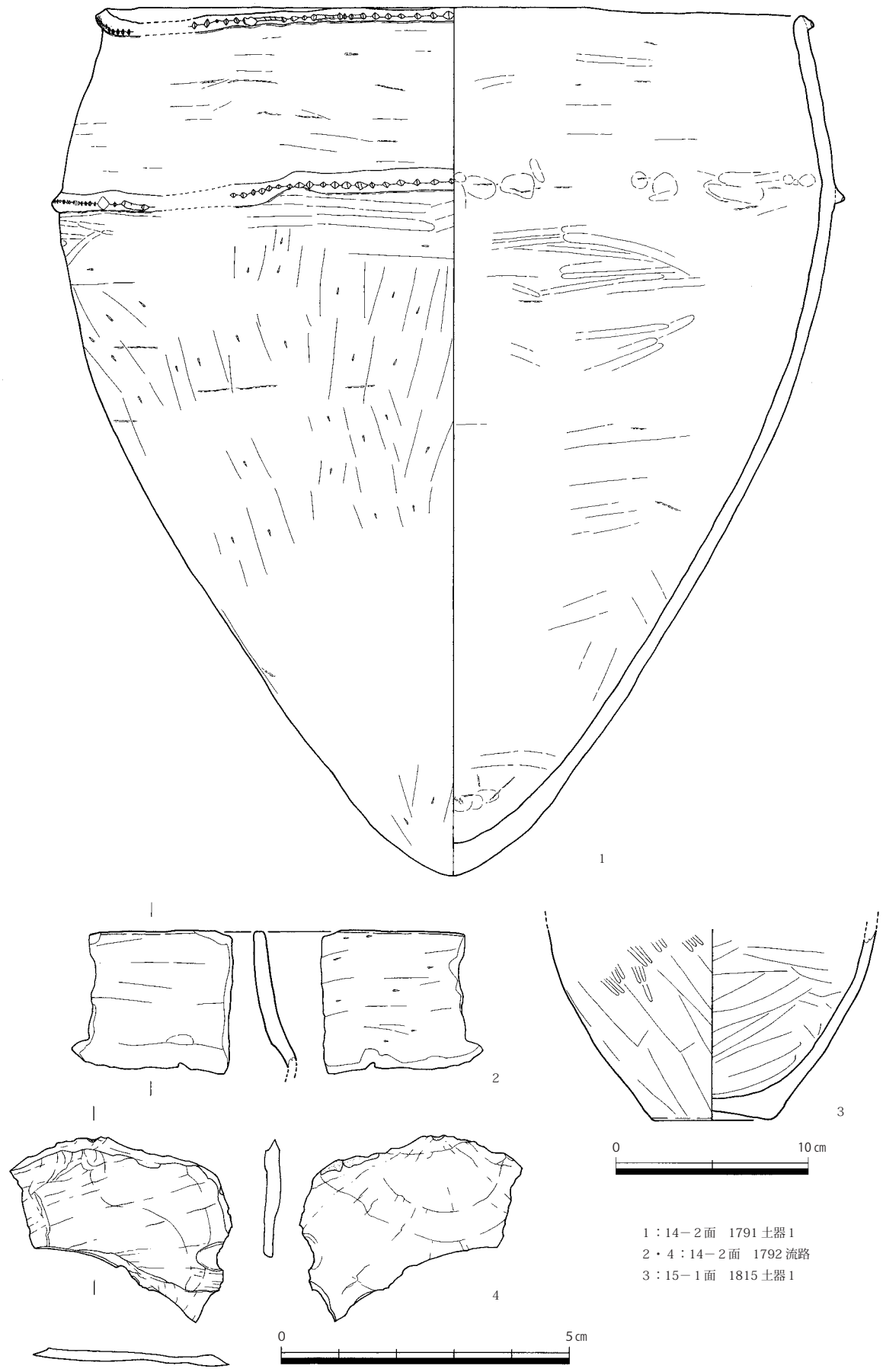


図 101　第 14-2 面　1792 流路　埋積進行状況



1：14－2面　1791 土器1
2・4：14－2面　1792 流路
3：15－1面　1815 土器1

図 102　第 14 － 2 面・第 15 面　出土遺物

図 103　第 14-2 面　1791 土器 1　出土状況

発に伴い埋め立てられたと考えられる。

遺物は後述の 1791土器 1 を含まなければ少なく、土器は全て生駒西麓産胎土で、縄文土器深鉢 4 片、器種不明弥生土器 6 片、サヌカイト製チップ 1 、胡桃 2 、礫 1 である。 2 点が図化できた。

図102 - 2 は縄文土器深鉢片と思われる。内面ヨコナデ、外面ヨコケズリで、屈曲し内傾する口縁の破片である。口縁端部は面を持つ。胎土は生駒西麓産である。突帯がないが、縄文晩期のものか。

図102 - 4 はサヌカイト製チップである。ポジ面打点付近とその左に若干原礫面残る。下辺は折れ。ネガ面中央の剥離面は打点方向が 90度異なる。風化は弱い。

1791土器 1（図102・103図版41 - 1） 1792流路が 1609流路と合流する部分の北側で（図98 にドットで図示)、平坦面からやや下がり、1609流路にも 1792流路にも急激に下がる手前にわずかに平坦な部分があり、そこに平面的に潰れた状態で出土した。縄文土器深鉢 1 個体である。第14 - 2 面にややめり込むような状態で、1792流路を人為的に埋め立てた層の直下ではあるが、埋め立て直前に割れたというより、その時点では土壌層に埋もれたような状況ではなかったかと思われる。

破片群の中で、底部付近の破片は南西寄りに多く、そこから北と東に口縁の破片が広がる。破片欠失部分の状況から、南西側は破片が流失したと思われる。底部付近の破片の一番下から、胎土・焼成も同じような平底の破片が出土したので、検出当初平底の深鉢と思ったが、接合すると尖底の底部である事が判明し、平底片のみが別個体と判明した。推測するに、底部片を台にして尖底の深鉢を置き、割れた時、底部を中心に周囲に破片が散ったが、斜面に近い南西側の破片は後に流失したのであろう。

図102 - 1 が 1791土器 1 である。内面は底部ユビオサエ残るが、全体ヨコナデ、胴部突帯裏もユビオサエ後ナデ、その下部は棒状工具によるナデが見られる。胴部突帯以下と口縁端部付近に煤付着。外面は口縁端部と胴部に刻み目突帯が付く。口縁から胴部突帯までヨコナデ、胴部突帯以下タテケズリだが、突帯直下はその後ヨコケズリ、さらに棒状工具のヨコナデ入る。全体に煤付着する。縄文時代晩期末、長原式の深鉢である。弥生土器との併行関係では、河内Ⅰ－2様式まで共伴する可能性がある。

その他の遺構　1609流路東岸では、1669溝両側の 1670・1671畦畔基部が、北側では削り出されて残る。1669溝西側の 1803溝は、第14 - 1 面1751溝とは少しずれ、古い段階の枝水路かと思われる。

1801落込は第14 - 1 面の耕地区画と一致する部分がある。それより北側のいくつかの段差は上面の耕地区画とは一致しないが、古い段階の耕地区画の痕跡か。

1669溝東側に東西方向に直線的に並ぶ 1796 ～ 1800 ピットがある。 5 個とも平面形は径0.2m ほどの円形、深さ 0.2m 強である。性格は不明だが、第14 - 1 層床面遺構で耕作に関係すると思われる。

1609流路西岸は、南東から北西に伸びる溝状のものはほとんど浸蝕痕だが、若干遺構もある。

1781・1783落込は底部が平坦で、方向性は第14－１面1646溝両側に展開する小畦畔と一致する。また、1778落込はその小畦畔にはさまれる。耕地区画の痕跡であろう。それらと方向性が合い、北西で直角に曲がる1769溝も、その段階の遺構の可能性が高い。調査区北西隅付近の溝・落込も、第14－１面の区画とは合わないが、耕地区画の痕跡のように思える。

第14－２・14－２ｂ層包含遺物　第14－２層から生駒西麓産胎土の、縄文土器らしい破片２片が出土したのみである。第15－１面1815土器１とした遺物は、実質は第14－２ｂ層内遺物だが後述する。それ以外は第14－２ｂ層は無遺物であった。

小結　第14－２面は自然土壌層上面として、第14－１層耕土床面遺構と、それ以前の自然地形が検出できた。耕土床面遺構からは、第14－１面の耕地区画に若干の変遷があった事が示される。また、1792流路の埋め立てから、耕地開発に際し、地形を整える積極的な整地があった事が判明した。

だが、最も重要なのは1791土器１であろう。出土状況からも、耕地開発より若干前の時期のものと思われるが、大型の縄文土器深鉢の出土は、鮮やかに縄文時代から弥生時代への転換を示している。

長原式土器が河内Ⅰ－２様式弥生土器と共伴するのは稀で、この土器をⅠ－１様式併行期としても、さほどの時間を置かず、縄文土文化人の行動圏が、弥生文化人により耕地化された事になる。

北東隣の04－２調査区で、本調査区の第14－２ｂ－２面相当の14－２ｂ面で、縄文時代長原式期と弥生時代河内Ⅰ－２様式頃の土壙墓・木棺墓・土器棺墓が混在し検出された。その面は、第14－２ａ層との間に１層の水成堆積層をはさみ、切込みが第14－２ａ面まで上がる可能性は少ない。その中で新旧はあっても墓域を共有するのは間違いない。ただ、その段階の耕作地は遺跡内で確認されていない。1791土器１はそれらの墓群より層位的に後で、その段階でも遺跡内に耕作地は拡大していない事になる。

つまり、時期的には河内Ⅰ－２様式期の中で、長原式土器を使用する集団のみであった段階から、弥生土器を使用する集団と混住するが、耕作地は遺跡内には広がっていない段階、長原式土器がほぼ払拭されて耕作地が広がる段階、と移行していったと言えるのではないだろうか。

第18項　第15－１面（図104・図版42－１・２）

第14－２層以下の古土壌層は全て自然土壌層で、耕作土は存在しない。その特徴として、下面に植物の根の痕跡など生痕が多く、下層との層境は漸移的である。第15ａ層も第15－１層と第15－２層に分けられるが、その違いは、第15－２層の方が土壌化の度合いが弱いという程度である。

第15－１面には、遺構と確定できるものはなく、ほとんどが自然地形である。上層と方向の異なる流路があり、それと関係する浸蝕痕が見られる。Y=－34,020ライン付近以西と、1820流路内・1840浸蝕痕内で、第15－１面が既に調査深度のT.P.+0.9mより低く、検出できない状況であった。

1815土器１（図105・図版41－２）　第15－１面検出中に調査区南東側1820流路北岸付近で出土し、この面の土器としたが、流路へ落ち込む第14－２ｂ層を除去すると、流路肩部斜面から20㎝ほど浮いており、実際は第14－２ｂ層包含遺物である。これがその層の唯一の遺物である。

図102－３が1815土器１である。弥生土器壺片か。内面はヨコナデ、外面はタテナデだが、残存部上端付近に平行タタキのような痕跡が散在するが、層序的にも上層遺構の見落としや混入の可能性は考えがたく、平行に入った強いナデか。底部は不定方向の粗いナデである。胎土は生駒西麓産である。弥生前期の土器であれば、縄文土器長原式と並存する時期でも問題ない。

1820流路　流路埋積粗砂層の縦断面を観察したが、すぐ崩れるので記録はできなかった。流路方向は

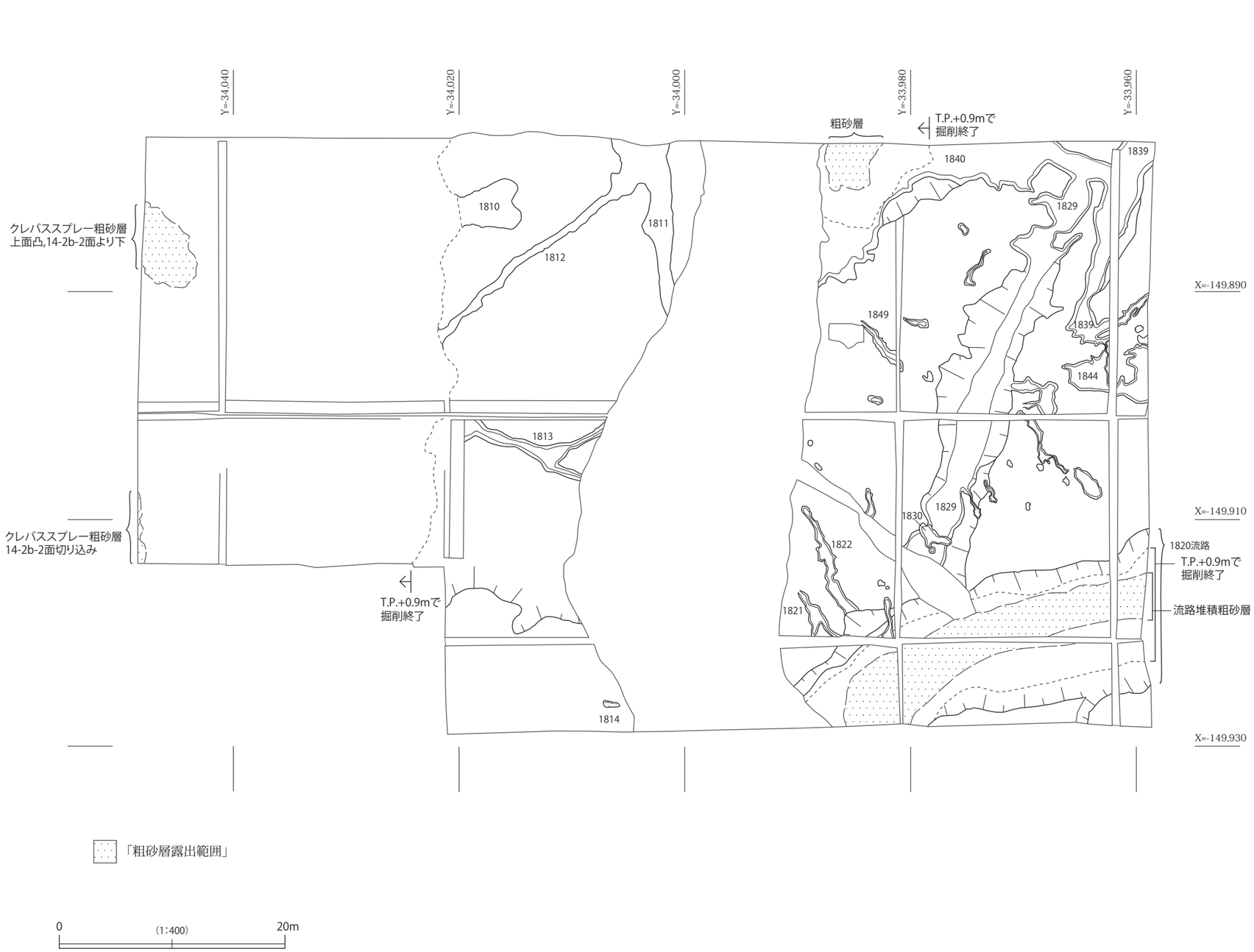


図 104　第 15-1 面（一部 T.P.+0.9m 面）　全体図

調査区南側から北東方向に入り、東へ蛇行して抜ける。

T.P.+0.9m よりやや上で露出した粗砂層は上面が盛り上がり、流路埋積層と思われる。それを覆う、細かい植物遺体の多い埋土があったが、そこから胡桃が数個出土した。胡桃は第14－２面1792流路からも出土し、その当時の環境を示す。流路は埋没後一時、低湿地状になったようである。

上流側が 1609流路に切られるが、この流路がそちらに流路変更したかは定かでない。ただ 1609流路肩部で、第15－１層が流路に向けて下がる箇所はなく、この面では 1609流路は存在していないようである。流路が東側へ大きく蛇行するという事は、調査区より東側もまだ微高地の形成があまりない、平坦な微地形であったと推測される。

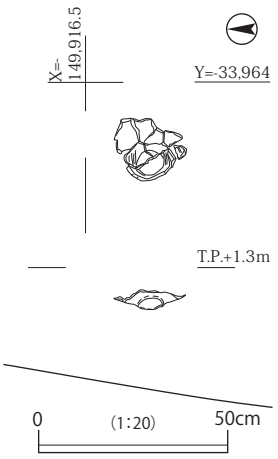


図 105　第 15-1 面 1815 土器１　出土状況

蛇行の外側には溢流した洪水の痕跡と思われる 1821・1822浸蝕痕などが見られる。最大のものが 1829浸蝕痕で、わずかに高い北北東に伸び、最高地点を越えるあたりで水流が東へも溢れ、北に下る浸蝕痕である 1839浸蝕痕を形成したと思われる。

その他の状況　ただ、いずれの浸蝕痕も浅く緩やかで、その中の第15－１層の質も、下面の植物根痕も変化はない。平坦で低湿な環境が推測される。ただわずかに西側へ下る傾斜はある。

西半には溝状のものが見られるが、肩部の凹凸もあり、人為的なものとは考えにくい、洪水による浸蝕痕か。西の T.P.+0.9m で掘削を止めた部分では粗砂層が２ヶ所露頭した。上面は盛り上がり、第14－２ｂ－２面切り込みとそれ以下の層の切り込みである事を確認した。おそらく調査区西側は第15－１面から洪水の通り道になっていたのであろう。もしそこに 1820流路と併存する流路があったとすると、網状流路が発達する三角州的環境であった事になる。

小結　この面及び以下の層は無遺物である。しかし、北東隣04－２調査区では、15層内から元住吉Ⅱ式の土器が出土し、縄文時代後期中葉と考えられる。その上の 14－２ｂ層には長原式土器も混じり、この面は縄文時代後期中葉から晩期末葉で、末期は弥生時代と重複すると思われる。しかし、第14－２ｂ層は少なくとも３回の洪水により形成されるので、この面の下限は確定的ではない。

第19項　第15－２ｂ・16面・最終掘削面（図106 ～ 108・図版43－１～ 44－２）

調査区西半では、第15－１面から、最終調査深度の T.P.+0.9m までわずかであったので、一挙にその高さまで下げて、そこで各層の露出範囲を記録した。そこで、一部、第15－２ｂ層より下の古土壌層があるのを確認し、第16層とした。既往の調査の深掘部で「16層」とするものとは異なる層である。それを受け、調査区東半では第15－２ｂ面と第16面も調査した。

第15－２ｂ面（図106・図版43－１）　基本的には第15－１面まで存続する流路・浸蝕痕が確認された。遺物はない。面には植物の根痕が多く見られる。

ただ、一つ注目されるのは 1858溝である。幅0.6m 前後、深さ 0.15m ほどで、肩部の平面形は凹凸があり、遺構かどうか疑わしい点もあるが、1829・1840浸蝕痕にはさまれた間で一番高いラインを通り、底部高は南西の T.P.+1.16m から北東の T.P.+0.98m まで、ほとんど凹凸なく下がっていく。自然に形成されたとは考えにくい状態である。

第16面（図107・図版43－２）　便宜上、T.P.+0.9m までに検出できた部分を微高地、それ以外を低地としたが、本来の沖積平野の微高地・低地ではない。

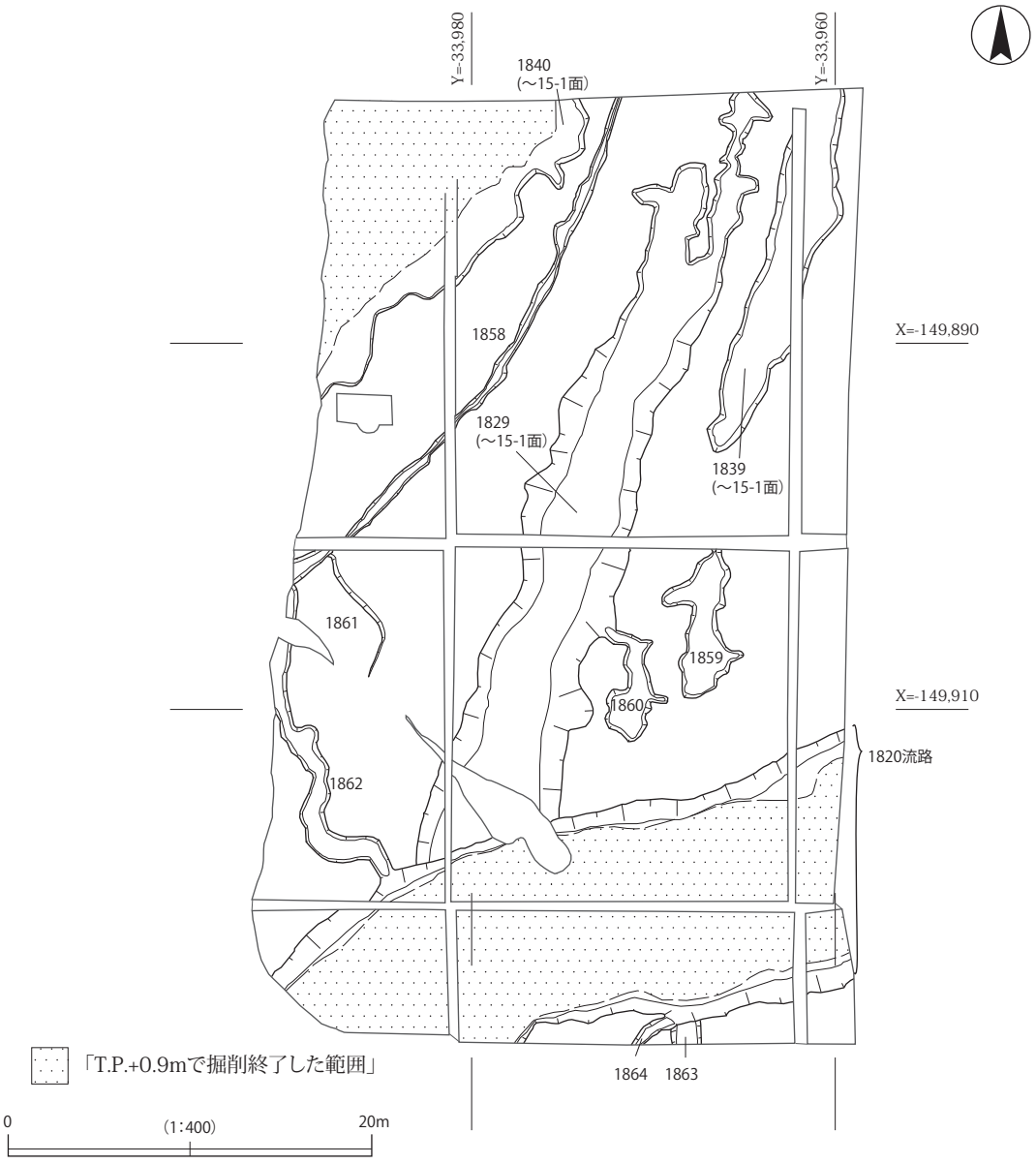


図 106　第 15-2b 面（東半）　全体図

低地 1 ・ 2 は第15 － 1 面の 1829・1839浸蝕痕に踏襲される浸蝕痕であろう。低地 4 はそれらの形成を見ても流路の可能性が高い。1820流路より幅が広く、南岸はわずかしか確認できないが、その前身となる流路であろう。流れの方向も同じと推測できる。

第16層自体の土壌化が弱く、下面の植物根痕・生痕も少ない。第15面より低湿な感じを受ける。遺構・遺物とも確認できない。

最終掘削面（図108・図版44 － 1 ・ 2）　調査深度の T.P.+0.9m の高さに合わせた面である。面全体からじわじわと湧水が見られる状態であった。この面で確認できた最下層は第16ｂ層であり、第16層より下の古土壌層は確認されない。遺構・遺物はなかった。

小結　既往の調査での最古の遺物は、縄文時代中期末葉北白川 C 式の土器片であるが、摩滅した少量の土器片であり、当遺跡の直接の陸化の証拠とはならない。縄文後期中葉の形成と考えられる第15層の下から検出された、本調査区の第16層が層位的に最も古い陸化の痕跡であろう。この第16層と下の海成

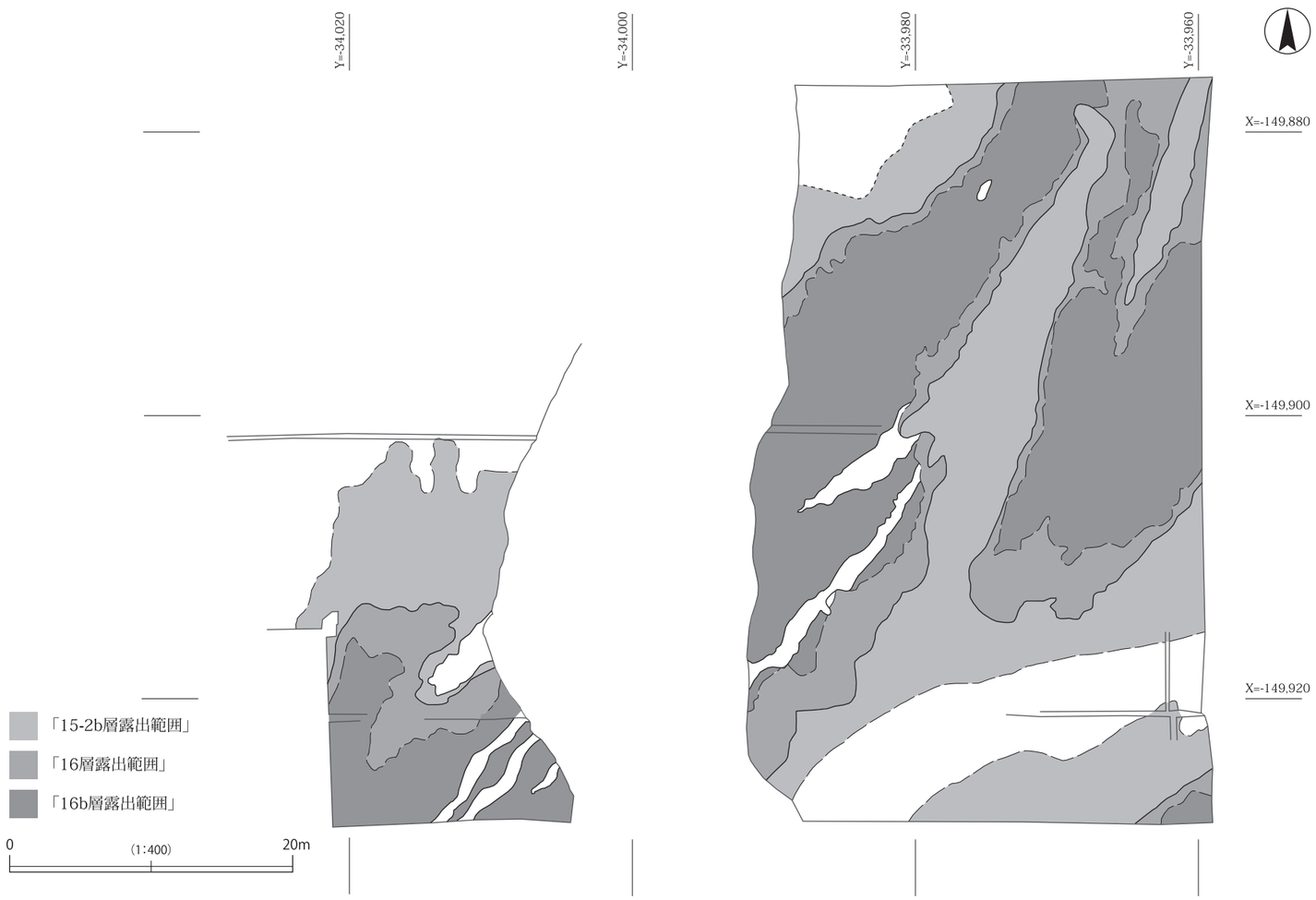


図 108　T.P.+0.9 m面　全体図

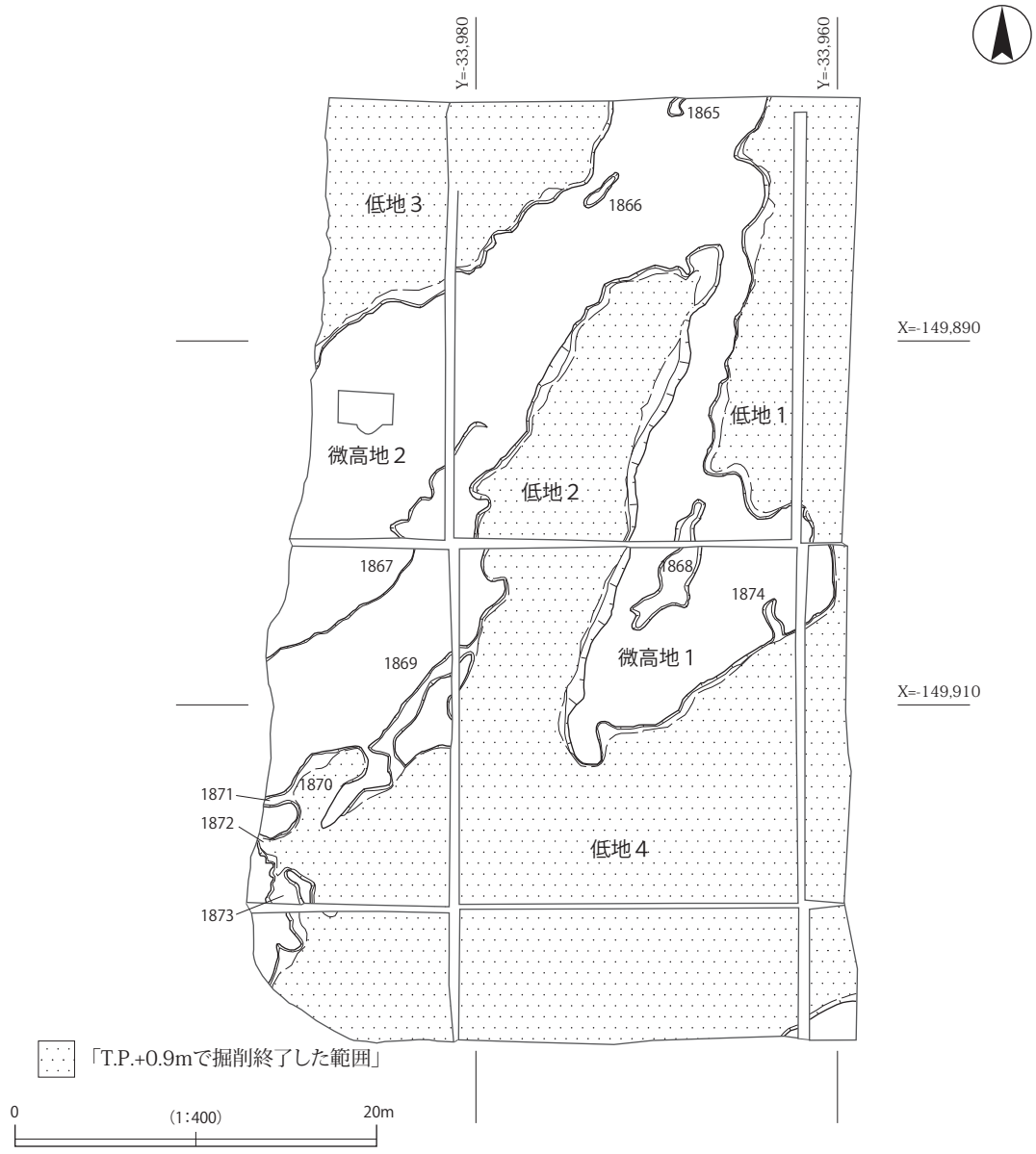


図 107　第 16 面　全体図

層との間には、既往の調査で、沼状や流路状の堆積層があり、淡水・もしくは汽水の干潟のような環境が推測される。当遺跡の陸化は縄文時代後期前葉頃と考えて良いのではないかと思える。

そんな中で、第15‐２ｂ面で検出された 1858溝が注目される。縄文時代後期の溝となると様々な問題を提起する可能性があるが、隣接する調査区では 15ｂ層上面の調査をしておらず、続きが検出されていないのが残念である。

第４章　自然科学分析

第１節　分析までの経緯

分析を依頼したのは以下の、１群の種子の同定、２点の木器の樹種同定である。

「第14‐１面1208土器１」（図96-1）が出土したのは、土層断面観察用の筋掘りを行っていた際である。口縁部を失った壺が、ヒビが入るものの、そのままの形を保った状態で出土した。

出土状況を記録して取り上げた後、洗浄中にその内部の埋土に数種類の植物種子が含まれているのが判明したので、内部の埋土を水で漉し、視認できる種子を全てピンセットで取り上げ保存した。

第14‐１面は弥生時代前期後半頃の面で、調査区中央を北流する流路の両岸に水路を伴う水田区画が広がっている。1208土器１は流路の東岸肩部の畦畔の裾部に位置していた。

1208土器１は弥生時代前期末葉の大型弥生土器壺であり、遺構に伴わず第14‐１面遺構面上に完形で正置していたような状態で（図95）、その特異な出土状況が注目される。そのため様々な観点からその性格を検討する必要があると考えた。

壺内の植物種子は、壺を使用して何かを作った材料の一部である可能性があると思われたため、種子の同定を依頼する事とした。

「第12‐２面1200溝埋土直上出土木製鋤」（図51）は、1200溝の埋土上面に張り付くような状態で出土した（図50）。1200溝は微高地３の西裾を南北に走る溝である。

第12‐２面は弥生時代中期中葉から後葉頃の面で、微高地と低地が入り混じる地形である。流路以外のほぼ全面に水路を伴う水田が広がっていたと考えられる。1200溝も低地３への給水を行っていたと見られる溝である。

今回の調査では、木製農具の出土はこの１点のみであった。その貴重さもあり、鋤の材料となった樹種を同定する必要があり分析を依頼した。サンプルの採取は実測図・写真撮影の後、欠損の見られる部分の破断面から行ってもらった。

「1609流路東岸ポイントバー下部粗砂層出土木器１」木製高坏未製品（図93）は、第14‐２面時点から第13‐２面時点まで存続した1609流路の蛇行内側、東岸に形成されたポイントバー下部の粗砂層から出土した。このポイントバーの最上層には弥生時代中期後半頃の土器・石器が多く包含されていた。

この高坏未製品と層位的に対応する第14‐１面は弥生時代前期後半頃の面で、1208土器１の出土した面である。本調査区では水田が広がっているが、同じ面で流路の上流にあたる08‐２調査区では居住域が検出され、木製品水漬け遺構や、木製品の未製品などが発見されている。

この高坏未製品もその居住域との関連が考えられる。しかし、流路内の粗砂層の出土のため、表面の荒れが激しく、加工痕の残りはあまり良くない。そのため、形は高坏の坏部のような形状はしているが、高坏未製品と断言するには若干の不安があった。

弥生時代の木製高坏は材料として、ヤマグワが選択されるのが圧倒的に多い事が知られている。つまりこの未製品の樹種がヤマグワであれば、ほぼ高坏未製品としても問題ない事になる。そのため、樹種の同定を依頼する事にした。実測図・写真撮影の後、破損箇所の破断面から資料を採取してもらった。

第２節　池島･福万寺遺跡Ⅱ（その12）発掘調査大型植物遺体委託　報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、池島・福万寺遺跡Ⅱ（その 12）調査区から出土した弥生時代前期～中期の木製品および種実遺体について、大型植物遺体同定を実施する。

１. 遺跡の概要

池島・福万寺遺跡は大阪府東大阪市池島町と八尾市福万寺町にまたがる遺跡である (図 1)。古代の条里制地割が良好に遺存するとともに、弥生時代前期から各時代の水田遺構が検出され、広い面積で長期の土地利用の変遷が追える遺跡として知られている。大阪府文化財センターでは遺跡内に計画された恩智川治水緑地の建設に伴い 1989年から継続的に調査を行っている。

今回の調査区は、2009年度より調査を行っており、同定資料の得られた面では、第12‐２面では弥生時代中期後半の水田、第14面では弥生時代前期後半の水田が検出されている。

２. 試料

試料は大型植物遺体同定試料１点である。試料の内訳は、弥生時代中期後半の「第12‐２面1200溝埋土直上出土木製鋤」（登録番号474)、弥生時代前期後半の第14面で検出された「1609流路東岸ポイントバー下部粗砂層出土木器１」(登録番号632) と、同じく 14面で検出された「第14‐１面1208土器１」(登録番号572) の水洗選別より得られた種実遺体からなる。資料採取位置は図109 に示す。

３. 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な大型植物遺体を抽出する。大型植物遺体の同定は、現生標本および石川 (1994)、中山ほか (2000) 等との対照より実施し、個数を数えて一覧表で示す。分析後は、大型植物遺体を種類別に容器に入れ、70％程度のエタノール溶液で液浸し、保管する。

木製品は、木取りを観察した後、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982) や Wheeler 他 (1998) を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林 (1991) や伊東 (1995,1996,1997,1998,1999) を参考にする。

図109　植物遺体分析試料の出土位置

4. 結果

結果を表10、各分類群の写真を図版 1 、記載を表11 に示す。

（1）　種実遺体同定

1609流路内木器 1 からは、樹皮が 1 個検出された。1208土器 1 内埋土からは、木本 1 分類群 (落葉低木のクマヤナギ属) 3 個、草本11分類群 (水湿地生のアゼスゲ類、ウキヤガラ、ホタルイ属、やや乾いた場所に生育するカナムグラ、ギシギシ属、イヌタデ近似種、タデ属、キンポウゲ属、エノキグサ、シソ科、メナモミ属)65個、不明1個、計69個の種実遺体が検出された。多年草のウキヤガラが最も多く (31個)、 1 個は炭化していた。

（2）樹種同定

12- 2 面から出土した一木鋤 (登録番号474) は常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属、14面から出土した高坏 (登録番号632) は落葉広葉樹のヤマグワに同定された。

5. 考察

弥生時代前期後半の第14面より出土した 1208土器 1 内埋土中の大型植物遺体群は、木本のクマヤナギ属、草本のアゼスゲ類、ウキヤガラ、ホタルイ属、カナムグラ、ギシギシ属、イヌタデ近似種、タデ属、キンポウゲ属、エノキグサ、シソ科、メナモミ属からなり、草本植物主体の種類構成を示した。草本植物は人里植物に属する分類群が多い。抽水性多年草のウキヤガラや、アゼスゲ類、ホタルイ属などの水湿地生植物は、水田雑草の種類でもある。また、木本類で産出したクマヤナギ属は、丘陵から山地の林内や林縁に生育する、ややつる性の落葉低木である。

表10. 大型植物遺体同定結果

分類群	部位	状態	遺跡名・地区割・層位/遺構面・遺構名・登録番号		
			池島・福万寺遺跡09-2		
			20O-10b	20O-10b	20O-10c
			12-2面	14面	14面
			1200溝埋土上面	1609流路内	1208土器1内埋土
			鋤	木器1(高杯)	
			登録番号474	登録番号632	登録番号572
木本					
クマヤナギ属	核	完形			3
アカガシ亜属	木材		1		
ヤマグワ	木材			1	
草本					
アゼスゲ類	果実	完形			1
ウキヤガラ	果実	完形 炭化			2
		完形			28
		破片			1
ホタルイ属	果実	完形			1
カナムグラ	核	完形			10
		破片			2
ギシギシ属	果実	完形 炭化			1
イヌタデ近似種	果実	破片			1
タデ属	果実	完形			5
		破片			7
キンポウゲ属	果実	完形			1
エノキグサ	種子	完形			3
シソ科	果実	完形			1
メナモミ属	果実	完形			1
不明種実		完形			1

このように土器内から出土した種実遺体は、当時の調査区近辺に生育していたものに由来する可能性が高く、人為的攪乱の影響を強く受けた、水湿地が存在する明るく開けた草地環境を示唆している。土器内への種実の取り込まれかたについては埋土の層相を踏まえた評価が必要であるが、種類構成および栽培植物が認められないなど種類構成をみるかぎり、人為的に取り込まれたのではなく、埋没の過程で取り込まれたものである可能性が高い。なお、産出した種類は、当該期における既往の分析結果とも調和的である (松田 ,2008; パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2008 など)。

一木鋤は、身の部分が柾目、柄が削出丸木となる木取りで、常緑広葉樹のアカガシ亜属に同定された。アカガシ亜属の木材は、重硬で強度が高い材質を有する。この結果から、農耕具として、強度の高い木材を選択・利用したことが推定される。一木鋤については、これまでの調査でもアカガシ亜属が多く確認されており、アカガシ亜属以外の樹種が利用された例は、鬼虎川遺跡でケヤキが 1 例報告されている

程度である (林ほか ,1988)。

高坏は、横木地柾目取であり、落葉広葉樹のヤマグワに同定された。ヤマグワは、重硬で強度・耐朽性が高く、加工は困難な材質を有する。池島・福万寺遺跡では、これまでにも彩色された高坏がヤマグワに同定されており (大阪文化財センター ,1991; 大阪府文化財センター ,2002)、今回の結果と調和的である。また、大阪府内では、彩色の有無に関わらずヤマグワの利用が多く見られ、他にケヤキ、サクラ属、クスノキ等の利用例が少数ある (嶋倉 ,1984,1990; 松田 ,1986,1989; 島地ほか ,1987; 林ほか ,1988; パリノ・サーヴェイ株式会社 ,1996等)。これらの結果から、本地域では高坏の素材として、ヤマグワを中心とした木材選択が行われていたことが推定される。

引用・参考文献

林　昭三　1991　日本産木材 『顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所

林　昭三・島地　謙・植田弥生　1988 「出土木製品の樹種 (第４・５次)」『鬼虎川遺跡調査概要Ⅰ ―遺物編　木製品―　東大阪市文化財協会　69-96』 東大阪市文化財協会

石川茂雄　1994 『原色日本植物種子写真図鑑』328p　石川茂雄図鑑刊行委員会

伊東隆夫　1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料　31　京都大学木質科学研究所　81-181』 京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料　32　京都大学木質科学研究所　66-176』 京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料　33　京都大学木質科学研究所　83-201』 京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料　34　京都大学木質科学研究所　30-166』 京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料　35　京都大学木質科学研究所　47-216』 京都大学木質科学研究所

中山至大・井之口希秀・南谷忠志　2000 『日本植物種子図鑑』642p　東北大学出版会

松田隆嗣　1986 「亀井（その２）遺跡出土木製遺物の用材について」『亀井（その２）近畿自動車道天理 - 吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』 大阪府教育委員会

松田隆嗣　1989 「高宮八丁遺跡出土木製遺物の樹種について」『高宮八丁遺跡　木器編』 寝屋川市教育委員会

松田隆二 (株式会社古環境研究所)　2008 「第14層の分析 (プラント・オパール分析・珪藻分析・種実同定分析)」『(財) 大阪府文化財センター調査報告書　第186集　池島・福万寺遺跡７―一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書』 財団法人大阪府文化財センター

大阪文化財センター　1991 『池島・福万寺遺跡発掘調査概要　-89- 1 - 6 調査区の概要』188p　大阪文化財センター

大阪府文化財センター　2002 『池島・福万寺遺跡２―一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書―　遺構・遺物編　大阪府文化財センター調査報告書第79集』358p　大阪府文化財センター

パリノ・サーヴェイ株式会社　1996 「出土木製品の樹種」『宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書　第1分冊』 東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会

パリノ・サーヴェイ株式会社　2008 「大型植物遺体同定分析」『(財) 大阪府文化財センター調査報告書　第186集　池島・福万寺遺跡７―一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書―』 財団法人大阪府文化財センター

島地　謙・伊東隆夫　1982 『図説木材組織』176p　地球社

島地　謙・林　昭三・植田弥生　1987 「鬼虎川遺跡出土木製品の樹種（第７次）」『鬼虎川の木質遺物　第7次発掘調査報告書　第４冊』 財団法人東大阪市文化財協会

嶋倉巳三郎　1984 「出土木製品の樹種について」『山賀 (その３)　近畿自動車道天理 - 吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 - 本文編 -』 大阪府教育委員会大阪文化財センター

嶋倉巳三郎　1990 「東大阪市鬼虎川遺跡から出土した加工木の樹種」『鬼虎川遺跡第１- ３次発掘調査

報告』 東大阪市文化財協会
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編） 1998 『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩（日本語版監修)』122p 海青社 ［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］

表11 種実遺体・木材遺体の記載

＜木本＞

・アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*） ブナ科
木材。放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ヤマグワ（*Morus australis* Poiret） クワ科クワ属
木材。環孔材で、孔圏部は3-5列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では単独または2-4個が複合して斜方向に配列し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。

・クマヤナギ属(*Berchemia*） クロウメモドキ科
核(内果皮)は灰褐色、長さ5～6mm、幅3.5～4mm、厚さ1.5mm程度のやや偏平な長楕円体。背腹両面の正中線上に溝があり、着点はやや深く切れこむ。内果皮は厚く硬く、表面は粗面。

＜草本＞

・アゼスゲ類(*Carex* Sect. *Carex*） カヤツリグサ科スゲ属
果実は灰黒褐色、長さ2.1mm、径1.6mm程度のレンズ状広倒卵体。頂部の柱頭部分が伸び、基部は切形。果皮表面には微細な網目模様があり、ざらつく。

・ウキヤガラ(*Scirpus fluviatilis* (Torr.) A. Grey） カヤツリグサ科ホタルイ属
果実は灰黒褐色、炭化した1個は黒色。長さ3.0～3.5mm、径1.8～2.0mm程度の三稜状狭倒卵体。頂部の柱頭部分はやや伸びて切形。断面は3角形。基部は切形で灰褐色、果実とほぼ同長で下向きの逆刺をもつ刺針状花被片が伸びる個体がある。果皮はやや厚く表面は粗面。

・ホタルイ属(*Scirpus*） カヤツリグサ科
果実は黒褐色、長さ2.0mm、径1.8mm程度の片凸レンズ状広倒卵体。頂部は尖り、基部は切形で刺針状の花被片が伸びる個体がみられる。背面正中線上は鈍稜。果皮表面は光沢があり、不規則な波状横皺状模様が発達する。

・カナムグラ(*Humulus japonicus* Sieb. et Zucc.） クワ科カラハナソウ属
核は暗褐色、径3.5-4.5mm、厚さ1.5mm程度の側面観は円形、上面観は両凸レンズ形。基部はやや尖り、縦方向に一周する稜に沿って半分以下に割れた個体がみられる。頂部に淡黄褐色、径1mm程度のハート形の臍点がある。表面は粗面で断面は柵状。

・ギシギシ属(*Rumex*） タデ科
果実は炭化しており黒色、長さ1.5mm、径1.2mm程度の三稜状広卵体。三稜は鋭く明瞭で、両端は急に尖る。果皮表面はやや平滑。

・イヌタデ近似種(*Polygonum* cf. *longisetum* De Bruyn) タデ科タデ属
果実は黒色、長さ1.6mm、径1.1mm程度の丸みのある三稜状卵体。頂部は尖り、基部は切形。果皮表面は平滑で光沢がある。

・タデ属(*Polygonum*） タデ科
果実は黒褐色、長さ2.5mm、径1.8mm程度のレンズ状広卵体。頂部は尖り、基部は切形で萼が残る個体もみられる。果皮表面には微細な網目模様がある。

・キンポウゲ属(*Ranunculus*） キンポウゲ科
果実は黄灰褐色、長さ2.5mm、幅1.8mm、厚さ0.5mm程度の偏平な非対称広倒卵体。両端はやや尖る。果皮は海綿状で表面は粗面。

・エノキグサ(*Acalypha australis* L.） トウダイグサ科エノキグサ属
種子は灰黒褐色、長さ1.5～1.8mm、径1.2～1.5mm程度の倒卵体。基部はやや尖り、Y字状の稜がある。種皮は薄く硬く、表面には細粒状凹点が密布する。

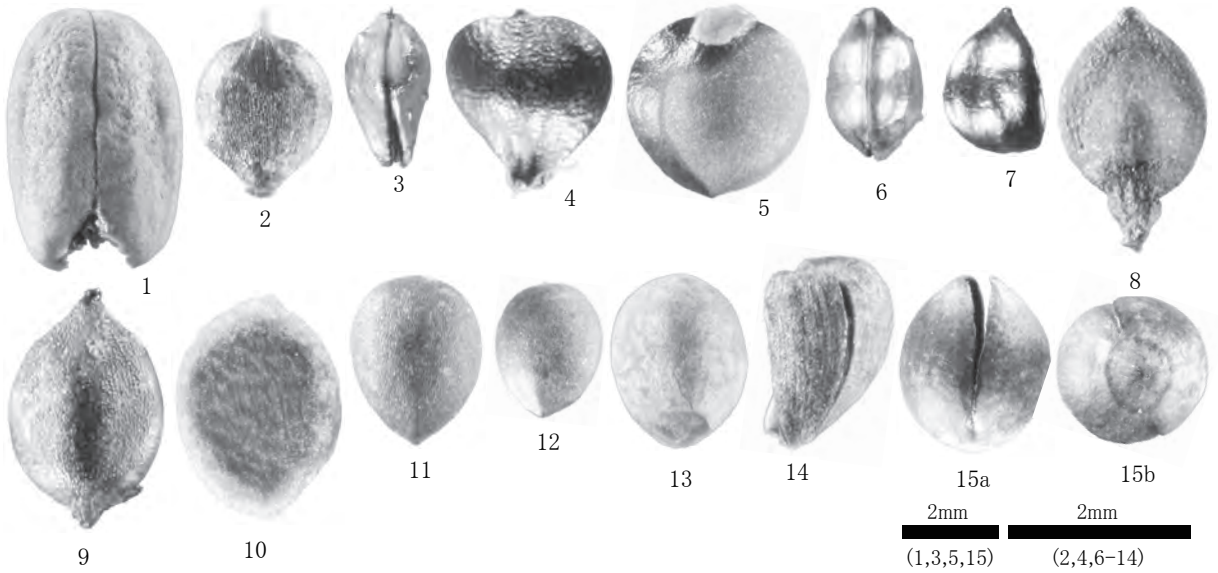
・シソ科(Labiatae)
果実は灰褐色、長さ1.9mm、径1.5mm程度の楕円体。背面は丸みがあり、腹面正中線は鈍稜状で基部は舌状に突出し、先端に臍がある。果皮表面は粗面。

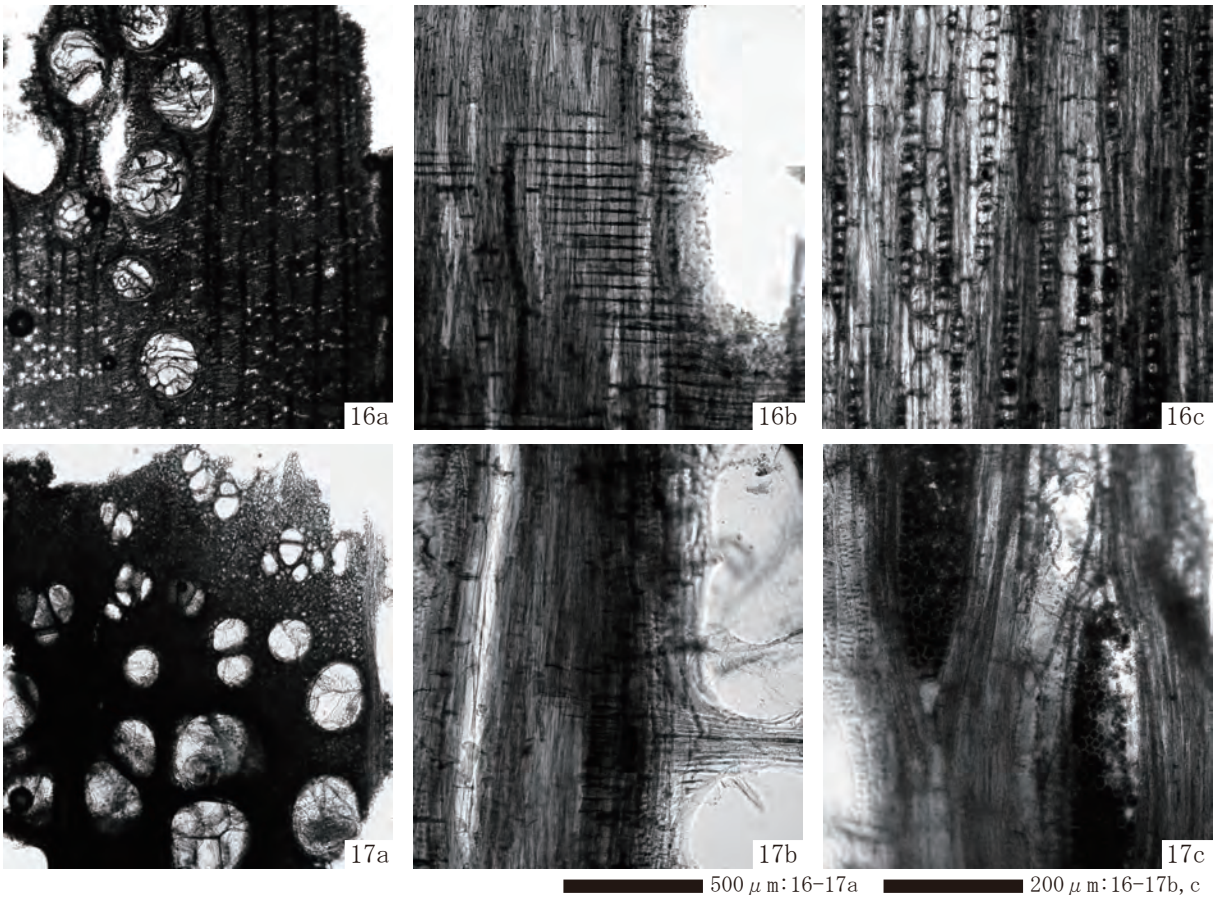
・メナモミ属(*Siegesbeckia*） キク科
果実は灰黒褐色、長さ2.2mm、径1.4mm程度の狭三角状菱形体で腹面方向へ湾曲する。頂部には円形の臍がある。果皮表面は海綿状で浅い縦溝と微細な網目がある。網目の境壁は短く突出し、全体に微細な突起がある。

＜不明＞

・不明種実(Unknown)
灰黒褐色、長さ3.8mm、径3.2mm程度の偏球体。一端に径1.5mm程度の偏円形で中央がやや尖る突起がある。突起以外は縦に不規則に半割する、表面は粗面。

図版1　大型植物遺体(種実・木材)





1. クマヤナギ属　核(登録番号572)
2. アゼスゲ類　果実(登録番号572)
3. ウキヤガラ　果実(登録番号572)
4. ホタルイ属　果実(登録番号572)
5. カナムグラ　核(登録番号572)
6. ギシギシ属　果実(登録番号572)
7. イヌタデ近似種　果実(登録番号572)
8. タデ属　果実(登録番号572)
9. タデ属　果実(登録番号572)
10. キンポウゲ属　果実(登録番号572)
11. エノキグサ　種子(登録番号572)
12. エノキグサ　種子(登録番号572)
13. シソ科　果実(登録番号572)
14. メナモミ属　果実(登録番号572)
15. 不明種実(登録番号572)
16. コナラ属アカガシ亜属　木材(登録番号474)
17. ヤマグワ　木材(登録番号632)

木材写真のaは木口、bは柾目、cは板目である

第３節　分析結果を受けて

1208土器１内の種子は、期待に反して、人為的に入れられたものではなく、埋没の過程で自然に取り込まれたものの可能性が高いと報告された。確かに種類構成から見ても納得のいく結果である。栽培植物もなく、利用できるような植物もないので、何かを作るために人為的に入れられた可能性はないと言えるだろう。

だが、その事からも、この土器が、第14－１面が埋没する洪水で流され、この位置で沈んだ可能性がある事を考えられる事ともなった。

また、それらの種子から当時の植生環境がうかがえるのも一つの成果である。「人里植物」・「水田雑草」が見られ、「水湿地が存在する明るく開けた草地環境」が推測できるというのは、まさしく周囲に水田が広がっていた事を示すと言える。また、木本植物の種子がクマヤナギ属のみしかない事から、当時すでに周囲に森林が少なかった事を暗示しているように思える。

栽培植物の種子がない事は、周囲に耕作地が広がっている事と一見不調和にも思えるが、この土器を埋めた洪水の起こった季節のためであろう。種類構成から見ると、夏頃結実するものが多いように思える。イネの出穂以前に洪水が起こったとすれば、それが入らないのも当然と言える。畑作など、稲以外の植物の栽培は周囲に少なかったのであろうか。

木製鋤の材がアカガシ亜属と判明したのも至極納得のいく結果である。時期は異なるが08－２調査区の弥生時代前期後半の居住域から出土した木器類の中で、竪杵の原材と推測される丸太材にアカガシ亜属が１点見られる。ただ、そこでは竪杵とその原材はコナラ亜属が多く、ヤブツバキも１点ある。また農耕具は平鍬の製品・未製品各１点が出土しているが、材はクヌギである。

木製鋤の材は、弥生時代を通じてはアカガシ亜属が圧倒的に多いわけだが、08－２調査区の鍬は農耕具の種類による使いわけか、時期による環境の変化か、検討が必要であろう。

08－２調査区の居住域と時期が同じである木製高坏未製品は、材が高坏に使用される頻度の高いヤマグワと判明し、それも高坏未製品と確定できる要素となった。08－２調査区では建材と推測される木製品がヤマグワ製であり、材として入手可能であった事を証明する。過去に当遺跡で出土した彩色木製高坏もヤマグワ製であり、高坏の材として選択されているというのは肯定できる。

だが08－２調査区の建材は棒状の材であり、細い原材から加工できるが、高坏未成品はその木取りから見てもかなり太いヤマグワの幹から取られたと考えられる。木取り自体は、幹の芯と樹皮付近を除いても幹の径を最大限生かせるようにしているがそれでも幹の径が50㎝以上のものが必要だったのではないだろうか。弥生時代前期の段階では、近隣、例えば生駒山中などで、まだそのような立派な木材が入手できる環境であったのだろうか。

以上、科学的分析で、一部は期待と異なる部分もあったが、有意義な成果が得られた。周辺の環境や、木製品の種類による材の選択が考えられるようになったと言えよう。

木製鋤は08－２調査区の木製農具と比較し、種別や時期での変化を考える端緒にもなろう。また、木製高坏未製品は、当遺跡内での木製高坏の例数を重ねる事になる貴重な資料と言える。

第５章　まとめ

今回の調査では、やはり弥生時代中期前葉の居住域の発見が最大の成果と言えよう。しかし、今まで構築されてきた池島・福万寺遺跡共通基本層序の問題点をいくつか明らかにできたのも大きな成果である。また、池島Ⅱ期地区では近年の調査と合わせ、以西の地区とは異なる遺跡内東部の地形形成環境が明らかになってきたとも言える。最後に、時代順に重要な成果と問題点をまとめておく。

縄文時代

今回の調査では、縄文土器は、弥生時代と併行する時期の縄文時代晩期末葉、長原式土器しか出土しなかった。しかし、縄文時代後期中葉の土器が出土している04－２調査区が北東に隣接している事もあり、その前後の環境の変化を明らかにできたと言える。

第16層が確認され（図108）、調査地点付近の陸化は縄文時代後期中葉の第15－１面（図104）より少し前と考えられる。既往の調査で確認される縄文時代中期の土器片は、東の生駒西麓扇状地上に散在する縄文時代遺跡からの流入遺物と考える。当遺跡内の縄文時代中期の遺構面の存在は、遺跡東端付近で、埋没した生駒西麓扇状地が検出されれば可能性はあると言える。

そして、遺跡内が人間の活動領域となるのが第15－２ｂ面以降である（図106）。04－２調査区の土器群と共に、本調査区の遺構の可能性の高い溝がわずかな例ながらそれを示す。

しかしその時点ではまだ、遺跡東部の本調査区でも微高地の発達は見られず、平坦で低湿な状況であり、現在では沖積平野に分類される立地も、当時はむしろ三角州のような環境であったと推測できる。遺跡の西側はさらに低湿で、淡水の干潟のような状況であったろう。事実、既往の調査で数ヶ所、人・鹿・猪・鳥類の足跡が検出されている。

弥生時代

弥生時代は河内Ⅰ－２～４様式期の第14－１・２層、河内Ⅱ－１～３様式期の第13－２面、上限が河内Ⅱ－３様式で下限不明の第13－１層、上限は河内Ⅲ様式期の可能性があり、下限が河内Ⅳ－２様式期頃の第12－２層、河内Ⅳ－２～３様式頃の第12－１層、弥生時代後期前半頃の第11面に分かれる。

しかし、本調査区では、黒色の耕作土層である第11層がほとんど遺存せず、その床面遺構がわずかに残る面が第11面となり、遺物もほとんどなかった。その時点で全体的に微高地化し、かつその後、平安時代まで極端に堆積の少ない時期が続いたためであり、これも遺跡東部の状況と言えよう。

第14－１・２層時点　第14－２面（図98）で完形に近い縄文時代晩期末葉長原式の深鉢が出土し、その直上の第14－１層時点（図91）で水田区画が広がっていたのは、当遺跡の弥生時代の始まりを鮮やかに見せる。04－２調査区に長原式土器と弥生土器が混在する墓域がある事を考え合わせると、河内Ⅰ－２様式の短い期間に、長原式土器を使用する集団の中に弥生土器を使用する集団が混交し、急速に耕作地を拡大させ、長原式土器を消滅させていく様相が見て取れる。従来から生駒西麓地域で長原式土器と弥生土器の共伴や、二者の特徴を兼ね備えた「折衷土器」の存在などから、長原式土器使用集団を弥

生土器使用集団が駆逐したのではなく、前者を吸収して弥生時代が始まると言われてきたが、当遺跡でもそれが確かめられ、かつその事態が急速に進行した事が理解できる。

そうして成立した集団が形成した集落が08－２調査区の弥生時代前期居住域であろう。農耕具や竪杵だけでなく、大型の土錘・石錘が出土するのは、水田稲作のみでなく漁労にも関わる集団であった事を示す。それはまた、この地点が河内潟などの漁場に出やすい環境であった事も関係するだろう。

本調査区の1609流路出土木製高坏未製品は、その集落のものと考えられ、木製高坏の貴重な類例でもあるが、その集落が優良な材木を入手できた事も証明するものとなった。

08－２調査区の居住域は微高地上に立地し、その微高地はさらに東に広がっていたようだが、本調査区ではまだ、未発達な微高地が調査区東端にかかる程度である。遺跡東部の微高地の発達が、この段階に南東方向から進行し、その営力は生駒西麓から流下する小河川によると考えられる。そのために遺跡東部は、大和川水系による河内平野の発達過程とはやや異なる様相を、これ以降平安時代頃まで見せる。

既往の調査の14－１層とa・b層定義の問題　第14－１面直上には、遺跡内のほとんどの部分で、暗色の水成堆積層が見られる。土壌を巻き上げながら浸水した溢流的洪水によって形成された層と考えられ、わずかながらラミナも残存し、層厚のある部分では上方に向け有機分が減り漸移的に明色化する。

ところが、既往の調査のほとんどでは、これを14－１a層とする。上部が明色化する部分を分層してしまった調査もあるようである。この上面で人や動物の足跡が検出される事が理由になっているが、洪水堆積層上面に足跡があるのは不思議ではないし、その面で畦畔などの遺構が検出されないのも水成堆積層である事を証明する。この層を、湖沼状態になった期間に、その底に堆積した層だと考察する報告もあるが、なぜかそれでも共通基本層序の「a層」に分類している。

実は、第12－１・13－１・15－１面など、古土壌層直上を覆う洪水堆積層には、最下部が同じように下の土壌を巻き上げ暗色化しているのが、普遍的と言ってよいほど見られる。その薄い部分は多くの調査で上の洪水堆積層に含めず、下の古土壌層に含め分層してしまった例が多い。

今回の報告ではそれを是正した。既往の報告書を総覧すれば、池島・福万寺遺跡の共通基本層序に使われる「a層」・「b層」の概念は、「a層」が土壌学で言う「A層」、耕作土層を含めた古土壌層で、それを堆積層に準じた扱いにしているはずである。そして「b層」は土壌学で言う「B層」とは異なり、洪水堆積層を含めた水成堆積層、広く考えれば自然堆積層と定義されるのではないだろうか。

だが、既往の調査では、古土壌層に限らず、「暗色帯」ならa層とする例や、B層を「土壌化の度合いは弱いが」としながらa層に分類する例が見られる。定義の明確化と、調査者全員の認識の共有がなければ、共通基本層序の構築はかえって重大な混乱を招く恐れがある。今後は既往の調査の見直しと、新規の調査に関しては組織的・定期的な検討が必要であろう。

第13－２面　第13－２面（図61）では、本調査区で本格的に微高地が形成される。微高地は1609流路両岸の自然堤防として形成された。その微地形は第12－１面まで踏襲される。それと共に、この面以降、激しく下方浸蝕する洪水も顕著となる。すでにこの面で、低地３にはクレバススプレー的な砂礫層の堆積が見られ、1609流路も粗砂層で埋積する。そこから流路変更した1258流路は、元は第14－１面の1610溝が、浸蝕が重なり、浸蝕痕としての規模を拡大した末のものである。

この面では微高地の形成と軌を一にするようにそれを中心として居住域が成立する。

ただ、1609流路東岸ポイントバー最上層の遺物群は、同時併存と見ても問題ないが、住居１直下に

ある土器群など、先行する遺物群もある他、住居３の下に炭化物を含む部分堆積層がある事などから、第13‐２面に先行する時点に、調査区南東外に集落があり、その居住域が拡大してきた可能性が高い。

第13‐２層より下で各所に見られた部分的古土壌は、一つ々々の範囲が狭く、質も層位も異なるため、基本層序から除外したが、今後調査が東側に及べば、広範囲の土壌層が検出され、第13層の中で基本層序に組み込めるａ層が増える可能性は高いと考える。

この居住域は、08‐２調査区弥生時代前期後半居住域とは異なり、水田耕作以外の生業の要素がない。この居住域自体が、給水用水路と排水用水路が分岐した水利体系の要に位置し、住居周辺に小さな耕地区画もあり、使用する水も水路から引くような、水利体系と密接な関係を持つ居住域である。

微高地の発達により、そこに水路を通し給水可能、耕地開発可能な範囲が増加した反面、堆積の進行で、河内潟から遠ざかり、生業から漁労の比率が低下し、水田耕作への専業化が進んだと推測される。

時期的にも、距離的にも 08‐２調査区弥生時代前期後半居住域と接すると言って良く、その集団が移動したと思われるが、その性格には異なる点があると言える。

また、続く第13‐１面では、居住域が耕地区画に変貌するのも特異な様相である。調査当時も耕作土層直下に住居址があるとは思いもよらなかった。その間の洪水堆積層はほとんど遺存しない程度で、激しい洪水があったとも思われず、基幹的な給水路も維持される。ただ、第13‐２面の時点で流路変更があり、居住域西隣の 1609流路が低地２に変化し、耕地開発が可能になった事が居住域廃絶の原因かも知れない。また、低地１内の排水を主とする水路が調査区内からなくなるので、水利体系の変化により、水利の要となる地点も移動し、ここに居住域を置く必要性がなくなったのかも知れない。

第13‐１面　この面（図53）の耕作関係遺構で注目されるのは 1258流路と、元1609流路であった低地２を画す堤防が作られた事である。流路との高低差が少なく洪水の被害を受けやすい低地２に耕地を開発するためと同時に、堤防上に水路を通し、堤防が接続する微高地２上の耕地に給水するためでもあった。この堤防は第12‐１面まで維持されるが、やはり度々洪水の被害を受けていたようである。

この面の耕地区画は、やや雑然とした印象を受ける。低地１と微高地１の境を通る水路も経路が一部低地側に張り出すなど、機能的でない部分がある。

それが、次の第12‐２面では改善されるが、堤防や水路の基本的な位置は踏襲される。しかし、出土遺物が示す時期では、第12‐２層時点は上限が河内Ⅲ様式には入るが、Ⅲ様式前葉まで遡るのは無理があり、第13‐１層時点もⅡ－３様式期からどこまで存続するか不明である。これが単に遺物の少なさ故の欠落か、実際に両面の間に空白期間があるかは慎重に判断しなければならない点であろう。

微高地上の耕地区画の問題　今回の調査では、弥生時代の各面で微高地上にも大畦畔・小畦畔が検出され、耕地区画が確認された。そこに給水する水路も検出され、各耕地区画の高さも、多くは水回しに不都合のないものであった。

しかし、既往の調査では微高地上に耕地区画が確認された例は極端に少ない。微高地肩部の大畦畔は比較的多く確認されるが、多くは「高まり」と呼称され、自然地形と見る調査者もいる。だが、そのような「自然地形」はあまりにも不自然であり、大畦畔であれば微高地上が耕地化されていた事は確実である。給水さえできれば、微高地上を耕地化しない理由はない。

立地上、遺存度の低い事が多く、不整形な区画も多いが、今回の調査でも、慎重に調査すればさほど検出に困難はなかった。調査開始当時の福万寺Ⅰ期地区では、微高地が流路沿いの細い自然堤防である事が多く、水路が立地するのみの例が多かったため、「微高地上に耕地区画はない。」との思い込みが出

来上たのではないかと危惧する。小畦畔を検出するには、検出面の上層を薄く残した状態で一度掘削を止め、それから徐々に下げつつ精査しなければならない。しかし調査掘削時、低地より先に面が露出する微高地上面を直接検出してしまうと、高低差の大きい大畦畔しか検出できない恐れがある。

第12－２面（図47） 第12－１層と耕土同士が接し、水路や大畦畔が継続する場合が多いが、小畦畔は突出部分を削平され、耕土との切り合いだけが検出された。しかし、洪水堆積で浸蝕を受けつつ埋没した第12－１面より遺存度が良く、弥生時代の耕地区画では最も全体像が分かりやすい。

その中で、第13－１面の水路の位置をほぼ踏襲する1146溝の水路は微高地１の東側肩部に忠実に乗り、微高地へもどこからでも給水できる形に整備されている。耕地区画の一つ々々も第13－１面に比べ大きく、方形を指向する傾向も強い。水利体系を踏襲しつつより機能的に整備していると言え、遺構的には連続性が感じられる。また、浸蝕が激しい低地２部分で、わずかながら耕地区画が残存していた。

この面から第12－１面に継続する1130流路は、第13－２～１面の1258流路を踏襲するが、間に一度、土壌が形成されている。規模も拡大せず、1609流路から流路変更したとしては小さいが、蛇行は強まる。理解しにくいが、本流は別にあり、分岐した流路なのかもしれない。形成過程を見ても自然流路ではあるが、この規模なら、その水量が人為的に管理されていた可能性もあるのではないだろうか。

第12－１面（図43） 第12－２面を踏襲した耕地が広がっていたが、埋没時の浸蝕で残りは良くない。ただ、調査区内全ての微高地・低地が耕地化されていた事は分かる。また、第13－２面で形成された微地形は、わずかながら低地が埋没していき、微高地と低地の比高差が小さくなっている。

この面で目立つのは、面を埋没させる洪水の際、1130流路から、人工堤防と微高地2の接点付近を大きく破堤し、低地２を激しく下方浸蝕して北に抜けるクレバススプレーの浸蝕痕である。隣接調査区では、これを流路と、1130流路を溝と、誤解したが、今回の調査では1130流路が蛇行する形態と、そこからの破堤部分を検出できた事から見解を是正する事ができた。

低地２の、破堤部分に隣接する付近に立ち木の根株が多くあったのも注目される。繰り返し破堤し、洪水に弱い部分と認識されていたと思われ、防災林として植えられた可能性もあると考えている。

第11ｂ層堆積状況・流路とクレバススプレー・「失われた遺構面」 今回の調査では、第11ｂ層がその立体的な構造と第12－１面に残した痕跡から、第12－１面を埋没させた１回の洪水で堆積した事が判明した。また、本調査区から層を追跡すると、少なくとも池島Ⅱ期地区の大部分の11ｂ層がその１回の洪水で堆積していると分かった。

まず、シルト系の第11ｂ層下半が、小畦畔や耕作面を緩く浸蝕しながら堆積する。洪水の始めの溢流的な水流によると思われ、その下部は第12－１層を巻き上げ暗色化する。ほぼ同時に1146溝の水路水口から粗砂が北東方向に流れ出すが、堆積範囲は狭く、水口を塞ぎ堆積が終了する。次に1130流路から低地２に向い破堤する。下方浸蝕しながら北流し、粗砂層を堆積させ、上面は盛り上がる。同時に低地３内にも北流するクレバススプレーで粗砂層が堆積する。同じ層位で、水路からも粗砂層が、第12－１面に溝状の痕跡を残すまで下方浸蝕しながら北西に流れ、堆積する。その粗砂層も上面が盛り上がる。粗砂層はどれも一見、第11ｂ層下半上面から切り込む流路や溝に見える。その上に、ほぼ同時に破堤的洪水堆積層と見られる砂層の第11ｂ層上半が広く堆積する。最後に洪水終息時の細粒の堆積層があるはずだが、それは土壌化して第11層になったのであろう。

低地３を北上するクレバススプレーの堆積も、隣接調査区では「11b 層内流路」と認識されている。クレバススプレーの堆積は、下方浸蝕を伴い、断面形も流路状になる場合が多い。流路も流路変更を伴

うような流路埋積層の堆積は、多くは粗砂・砂礫層で、その上面も盛り上がる。そのため単独の調査区では両者の判別は困難な場合がある。特に本調査区の1609流路の跡に形成された低地２が第12－１面で浸蝕されたように、流路由来の低地にクレバススプレーが重複した場合、限られた断面だけで判断しては、その変遷過程が分からなくなる危険性がある。既往の調査でも流路と報告されたものの中に、流路ではないものが多く含まれ、地形・環境の変遷を把握するのに困難をきたす事態になっている。

また、第11ｂ層内の粗砂層に流路や溝のように見えるものがある事は、池島Ⅰ期地区の12－１面が、福万寺Ⅰ期地区の12－１面より時期的に古いとの認識と結びつき、第11ｂ層内に土壌層が遺存しない「失われた遺構面」があり、その面で形成された流路や遺構であると考えられ、それが福万寺Ⅰ期地区の12-1面に相当するのだという説となり、既往の調査の報告に多く反映されている。

今回の調査では、第11ｂ層内から切り込む流路や溝のように見えるものは、洪水の過程の堆積の変化である事が証明され、その全てではないが一部は否定できる結果となった。また池島Ⅱ期地区の第12－１面の時期は遺物からも福万寺Ⅰ期地区と同じ時期であり、池島Ⅰ期地区の時期的ずれは、遺物の少なさから来る欠落か、局所的な状況である可能性が高まった。

第11面（図39） 当遺跡内の多くの部分で、弥生時代後期の耕作土層が確認され、「第１黒色土層」とも呼ばれるが、今回の調査区ではその耕作土層はほとんど遺存せず、その床面のみが残る状態であった。床面に残る自然土壌層を一応第11層としたが、耕作土層とは異なる。時期も通常の11－１層が弥生時代後期後半であるのに対し、弥生時代後期前半を下らない。

第13－２面から第12－１面まで踏襲された微地形は埋没し、調査区内には西側に緩やかに低くなる地形が見られる。その状況と、耕作土層の遺存の悪さから、調査区の大部分が微高地となった状態と思える。土砂を供給する流路も西側に遠ざかったのか、ここから平安時代頃まで、堆積の非常に少ない期間が続く。これも遺跡内東部の特徴と考えられる。

床面に残る耕地区画の痕跡や溝から、想定できる耕地区画を復元したが（図39）、細かく溝が巡り、畦畔越しの水回しが主流ではない耕地区画は、当遺跡内ではあまり類例がない。床面遺構には、耕作土層成立から埋没までのものが重複しているので、復元案はまだまだ検討の余地が多いと思われる。

弥生土器破片数集計（表12） 居住域が検出され、当遺跡の調査としては弥生土器の出土量が突出して多い。前期居住域を検出した08－２調査区に次ぐ。弥生土器の破片数を表12に集計してみた。

細片による数の偏りを防ぐため、対象は長さ２㎝以上を計れる破片のみとした。分類は破片の状態で有効なものを考えた。調整・文様などの分類項目が２要素以上重複する破片は、例数の少ない項目の方に計上した。生駒西麓産胎土の判断は胎土の色調にはこだわらず、混じる砂粒に角閃石の量が石英・長石に匹敵するほどあり、細粒にもある事、黒雲母も含む事、チャートを含まない事を基準としたので、実質狭義の生駒西麓産胎土と言ってよい。

弥生時代後期の土器は皆無に近く、中期中葉～後葉の土器も少なく、前期の土器もさほどの量はないので、この表のほとんどは河内Ⅱ様式で、第13－２面の居住域に関連する土器である。

壺が甕と同数に近いほどあるのが注目できる。破片数では器壁の厚い壺の方が少なくなる傾向がある事を考えると、かなり多いと言える。また、鉢・高坏などの供膳器が少なすぎるのも気になる。集落の器種構成としてはバランスを欠くと言えるだろう。1609流路東岸ポイントバー最上層の遺物群では、甕と壺の破片数が４：１ほどで、集落的な器種構成と言えたが、第13－２面の住居２・３出土の遺物群に壺が多く、第14－１面上の遺物群でも壺が多かった事が影響しているようである。

ある意味その三つの遺物群の壺の多さは、祭祀的様相ではないかと推測される。

生駒西麓産胎土の土器は、全体で約半数強と、意外と割合が低い。河内低地産の土器もバランス良く使われているとも言える。しかし、やはり甕では生駒西麓産胎土が圧倒的に多く、この胎土が火にかける土器に適している事を示す。また、河内型甕とも言われるミガキ甕がハケ甕を圧倒し、かつ生駒西麓産胎土との結びつきも強いのは、この地域の弥生時代中期の典型的様相と言えるだろう。

壺では生駒西麓産胎土は半数に満たない。また、刻目突帯や沈線文などのⅠ様式的要素には生駒西麓産胎土がほとんどであるのに、Ⅱ様式的要素である櫛描直線文では半数ほどで、Ⅱ様式になると壷に関しては河内低地での製作が拡大していると言える。

また、この表には現れないが、搬入土器や他地域の要素が見られる土器が極端に少ないのも特徴である。管見で記憶に残るものでも、生駒西麓産胎土の甕で、文様に近江系要素があるものが１点、讃岐産の土器の可能性が考えられるものが数片程度である。

これらの様相からは、土器を使用した集団が、極めて在地的な、それも、生駒西麓地域と河内低地の境目に位置する遺跡の立地を反映するような集団であった事が見えてくる。

それは第13‐２面の居住域の住居址が、ベッド状遺構や類松菊里式など西方の影響が見られ、また多様であったのと対照的な状況である。どちらの要素がより集団の出自を反映しているか、考えさせられる問題とも言える。

古墳時代から奈良時代

第10‐１・２面（図32・38） 古墳時代から奈良時代の期間に属する面はこの２面のみである。第10‐１面では上層の削平を第８ｂ層により免れた部分で、自然地形に沿った小区画水田が検出され、第10‐２面は、その第10‐１面まで変遷を重ねた耕地区画の床面遺構が残る。第10-１層は耕作土層、第10‐２層は自然土壌層である。自然土壌が分厚く形成された後、その上部が耕作された形である。形成された自然土壌の厚さが、逆に堆積物の供給の少なさを示す。

遺物は非常に少ないが、第10-１層が耕作土として機能していた期間は、長めに考えると古墳時代中期から飛鳥時代となる。古墳時代後期を中心とし、福万寺Ⅰ期地区で居住域があった期間に重なる。

全体の包含遺物でも古墳時代初頭庄内式期から古墳時代前期に限定できる遺物は皆無である。奈良時

表12　弥生土器破片数集計表

（　）内の数字は生駒西麓産胎土

総数	**甕**	ミガキ	ハケ	タタキ	底部		
2552	875	435	235	1	32		
(1321)	(652)	(375)	(114)	（１）	(18)		
	壺	無頸	広口	細頸	長頸	肩部段	刻目突帯
	818	16	59	6	2	3	78
	(399)	(15)	(27)	(5)		(1)	(77)
		沈線文	櫛描直線	流水文	波状文	簾状文	底部
		32	172	12	6	1	56
		(29)	(91)	(8)	(5)		(28)
	甑	**鉢**	櫛描文	**高坏**	**蓋**	**器台**	
	16	33	6	6	2	4	
	(15)	(23)		(1)	(2)		

代は、遺構が皆無だが、遺物は後半期のものが若干あり、隣接調査区では遺構も確認されている。

既往の調査では古墳時代初頭庄内式期から古墳時代前期、古墳時代後期を中心とした古墳時代中期から飛鳥時代、奈良時代の３期ほどに遺構が分別でき、各々の間に若干の空白期があるようで、細かく見れば遺構面の分別もできるのではないかと考えるが、今回の調査では検証できなかった。

堆積が少なく、浸蝕・削平が卓越し、前後の時期の遺構・遺物の残存度が非常に低い状況であろう。微高地が拡大し、相対的にも西側に比べ高くなった遺跡内東部の環境と言える。

小区画水田は、第10‐２面の、細かい水路を伴い、区画は等高線状に細長いものが多い形から、畦畔越しの水回しで、区画も幅を広げる第10‐１面に変化していったと考えられる。水利体系は削平で不明な部分も多いが、浅谷状の地形に給水する南東から伸びる水路と、その両側の尾根状に高くなる地形の上をさらに北西に伸びていく水路に分けられる。ただ、各水利体系の間に、水路より高くなり、給水不可能な部分があった可能性が高く、耕地面積は弥生時代より後退しているようにも見える。全体に微高地化して以降、浸蝕が進み微地形が複雑化し、水回しできない部分ができたのであろう。しかし、遺跡内西側の低地部分でも耕地区画の残りが悪い事が知られる。

第８ｂ層、周辺既往の調査の「９層」　有機分が少ないため、明度が５以上と明るく、淘汰の良いシルト層である。ただし、層厚が薄く、激しい地震変形で上下層境が乱れ、断面では小さな道具で、上下層と混じらない部分を削らないと質を把握しにくい。最古の条里制地割りの耕作土層が９層と聞いたので、調査当時これを第９ｂ層とした。しかし、調査が進展すると、周辺の調査区ではこれを９層としている事が分かり、直上層が第８層と判明した。最終的に、第９層は遺存せず、これを第８ｂ層とするのが正しいと判断した。

第10‐１面上で、第６・８層の耕作による削平を免れた部分にのみ残る。下面からは第10‐１面の畦畔が、耕作土上面より突出して検出される。上述の質に加え、これらの事からもｂ層に分類される水成堆積層である事は明らかである。加えて、上面では、坪境にも溝のみで畦畔は存在しない。

少なくとも池島Ⅱ期地区の調査で９層とされた層は、全てこの第８ｂ層である事が判明した。なぜこれを９層としてきたかの理由は、地震変形で質の把握がしにくい事に加え、遺跡西側で、第８層より下に最古条里制地割りの耕作土層の９層が存在するとされる事、平安時代中頃より古い奈良時代・飛鳥時代に遡る条里制地割が存在するとされる事、などが影響していると見られる。

この第８ｂ層を耕作土層の第９層としても、坪境に畦畔がない事はありえないが、元々あった畦畔が削平され、耕土との切り合いは地震変形で検出不能になった可能性があると述べる調査者もいた。しかし、第８層以降、近世まで、浸蝕を受けた坪境畦畔はあっても、上層に削平されたものはない。今回の調査でも第８層坪境畦畔盛土下で、第８ｂ面から切り込む溝はあるが、それは最古条里地割り施行時に掘られ、低湿な部分の水抜きや、整地の基準とされたものではないかと思われる。つまり第８層床面遺構の最古段階のものと位置づけられる。

池島Ⅰ期地区以西の既往の調査でも、９面として正方位の遺構が見られるものの中で、坪境にも畦畔が検出されていない場合は、９層とされる層自体の再検討が必要であると言えよう。

平安時代から中世

最古条里制地割り（第８・８ｂ面）　調査区の中央西寄りに南北方向の、北寄りに東西方向の坪境が通

り、それが現代まで踏襲される。四つの坪が調査区にかかり、北東が十七ノ坪、南東が十六ノ坪、北西が二十ノ坪、南西が二十一ノ坪である。

上述のように、第８ｂ面（図32）では、第８層の坪境畦畔盛土下に溝がある。また、畦畔の下をくぐり、それにつながる溝などが少数あるが、これらは条里制地割り施行作業時のものと考えられる。

第８面で第６層の耕作による削平を受け、第10‐１面が露出する部分が調査区の南北に２ヶ所ある。そこには、第８ｂ面相当の遺構として、東西と南北方向の溝が、切り合いなく多く重なっていた。その溝の大部分は、自然地形を解消できず坪内で一段高くなった部分での床面の耕作痕と考えられる。低い部分では坪内で一定方向の耕作痕がほとんどであるのと対照的で、地勢的に高い事を考えれば、この部分は畑であった可能性が高い。また、南側では、その畑への水遣りのための水溜と考えられる、長方形の土坑が二つ並んで検出された。

高い場所以外の第８層時点（図26）の耕地区画は、これ以降の条里制地割りの中で、最も整っており、小畦畔の間隔に 10.9m の倍数が最も多く見出せる。しかし、既にそれと合わない間隔の耕地区画も存在し、なんらかの理由で生じた誤差を、坪内の端の耕地区画に寄せて解消する傾向があるようである。

坪境畦畔には、幾度か浸蝕を受け、それを補修した痕が確認された。また、調査区内では坪境に幹線的水路が通る事はなく、その状況は中世を通じて踏襲される。また、この時点で坪内の区画・耕作方向は、十六・二十ノ坪が南北方向、二十一ノ坪が東西方向、十七ノ坪は西側が南北方向、東側が東西方向であり、以後に踏襲されていく。

この最古条里地割りの第８層が耕作土として機能していた期間は、遺構出土遺物からは上限が 11世紀後半までしか遡らない。しかし、層包含遺物の内容を見ると、古墳時代後期から奈良時代の遺物が若干あるが、９世紀から 10世紀前半に限定できる遺物がまったくなく、空白期間があり、それ以後10世紀後葉からの遺物がある。奈良時代までの遺物は下層の時期に属すると考えられ、既往の調査とも比較すれば、上限は 10世紀後半となる可能性が高い。下限は包含遺物と、後述する第７層候補の包含遺物を比較すれば、13世紀前半頃とされる。数回の小規模な洪水を受けるが、最も長く機能していた耕作土層と言え、まだ、洪水堆積物の供給が少ない時期と言える。

平安時代10世紀頃は、沖積平野三角州帯Ⅰａでは河床の低下が見られる時期であり、大阪府内でもその時期の完新世段丘崖が確認された例はある。だが、当遺跡内ではそのような傾向が見られない。

条里制地割りが遺跡付近で広範囲に施行されたのがこの時期なら、遺跡内中央を北流する人工河川である恩智川の整備も同時期と考えられる。恩智川は、最初は生駒西麓を流下する小河川の水を排水するのが主な機能とであったと考えられ、恩智川の成立そのものが、河床低下という自然現象に代わる役割を果たしたのかもしれない。また、それにより第８層が機能していた期間は洪水の少ない時期が続いたと言えるなら、それは恩智川が天井川化するまでの期間を示している可能性もある。

第７層候補　今回の調査では、基本層序で第７層とすべき層がなかった。ただ、第６面310・315島畠下で、第８層直上に耕作土層が遺存し、315島畠部分ではその上面に畝立てが見られ、310島畠部分では遺存度が悪いが、下面で畝溝が検出された（図26）。これが第７層の可能性が高いが、近い位置でも両者の層の質が若干異なり、十六ノ坪の二つの島畠の下にのみ残るものを、基本層序に組み込む事は躊躇されたので、あえて「第７層候補」と言うにとどめた。

畝立てがあるので畑と考えられるが、周囲は第６層の耕作がこの層下面より下にまで至るので、畝立

て部分が島畠状に高い部分のみか、十六ノ坪の中で広範囲に広がっていたかは分からない。

当遺跡の共通基本層序の、中世の耕作土層の一つがほとんど遺存しないというのも、弥生時代以来、地勢的に西側より高い遺跡東部で、層が収斂している形の一つとも言えるだろう。

遺跡東部での島畠盛土の問題　また、池島Ⅱ期地区では、条里制地割り施行以後、堆積する水成層に砂層が少なく、シルトの堆積が多い。それで島畠の盛土も、遺跡西側で知られるような砂を盛り上げたものはほとんどなく、シルトに砂粒の混じる粘質土が多く、ブロック状の構造が確認できるものも少ない。

結果、島畠盛土は島畠下に遺存する耕作土層と判別しがたい。事実既往の調査でも、粘質土系の島畠盛土を耕作土層と誤解した疑いのある報告もある。層厚が20㎝を越え、耕作土層としては不自然に厚いもの、島畠間で同一層と思われる層の上下のレベルや質が極端に異なるもの、などは盛土と認識できるが、それ以外の判断は慎重にしなければならない。

供給される土砂に砂礫が少なくシルト層が多く、量も少ない状況の原因は以下のように考えられる。条里制地割り施行に伴い、生駒西麓から流下する小河川も、元は平野部で北西に流れる傾向が強かったのが、直線的に整備され、遺跡東部の調査区への距離も遠くなり、堆積が及ぶ機会が減少する。そして、遺跡全体では、流路固定に伴い天井川化が進行する恩智川・玉串川からの洪水堆積が増加したと考えられる。玉串川東岸沿いの池島Ⅰ期地区までは洪水で砂層が堆積する事が多いが、そこから距離のある池島Ⅱ期周辺ではシルトまで細粒化した層が堆積してきたのであろう。

第６層～第３－１層　第６層で十六ノ坪に島畠が出現する（図24）。十七ノ坪東側にも成立していたようである。池島Ⅱ期地区では07－２調査区の７層で島畠が出現した可能性がある他は、この層の時点で島畠が出現する。池島Ⅰ期地区では島畠の出現が大部分の坪では４層からの出現となり、様相が異なるが、その理由は分からない。島畠は第９面の十六ノ坪の小畦畔の位置を基本に作られたようだが、ややずれを見せ、島畠間の水田を二分割する畦畔など、不均等な区画がこれ以降増加していく。第６層が耕作土として機能していた期間は、遺物から13世紀後葉から14世紀後葉と見られる。

第５層時点では（図23）、第６層時点の島畠・坪境畦畔に新たな盛土がなされ、それが第３－１層時点まで継続していく。島畠は高く盛土が為されるが、面積的にはほとんど拡大しない。それが中世での島畠の特徴と言える。第５層が耕作土として機能していた期間は14世紀後葉から15世紀前葉である。

そして第４層、第３－２層、第３－１層と島畠間の水田耕土が重なり、島畠との比高差を減らしていく。そうして洪水堆積物を対処するのがこの期間の特徴とも言える。各時点で洪水堆積物の量と状況により、一番労力が少なく済む対処法を取るのであろう。第４面検出時点で（図22）確認した島畠耕作土床面には、鋤溝が認められ、島畠上の耕作方向が確認できた。第４層時点では十七ノ坪で第５層時点から継続する小畦畔もある。この時点から各耕地区画の比高差が少なくなり始め、平坦化が進行する。第４層が耕作土として機能していた期間は15世紀中葉から15世紀末葉である。

第３－１層時点では（図20）、近世～現代の攪乱が激しくなり、不明な部分が増える。しかし、二十ノ坪にも島畠が出現しているのが確認される。また、第３－１面では東西方向坪境畦畔付近に残る浸蝕痕の形から、この面を埋没させた洪水が南西方向から来た事が推測できる。また、坪境に一部溝は見られるが、未だ基幹的水路は通っていない。第３－１層が耕作土として機能していた期間は15世紀末葉から16世紀頃で、中世末期から近世にかかる時期である。

第６層は、鎌倉時代末期の混乱から南北朝の動乱にかけて、第４層は応仁・文明の大乱にほぼ重なる時期である。しかし、その影響は今回の調査でも出土した鉄鏃に垣間見える程度で、条里制地割りの

耕作地は自力で洪水に対処しながら維持されていく。ただ、坪内の地割りの不均衡さが拡大していくのは、農民層内の独自の力関係が表出するようになった結果かもしれない。

近世

第２－４ｂ－１層・第２－４層「天地返し」　第３－１面を覆う第２－４ｂ層は三つの層に分けられる。第２－４ｂ－３層の砂層と第２－４ｂ－２層のシルト層は、ラミナもあり、一回の洪水のセットと捉えられるが、第２－４ｂ－１層は粗砂主体だが、ラミナなく、土壌化したシルトのブロック土を含み、水成堆積層とは思えないものだった。第２－４層が、その層内のブロック土に粗砂が加わったような土質である事と、その層下面の第２－４ｂ－２面に多数の人の足跡と耕作具痕が残される事から、これを天地返しの痕跡と判断した。本来は第２－５層とも言うべき耕作土層が第２－４ｂ－２層直上にあり、その上に洪水で粗砂層が堆積した。その粗砂層を下にし、第２－５層を上に掘り出し耕作土を再建したのが第２－４層と考えられる。第２－４ｂ－２面に残されたのは、その作業痕跡で、第２－４ｂ－１層内のシルトブロックは第２－５層の残滓、第２－４層内の粗砂は、洪水砂層から混じったと考えられる。

疲弊した耕作土を復活させるためなどではないが、「深耕により耕地の表層と深層を入れ替える。」という「天地返し」の定義には当てはまる。天地返しによる洪水堆積層の処理として注目できる。

第２－３層時点（図15）　この時点で、十六ノ坪では第３－１層時点の島畠を芯として、島畠が拡大する。二十一ノ坪にも島畠が成立し、全体にその数、面積が急増する。十六ノ坪では、第２－３層が耕土として機能している期間内での島畠の拡張も確認できた。

この時点以降、近世の島畠は、水田面との比高差は少なく、高く盛土するより、面積を拡大する傾向が強まる。それは河内での木綿生産の拡大と不可分の関係があろう。また、島畠の一形態として、その底面に溝状土坑を持つ島畠が登場する。二十一ノ坪の 177島畠は、上面にも溝状土坑が切り込むが、底面にも溝状土坑があるのを第３－１面で確認した。限られた範囲に溝状土坑を掘り、洪水堆積層を入れ、残った洪水堆積層でその上を覆うように盛土する島畠である。溝状土坑の掘削土を島畠上部の耕作土層としたのであろう。このタイプの島畠は、二十ノ坪内で、北に隣接する 06－２調査区で１ｂ土坑とされたものの内、南北に長いものが第２－２層時点成立の島畠底面のものである事を今回確認できた。

また、この時点で、十六ノ坪の東側の坪境でない所に両側に畦畔を伴う水路が成立する。その東側は里道であった可能性がある。復元的に見ると、これは幹線的な水路で、十七ノ坪との境に至ってからは、その坪境を西進し、坪境交点からは北上するようである。

なぜ、この位置に幹線的水路が配されたかは謎である。この時点では水路東側がまだ若干高いが、第２－１面で東西の高低差は逆転し、第１ｂ面では「十六ノ坪内東側段差」の大きな段差になり現代に至る。坪内を大きく分割するとも言え、坪単位の管理という形が崩れてきたと言えるのかも知れない。

第２－３層が耕作土として機能していた期間は、下限を 17世紀後半頃と考える事ができ、第３－１層の下限の 16世紀頃との間に第２－４層や現存しない第２－５層などが入るのであろう。

第２－１層時点（図12）　今回の調査で最も島畠面積の大きい面である。攪乱で不明な点は多いが、島畠面積が水田面積をはるかに凌駕し、島畠間が水田と見るには疑問が残るほど狭い部分も多い。

第２－３層時点で出現した基幹的水路は維持されるが、十六ノ坪内東側部分では里道は確認できず、両側とも大畦畔になる。そこでの東西高低差は逆転し、西側がわずかに高くなる。十六・二十一ノ坪境

も大畦畔を伴う水路となる。基幹的水路がなぜ複線化・複雑化したのかは不明だが、背景には水利権や水路管理の変動があると推測される。

第２－１層が耕土として機能していた時期は、多数の攪乱による遺物の混乱などで限定しづらいが、第１ｂ層の洪水の推定時期などからおおまかに 18世紀頃と考えられる。

第１ｂ面・「１ｂ土坑」（図12） 第１ｂ面は洪水砂層上面だが、当遺跡の調査で「１ｂ土坑」と通称される溝状の土坑が多数切り込まれていた。

１ｂ土坑は、今回の調査でも、「土取り穴説」は完全に否定できた。また、既往の報告の幾つかでは「天地（転地）返し」とされるが、「天地返し」とは分別すべきものである。１ｂ土坑は、第１ｂ層の洪水砂層の下から耕作土層を掘り上げ、耕作土を再建する事と、その穴に洪水砂を埋め立て、第１ｂ層の層厚を減らし、耕作土床面を安定させる事を目的として掘られたものであると結論できる。

また、土坑の掘削・埋め戻しは１本毎に行われ、その作業を連続し一気に行われた事、第１ｂ層下耕作土層採取は、洪水直前の耕作土層のみでなく、過去の耕作土層も採取し、各々の場所で目立つ洪水堆積層に当たったところで掘削を止める傾向がある事などが判明した。その他に、調査中の実感として、土坑の底面幅が、人一人が入り掘削するに適度な幅で共通する例が多い事や、直立する土坑壁面に良く見られる小さな段が、深さに応じて、足をかけて上り下りしやすく作られている事、などがある。

１ｂ土坑の方向性は、ほとんどが条里制地割り施行から踏襲されてきた坪内の耕作方向と一致するが、二十ノ坪のみは状況が異なり、第２－２層時点で成立した底面に南北方向の溝状土坑を持つ島畠を避け、島畠間水田部分に、長辺東西方向の短めの１ｂ土坑を並べて掘る。その事から、二十ノ坪では島畠が第１ｂ層で埋没せず、視認できる状態で、第１層時点にも継続した可能性が高い。

その視点から見ると、二十ノ坪以外でも、二十一ノ坪の 129島畠、十六ノ坪の 145島畠など、第２－１面島畠で上面を１ｂ土坑に切り込まれない島畠がある。それらも、第１層時点まで継続した可能性がある。島畠の第１層時点への継続の可否は、その高さとその部分の洪水堆積層の厚さによるのだろう。つまり、偶然の要素が高いと言える。

その他に第１ｂ面には、若干の段差や高低差が確認され、第１層時点成立の島畠もあった可能性がある。現代にまで遺存した島畠があるのは地図で確認でき、第１ｂ層の洪水で島畠が全て廃絶したわけではない。だがその数と面積は第２－１面より縮小しているのも事実である。それは当遺跡の大部分を厚く覆う第１ｂ層堆積の影響であろう。しかしそれは、島畠減少という事態が遺跡周辺の第１ｂ層堆積範囲内での出来事で、河内平野全体に共通する現象ではない事も示す。

坪境畦畔は、第２－１層時点の畦畔がそのまま継続するものもあるが、１ｂ土坑掘削前に掘り下げ、坪境畦畔の位置を確認した例も見られる。

十六ノ坪内東側段差は、第２－１面の水路で第１ｂ層の堆積が止まり、それより東側の第１ｂ層の堆積は薄く、結果として東へ落ちる段差の高低差が拡大する。第１層時点では水路の東側に里道があり、そこから東に落ちる段差となっていた。それ以降、里道には盛土が追加され現代に至る。

今回の調査では、第１ｂ面以上から切り込む井戸を３基検出したが、いずれも井戸枠材が、台を備えた回転刃鋸で製材された事が分かり、近世に遡るものはなかった。当遺跡で耕地内に井戸が増加するのは、大和川付け替え以降の事と思われるが、調査範囲内では、その傾向は見られないと言える。

第１ｂ層の堆積時期は、今回の調査では 18世紀後半以降としか言えないが、既往の調査から 19世紀初頭の洪水によるものである可能性が高いとされている。

最後に

以上、調査成果と問題点をまとめたが、今回の調査で三つの大きな問題が顕在化してきたと言える。

一つは共通基本層序や、堆積に関する認識、流路の判別など、考古学的技能・認識の問題である。

当遺跡の治水緑地建設に伴い長年継続してきた調査で、沖積平野における耕作地遺構の調査方法に関するノウハウが確立してきたと言える。しかし、せっかく遺跡全体で層位的な把握が可能な共通基本層序を構築するいう意欲的な試みが為されたものの、個々の調査での認識の違いの検討・是正が不充分なまま調査が進行した結果、同時期的な遺構面の認識が困難なほど、様々な問題が表出してきた。

今回は節目として、せめて池島Ⅱ期地区の基本層序の整理を行おうと努力したが、どの調査区で問題が生じたかを遡及する事が困難な場合が多く、至らない結果となった。何冊もの報告書に目を通し気づくのは、層や堆積に対する認識の違いの大きさと、既往の調査の成果を批判検証する事が少なく、むしろ無理をしても整合させようとする論理の組み立ての多さである。広い範囲の調査で共通の基本層序を構築するには、一つの調査毎に、複数者による現場での検討が継続的に行われ、常に全ての調査者が最低限の共通認識を持っていなければできない事と思われる。

二つめは、遺跡内で特に東西の、微地形の変遷の違いとそれに対応した遺構の在り方の違いが明確化してきた事である。治水緑地建設に伴う調査が福万寺Ⅰ期地区から始まり、その成果を受けて調査が進行してきたのでなかなか意識されなかったが、池島Ⅱ期地区の調査の進展により、生駒西麓から流下する小河川の影響が強い遺跡東部と、大和川旧流路の影響下にある西部との違いが認識できてきた。

微高地の形成がより早く、その結果その上に弥生時代前期・中期の居住域が形成された東部と、それよりは低湿な環境で、弥生時代中期には流路の変遷が激しく、後期に入り安定してくる西部。その後、流路を埋積した微高地上に古墳時代居住域が進出する西部に対し、相対的に高い地形になり、弥生時代後期から平安時代まで堆積が少ない東部。条里制地割り施行後は、粗粒堆積物が多く、島畠盛土も砂層の西部と、堆積物が細粒で少なく、島畠盛土も粘質土の東部、という違いが見えてきた。

その状況から見れば、遺跡南部の、中世以来の集落に近い福万寺Ⅱ期地区も、調査が進展すれば遺跡内南北の状況の違いが見えてくるかもしれない。

三つめは、08‐2調査区の弥生時代前期居住域に続き、今回の調査で弥生時代中期居住域の存在も明らかになった事である。池島・福万寺遺跡は、弥生時代から現代に至る、耕地を主とした土地利用の変遷が広範囲で明らかになった遺跡として知られるが、弥生時代に耕地を開発・維持した集団の居住域の一端が明らかになり、ようやく、集落と耕地という複合体から当時の地域社会を解明する資料が蓄積され始めたと言える。だが、弥生時代の二つの居住域はどちらも、まだ集落の一部分を調査したにすぎない状況であり、池島Ⅱ期地区の未調査部分に集落の中心部分が眠っている可能性が高い。

今回は、現場での調査を終え、整理作業、報告書作成作業に入った後、長期間連綿と続いてきた治水緑地建設に伴う調査が、これを最後に一旦中断する事が明確となった。

未調査部分の適切な保護がなされる事を願うとともに、いつの日か隣接地が調査される際、この報告書が寄与するところが多ければ幸いであると思う。

参考文献

本文全体で、自然環境、遺物の編年的位置づけなどの参考にしたものである。

環境

川瀬金次郎　横山栄造　松井慎　1972年『写真図鑑　日本の水田土壌』 講談社

市原実　他　1978年『アーバンクボタ』No.16　アーバンクボタ編集室

高橋学　2003年『平野の環境考古学』 古今書院

井上智博　2010年「池島・福万寺遺跡周辺における表層地形の形成過程」『大阪文化財研究』第36号　財団法人大阪府文化財センター

井上智博　2011年「池島・福万寺遺跡周辺における表層地形の形成過程２」『大阪文化財研究』第39号　公益財団法人大阪府文化財センター

地域史

北崎豊二　他　2005年『郷土史　六萬寺』 六万寺郷土研究会

藤井直正　1997年『郷土史のたのしみ』 財団法人　東大阪文化財協会

遺物編年

大川清　鈴木公雄　工楽善通　1996年『日本土器事典』 雄山閣

寺沢薫　森岡秀人　他　1989年『弥生土器の様式と編年　―近畿編Ⅰ―』 木耳社

寺沢薫　森岡秀人　他　1990年『弥生土器の様式と編年　―近畿編Ⅱ―』 木耳社

中村浩　他　1978年『陶邑　Ⅲ』 財団法人大阪文化財センター

田辺昭三　他　1966年『陶邑古窯址群Ⅰ』 平安学園考古学クラブ

相原嘉之　1997年「Ⅰ　大和　飛鳥・藤原地域の土器」『古代の土器５－１』 古代の土器研究会

三宮昌弘　2005年「船橋遺跡飛鳥時代前半期の土器群の検討」『大阪文化財研究』第28号　財団法人大阪府文化財センター

大村敬通　水口富夫　1983年『魚住古窯跡群』 兵庫県教育委員会

小森俊寛　他　1993年『平安京提要』 古代学協会・古代学研究所　角川書店

三宮昌弘　2003年「平安時代の粗製土師器椀について」『郡戸遺跡』 財団法人大阪府文化財センター

尾上実　他　1995年『概説　中世の土器・陶磁器』 真陽社

鋤柄俊夫　1995年「大阪府南部の瓦質土器生産（１）」『日置荘遺跡』財団法人大阪文化財センター

菅原正明　1983年「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢　奈良国立文化財研究所創立30周年記念論集』 奈良文化財研究所

續伸一郎　2007年「瓦器から瓦質へ　―堺市域の出土資料を中心として―」大阪府歴史学会例会資料

大橋康二　他　2000年『九州陶磁の編年　―九州近世陶磁学会10周年記念―』 九州近世陶磁学会

柿田富造　1992年「土管使用の変遷　―古代から明治まで―」『常滑市民俗資料館　研究紀要』Ⅴ　常滑市教育委員会

当遺跡の報告書（主に引用・参考にしたもののみ示す）

廣瀬時習　他　2007年『池島・福万寺遺跡３』 財団法人大阪府文化財センター

田中龍男　他　2008年『池島・福万寺遺跡５』 財団法人大阪府文化財センター

内田真雄　2008年『池島・福万寺遺跡７』 財団法人大阪府文化財センター

廣瀬時習　他　2009年『池島・福万寺遺跡９』 財団法人大阪府文化財センター

島崎久恵　2011年『池島・福万寺遺跡11』 財団法人大阪府文化財センター

後藤信義　井西貴子　他　2011年『池島・福万寺遺跡13』 公益財団法人大阪府文化財センター

遺物観察表

残存率はおおまかな目安程度、5%刻みである。
胎土内砂粒は、大が0.5㎜以上、小が0.5㎜未満、各々多いもの順である。
調整は一番多い面積を占めるものと、その一つ前の調整を記載。

図番号	図版	種別・器種	残存率	法量(cm)	胎土内砂粒	色調	調整・文様	備考
10-1		陶器 椀	全体40% 口縁周10% 高台周100%	器高6.7 復元口径9.0 高台径4.4	やや粗 砂粒なし	釉{10YR7/4 断{10YR8/2	外{施釉 内{施釉	
10-2	45-1	陶器 椀	全体10%以下 高台周100%	残存高1.4 高台径5.0	砂粒なし	釉{2.5Y7/2 露{2.5Y8/2 断{2.5Y8/2	外{施釉 内{施釉	「吉・小松」と陰刻
10-3	45-4	磁器 染付碗	全体35% 口縁周10% 高台周50%	器高6.95復元 口径11.0復元 高台径4.5		釉{10BG6/1 断{10Y8/1	外{施釉 内{施釉	
10-4		磁器 染付碗	全体30% 高台周100%	残存高3.1 高台径3.9~3.8		釉{7.5GY8/1	外{施釉 内{施釉	
10-5		磁器 染付湯呑碗	全体20% 口縁周20%	器高4.75 復元口径8.9 復元底径3.5			外{施釉 内{施釉	
10-6		磁器 染付碗	全体20% 高台周35%	残存高5.1 高台径4.2			外{施釉 内{施釉	
10-7	45-2	いぶし 軒丸瓦	瓦頭25%	復元瓦頭径 13.6	大{石英、長石 小{長石、石英、黒雲母、黒色砂粒	外{N5/0 内{N5/0 断{N6/0	外{ナデ 内{ナデ 文{巴文	
11	45-3	サヌカイト 剥片		最大長5.0 重さ20.6g		風化度(弱)		
13-1	46-1	施釉土師質土器 灯明皿	全体70%	残存高4.2 底径4.1	大{石英 小{石英、黒色砂粒？、赤色粒	釉{2.5Y8/3 露{5YR6/6 断{7.5YR7/3	外{施釉・糸切り未調整 内{施釉	
13-2	46-2	磁器 染付茶杓立て	全体不明 底部周100%	残存高5.9 底径4.5			外{施釉 内{右下がりナデ・ユビナデ 文{沈線文	
13-3	45-5	ガラス製 高杯形？ミニチュア？	全体90% 口縁周95% 底部周60%	器高2.9~2.6 口径3.9 底径2.2		透明		
13-4	47-1	石製品 砥石	不明	残存長5.8 残存幅3.9 厚さ0.6				
13-5	47-2	陶器　常滑?信楽? 甕	全体10%以下	残存高8.4	大{長石、黒色粒、石英 小{石英、黒色粒、長石	釉{7.5Y5/3 露{7.5Y5/4 断{5Y7/1	外{施釉・回転ナデ 内{施釉・回転ナデ	
13-6	46-3	瓦質土器 土管	全体95%	器高32.0 復元口径11.4 底径8.7	大{石英、長石、赤色粒 小{石英、長石	外{N4/0 内{N2/0 断{2.5Y8/3	外{ヨコナデ・タテナデ 内{布目・シボリ痕	
14-1	47-3	陶器 唐津? 椀	全体10% 高台周25%	器高4.8復元 口径12.6復元 高台径4.7		釉{5Y7/2 露{7.5YR6/6 断{2.5YR8/2	外{施釉 内{施釉	
14-2	47-4	陶器 (飴釉) 腰折椀	全体10% 口縁周25%	残存高3.3 復元口径11.1		釉{2.5Y4/6 露{2.5Y7/1	外{施釉・回転ケズリ 内{施釉	
14-3	48-1	陶器 皿	全体45%	器高3.1 復元口径10.0 底径4.7		釉{2.5Y8/1 露{5YR6/6 断{5YR6/6	外{施釉・回転ナデ 内{施釉・回転ナデ	

図番号	図版	種別・器種	残存率	法量(cm)	胎土内砂粒	色調	調整・文様	備考
14-4	48-2	磁器 染付皿	全体35% 高台周50%	残存高2.4 高台径5.8			外{施釉 内{施釉	
14-5	48-3	陶器 備前 壺	全体10%以下	残存高5.4 復元口径5.4	大{石英、長石	外{7.5YR5/4 内{2.5Y6/3 断{2.5Y6/1	外{回転ナデ 内{回転ナデ	
14-6		須恵器 東幡系 こね鉢	全体10%以下	残存高4.0	小{長石、黒色砂粒、石英	外{N8/0 内{7.5Y7/1 断{7.5Y7/1	外{ナデ 内{布ナデ	
14-7	48-4	土師器？ 羽釜	全体10%以下	残存高4.2	大{石英、長石、泥岩 小{長石、石英	外{2.5Y5/6 内{5YR6/6 断{5YR6/4	外{回転ナデ 内{回転ナデ	二次的被火 ？
14-8	48-5	土師器 灯明皿	全体25% 口縁周20%	残存高1.2 口径7.4	大{赤色粒、長石 小{長石、赤色粒、黒雲母	外{2.5Y5/2 内{2.5Y6/2 断{10YR6/3	外{ユビオサエ後ナデ 内{ヨコナデ	
14-9	49-1	石製品 砂岩製 砥石	全体60%?	残存長10.0 幅5.2 厚さ2.3				
14-10	49-2	白磁 皿	全体60% 口縁周20% 高台周100%	器高2.0 復元口径8.2 高台径3.8	小{黒色粒	外{2.5Y7/1 内{2.5Y7/1 断{2.5Y8/1	外{施釉・回転ケズリ 内{施釉	
14-11	48-6	木製品 用途不明品	不明	長さ16.6 幅2.1 厚さ0.9			工具痕あり 柾目取り	
14-12	49-3	須恵質 平瓦	不明	残存長10.2 残存幅7.7 残存高3.8	大{黒色粒、石英、長石 1㎜前後の石英上下面に多し	上{N6/0 下{N6/0 断{N6/0	上{布目 下{縄目 端{ヘラ切り・ナデ	
14-13		須恵器 擂鉢	全体10%以下　口縁周10%以下	残存高5.2 復元口径34.0	大{長石、黒色粒、石英 小{長石、黒色粒	外{7.5Y5/1 内{N6/0 断{N7/0	外{回転ナデ 内{回転ナデ・カキメ	
14-14	49-4	須恵質 平瓦？ 塼?	全体10%以下	残存高3.8	大{石英、長石、黒色粒 小{長石、石英	上{5PB4/1 下{5PB4/1 断{5PB5/1	上{ハケ・ナデ 下{ナデ	
14-15		須恵器 こね鉢	全体10%以下	残存高3.3	大{長石、石英、チャート、黒色砂粒　小{長石、石英、チャート、黒色砂粒	外{5Y5/1 内{5Y6/1 断{5Y6/1	外{ヨコナデ 内{ヨコナデ・左上がりナデ	
14-16		瓦質土器 擂鉢	全体10%以下	残存高6.4	大{長石、石英 小{同上	外{N3/0 内{N4/0 断{N9/0	外{ナデ・ハケ 内{ナデ	内面二次的被火
14-17	50-1	土師器 灯明皿	全体20% 口縁周20%	残存高1.9 復元口径8.0	大{赤色粒、長石、石英 小{赤色粒、長石	外{10YR6/3 内{10YR7/3 断{10YR7/3	外{ユビオサエ後ナデ 内{ヨコナデ	
14-18		土師器 小皿	全体25% 口縁周25%	残存高2.0 復元口径7.4	大{赤色粒、石英、長石、黒雲母 小{赤色粒、長石	外{10YR7/4 内{10YR7/4 断{10YR7/3	外{ユビオサエ後ヨコナデ 内{ユビオサエ後ヨコナデ	
14-19	50-2	金属製品 刀子	不明	長さ7.9 幅1.1 厚さ0.15			一回のみの折り返し鍛造	
15	50-3	木製品 織機 枷	不明	残存長23.5 残存幅3.8 厚さ1.1			工具痕あり 柾目取り	
21-1		須恵器 甕	全体10%以下 口縁周10%	残存高5.6 復元口径41.2	大{長石、黒色粒、石英 小{長石、黒色砂粒、石英	外{N5/0 内{N7/0 断{N7/0	外{ヨコナデ・タテタタキ 内{ヨコナデ	非陶邑産胎土

図番号	図版	種別・器種	残存率	法量(cm)	胎土内砂粒	色調	調整・文様	備考
21-2		瓦質土器 擂鉢	全体10%以下	残存高2.7	大{長石、赤色粒、石英 小{同上	外{N3/0 内{N3/0 断{5Y8/1	外{ヨコナデ・ヨコケズリ 内{ヨコハケ・カキメ	
21-3		瓦質土器 擂鉢	全体10%以下	残存高5.0	大{石英、長石、黒雲母 小{長石、石英	外{2.5Y7/2 断{7.5YR7/1	外{ヨコケズリ後ヨコナデ 内{左上がりハケ・カキメ	
21-4	50-4	鉄製品 刀子?	不明	長さ9.0 幅1.8 厚さ0.3				
21-5		土師器 小皿	全体20% 口縁周25%	残存高1.0 復元口径8.8	大{赤色粒、石英、長石 小{長石、黒雲母、石英	外{10YR5/3 内{10YR6/3 断{2.5Y7/2	外{ユビオサエ後ナデ 内{ユビオサエ後ヨコナデ	
21-6	50-8	瓦質土器 擂鉢	全体10%以下	残存高4.85	大{石英、長石 小{長石、石英	外{N3/0 内{N3/0 外{10YR7/1	外{ヨコケズリ後ナデ 内{ナデ後カキメ	
21-7		陶器 信楽? こね鉢	全体10%以下 底部周25%	残存高4.25 復元底径5.2	大{石英	外{10YR4/2 内{7.5Y7/1 断{7.5YR6/3	外{タテケズリ後ナデ? 内{タテユビナデ後ナデ・ケズリ	
21-8	50-5	瓦器 椀	全体45%	器高2.7~2.6 復元口径10.2	大{長石、石英、黒色粒 小{長石、黒色粒、石英、黒色砂粒	外{5Y7/1 内{5Y8/1 断{5Y8/1	外{ヨコナデ・ユビオサエ 内{ヨコナデ・右上がりナデ	
21-9		須恵器 壺蓋	全体10% 口縁周20%	残存高1.9 復元口径8.8	大{長石、石英	外{5Y6/1 内{5Y7/1 断{5Y6/1	外{回転ケズリ後回転ナデ 内{回転ナデ	非陶邑産・非一須賀産・非千里産胎土
21-10		須恵器 東播系 こね鉢	全体10%以下	残存高3.1	大{長石、黒色粒、石英 小{長石、黒色粒	外{2.5GY2/1 内{N7/0 断{N7/0	外{ヨコナデ 内{回転ナデ	
21-11	50-6	石製品 砥石	不明	残存長9.2 残存幅3.0 厚さ1.0		表{2.5GY7/1 裏{7.5GY6/1		
21-12		土師器 小皿	全体10%以下 口縁周10%	残存高1.05 復元口径10.0 復元底径9.6	大{赤色粒、石英、長石 小{同上	外{5YR6/4 内{2.5Y6/2 断{10YR7/3	外{ヨコナデ 内{ヨコナデ	
21-13		土師器 小皿	全体10% 口縁周20%	残存高2.2 復元口径9.1	大{赤色粒、黒雲母、石英 小{黒雲母、長石、石英	外{7.5YR6/4 内{2.5YR6/6 断{7.5YR7/4	外{ユビオサエ後ヨコナデ 内{ユビオサエ後ヨコナデ	
21-14	52-2	須恵器 坏	全体20% 口縁周20%	残存高3.2 復元口径10.6	大{長石、黒色粒、石英 小{長石、黒色粒	外{N7/0 内{N6/0 断{N7/0	外{回転ナデ・回転ケズリ後ナデ 内{回転ナデ	陶邑産胎土?
21-15	51-4	須恵器 壺	全体不明 頸部周100%	残存高6.5 頸部径6.4~5.1	大{長石、石英 小{石英、長石	外{10Y7/1 内{7.5Y7/1 断{7.5Y7/1	外{回転ナデ 内{回転ナデ	
21-16	50-7	土師器 坏	全体10%以下 口縁周15%	残存高2.7 復元口径2.7	大{赤色粒、長石、石英 精良な胎土	外{7.5YR7/6 内{7.5YR7/6 断{7.5YR5/6	外{ヨコナデ・ゆるいナデ? 内{ヨコナデ	
21-17	51-1	瓦器 小皿	全体25% 口縁周15%	残存高1.8 復元口径8.0	大{長石、石英 小{長石	外{N3/0 内{N4/0 断{N8/0	外{ユビオサエ後粗いナデ 内{ヨコナデ後ミガキ	
21-18	51-3	青磁 鉢	全体不明 高台周50%	残存高2.4		釉{10Y5/2 露{5Y7/2 断{2.5Y8/1	外{施釉 内{施釉 文{草花文	
21-19		黒色土器 A類 椀	全体10% 底部周20%	残存高1.5 復元底径6.1	大{石英、長石、角閃石、黒雲母　小{長石、角閃石、黒雲母、石英	外{10YR6/2 内{N2/0 断{10YR5/4	外{ナデ後ヨコナデ 内{ナデ	

図番号	図版	種別・器種	残存率	法量(cm)	胎土内砂粒	色調	調整・文様	備考
21-20	51-2	土製品 土錘	全体40%	長さ4.7 幅4.0 厚さ1.6	小{赤色粒、長石、石英、 黒雲母 精良な胎土	外{2.5Y8/2 内{2.5Y8/2 断{2.5Y8/2	外{ユビオサエ・ユビナデ 端{ユビオサエ	
21-21	52-1	瓦器 椀	全体10%以下 高台周40%	残存高1.1 底径5.6	大{長石、石英 小{長石	外{N4/0 内{N3/0 断{2.5Y8/1	外{ヨコナデ・ゆるいナデ 内{ナデ 文{暗文(斜格子)	
25-1	52-3	白磁 皿	全体25%	器高2.9 復元口径7.8 復元底径3.6			外{施釉・回転ナデ 内{施釉	「住」と墨書
25-2	53-1	白磁 盒子	全体10%以下	器高2.25 復元底径8.0 ~7.0			外{施釉 内{施釉	
25-3	53-2	白磁 碗	全体10%以下	残存高2.5			外{施釉 内{施釉	
25-4	53-4	青磁 碗	全体10%以下 高台周50%	残存高2.0 復元底径5.6		釉{10Y6/2 露{7.5Y7/1 断{7.5Y7/1	外{施釉 内{施釉	龍泉窯系
25-5	53-3	青磁 碗	全体10%以下	残存高3.3		釉{5Y7/2 断{5Y8/1	外{施釉 内{施釉 文{沈線文	
25-6		青磁 碗	全体10%以下	残存高3.6		釉{2.5GY6/1 断{N8/0	外{施釉 内{施釉	
25-7		土師器 小皿	全体25%	器高2.2 復元口径7.4	小{長石、石英、赤色粒 精良な胎土	外{7.5YR7/6 内{7.5YR7/6 断{7.5YR7/6	外{ヨコナデ・ナデ 内{ヨコナデ	
25-8	53-5	土師器 小皿	全体15%	器高2.1 復元口径8.3	大{長石、赤色粒	外{2.5Y8/1 内{2.5Y8/1 断{2.5Y8/1	外{ヨコナデ・ナデ 内{ヨコナデ・ナデ	
25-9		土師器 小皿	全体25%	器高2.0 復元口径8.8	小{長石、石英	外{10YR7/4 内{10YR7/4 断{2.5Y7/2	外{ユビナデ 内{ユビナデ・ナデ	
25-10	53-6	土師器 坏	全体10% 口縁周20%	残存高1.9 復元口径11.8	大{赤色粒、長石、石英 小{赤色粒、長石	外{10YR7/3 内{10YR7/3 断{10YR7/3	外{ヨコナデ・ナデ 内{ヨコナデ・ナデ	
25-11	52-4	土師器 高坏	全体30%	残存高5.5	大{長石、石英、赤色粒 小{長石、石英 精良な胎土	外{5YR7/6 内{7.5YR7/4 断{5YR7/6	外{ユビナデ・タテナデ 内{シボリ痕	
25-12	52-5	瓦器 小皿	全体20%	残存高1.9 復元口径10.3	大{長石、石英 小{同上	外{N4/0 内{N3/0 断{2.5Y8/1	外{ヨコナデ・粗いナデ 内{ヨコナデ(ナデ上げ)・ナデ後ヨコミガキ	
25-13	52-6	瓦器 椀	全体50%	器高3.8 復元口径11.2 復元底径3.6	大{長石、石英、チャート 小{長石、黒色粒	外{N4/0 内{N4/0 断{N8/0	外{ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ 内{ナデ後粗いミガキ	
25-14	53-7	瓦器 和泉型 椀	全体30%	器高3.0 復元口径12.1復元高台径3.8	小{長石、石英	外{N5/0 内{N5/0 断{5Y8/1	外{無調整?・ヨコナデ 内{ヨコナデ・ヨコミガキ	
25-15		須恵器 坏	全体10%以下	残存高1.6 復元底径9.0	大{長石、黒色粒 小{長石、黒色粒、石英	外{N7/0 内{N7/0 断{N7/0	外{回転ナデ 内{回転ナデ	
25-16	53-9	須恵器 蓋坏	全体30%	器高3.9 復元口径13.2 底径6.0	大{長石、石英 小{同上	外{N6/0 内{5B7/1 断{5PB5/1	外{回転ナデ・回転ケズリ 内{回転ナデ	

図番号	図版	種別・器種	残存率	法量(cm)	胎土内砂粒	色調	調整・文様	備考
25-17	53-10	漆器 椀	全体10%以下	残存高1.0 復元底径7.3			外{黒漆後赤漆・高台内黒漆 内{黒漆後赤漆	
25-18	53-11	木製品 曲げ物 底板	全体不明 周50%	残存長6.0 最大径13.75 厚さ0.85			工具痕あり 柾目取り 円孔(貫通)4箇所	
25-19	53-8	瓦質土器 羽釜	全体10%以下	残存高4.4	大{石英、長石、チャート 小{長石、石英	外{5YR6/3 内{2.5Y6/6 断{2.5YR6/4	外{ヨコナデ・ケズリ 内{ヨコハケ後ナデ	
25-20	54-1	瓦質土器 羽釜	全体10%以下	残存高3.5	大{長石、石英 小{同上	外{N4/0 内{N4/0 断{2.5Y7/1	外{ヨコナデ・ケズリ 内{ヨコナデ後ミガキ	
25-21	54-2	瓦質土器? 擂鉢	全体10%以下	残存高4.2	大{石英、長石、チャート 小{長石、石英	外{2.5Y6/2 内{10YR6/2 断{10YR8/2	外{ヨコケズリ 内{ヨコナデ後カキメ	二次的被火？
25-22	54-3	須恵器 東播系 こね鉢	全体10%以下	残存高5.0	小{長石、石英、チャート 黒色粒	外{5Y6/1 内{N7/0 断{N7/0	外{ヨコナデ 内{ヨコナデ	
25-23		須恵器 東播系 こね鉢	全体10%以下	残存高5.6	大{石英、長石 小{同上	外{N7/0 内{5PB6/1 断{5PB7/1	外{強いユビナデ 内{弱いヨコナデ	
25-24		須恵器 東播系 こね鉢	全体10%以下 底部周30%	残存高7.5 復元底径10.4~10.2	大{長石、石英 小{長石	外{2.5GY6/1 内{7.5GY6/1 断{2.5GY6/1	外{ヨコナデ 内{左上がりナデ	
25-25	54-4	石製品 凝灰岩 砥石	不明	残存長4.6 幅1.8 厚さ1.4		表{2.5Y8/1 裏{2.5Y8/1		
25-26	54-9	銅銭	全体100%	直径2.4 厚さ0.1~0.09				「天聖元寶」
31-1		白磁 碗	全体10%以下	残存高2.3			外{施釉 内{施釉	越州窯系？
31-2		青磁 碗	全体10%以下 口縁周20%	残存高3.65 復元口径14.9		釉{10Y6/2 断{N8/0	外{施釉 内{施釉	龍泉系Ⅳ類？
31-3		青磁 碗	全体10%以下 高台周50%	残存高2.6 復元底径4.8		釉{5GY6/1 露{7.5YR6/3	外{施釉・回転ケズリ 内{施釉・回転ナデ	
31-4		土師器 小皿	全体25% 口縁周25%	残存高1.4 復元口径8.8	大{チャート、石英、黒雲母 小{長石、石英、黒雲母	外{10YR8/4 内{2.5YR6/6 断{10YR8/2	外{ユビオサエ後ヨコナデ 内{ヨコナデ	
31-5		土師器 小皿	全体25%	残存高1.2 復元口径10.4	大{石英 小{石英、長石、青チャート	外{10YR8/2 内{2.5YR8/3 断{2.5Y8/2	外{ヨコナデ・ナデ 内{ナデ	
31-6		土師器 坏	全体25% 口縁周15%	残存高2.2 復元口径12.4	白色系と赤色系の混合粘土　大{赤色粒 小{長石、石英	外{10YR8/3 内{10YR8/3 断{10YR8/3	外{ヨコナデ・粗いナデ？ 内{ヨコナデ・ナデ?	はざみ山・北岡周辺産胎土
31-7	54-5	須恵器 坏蓋	全体20%	器高3.2 復元口径12.2	大{石英、長石 小{長石、石英	外{N6/0 内{N6/0 断{N6/0	外{回転ケズリ・ナデ 内{ナデ・回転ナデ	
31-8	54-6	須恵器 坏蓋	全体15% 口縁周15%	残存高3.5 復元口径13.6	大{石英、長石 小{長石	外{N6/0 内{N6/0 断{N6/0	外{回転ナデ 内{回転ナデ	

図番号	図版	種別・器種	残存率	法量(cm)	胎土内砂粒	色調	調整・文様	備考
31-9		須恵器 蓋坏	全体35% 口縁周25%	残存高4.1 復元口径10.2	大{石英、長石 小{長石、石英	外{N6/0 内{N6/0 断{N6/0	外{回転ナデ・回転ケズリ 内{回転ナデ・ナデ	
31-10	55-1	須恵器 蓋坏	全体70% 口縁周25%	残存高4.9 口径13.5	大{石英、長石	外{N6/0 内{N5/0 断{5P5/1	外{回転ナデ・回転ケズリ 内{回転ナデ	
31-11		瓦器 小皿	全体20% 口縁周20%	残存高1.55 復元口径8.0	大{長石、黒色粒 小{長石	外{N4/0 内{N4/0 断{2.5Y8/1	外{ヨコナデ・粗いナデ 内{ヨコミガキ 文{暗文(平行)	
31-12	54-7	瓦器 小皿	全体30% 口縁周25%	器高2.4 復元口径9.4	ほとんど砂粒なし	外{N1.5/0 内{N5/0 断{N8/0	外{ヨコナデ? 文{暗文(平行)	
31-13	54-8	瓦器 小皿	全体20% 口縁周20%	器高1.5 復元口径9.6	小{赤色粒、黒色の砂粒 精良	外{N7/0 内{N4/0 断{N8/0	外{ヨコナデ・ユビオサエ 内{ナデ後ミガキ	
31-14		須恵器 東播系 こね鉢	全体10%以下	残存高4.2	大{長石、石英、黒色粒 小{長石、石英	外{5B6/0 内{5B6/0 断{5B5/0	外{ヨコナデ 内{ヨコナデ	
31-15		瓦質土器 擂鉢	全体10%以下	残存高5.8	大{長石、石英、チャート 小{長石、石英	外{1.5/0 内{5B7/1 断{8.5Y7/1	外{ヨコケズリ 内{右上がりナデ後カキメ	
31-16	55-4	石製品 凝灰岩 砥石	不明	残存長10.2 幅5.55 厚さ4.0				
31-17	55-2	石製品 花崗岩 磚？	不明	残存長15.5 厚さ4.0				
31-18	55-3	鉄製品 鉄鏃	全体90%	残存高12.3				雁股式
31-19	54-10	石製品 滑石 勾玉	全体100%	長さ2.45 幅1.05 厚さ0.8				
33-1	56-1	土師器 把手	全体不明 把手部100 %	長さ5.3 幅5.15 厚さ4.55	大{石英、長石、角閃石、 黒雲母、チャート 小{同上	上{10YR6/4 下{10YR6/4 断{10YR5/4	上{ユビオサエ・ユビナデ 下{ユビオサエ・ユビナデ	
33-2	56-2	瓦器 椀	全体不明 底部周40%	残存高1.8 復元底径7.2	大{長石、石英 小{同上	外{N4/0 内{N3/0 断{N8/0	外{ヨコナデ・粗いナデ 内{ヨコナデ後ヨコミガキ	
33-3		土師器 小皿	全体10%	残存高1.3 復元口径10.2	大{長石、石英、赤色粒 精良な胎土	外{7.5YR8/3 内{5YR8/4 断{7.5YR8/3	外{摩滅の為不明 内{摩滅の為不明	はざみ山・北 岡産胎土？
33-4	55-5	瓦器 大和型? 椀	全体90% 口縁周65%	器高6.5~5.85 口径14.8~14.1 底径5.8~5.6	大{長石、石英 小{雲母、長石、石英、青 チャート	外{N2/0 内{N2/0 断{N8/0	外{ヨコナデ後右上がりミガキ 内{ナデ後ミガキ 穿孔(貫通)1箇所	
33-5	56-3	瓦器 椀	全体{25% 口縁周25% 高台周20%	器高5.3~5.05 復元口径13. 4	小{黒色粒	外{N4/0 内{N4/0 断{N8/0	外{ヨコミガキ 内{ヨコミガキ 文{暗文(螺旋)	
33-6	56-4	須恵器 提瓶	全体10%以下	復元胴部径 19.4	大{長石、石英 小{同上	外{N5/0 内{N7/0	外{ハケ後回転カキメ・同心円タタキ 内{ユビオサエ・回転ナデ	非陶邑産胎土?
37-1	57-1	打製石器 サヌカイト 石鏃		最大長4.5 重さ5.0g		風化度(弱)		

図番号	図版	種別・器種	残存率	法量(cm)	胎土内砂粒	色調	調整・文様	備考
37-2		土師器 小皿	全体25% 口縁周20%	器高1.3 復元口径8.0 復元底径5.6	大{長石 小{長石、石英、角閃石	外{7.5YR5/3 内{10YR7/3 断{10YR6/3	外{ユビオサエ後粗いナデ 内{ヨコナデ	
37-3		須恵器 蓋坏	全体20% 受け部周20% %	器高2.6 復元口径12.4 復元底径7.0	大{長石、石英、黒色粒 小{同上	外{5PB5/1 内{5PB6/1 断{5PB6/1	外{回転ナデ・回転ケズリ 内{回転ナデ・ナデ	
37-4		弥生土器 広口壺? 器台?	全体10%以下 口縁周20%	残存高6.2 復元口径20.8	大{石英、長石、角閃石 小{長石、石英	外{10YR6/3 内{10YR5/3 断{7.5YR5/4	外{タテミガキ 内{剥離の為不明 文{櫛描文	河内低地産 胎土
37-5		土師器? 弥生土器? 壺	全体10%以下	残存高4.9	大{石英、長石、角閃石 小{石英、長石、角閃石、 黒雲母	外{N1.5/0 内{N3/0 断{N5/0	外{ハケ後ナデ 内{ハケ後ナデ 文{波状文	
37-6	58-1	打製石器 サヌカイト 石鏃		最大長5.1 重さ3.3g				鋸歯状刃部
37-7		弥生土器 広口壺	全体10%以下 口縁周20%	残存高6.0 復元口径13.0	大{角閃石、長石、石英 小{角閃石、石英、長石	外{2.5YR5/8 内{2.5YR5/8 断{7.5YR7/4	外{剥離の為不明　内{剥離の為不明　文{「く」の字状沈線文・多条沈線文・櫛描文	讃岐産胎土?
37-8	57-3	弥生土器 甕	全体10% 口縁周25%	残存高15.3 復元口径17.3	大{石英、長石、角閃石、 黒雲母　小{角閃石、長石、 石英、黒雲母	外{10YR5/3 内{10YR5/3 断{10YR5/2	外{ヨコミガキ後タテミガキ 内{右上がりミガキ後タテミガキ	生駒西麓産 胎土
37-9	57-2	石製品 砂岩 台石?	不明	残存長17.9 厚さ3.0				
41	57-4	弥生土器 甕	全体40% 口縁周20% 底部周100%	器高30.1復元 口径22.2復元 底径7.2~7.0	大{角閃石、石英、長石、 黒雲母 小{同上	外{7.5YR3/2 内{10YR3/1 断{10YR3/1	外{左下がりハケ後左上がりミガキ　内{ユビオサエ後ナデ　文{刻み目	生駒西麓産 胎土
49-1	58-2	弥生土器 壺	全体30% 底部周75%	残存高13.3 底径8.4	大{石英、長石、黒雲母、 角閃石、赤色粒　小{長石、 石英、黒雲母	外{10YR5/3 内{10YR6/4 断{10YR6/4	外{左上がりミガキ 内{ハケ・ミガキ	河内低地産 胎土
49-2		弥生土器 壺	全体不明 口縁周10%	残存高3.05 復元口径19.1	大{石英、長石、黒雲母、 角閃石　小{長石、石英、 黒雲母、角閃石	外{10YR6/3 内{N3/0 断{N3/0	外{ヨコナデ?・タテナデ? 内{ヨコナデ後ヨコミガキ	河内低地産 胎土
49-3	58-3	弥生土器 甕	全体不明 底部周100%	残存高4.65 底径6.5~6.1	大{長石、石英、角閃石、 黒雲母 小{角閃石、長石、黒雲母	外{2.5Y5/2 内{10YR4/2 断{2.5Y5/2	外{ユビオサエ後タテナデ 内{ヨコハケ	生駒西麓産 胎土
49-4	58-4	打製石器 サヌカイト 掻器		最大長10.0 重さ103.9g		風化度(弱)		
51	59-1	木製品 一木鋤	不明	残存長62.4 残存幅12.7 厚さ3.7			工具痕あり 板目取り	アカガシ亜属 製
52-1		サヌカイト 剥片		最大長4.35 重さ8.4g		風化度(弱)		
52-2		サヌカイト チップ		最大長2.7 重さ3.0g		風化度(弱)		
52-3		サヌカイト 石核		最大長6.7 重さ62.0g		風化度(中)		
52-4		サヌカイト 石核(二次加工)		最大長9.0 重さ224.4g		風化度(弱)		

図番号	図版	種別・器種	残存率	法量(cm)	胎土内砂粒	色調	調整・文様	備考
52-5	58-5	サヌカイト 石核		最大長9.5 重さ116.7g		風化度(弱)		
55-1		弥生土器 細頸壺	全体10%以下	残存高7.3	大{石英、長石、角閃石 小{角閃石、長石、石英	外{10YR5/4 内{10YR4/4 断{10YR5/3	内{タテミガキ・ヨコミガキ 文{櫛描文	生駒西麓産胎土
55-2	60-1	弥生土器 壺?	全体10%以下 底部周60%	残存高4.9 底径8.7	大{石英、長石、角閃石、黒雲母　小{角閃石、長石、黒雲母、石英	外{10R4/6 内{10YR5/4 断{10YR5/6	外{ヨコナデ 内{ヨコユビナデ	生駒西麓産胎土
55-3		弥生土器 甕	全体10%以下	残存高9.5	大{角閃石、石英、長石、黒雲母、閃緑岩　小{角閃石、黒雲母、長石、石英	外{7.5YR4/3 内{10YR5/3 断{10YR5/3	外{ヨコハケ・タテハケ 内{ナデ後タテミガキ	生駒西麓産胎土
55-4	60-2	弥生土器 甕	全体10%以下 口縁周20%	残存高6.3 復元口径18.4	大{角閃石、長石、石英、黒雲母、赤色粒　小{角閃石、石英、長石、黒雲母	外{10YR5/3 内{10YR5/3 断{7.5YR5/3	外{ヨコナデ 内{タテユビナデ・ハケ 文{刻み目	生駒西麓産胎土
55-5	60-3	弥生土器 甕	全体60% 口縁周90%	残存高15.1 口径17.1	大{石英、長石、角閃石、黒雲母　小{角閃石、長石、石英、黒雲母	外{5YR5/6 内{2.5YR4/6 断{10YR4/2	外{ヨコナデ・タテミガキ 内{ヨコナデ・右上がりナデ	生駒西麓産胎土
55-6	60-4	弥生土器 甕	全体30% 底部周100%	残存高20.25 復元口径21.6 底径5.2	大{石英、長石、角閃石、黒雲母　小{角閃石、長石、石英、黒雲母	外{7.5YR4/3 内{10YR4/2 断{7.5YR5/3	外{タテハケ後右上がりミガキ 内{ユビナデ後左上がりナデ 穿孔(貫通)1箇所	生駒西麓産胎土
56-1	61-1	打製石器 サヌカイト 石剣		最大長15.05 重さ58.5g		風化度(弱)		
56-2	60-5	打製石器 サヌカイト 石匙		最大長6.1 重さ12.2g		風化度(弱)		
56-3		サヌカイト 剥片		最大長4.45 重さ2.5g		風化度(弱)		
57-1	62-1	手づくね ミニチュア 土器	全体90%	口径6.8 器高4.35	大{角閃石、長石、石英、黒雲母　小{角閃石、長石、黒雲母、石英	外{2.5Y6/2 内{10YR5/4 断{10YR3/1	外{ユビオサエ後ユビナデ 内{ユビオサエ後ユビナデ	生駒西麓産胎土
57-2	62-2	弥生土器 ミニチュア 鉢	全体50% 口縁周20% 底部周100%	器高4.4 口径5.8 底径3.0	大{石英、長石、角閃石、黒雲母　小{長石、角閃石、石英、黒雲母	外{10YR5/4 内{10YR5/4 断{10YR5/2	外{ユビオサエ・ユビナデ 内{ヨコナデ・ユビオサエ 文{櫛描文	生駒西麓産胎土
57-3		弥生土器 鉢	全体10% 口縁周20%	残存高5.5 復元口径15.8	大{石英、長石 小{長石、石英、黒雲母	外{7.5YR6/6 内{5YR6/6 断{5YR6/6	外{ミガキ? 内{左下がりミガキ	
57-4		弥生土器 甕	全体25% 口縁周40%	残存高12.4 復元口径22.4	大{石英、長石、黒雲母、角閃石 小{同上	外{10YR6/2 内{10YR6/3 断{10R6/4	外{ハケ後ナデ・タテミガキ 内{ユビナデ・ハケ後ナデ	生駒西麓産胎土
57-5	62-3	弥生土器 無頸壺	全体10%以下	残存高3.8	大{石英、長石、青チャート、泥岩、角閃石 小{角閃石、黒雲母、長石	外{10YR5/3 内{10YR4/2 断{10YR5/2	外{ヨコナデ 内{ユビオサエ後ナデ 文{櫛描文	河内低地産胎土?
57-6	62-4	弥生土器 壺	全体10%以下 底部周100%	残存高6.4 底径11.0	大{石英、長石、赤チャート、黒色片岩? 小{石英、長石	外{7.5YR4/1 内{7.5YR6/6 断{10YR5/1	外{タテミガキ 内{ハケ後ナデ	他地域産胎土
57-7		弥生土器 広口壺	全体10%以下	残存高7.1	大{石英、長石、青チャート、角閃石、黒雲母　小{石英、長石、黒雲母、角閃石	外{7.5YR4/1 内{7.5YR2/1 断{7.5YR3/1	外{ヨコナデ 内{右上がりハケ 文{多重沈線文・櫛描文	河内低地産胎土
57-8		弥生土器 壺	全体10%以下	残存高9.5	大{石英、長石、チャート、黒雲母 小{石英、長石	外{7.5YR7/4 内{10YR6/3 断{10YR6/1	外{ハケ後ヨコナデ 内{ミガキ・ナデ 文{多条沈線文	

図番号	図版	種別・器種	残存率	法量(cm)	胎土内砂粒	色調	調整・文様	備考
57-9	62-5	弥生土器 蓋	全体80%	残存高8.7 天井部径6.2	大{石英、長石、角閃石、 黒雲母 小{角閃石、長石、石英	外{10YR6/4 内{10YR3/1 断{10YR5/1	外{ハケ後右上がりミガキ 内{ハケ後ミガキ	生駒西麓産 胎土
57-10	62-6	弥生土器 広口壺	全体10%以下 口縁周35%	残存高7.2 復元口径22.8	大{石英、長石、角閃石、 黒雲母 小{長石、石英、角閃石	外{10YR5/2 内{N2/0 断{7.5YR5/6	外{左上がりハケ 内{ヨコハケ後ナデ・ユビナデ 文{布目の圧痕・櫛描文	生駒西麓産 胎土
58-1	62-8	打製石器 サヌカイト 石鏃		最大長6.25 重さ4.1g		風化度(弱)		長三角有茎 式
58-2	62-7	打製石器 サヌカイト 石鏃		最大長4.9 重さ3.7g		風化度(弱)		長三角凹基 式
58-3	63-1	打製石器 サヌカイト 石鏃		最大長3.65 重さ6.1g		風化度(弱)		未製品
58-4	63-2	打製石器 サヌカイト 石鏃?		最大長3.8 重さ3.3g		風化度(弱)		未製品?
58-5		サヌカイト 剥片(二 次加工)		最大長5.1 重さ17.5g		風化度(弱)		
59-1	63-3	打製石器 サヌカイト 掻器		最大長6.45 重さ32.3g		風化度(弱)		
59-2	63-4	打製石器 サヌカイト 掻器		最大長6.9 重さ30.5g		風化度(弱)		
59-3	63-5	打製石器 サヌカイト 掻器		最大長6.7 重さ38.1g		風化度(弱)		
60-1	64-1	サヌカイト 石核		最大長12.15 重さ246.2g		風化度(弱)		
60-2	64-2	サヌカイト 剥片		最大長5.1 重さ45.8g		風化度(弱)		
60-3		サヌカイト チップ		最大長6.58 重さ49.7g		風化度(弱)		打撃面形成
64		石製品 閃緑岩 炉内台石	全体100%	長さ18.4 幅19.3 厚さ11.4				
67-1	64-3	弥生土器 壺	全体20% 底部周90%	残存高10.3 復元底径9.6	大{石英、長石、黒雲母 小{長石、石英、黒雲母、 角閃石	外{10YR5/6 内{10YR4/6 断{10YR4/6	外{ヨコハケ後タテハケ 内{ナデ・ユビナデ 文{櫛描文	河内低地産 胎土
67-2	64-4	弥生土器 壺	全体20% 底部周100%	残存高9.2 底径7.2~7.0	大{石英、長石、角閃石 小{長石、石英、黒雲母、 角閃石	外{5YR5/4 内{2.5Y5/2 断{2.5YR5/2	外{右下がりナデ後ミガキ 内{左上がりナデ	河内低地産 胎土
67-3	64-5	弥生土器 壺	全体30% 底部周100%	残存高10.0 底径8.5~7.5	大{石英、長石、チャート 小{長石、石英、黒雲母	外{2.5Y5/4 内{2.5Y3/2 断{2.5Y6/4	外{ヨコミガキ 内{ヨコミガキ	摂津産胎土
67-4	64-6	弥生土器 蓋	全体40%	残存高9.9 天井部径5.6	大{石英、長石、角閃石 小{長石、角閃石、黒雲母 赤色粒	外{2.5Y5/3 内{7.7YR4/3 断{10YR6/2	外{右下がりハケ後右下がり ナデ 内{ユビナデ・ナデ	

図番号	図版	種別・器種	残存率	法量(cm)	胎土内砂粒	色調	調整・文様	備考
67-5		弥生土器 甕	全体10%以下	残存高5.05	大{角閃石、長石、石英、チャート 小{角閃石、石英、長石	外{7.5YR6/4 内{10YR7/2 断{10YR6/2	外{ヨコハケ後タテハケ 内{ヨコハケ 文{刻み目	河内低地産胎土
67-6		弥生土器 甕	全体10%以下 底部周50%	残存高4.4 復元底径7.6	大{石英、長石、黒雲母、角閃石	外{10YR8/3 内{2.5Y5/1 断{10R6/8	外{タテハケ後ヨコナデ 内{タテナデ	河内低地産胎土
68-1	65-1	石製品 砂岩 砥石	不明	残存長3.95 残存幅2.1 厚さ1.0				
68-2	65-1	サヌカイト 剥片		最大長4.2 重さ9.5g		風化度(弱)		
68-3	65-1	サヌカイト 剥片		最大長2.65 重さ7.3g		風化度(弱)		
68-4	65-1	サヌカイト 剥片		最大長3.2 重さ2.2g		風化度(弱)		
68-5	65-1	サヌカイト 剥片		最大長4.85 重さ8.3g		風化度(弱)		
68-6	65-1	サヌカイト 剥片		最大長3.7 重さ5.8g		風化度(弱)		
68-7	65-1	サヌカイト チップ		最大長3.1 重さ2.1g		風化度(弱)		
68-8	65-1	サヌカイト チップ		最大長4.4 重さ7.5g		風化度(弱)		剥離面調整
68-9	65-1	サヌカイト チップ		最大長2.85 重さ1.1g		風化度(弱)		
69-1	65-1	サヌカイト 剥片(二次加工)		最大長3.3 重さ7.0g		風化度(弱)		
69-2	65-1	サヌカイト 剥片(二次加工)		最大長5.1 重さ14.0g		風化度(弱)		
69-3	65-1	サヌカイト 石核		最大長4.6 重さ19.8g		風化度(弱)		
69-4	66-1	サヌカイト チップ		最大長4.55 重さ10.9g		風化度(弱)		原礫面除去
71-1	66-3	弥生土器 広口壺	全体10%以下	残存高1.8	大{石英、長石、黒雲母、角閃石 小{角閃石、長石、石英	外{7.5YR5/3 内{10YR5/3 断{7.5YR5/4	外{ヨコナデ 内{ヨコナデ 文{多条沈線文	
71-2		弥生土器 広口壺	全体10%以下	残存高3.8	大{石英、長石、黒雲母、角閃石　小{石英、長石、角閃石、黒雲母	外{7.5YR5/3 内{10YR54/1 断{10YR5/2	外{ヨコハケ・ナデ 内{ヨコハケ 文{多条沈線文	河内低地産胎土?
71-3	66-2	磨製石器 粘板岩? 石斧	不明	残存長2.15 幅2.8 厚さ1.05				扁平片刃石斧

図番号	図版	種別・器種	残存率	法量(cm)	胎土内砂粒	色調	調整・文様	備考
71-4		弥生土器 壺	全体10%以下	残存高9.9	大{石英、長石、黒雲母、 角閃石、赤色粒 小{長石、石英、黒雲母	外{10YR5/4 内{10YR5/4 断{10YR5/4	外{ハケ後ナデ 内{ユビナデ 文{櫛描文	河内低地産 胎土
71-5		弥生土器 甕	全体10%以下	残存高5.5	大{角閃石、石英、長石、 黒雲母　小{角閃石、長石、 黒雲母、石英	外{黒斑 内{10YR5/3 断{黒斑	外{ユビオサエ・ヨコミガキ 内{ヨコナデ	生駒西麓産 胎土
72-1	67-1	サヌカイト 剥片		最大長4.1 重さ1.8g		風化度(弱)		
72-2	67-1	サヌカイト 剥片		最大長2.5 重さ0.9g		風化度(弱)		
72-3	67-1	サヌカイト 剥片		最大長3.35 重さ1.5g		風化度(弱)		
72-4	67-1	サヌカイト 剥片		最大長2.7 重さ0.6g		風化度(中)		
72-5	67-1	サヌカイト 剥片		最大長2.9 重さ0.9g		風化度(弱)		
72-6	67-1	サヌカイト 剥片		最大長3.1 重さ1.3g		風化度(弱)		
72-7	67-1	サヌカイト 剥片		最大長3.1 重さ1.7g		風化度(弱)		
72-8	67-1	サヌカイト 剥片		最大長2.4 重さ0.5g		風化度(弱)		
72-9	67-1	サヌカイト 剥片		最大長3.1 重さ2.6g		風化度(弱)		
72-10	67-1	サヌカイト 剥片		最大長2.2 重さ1.0g		風化度(弱)		
73-1	67-1	サヌカイト 剥片		最大長1.75 重さ0.3g		風化度(弱)		
73-2	67-1	サヌカイト チップ		最大長2.3 重さ0.6g		風化度(弱)		剥離面調整
73-3	67-1	サヌカイト チップ		最大長2.3 重さ0.7g		風化度(弱)		
73-4	67-1	サヌカイト チップ		最大長3.3 重さ2.0g		風化度(弱)		
73-5	67-1	サヌカイト チップ		最大長2.65 重さ1.0g		風化度(弱)		剥離面調整
78-1	68-1	弥生土器 甕	全体10%以下	残存高13.0	大{石英、長石、黒雲母、 角閃石　小{長石、石英、 黒雲母、角閃石	外{5YR4/4 内{2.5Y5/3 断{N3/0	外{ヨコナデ・右下がりハケ 内{ヨコナデ・右上がりナデ	生駒西麓産 胎土

図番号	図版	種別・器種	残存率	法量(cm)	胎土内砂粒	色調	調整・文様	備考
78-2	68-2	弥生土器 壺	全体30% 底部周100%	残存高6.6 底径6.0	大{角閃石、長石、石英、黒雲母 小{同上	外{10YR6/3 内{10YR5/4 断{10YR5/2	外{タテハケ 内{左上がりハケ後左上がりナデ	生駒西麓産胎土
78-3		弥生土器 壺	全体10%以下	残存高1.8	大{閃緑岩、石英、角閃石、黒雲母、長石 小{長石、角閃石、黒雲母	外{7.5YR5/4 内{7.5YR5/6 断{7.5YR6/4	外{ヨコナデ 内{ヨコミガキ 文{波状文	生駒西麓産胎土
78-4	68-4	弥生土器 壺	全体10%以下	残存高4.1 底径8.6	大{石英、長石、赤色粒、角閃石、黒雲母 小{長石、石英、角閃石	外{10R5/6 内{2.5YR4/4 断{2.5YR4/6	外{右上がりナデ・ヨコナデ 内{左上がりナデ・ツブシ	河内低地産胎土
78-5		弥生土器 壺	全体10% 底部周100%	残存高5.5 底径7.5~7.0	大{石英、長石、黒雲母 小{石英、長石、黒雲母、角閃石	外{ 7.5YR5/6 内{7.5YR6/6 断{10YR7/3	外{タテハケ後ヨコミガキ 内{ナデ後ミガキ	河内低地産胎土?
78-6	68-5	弥生土器 甕	全体10%以下 口縁周15%	残存高10.1 復元口径21.4	大{角閃石、長石、黒雲母、石英 小{角閃石、長石、黒雲母	外{10YR2/2 内{10YR3/2 断{10YR6/4	外{ヨコナデ後右下がりハケ 内{ヨコナデ後左上がりナデ	生駒西麓産胎土
78-7		弥生土器 甕	全体10%以下	残存高8.8	大{角閃石、長石、石英、黒雲母、赤色粒　小{長石、角閃石、黒雲母、石英	外{10YR6/6 内{10YR5/4 断{7.5YR6/3	外{タテハケ 内{ユビオサエ後左上がりナデ	生駒西麓産胎土
78-8		弥生土器 甕	全体15% 口縁周30%	残存高8.6 復元口径18.3	大{角閃石、黒雲母、石英、長石　小{角閃石、黒雲母、長石、石英	外{2.5Y3/2 内{10YR3/2 断{2.5Y6/3	外{ヨコミガキ後タテミガキ 内{タテ(ナデ?ハケ?)後ヨコナデ	生駒西麓産胎土
78-9	68-6	弥生土器 甕	全体10%以下	残存高6.4	大{角閃石、長石、石英、黒雲母　小{角閃石、長石、黒雲母、石英	外{2.5Y5/3 内{2.5Y5/3 断{2.5Y5/3	外{ヨコナデ・左上がりナデ 内{ユビナデ後ヨコミガキ 文{刻み目・多条沈線文	生駒西麓産胎土
78-10	68-3	弥生土器 広口壺	全体10%以下	残存高2.1	大{石英、長石、黒雲母、角閃石 小{角閃石、黒雲母	外{7.5YR6/3 内{10YR6/3 断{10YR5/3	外{ヨコナデ 内{ヨコナデ 文{多条沈線文	生駒西麓産胎土
78-11		弥生土器 甕	全体10% 底部周100%	残存高5.5 底径5.8~5.5	大{角閃石、長石、石英、閃緑岩礫　小{長石、角閃石、石英、黒雲母	外{10YR5/4 内{2.5Y5/3 断{10YR5/4	外{タテナデ後タテミガキ 内{ユビナデ	生駒西麓産胎土
78-12	68-7	弥生土器 壺	全体10%以下	残存高8.2	大{石英、長石、黒雲母、角閃石　小{長石、石英、角閃石、黒雲母	外{7.5YR5/4 内{10YR5/3 断{10YR5/3	外{ヨコナデ 内{ユビナデ・ナデ 文{櫛描文・波状文	生駒西麓産胎土
79-1		弥生土器 甕	全体15% 口縁周30%	残存高11.9 口径19.4	大{長石、チャート、角閃石石英、黒雲母 小{長石、角閃石、石英	外{2.5Y4/1 内{2.5Y5/2 断{2.5Y7/2	外{タテハケ後ヨコナデ 内{ヨコハケ後ヨコナデ・タテナデ	
79-2	69-3	弥生土器 細頸壺	全体60% 口縁周70% 底部周30%	残存高20.3 復元口径9.0	大{黒雲母、角閃石、長石、石英 小{雲母、角閃石、長石	外{7.5YR5/4 内{10YR6/4 断{10YR6/3	外{ヨコナデ・ヨコケズリ 内{ユビオサエ後ユビナデ 文{櫛描流水文	生駒西麓産胎土
79-3	69-4	石製品 閃緑岩 叩き石?	全体100%	長さ19.2 厚さ6.1				
79-4		打製石器 サヌカイト 石鏃		最大長2.5 重さ1.1g		風化度(弱)		未製品
80-1	69-1	サヌカイト 剥片(二次加工)		最大長6.8 重さ34.0g		風化度(弱)		
80-2	69-2	サヌカイト 剥片(二次加工)		最大長6.5 重さ27.9g		風化度(弱)		
85-1	70-1	弥生土器 鉢	全体10%以下	残存長8.9	大{石英、長石、チャート 小{石英、チャート、長石	外{10YR6/4 内{2.5Y6/2 断{2.5Y6/2	外{ナデ 内{ヨコナデ 文{櫛描文・波状文	非河内産胎土

図番号	図版	種別・器種	残存率	法量(cm)	胎土内砂粒	色調	調整・文様	備考
85-2	70-2	弥生土器 壺	全体10% 頸部周50%	残存高11.9	大{角閃石、石英、長石、 黒雲母、閃緑岩　小{角閃 石、石英、長石、黒雲母	外{10YR6/4 内{2.5Y5/2 断{2.5Y5/1	外{ヨコミガキ 内{ユビナデ後タテミガキ 文{多条沈線文	
85-3	70-4	弥生土器 甕	全体30% 口縁周25% 底部周10%	器高18.5 復元口径19.2	大{長石、角閃石、白雲母、 黒雲母、石英　小{長石、 角閃石、石英、黒雲母	外{10YR4/2 内{10YR4/3 断{10YR7/1	外{ヨコハケ後タテナデ 内{ヨコナデ 文{タテ多条沈線文・櫛描文	生駒西麓産 胎土
85-4	71-1	弥生土器 甕	全体80% 口縁周75% 底部周100%	器高25.0 口径19.7 底径7.7	大{長石、石英、黒雲母、 角閃石、赤色粒　小{長石、 角閃石、黒雲母、石英	外{7.5YR7/4 内{10YR4/4 断{2.5Y7/3	外{ヨコハケ後左上がりミガキ 内{ナデ・ハケ	
85-5		弥生土器 壺	全体10%以下 頸部周50%	残存高12.0	大{石英、長石、黒雲母、 赤色粒、黒チャート 小{長石、石英、黒雲母	外{10YR4/2 内{10YR5/3 断{2.5Y7/2	外{タテハケ後ヨコミガキ 内{ユビナデ・ユビオサエ 文{櫛描文	河内低地産 胎土
85-6	70-5	弥生土器 甑	全体10%以下 底部周60%	残存高8.6 底径8.0	大{石英、長石、黒雲母、 角閃石　小{角閃石、長石、 黒雲母、石英	外{10YR4/2 内{10YR5/3 断{10YR5/2	外{タテミガキ 内{ナデ 孔(貫通)1箇所	生駒西麓産 胎土
85-7	71-2	弥生土器 高杯	全体10%以下 口縁周15%	残存高7.0 復元口径22.7	大{石英、長石、黒雲母、 赤色粒、チャート 小{長石、角閃石、黒雲母	外{10YR4/3 内{10YR5/4 断{7.5Y5/6	外{ヨコミガキ 内{ヨコミガキ	河内低地産 胎土?
86-1	70-3	弥生土器 甕	全体20% 口縁周30%	残存高11.5 復元口径19.8	大{長石、石英、黒雲母、 角閃石 小{長石、石英、黒雲母	外{10YR4/2 内{10YR4/2 断{2.5Y5/2	外{ヨコナデ後左上がりミガキ 内{右上がりミガキ後ヨコミガキ	河内低地産 胎土
86-2	71-3	弥生土器 甕	全体10%以下 底部周40%	残存高5.9 復元底径5.9	大{石英、長石、泥岩、黒 雲母、角閃石 小{長石、石英	外{10YR4/3 内{10YR5/3 断{2.5Y5/2	外{タテミガキ・ヨコナデ 内{ナデ	河内低地産 胎土?
86-3		弥生土器 甕	全体10%以下 底部周50%	残存高3.3 復元底径6.6	大{石英、長石、角閃石、 黒雲母 小{長石、石英、黒雲母	外{10YR6/3 内{10YR4/2 断{10YR6/2	外{タテハケ?後タテミガキ 内{ナデ	河内低地産 胎土?
86-4	71-6	弥生土器 壺	全体10%以下 底部周100%	残存高5.3 底径8.7	大{石英、角閃石、長石、 赤チャート、赤色粒 小{角閃石、石英、長石	外{10YR4/2 内{10YR5/3 断{2.5Y6/2	外{タテハケ 内{タテハケ・ヨコハケ	
86-5		弥生土器 壺	全体10%以下 底部周100%	残存高4.75 底径7.2	大{石英、長石、角閃石、 黒雲母、赤色粒　小{角閃 石、石英、長石、黒雲母	外{10YR3/3 内{10YR6/2 断{10YR5/1	外{ナデ後ミガキ 内{ナデ	生駒西麓産 胎土
86-6	71-4	弥生土器 甕	全体30% 口縁周10% 底部周80%	器高24.6 底径6.8~6.6	大{長石、石英、黒雲母、 赤色粒、赤チャート 小{雲母、石英、長石	外{10YR4/3 内{2.5Y6/2 断{10YR6/2	外{左上がりミガキ 内{右上がりミガキ	河内低地産 胎土
86-7	71-5	弥生土器 鉢	全体30% 底部周50%	残存高11.9 復元口径13.2 復元底径5.4	大{角閃石、長石、石英、 黒雲母 小{角閃石、長石、黒雲母	外{7.5YR4/3 内{2.5Y5/2 断{2.5Y5/2	外{ケズリ?後タテナデ 内{左上がりナデ	
86-8	72-1	弥生土器 甕	全体70% 口縁周80% 底部周20%	器高21.5 口径18.8 復元底径6.8	大{角閃石、長石、石英、 小{角閃石、長石	外{10YR4/2 内{10YR5/3 断{2.5Y5/2	外{左上がりミガキ後ヨコミガキ 内{ナデ後タテミガキ	生駒西麓産 胎土
86-9	72-3	弥生土器 甕	全体10%以下 口縁周25%	残存高8.2 復元口径25.3	大{石英、長石、黒雲母、 青チャート、赤色粒 小{石英、長石	外{2.5Y7/3 内{2.5Y7/2 断{2.5Y7/2	外{タテハケ 内{ヨコハケ・ヨコナデ 文{刻み目	
87-1	72-2	弥生土器 長頸広口 壺	全体70% 底部周100%	残存高22.3 底径6.2~5.9	大{石英、長石、黒雲母、 角閃石 小{角閃石、長石、黒雲母	外{10YR4/1 内{2.5Y6/3 断{10YR6/3	外{左上がりミガキ 内{ヨコナデ?ユビナデ? 文{櫛描文	生駒西麓産 胎土
87-2	72-4	弥生土器 甕	全体40% 口縁周255 底部周50%	器高24.3 復元口径18.2 復元底径7.2	大{角閃石、長石、黒雲母、 石英　小{石英、長石、角 閃石、黒雲母	外{7.5YR4/2 内{10YR6/3 断{10YR6/3	外{ハケ後タテミガキ 内{ハケ	生駒西麓産 胎土
87-3	72-5	弥生土器 短頸広口 壺	全体10% 口縁周20%	残存高11.1 復元口径21.0	大{長石、石英、黒雲母、 角閃石、赤色粒 小{長石、石英、雲母	外{10YR4/2 内{10YR4/3 断{10YR6/2	外{タテハケ 内{ヨコナデ・ユビナデ 文{櫛描文	河内低地産 胎土

図番号	図版	種別・器種	残存率	法量(cm)	胎土内砂粒	色調	調整・文様	備考
87-4	72-6	弥生土器 甕	全体40% 口縁周90%	残存高10.0 口径18.3~17.8	大{角閃石、黒雲母、石英、 長石、赤色粒 小{角閃石、雲母、長石	外{7.5Y4/1 内{10YR5/3 断{10YR5/2	外{左上がりハケ後タテミガキ 内{ヨコナデ	生駒西麓産 胎土
88-1	73-1	サヌカイト 剥片(二次加工)		最大長3.1 重さ4.5g		風化度(弱)		
88-2	73-2	サヌカイト 剥片		最大長3.6 重さ1.4g		風化度(弱)		
88-3	74-1	サヌカイト 剥片		最大長3.8 重さ2.5g		風化度(弱)		
88-4	74-1	サヌカイト 剥片		最大長3.65 重さ2.3g		風化度(弱)		
88-5	73-3	サヌカイト 剥片		最大長5.8 重さ11.4g		風化度(弱)		
88-6		サヌカイト 剥片		最大長3.2 重さ2.3g		風化度(弱)		
88-7	74-1	サヌカイト チップ		最大長2.15 重さ0.3g		風化度(弱)		
88-8	74-1	サヌカイト チップ		最大長2.4 重さ0.9g		風化度(弱)		
88-9	74-1	サヌカイト チップ		最大長3.15 重さ0.8g		風化度(弱)		
88-10	74-1	サヌカイト チップ		最大長1.5 重さ0.4g		風化度(弱)		
88-11	74-1	サヌカイト 剥片(二次加工)		最大長2.5 重さ1.1g		風化度(弱)		
89-1	74-1	サヌカイト チップ		最大長2.0 重さ0.6g		風化度(弱)		
89-2	74-1	サヌカイト チップ		最大長1.7 重さ0.4g		風化度(弱)		
89-3	74-1	サヌカイト チップ		最大長3.05 重さ1.3g		風化度(弱)		
89-4	74-1	サヌカイト チップ		最大長2.2 重さ0.8g		風化度(弱)		
89-5	74-1	サヌカイト チップ		最大長2.4 重さ0.4g		風化度(弱)		
89-6	74-1	サヌカイト 剥片		最大長6.1 重さ10.4g		風化度(弱)		

図番号	図版	種別・器種	残存率	法量(cm)	胎土内砂粒	色調	調整・文様	備考
89-7	74-1	サヌカイト チップ		最大長2.9 重さ1.1g		風化度(弱)		
89-8	74-1	サヌカイト チップ		最大長2.35 重さ1.2g		風化度(弱)		
90-1	75-1	弥生土器 長頸広口 壺	全体10% 口縁周25%	残存高13.2 復元口径18.2	大{石英、長石、角閃石、 黒雲母　小{長石、角閃石、 石英、黒雲母	外{10YR7/1 内{10YR7/1 断{10YR6/1	外{ナデ 内{ユビオサエ後ヨコナデ 文{櫛描文	二次的被火 生駒西麓産
90-2	75-2	長頸広口 壺	全体10%以 下	残存高11.2	大{石英、長石 小{石英、長石、角閃石、 黒雲母	外{2.5Y3/2 内{2.5Y3/3 断{7.5YR6/6	外{ナデ 内{ミガキ・ユビナデ 文{櫛描文・櫛描流水文	河内低地産 胎土
90-3	75-4	弥生土器 甕	全体30% 口縁周75%	残存高14.2 口径19.0	大{石英、長石、黒雲母、 角閃石 小{長石、石英	外{7.5YR6/2 内{7.5YR4/2 断{N3/0	外{タテハケ 内{ヨコナデ 文{刻み目	河内低地産 胎土?
90-4	76-6	弥生土器 甕	全体50% 口縁周90% 底部周90%	残存高22.3 口径18.0 底径6.6	大{角閃石、石英、長石、 黒雲母　小{角閃石、長石、 黒雲母、石英	外{7.5YR5/6 内{5YR5/6 断{7.5YR6/3	外{左上がりミガキ・ヨコミガキ 内{右上がりナデ	河内低地産 胎土?
90-5	76-4	弥生土器 甕	全体10%以 下 口縁周15%	残存高12.0	大{角閃石、石英、長石、 黒雲母、閃緑岩礫 小{角閃石、黒雲母、長石	外{10YR5/3 内{10YR5/2 断{10YR6/3	外{タテハケ 内{左上がりハケ	生駒西麓産 胎土
90-6		弥生土器 広口壺	全体10%以 下	残存高4.8 復元口径14.0	大{石英、長石、黒雲母 小{長石、黒雲母、石英、 角閃石	外{10YR5/3 内{10YR5/4 断{10YR5/3	外{ヨコミガキ 内{ヨコミガキ・タテミガキ	河内低地産 胎土
90-7	75-5	弥生土器 甕	全体10%以 下	残存高7.65	大{長石、石英、角閃石、 黒雲母　小{長石、黒雲母、 石英、角閃石	外{10YR6/3 内{10YR4/1 断{10YR6/3	外{タテハケ後ヨコナデ 内{ヨコナデ 文{刻み目・多重沈線文	河内低地産 胎土?
90-8	75-3	弥生土器 甕	全体10%以 下	残存高6.9	大{角閃石、石英、長石、 黒雲母 小{同上	外{10YR5/3 内{10YR5/3 断{10YR5/3	外{ヨコナデ 内{ヨコナデ 文{多条沈線文・刺突文	生駒西麓産 胎土
92-1		弥生土器 甕	全体155 口縁周30%	残存高14.4 復元口径21.6	大{石英、長石、黒雲母、 角閃石　小{角閃石、石英、 長石、黒雲母	外{7.5YR5/4 内{7.5YR6/4 断{7.5YR6/3	外{左上がりハケ後タテミガキ 内{ヨコミガキ	生駒西麓産 胎土
92-2	76-2	弥生土器 壺	全体20% 底部周100%	残存高9.3 底径6.2	大{石英、長石、角閃石、 黒雲母　小{角閃石、黒雲 母、長石、石英	外{10YR5/4 内{10YR5/4 断{10YR5/4	外{ハケ後ヨコミガキ 内{ハケ後ヨコミガキ 文{櫛描流水文・波状文	生駒西麓産 胎土
92-3	76-3	弥生土器 壺	全体10% 底部周100%	残存高11.8 底径10.4~10.2	大{長石、石英、黒雲母、 角閃石　小{角閃石、長石、 黒雲母、石英	外{10YR5/3 内{10YR5/3 断{7.5Y5/3	外{ミガキ・ナデ 内{ミガキ	生駒西麓産 胎土
92-4	76-1	サヌカイト 掻器		最大長5.6 重さ12.5g		風化度(弱)		
93	76-5	木製品 高杯	全体25%	最大幅23.4 厚さ2.8			工具痕あり 板目取り	ヤマグワ製 未製品
96-1	77-1	弥生土器 壺	全体80% 底部周100%	残存高26.0 底径10.8~10.4	大{角閃石、石英、長石、 黒雲母、赤色粒 小{角閃石、長石、石英	外{10YR4/3 内{10YR4/3 断{10YR7/3	外{ミガキ 内{ミガキ・ナデ 文{刻み目突帯・多条沈線文	生駒西麓産 胎土
96-2	78-2	弥生土器 壺	全体30% 底部周100%	残存高17.8 底径7. 0	大{角閃石、石英、長石、 黒雲母、赤色粒　小{角閃 石、長石、石英、黒雲母	外{10YR4/3 内{10YR5/3 断{10YR5/3	外{ヨコミガキ 内{右上がりナデ 文{突帯	生駒西麓産 胎土
96-3	77-2	弥生土器 壺	全体35% 口縁周30% 底部周100%	器高20.7 復元口径10.8 底径8.1~7.5	大{角閃石、長石、石英、 黒雲母　小{角閃石、長石、 黒雲母、石英	外{2.5Y4/3 内{2.5Y5/3 断{2.5Y5/3	外{ヨコミガキ 内{ユビナデ・ユビオサエ 文{多条沈線文	生駒西麓産 胎土

図番号	図版	種別・器種	残存率	法量(cm)	胎土内砂粒	色調	調整・文様	備考
96-4	77-3	弥生土器 無頸壺	全体80% 口縁周70% 底部周100%	器高11.8 口径12.0 底径7.2	大{長石、石英、角閃石、 黒雲母、赤色粒 小{同上	外{10YR6/4 内{10YR6/4 断{2.5Y6/2	外{ヨコミガキ　内{右上がり ミガキ　文{多条沈線文 円孔(貫通)2箇所	生駒西麓産 胎土
96-5	75-6	弥生土器 甕	全体10%以 下	残存高5.2	大{角閃石、長石、石英、 黒雲母　小{角閃石、長石、 黒雲母、石英	外{10YR5/3 内{7.5YR5/4 断{10YR5/3	外{ヨコナデ 内{ヨコナデ 文{刻み目突帯	生駒西麓産 胎土
96-6	75-7	弥生土器 壺	全体40% 底部周100%	残存高17.5 底径7.8~7.3	大{石英、長石、黒雲母、 角閃石　小{長石、石英 黒雲母、角閃石	外{2.5Y6/3 内{2.5Y6/2 断{2.5Y5/2	外{ミガキ　内{ミガキ 文{沈線文 籾圧痕5箇所	生駒西麓産 胎土？
102-1	78-1	縄文土器 深鉢	全体70% 口縁周90%	器高45.0~44.8 口径37.5~36.0	大{石英、角閃石、黒雲母、 長石　小{角閃石、長石、 黒雲母、石英	外{10YR4/3 内{10YR4/3 断{10YR4/3	外{タテケズリ 内{ナデ 文{刻み目突帯	生駒西麓産 胎土
102-2	78-3	縄文土器 深鉢	全体10%以 下	残存高7.2	大{石英、角閃石、長石、 黒雲母　小{角閃石、長石、 石英、黒雲母	外{10YR4/2 内{10YR5/2 断{10YR3/1	外{ヨコケズリ 内{ナデ	生駒西麓産 胎土
102-3	77-4	弥生土器 壺	全体30% 底部周100%	残存高9.8 底径6.4~6.0	大{石英、長石、角閃石、 黒雲母 小{長石、角閃石	外{10YR4/2 内{10YR4/1 断{10YR6/2	外{タタキ・粗いナデ 内{ナデ	生駒西麓産 胎土
102-4		サヌカイト チップ		最大長4.2 重さ3.1g		風化度(弱)		

写　真　図　版

（写真左下の番号は挿図番号）

1　東半　第2-1面　全景　南から

2　東半　第2-1面　北側　東西坪境付近　東から

図版２

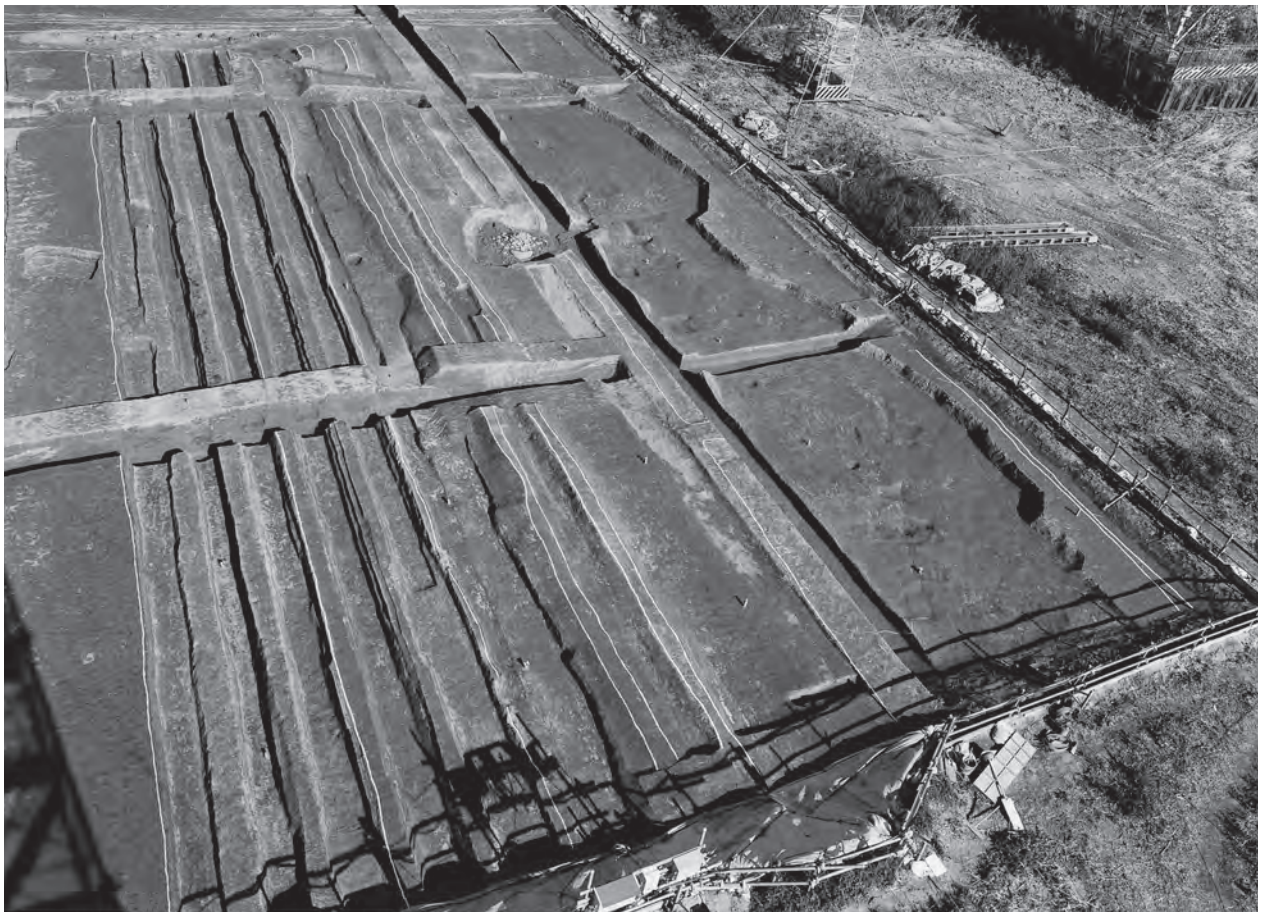
1　西半　第2-1面　全景　南から

2　X=-149,920 ライン西半断面　第2-1層～第３層・1b 土坑

3　Y=-34,041.5 ライン（二十一ノ坪）断面
第2-1層～第３層・1b 土坑

4　X=-149,900 ライン西半断面　第1b 層内状況

5　第１面　239埋樽　底板上遺物出土状況　東から



1　東半　第2-3面　全景　南から

2　東半　第2-3面　北側　東西坪境付近　東から

図版４

1　西半　第2-3面　全景　南から

2　第１面　45井戸　井戸枠瓦立面　東から

3　第１面　45井戸　井戸枠瓦断面　東から

4　第2-3面　150畦畔盛土内　240礫群　東から

5　第3-1面　299溝断面　No.1　南から

1　東半　第3-1面　全景　南西から

2　西半　第3-1面　全景　南東から

図版６

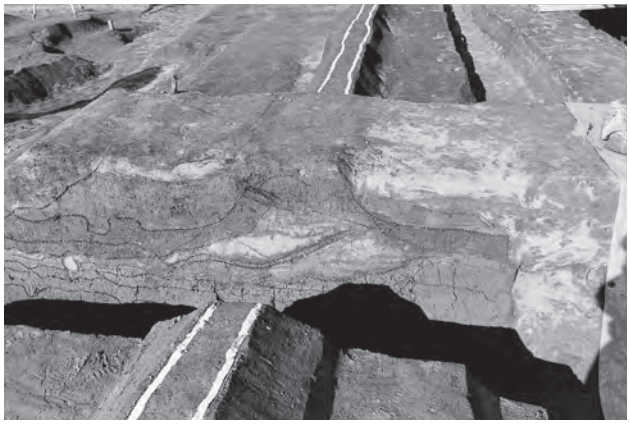
1　東半　第４面　全景　南西から

2　東半　第４面　北側　東西坪境付近　東から

1　西半　第４面　全景　南から

2　Y=-34,000 ライン
　　坪境畦畔断面（十六・十七ノ坪境）　西から

3　第９面　324畦畔・327溝　切り合い状況　南東から

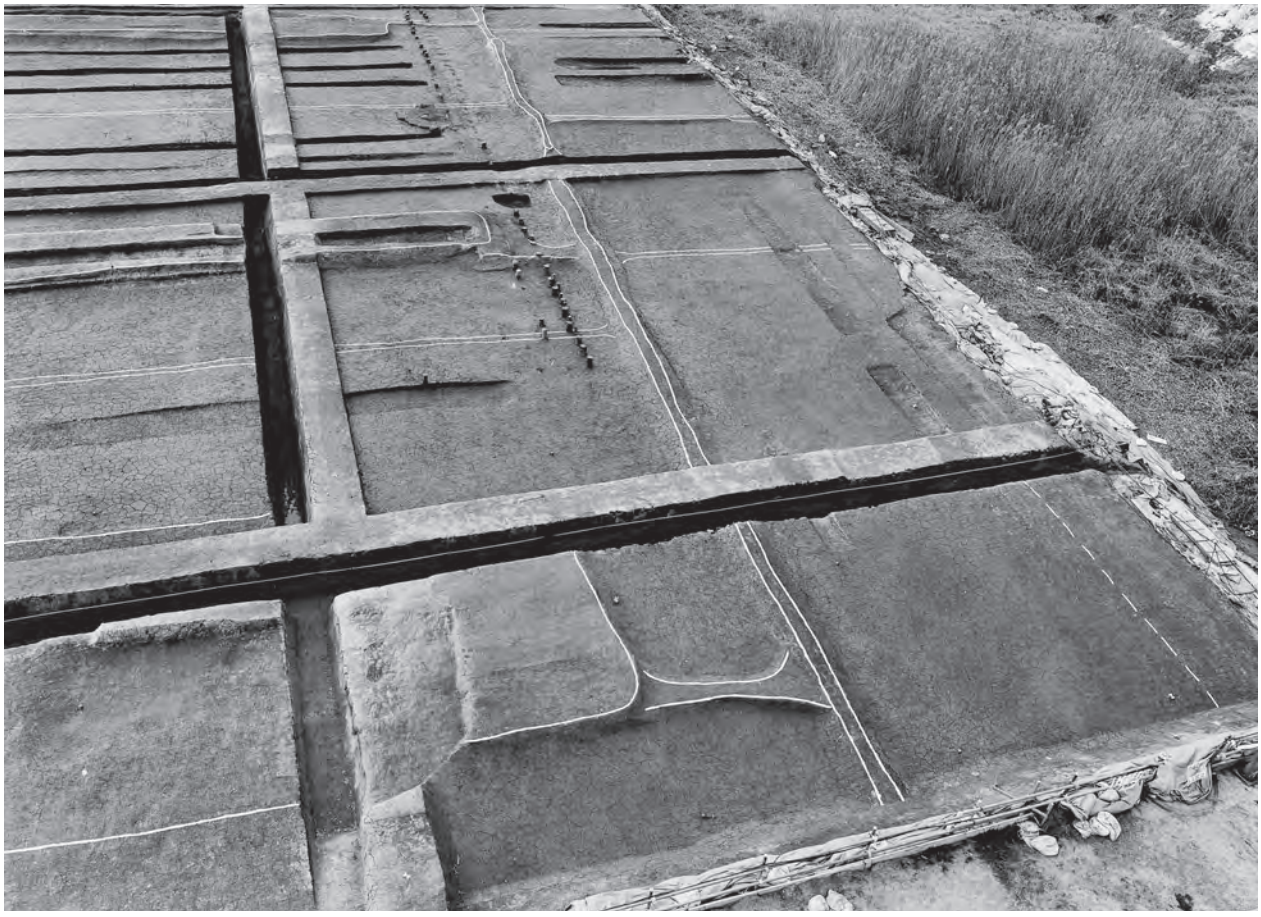


4　X=-149,920 ライン
　　南北坪境畦畔断面（十六・二十一ノ坪境）　南から

5　Y=-34,020 ライン断面　第４層～第10-1層　西から

図版８

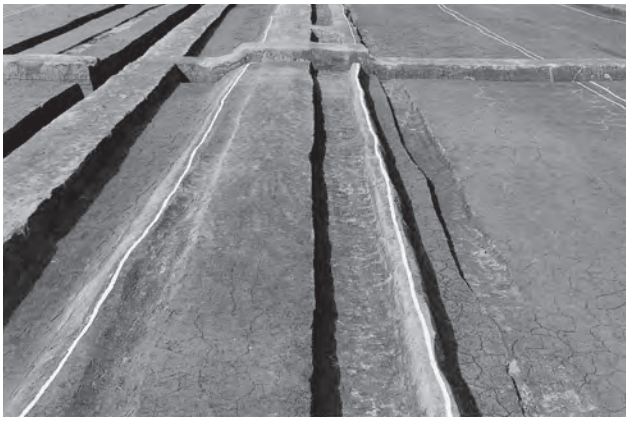
1　東半　第５面　全景　南西から



2　東半　第５面　北側　東西坪境付近　東から

1　西半　第５面　全景　南から

2　第５面　255島畠　南から



3　第５面　231島畠　南から

4　第５面　232島畠　南から

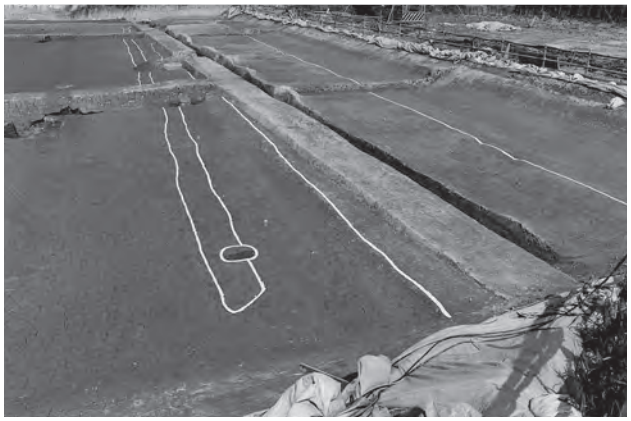
5　　第６面　坪境交点　東から

図版10

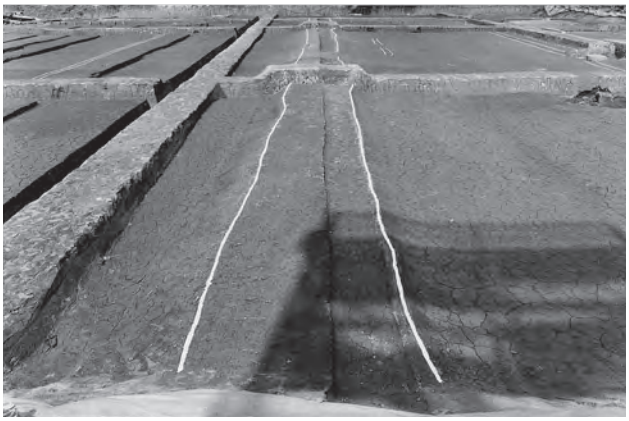
1　東半　第６面　全景　南から

2　東半　第６面　北側　東西坪境付近　東から

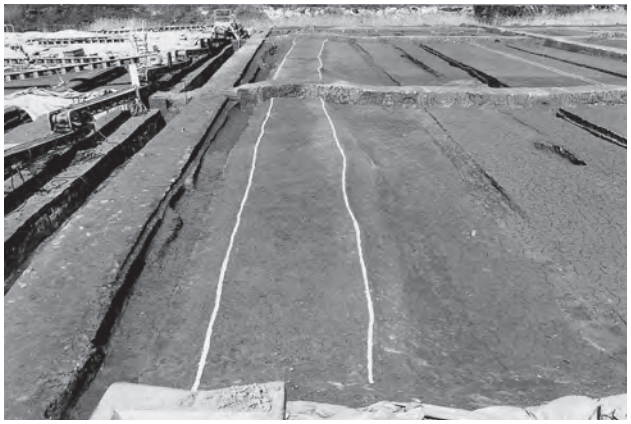
1　西半　第６面　全景　南から



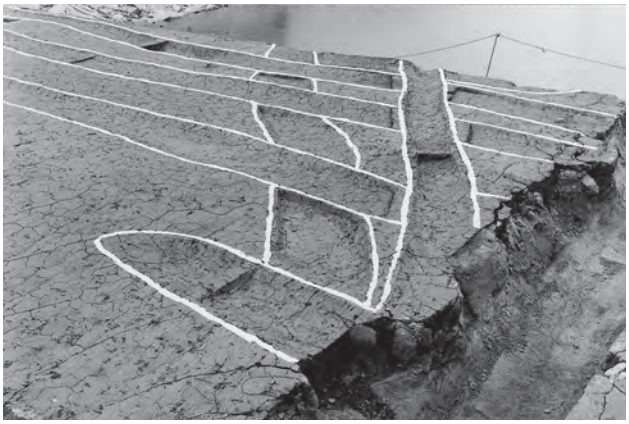
2　第６面　310島畠　南西から



3　第６面　315島畠　南から



4　第６面　318島畠　南から



5　第８面　334・335溝　切り合い状況　北西から

図版12

1　東半　第８面　全景　南から

2　東半　第８面　北側　東西坪境付近　東から

1　西半　第８面　全景　南から

2　第８面　坪境交点　点線は修復盛土　東から

図版14

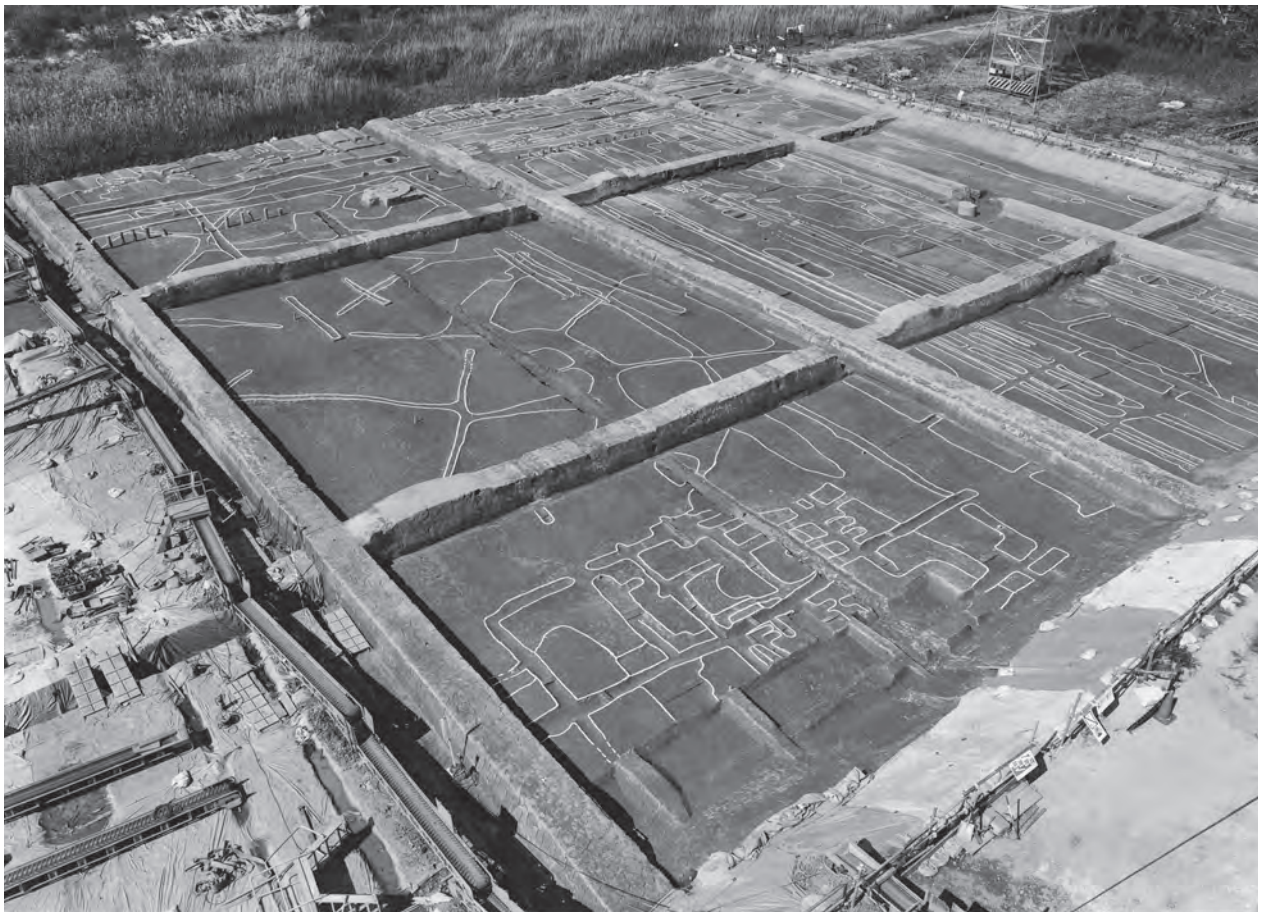
1　第８面　379溝断面　東から

2　第８面　412土坑・413溝断面　東から

3　西半　第10-1面　全景　南から

4　第10-1面　364溝断面　東から

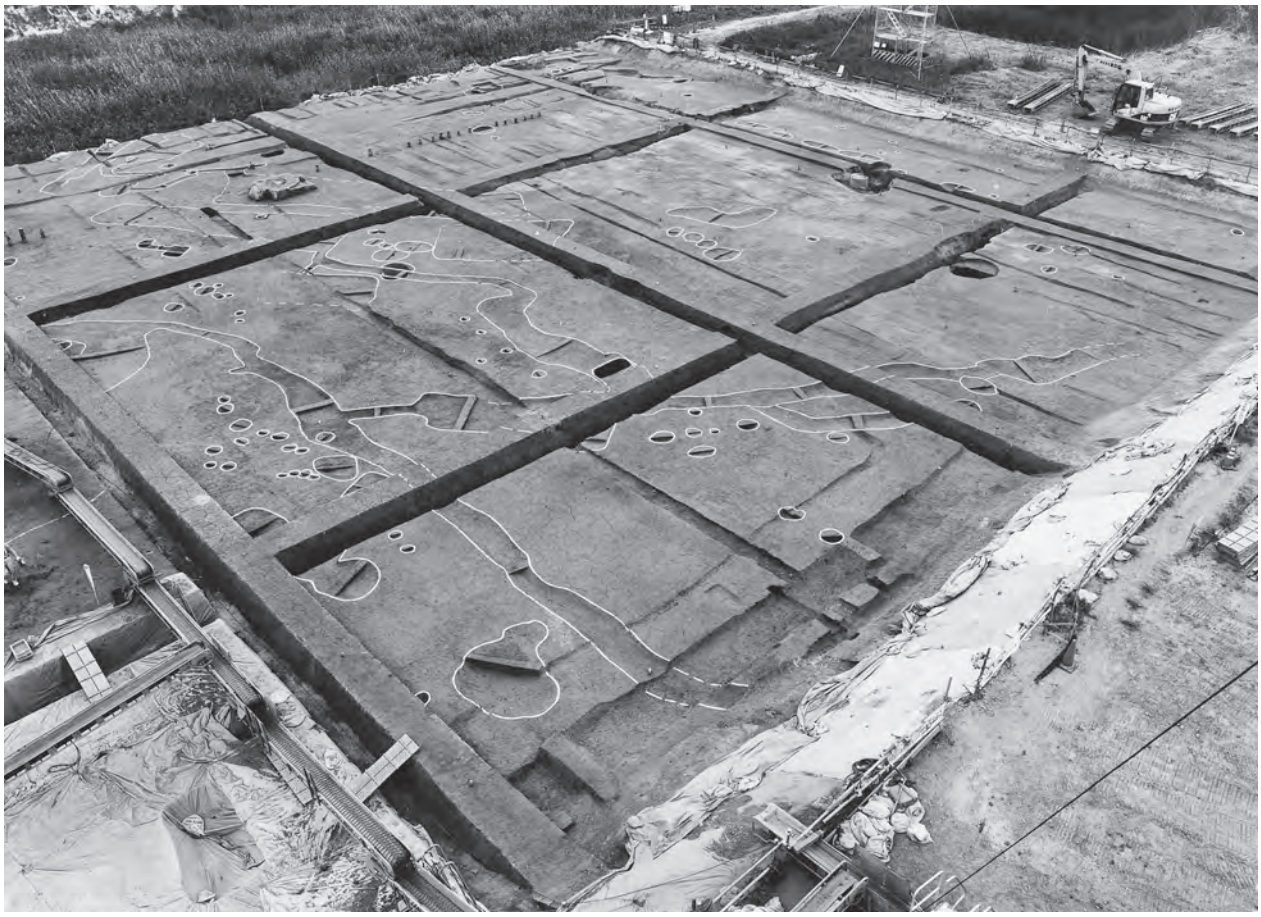
5　第10-1面　536溝断面　東から



1　東半　第10-1面　全景　南西から

2　東半　第10-1面　北側　東から

図版16



1　東半　第10-2面　全景　南から

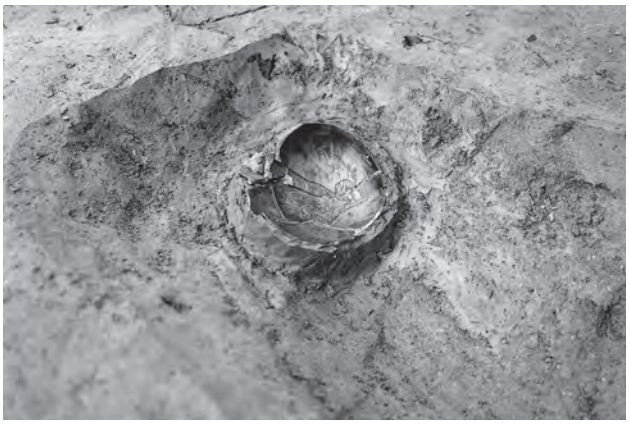
2　西半　第10-2面　全景　南から

1　東半　第11面　全景　南から

2　西半　第11面　全景　南から

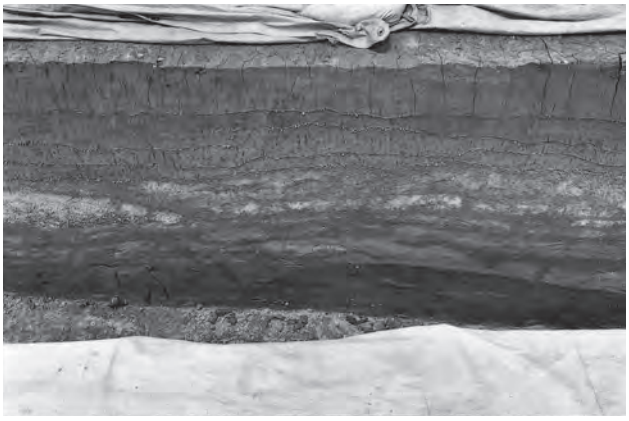
図版18

1　第10-1面　618溝断面　東から



2　第10-1面　718落込床面ピット　瓦器椀出土状況　南西から

3　第11面　1094土器１　出土状況　北から

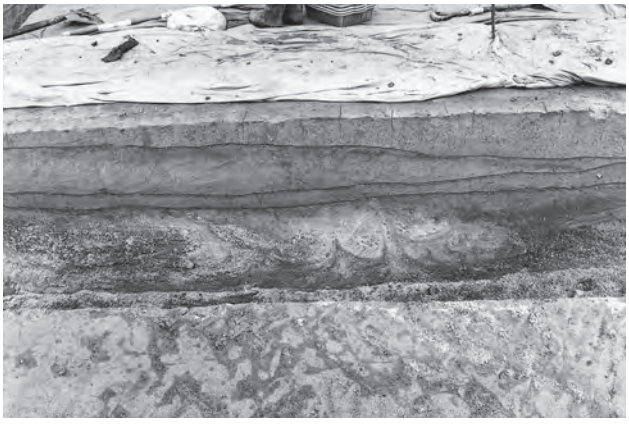


4　Y=-34,041.5 ライン断面　第10-1層～第11b 層　東から

5　X=-149,900 ライン断面
第12-1面～第13-2b 面微高地３～低地３　南東から

6　Y=-33,980 ライン断面
第11b 層内　粗砂層（1169浸蝕痕）　西から

7　X=-149,900 ライン断面
第11b 層内　粗砂層（1169浸蝕痕）　南から

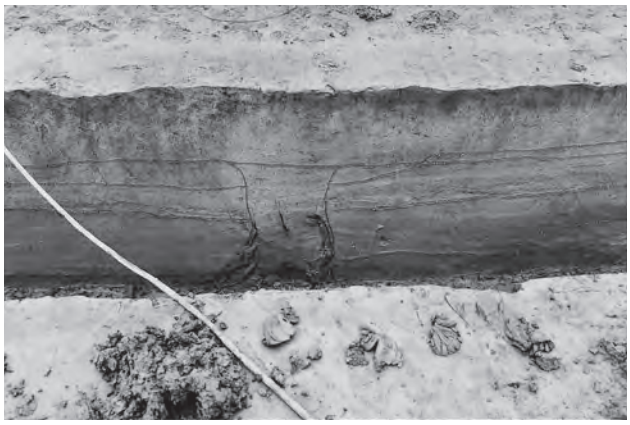


8　Y=-34,000 ライン断面
第11b 層内　地震変形（1144浸蝕痕）　西から

1　東半　第12-1面　全景　南から

2　西半　第12-1面　全景　南から

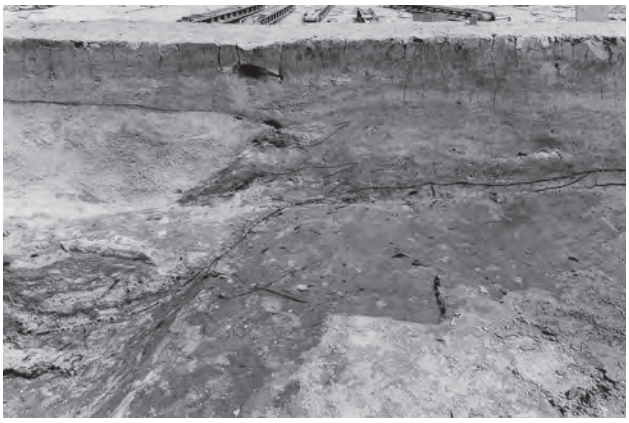
図版20



1　X=-149,900 ライン　第12-1面　立ち木痕断面　南から

2　X=-149,900 ライン　第12-1面　立ち木痕断面　南から

3　X=-149,900 ライン　1609流路西肩部断面　南から



4　X=-149,900 ライン　第11b 層・
1142侵食痕上の粗砂層との交指状堆積断面　南から

5　X=-149,900 ライン　第12-1面　1142侵食痕上粗砂層
（第11b 層）断面　南西から

6　X=-149,920 ライン　第12-1面　1130流路東肩部
第11b 層内交指状堆積断面　南から

7　第12-1面　1146溝断面　No.1　北から

8　第12-1面　1145・1147畦畔・1146溝断面　No.1　北から

1　第12-1面　1146溝断面　No.2　南東から

2　第12-1面　1145・1147畦畔・1146溝断面　No.2　南東から

3　第12-1面　1146溝断面 No.3　南東から

4　X=-149,900 ライン
第12-1面　1145・1147畦畔・1146溝断面　南東から

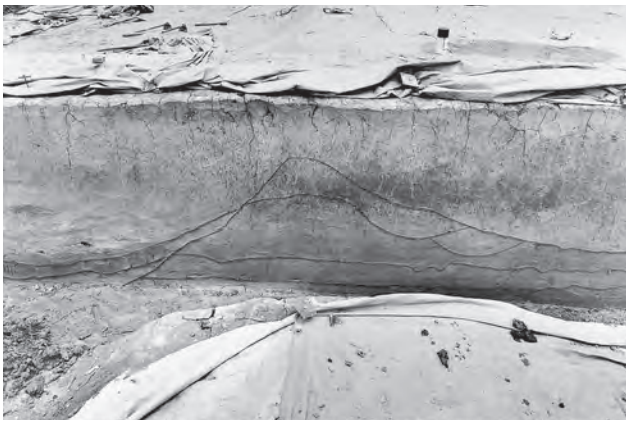
5　西半　第12-2面　全景　南から

図版22

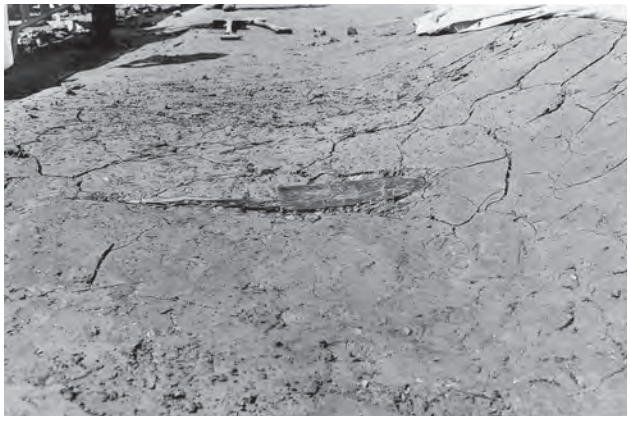
1　東半　第12-2面　全景　南西から

2　第12-2面　微高地１　南から

1　X=-149,900 ライン
第12-1面　微高地３西辺1132畦畔断面　南から



2　X=-149,920 ライン　第12-1面人口堤防断面　南から



3　第12-2面　1200溝上面　木製鋤出土状況　南から

4　第12-2面　1209 ピット　土器出土状況　西から

5　第12-2面　低地３部分　畦畔検出状況　南東から

図版24

1　第12-2面　1130流路　完掘状況　南から

2　西半　第13-1面　全景　南から

1　東半　第13-1面　全景　南西から

2　東半　第13-1面　東側　南から

図版26

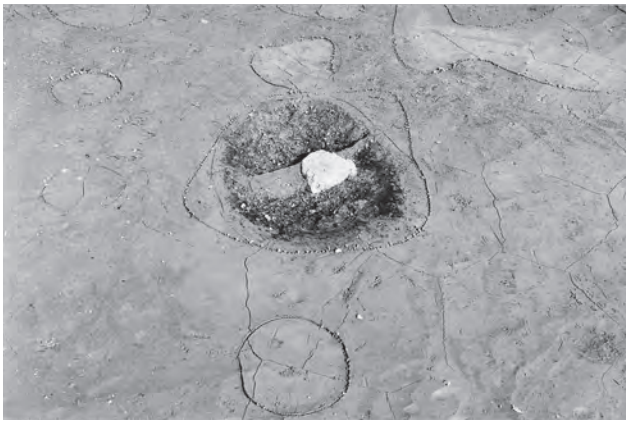
1　東半　第13-2面　全景　南から

2　西半　第13-2面　全景　南から

1　第13-1面　1380土坑断面　南東から

2　第13-2面　1545土坑断面　南東から

3　第13-2面　1712 ピット　土器 1 出土状況　南から



4　第13-2面　1310住居 1 床面
1311炉・1312・1313柱穴検出状況　西から

5　第13-2面　1310住居 1 床面検出状況（第13-1面調査時）　西から

図版28

1　第13-2面　1310住居１床面
1311炉・1312・1313柱穴半割状況　南東から

2　第13-2面　1310住居１床面　1311炉断面　南から

3　第13-2面　1310住居１床面　1312柱穴断面　南から

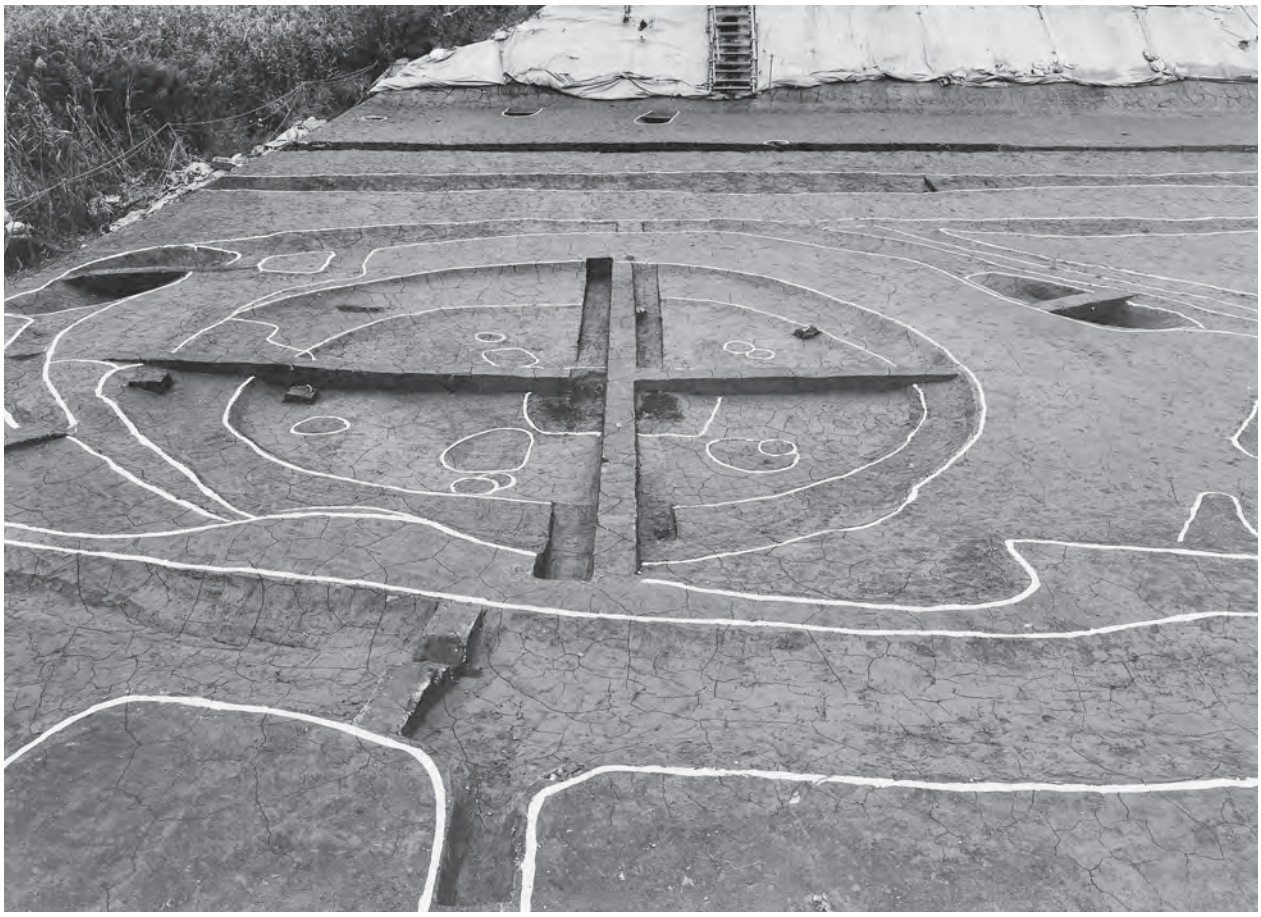
4　第13-2面　1310住居１床面　1313柱穴断面　南から

5　第13-2面　1310住居１　床面・周堤検出状況　西から

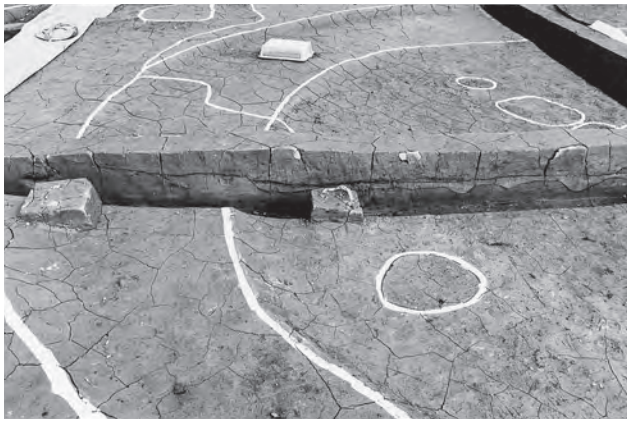
1　第13-2面　1310住居１　周堤盛土除去後　南から

2　第13-2面　1500住居２周辺　南東から

図版30



1　第13-2面　1500住居２　床面検出状況　西から



2　第13-2面　1500住居２南北断面　北側　西から

3　第13-2面　1500住居２南北断面　中央・1582炉検出状況
西から

4　第13-2面　1500住居２南北断面　南側　西から

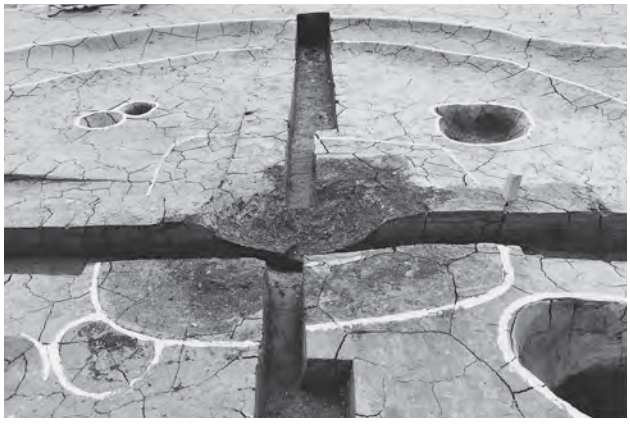
5　第13-2面　1500住居２東西断面　中央・1582炉断面　北から

1　第13-2面　1500住居２床面　土器１出土状況　南から

2　第13-2面　1500住居２床面　土器２出土状況　南から

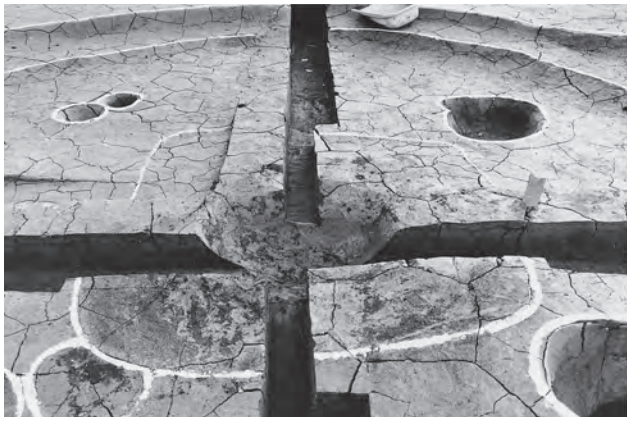
3　第13-2面　1500住居２床面　土器３出土状況　南から

4　第13-2面　1500住居２床面　土器４出土状況　南西から



5　第13-2面　1500住居２床面　1582炉検出状況　北から

6　第13-2面　1500住居２床面　1582炉中心部炭層　北から



7　第13-2面　1500住居２床面　1582炉炭層除去後　北から

8　第13-2面　1500住居２床面　1582炉完掘状況　北から

図版32

1　第13-2面　1500住居２　底面検出状況　南から

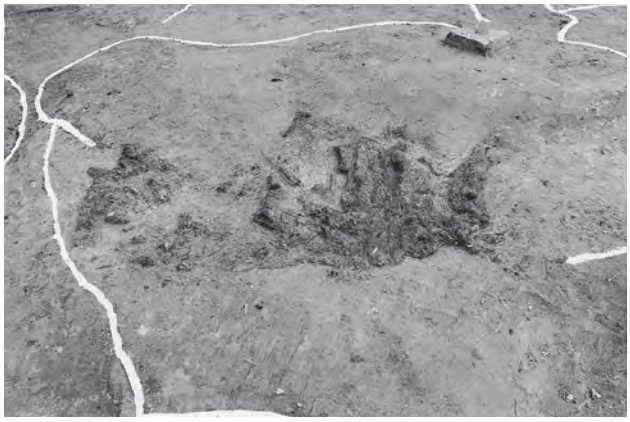
2　第13-2面　1600住居３周辺　南東から

1　第13-2面　1600住居３　床面盛土除去後　北西から

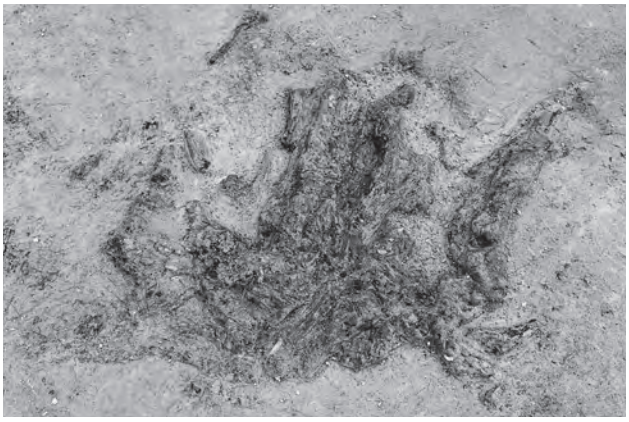
2　第13-2面　1600住居３　炭化木群検出状況　北西から

図版34

1　第13-2面　1600住居3内1547炭化木群　北西から



2　第13-2面　1547炭化木群（1600住居３検出前）　北西から



3　第13-2面　1547炭化木群詳細　北西から

4　第13-2面　1750住居４南北断面北側　西から

5　第13-2面　1750住居４南北断面中央　西から

1　第13-2面　1750住居４　西から

2　第13-2面　1750住居４　東から

図版36

1　X=-149,900 ライン　1609流路東岸ポイントバー層断面西半　南から

2　X=-149,900 ライン　1609流路東岸ポイントバー層断面東半　南から

3　1609流路東岸ポイントバー最上層　土器群１　南西から

4　1609流路東岸ポイントバー最上層　土器群２　東から

5　1609流路東岸ポイントバー最上層　土器群３　南から

6　1609流路東岸ポイントバー最上層　土器群４　南から

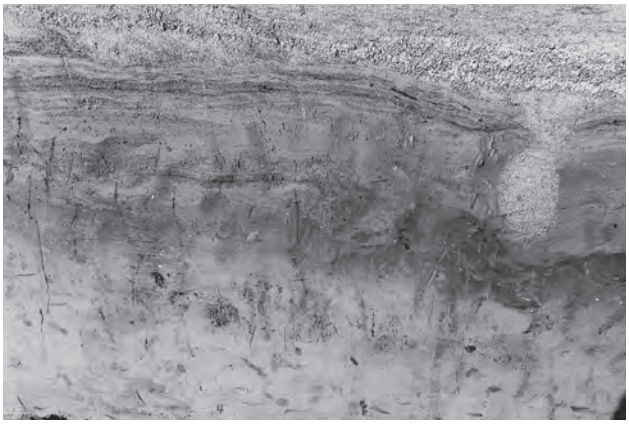
7　1609流路東岸ポイントバー最上層　土器群５　南から

8　第13-2面　1750住居４南北断面南側　西から

1　Y=-34,020 ライン断面　第13-2b 層～第14-2b 層　西から

2　X=-149,900 ライン断面　第13-2b 層～第14-2b 層　南から

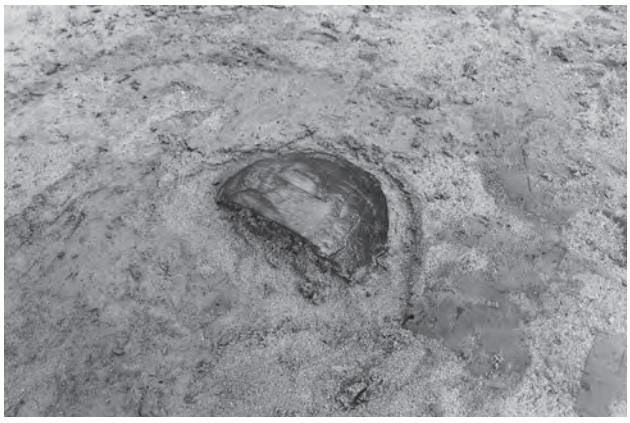
3　西半南法面　第14層付近土層断面　地震変形



4　西半南法面　第14層付近土層断面　地震変形

5　X=-149,900 ライン　1609流路西肩部断面　南から

6　X=-149,920 ライン　1609流路西肩部断面　地すべり　南東から



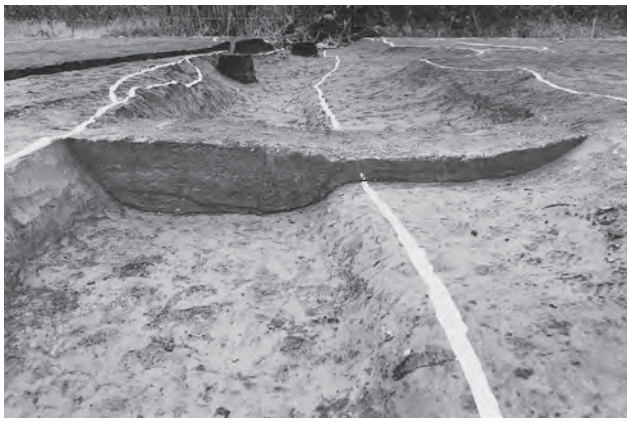
7　1609流路東岸ポイントバー層下部
木製高杯出土状況　南西から

8　1609流路東岸ポイントバー層下部　木製高杯出土状況　南から

図版38

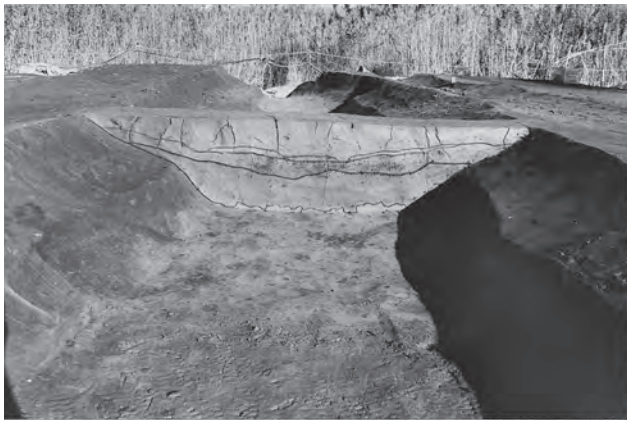
1　東半　第14-1面　全景　東から

2　西半　第14-1面　全景　南から



1　第14-1面　1610溝断面　No.1　南から

2　第14-1面　1610溝断面　No.2　南から



3　第14-1面　1669溝断面　No.1　南から

4　第14-1面　1669溝断面　No.2　南から

5　第14-1面　1669溝内　土器１出土状況　南西から

6　第14-1面　1208土器１出土状況　南東から

7　第14-1面　1608土器２出土状況　南西から

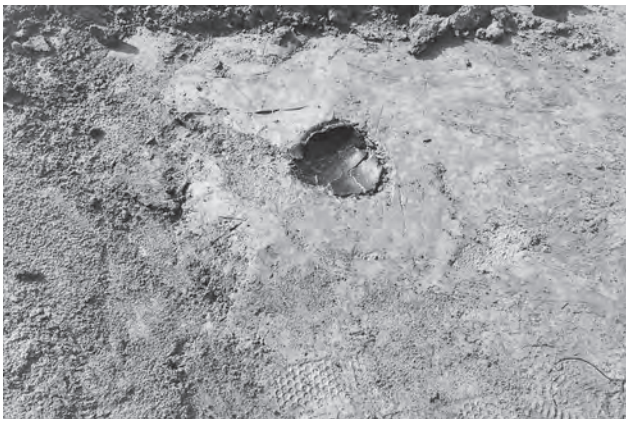
8　第14-1面　1691土器３出土状況（1671畦畔西裾）　南から

図版40

1　東半　第14-2面　全景　南西から

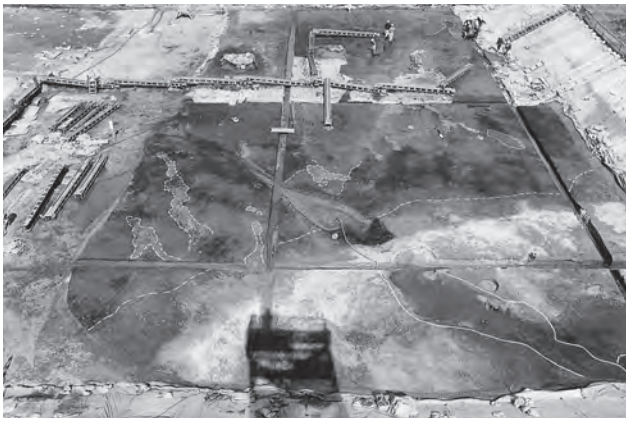
2　西半　第14-2面　全景　南から

1　第14-2面　1791土器１出土状況　南から



2　第15-1面　1815土器１出土状況　東から

3　X=-149,920 ライン断面　第14-4b 層～第15-2b 層



4　第14-2面　1792流路南東側下層完掘状況　南から

5　東半　第14-2b 層　全景　南から

図版42

1　東半　第15-1面　全景　南から

2　西半　第15-1面　全景（左奥は T.P.+0.9mで止め）　南から

1　東半　第15-2b 面　全景　南から

2　東半　第16面　全景　南から

図版44

1　東半　T.P.+0.9m 面　第15-2b 層・第16層・第16b 層露出状況　南西から

2　西半　T.P.+0.9m 面　第15-2b 層・第16層・第16b 層露出状況　南から

10-2 1

10-7 2

11 3

3′

10-3 4

図版46

13-1　1

13-5　1′

15-1　2

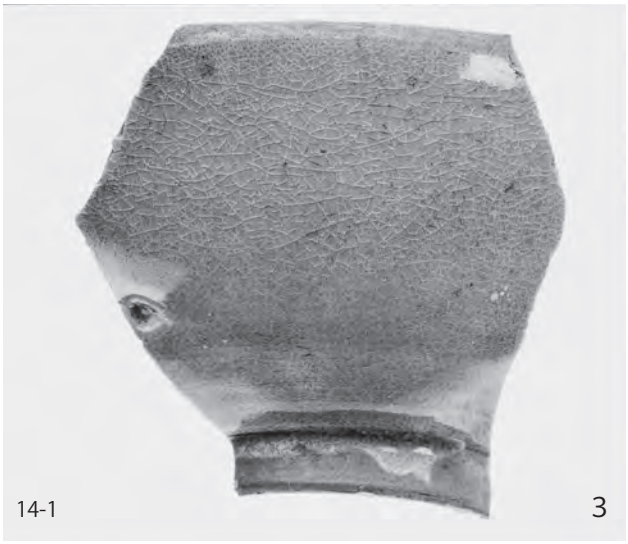
13-6　3

13-4 1

1′

13-5 2

2′



14-1 3

3′

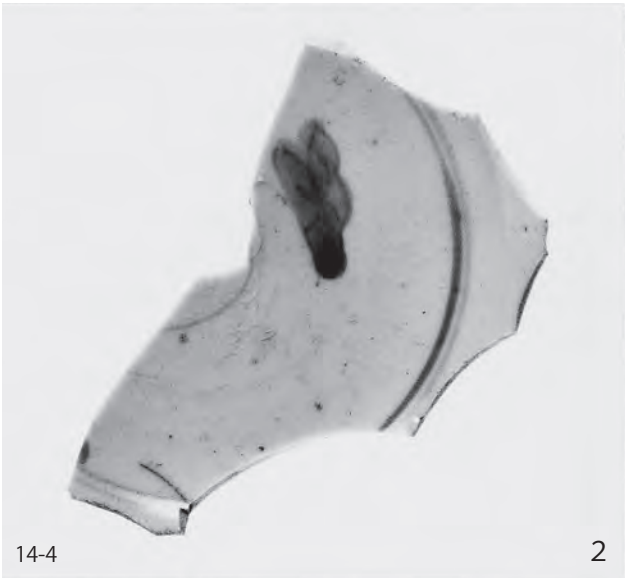
図版48

14-3 1

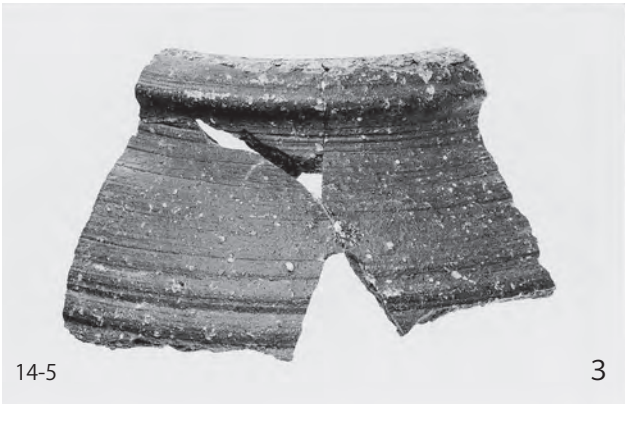
14-7 4

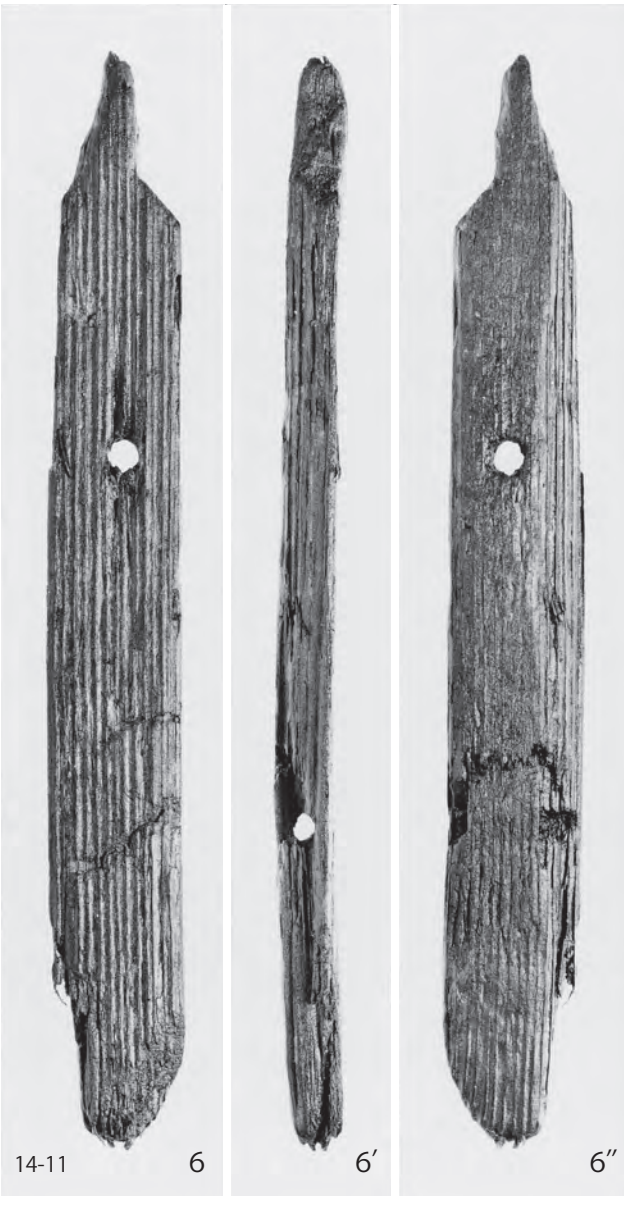
1′

14-8 5


14-4 2

2′

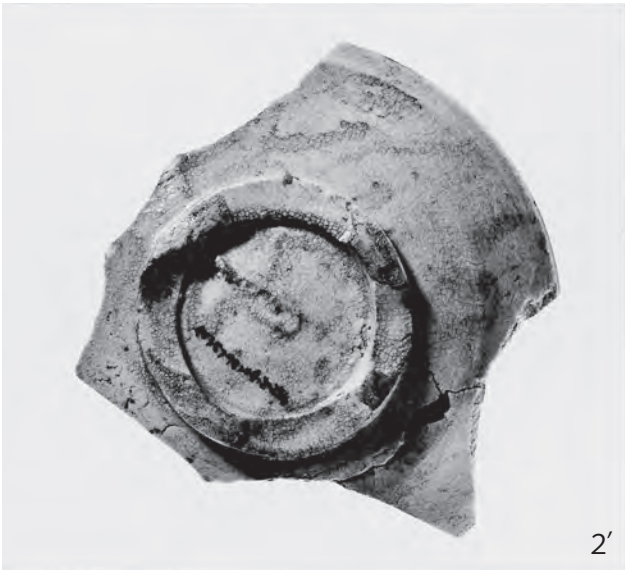

14-5 3


14-11 6 6′ 6″

14-9 1

1′

14-10 2


2′

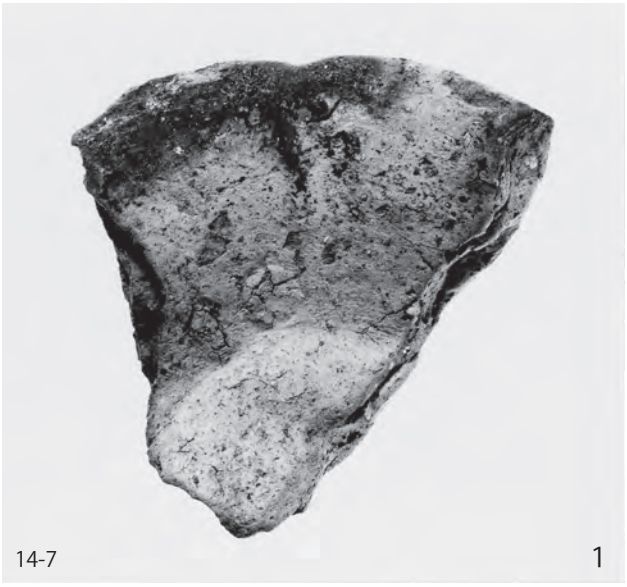
14-12 3

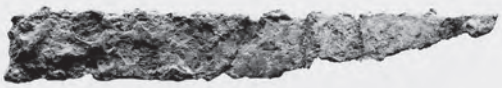
3′

14-14 4

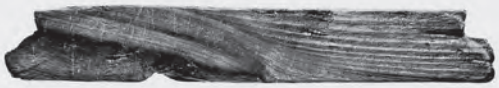
4′

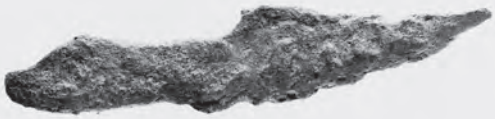
図版50


14-7 1

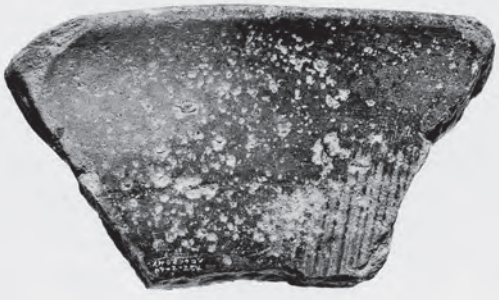

14-19 2

16 3


3′

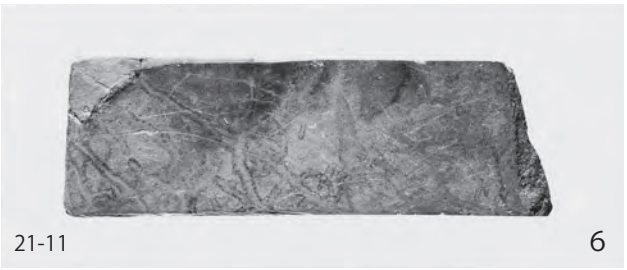

21-4 4

4′

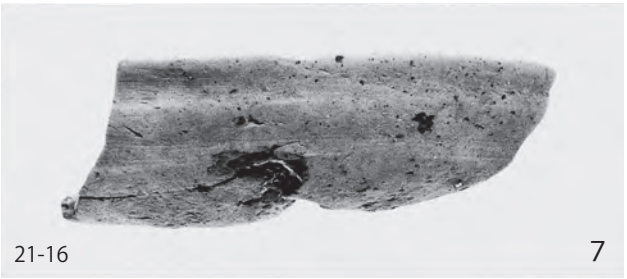

21-6 8

21-8 5

5′

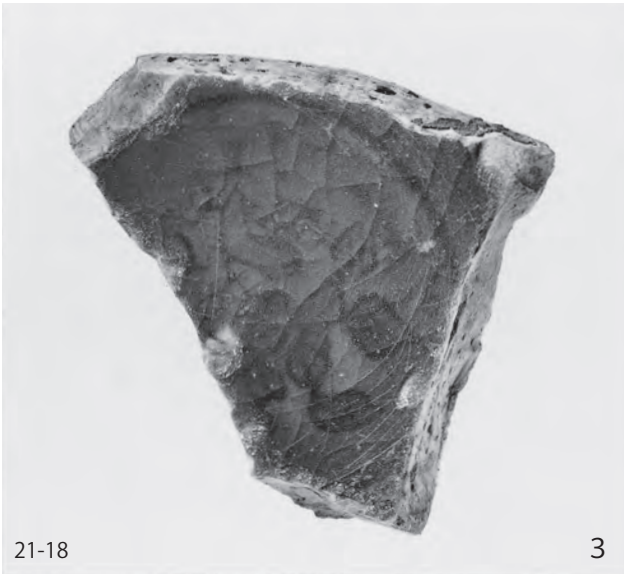

21-11 6

6′


21-16 7

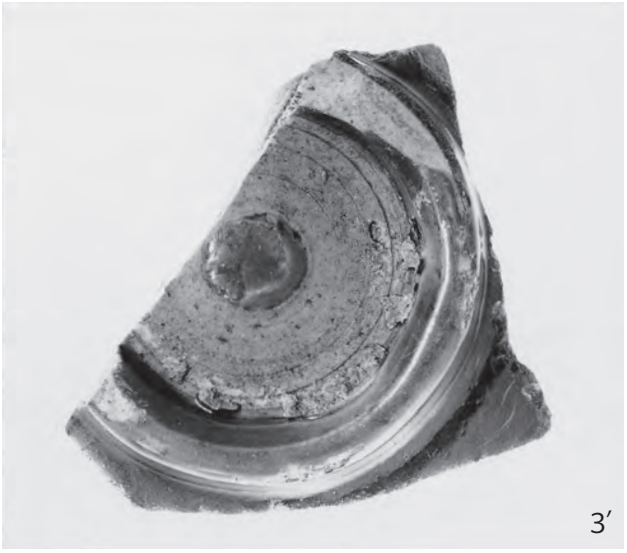
8′

21-17 1



21-18 3

1′

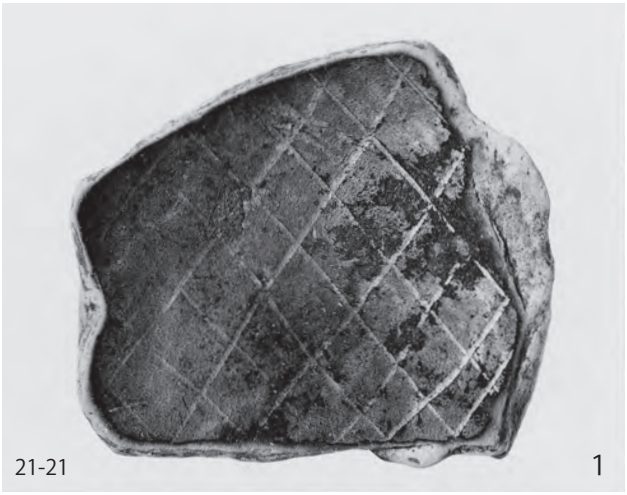


3′

21-20 2

21-15 4

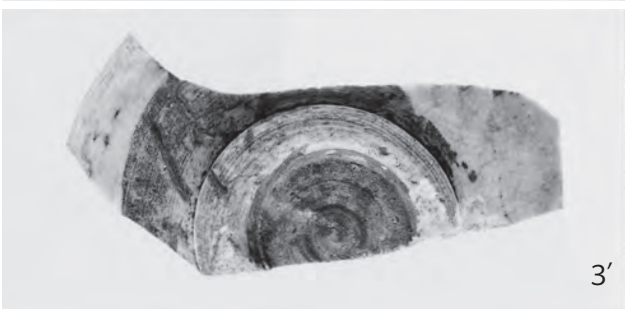
図版52


21-21 1

21-14 2

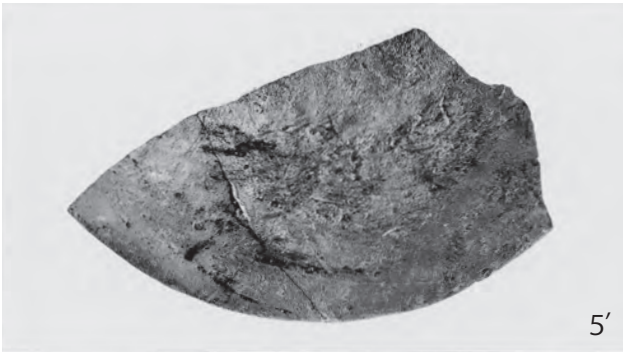
2′

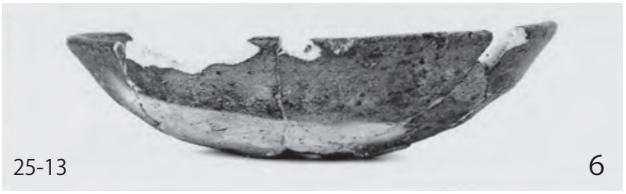
25-1 3


3′

25-11 4

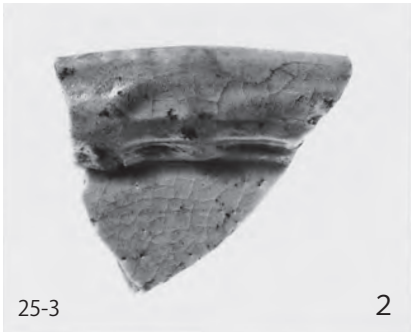
25-12 5

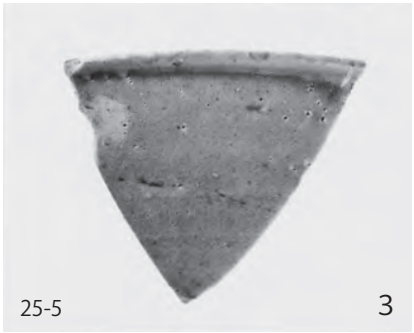

5′

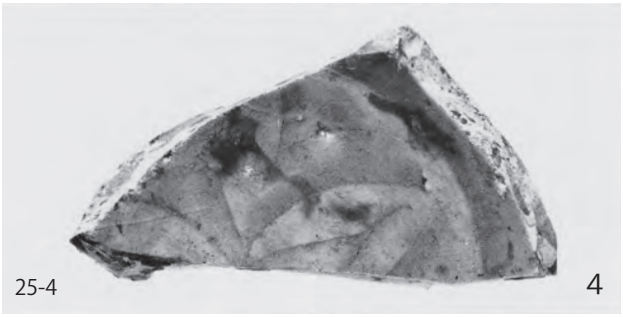

25-13 6

6′

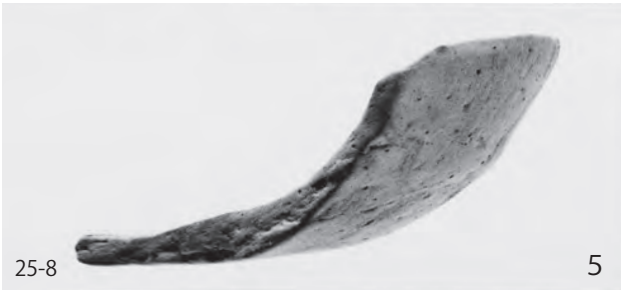
25-2 1

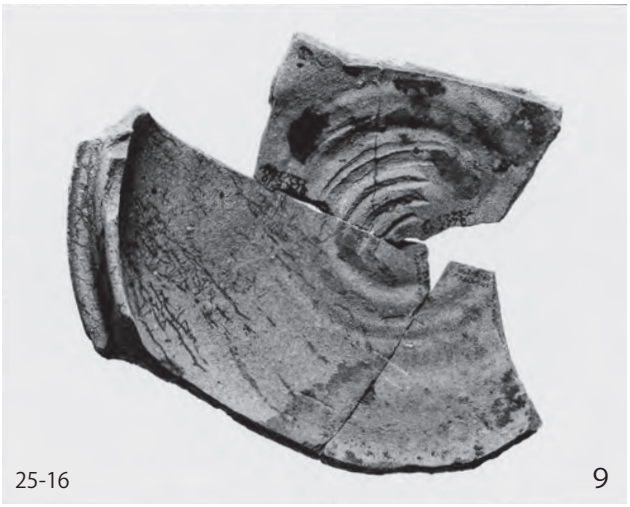

25-3 2


25-5 3


25-4 4

25-19 8


25-8 5


25-16 9

25-10 6

25-14 7

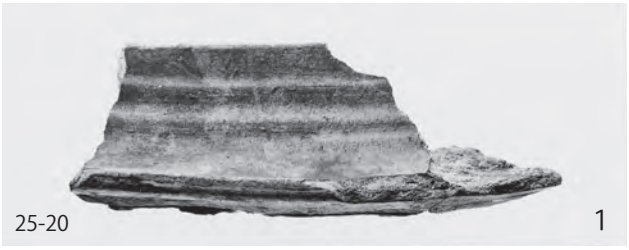
25-17 10

7′

25-18 11

11′

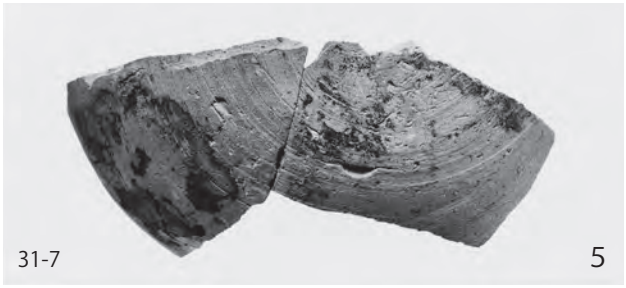
図版54


25-20 1

25-21 2

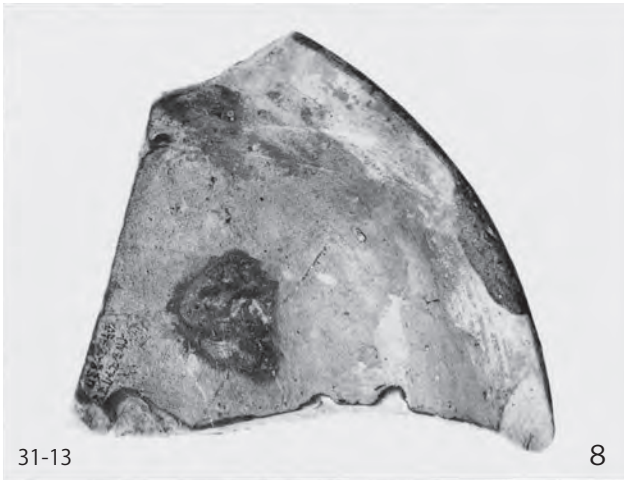
25-22 3

25-25 4


31-7 5

31-8 6

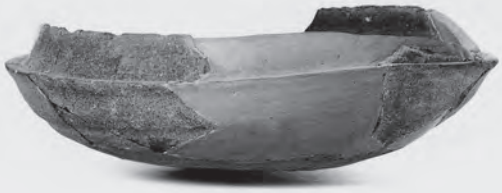
31-12 7


31-13 8

25-26 9

31-19 10

25-2 10′

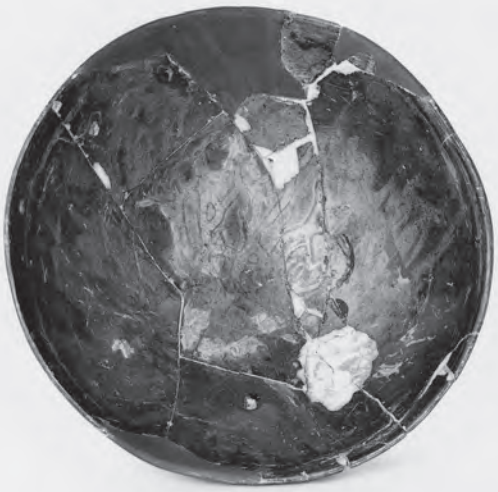


31-10 1

31-17 2

31-18 3

31-16 4



33-4 5

5′

図版56

33-1 1

1′

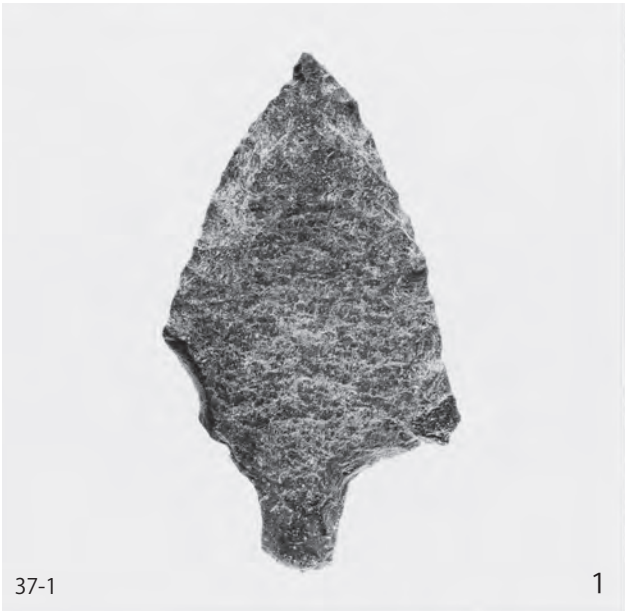
33-2 2

2′

33-5 3

3′

33-6 4



37-1 1

1′

37-9 2

2′

37-8 3

41 4

図版58

37-6 1

1′

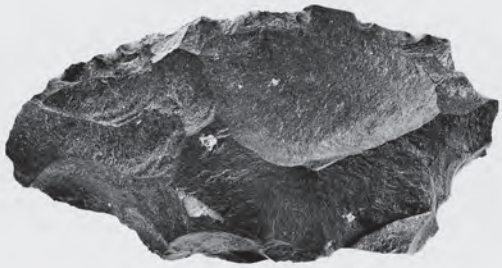
49-3 3

49-1 2

3′

49-4 4

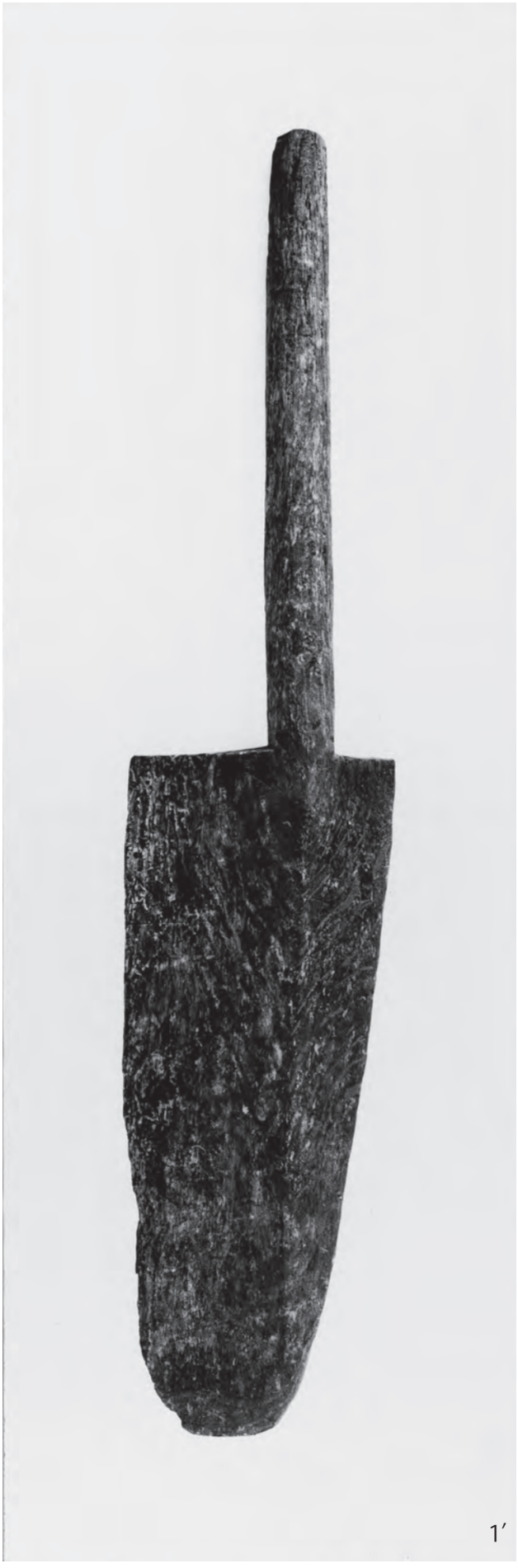
4′



52 5

5′

51 1



1′

図版60

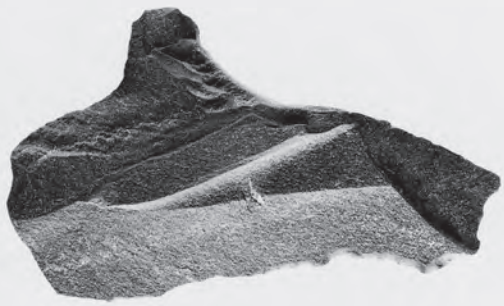
55-2 1

55-4 2

55-5 3

55-6 4

4′



56-2 5

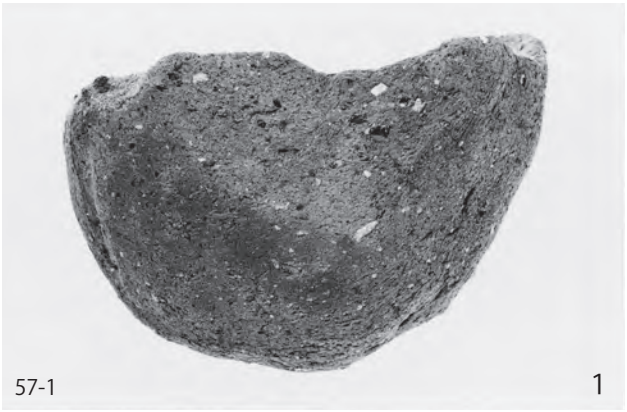
5′

56-1

1

1′

図版62


57-1 1

57-9 5

57-2 2

57-10 6

57-5 3

58-2 7

7′

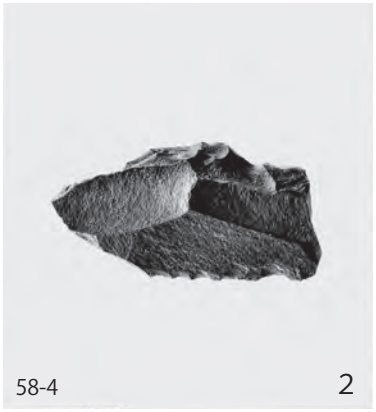
57-6 4

58-1 8

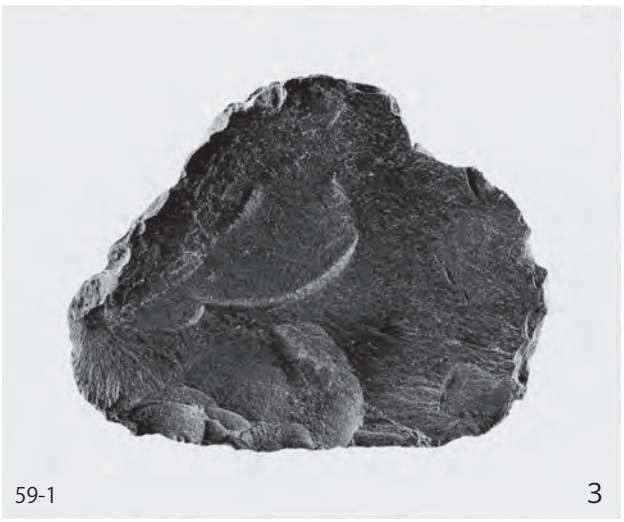
8′

58-3 1

1′


58-4 2

2′


59-1 3

3′

59-2 4

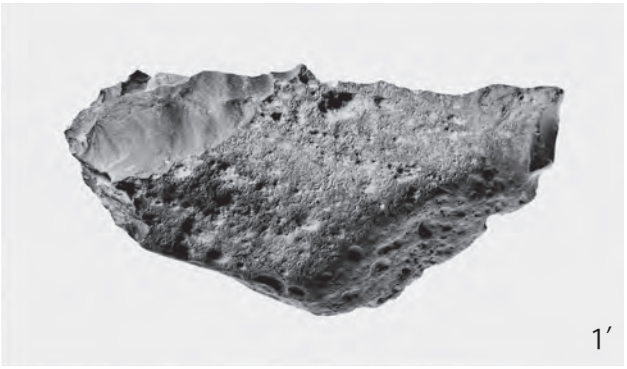
4′

59-3 5

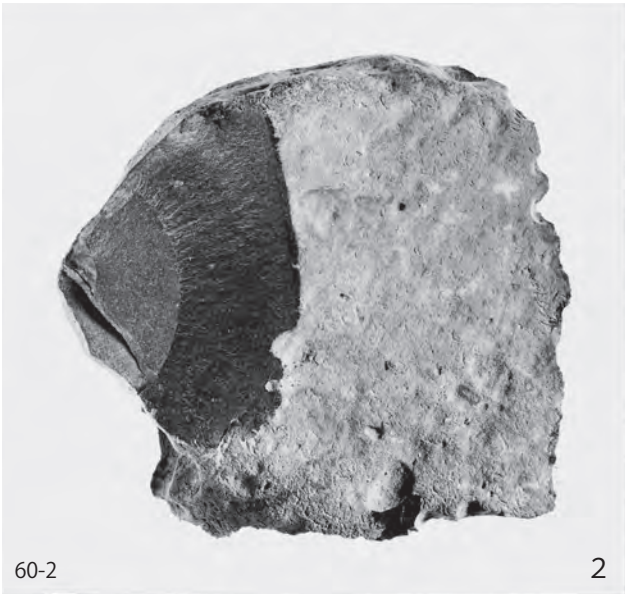
5′

図版64

60-1 1



1′



60-2 2

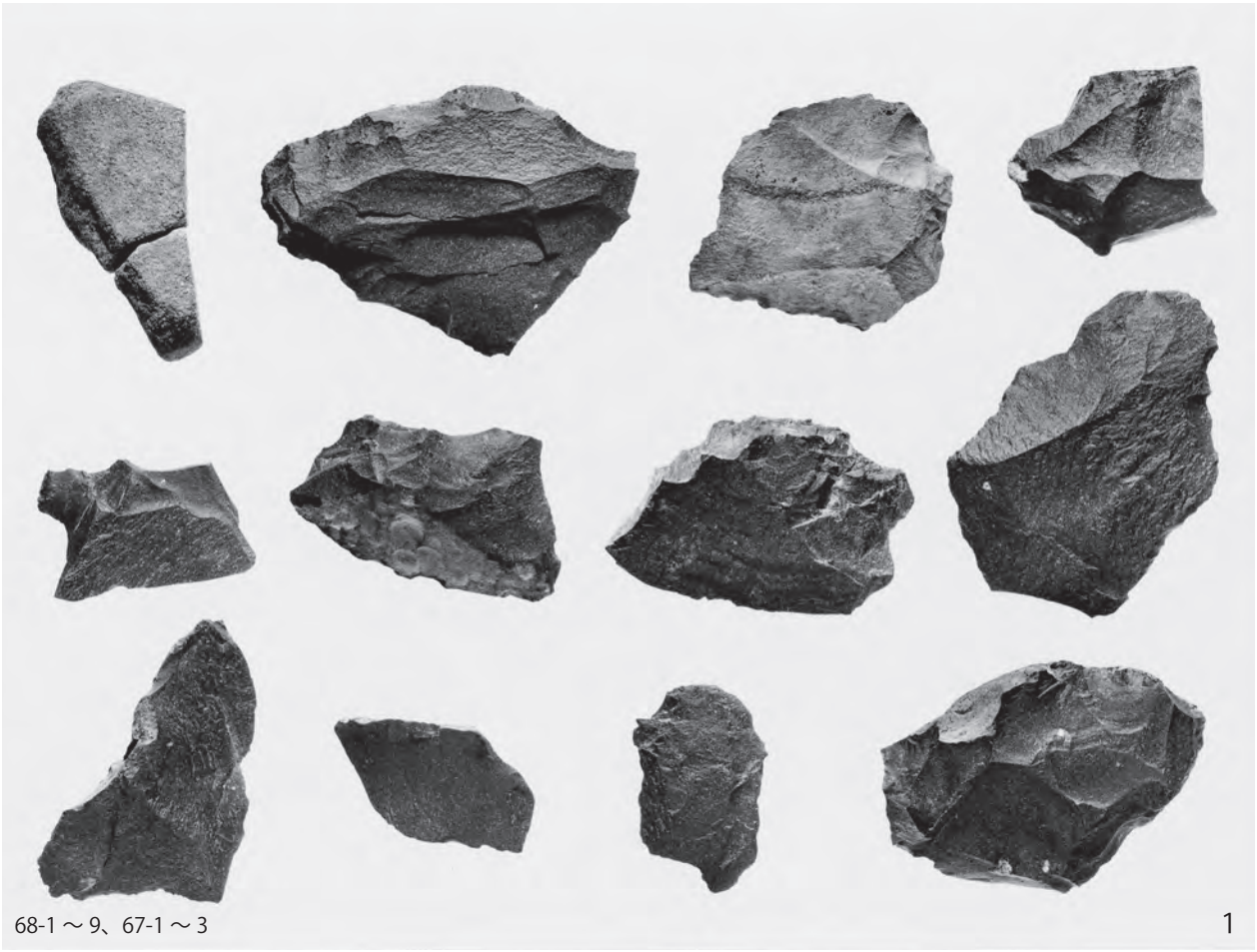
2′

67-1 3

67-3 5

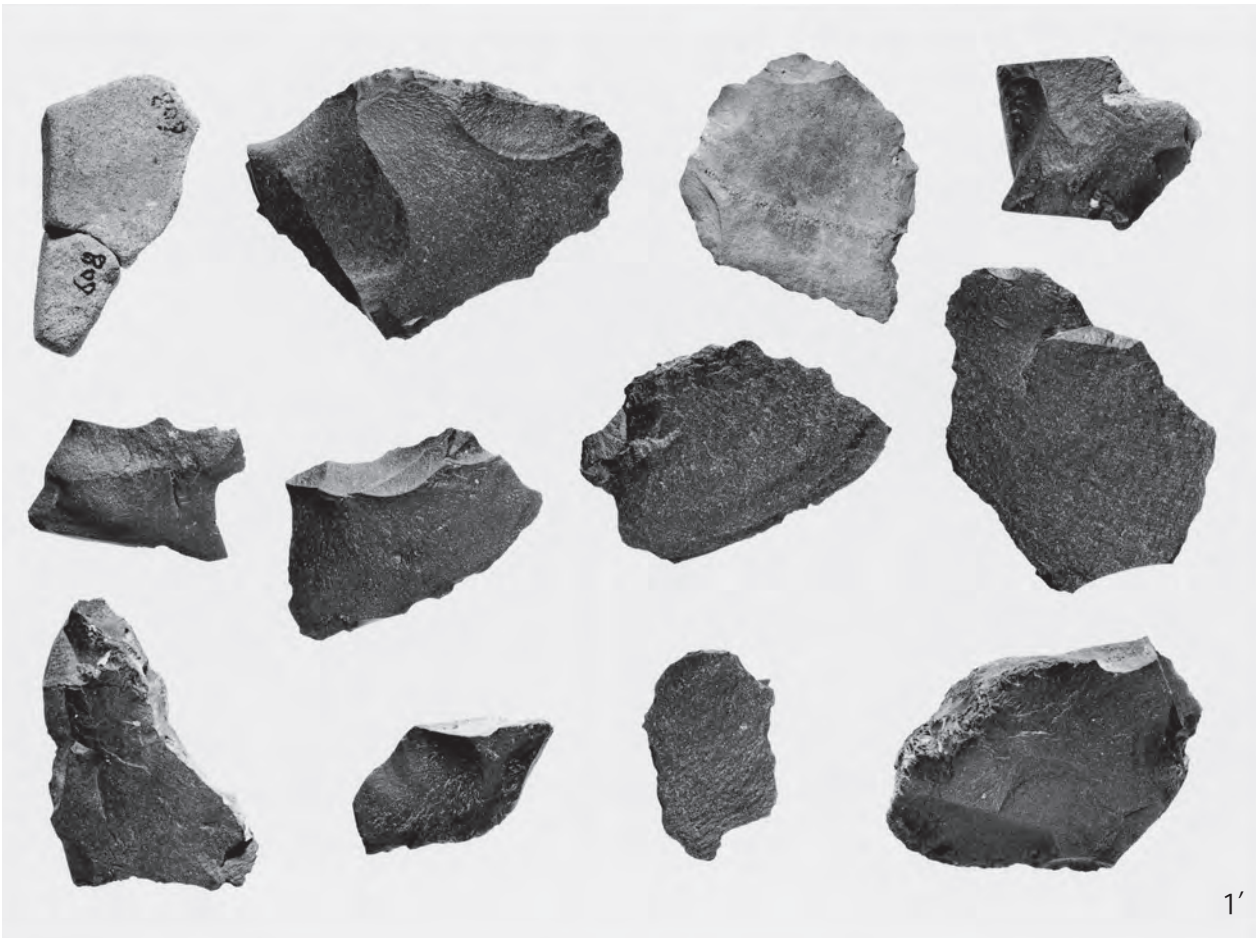
67-2 4

67-4 6



68-1 ～ 9、67-1 ～ 3

1

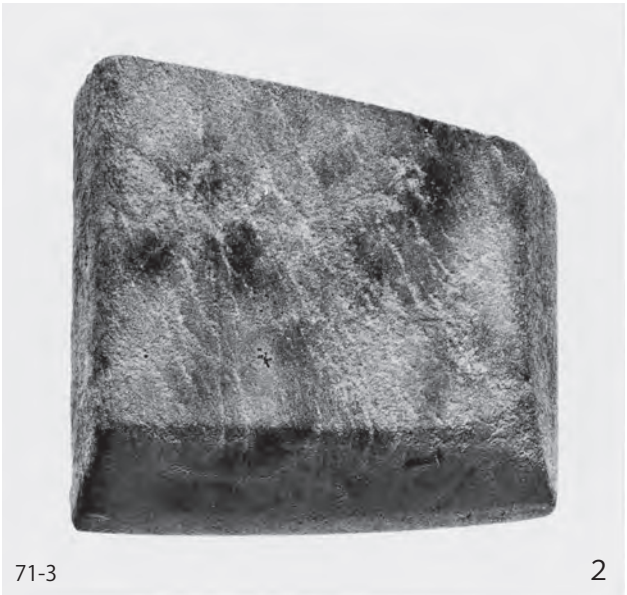


1′

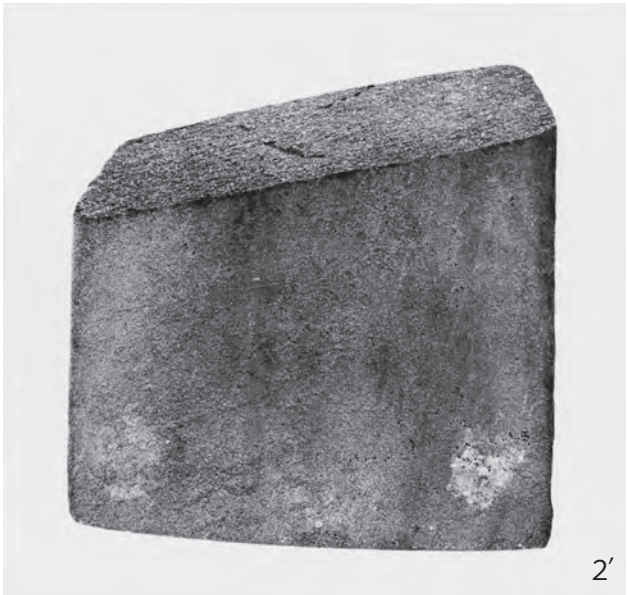
図版66

69-4　1

1′

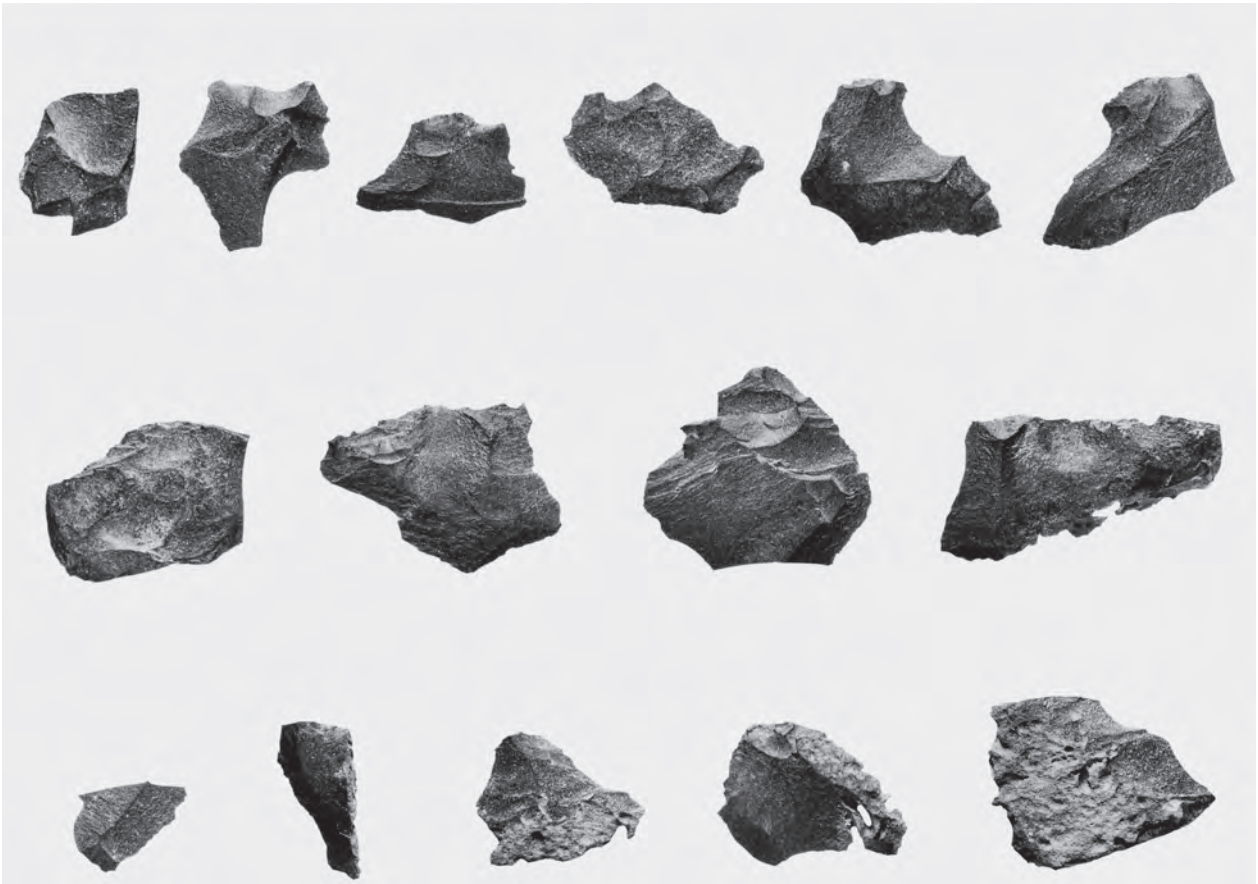


71-3　2



2′

71-1　3



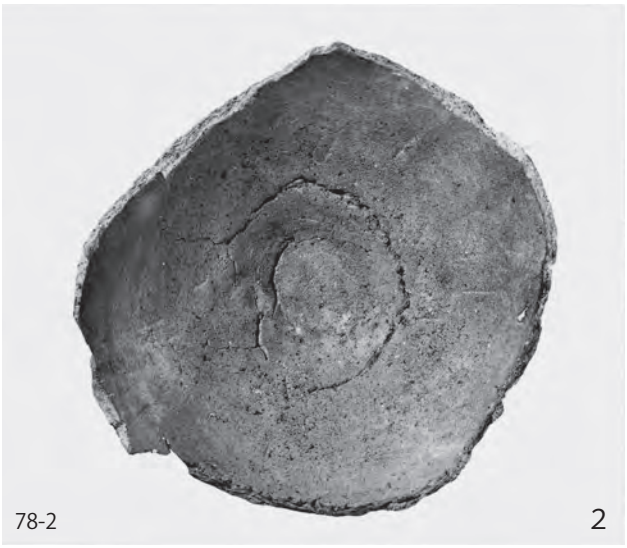
72-1 ～ 10、73-1 ～ 5

1

1′

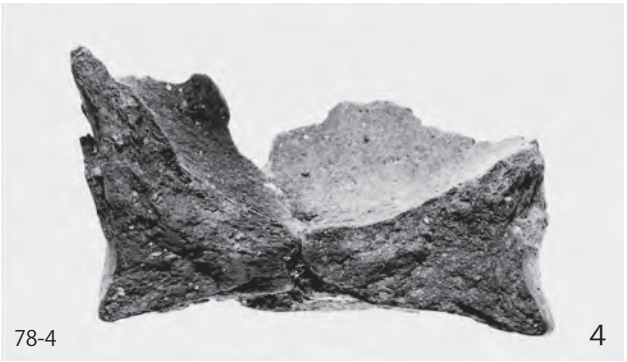
図版68

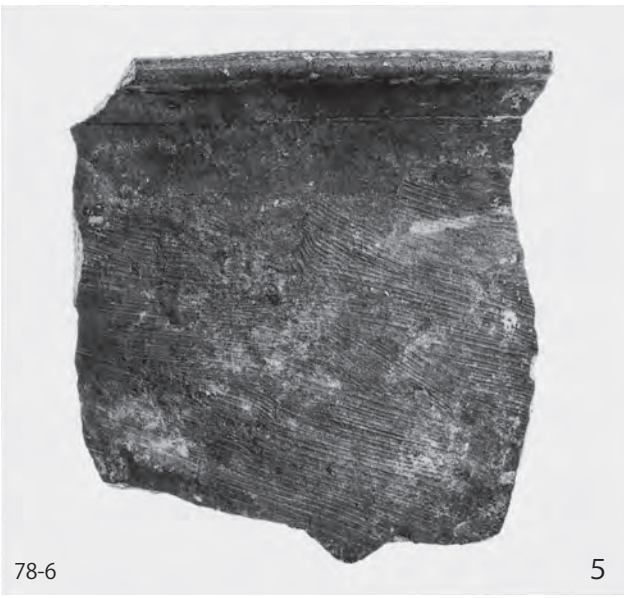
78-1 1


78-2 2

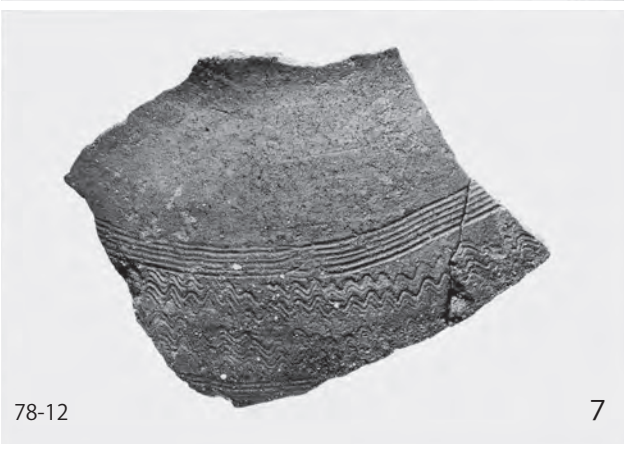
2′

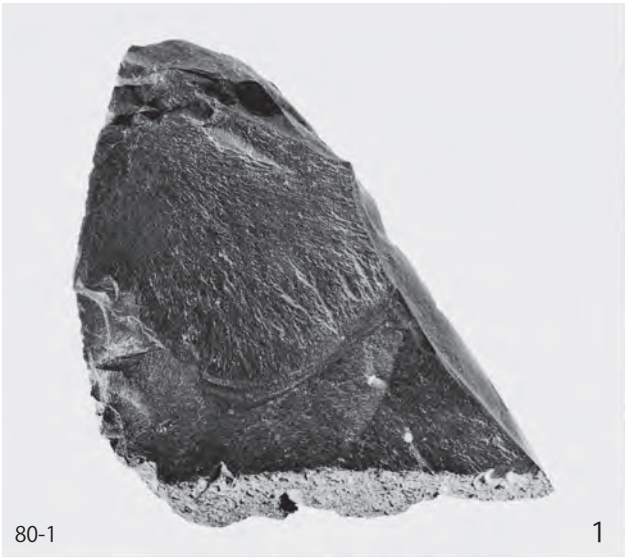
78-10 3


78-4 4


78-6 5

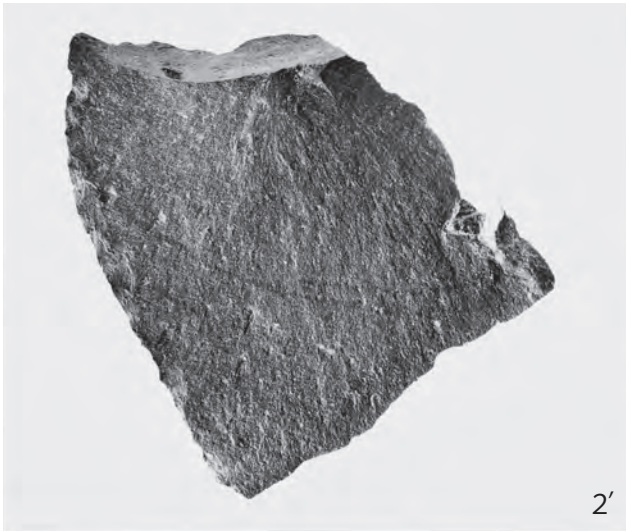
78-9 6


78-12 7


80-1 1

71-3 1′

80-2 2


2′

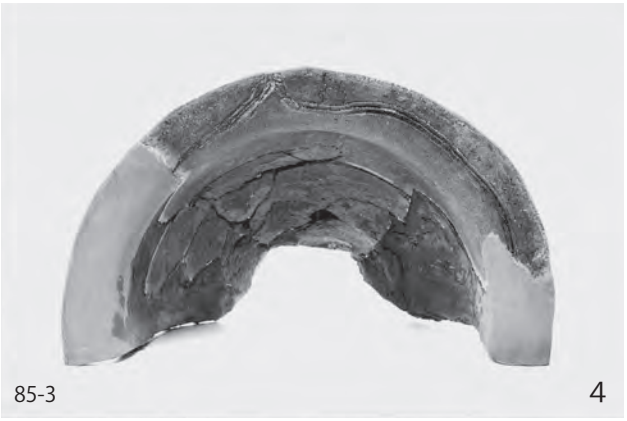
79-2 3

79-3 4

5

図版70

85-1 1



85-3 4

4′

85-2 2

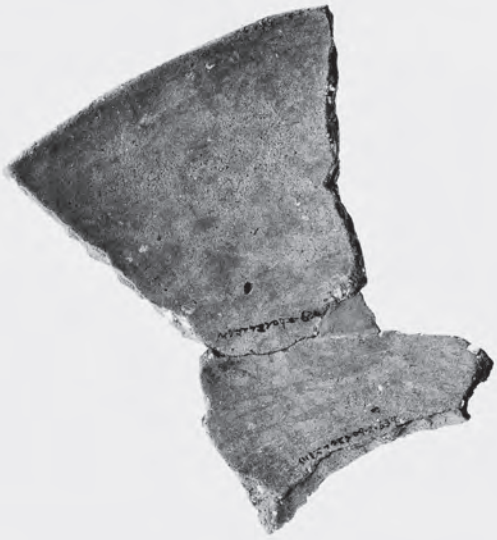
85-6 5

86-1 3

5′

85-4 1

86-6 4



85-7 2

86-7 5

86-2 3

86-4 6

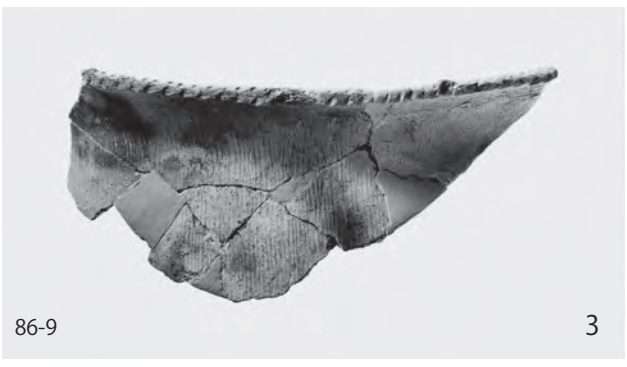
図版72

86-8 1

87-2 4

87-1 2

87-3 5

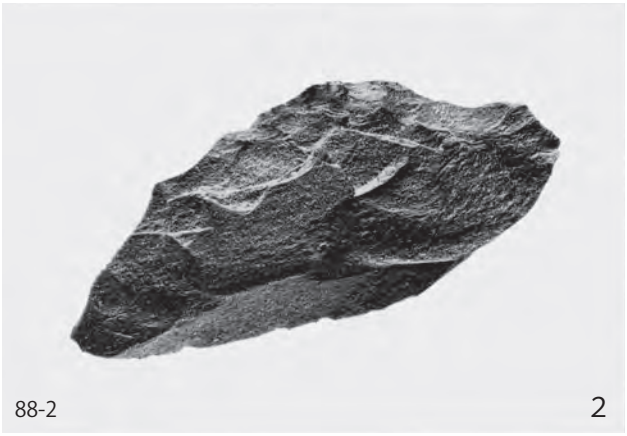


86-9 3

87-4 6

88-1　1

1′



88-2　2

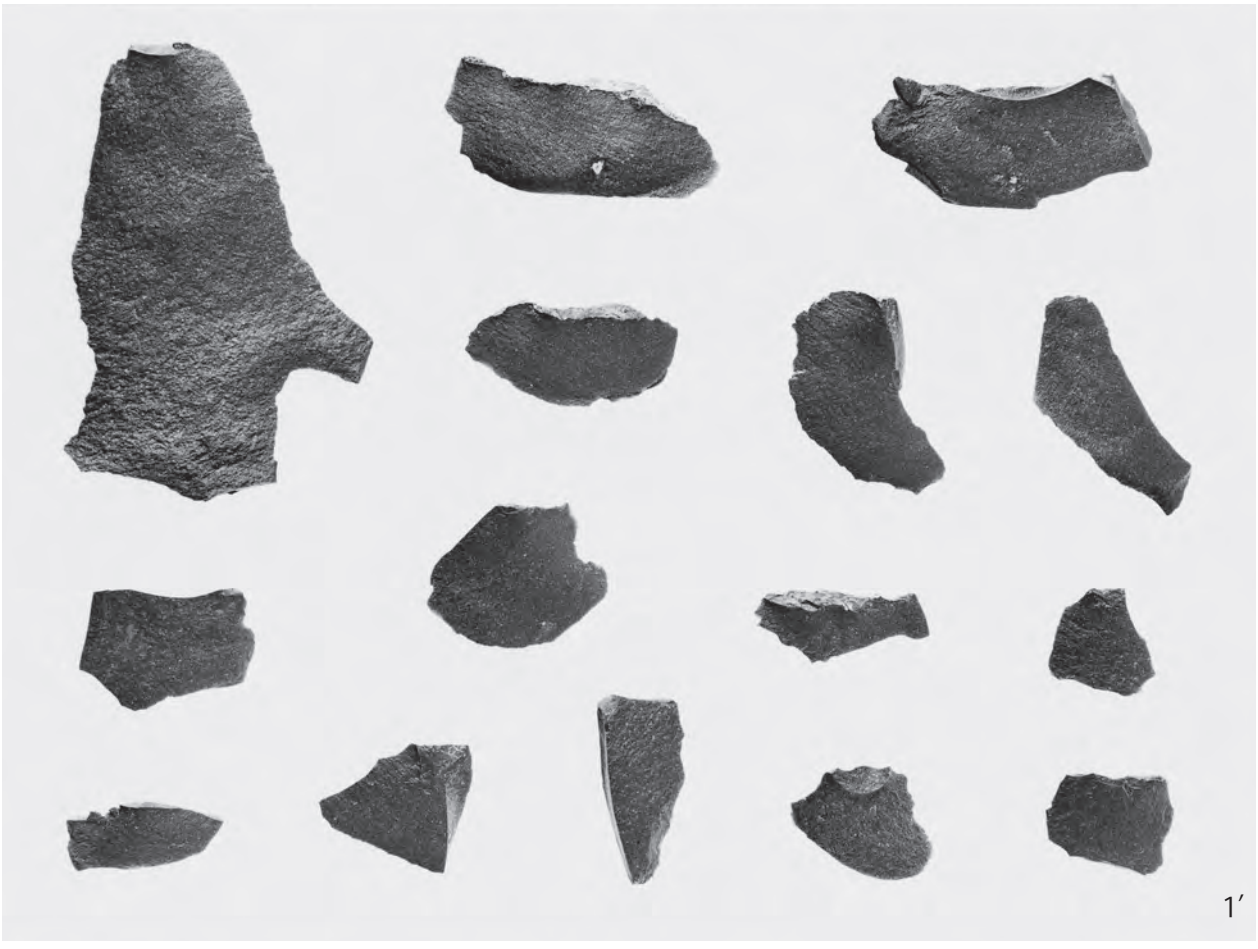
2′

88-5　3

3′

図版74

88-3･4･7～11、88-1～8　1



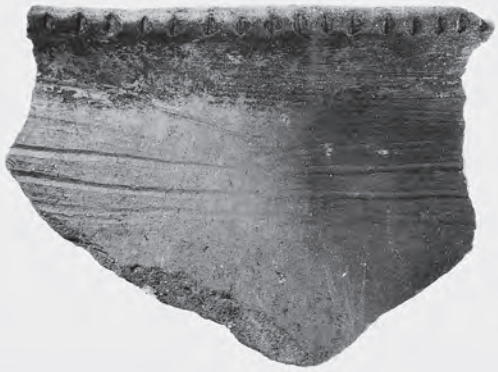
1′

90-1 1

90-2 2

90-8 3

90-3 4



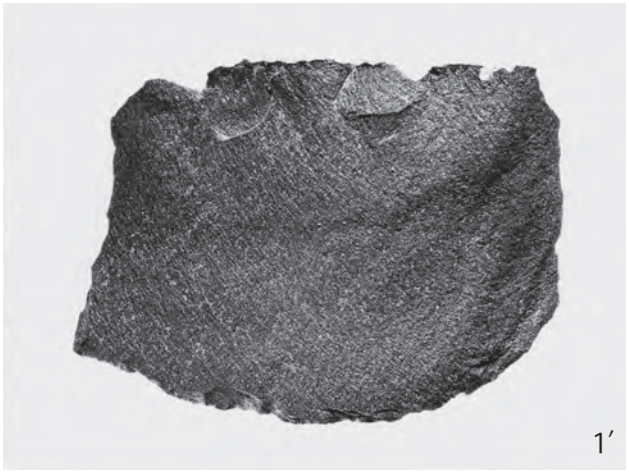
90-7 5

96-5 6

96-6 7

図版76

92-4 1

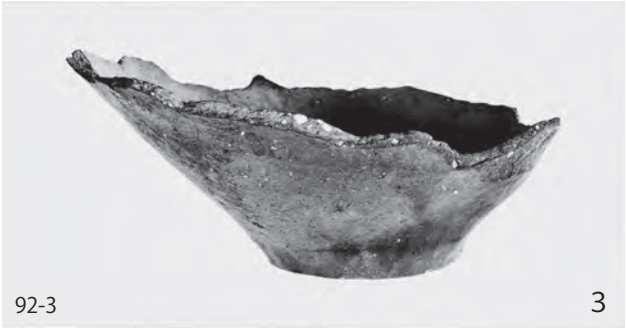


1′

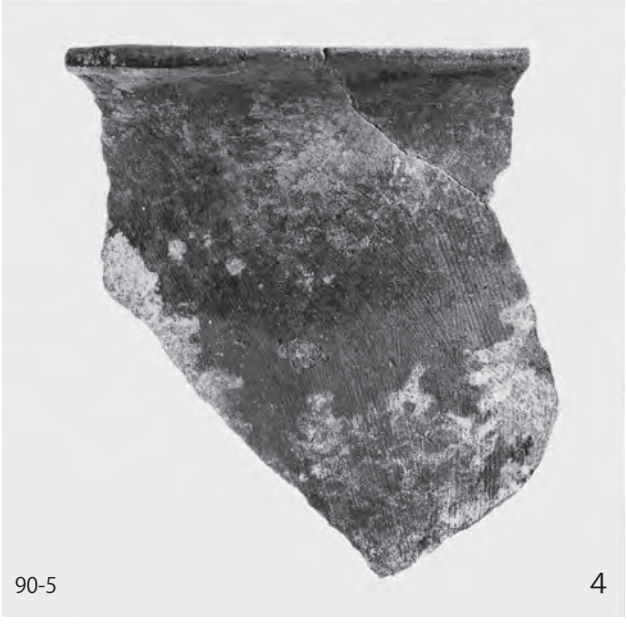
92-2 2

93 5

5′



92-3 3



90-5 4

90-4 6

96-1　1

96-3　2

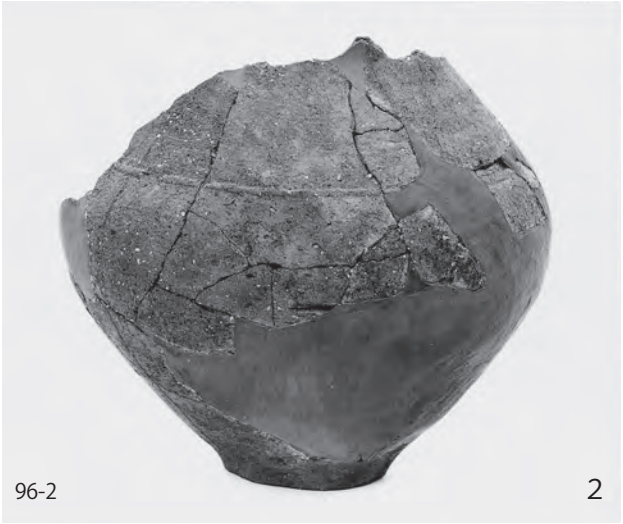
102-3　4

96-4　3

4′

図版78

102-1 1



96-2 2

102-2 3

報　告　書　抄　録

ふりがな	いけしま・ふくまんじいせき 15
書名	池島・福万寺遺跡 15
副書名	一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書（池島Ⅱ期地区 09-2 調査区）
巻次	
シリーズ名	公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 230 集
編著者名	三宮　昌弘
編集機関	公益財団法人　大阪府文化財センター
所在地	〒 590-0105　大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号　　℡ 072（299）8791
発行年月日	2012 年 9 月 21 日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
池島・福万寺遺跡	大阪府 東大阪市 池島町地内	27227	93	34° 38′ 52″	135° 37′ 43″	平成 21 年 8 月 24 日～平成 23 年 5 月 31 日	4220 ㎡	一級河川恩智川治水緑地建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
池島・福万寺遺跡	田畠	古代～近世	坪境畦畔・水田・島畠・井戸・土坑・溝・土器埋納遺構	陶磁器・瓦質土器・土師器・須恵器・瓦・銭貨・鉄製品・木製品・漆器・石製品	条里型水田の変遷 池島地区最古段階の島畠 古代の正方位溝
	水田	古墳	ピット・土坑・落込み・溝・水田	土師器・須恵器・勾玉	残りが悪い
	集落・水田	弥生	住居址・建物・土坑・水田・水口・溝・ピット	弥生土器・突帯文土器・石製品・石器・木製品	弥生時代中期の居住域・水田の変遷
		縄文		突帯文土器・石製品	

要　約

今回の調査では、条里型水田の変遷を追うことができた。また、近世には島畠が拡張していく様子をみることができた。

弥生時代では前期から中期にかけての水田遺構面を 5 面検出した。また、弥生時代中期の集落の一画と見られる居住域を検出した。弥生時代の竪穴式住居の検出は、当遺跡で初の成果である。居住域と関連した土器・石器も、当遺跡の調査では多い量、出土し、集落における土器組成がうかがい知る事ができる。

（公財）大阪府文化財センター調査報告書　第230集

池島・福万寺遺跡15

（池島Ⅱ期地区09－２調査区）
一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書

発行年月日：2012年９月21日
編集・発行：公益財団法人　大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号
印刷・製本：株式会社　明新社
奈良市南京終町3丁目464番地